

茨城県教育財団文化財調査報告第94集

土浦北工業団地造成地内 埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

原出口遺跡

平成7年3月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第94集

土浦北工業団地造成地内 埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

はらでぐち
原出口遺跡

平成7年3月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

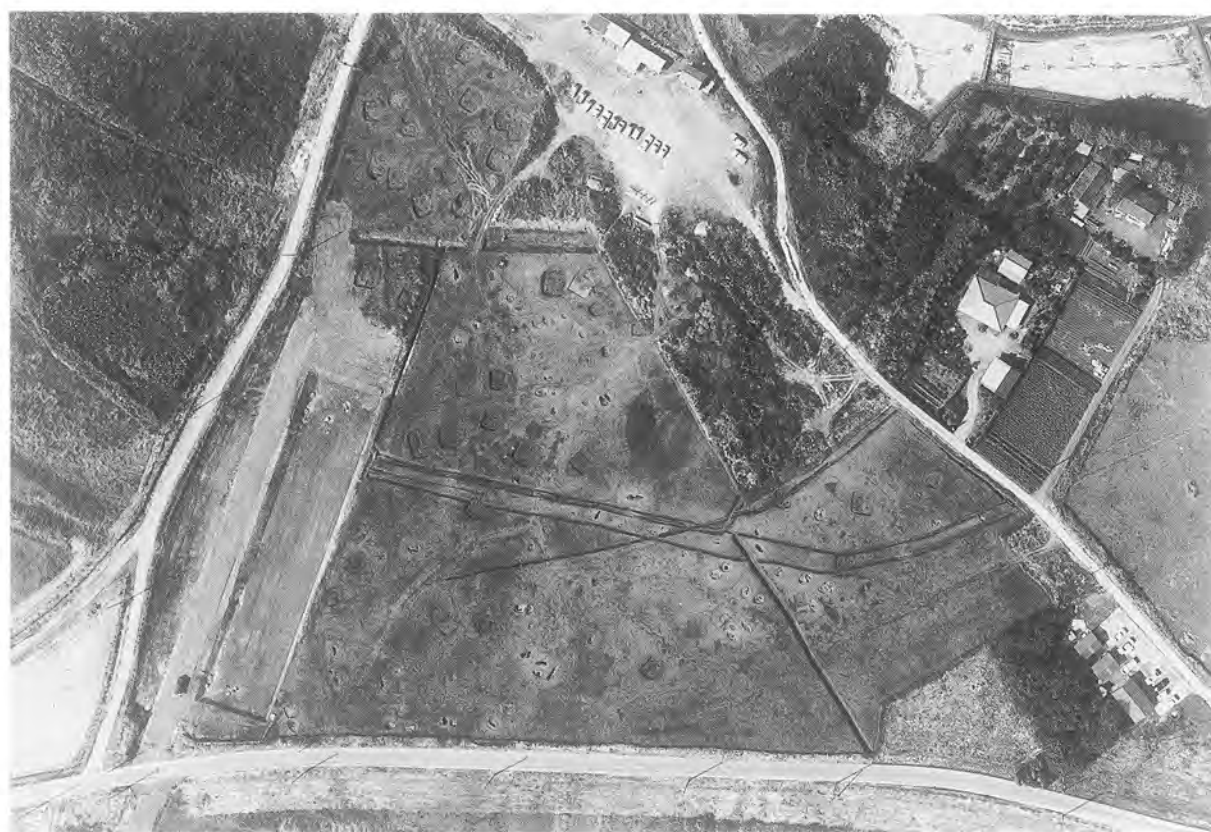


原出口遺跡遠景（南から北方向望む）

原出口遺跡



原出口遺跡・A地区全景（東から西方向を望む）



原出口遺跡B地区全景（南から北方向を望む）

序

茨城県は、筑波研究学園都市における、世界の科学技術都市として集積された発展エネルギーを、広域つくば圏に拡大して、地域の振興を図ることを目的とする「グレーターつくば構想」を進めております。

その一環として、住宅・都市整備公団は、土浦市北部の今泉地区に「テクノパーク土浦北」の建設を進めており、その予定地内に、埋蔵文化財包蔵地である原出口遺跡ほか3遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団から開発地域内の埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成2年4月から発掘調査を実施してまいりました。その成果の一部は、既に「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ・Ⅱ」として刊行しました。

本書は、平成3・4年度に調査を行った原出口遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史への理解を深め、ひいては教育、文化向上の一助として活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理にあたり、委託者である住宅・都市整備公団はもとより茨城県教育委員会、土浦市教育委員会をはじめ、関係機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成7年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 礒田 勇

例 言

- 1 本書は、平成3年度から平成4年度にかけて住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が実施した、茨城県土浦市大字今泉字原田1928-1ほかに所在する原出口遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 原出口遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯 田 勇	昭和63年6月～	
副 理 事 長	小 林 元 角 田 芳 夫 小 林 秀 文	昭和63年4月～平成3年7月 平成3年7月～平成6年3月 平成6年4月～	
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～	
常 務 理 事	本 田 三 郎	平成3年4月～平成5年3月	
事 務 局 長	一 木 邦 彦 藤 枝 宣 一	平成元年4月～平成4年3月 平成4年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	石 井 毅 安 藏 幸 重	平成2年4月～平成5年3月 平成5年4月～	
部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	北 沢 勝 行 水 飼 敏 夫	平成2年4月～平成4年3月 平成4年4月～
	係 長	根 本 達 夫	平成6年4月～
	主 任 調 査 員	根 本 康 弘	平成3年4月～平成5年3月
	主 任 調 査 員	川 井 正 一	平成5年4月～平成6年3月
	主 任 調 査 員	海 老 澤 稔	平成6年4月～
	主 事	吉 井 正 明	平成元年4月～平成4年3月
	主 事	杉 山 秀 一	平成4年4月～
経 理 課	課 長	藤 田 和 行 小 幡 弘 明	平成4年4月～平成5年3月 平成5年4月～
	課 長 代 理	鈴 木 三 郎	平成5年4月～
	係 長	大 高 春 夫	平成6年4月～
	主 任	飯 島 康 司	平成4年4月～平成6年3月
	主 事	大 貫 吉 成	平成4年4月～平成5年3月
	主 事	軍 司 浩 作	平成5年4月～
調 査 課	課 長	石 井 毅	平成元年4月～平成5年3月
	(部 長 兼 務)	安 藏 幸 重	平成5年4月～
	調 査 第 三 班 長	柴 正	平成3年度
	主 任 調 査 員	小 泉 光 正	平成4年度 (平成3年度調査)
	主 任 調 査 員	緑 川 正 實	平成3年10月～平成4年3月調査
	主 任 調 査 員	海 老 澤 稔	平成3年度調査
	主 任 調 査 員	上 野 修 生	平成3年度～4年度調査
主 任 調 査 員	中 村 敬 治	平成4年7月～平成5年3月調査	
主 任 調 査 員	江 幡 良 夫	平成4年度調査	

整理課	課長	沼田文夫	平成2年4月～平成5年3月
	主任調査員	阿久津久	平成5年4月～
		江幡良夫	平成6年4月～整理・執筆・編集

- 本書に使用した記号等については、第3章第1節の調査方法と遺構・遺物の記載方法の項を参照されたい。
- 本書の作成にあたり、南関東系の弥生式土器については、千葉県埋蔵文化財センターの小高春雄氏に、旧石器時代の遺物については千葉県立中央博物館の橋本勝雄氏に御指導をいただいた。
- 発掘調査及び整理に際して御指導・御協力を賜った関係機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

6 遺跡の概略

ふりがな	つちうらきたこうぎょうだんちぞうせいちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	原出口遺跡						
巻次	III						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第94集						
著者	江幡 良夫						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
発行機関	財団法人 茨城県教育財団						
住所	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 0292-25-6587						
発行年月日	1995（平成7）年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
はらでぐちいせき 原出口遺跡	いばらきけんつちうらし 茨城県土浦市 おおあざいまいずみあざはら 大字今泉字原 だ 田19281-1ほか	08206 -C73	36° 08' 01"	140° 12' 00"	平成3年度 19910401～ 19920331 平成4年度 19920401～ 19930331	8,800㎡ 15,800㎡	土浦北工業団地 造成事業に伴う 事前調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
原出口遺跡	集落跡 墓跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 (後期) 古墳時代 不明	石器集中地点1ヶ所 竪穴住居跡57軒 土器棺墓3基 方形周溝墓8基 前方後円墳1基 土坑99基, 溝8条	ナイフ形石器, 尖頭器 縄文式土器片 弥生式土器, 紡錘車, 石鏃, 穂摘具, 磨製石斧 土師器, 円筒埴輪, 形 象埴輪片	標高26～27mである 平坦な台地上に位置 し, 隣接する原田北・ 原田西・西原遺跡とと もに弥生時代後期の 大集落跡を形成する。		

目 次

口 絵

序

例 言

目次（図版・写真・表目次を含む）

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 遺 跡	8
第1節 調査方法と遺構・遺物の記載方法	8
1 地区設定	
2 基本層序の検討	
3 遺構・遺物の記載方法	
第2節 遺跡の概要	10
第3節 遺構と遺物	12
1 竪穴住居跡	12
2 土器棺墓	154
3 方形周溝墓	157
4 古 墳	170
5 土 坑	177
6 溝	190
7 遺構外出土遺物	203
第4節 ま と め	223

写真図版

挿 図 目 次

第 1 図 原出口遺跡周辺遺跡分布図 …………… 5	第 27 図 第12号住居跡実測図 …………… 38
第 2 図 調査区呼称方法概念図 …………… 8	第 28 図 第12号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 39
第 3 図 原出口遺跡調査区大設定図 …………… 8	第 29 図 第13号住居跡実測図 …………… 40
第 4 図 基本土層図 …………… 9	第 30 図 第13号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 41
第 5 図 原出口遺跡調査区 …………… 11	第 31 図 第14号住居跡実測図 …………… 43
第 6 図 第 1 号住居跡実測図…………… 13	第 32 図 第14号住居跡出土遺物 実測・拓影図(1) …………… 44
第 7 図 第 1 号住居跡出土遺物実測図 …………… 13	第 33 図 第14号住居跡出土遺物実測図(2) …… 46
第 8 図 第 2 号住居跡実測図 …………… 15	第 34 図 第15号住居跡実測図 …………… 47
第 9 図 第 2 号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 15	第 35 図 第15号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 47
第 10 図 第 3 号住居跡実測図 …………… 16	第 36 図 第16号住居跡実測図 …………… 48
第 11 図 第 3 号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 17	第 37 図 第16号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 49
第 12 図 第 4 号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 18	第 38 図 第17号住居跡実測図 …………… 51
第 13 図 第 5 号住居跡実測図 …………… 19	第 39 図 第17号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 52
第 14 図 第 5 号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 20	第 40 図 第18号住居跡実測図 …………… 54
第 15 図 第 6 号住居跡実測図 …………… 21	第 41 図 第18号住居跡出土遺物実測図(1) …… 55
第 16 図 第 6 号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 22	第 42 図 第18号住居跡出土遺物 実測・拓影図(2) …………… 56
第 17 図 第 7 号住居跡実測図 …………… 24	第 43 図 第19号住居跡実測図 …………… 58
第 18 図 第 7 号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 25	第 44 図 第19号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 60
第 19 図 第 8 号住居跡実測図 …………… 28	第 45 図 第20号住居跡実測図 …………… 62
第 20 図 第 8 号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 29	第 46 図 第20号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 63
第 21 図 第 9 号住居跡実測図 …………… 30	第 47 図 第21号住居跡実測図 …………… 65
第 22 図 第 9 号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 31	第 48 図 第21号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 66
第 23 図 第10号住居跡実測図 …………… 33	第 49 図 第22号住居跡実測図 …………… 67
第 24 図 第10号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 34	第 50 図 第22号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 68
第 25 図 第11号住居跡実測図 …………… 35	第 51 図 第23号住居跡実測図 …………… 70
第 26 図 第11号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 36	

第 52 图	第23号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 71	第 77 图	第36号住居跡実測図 ……………104
第 53 图	第24号住居跡実測図 …………… 72	第 78 图	第37号住居跡実測図 ……………105
第 54 图	第24号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 73	第 79 图	第37号住居跡出土遺物拓影図 ……………105
第 55 图	第25号住居跡実測図 …………… 74	第 80 图	第38号住居跡実測図 ……………106
第 56 图	第25号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 75	第 81 图	第40号住居跡実測図 ……………107
第 57 图	第26号住居跡実測図 …………… 77	第 82 图	第40号住居跡出土遺物 実測・拓影図 ……………108
第 58 图	第26号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 78	第 83 图	第41号住居跡実測図 ……………109
第 59 图	第27・28号住居跡実測図 …………… 80	第 84 图	第41号住居跡出土遺物 実測・拓影図 ……………110
第 60 图	第27号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 81	第 85 图	第42号住居跡実測図 ……………112
第 61 图	第28号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 83	第 86 图	第42号住居跡出土遺物 実測・拓影図 ……………113
第 62 图	第29号住居跡実測図 …………… 85	第 87 图	第43号住居跡実測図 ……………114
第 63 图	第29号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 86	第 88 图	第43号住居跡出土遺物 実測・拓影図 ……………115
第 64 图	第30号住居跡実測図 …………… 87	第 89 图	第44号住居跡実測図 ……………116
第 65 图	第30号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 88	第 90 图	第44号住居跡出土遺物 実測・拓影図 ……………117
第 66 图	第31号住居跡実測図 …………… 90	第 91 图	第45号住居跡実測図 ……………119
第 67 图	第31号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 90	第 92 图	第45号住居跡出土遺物 実測・拓影図(1) ……………120
第 68 图	第32号住居跡実測図 …………… 91	第 93 图	第45号住居跡出土遺物実測図(2) ……122
第 69 图	第32号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 92	第 94 图	第46号住居跡実測図 ……………123
第 70 图	第33号住居跡実測図 …………… 95	第 95 图	第46号住居跡出土遺物 実測・拓影図 ……………125
第 71 图	第33号住居跡出土遺物 実測・拓影図 …………… 96	第 96 图	第47号住居跡実測図 ……………126
第 72 图	第34号住居跡実測図 …………… 97	第 97 图	第47号住居跡出土遺物 実測・拓影図 ……………128
第 73 图	第34号住居跡出土遺物 実測・拓影図(1) …………… 99	第 98 图	第48号住居跡実測図 ……………129
第 74 图	第34号住居跡出土遺物実測図(2) ……101	第 99 图	第48号住居跡出土遺物 実測・拓影図 ……………130
第 75 图	第35号住居跡実測図 ……………102	第 100 图	第49号住居跡実測図 ……………132
第 76 图	第35号住居跡出土遺物 実測・拓影図 ……………103	第 101 图	第49号住居跡出土遺物 実測・拓影図 ……………133
		第 102 图	第50号住居跡実測図 ……………134
		第 103 图	第50号住居跡出土遺物 実測・拓影図 ……………135

第104図	第53号住居跡実測図 ……………137	第134図	第1号古墳出土遺物実測図(2) ……………174
第105図	第53号住居跡出土遺物拓影図 ……………137	第135図	第1号古墳出土遺物実測図(3) ……………175
第106図	第54号住居跡実測図 ……………138	第136図	第1号古墳出土遺物実測図(4) ……………176
第107図	第54号住居跡出土遺物 実測・拓影図 ……………139	第137図	第8・13・15・18・19号土坑 実測図 ……………180
第108図	第55号住居跡実測図 ……………140	第138図	第27・28・45・47・50・64・70号 土坑実測図 ……………185
第109図	第55号住居跡出土遺物拓影図 ……………141	第139図	第57・69・72・88・92・99号 土坑実測図 ……………187
第110図	第56号住居跡実測図 ……………142	第140図	第9・10・28・71号土坑出土遺物 拓影図 ……………188
第111図	第56号住居跡出土遺物拓影図 ……………142	第141図	第1号溝出土遺物実測・拓影図 ……………192
第112図	第57号住居跡実測図 ……………143	第142図	第3号溝出土遺物実測・拓影図 ……………194
第113図	第57号住居跡出土遺物 実測・拓影図 ……………144	第143図	第4号溝出土遺物実測・拓影図 ……………195
第114図	第58号住居跡実測図 ……………145	第144図	第5号溝出土遺物実測・拓影図 ……………196
第115図	第58号住居跡出土遺物 実測・拓影図 ……………145	第145図	第6号溝出土遺物実測・拓影図 ……………197
第116図	第59号住居跡実測図 ……………146	第146図	第7号溝出土遺物実測図 ……………198
第117図	第59号住居跡出土遺物 実測・拓影図(1) ……………148	第147図	第1～8号溝実測図 ……………199
第118図	第59号住居跡実測・拓影図(2) ……………149	第148図	溝土層・エレベーション実測図 ……………200
第119図	第60号住居跡実測図 ……………150	第149図	旧石器時代調査エリア内遺物 出土地点図 ……………203
第120図	第60号住居跡出土遺物拓影図 ……………151	第150図	旧石器時代調査エリア内出土遺物 実測図(1) ……………205
第121図	原出口遺跡住居跡配置図 ……………154	第151図	旧石器時代調査エリア内出土遺物 実測図(2) ……………206
第122図	第3・4号土器棺墓実測図 ……………155	第152図	旧石器時代調査エリア内出土遺物 実測図(3) ……………207
第123図	第2号土器棺墓出土遺物 実測・拓影図 ……………156	第153図	旧石器時代調査エリア外出土遺物 実測図(1) ……………208
第124図	第3号土器棺墓出土遺物実測図 ……………157	第154図	旧石器時代調査エリア外出土遺物 実測図(2) ……………209
第125図	第4号土器棺墓出土遺物実測図 ……………157	第155図	旧石器時代調査エリア外出土遺物 実測図(3) ……………210
第126図	第1号方形周溝墓出土遺物実測図 ……………159	第156図	旧石器時代調査エリア外出土遺物 実測図(4) ……………211
第127図	第2号方形周溝墓出土遺物 実測・拓影図 ……………160	第157図	旧石器時代調査エリア外出土遺物 実測図(5) ……………212
第128図	第3号方形周溝墓出土遺物実測図 ……………162		
第129図	第4号方形周溝墓出土遺物 実測・拓影図 ……………163		
第130図	第7号方形周溝墓出土遺物 実測図 ……………167		
第131図	第1～8号方形周溝墓実測図 ……………169・170		
第132図	第1号古墳実測図 ……………172		
第133図	第1号古墳出土遺物実測図(1) ……………173		

第158図	遺構外出土遺物実測図(1) ……………	217	第161図	遺構外出土遺物実測図(4) ……………	220
第159図	遺構外出土遺物実測・拓影図(2) ……	218	第162図	遺構外出土遺物実測図(5) ……………	221
第160図	遺構外出土遺物実測・拓影図(3) ……	219	第163図	時期別遺構配置図 ……………	226

付 図

原田北遺跡群遺構配置図

表 目 次

表 1	原出口遺跡周辺遺跡一覧表 ……………	6	表 3	原出口遺跡土坑一覧表……………	188～190
表 2	原出口遺跡住居跡一覧表 ……………	152			

写真図版目次

P L 1	原出口遺跡A地区全景，原出口遺跡確認状況	第 2 号住居跡，第 3 号住居跡，第 5 号住居跡遺物出土状況，第 5 号住居跡，第 6 号住居跡	
P L 2	原出口遺跡A地区全景，原出口遺跡B地区全景		
P L 3	原出口遺跡遺構確認状況，第 1～8号方形周溝墓	P L 14	第 3 号住居跡遺物出土状況(1)，第 3 号住居跡遺物出土状況(2)
P L 4	第 5～8号方形周溝墓，第 7・8号方形周溝墓	P L 15	第 7 号住居跡，第 7 号住居跡遺物出土状況，第 8 号住居跡遺物出土状況，第 8 号住居跡，第 9 号住居跡遺物出土状況(1)，第 9 号住居跡遺物出土状況(2)，第 9 号住居跡遺物出土状況(3)，第 9 号住居跡
P L 5	第 1 号方形周溝墓，第 2・3号方形周溝墓第 4 号方形周溝墓遺物出土状況	P L 16	第10号住居跡遺物出土状況，第11号住居跡遺物出土状況，第11号住居跡，第12号住居跡遺物出土状況，第12号住居跡遺物出土状況，第12号住居跡
P L 6	第 1 号古墳，第 1 号古墳遺物出土状況	P L 17	第13号住居跡，第14号住居跡遺物出土状況，第14号住居跡，第15号住居跡，第16号住居跡遺物出土状況(1)，第16号住居跡遺物出土状況(2)，第16号住居跡，第17号住居跡(1)
P L 7	第 1 号古墳，第 1 号古墳遺物出土状況	P L 18	第17号住居跡(2)，第18号住居跡，第18号住居跡遺物出土状況(1)，第18号住居跡遺物出
P L 8	第 1 号古墳，第19号住居跡遺物出土状況，第 1 号古墳遺物出土状況		
P L 9	第 3 号溝，第 4 号溝		
P L 10	第 1～3号溝，溝交差部		
P L 11	第 6 号溝交差部，第 1・7・8号溝		
P L 12	原出口遺跡A地区全景，原出口遺跡B地区全景		
P L 13	第 1 号住居跡，第 1 号住居跡遺物出土状況，第 2 号住居跡遺物出土状況		

- 土狀況(2), 第18号住居跡遺物出土狀況(3),
第18号住居跡遺物出土狀況(4)
- P L 19 第18号住居跡遺物出土狀況(5), 第18号住居跡遺物出土狀況(6)
- P L 20 第20号住居跡, 第20号住居跡遺物出土狀況(1), 第20号住居跡遺物出土狀況(2), 第21号住居跡, 第22号住居跡遺物出土狀況, 第22号住居跡, 第23号住居跡
- P L 21 第24号住居跡遺物出土狀況, 第24号住居跡, 第25号住居跡遺物出土狀況, 第26号住居跡遺物出土狀況, 第26号住居跡, 第27号住居跡遺物出土狀況(1), 第27号住居跡遺物出土狀況(2), 第29号住居跡遺物出土狀況
- P L 22 第27・28号住居跡, 第29号住居跡, 第30号住居跡遺物出土狀況, 第30号住居跡, 第31号住居跡
- P L 23 第34号住居跡遺物出土狀況(1), 第34号住居跡遺物出土狀況(2), 第34号住居跡, 第35号住居跡遺物出土狀況(1), 第35号住居跡遺物出土狀況(2), 第35号住居跡遺物出土狀況(3), 第35号住居跡, 第36号住居跡
- P L 24 第37号住居跡, 第38号住居跡, 第40号住居跡遺物出土狀況(1), 第40号住居跡遺物出土狀況(2), 第40号住居跡, 第40号住居跡炉, 第41号住居跡遺物出土狀況(1), 第41号住居跡遺物出土狀況(2)
- P L 25 第41号住居跡遺物出土狀況(3), 第41号住居跡炉, 第41号住居跡, 第42号住居跡遺物出土狀況, 第42号住居跡, 第43号住居跡出土遺物狀況, 第43号住居跡
- P L 26 第44号住居跡遺物出土狀況, 第44号住居跡, 第45号住居跡遺物出土狀況(1), 第45号住居跡出土遺物狀況(2), 第45号住居跡, 第46号住居跡遺物出土狀況(1), 第46号住居跡遺物出土狀況(2), 第46号住居跡
- P L 27 第47号住居跡, 第48号住居跡遺物出土狀況(1), 第48号住居跡出土遺物狀況(2), 第48号住居跡出土遺物狀況(3), 第48号住居跡
- P L 28 第49号住居跡, 第50号住居跡遺物出土狀況(1), 第50号住居跡出土遺物狀況(2), 第50号住居跡, 第53号住居跡, 第54号住居跡出土遺物狀況(1), 第54号住居跡出土遺物狀況(2), 第55号住居跡出土遺物狀況
- P L 29 第55号住居跡, 第56号住居跡, 第57号住居跡, 第58号住居跡, 第59号住居跡出土遺物狀況(1), 第59号住居跡出土遺物狀況(2), 第59号住居跡, 第60号住居跡
- P L 30 第3号土器棺墓, 第4号土器棺墓
- P L 31 第1号土坑, 第8号土坑, 第18号土坑, 第19号土坑, 第28号土坑, 第38号土坑, 第45号土坑, 第47号土坑
- P L 32 第50号土坑, 第53号土坑, 第57号土坑, 第64号土坑, 第69号土坑, 第72号土坑, 第82号土坑, 第87号土坑
- P L 33 第88号土坑, 第92号土坑, 第94号土坑, 第99号土坑, 第2号土器棺墓
- P L 34 第1・3・4・5・6・7号住居跡出土遺物
- P L 35 第8・9・10・11号住居跡出土遺物
- P L 36 第12・14・16号住居跡出土遺物
- P L 37 第17・18号住居跡出土遺物
- P L 38 第18・19号住居跡出土遺物
- P L 39 第20・22・23・24・25・26号住居跡出土遺物
- P L 40 第27・29・30・32号住居跡出土遺物
- P L 41 第31・32・33・34号住居跡出土遺物
- P L 42 第35・41・43・44号住居跡出土遺物
- P L 43 第45号住居跡出土遺物
- P L 44 第46・47・48・49・50号住居跡出土遺物
- P L 45 第54・59号住居跡, 第2・3号土器棺墓出土遺物
- P L 46 第1・2号方形周溝墓出土遺物
- P L 47 第3・4号方形周溝墓, 遺構外出土遺物
- P L 48 第1号古墳出土遺物
- P L 49 遺構外出土遺物
- P L 50 第5・7・22号住居跡出土土器片

- | | | | |
|--------|-----------------------------|--------|----------------------|
| P L 51 | 第44・45・59号住居跡出土土器片 | P L 57 | 旧石器時代出土遺物(2) |
| P L 52 | 第46号住居跡，遺構外出土土器片，
土器片(1) | P L 58 | 旧石器時代出土遺物(3) |
| P L 53 | 土器片(1) | P L 59 | 旧石器時代出土遺物(4) |
| P L 54 | 土器片(2) | P L 60 | 旧石器時代出土遺物(5)，出土石器(1) |
| P L 55 | 出土土製品(1) | P L 61 | 出土石器(2) |
| P L 56 | 出土土製品(2) | P L 62 | 出土石器(3) |
| | 出土土製品(3)，旧石器時代出土遺物(1) | P L 63 | 出土石器(4)，出土アブライト礫 |



伐開作業風景



住居跡掘り込み作業



第6号溝掘り込み作業

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

茨城県は、筑波研究学園都市における、世界の科学技術都市として集積された発展エネルギーを、広域つくば圏に拡大して地域の振興を図ることを目的とする「グレーターつくば構想」を進めている。

昭和63年4月、土浦市は茨城県と協議し、「土浦北部地区工業開発」を進めていくことを決定した。工事に先立ち、昭和63年5月、土浦市から土浦市教育委員会に「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて」照会があり、昭和63年6月、土浦市教育委員会は開発区内の表面観察と確認調査（試掘調査）を進めた結果、埋蔵文化財の存在を確認し、平成元年5月、土浦市（土浦市企画部特定開発課）へ確認結果を回答した。

平成元年9月、茨城県教育委員会は土浦市教育委員会から「土浦北部地区工業開発」の開発主体が、平成元年6月26日付で、土浦市（土浦市企画部特定開発課）から住宅・都市整備公団に変更になった旨連絡を受けた。以後、埋蔵文化財の取り扱いについては、茨城県教育委員会と住宅・都市整備公団との間で協議を進めることとなった。平成2年1月、住宅・都市整備公団つくば開発局と茨城県教育委員会は、開発区域内の埋蔵文化財の取り扱いについて、文化財保護の立場から協議を重ねた。その結果、一部を現状保存し、原出口遺跡ほか3遺跡については記録保存の措置をとることとなった。

平成2年1月、茨城県教育委員会は住宅・都市整備公団に、埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。同年2月、住宅・都市整備公団から茨城県教育財団に、原出口遺跡ほか3遺跡の発掘調査の依頼があり、茨城県教育財団は住宅・都市整備公団と発掘調査について協議を行った。その後茨城県教育財団と住宅・都市整備公団は、原出口遺跡ほか3遺跡の埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結び平成2年4月から原出口遺跡ほか3遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

原出口遺跡は、A・B地区に分けて、平成3年4月から平成5年3月にかけて調査を行い、A地区は平成3年度に、B地区は平成4年度に調査した。また、平成3年度は原田北遺跡を、平成4年度は原田北遺跡と西原遺跡を同期間中に併せて調査している。原田北・西原遺跡の成果は平成5年に「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 原田北遺跡Ⅰ・原田西遺跡」、平成6年に「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 原田北遺跡Ⅱ・西原遺跡」として刊行している。

以下、原出口遺跡について平成3・4年度に調査を実施した調査経過の概要を記述する。

（平成3年度）原出口遺跡A地区

4月 9日に事務所を再開し、原出口・原田北遺跡の発掘調査を実施するための諸準備を行った。10日から原田北遺跡・原出口遺跡A地区と土捨場の伐開作業を開始し、併せて試掘用グリッドの設定を行った。

5月 15日から原出口遺跡の試掘に入り、住居跡や溝等の遺構が確認され、弥生式土器片が出土した。表土の厚さは30～50cmであった。

6月 試掘作業を引き続き行い、第1号古墳周辺のグリッドから多量の円筒埴輪片が出土したため、さらにグリッドの拡張を行った。

- 7月 8日から表土除去を開始し、併せて遺構確認作業を進めた。表土除去が12日に、遺構確認作業が26日に終了し、住居跡、前方後円墳、方形周溝墓、溝、土坑が確認された。
- 8月 第1号～4号方形周溝墓の掘り込みを開始した。周溝部から土師器片が出土し、第4号方形周溝墓では底部穿孔の土師器壺が出土した。
- 9月 方形周溝墓から更に住居跡へと調査を進め、住居跡から上稲吉式や長岡式の弥生式土器片が出土した。雨天の日が多く、方形周溝墓の周溝に雨水が溜まり作業は難行した。
- 10月 雨のため調査はやや遅れ気味であったが、方形周溝墓の調査はほぼ終了し、住居跡・土坑を中心に行った。
- 11月 住居跡の調査をほぼ終了し、溝の掘り込みを開始した。さらに、旧石器時代の石器集中地点の調査を行い、ナイフ形石器・石核・剥片等が出土した。
- 12月 第1号古墳の周溝を9区に分けて調査を開始し、5区から完形の円筒埴輪が2個体、1区からは、埴輪片が多量に出土した。20日に航空写真撮影を行い、その後補足調査をした。
- 1月 上旬まで補足調査を行った後、中旬からは原出口遺跡の調査を終了し、原田北遺跡の調査へと移行した。
- 2月 27日に住宅・都市整備公団つくば開発局、土浦市教育委員会等への発掘調査報告会を実施した。
- 3月 7日には現地説明会を実施し、300名近い見学者があった。その後、補足調査と諸図面の点検を行い、それと並行して遺跡内の危険箇所の安全対策をし、26日をもって現地調査を終了した。

(平成4年度) 原出口遺跡B地区

- 4月 8日に事務所を再開し、原田北・西原・原出口遺跡の発掘調査を実施するための諸準備を行った。9日から伐開作業を開始し、原出口遺跡は16日から試掘調査に入った。
- 5月 前月に引き続き試掘調査を行い、弥生式土器片・石器等が出土し、住居跡や溝と考えられる遺構が確認できた。28日から重機による表土除去を開始した。
- 6月 表土除去作業、遺構確認作業を継続し、11日に重機による表土除去作業を終了した。その後、遺構確認作業を続け、住居跡24軒、溝7条、土坑等を確認した。
- 7月 確認状況の写真撮影、遺構配置図作成を行い、その後住居跡の掘り込みに入った。上稲吉式土器・十王台式土器などの弥生式土器や紡錘車が多数出土した。
- 8月 中旬で住居跡の掘り込みがほぼ終わり、さらに溝の調査に入った。暑さが厳しく作業は難行したが下旬には住居跡の調査を終了できた。
- 9月 事務所・倉庫を現場近くに移設し、1日から新事務所にて業務を行った。残暑が厳しく気温は30°Cを越える日が続いたため作業がやや遅れ気味であったが、中旬までにすべての溝の掘り込み作業を終了することができた。さらに下旬からは、溝と並行して土坑の掘り込みを開始した。
- 10月 16日に航空写真撮影をし、その後は補足調査を行った。下旬には原出口遺跡の現地調査を終了し、原田北遺跡の調査に入った。
- 2月 23日に、住宅・都市整備公団つくば開発局、土浦市教育委員会等への発掘調査報告会を行った。27日に、現地説明会を実施し、250名ほどの見学者があった。
- 3月 9日に、西原遺跡の航空写真撮影を終了し、以後、補足調査を実施した。事務所では、これまでに作成した図面類の点検・修正を行い、それと並行して遺跡内の安全対策をして、25日に現地の調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

原出口遺跡は、土浦市大字今泉字原田1928-1ほかに所在しており、土浦市役所から北へ約7.5kmの土浦市北端部に位置している。

土浦市は、北は新治郡千代田町、東は同郡出島村に接するとともに、霞ヶ浦の土浦入に面している。南は稲敷郡阿見町、牛久市、西はつくば市、新治郡新治村に接している。

当市の地形は、中央部の霞ヶ浦の土浦入に注ぐ桜川流域の沖積低地と、北東側の新治台地と、南西側の稲敷台地の三つの地域に分けられる。新治台地は、筑波山塊から南東に延びた標高24~27mの洪積台地で、台地上は畑地、山林となっている。稲敷台地は真壁台地から南東に延びた標高24m前後の洪積台地で、台地上は畑地、山林となっている。桜川とその支流による沖積低地は、多くは水田として利用されているが、河口付近は市街地となっている。

遺跡の所在する新治台地は、筑波山塊南麓から、東南東の出島村へ連続する台地で、霞ヶ浦に注ぎ込む恋瀬川の支流である天ノ川をはさんで、北側と南側に分かれ、それぞれ異なる特徴を持っている。天ノ川の北側の台地は、筑波山塊西側から発する北西から南東方向の水系に刻まれ、多くの支谷が形成されているため、台地面の保存状態が良好でない。一方、当遺跡がある南側では、支谷が西北西から東南東方向に発達している。新治台地の段丘崖や開析谷斜面の傾斜は、一般に8°~20°で、30°~40°の急斜面を持つ所もある。

新治台地の地質は、下位より海成砂層及び礫層、常総粘土層または竜ヶ崎砂礫層、関東ローム層となっている。海成層は、成田層と呼ばれる一群の累層で、主として砂層からなり、貝化石を含む事が多い。ローム層の直下に、常総粘土層が発達しているが、一部分砂礫層が発達している所が見られる。これは、竜ヶ崎砂礫層と呼ばれる、新たに陸化した土地に流れ出した延長河川の堆積物である。

原出口遺跡は新治台地北西端部に位置し、標高25m~27mの平坦な台地で、畑地や山林として利用されている。遺跡の北側には天ノ川の低地があり、水田として耕作されている。遺跡の西側から北側にかけては、小支谷が樹枝状に入り込み舌状台地となっている。台地と水田との比高は、9mほどである。

これらの水田に使われている用水について、地元の話によると、以前は一部の谷津頭から湧水がみられ、その水量は大変多く、周囲の水田はこの湧水でまかなえられるほどであったということである。当遺跡のある地区の字名が今泉ということからも、このことがうかがわれる。

第2節 歴史的環境

霞ヶ浦沿岸地方は、利根川下流域や東京湾沿岸地方とともに多くの遺跡が所在することで知られ、霞ヶ浦西岸に位置する土浦市周辺もその例にもれない。県内で発見された縄文時代の貝塚は350か所ほどであるが、なかでも霞ヶ浦周辺からは集中して発見され、明治12年(1879)に飯島魁・佐々木忠次郎によって調査された陸^{おか}平貝塚(美浦村)を筆頭に安食^{あじきだいら}平貝塚(出島村)、若海^{わかうみ}貝塚(玉造町)、椎塚^{しいづか}貝塚(江戸崎町)、上高津^{かみたかつ}貝塚(土浦市)等は早くから知られた著名な遺跡である。とりわけ国指定史跡の上高津貝塚は、古くは明治39年(1906)に江見水蔭により調査されたのを初めとし、近年の調査の成果から縄文時代の後・晩期にわたって馬蹄形に形

成された、ヤマトシジミを主とする貝塚遺跡であることが判明している。このように、霞ヶ浦周辺は、縄文時代を中心とした遺跡の宝庫である。

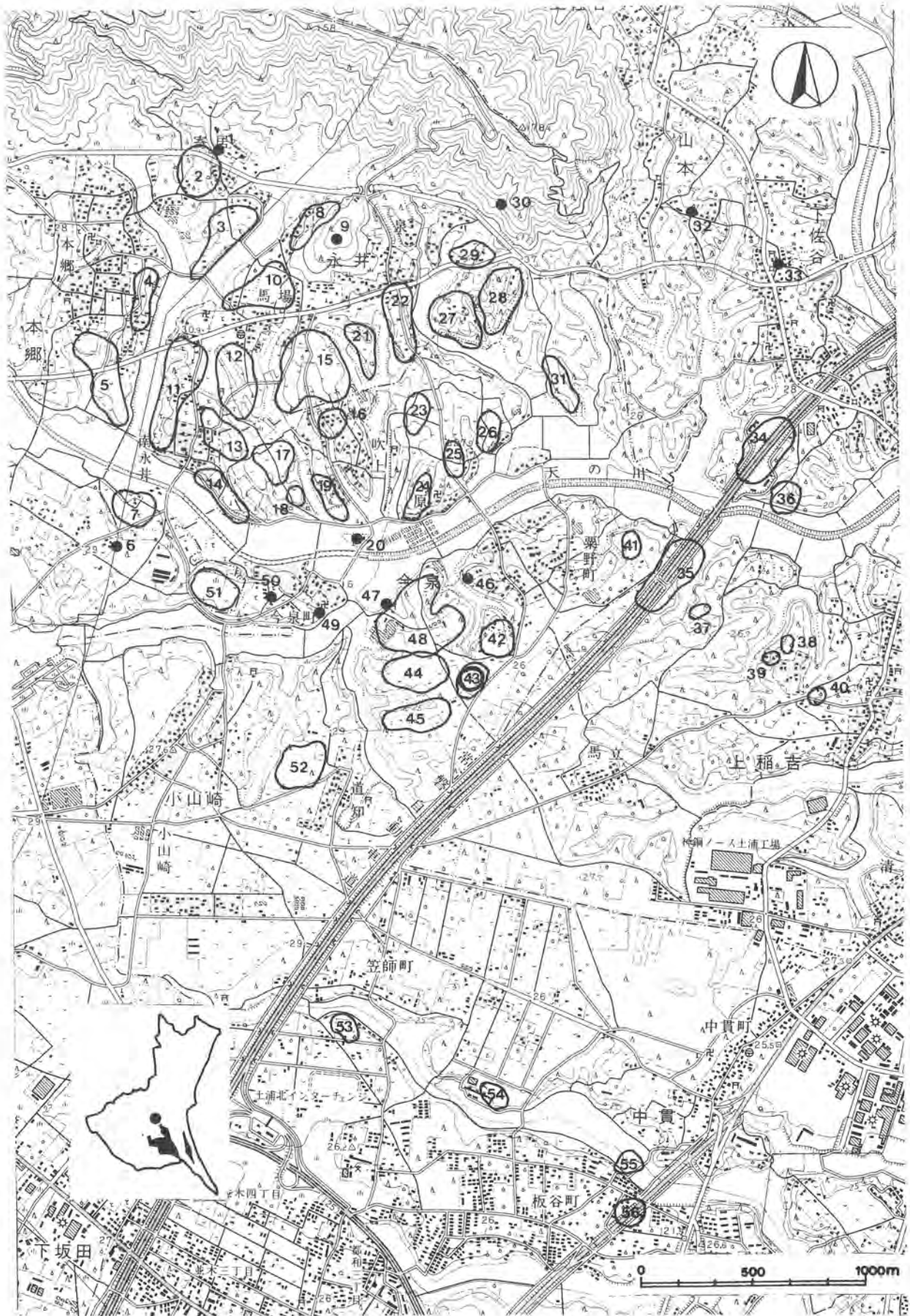
旧石器時代の遺跡は、県内において90遺跡ほど報じられている⁽⁶⁾。土浦市においては、10か所の遺跡が確認されており、昭和61年に調査された向原遺跡⁽⁷⁾では、ナイフ形石器(安山岩)・石核(メノウ)・磨石(硬質砂岩)等が報告されている。

縄文時代になると、土浦市内で146か所の遺跡が確認され、早期では、当教育財団が昭和62年に手野町で調査したゴリン山・原ノ内遺跡⁽⁸⁾・真木ノ内遺跡⁽⁸⁾があり、原ノ内遺跡からは早期の屋外炉2基と田戸下層式の土器片が出土している。当遺跡の周辺では、根鹿西遺跡<18>で茅山式土器が採集されている⁽⁹⁾。前期では、前述の向原遺跡があり、黒浜式期の住居跡1軒が調査されている。中期では、住居跡やフラスコ状土坑が多数確認された木田余台遺跡⁽¹⁰⁾があり、当遺跡周辺においても裏山遺跡<52>、中都遺跡<53>において土器の散布が確認されている。後・晩期になると、前述の上高津貝塚のほか、昭和54年に土浦市教育委員会により調査された池の台遺跡⁽¹¹⁾があり、地点貝塚も伴っている。

弥生時代の遺跡は、当教育財団が平成5年3月に「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ・Ⅱ」として刊行した原田北遺跡<44>・原田西遺跡<45>・西原遺跡<42>を初め、烏山遺跡、弁の内遺跡、永国遺跡があり、いずれも弥生時代後期の住居跡が確認されている。その他穴塚遺跡では、第1号墳の墳丘下で10軒の住居跡を確認している。どの住居跡も隅丸方形のプランで、炉を中央より北あるいは西に持つであろうと報告されているが、不明な点が多い。弥生時代の遺跡は、土浦市全体としては縄文時代の遺跡に比較すると少ないが、天の川流域においては増加している。代表的な遺跡として後期後半の県南地域の土器である「上稲吉式」の標式遺跡である千代田町の上稲吉西原遺跡<35>⁽¹²⁾がある。上稲吉西原遺跡は、当教育財団により、昭和53年に調査された遺跡であり、A・B地区合わせて10軒の弥生時代の住居跡が調査されている。出土土器は、これまで霞ヶ浦周辺地域で何例か知られていた口縁部に貼瘤、頸部下半に無文帯がみられる土器が主体を占めていた。これらの土器群は既存の土器型式にはなかったもので、しかもその分布も知られるようになってきたことから、「上稲吉式」が設定された⁽¹⁴⁾。原出口遺跡と上稲吉西原遺跡は近接しており、天の川に沿ってかなりの数の集落が存在したことがうかがえる。この他の天の川流域の遺跡としては、右岸地域に土浦市吹上坪遺跡<16>、根鹿北遺跡<17>、根鹿西遺跡<18>、原田北遺跡<44>、原田西遺跡<45>、西原遺跡<42>などがあり、左岸地域に新治村永井寄居遺跡<3>、談所前遺跡<11>、鹿島神社前遺跡<13>、飯島遺跡<29>、泉前遺跡<27>、三島後遺跡<15>⁽¹³⁾等がある。

古墳時代の遺跡としては、土浦市指定の王塚古墳⁽¹⁴⁾と后塚古墳⁽¹⁵⁾が霞ヶ浦を望む手野町台地上に存在する。后塚古墳は、全長約55mの前方後方墳で、王塚古墳は、全長約90mの柄鏡形の前方後円墳である。両者ともに外部施設の埴輪が確認されず、埴輪出現期以前の様相を持つことで、4世紀末頃のものとしてされている。当遺跡の周辺では、天の川右岸台地上に愛宕山古墳群<48>⁽¹⁶⁾が存在する。愛宕山古墳群は、2基の前方後円墳と約20基の円墳から形成されている。盟主墳とされる愛宕山古墳は全長約55m、高さ約4mで、地主の久家重中氏宅にはかつて盗掘された際に発見したという人物埴輪及び円筒埴輪の破片が保管されている。愛宕山古墳群の東側には、小支谷を挟んで全長約50mの前方後円墳と推定される八幡神社古墳<46>⁽¹⁶⁾が存在し、本遺跡周辺は古墳時代においても一中心地域となっていたことをうかがわせる。同時代の集落跡としては、大門遺跡<26>、登戸遺跡<25>、吹上坪遺跡<16>、根鹿西遺跡<18>などがあげられる。

奈良・平安時代になると、土浦市域は筑波郡・信太郡・茨城郡・河内郡の四郡にまたがり、今泉地区は茨城郡の佐野郷に所属していたようである。同時代の集落跡として細内遺跡<23>、塙台遺跡<24>、下田原遺跡



第1図 原出口遺跡周辺遺跡分布図

〈41〉がある。さらに、北側に位置する新治村の丘陵斜面には、小野須恵窯跡群⁽⁹⁾、東城寺須恵窯跡群⁽¹⁰⁾、永井寄居須恵窯跡群〈1〉など数群の窯跡が存在し、一帯が一大窯業地帯となっていたことが知られる。中世の城館跡としては、当遺跡と天の川を挟んだ位置に今泉城跡〈50〉が存在する。今泉城は小田氏に仕えた今泉五郎左衛門の城と伝えられている。永禄2年(1556)頃の築城とされ、大塚氏や佐竹氏の侵攻に備えたものといわれる。周辺には永井館⁽¹⁸⁾〈9〉、館山^{ながい}、甲山城^{たてやま かぶとやま}などの城館跡も存在する。

※文中の〈 〉内の番号は、表1、第4図中の該当番号と同じである。

表1 原出口遺跡周辺遺跡一覧表

図中番号	県遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代					図中番号	県遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代				
			縄文以前	弥生	古墳	奈良平安	中世以降				縄文以前	弥生	古墳	奈良平安	中世以降
1	5785	永井寄居須恵器窯跡				○		29	5823	永井飯島遺跡	○	○	○	○	
2	5821	永井能西寺瓦谷遺跡			○	○		30	5773	ろくろうじ古墳			○		
3	2048	永井寄居遺跡	○	○	○			31	4001	堂原古墳群			○		
4	5786	本郷宮後遺跡		○	○			32	2037	吉兵衛屋敷古墳			○		
5	5787	本郷南前・五量遺跡		○				33	2040	下佐谷遺跡				○	
6	2055	本郷原山古墳群			○			34		中佐谷遺跡			○		
7	5836	本郷下川遺跡			○	○		35		上稲吉西原遺跡		○	○		
8	5822	永井腰当遺跡			○	○		36	2013	中佐谷南遺跡	○		○		
9	2047	永井館跡					○	37	2023	西田古墳群			○		
10	5827	永井馬場後遺跡			○	○		38	2866	原山A遺跡	○				
11	5829	永井談所前遺跡		○	○			39	2865	原山B遺跡	○				
12	5828	永井中妻遺跡	○	○	○			40	2025	御手洗古墳群			○		
13	5784	永井鹿島神社前遺跡		○	○			41	5328	下田原遺跡			○		
14	5830	永井柊遺跡			○	○		42	5329	西原遺跡	○	○			
15	5832	永井三島後遺跡	○	○				43		原出口遺跡	○	○	○		○
16	5322	吹上坪遺跡			○			44		原田北遺跡	○	○	○	○	○
17	5326	根鹿北遺跡		○	○			45		原田西遺跡	○	○			
18	5327	根鹿西遺跡	○	○	○			46	5323	八幡神社古墳			○		
19	4000	吹上片蓋古墳群			○			47	5317	愛宕山古墳			○		
20	1796	兵伏塚					○	48	1795	愛宕山古墳群			○		
21	5833	永井笹田西遺跡			○	○		49	5325	今泉古墳			○		
22	5826	永井十三塚遺跡			○	○		50	3995	今泉城跡					○
23	5320	細内遺跡			○			51	5835	永井内田遺跡		○	○	○	
24	5321	塙台遺跡			○			52	5316	裏山遺跡	○				
25	5319	登戸遺跡			○			53	5330	中都遺跡	○		○		
26	5318	大門遺跡			○			54	5312	西山遺跡	○		○		
27	5825	永井泉前遺跡		○	○	○		55	5311	西後遺跡			○		
28	5824	永井唐崎遺跡			○	○		56	5310	板谷遺跡				○	

引用・参考文献

- (1) Iijima and Sasaki 「Okadaira Shell-mounds at Hitachi」 Memoris of the Science Department, University of Tokyo Vol. 1 1883年
- (2)~(5) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 1991年3月
- (6) 茨城県 『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』 1979年3月
- (7) 土浦市教育委員会 『向原遺跡』 1987年12月
- (8) 茨城県教育財団 『霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』 茨城県教育財団文化財調査報告第43集 1987年3月
- (9) 土浦市教育委員会 『土浦の遺跡』 1975年3月
- (10) 土浦市教育委員会 『茨城県土浦市木田余土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書木田余台Ⅰ』 1991年3月
- (11) 土浦市教育委員会 『池の台遺跡調査報告』 1982年3月
- (12) 注9に同じ。
- (13) 茨城県教育財団 『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』 茨城県教育財団文化財調査報告第5集 1980年3月
- (14) 勝田市史編纂委員会 『勝田市史別編Ⅲ 東中根遺跡』 1982年3月
- (15) 慶応義塾大学考古学研究会 「茨城県新治郡新治村内遺跡群の調査」 『研究報告』 2 1982年3月
- (16) 茨城県教育委員会 『重要遺跡調査報告書Ⅰ』 1982年3月
- (17) 高井悌三郎 「新治郡小野窯跡」 『日本考古学年報』 5 日本考古学協会 1955年3月
- (18) 土浦市教育委員会 『図説 土浦の歴史』 1991年3月

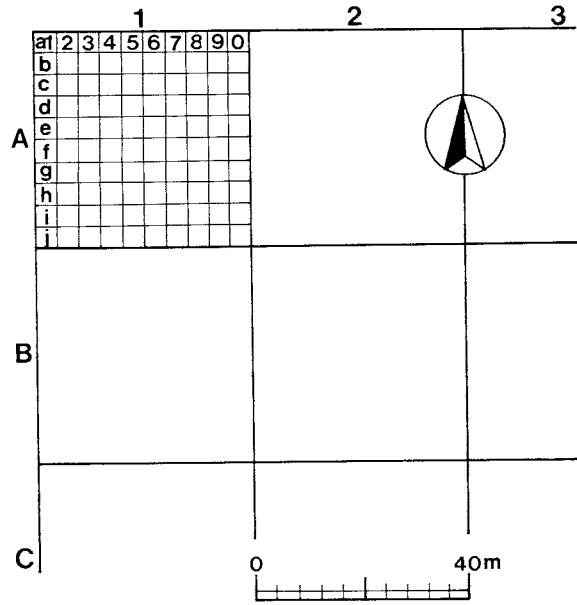
第3章 遺 跡

第1節 調査方法と遺構・遺物の記載方法

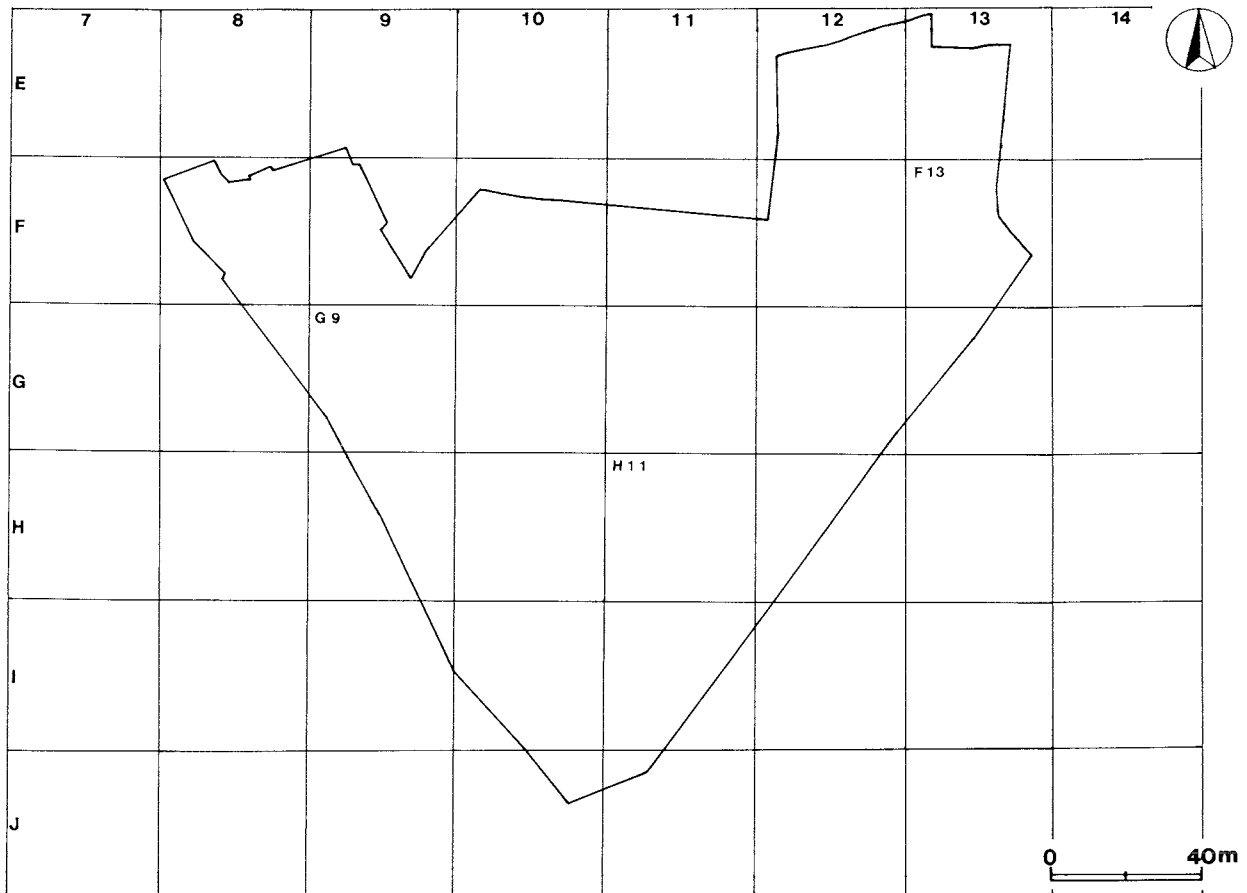
1 地区設定

原出口遺跡の発掘調査を実施するにあたり、遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。調査区は日本平面直角座標第IX系座標を用いて区画し、X軸（南北）+15,160m、Y軸（東西）+32,600mの交点を基準とし、この基準点から東西・南北にそれぞれ40m平行移動して一辺40mの大調査区を設定した。さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m方眼の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、「A1区」、



第2図 調査区呼称方法概念図



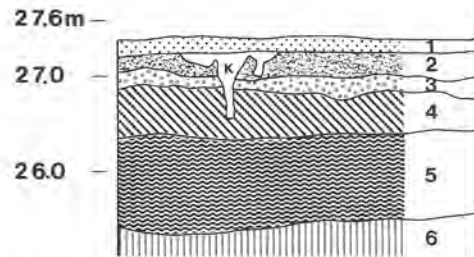
第3図 原出口遺跡調査区大設定図

「B2区」のように呼称した。小調査区も同様に北から南へa, b, c………j, 西から東へ1, 2, 3………とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a₁」「B2b₂」のように呼称した。したがって、原出口遺跡は、E8～J8を南北、E8～E13を東西とする四角形内に位置する。

2 基本層序の検討

原出口遺跡のA地区中央部、G10c₀区にテストピットを設定し、第4図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は、厚さ15～20cmほどの暗褐色土で、ローム粒子、炭化粒子を極少量含み締まりの弱い表土（耕作土）である。第2層は、厚さ10～30cmの褐色土で、ローム粒子、黒色土粒子を少量含み、耕作・木根による攪乱を受けている。ソフトローム層への漸移層である。第3層は、厚さ10～25cmの褐色土で、ローム粒子、ロームブロックを少量含むソフトローム層である。第4層は、厚さ35～50cmの褐色土で締まっており粘性もあるハードローム層への漸移層である。第5層は、厚さ90～110cm前後の褐色土で、ローム粒子を多量にロームブロックを中量含み粘性・締まりともにあるハードローム層である。第6層は、厚さ25～40cmのにぶい褐色土で、粘土小ブロックを少量含み粘性・締まりともにある。



第4図 基本土層図

原出口遺跡の遺構の多くは、第3層のソフトローム層を掘り込んで構築されているが、溝ではハードローム層に達する所もあった。

3 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は、以下の通りである。

(1) 使用記号

遺構 住居跡-SI 土坑-SK 溝-SD 土器棺墓-M 方形周溝墓-SX ピット-P₁
 遺物 土器-P 土製品-DP 石器・石製品-Q 金属製品-M 拓本土器-TP

(2) 遺構・遺物の実測図中の表示

焼土
 炉
 赤彩

● 弥生式土器 ○ 土師器 □ 石器・石製品 ★ 土製品 △ 金属製品

(3) 土層の分類

土層観察における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 日本色研事業株式会社）を使用した。

(4) 遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法

- ① 各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- ② 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々にS=a/b等と表示した。
- ③ 「主軸方向」は、炉をとる軸線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。

(例 N-10°-E, N-10°-W) なお, [] を付したものは推定である。

④ 計測値は, A-口径 B-器高 C-底径 D-脚部径 E-脚部高 単位はcmである。なお, 現存値は () で, 推定値は [] を付して示した。

第2節 遺跡の概要

原出口遺跡が所在する新治台地北西部は, 土浦市の北端部に位置し標高23~27mの平坦な台地で, 畑地や山林として利用されている。当遺跡の北側には天の川の低地があり, その低地は水田として利用されている。当遺跡の西側から北側にかけて小支谷が樹枝状に入り込み, 周辺は複雑な地形となっている。当遺跡には弥生式土器片や土師器片が散布しており, 弥生時代から古墳時代にかけての集落跡として確認されていた。

当遺跡の調査は平成3年から平成4年までの2年間実施し, A・Bの2地区に分けて行った。A地区は平成3年度調査で遺跡の南西部, B地区は平成4年度調査で中央部から北部に位置し, 調査面積はA地区約8,800m², B地区約15,800m²である。今回の調査によって確認された遺構は, 弥生時代の竪穴住居跡57軒, 方形周溝墓8基, 古墳1基, 土坑99基, 溝8条, 土器棺墓3基である。

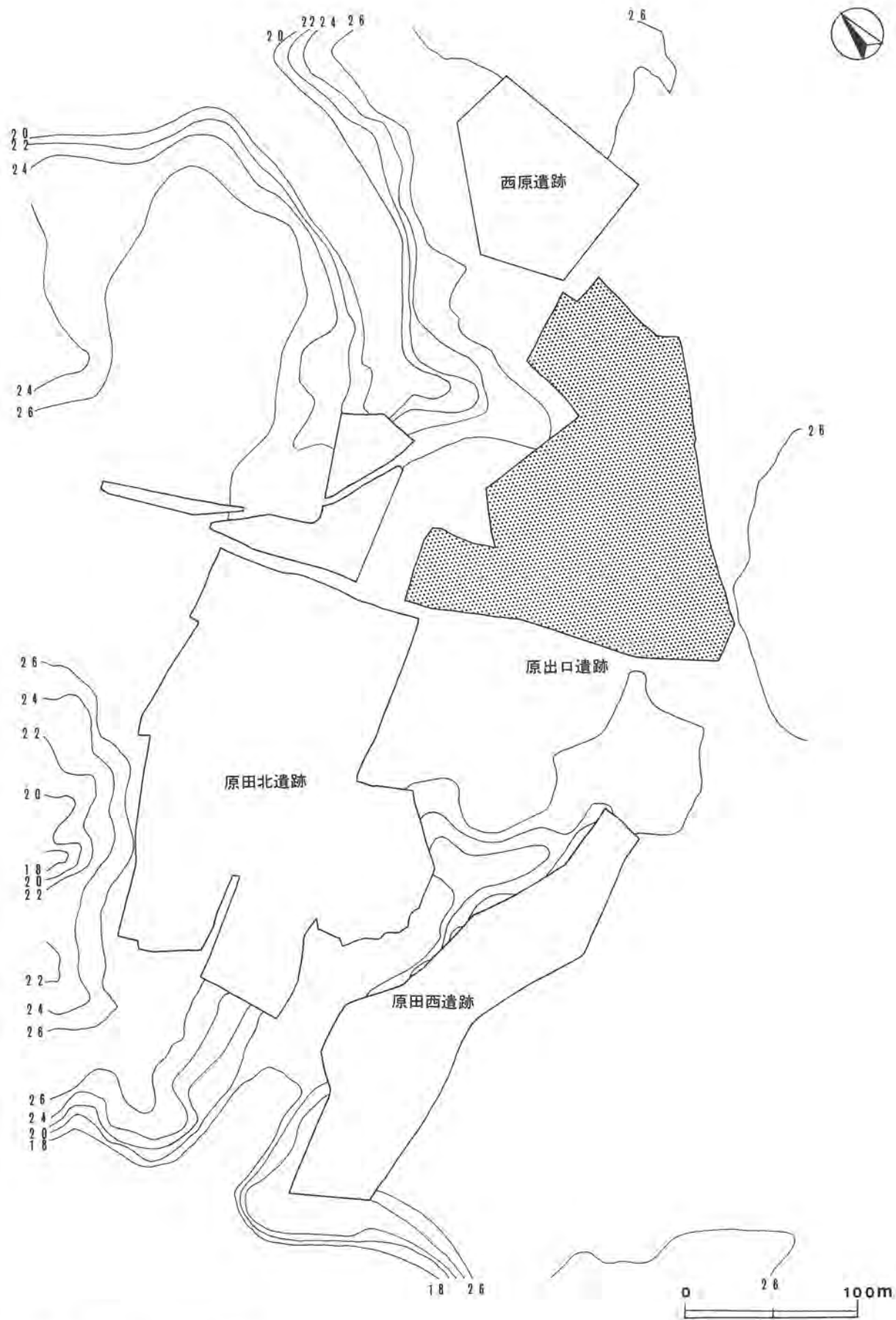
旧石器時代の遺構は確認されなかったが, 剥片やナイフ形石器・尖頭器等が数点出土している。石材は安山岩がほとんどであり, 他に頁岩, メノウも少量使用されている。

縄文時代の遺構はみられなかったが, 前期の浮島式, 中期の下小野式・阿玉台Ib式・加曾利EⅢ式, 後期の称名寺式・加曾利B式などの土器片が少量出土している。

弥生時代の遺構は, 竪穴住居跡57軒で, 調査区全域にみられるが, 特に西側に多く確認されている。時期はすべて後期のもので, 形状は隅丸長方形や隅丸方形のものが多く, 原田北・原田西・西原遺跡と規模・形態は同様である。

古墳時代の遺構は, 住居跡は確認できなかったが, 方形周溝墓と前方後円墳を確認している。方形周溝墓は遺跡南部のA地区から8基確認され, 時期はいずれも前期(五領式期)最終末のものと思われる。面積75.6m²~218.9m²で, いずれも周溝は全周しており, 周溝の一部を共有しているものもある。古墳はA地区西端部で確認されており, その北東側およそ半分は調査できたが, 残りはエリア外に位置するため確認不可能であった。形態は前方後円墳で, 主体部の位置を判断し得るものは残念ながら確認できなかった。

遺物は遺物収納箱で97箱ほど出土している。主な遺物は縄文時代のものとしては, 土器の他に打製石斧・石鏃などが確認面や覆土中から出土している。弥生時代の住居跡からは, 壺・甕・高坏などの弥生式土器が出土している。その他, 紡錘車・土玉等の土製品, 穂摘具・磨製石斧・石鏃などの石器, 砥石などの石製品なども出土している。古墳時代のものとしては, 古墳や方形周溝墓の周溝から壺・器台等の土師器や円筒・形象埴輪等が出土している。



第5図 原出口遺跡調査区

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当遺跡からは、57軒の竪穴住居跡が確認されている。すべて弥生時代後期のもので、平面形は隅丸長方形や隅丸方形がほとんどである。住居跡は調査エリア全域から確認されているが、中央部から西部にかけてが多く、特にA地区北側に密集している。方形周溝墓や古墳の周溝、溝に掘り込まれている住居跡は5軒あるが、住居跡どうして重複しているものは1か所と少なくとも遺存状態は良好である。炉石を持つ住居跡が3軒あり、いずれも堇青石ホルンフェルス（筑波石）を用いている。また、住居跡の床面、炉石、覆土中から石英礫が出土している。石英礫については、各住居跡ごとに礫の大きさ別数量と総重量を示すことにした。区分けの基準は、1～30gまでを小、31～60gまでを中、61g以上を大として表した。

以下、確認された住居跡の特徴や主な遺物について記載する。

第1号住居跡（第6図）

位置 A地区南端部、I11g₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.02m、短軸4.72mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-35°-W。

壁 壁高50～60cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、炉石周辺はよく踏み固められている。

ピット 4か所。P₁は、径26cmの円形で深さ42cmである。P₂・P₃・P₄は、長径36～44cm、短径24～36cmの楕円形で、深さ42～46cmである。P₂は、南西壁下部がオーバーハングしている。P₁～P₄は、主柱穴と思われる、結んだ線は方形となる。出入口施設に伴うピットと思われるものは確認していない。

炉石 1か所。中央から北西寄りにあり、平面形は長径98cm、短径88cmの楕円形で、床を4cm掘り込んだ地床炉石である。炉石は、中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は、第1層が焼土粒子・ローム粒子を少量含む暗褐色土、第2層が焼土粒子少量、ローム粒子を多量に含む褐色土、第3層が焼土粒子・ロームブロック少量、ローム粒子を多量に含む明褐色土である（第6図）。

貯蔵穴 1か所。南東壁際のほぼ中央に位置している。平面形は径72cmの円形で、深さ10cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がり南西壁側は住居跡の壁と共有している。覆土中から弥生式土器片が出土している。

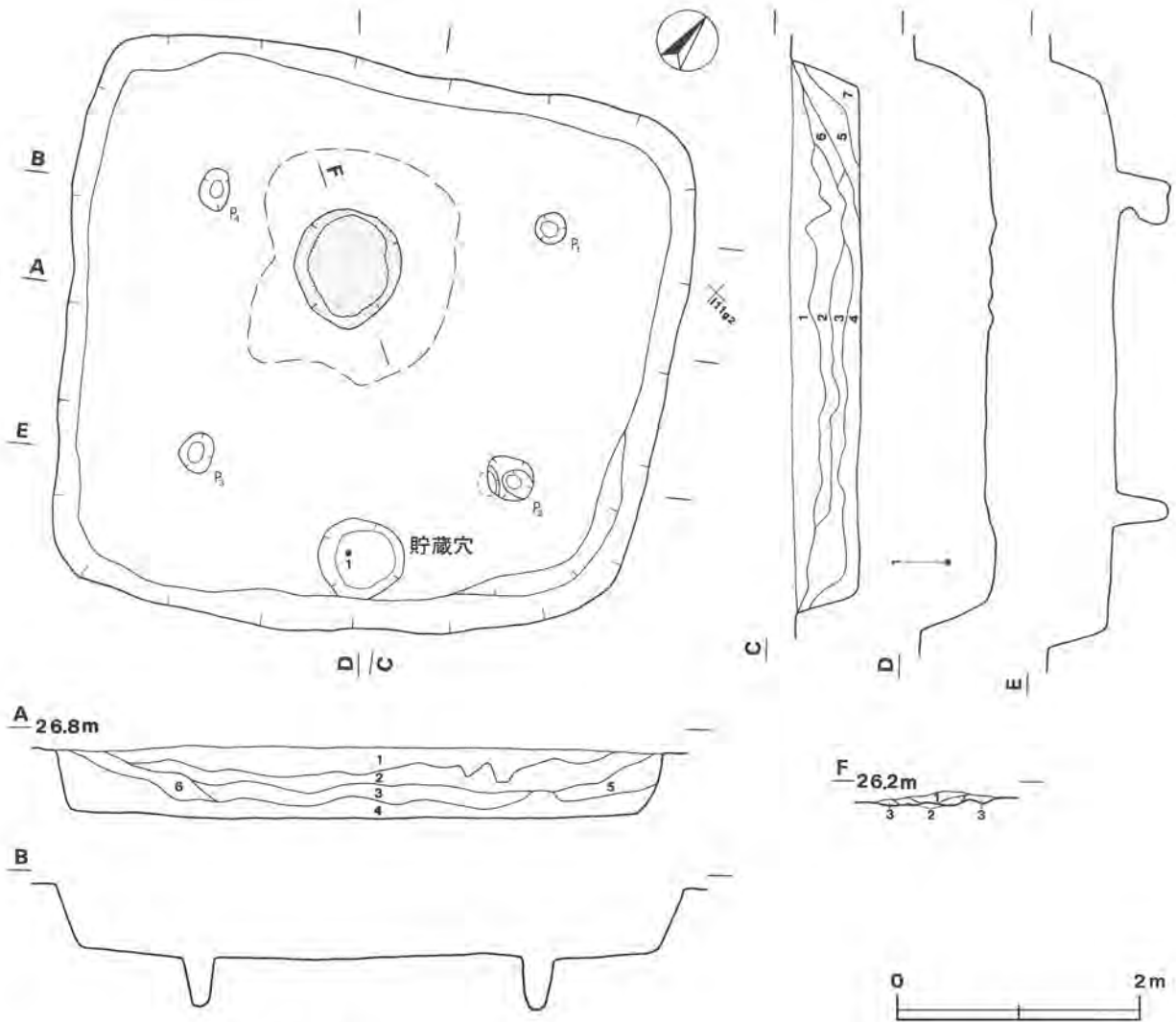
覆土 7層から成る。壁際から中央に向かって褐色土が流れ込むように堆積し、中央部は黒・暗褐色土が皿状に堆積している。遺物は弥生式土器片が西コーナー付近の第4層から出土している。

なお、土層は

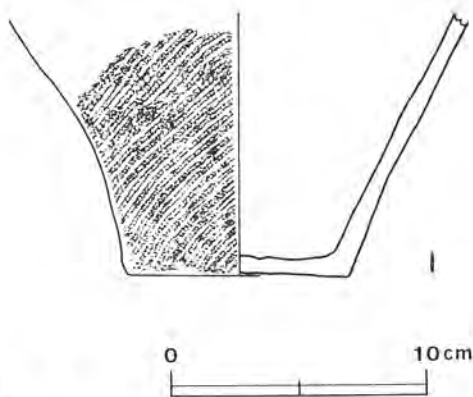
第1層	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	第5層	褐色	ローム粒子多量、黒色ブロック少量
第2層	黒褐色	ローム粒子少量、ロームブロック少量	第6層	褐色	ローム粒子中量、黒色ブロック少量
第3層	暗褐色	ローム粒子中量、黒色ブロック少量、ロームブロック少量	第7層	褐色	ローム粒子中量、ロームブロック少量
第4層	褐色	ローム粒子多量、黒色ブロック少量、ロームブロック少量			(第6図)

である。

遺物 弥生式土器細片、土師器細片がわずかに数点出土し、土師器細片は西コーナー付近の覆土第7層中にあり混入したものと思われる。第7図1は、弥生式土器壺の胴部下半から底部にかけての破片で、貯蔵穴上の覆土中から横位で出土しており、住居廃絶後間もない時期に投棄されたものであろう。その周囲から弥生式土器細片が出土しているが接合できない。



第6図 第1号住居跡実測図



第7図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第7図 1	壺 弥生式土器	B (10.4) C 8.6	底部から胴部にかけての破片。平底で胴部は内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 明褐色	P1 PL34 30% 内面炭化物付着 二次焼成 覆土中

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第2号住居跡（第8図）

位置 A地区南部，I11c1区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.43m，短軸4.40mの隅丸方形である。

主軸方向 N-65°-W。

壁 壁高27～38cmで，外傾して立ち上がる。

床 平坦で，炉周辺と南東壁からP₅・P₂周辺はよく踏み固められている。

ピット 5か所。P₂・P₃は，径24～28cmの円形で深さ16～34cmである。P₁・P₄は，長径30～32cm，短径26～28cmの楕円形で，深さ16～40cmである。P₁～P₄は，支柱穴と思われ，結んだ線は方形となる。P₅は径12cmの円形で，深さ43cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。中央から北西寄りであるP₁とP₄のほぼ中央にあり，平面形は長径74cm，短径46cmの楕円形で，床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は，第1層が焼土粒子・焼土ブロック中量，炭化粒子少量の灰褐色，第2層は焼土粒子・焼土小ブロック中量の黒褐色土，第3層は焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子多量の褐色土である（第8図）。

貯蔵穴 1か所。南東壁中央部寄りにある。平面形は長径54cm，短径28cmの隅丸長方形で深さは10cmである。底面は皿状で壁は外傾して立ち上がり，南東壁は住居跡の壁から連続して掘り込まれている。

覆土 6層から成る。壁際は炭化粒子を含む褐色土が流れ込んだように堆積し，床面中央部は暗褐色土が薄く堆積している。弥生式土器片が第2・4層から出土し，特に南コーナー付近に多い。

なお，土層は

第1層 黒褐色 焼土・ローム粒子微量	第5層 褐色 炭化粒子少量，ローム大ブロック少量
第2層 極暗褐色 ローム小ブロック中量，焼土粒子中量	第6層 暗褐色 ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化粒子微量
第3層 暗褐色 焼土粒子微量，ローム大ブロック少量	
第4層 褐色 炭化粒子少量，ローム小ブロック少量	(第8図)

である。

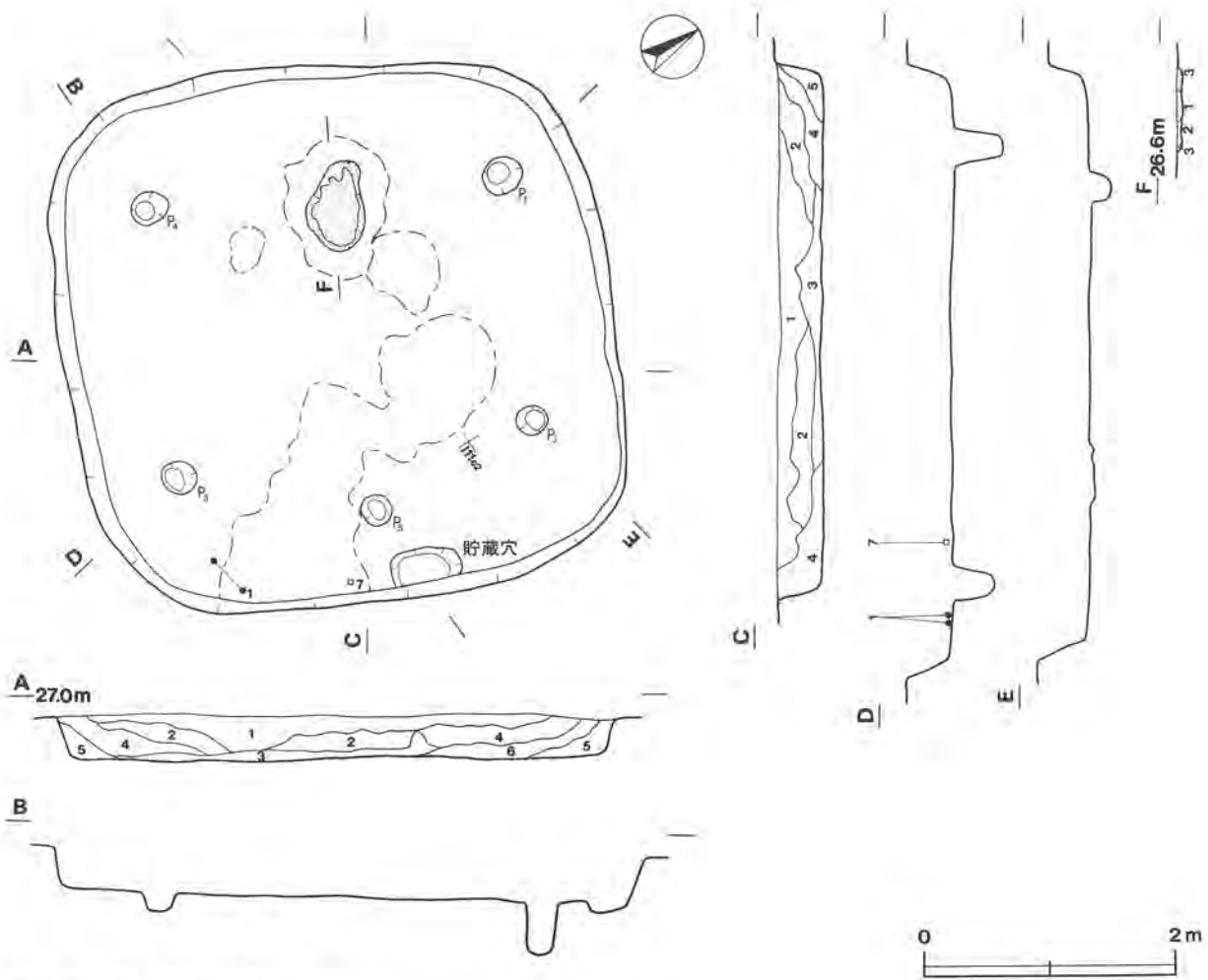
遺物 覆土中から弥生式土器細片が約60点ほど出土しているが，接合できない。第9図1は弥生式土器壺の頸部から胴部で，南東壁際の床面近くから一括の破片で出土した。内・外面に炭化物が付着し，二次焼成を受けており，煮炊きに使われたものと考えられる。7は砥石で南東壁中央部の壁際覆土下層から出土している。

所見 本跡は，出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

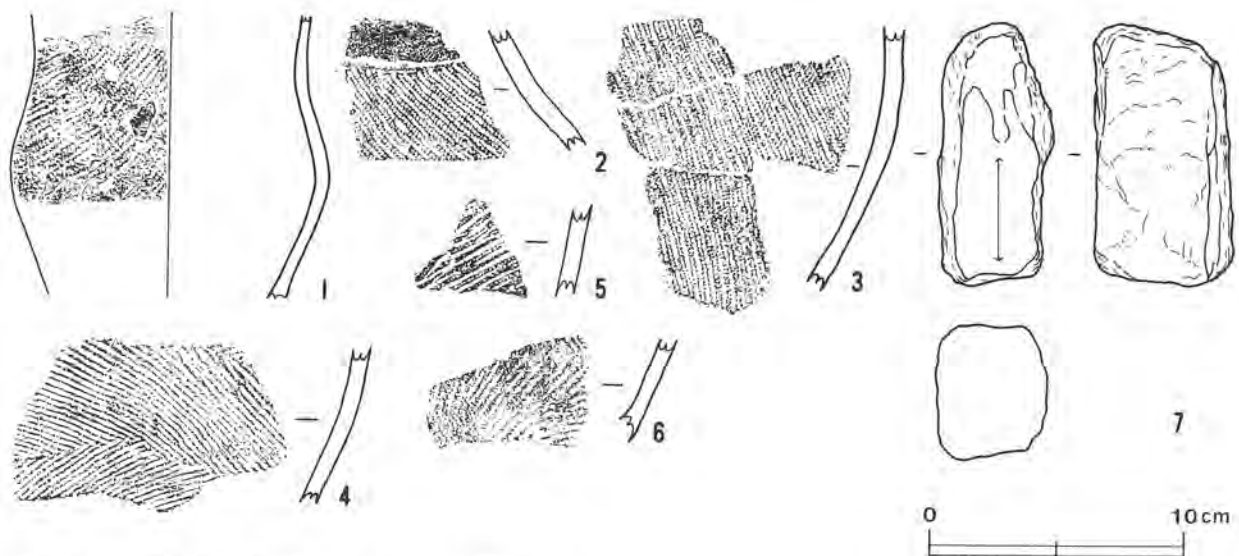
第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第9図 1	壺 弥生式土器	B (11.3)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり，頸部は外反する。胴部には細目の単節縄文が施され，頸部は無文である。	砂粒，石英，長石 普通 褐色	P2 30% 内・外面炭化物付着 二次焼成 床面付近

第9図2～6は，第2号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は壺の胴部から頸部にかけての破片で，頸部は無文であるが胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。3～6は壺の胴部片でいずれも附加条1種（附加2条）の縄文が施され，4は羽状構成をとる。



第8図 第2号住居跡実測図



第9図 第2号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第9図7	砥石	10.4	4.5	5.4	394.6	ホルンフェルス	覆土下層	Q1 PL63

第3号住居跡（第10図）

位置 A地区南部，H11j₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.60m，短軸4.33mの隅丸方形である。

主軸方向 N-38°-W。

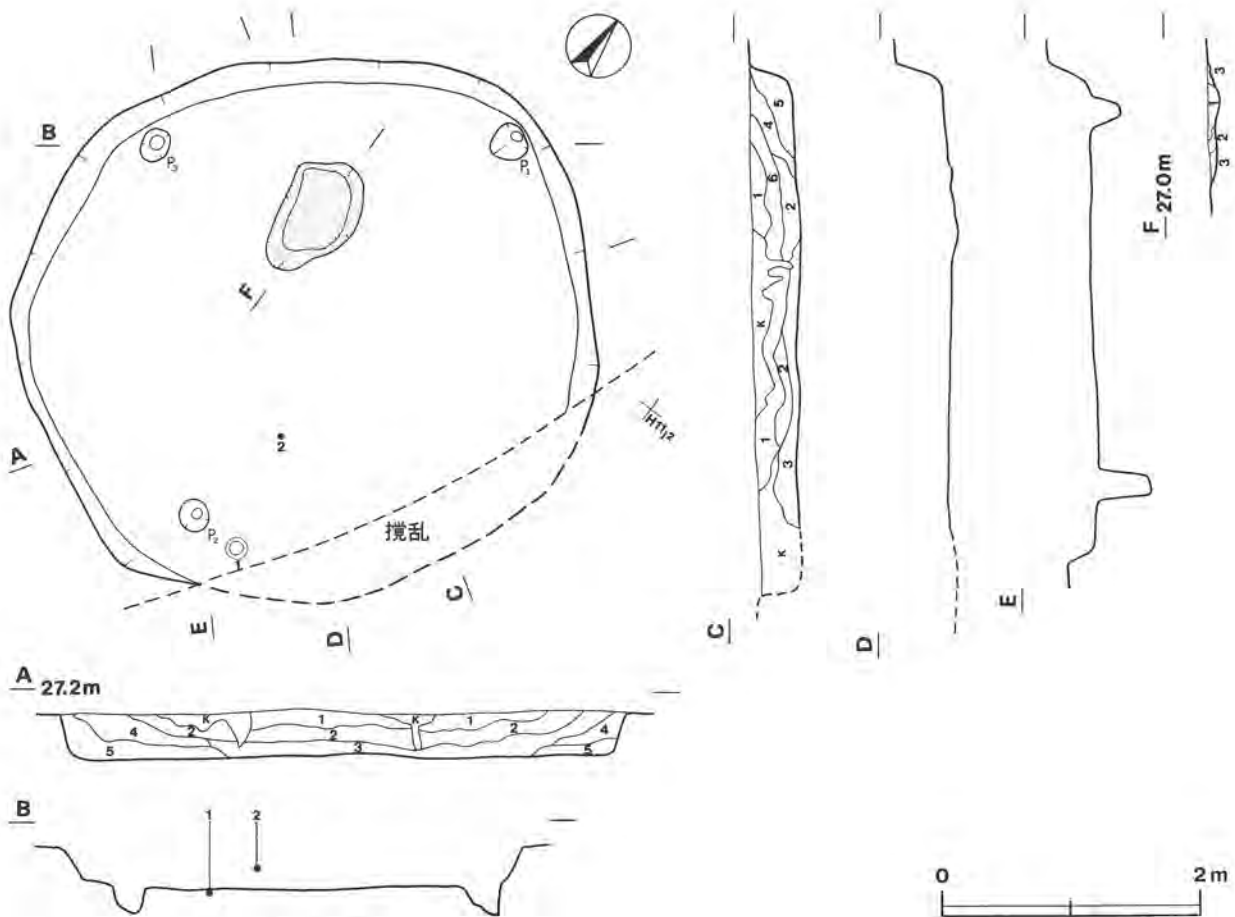
壁 壁高23~34cmで，外傾して立ち上がる。南東壁は攪乱され確認できない。

床 全体としては平坦であるが，炉からP₂周辺は凸凹になっており，よく踏み固められている。南東壁寄りから東コーナーにかけては攪乱を受けている。

ピット 3か所。P₁・P₃は，長径28~32cm，短径22~30cmの楕円形で深さ24~25cmである。P₂は，径26cmの円形で，深さ40cmである。P₁~P₃の3か所は支柱穴と考えられ，もう1か所所有と思われる支柱穴と出入り口施設に伴うピットは床面の攪乱により確認できなかった。

炉 1か所。中央から北西壁寄りにあり，平面形は長径100cm，短径62cmの楕円形で，床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は，第1層が焼土粒子多量，焼土ブロック・ローム中ブロックを少量含む暗赤褐色土，第2層は焼土粒子を中量含む赤褐色土，第3層は焼土粒子・ローム中ブロックを少量含む褐色土である（第10図）。

覆土 6層から成る。壁際から床面中央にかけて暗褐色土が堆積し，中・上層は黒褐色で一部攪乱がある。弥生式土器片が第2・5層から出土している。



第10図 第3号住居跡実測図

なお、土層は

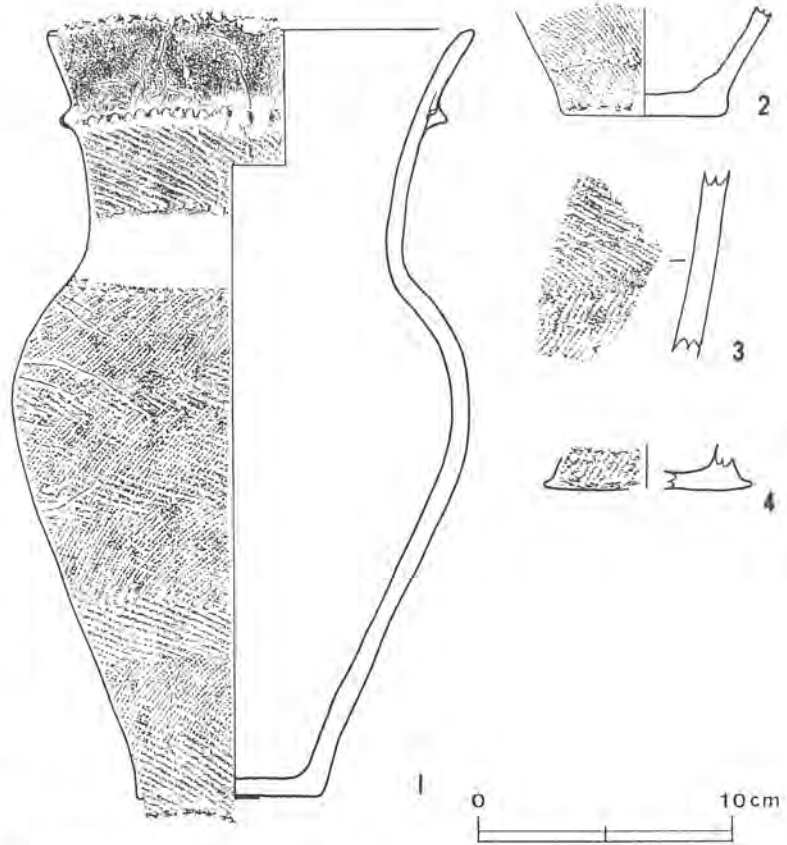
- | | | | |
|---------|--------------------|---------|--------------------|
| 第1層 黒褐色 | ローム粒子少量 | 第4層 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 第2層 黒褐色 | ローム粒子少量 | 第5層 黒褐色 | ローム中ブロック微量、ローム粒子微量 |
| 第3層 暗褐色 | ローム小ブロック微量、ローム粒子少量 | 第6層 黒褐色 | ローム粒子微量、焼土粒子少量 |

(第10図)

である。

遺物 覆土中の遺物は大変少なく数点の弥生式土器細片が出土している。覆土下層からの遺物は北西壁寄りに多いが、これは南東壁側が大きく攪乱されているためであろう。第11図1・2は弥生式土器壺で、1は南コーナー付近の床面直上から垂直に立った状態の完形品で出土している。形のまとまった遺物はこれだけで他は破片であることからして、破損していないこの広口壺がただ単に放棄されたものなのか疑問である。2は、南コーナー寄りの覆土中層から逆位で出土しており、投棄されたものと考えられる。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第11図 第3号住居跡出土遺物実測・拓影図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第11図 1	広口壺 弥生式土器	A 16.5	平底。胴部は底部から内彎して立ち上がり、頸部から口縁部は外反する。複合口縁で下端は縄文原体により押圧され、さらに3個1組の瘤が4単位貼られている。口唇部は縄文原体により押圧されている。頸部下半を無文帯とし、上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。胴部は太さの異なる2種類の附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。最大径を胴部上位に持つ。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい褐色	P3 PL34 100% 二次焼成 内・外面炭化物付着 床面直上
		B 30.3			
		C 7.3			
2	壺 弥生式土器	B (4.4) C 6.2	底部から胴部にかけての破片。平底で胴部は内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明褐色	P4 PL34 10% 内面やや剝離 覆土中層

第11図3・4は、第3号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は壺胴部片、4は底部片でそれぞれ附加条1種(附加2条)の縄文が施され、3は羽状構成をとる。

第4号住居跡

位置 A地区南部，H10j₅区を中心に確認されている。

重複関係 第4・5・6号方形周溝墓の周溝に掘り込まれ，床，壁共に一部分のみ確認できた。

規模と平面形 長軸5.40m，短軸 [4.73]mの隅丸長方形である。

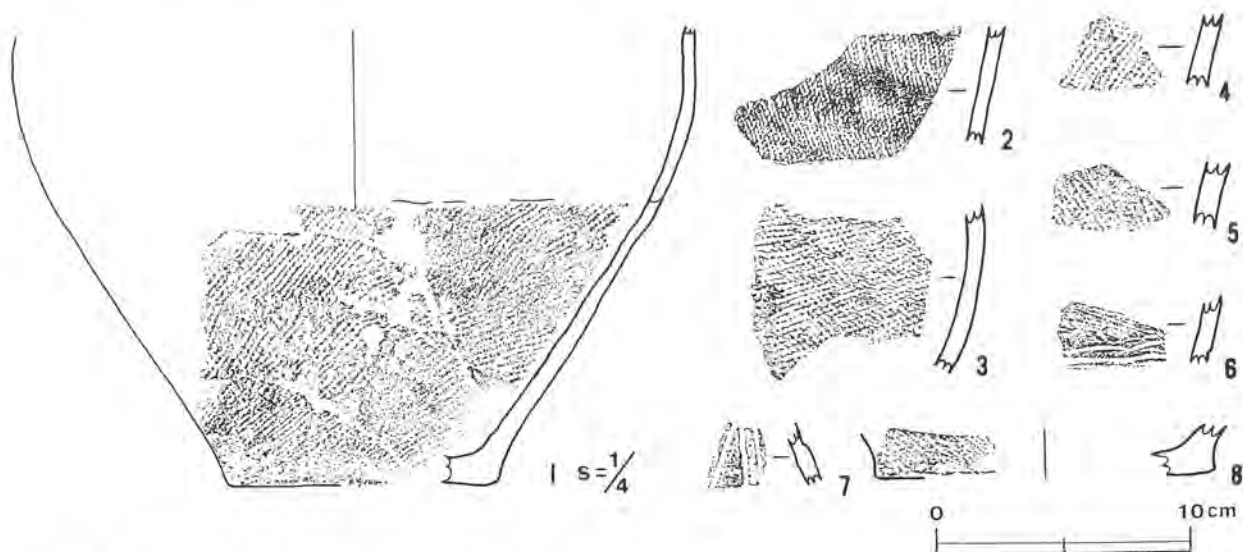
主軸方向 ピット，炉共に確認できなかったため不明。

壁 壁高（18～36）cmで，外傾して立ち上がる。

床 現存部は平坦で堅いが，全体の状況は不明である。

遺物 覆土中から約60点程の弥生式土器細片が出土しているが，第1号古墳の周溝が重複しておりその覆土中のものも含まれている。第12図1は，弥生式土器壺の胴部から底部にかけての破片で，南西壁寄りの床面近くから出土している。この出土地点は周溝には掘り込まれておらず，住居跡に伴う遺物と考えられる。アプライト礫は6点（大2，小4）出土しており，総重量は243.9gである。

所見 本跡は，出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。



第12図 第4号住居跡出土遺物実測・拓影図

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第12図 1	壺 弥生式土器	B (23.9) C [13.8]	底部から胴部にかけての破片。平底で胴部は内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒，石英，長石， 雲母 普通 橙色	P5 PL34 20% 床面付近

第12図2～8は，第4号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3～5は胴部片でいずれも附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。6・7は頸部片で，7は縦方向，6は横方向の櫛描文が施されている。8の底部片は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

第5号住居跡 (第13図)

位置 A地区中央部, H10b₆区を中心に確認されている。

重複関係 第1・2・3号溝に壁の大部分と床の北西側が掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 [5.40]m, 短軸4.98mの隅丸方形である。

主軸方向 N-54°-E。

壁 壁高30~40cmで, 外傾して立ち上がる。南東壁は攪乱され確認できない。

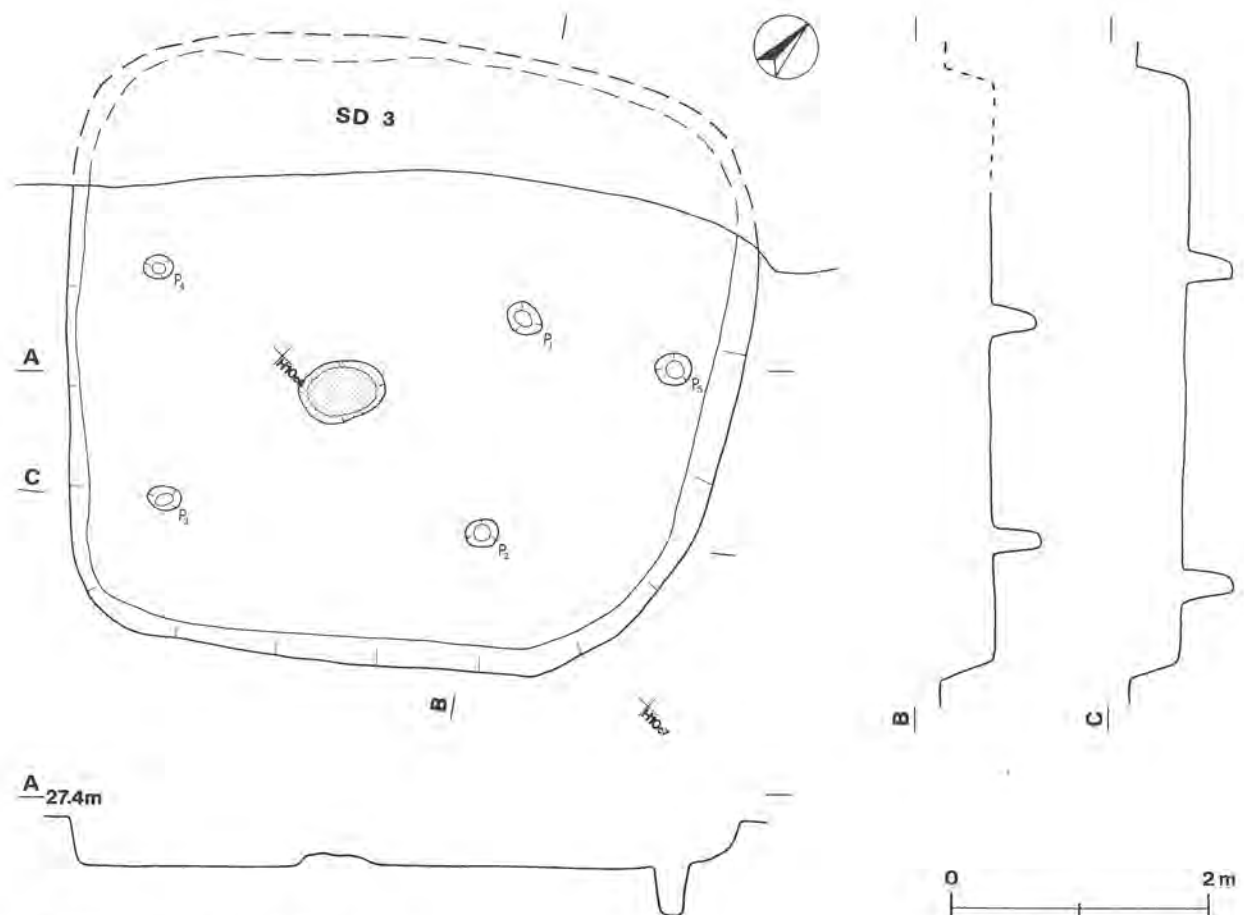
床 現存部は平坦で, あまり踏み固められておらず, 北西壁寄りには攪乱を受けている。

ピット 5か所。P₁・P₂・P₄は, 長径24~30cm, 短径18~26cmの楕円形で深さ38~43cmである。P₃は, 径26cmの円形で, 深さ38cmである。P₁~P₄は支柱穴と考えられ, 結んだ線は方形となる。P₅は長径30cm, 短径24cmの楕円形で深さ40cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。ほぼ中央にあり, 平面形は長径68cm, 短径48cmの楕円形で, 床を2cm掘り込んだ地床炉である。炉床は, 中央部がよく焼け赤変硬化している。

覆土 第1~3号溝に掘り込まれ, 残存している本跡土層は僅かであるが, 上層はロームブロック少量, 炭化粒子微量の極暗褐色土, 中層はロームブロック少量, 焼土粒子少量の黒褐色土, 下層はローム大ブロック中量, 炭化粒子少量の褐色土である。詳しい堆積状況は判断できない。弥生式土器片が下層から出土している。

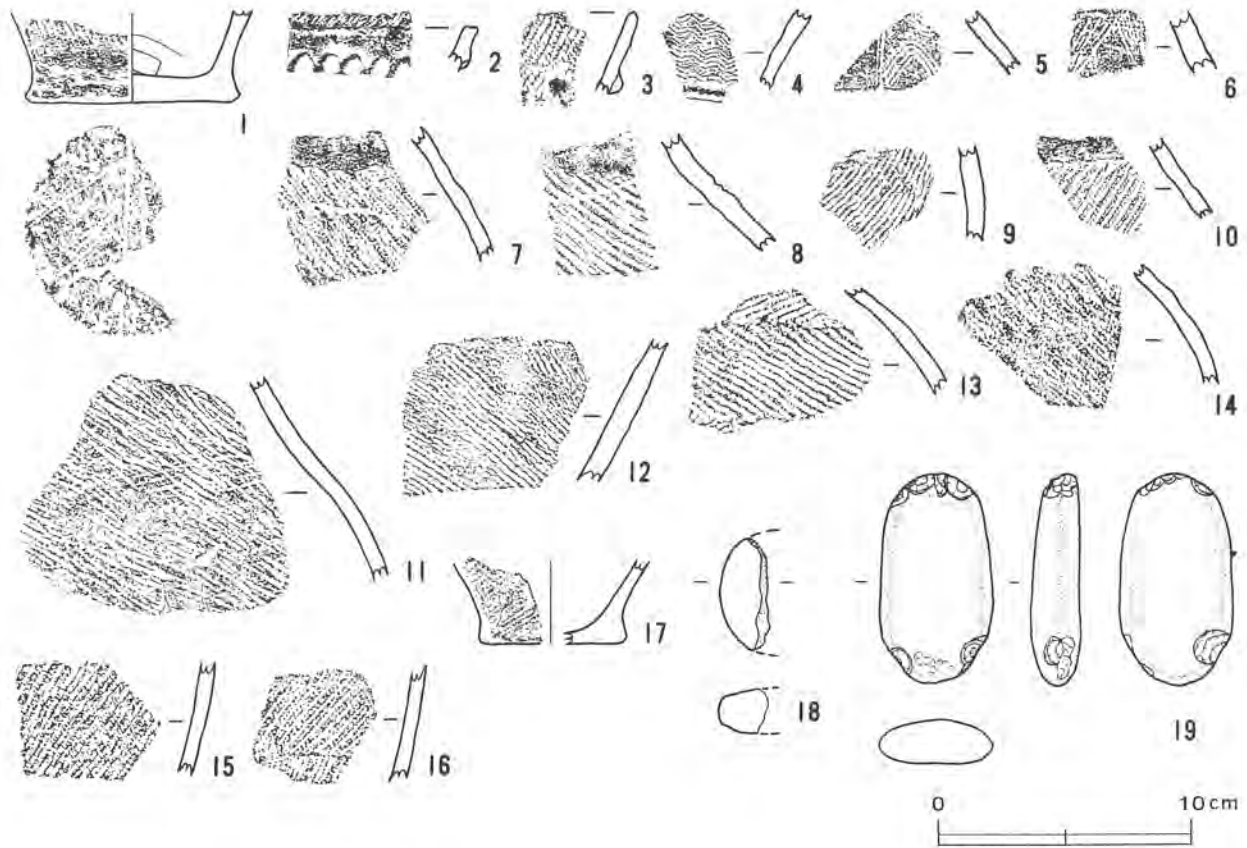
遺物 弥生式土器細片が約310点ほど出土しているにもかかわらず, 接合できるものがほとんどない状況である。これは, 覆土のほとんどが第1~3号溝に掘り込まれているため, 大半の弥生式土器細片は溝の覆土の遺



第13図 第5号住居跡実測図

物であるためであろう。第14図1は、弥生式土器壺の胴部下位から底部にかけての破片で、覆土中から出土している。18の紡錘車は覆土中から、19の敲石は北東側覆土中からそれぞれ出土している。アブライト礫は13点（大1、小12）出土しており、総重量は158.9gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。



第14図 第5号住居跡出土遺物実測・拓影図

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第14図 1	壺 弥生式土器	B (3.6) C 7.7	底部片。平底で、胴部は外傾して立ち上がり胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。胴部下端部外面は無文でヘラケズリ後ヘラナデ、内面はヘラナデされている。底面に木炭底有り。	砂粒、石英、長石、 霏母 普通 橙色	P6 PL34 10% 覆土中

第14図2～17は、第5号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2～4は口縁部片で、3には附加条1種（附加2条）の縄文と貼瘤が、4には櫛歯状工具による横走波状文が施されている。2は複合口縁で下端には棒状施工具による押圧、口唇部には縄文が施されている。5・6は頸部片で櫛歯状工具による横走波状文と山形文が施されている。7～10・11は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている頸部から胴部にかけての破片で、7～10は頸部を無文帯としている。12～16は胴部片で、12には絡条体による捺糸文が、13～16には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。17は胴部下位から底部にかけての破片で、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第14図18	紡錘車	(4.4)	(2.0)	(1.8)	—	(14.1)	30	覆土下層	DP1 PL54

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第14図19	蔽石	8.3	4.5	2.0	102.6	砂岩	覆土中	Q2 穂摘具の可能性有り PL62

第6号住居跡 (第15図)

位置 A地区中央部, G10j₃区を中心に確認されている。

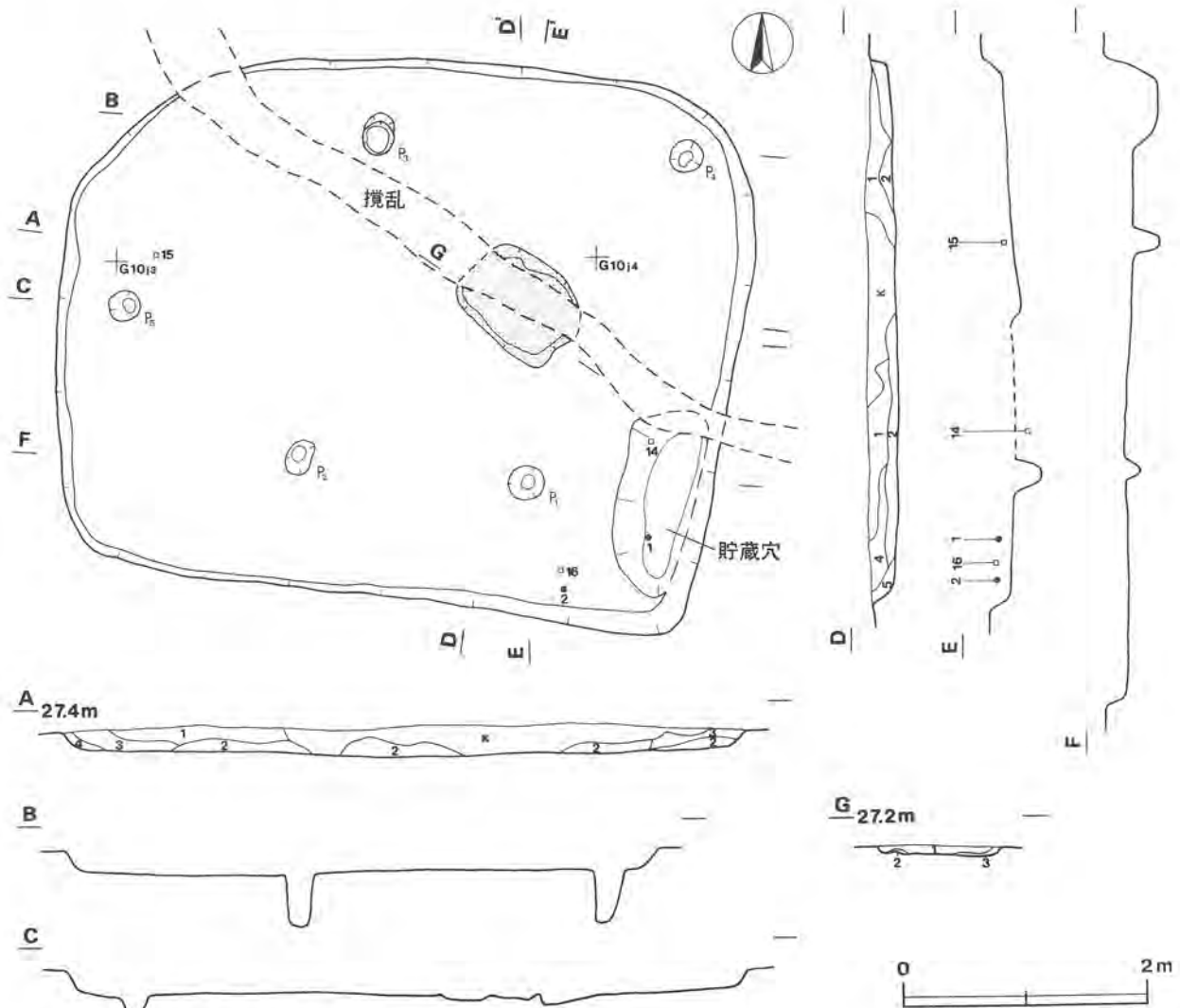
規模と平面形 長軸5.68m, 短軸4.53mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-100°-E。

壁 壁高20~25cmで, 外傾して立ち上がる。東壁と北壁に一部攪乱がある。

床 平坦で, P₃周辺はよく踏み固められている。北壁中央から北西コーナー付近にかけての床面は浅く帯状に攪乱されている。

ピット 5か所。P₁・P₁は, 径28cmの円形で深さ25~45cmである。P₂・P₃は, 長径32~36cm, 短径20~26cmの楕円形で, 深さ16~46cmである。P₁~P₄は, 支柱穴と思われ, 結んだ線は方形となる。P₅は径26cmの円形で, 深さ19cmの出入口施設に伴うピットと思われる。



第15図 第6号住居跡実測図

炉 1か所。中央から東寄りにあり、平面形は長径102cm、短径76cmの楕円形で、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部がよく焼け赤変硬化している。炉のほぼ中央部を東西にかけて帯状に浅く攪乱されているが、炉床までは達していない。覆土は、第1層が焼土粒子多量、焼土ブロック少量を含むにぶい赤褐色、第2層はローム粒子多量、ロームブロック少量の明褐色土、第3層は焼土粒子微量、ローム粒子少量の暗褐色土である（第15図）。

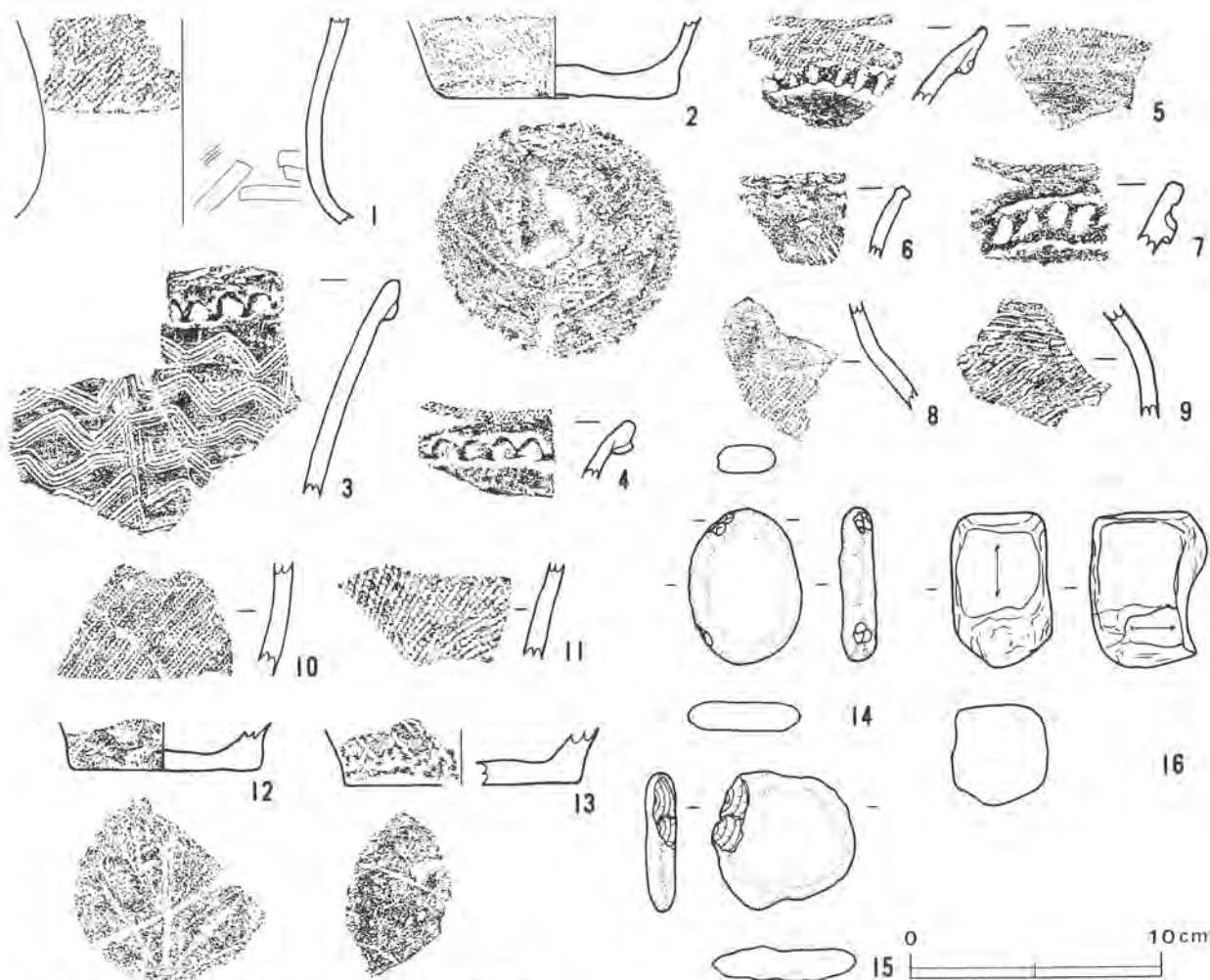
貯蔵穴 1か所。南東コーナー付近にある。平面形は長径160cm、短径66cmの長楕円形で深さは20cmである。底面は皿状で壁は外傾して立ち上がり、東壁は住居跡の壁から連続して掘り込まれている。

覆土 5層から成る。壁際から床面中央にかけ褐色土が堆積し、攪乱が大きく入り下層まで達している。弥生式土器片が第3・4層から出土し、壁付近に多い。

なお、土層は

第1層 黒褐色 焼土粒子少量、炭化粒子少量	第4層 褐色 ローム中ブロック少量
第2層 褐色 ローム小・中ブロック中量、炭化粒子少量	第5層 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量
第3層 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量	(第15図)

である。



第16図 第6号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物 弥生式土器細片が覆土中・上層から70点ほど出土し、大半が壺の胴部片と思われるが接合できない。第16図1・2は弥生式土器の壺片で、1は頸部、2は胴部下端から底部である。1・2とも北東コーナー付近の

覆土上層から出土しており、住居跡廃絶後に投棄されたものと思われる。14・15は敲石で、14は貯蔵穴の覆土中から、15は住居跡の覆土中から出土している。16の砥石は北東コーナー近くの覆土上層から出土している。
所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第16図 1	広口壺 弥生式土器	B (8.5)	頸部片。頸部は胴部から外反して立ち上がり、頸部上半には太めの附加条1種（附加2条）の縄文が施され、下半は無文である。内面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 橙色	P7 5% 外面摩滅 覆土上層
2	壺 弥生式土器	B (3.3) C 9.8	底部片。平底で胴部は内彎して立ち上がる。胴部には無節の縄の絡条体による縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明褐色	P8 PL34 5% 内面剝離 外面スス付着 覆土上層

第16図3～13は、第6号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3～7は口縁部片で、いずれも口唇部は縄文が施されている。口縁部下端には、3・4は棒状工具による押圧が、5・7には棒状工具によるキザミ目が施されている。3の頸部は4本櫛歯の施文具により縦区画を施した後に、同状の施文具により横走波状文を充填している。8・9は頸部から胴部にかけての破片で、9は櫛歯状工具による横走文で区画し、胴部には縄文が施されている。8は頸部を無文帯とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。10・11は胴部片で、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。12・13の底部片は、どちらも胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、底面には木葉痕がある。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第16図14	敲石	6.3	4.6	1.2	57.2	砂岩	覆土中	Q3
15	磔器	5.8	5.6	1.1	59.2	石英	覆土中	Q4 PL62
16	砥石	(6.2)	(4.1)	(4.1)	(164.0)	砂岩	覆土上層	Q5 破片 PL63

第7号住居跡（第17図）

位置 A地区中央部、G9j₇区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸7.00m、短軸6.05mの隅丸長方形である。

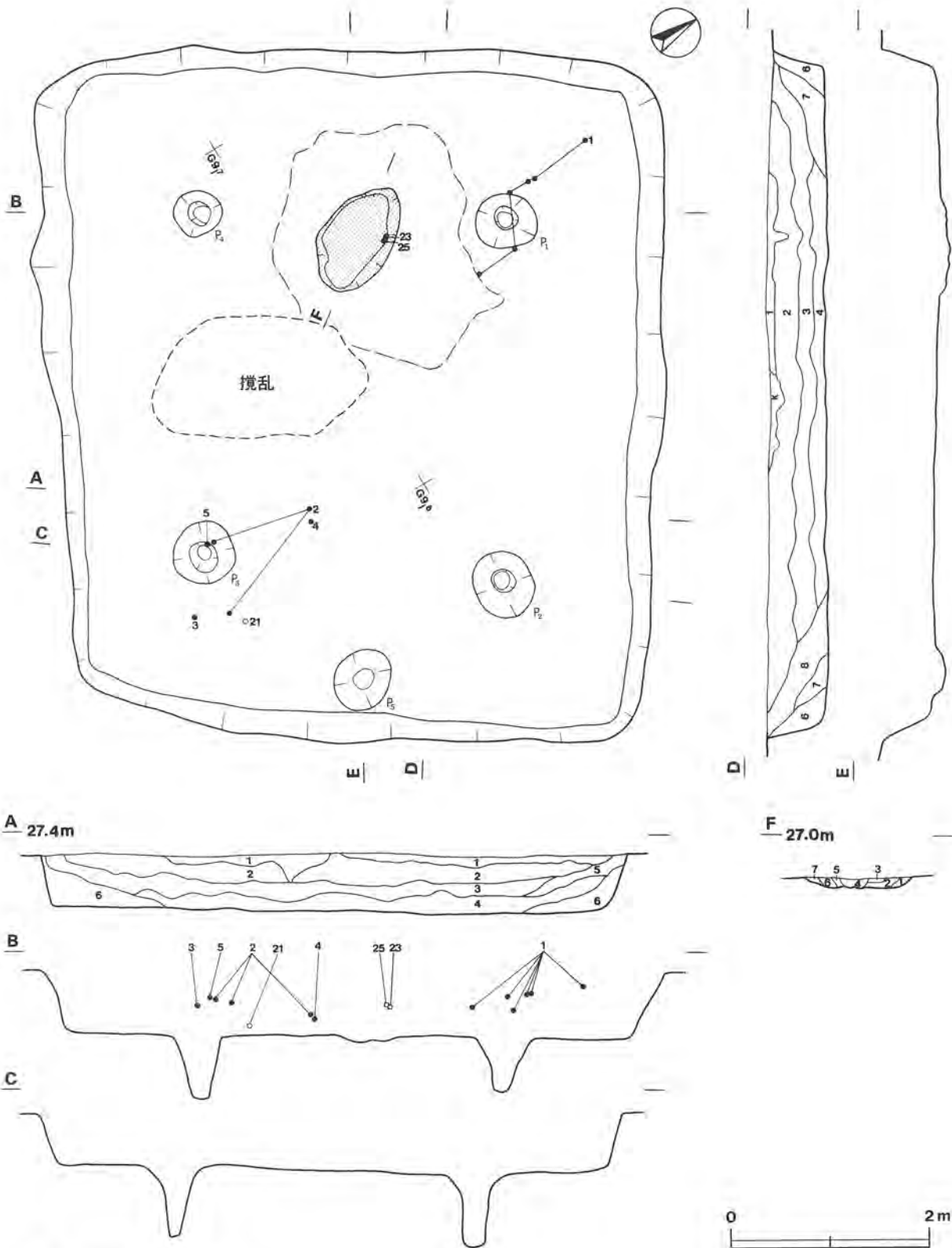
主軸方向 N-56°-W。

壁 壁高50～70cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、P₂・P₃・P₅周辺はよく踏み固められている。炉の南側からP₃とP₄の間にかけての床面は浅く形状に攪乱がある。

ピット 5か所。P₁・P₂は、長径64～70cm、短径54～60cmの楕円形で深さ61～77cmである。P₃・P₄は、径46～64cmの円形で、深さ66～76cmである。P₁～P₄は、主柱穴と思われる、結んだ線は方形となる。P₅は径63cmの円形で、深さ12cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

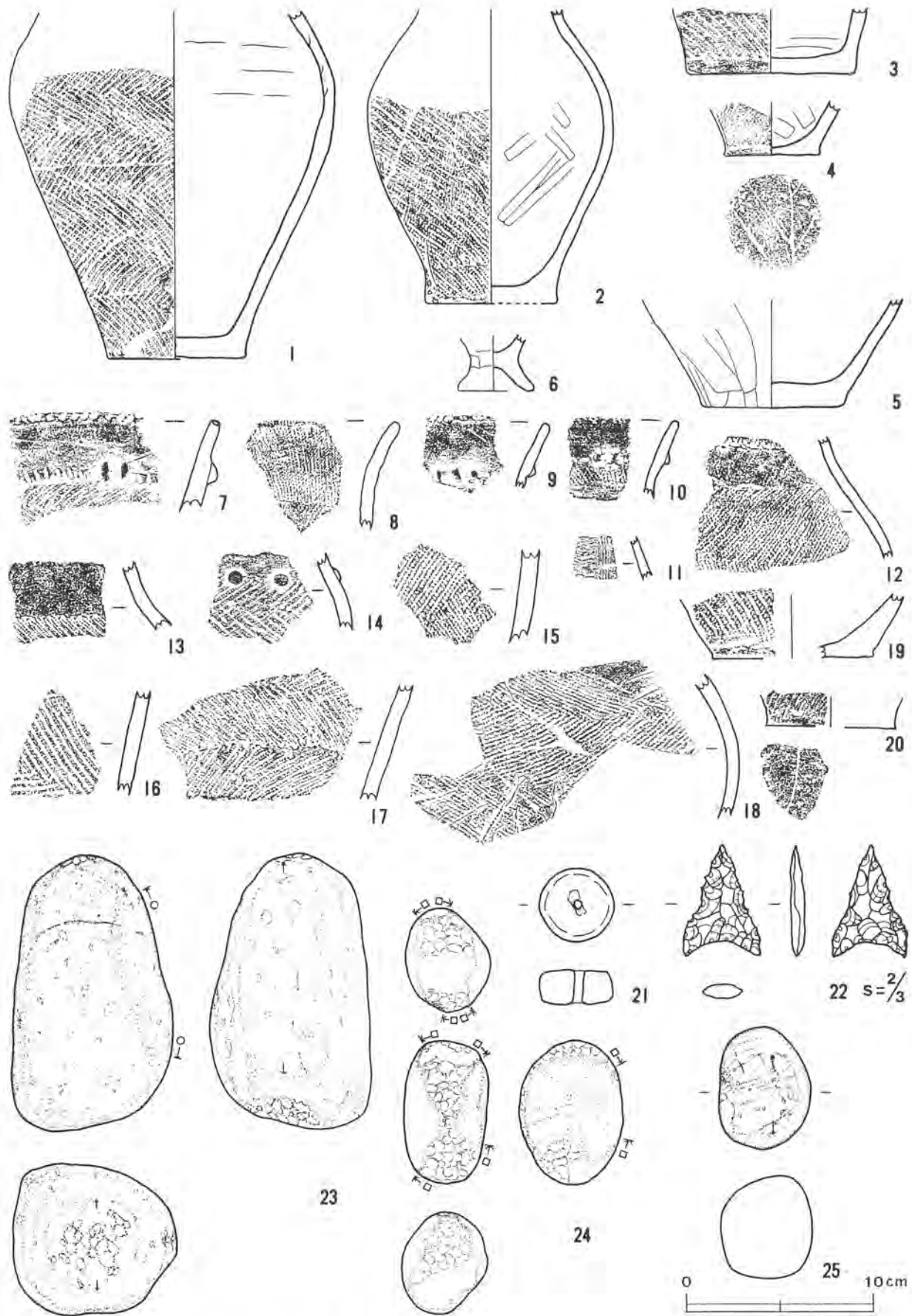
炉 1か所。中央から北西寄りP₁とP₄の間にあり、平面形は長径118cm、短径72cmの楕円形で、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は、第1層が焼土粒子微量、ローム粒子少量含む黒褐色土、第2層はローム粒子微量、焼土粒子少量含む暗褐色土、第3層は焼土粒子少量、ローム



第17図 第7号住居跡実測図

ム小ブロック微量の黒褐色土である（第17図）。

覆土 8層から成る。壁際と下層には褐色土が堆積し、中層には暗褐色土、上層には黒褐色土がレンズ状を成している。上層の一部に攪乱がある。流れ込みと思われる弥生式土器片が第3・4層から多く出土している。



第18图 第7号住居跡出土遺物実測・拓影図

なお、土層は

第1層 黒色	焼土粒子少量,炭化粒子少量,ローム粒子少量,ローム小ブロック少量	第5層 褐色	焼土粒子微量,ローム小ブロック中量
第2層 黒褐色	ローム小ブロック中量,炭化粒子少量,焼土粒子少量	第6層 褐色	ローム中ブロック少量
第3層 暗褐色	ローム粒子少量,焼土粒子少量,ローム小ブロック中量	第7層 褐色	焼土粒子少量,炭化粒子少量,ローム小・大ブロック中量
第4層 褐色	ローム小・大ブロック中量	第8層 灰褐色	焼土粒子微量,ローム小ブロック少量

(第17図)

である。

遺物 弥生式土器壺の細片が約800点（口縁部15, 胴部788, 底部15）、土師器細片・須恵器細片が数点出土している。第18図1～4は弥生式土器壺で、5は甕である。1・2は胴部から底部、3～5は胴部下位から底部にかけての破片である。1は10点ほどの破片が接合されており、それらの破片は北コーナー部から中央部に向かって直線状に並んで出土している。おそらく覆土中層が形成された段階で、同方向から投棄されたのであろう。2～5は、いずれも南コーナー部からP₃周辺にかけての中層から出土し、土層は1とほぼ同じで時期的にも同一と考えられる。6は高坏の脚部片で、覆土中から出土している。床面直上からは弥生式土器細片とアプライト礫が出土しているが実測可能な土器はなかった。21の紡錘車は南コーナー付近の覆土下層から出土している。22の石鍬は覆土中から、23～25の敲石は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。アプライト礫は3点（中1, 小2）出土しており、総重量は74.1gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第18図 1	壺 弥生式土器	B (18.6)	底部から胴部にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種（附加2条）の縄文が施され羽状構成をとっている。最大径を胴部上位に持つ。胴部上位に無文帯が認められる。	砂粒,石英,長石,雲母,スコリア 普通 明褐色	P9 PL34 40% 二次焼成 外面スス付着 覆土中層
		C 7.4			
2	壺 弥生式土器	B (15.8)	底部から胴部にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。最大径を胴部上位に持つ。わずかであるが頸部下位に無文帯が認められる。胴部内面はヘラナデされている。	砂粒,雲母,スコリア 普通 黄橙色	P10 PL34 60% 胴部下位 内面,底面剝離 覆土中層
		C 6.9			
3	壺 弥生式土器	B (3.4)	底部片。平底で、胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒,石英,長石,雲母 普通,明黄褐色	P13 PL34 10% 覆土中層
		C 8.8			
4	壺 弥生式土器	B (3.0)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がり、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。底面に木葉痕がある。	砂粒,石英,長石,雲母 普通 にぶい橙色	P14 PL34 5% 覆土中層
		C 5.2			
5	甕 弥生式土器	B (5.8)	底部から胴部にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がり、外面はヘラナデされている。	砂粒,石英,長石,雲母 普通 橙色	P12 PL34 10% 内面炭化物付着 覆土中層
		C 7.1			
6	高坏 弥生式土器	B (3.0)	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開く、坏部は外傾して立ち上がる。外面はヘラナデされている。	砂粒,石英,長石,雲母 普通 黄橙色	P15 15% 覆土中
		D 3.9			
		E 1.9			

第18図7～20は、第7号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7～10は口縁部片で、7・9・10は複合口縁である。口縁部下端には、7がヘラ状施文具によるキザミ目、10は縄文原体による押圧が施されさらに瘤が貼られている。また、いずれも口唇部は縄文原体により押圧され、頸部は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。11は頸部片で5本櫛歯による縦位の櫛描文と横走波状文が施されている。12～14は頸部から胴部にかけての破片で、頸部下位は無文とし胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、12・14は羽状構成をとっている。さらに14は胴部と頸部の境目にボタン状の瘤が貼られている。15～18は胴部片で附加条1種（附加2条）の縄文が施され、いずれも羽状構成をとっている。19・20は底部片で胴部には附加条1

種（附加2条）の縄文が施され、20は底面に木葉痕がある。

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第18図21	紡錘車	4.0	4.1	1.8	5.0	33.1	100	覆土下層	DP2 PL54

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第18図22	石鏡	3.0	2.2	0.4	1.5	チャート	覆土中	Q6 PL60
23	敲石	14.9	8.7	8.2	1423.0	緑色凝灰岩	覆土中層	Q7 PL62
24	敲石	7.7	5.6	5.5	270.9	砂岩	覆土中層	Q8 PL61
25	敲石	6.6	5.0	5.5	240.8	砂岩	覆土中層	Q9

第8号住居跡（第19図）

位置 A地区中央部，H9b₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.33m，短軸4.80mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-59°-W

壁 壁高27~42cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，P₆から炉の南側周辺がよく踏み固められている。炉の周辺からP₂にかけての床面に焼土が散っている。

ピット 5か所。P₁・P₂は，径30~36cmの円形で，深さ37~54cmである。P₃・P₄は，長径32cm，短径28cmの楕円形で深さ49~52cmである。P₁~P₄は，支柱穴と思われ，結んだ線は方形となる。P₃は径40cmの円形で，深さ37cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。中央からやや北西寄りにあり，平面形は長径148cm，短径82cmの楕円形で，床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は，第1層がローム・焼土粒子微量の褐色土，第2層は炭化粒子微量，焼土小ブロックを少量含む黒褐色土，第3層は焼土粒子少量，炭化粒子微量，焼土小ブロック少量の暗褐色土，第4層は焼土粒子微量の黒褐色土である（第19図）。

覆土 6層から成る。壁際から床面にかけて褐色土が薄く堆積し，中層・上層には黒褐色土が厚く堆積している。

なお，土層は

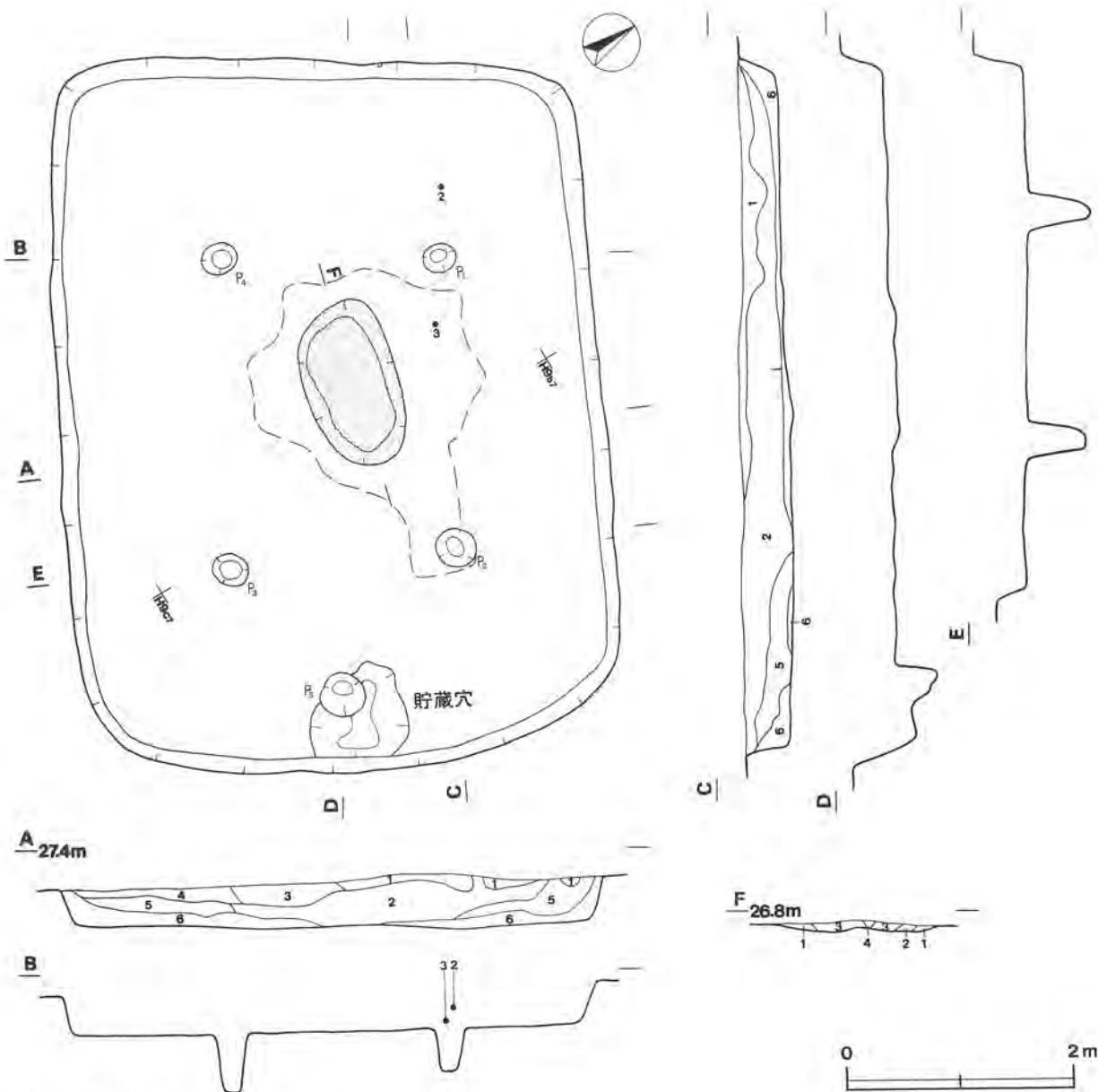
第1層 黒褐色	ローム粒子微量	第4層 黒褐色	ローム粒子少量
第2層 黒褐色	ローム粒子少量，焼土粒子微量	第5層 暗褐色	焼土粒子微量，ローム粒子少量
第3層 黒色	ローム粒子微量	第6層 褐色	ローム小ブロック微量

(第19図)

である。第2層から流れ込みと思われる弥生式土器片が多く出土している。

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第20図 1	広口壺 弥生式土器	A [15.4]	頸部上位から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけて外反する。複合口縁で，附加条1種（附加2条）の縄文が施され，上・下端は棒状工具で押圧されている。	砂粒，石英，長石，雲母 普通 褐色	P16 PL35 5% 外面炭化物付着 覆土中
		B (4.1)			
2	壺 弥生式土器	B (10.1)	底部から胴部にかけての破片。平底で，胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。内面に輪積み痕あり。	砂粒，石英，長石，雲母 普通 黄橙色	P17 20% 覆土中層
		C [7.2]			
3	壺 弥生式土器	B (4.4)	底部片。平底で厚く，胴部は外傾して立ち上がり，縦位のヘラナデ後に附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。底面に木葉痕が有る。	砂粒，石英，長石，雲母 普通 橙色	P18 PL35 5% 覆土下層
		C 7.6			



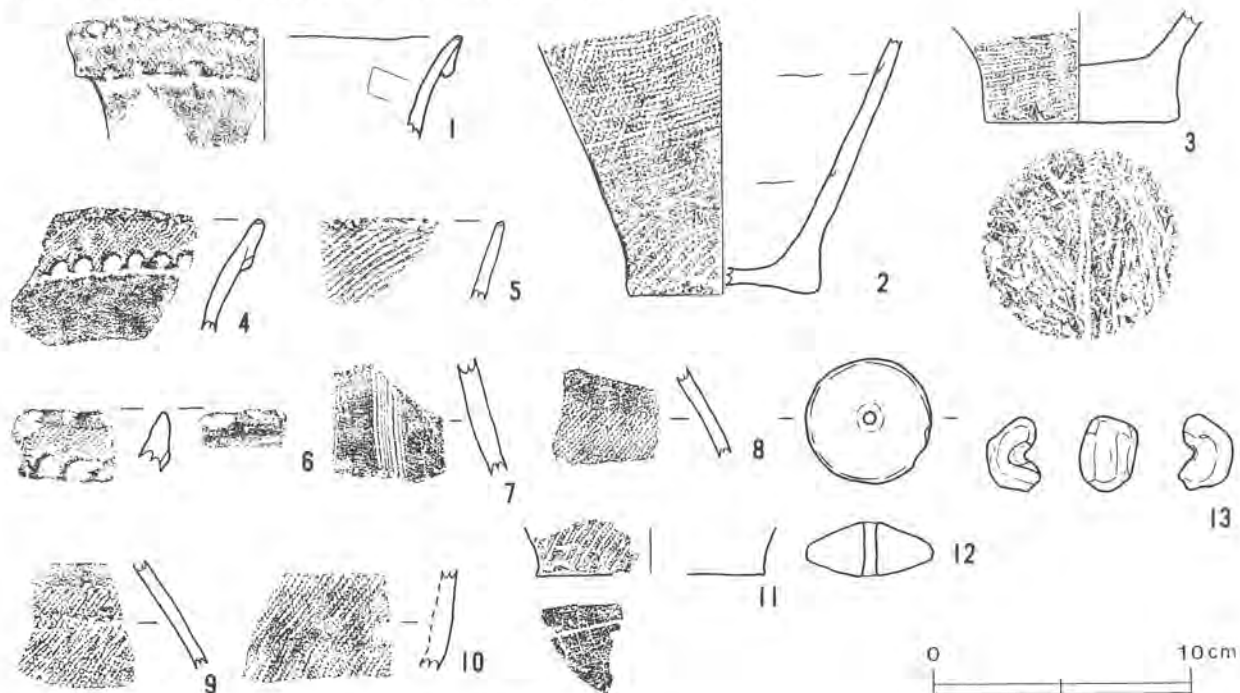
第19図 第8号住居跡実測図

遺物 覆土中から弥生式土器細片が250点ほど出土しているが、接合できるものはほとんどない。また土師器片の混入は見られなかった。第20図1～3は弥生式土器壺片で、1は広口壺の口縁部片で中央部からやや北東壁寄りの覆土中から出土している。2の胴部下半から底部にかけての破片は北コーナー部近くの覆土中層から、3の底部片はP₁付近の覆土下層から出土している。12の紡錘車と13の不明土製品は覆土中からである。アプライト礫は7点(大1, 小6)出土しており、総重量は95.0gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。

第20図4～11は、第8号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4～6は縄文施文の口縁部片で、4・6は複合口縁である。4・6の口縁部下端は棒状施文具により押圧され、口唇部は4が縄文原体、6は棒状施文具によりそれぞれ押圧されている。5は附加条1種(附加2条)の縄文施文の単口縁である。7は頸部片で、歯数7本の櫛歯状施文具により縦区画されている。8・9は頸部から胴部にかけての破片で、頸部

下位を無文帯とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。10の胴部片と11の底部片には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、11の底面には木葉痕がある。



第20図 第8号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第20図12	紡錘車	5.1	5.0	2.2	6.0	43.5	100	覆土	DP3 PL54
13	不明土製品	3.0	2.1	2.2	—	10.8	—	覆土	DP4 PL54

第9号住居跡（第21図）

位置 A地区中央部，H9a₄区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.35m，短軸4.17mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-37°-W。

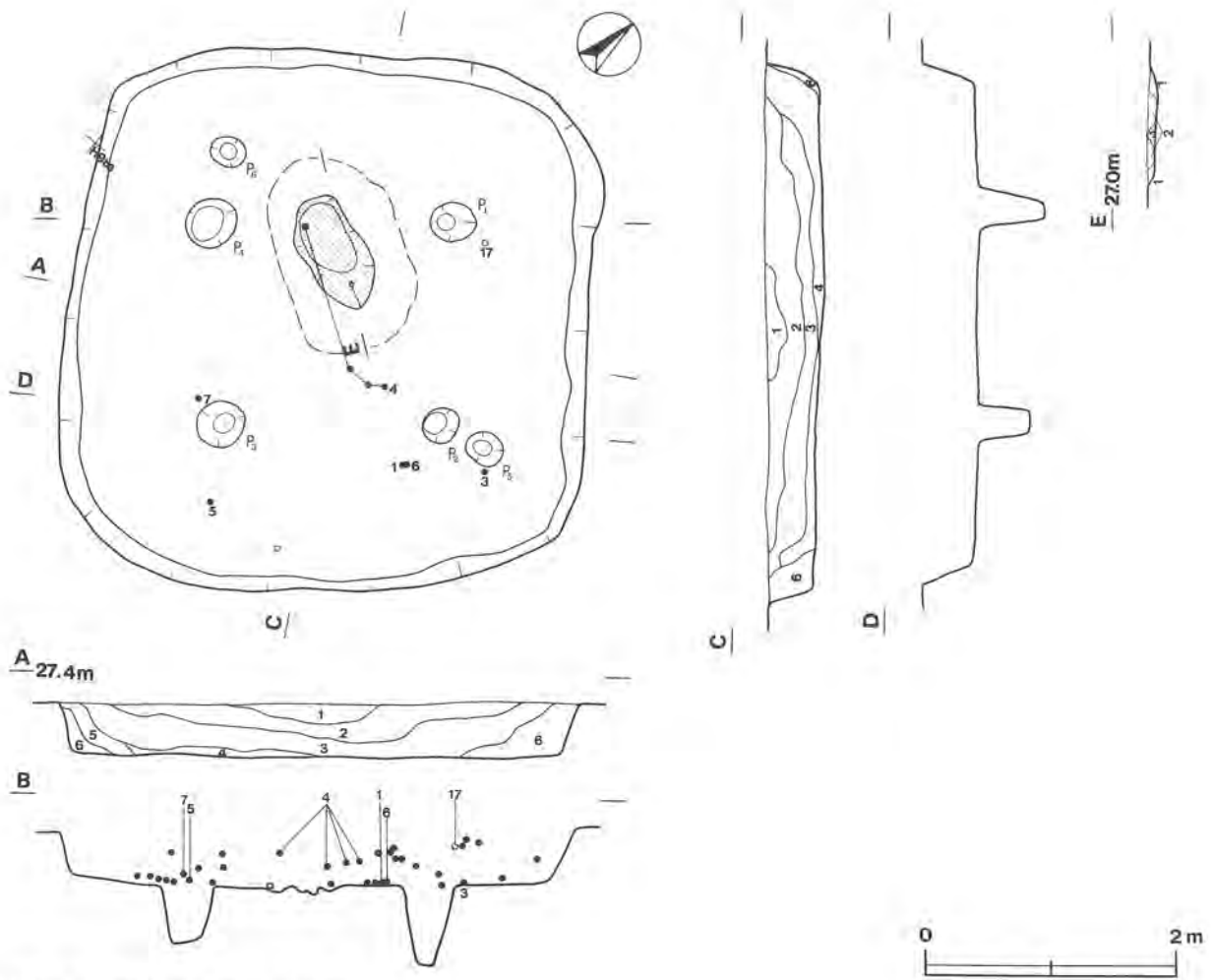
壁 壁高33~44cmで，外傾して立ち上がる。

床 平坦で，中央部はよく踏み固められている。

ピット 6か所。P₁・P₂は，径30~36cmの円形で深さ55~65cmである。P₃・P₄は，長径40~42cm，短径36~40cmの楕円形で，深さ48~50cmである。P₁~P₄は，支柱穴と思われ，結んだ線は方形となる。P₅・P₆は長径28~30cm，短径24~26cmの楕円形で，深さ13~21cmの支柱穴と思われる。出入口施設に伴うと思われるピットは確認されていない。

炉 1か所。中央から北西寄りでP₁とP₄の間にあり，平面形は長径58cm，短径30cmの楕円形で，床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は，第1層が焼土・炭化粒子微量の暗褐色土，第2層はローム粒子微量，焼土粒子少量の褐色土，第3層は焼土粒子少量，炭化粒子微量の暗褐色土である（第21図）。

覆土 6層から成る。壁際には褐色土が堆積し，床面上には暗褐色土が薄く広がっている。中・上層には黒褐



第21図 第9号住居跡実測図

色土がレンズ状に堆積している。

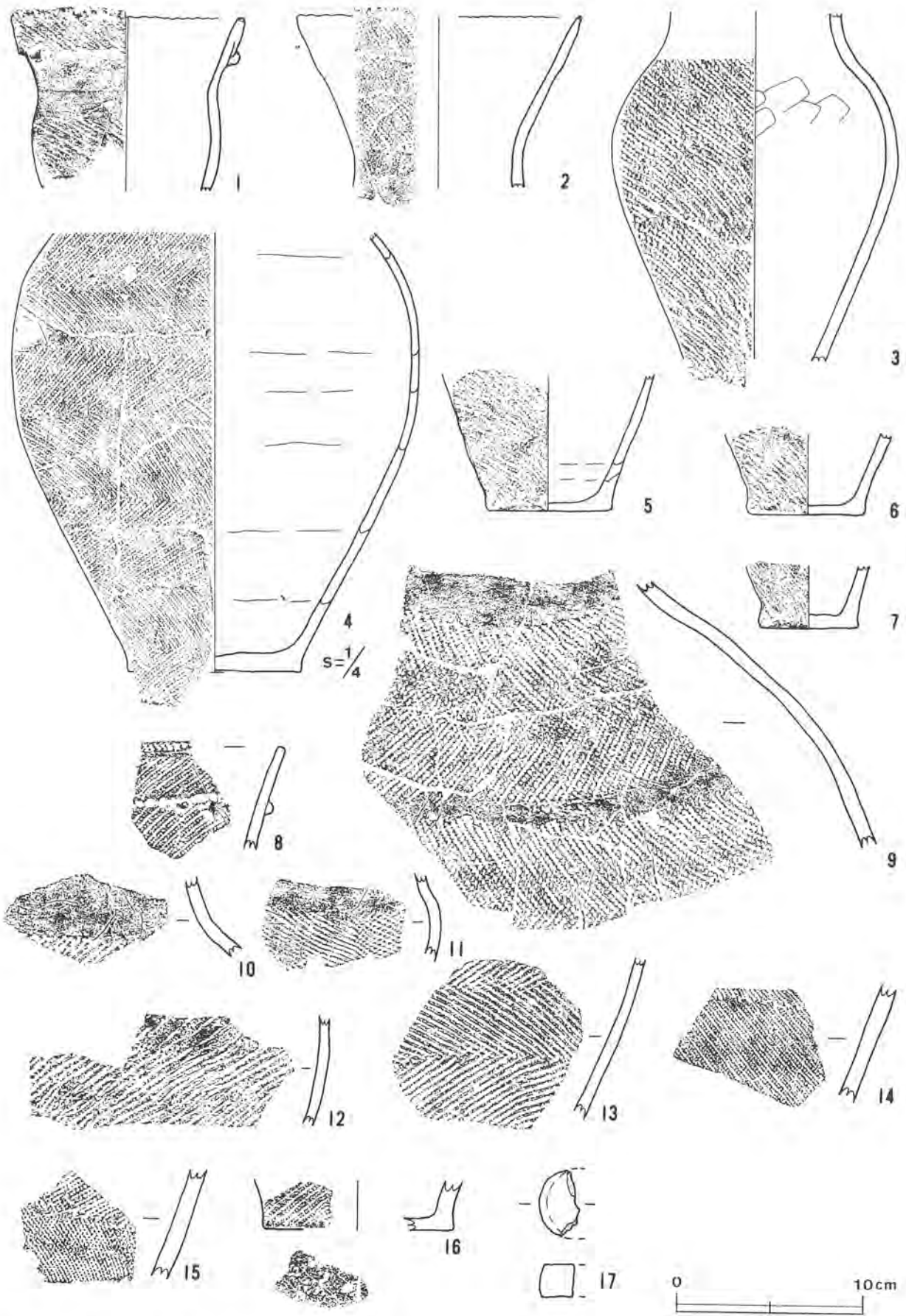
なお、土層は

第1層	黒褐色	ローム粒子微量	第4層	暗褐色	ローム小ブロック微量，ローム粒子少量
第2層	黒褐色	ローム粒子少量	第5層	褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック少量
第3層	暗褐色	ローム粒子少量	第6層	褐色	ローム小ブロック中量 (第21図)

である。流れ込みと思われる弥生式土器片が第2層から多く出土している。

遺物 弥生式土器細片が約370点出土しているが、他の時期の土器片の混入は認められない。遺物は北東壁寄りからの出土が極端に少ないが、その他はほぼ均一である。第22図1～7は弥生式土器壺片で1は口縁部から胴部、2は口縁部から頸部、3～7は胴部下位から底部にかけての破片である。1はP₂付近の床面近くから数点の破片の状態出土している。2は北寄りの覆土中から、3は床面直上から横位で内面を上にした状態で出土している。頸部から胴部が縦割れになった破片で、多分皿のような使い方をしたものと推測でき、これと同一形態の土器片がやはり同様な出土状況で、西原遺跡の第20号住居跡で確認されている。4は中央部の覆土中層から出土しており、接合関係から判断すると東コーナー付近から西方向に投棄されたものと思われる。5はP₃付近の床面直上から出土している。6はP₂付近の床面近くから、7はP₃付近の覆土下層から出土している。17の紡錘車はP₁付近の覆土上層から出土している。アプライト礫は1点(小)出土しており、重量は2.4gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第22图 第9号住居跡出土遺物実測・拓影図

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第22図 1	広口壺 弥生式土器	A 12.4	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部から口縁部は外反する。複合口縁で下端には瘤が貼られているが、単位数は不明である。口唇部には縄文原体による押圧が施されている。頸部を無文帯とし、口縁部と胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 明赤褐色	P19 PL35 40% 内・外面炭化物付着 二次焼成 床面付近
		B (9.4)			
2	広口壺 弥生式土器	A [15.0]	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外傾して立ち上がり頸部を無文帯とする。口縁部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、中位には縄文原体による押圧が2列横位に施され間に瘤が貼られている。口唇部は縄文原体による押圧が施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 黄橙色	P20 5% 覆土中
		B 9.2			
3	壺 弥生式土器	B (25.0)	胴部から頸部下位にかけての破片。胴部は内彎して、頸部は外反して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、頸部は無文帯とする。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 黄橙色	P21 PL35 35% 二次焼成 外面炭化物付着 床面直上
4	壺 弥生式土器	B (31.5)	底部から胴部にかけての破片。平底で、胴部は内彎して立ち上がり最大径を上位に持つ。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され羽状構成をとる。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 褐色	P22 PL35 30% 外面炭化物付着 覆土中層
		C 12.5			
5	壺 弥生式土器	B (7.4)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。内面に輪積み痕がある。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 赤褐色	P23 PL35 15% 外面炭化物付着 二次焼成 床面直上
		C [6.4]			
6	壺 弥生式土器	B (4.4)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 橙色	P24 PL35 10% 二次焼成 床面付近
		C 6.1			
7	壺 弥生式土器	B (3.4)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 明褐色	P25 PL35 10% 二次焼成 覆土下層
		C 5.2			

第22図8～16は、第9号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。8は口縁部片で附加条1種(附加2条)の縄文施文後、下位に縄文原体による押圧を施し、さらに瘤を貼っている。9～11は頸部下位から胴部にかけての破片で、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、9は羽状構成をとっている。12～15は附加条1種(附加2条)の縄文施文の胴部片である。16の底部片は、胴部に附加条1種(附加2条)の縄文が施され、底面には木葉痕がある。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第22図17	紡錘車	(3.6)	(2.1)	(1.8)	—	(13.7)	30	覆土上層	DP5 PL54

第10号住居跡(第23図)

位置 A地区中央部, G9i₃区を中心に確認されている。本跡は南西側壁が調査エリア外に当たるため確認できていない。

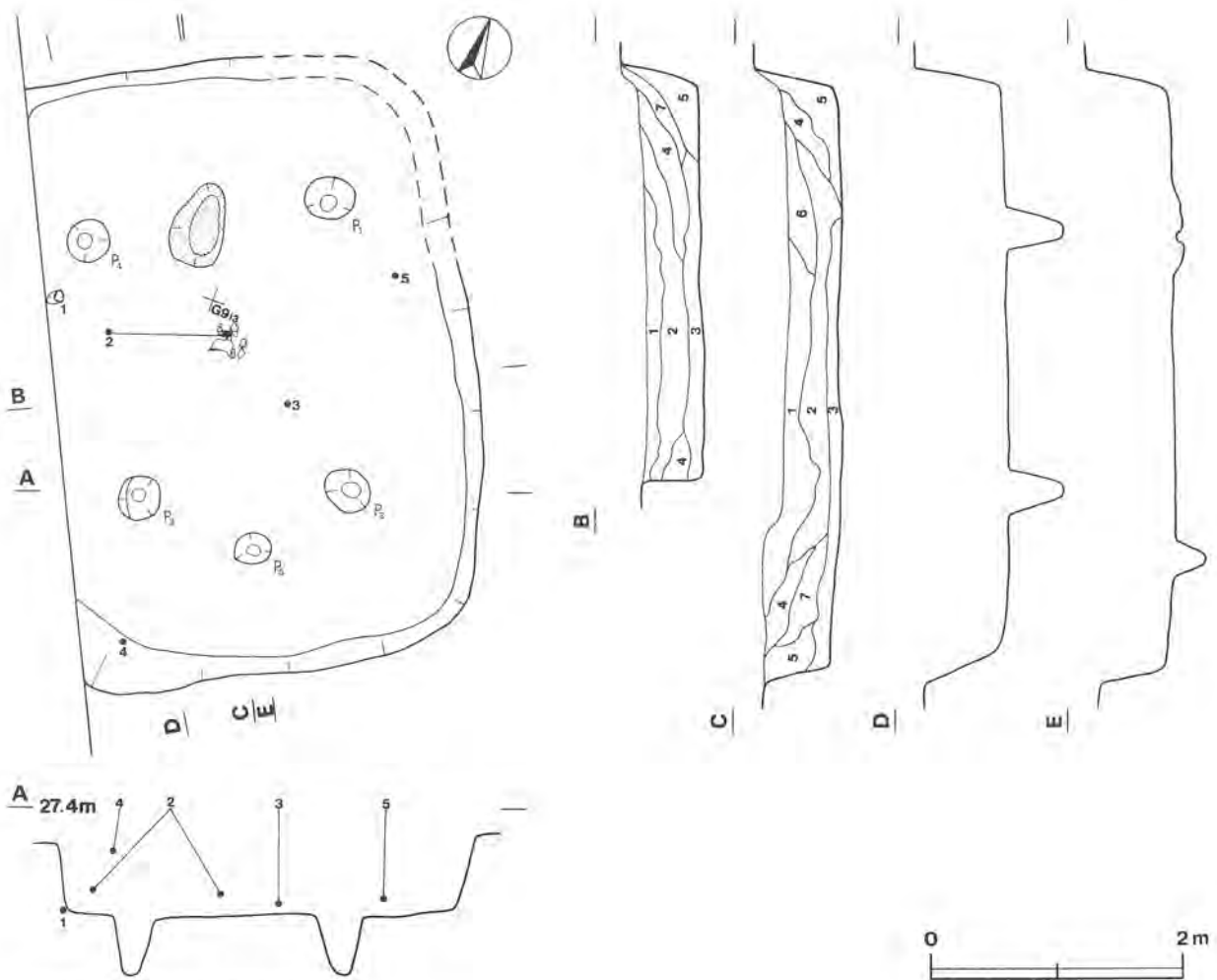
規模と平面形 長軸5.00m, 短軸 [3.38]m の隅丸長方形である。

主軸方向 N-28°-W。

壁 壁高50～68cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、全体によく踏み固められている。

ピット 5か所。P₁・P₂・P₃は、長径38～40cm, 短径32～34cmの楕円形で、深さ47～60cmである。P₄は径36cm



第23図 第10号住居跡実測図

の円形で深さ48cmである。P₁~P₄は、支柱穴と思われる、結んだ線は方形となる。P₅は長径28cm、短径26cmの楕円形で、深さ26cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。中央から北西寄りP₁とP₄の中間にあり、平面形は長径68cm、短径44cmの不整楕円形で、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部がよく焼け赤変硬化している。

覆土 7層から成る。壁際から床面にかけて褐色土が堆積している。中・上層には暗褐色土・黒褐色土がレンズ状に堆積している。

なお、土層は

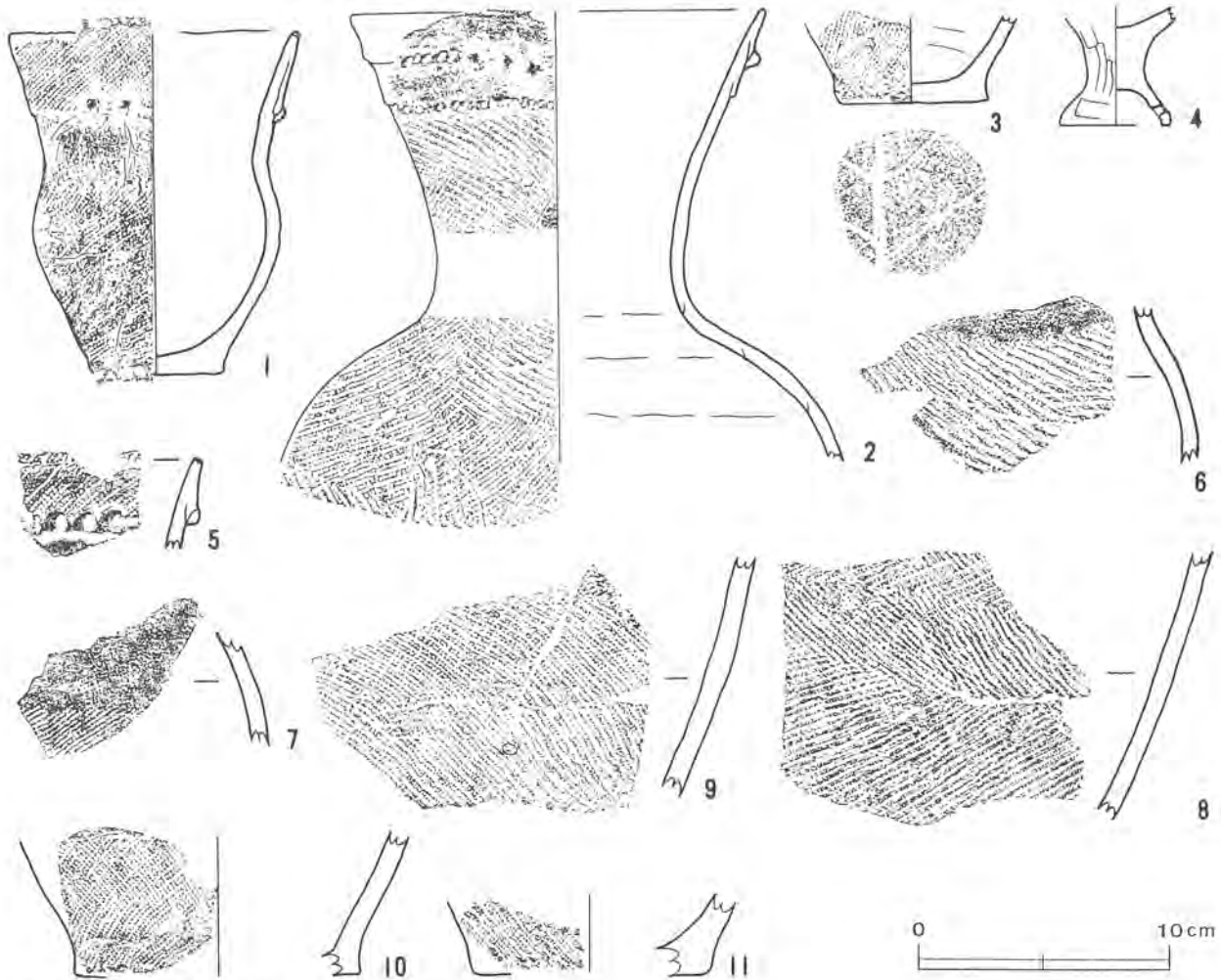
第1層 黒褐色 焼土粒子微量、ロームブロック中量	第5層 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック少量
第2層 暗褐色 焼土粒子微量、炭化小ブロック少量、ロームブロック中量	第6層 黒褐色 焼土ブロック微量、炭化粒子少量、ローム小ブロック中量
第3層 褐色 ローム粒子多量、ロームブロック中量	第7層 褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子中量
第4層 暗褐色 ローム小ブロック中量、焼土粒子微量	

(第23図)

である。流れ込みと思われる弥生式土器片が第3層から多く出土している。

遺物 弥生式土器細片が約150点出土し、胴部片に靱痕のあるものが1点、他に土師器高坏の脚部片にあるものが1点出土している。第24図1~3は弥生式土器壺で、1は広口壺、2は口縁部から胴部、3は底部片である。1はP₄付近の床面直上から横位で、2は中央部付近の覆土中層から破片で、3は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。4は弥生式土器高坏の脚部片で南コーナー部の覆土上層から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第24図 第10号住居跡出土遺物実測・拓影図

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第24図 1	広口壺 弥生式土器	A [11.6] B 14.0 C 5.2	胴部から口縁部にかけての破片。平底で、胴部は内彎して立ち上がり頸部から口縁部は外反する。頸部を無文帯とし、胴部・口縁部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、口唇部は縄文原体により押圧されている。口唇部下端には2個1組の瘤が貼られている。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 黄褐色	P26 PL35 70% 外面炭化物附着 P ₁ 付近床面直上
2	広口壺 弥生式土器	A [16.4] B (18.5)	胴部上位から口縁部にかけての破片。胴部上位は内彎し、頸部から口縁部は外反して立ち上がる。頸部過半を無文帯とし、胴部と頸部上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。2段の複合口縁で、1段目下端には縄文原体により押圧され、さらに3個1組の瘤が貼られ、2段目下端には棒状工具による刺突文が施されている。口唇部には縄文原体による押圧が施されている。内面に輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 橙色	P27 PL35 30% 中央部覆土中層
3	壺 弥生式土器	B (3.5) C 6.0	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。内面は横位にヘラナデされている。底面に木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 明褐色	P28 PL35 5% 中央部覆土下層
4	高坏 弥生式土器	B (4.8) D 4.4 E 2.3	脚部から坏部下位にかけての破片。脚部はやや内彎気味に「ハ」の字状に開き、坏部は外傾して立ち上がる。脚部下端には、径3mmの孔が左右対称に穿たれている。外面はヘラナデされ、坏部にはわずかに縄文が認められる。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 橙色	P29 PL35 40% 両コーナー覆土 上層

第24図5～11は、第10号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5は複合口縁部片で、下端は附加条1種（附加2条）の縄文施文後に縄文原体により押圧され、口唇部にも縄文が施文されている。6・7は頸部下位から胴部にかけての破片で頸部を無文とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。8・9の胴部片と10・11の底部片には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

第11号住居跡（第25図）

位置 A地区中央部、G10e区を中心に確認されている。

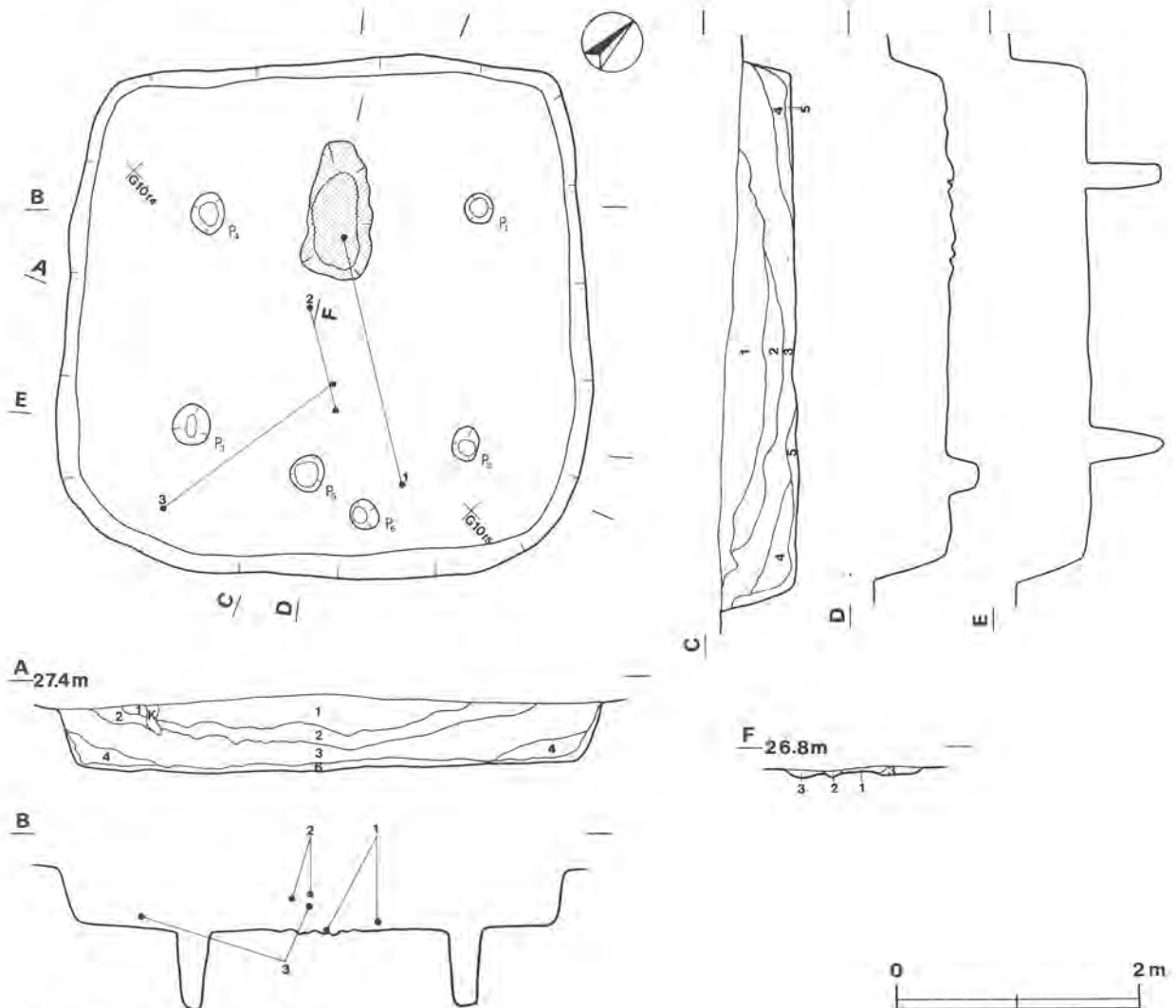
規模と平面形 長軸4.37m、短軸4.32mの隅丸方形である。

主軸方向 N-45°-W。

壁 壁高38～60cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で全体的に固く、特にP₃周辺はよく踏み固められている。

ピット 6か所。P₁～P₃は、径24～33cmの円形で深さ62～64cmである。P₄は、長径36cm、短径28cmの楕円形で、深さ67cmである。P₁～P₄は、主柱穴と思われる、結んだ線は方形となる。P₅は、長径32cm、短径26cmの楕円形で、深さ27cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P₆は、径26cmの円形で深さ22cmの支柱穴と思われるが、出入口施設に伴うピットの可能性も考えられる。



第25図 第11号住居跡実測図

炉 1か所。中央から北西寄りでP₁とP₂の中間にあり、平面形は長径114cm、短径54cmの楕円形で、床を7cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は、第1層が焼土粒子多量、焼土中ブロック中量、炭化粒子少量含む暗赤褐色土、第2層はローム粒子多量、焼土小ブロック少量の暗赤褐色土、第3層は焼土粒子中量、焼土小ブロック少量の褐色土である(第25図)。

覆土 6層から成る。壁際から床面中央にかけ褐色土が堆積し、壁際はさらに暗褐色土が流れ込んでいる。下層には褐色土が堆積し、中層は暗褐色土、上層は黒褐色土となっている。

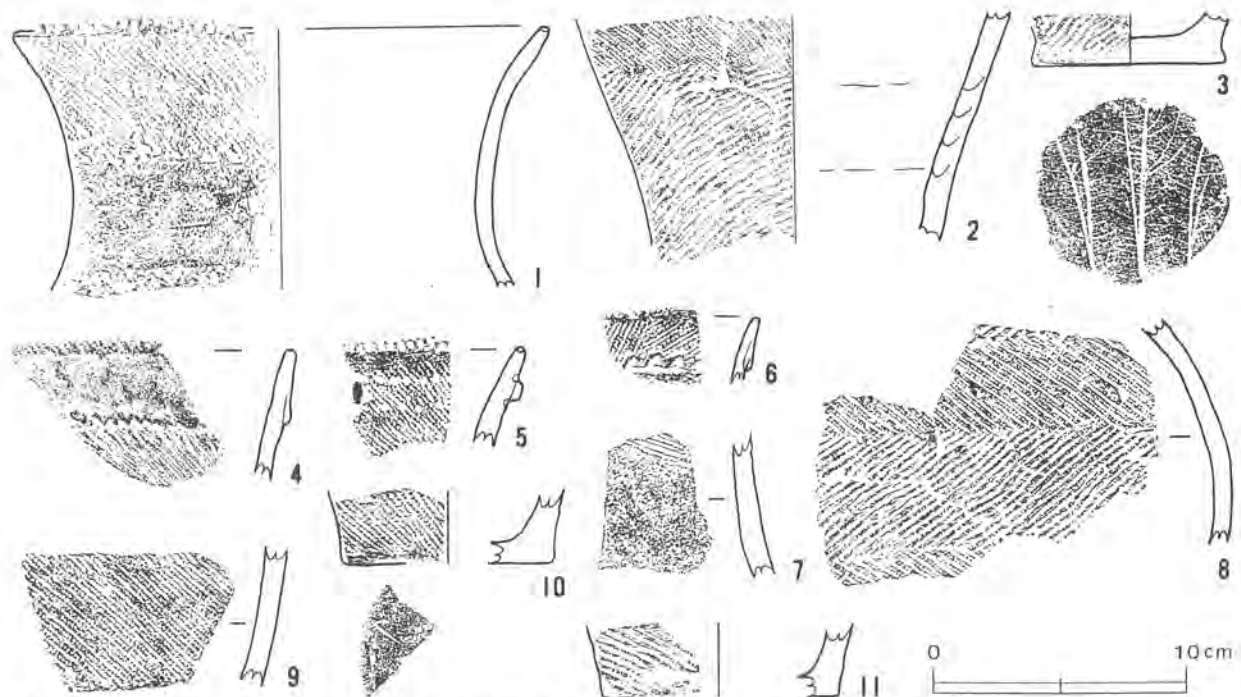
なお、土層は

第1層 黒褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量	第4層 暗褐色 ローム小ブロック微量, ローム粒子微量
第2層 暗褐色 ローム小ブロック微量, 焼土粒子微量, 炭化粒子微量	第5層 褐色 ローム小ブロック微量
第3層 褐色 焼土粒子微量, 炭化粒子微量, ローム粒子少量	第6層 褐色 ローム中ブロック微量 (第25図)

である。弥生式土器片が第1・2層から出土している。

遺物 弥生式土器細片が約190点出土しているが、口縁部・底部片は極端に少ない。第26図1～3は弥生式土器壺で、1の口縁部から頸部にかけての破片は広口壺である。1は炉付近の床面直上の破片と東コーナー付近の覆土第3層の破片とが接合している。2の胴部片は中央部の覆土中層から出土している破片が接合したものである。3の底部片は南コーナー付近の覆土下層と中央部覆土中層から出土している破片が接合している。1～3は投棄された土器と思われる。アブライト礫は3点(中1, 小2)出土しており、総重量は45.7gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第26図 第11号住居跡出土遺物実測・拓影図

第26図4～11は、第11号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4～6は附加条1種(附加2条)の縄文施文の口縁部片である。4・6は複合口縁で口唇部にも縄文が施され、口縁部下端にはどちらも棒状施文具により押圧されている。6は縄文原体による押圧が口唇部と口縁部に施されており、口縁部では2条周回させ、その間に瘤が貼られている。7の頸部片にはわずかであるが横位の櫛描文が認められる。8・9の胴部片と10・11の底部片には附加条1種(附加2条)の縄文が施されており、8は羽状構成をとっている。10

の底面には木葉痕がある。

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・焼成・色調	備 考
第26図 1	広口壺 弥生式土器	A [20.6] B (10.4)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外反して立ち上がる。頸部は無文帯とし、口縁部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。口唇部は縄文原体により押圧されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 赤褐色	P31 PL35 5% 炉付近床面直上
2	壺 弥生式土器	B (9.2)	胴部下半片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。内面に輪積み痕あり。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 黄橙色	P32 5% 中央部覆土中層
3	壺 弥生式土器	B (2.1) C 7.7	底部片。平底。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面に木葉痕あり。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 橙色	P33 5% 二次焼成 内面炭化物付着 南コーナー覆土下層

第12号住居跡(第27図)

位置 A地区中央部, G10f₅区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸7.60m, 短軸6.00mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-38°-W。

壁 壁高40~54cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, あまり踏み固められていない。

ピット 8か所。P₂~P₄は, 長径42~48cm, 短径36~42cmの楕円形で深さ65~67cmである。P₁・P₈は, 径34~38cmの円形で, 深さ39~72cmである。P₁~P₄は, 主柱穴と思われる, 結んだ線は方形となる。P₅~P₇は長径20~52cm, 短径18~36cmの楕円形で, 深さ22~43cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。中央から北西寄りにあり, 平面形は長径136cm, 短径112cmの不整楕円形で, 床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は, 中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は, 第1層が焼土粒子微量含む褐色土, 第2層は焼土粒子微量含む黒褐色土, 第3層は焼土粒子微量, 焼土小ブロック微量の暗褐色土である(第27図)。

覆土 10層から成る。南東壁際に暗褐色土が堆積し, 他の壁際と床面には褐色土が堆積している。中央部床面から上層にかけて暗褐色土, 黒褐色土, 黒色土, 極暗褐色土が複雑に重なり合いながら堆積しており, 人為堆積と思われる。流れ込みと思われる弥生式土器片が第2・3層から少量出土している。

なお, 土層は

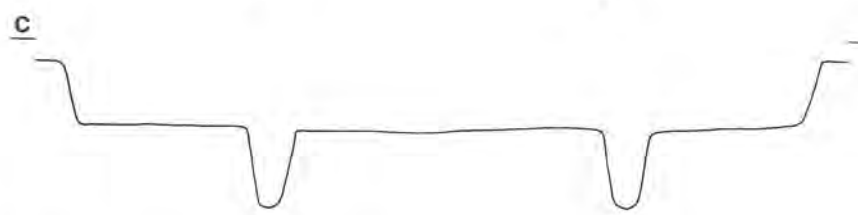
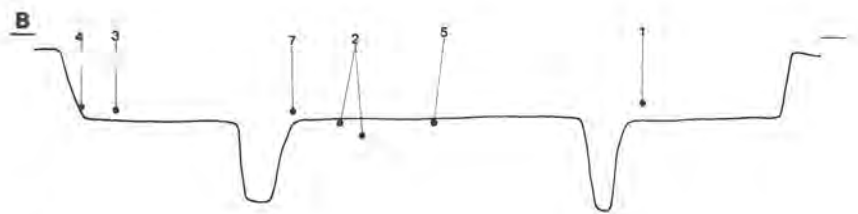
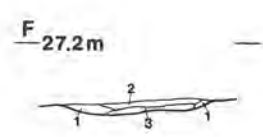
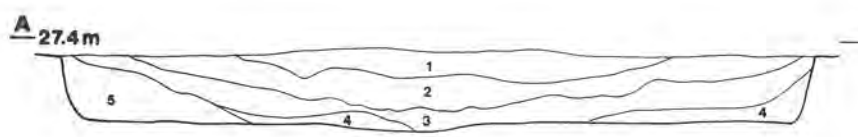
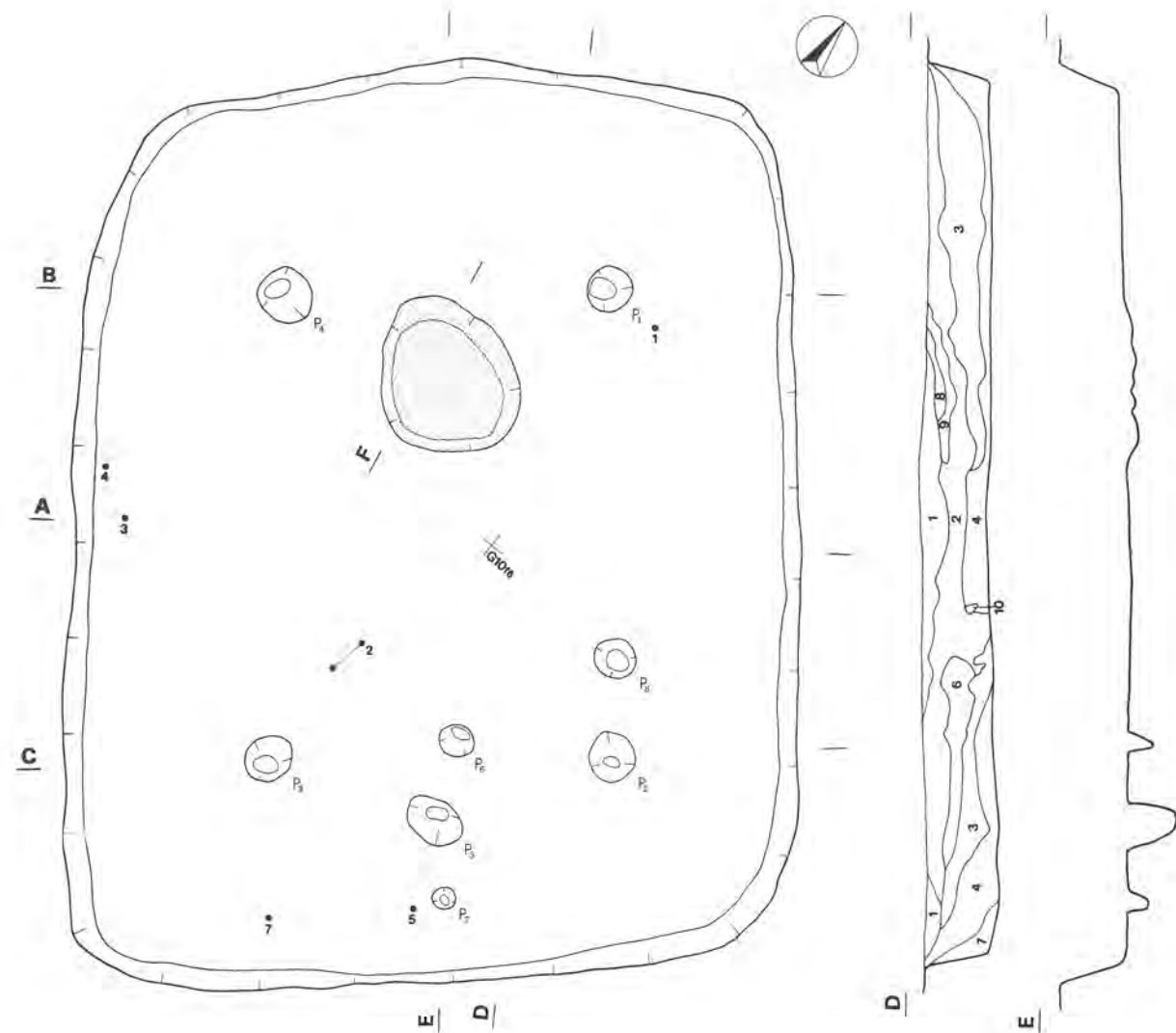
第1層 黒褐色 焼土・ローム粒子微量	第6層 極暗褐色 ローム・焼土粒子微量
第2層 黒色 ローム少量, 焼土粒子微量	第7層 暗褐色 ローム小ブロック微量
第3層 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量	第8層 黒褐色 ローム粒子微量
第4層 褐色 ローム中ブロック微量, ローム粒子少量	第9層 黒褐色 焼土粒子微量
第5層 褐色 ローム小ブロック微量	第10層 褐色 ローム粒子中量

(第27図)

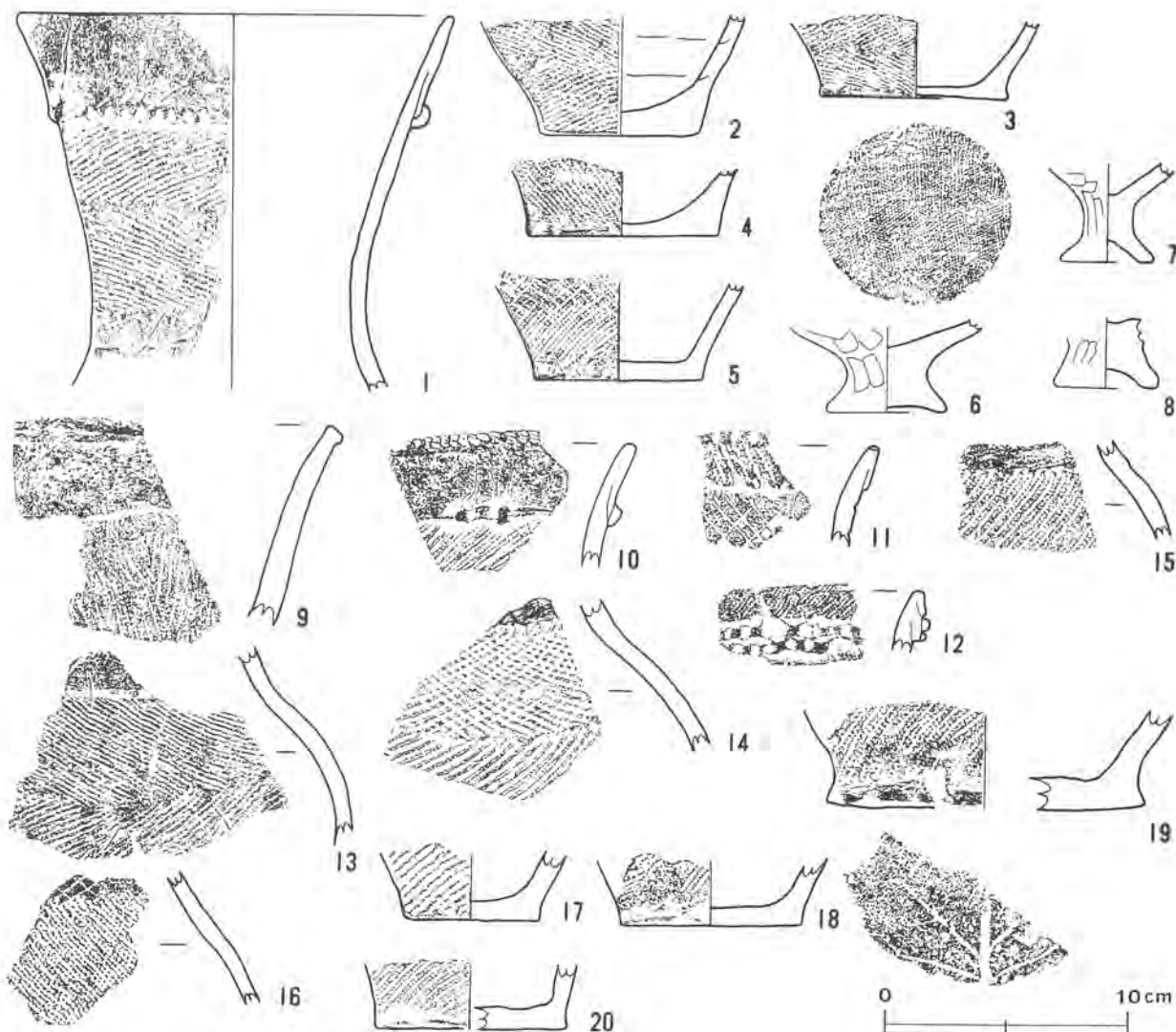
である。

遺物 弥生式土器細片が約700点出土しているが, 土師器片の混入は見られない。第28図1~5は弥生式土器壺で, 1の口縁部から頸部はP₁近くの覆土下層からつぶれた状態で出土している。2~5の胴部下位から底部は, 2が住居跡中央部の床面直上から破片で, 3・4は南西壁中央部付近の覆土第5層から, 5はP₁近くの床面近くからそれぞれ出土している。6~8の弥生式土器高坏の脚部は, 6・8が覆土中から, 7は南コーナー付近の覆土下層からそれぞれ出土している。アプライト礫は5点(中1, 小4)出土しており, 総重量は93.3gである。

所見 本跡は, 出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第27图 第12号住居跡実測图



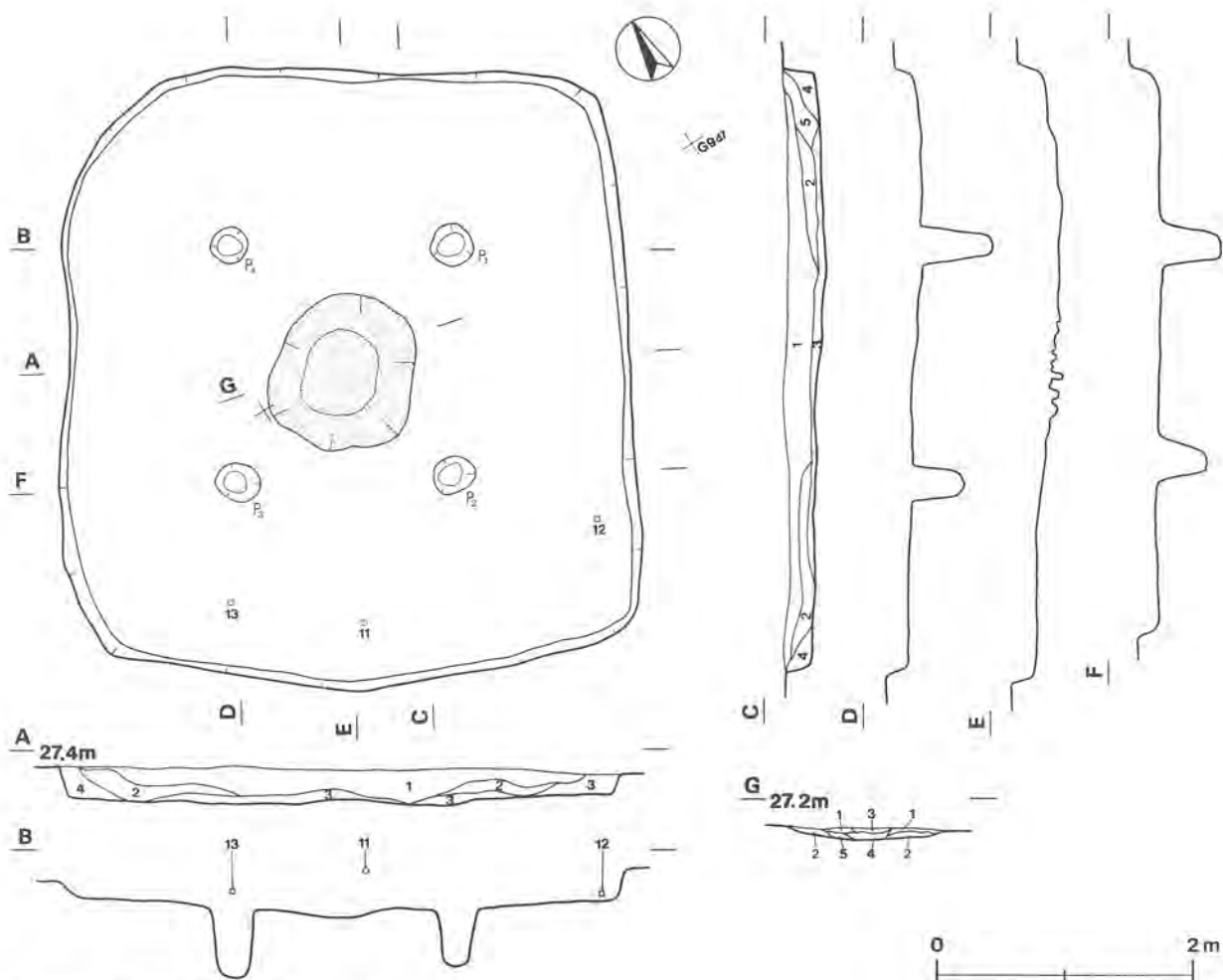
第28図 第12号住居跡出土遺物実測・拓影図

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第28図 1	広口壺 弥生式土器	A 17.8 B (15.7)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外傾して立ち上がる。複合口縁で、頸部下半と口縁部を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。口縁部下端は、縄文原体による押圧が施され、さらに2個1組の瘤が6単位にわたり貼られている。口唇部には、縄文原体による押圧が施されている。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 明褐色	P34 PL36 30% P ₁ 付近覆土下層
2	壺 弥生式土器	B (5.1) C 6.6	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 橙色	P35 PL36 10% 中央部床面直上
3	壺 弥生式土器	B (3.2) C 7.7	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。底面には布目痕がある。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 灰黄褐色	P36 PL36 5% 内外面炭化物付着 覆土第5層
4	壺 弥生式土器	B (2.8) C 7.8	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 にぶい褐色	P37 PL36 5% 内面炭化物付着 覆土第5層
5	壺 弥生式土器	B (4.1) C 7.0	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外反して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 にぶい黄褐色	P38 PL36 5% 内面炭化物付着 P ₂ の床面付近

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
6	高坏 弥生式土器	B (3.9) C 4.9 E 2.0	脚部から坏部下位にかけての破片。脚部は短く「ハ」の字状に大きく開き、坏部はやや内彎気味に立ち上がる。外面はヘラケズリされている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 橙色	P39 PL36 30% 覆土中
7	高坏 弥生式土器	B (4.1) D 3.4 E 2.5	脚部から坏部下位にかけての破片。脚部は短く「ハ」の字状に大きく開き、坏部はやや内彎気味に立ち上がる。外面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい黄橙色	P40 30% 覆土下層
8	高坏 弥生式土器	B (1.9) D 3.1 E 1.7	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。外面はヘラケズリ後、ナデられている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい黄橙色	P41 20% 覆土中

第28図9～20は、第12号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。9～12は口縁部片で10～12は複合口縁である。9は単口縁で口唇部と胴部には縄文が施されている。10は無文の口縁で下端には2個1組の瘤が貼られ、口唇部と頸部には縄文が施されている。11の口縁部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、口唇部は竹管状施文具により刺突文が、頸部にはヘラ状施文具による格子目文がある。12は口縁部と口唇部に附加条1種（附加2条）の縄文が施され、さらに口縁部下端には2本の隆帯が貼られそれぞれキザミ目が施されている。13～16は頸部から胴部にかけての破片で、16の頸部にはわずかではあるが格子目文がみとめられるが、他のものは無文となっている。胴部にはいずれも附加条1種（附加2条）の縄文が施され、13・14では羽状構成をとる。17～20は底部片でどれも胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。19の底面には木葉痕がある。



第29図 第13号住居跡実測図

第13号住居跡 (第29図)

位置 A地区中央部, G9d区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.00m, 短軸4.45m の隅丸長方形である。

主軸方向 N-31°-E。

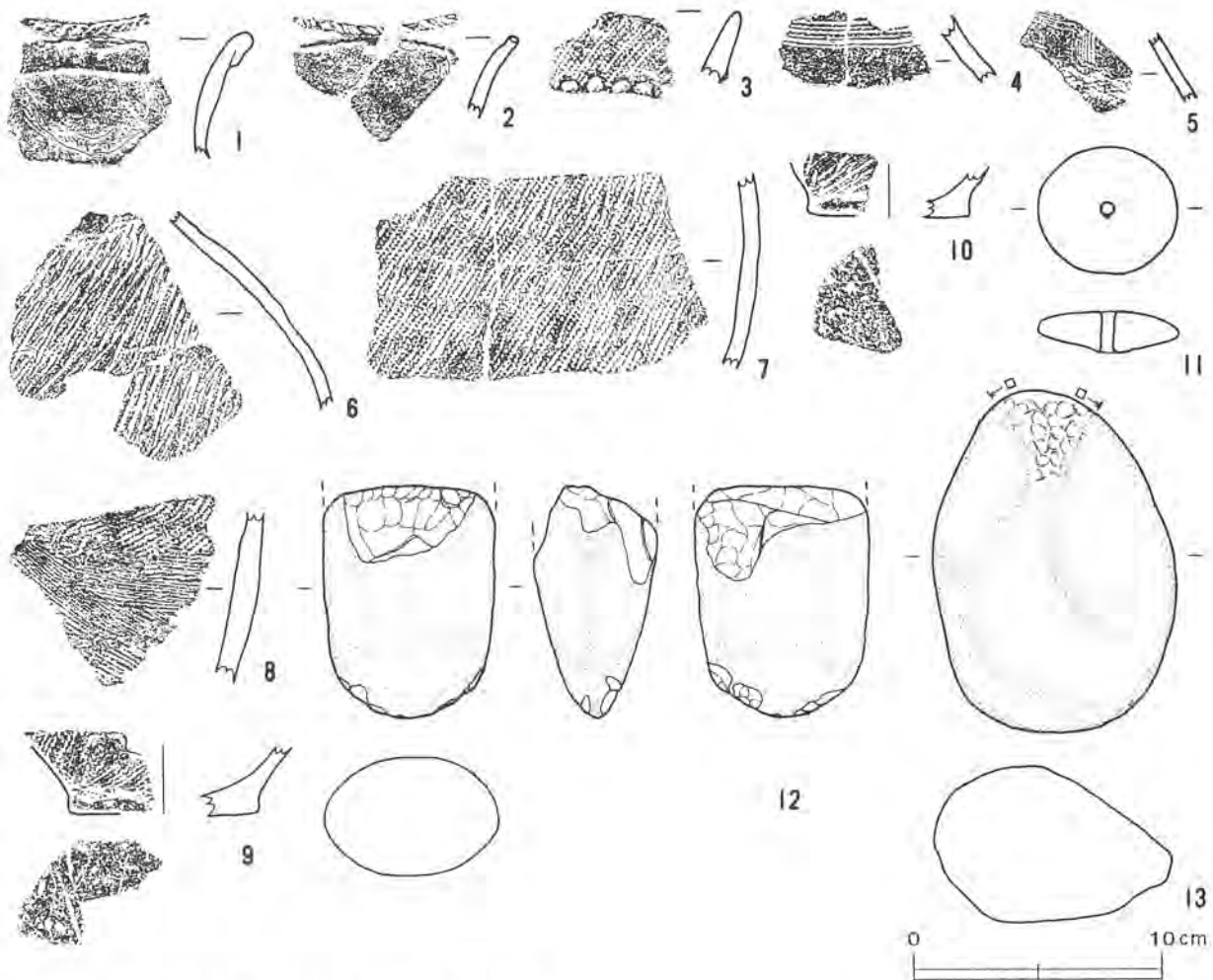
壁 壁高10~32cmで, 外傾して立ち上がる。

床 やや凹凸はあるがほぼ平坦で, 炉の周辺がよく踏み固められている。炉の北側周辺は緩やかに傾斜し, 北東壁側がやや低くなっている。

ピット 4か所。P₁・P₄は, 径30~34cmの円形で, 深さ46~56cmである。P₂・P₃は, 長径34~36cm, 短径30cmの楕円形で深さ40~50cmである。P₁~P₄は, 支柱穴と思われ, 結んだ線は方形となる。出入口施設に伴うと思われるピットは確認されていない。

炉 1か所。ほぼ中央にあり, 平面形は長径132cm, 短径108cmの楕円形で, 床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は, 中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は, 第1層がローム粒子少量, 焼土粒子微量の暗褐色土, 第2層は炭化・焼土粒子微量含む褐色土, 第3層は焼土粒子少量含む褐色土, 第4層は焼土粒子中量, 焼土小ブロック微量の赤褐色土, 第5層は焼土粒子微量, ローム粒子少量の暗褐色土である (第29図)。

覆土 5層から成る。壁際から床面全体にかけて褐色土が薄く堆積し, その上を暗褐色土が厚く堆積している。



第30図 第13号住居跡出土遺物実測・拓影図

なお、土層は

第1層	暗褐色	ローム粒子微量, 焼土粒子微量	第4層	褐色	ローム粒子微量, ローム中ブロック微量
第2層	褐色	ローム粒子微量, 焼土粒子微量, ローム小ブロック微量	第5層	褐色	ローム小ブロック微量
第3層	褐色	ローム粒子微量, 焼土粒子微量, ローム中ブロック少量			(第29図)

である。弥生式土器片が第3・4層から多めに出土している。

遺物 弥生式土器細片が約200点出土しているが実測可能なものはない。第30図11の紡錘車は南西壁中央付近の覆土上層から出土している。12の磨製石斧は南コーナー付近の覆土下層から、13の敲石は石皿の破片を再利用したもので西コーナー近くの覆土中層から出土している。アプライト礫は10点(大2, 小8)出土しており、総重量は209.2gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。

第30図1～10は、第13号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1～3は口縁部片で1・2の口唇部には縄文が施されている。3の口縁部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、下端には棒状施文具により押圧されている。4・5は頸部片でどちらも櫛歯数6本の櫛描文が施されている。6～8は胴部片で、6・7は附加条1種(附加2条)の縄文が、8は単節縄文と撚糸文が施されている。9・10の底部片は胴部に附加条1種(附加2条)の縄文が施され、底面にはどちらも木葉痕がある。

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第30図11	紡錘車	5.1	5.3	1.7	6.0	40.9	100	覆土上層	DP6 PL54

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第30図12	磨製石斧	(9.3)	7.0	5.0	(480.4)	グリーンタフ	覆土下層	Q10 PL61
13	敲石	13.7	9.9	6.2	1031.6	砂岩	覆土中層	Q11石皿の転用か

第14号住居跡(第31図)

位置 A地区中央部, G10d₈区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.35m, 短軸5.67mの隅丸長方形である。

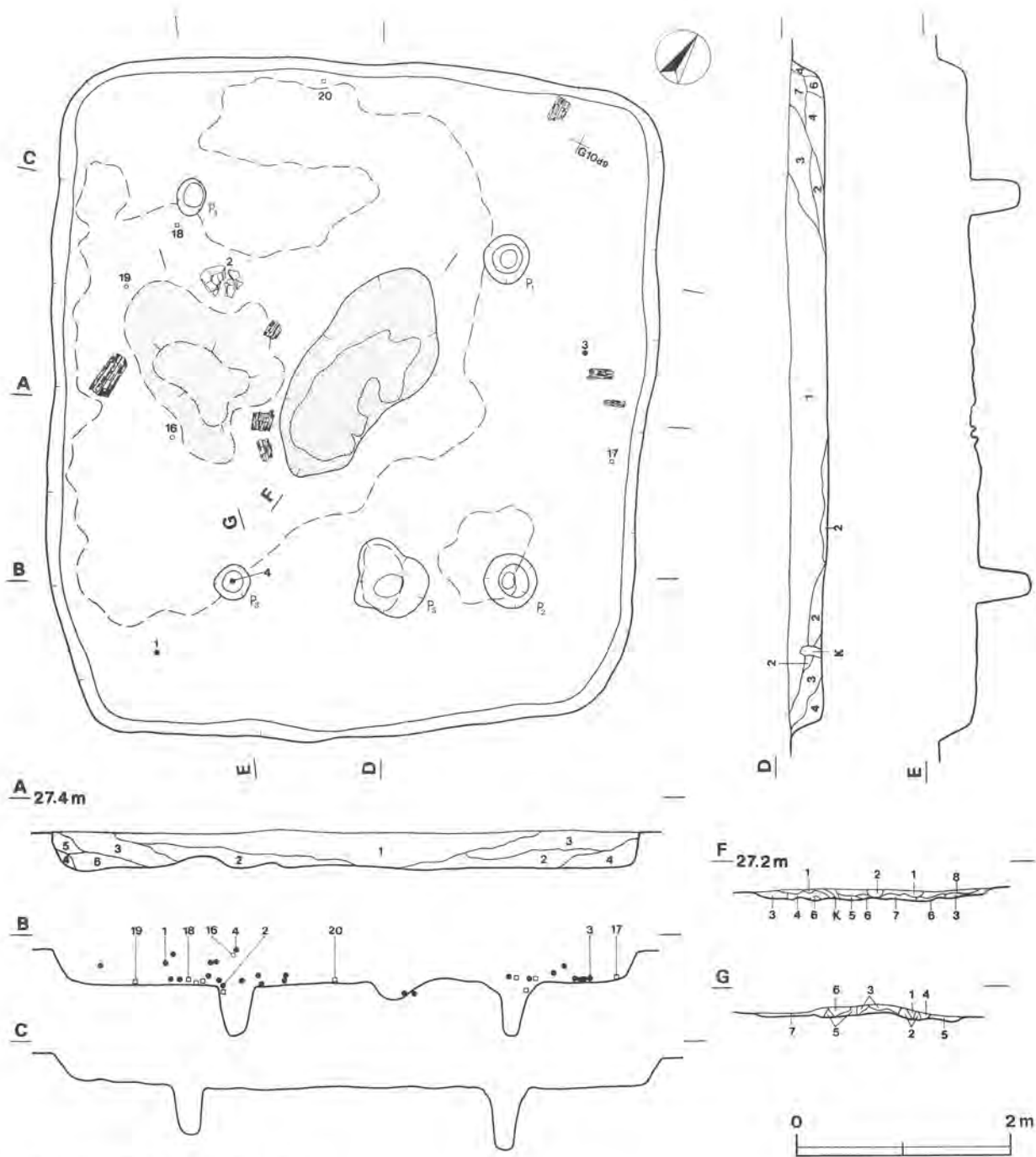
主軸方向 N-27°-W。

壁 壁高24~38cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央部から南東壁にかけてはよく踏み固められている。

ピット 5か所。P₁・P₂・P₃は、径32~50cmの円形で深さ49~60cmである。P₄は、長径34cm, 短径28cmの楕円形で、深さ47cmである。P₁~P₄は、支柱穴と思われ、結んだ線は方形となる。P₅は長径78cm, 短径58cmの不定形で、深さ19cmと浅い。出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。中央にあり、平面形は長径226cm, 短径106cmの長楕円形で、床を8cm掘り込んだ地床炉である。長径方向はP₁とP₃を結んだ直線上にあり、大形の炉である。炉床は、全体に赤変硬化している。覆土は、第1層が焼土小ブロック少量の暗褐色土、第2層はローム中ブロック少量, 焼土粒子・焼土小ブロック少量含む褐色土、第3層は焼土粒子・焼土小ブロック多量の暗赤褐色土、第4層は焼土粒子中量の暗褐色土、第5層は焼土粒子少量の明褐色土、第6層は焼土粒子中量, ローム中ブロック微量の暗赤褐色土、第7層は焼土粒子少



第31図 第14号住居跡実測図

量の褐色土である（第31図）。

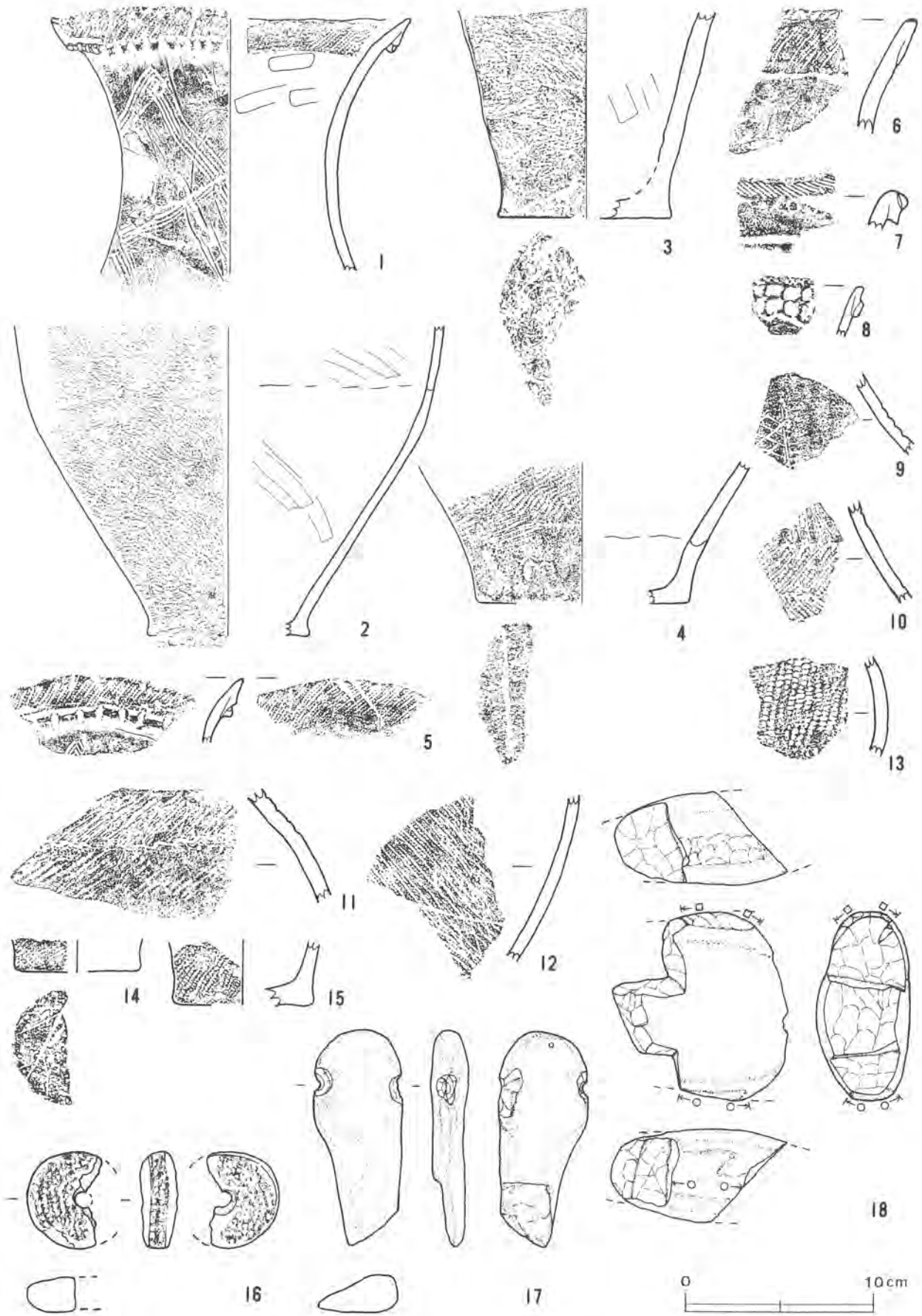
覆土 7層から成る。壁際には褐色土・暗褐色土が堆積し、床面上には暗褐色土が広がっており上層まで達している。ほぼ各層に焼土粒子や炭化物が含まれている。

なお、土層は

第1層 暗褐色	ロームブロック少量, ローム粒子少量, 焼土粒子少量, 炭化物少量	第4層 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子中量
第2層 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量, 炭化物微量	第5層 褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子少量, 炭化物少量
第3層 褐色	ロームブロック中量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量, 炭化物微量	第6層 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子少量, 炭化物少量
		第7層 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量

(第31図)

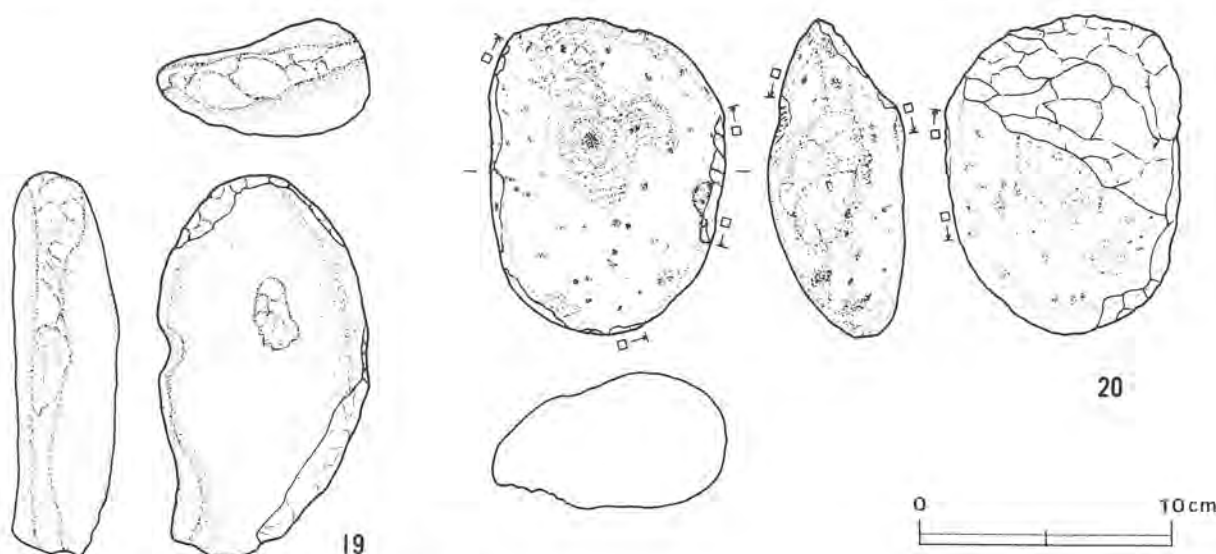
である。第2～4層中から弥生式土器片が多く出土している。



第32图 第14号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

遺物 覆土中から弥生式土器細片が約540点と多量に出土し、その内半数は底部片であるのに対し口縁部片は10点と極端に少ないのが特徴である。第32図1～4は弥生式土器壺片で、1は広口壺の口縁部から頸部で南コーナー部の覆土第1層から破片で、2の胴部下半から底部はP₁付近の床面直上から潰れた状態で、3の胴部下半から底部は北東壁中央部付近の覆土下層から、4の胴部下位から底部はP₂付近の覆土上層からそれぞれ出土している。16の紡錘車片は南西壁中央部付近の覆土上層から出土している。17の石器は北東壁中央部付近の覆土上層から、18の磨石はP₁付近の覆土下層から出土している。19の敲石は凹石として使われていたものの破片を再利用したものと思われ、P₁付近の床面直上から出土している。20の凹石は北西壁中央部壁際の床面直上から出土している。また、アブライト礫は18点（大1，中6，小11）出土しており、総重量は429.1gで、床面直上からのものも多い。

所見 本跡は、炭化材と焼土の広がり範囲から判断して、廃絶後少し経過した後に焼却したものと思われる。特に南東壁側の床面が焼けており、焼土粒子が西側に集中していることから、何らかの理由により西側に廃材が集中していた可能性がある。本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。



第33図 第14号住居跡出土遺物実測図(2)

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第32図 1	広口壺 弥生式土器	A [18.9] B (13.9)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外反して立ち上がる。複合口縁で下端に隆帯が貼られ、棒状施文具によるキザミ目が施されている。頸部には、4本櫛歯による大振りの格子目文が施されている。口縁部内・外面と口唇部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 橙色	P42 PL36 15% 覆土第1層
2	壺 弥生式土器	B (22.3) C [11.6]	底部から胴部にかけての破片。底部は平底で外傾して立ち上がる。胴部には無節の縄文が施されている。内面には斜位のヘラナデ、輪積み痕がある。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 橙色	P43 PL36 20% P ₁ 付近床面直上
3	壺 弥生式土器	B (11.1) C [9.0]	底部から胴部下半にかけての破片。底部は平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には絡条体による燃糸文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 にぶい橙色	P44 5% 覆土下層
4	壺 弥生式土器	B (7.7) C [11.2]	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外反して立ち上がる。胴部には単節縄文と附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 にぶい黄橙色	P45 PL36 5% 覆土上層

第32図5～15は、第14号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5～8は複合口縁で、6～8は口唇部に縄文が施されている。5は口縁部に附加条1種（附加2条）の縄文が、下端にはキザミ目が施され、頸部には櫛歯状施文具による山形文が施されている。口縁部内面にも外面と同じ附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。8の口縁部には棒状施文具による押圧が2条周回している。9・10は頸部片で、ヘラ状施文具による格子目文が施されている。11～13は縄文施文の胴部片で、原体が13は単節縄文、12は附加条1種（附加2条）の縄文、11は摩滅が激しく不明である。14・15は底部片で胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、14の底面には木葉痕がある。

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第32図16	紡錘車	5.2	(3.9)	1.9	7.0	(35.6)	60	覆土上層	DP7 PL54

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第32図17	不明石器	11.5	4.6	2.1	114.4	硬砂岩	覆土上層	Q12穂摘具の可能性有り PL62
18	磨石	(10.2)	(9.1)	(5.0)	(480.7)	硬砂岩	覆土下層	Q13石斧の可能性有り、破片
第33図19	敲石	(15.1)	(4.3)	(4.6)	(690.6)	硬砂岩	床面直上	Q14凹石兼用、一部欠損
20	凹石	(12.6)	9.4	(5.4)	(806.3)	グリーンタフ	床面直上	Q15敲石兼用、一部欠損

第15号住居跡 (第34図)

位置 A地区北部、G8d₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.10m、短軸3.35mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-52°-W。

壁 壁高46～55cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、全体によく踏み固められている。

ピット 5か所。P₁は径30cmの円形で深さ65cmである。P₂・P₃・P₄は、長径30～38cm、短径26～28cmの楕円形で、深さ62～65cmである。P₁～P₄は、支柱穴と思われ、結んだ線は方形となる。P₅は径30cmの円形で、深さ13cmの出入り口施設に伴うピットと思われ、南東壁に対し直角方向に傾斜している。傾斜角度は58°で、梯子状の木製品が付設してあったと推測される。

炉 1か所。中央から北西寄りP₁とP₄の中間にあり、平面形は長径88cm、短径62cmの楕円形で、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は、第1層は焼土・ローム粒子少量、炭化粒子微量の黒褐色土、第2層はロームブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量のいぼ褐色土である。

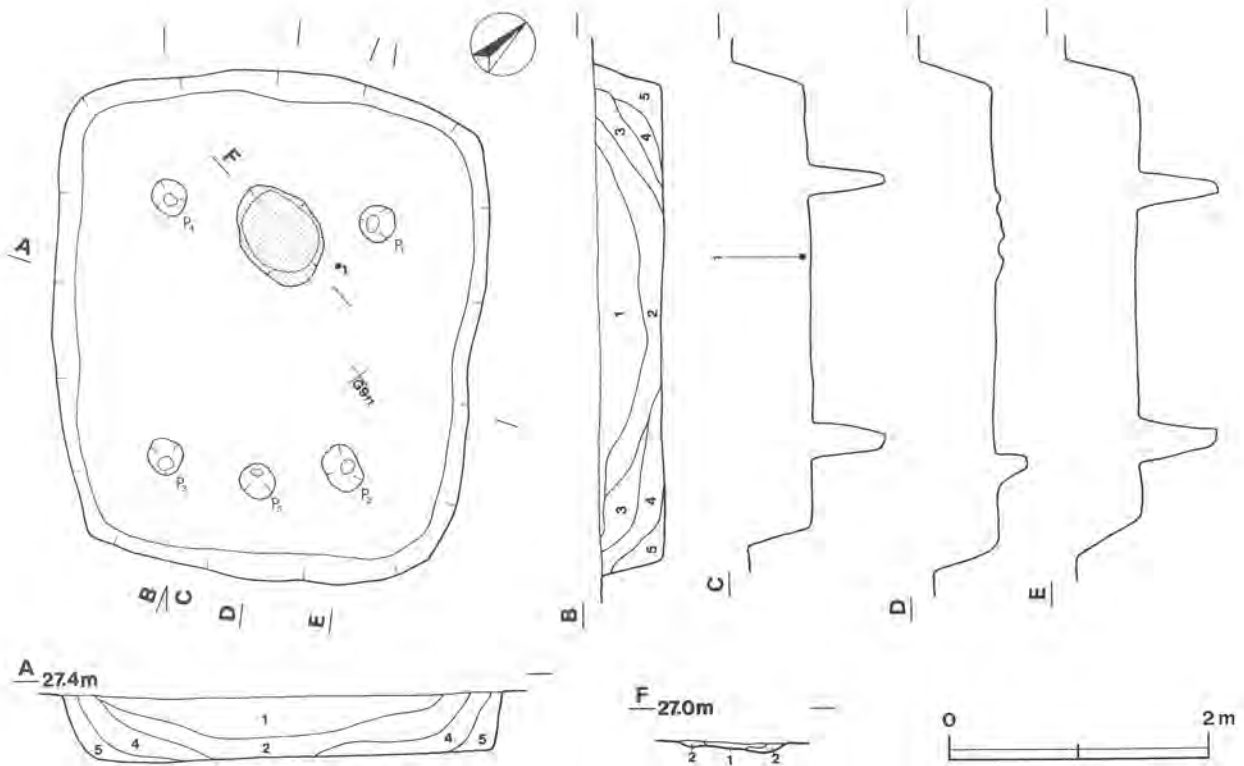
覆土 5層から成り、自然堆積と思われる。壁際に褐色土が、中央部には暗褐色土がレンズ状に堆積している。

なお、土層は

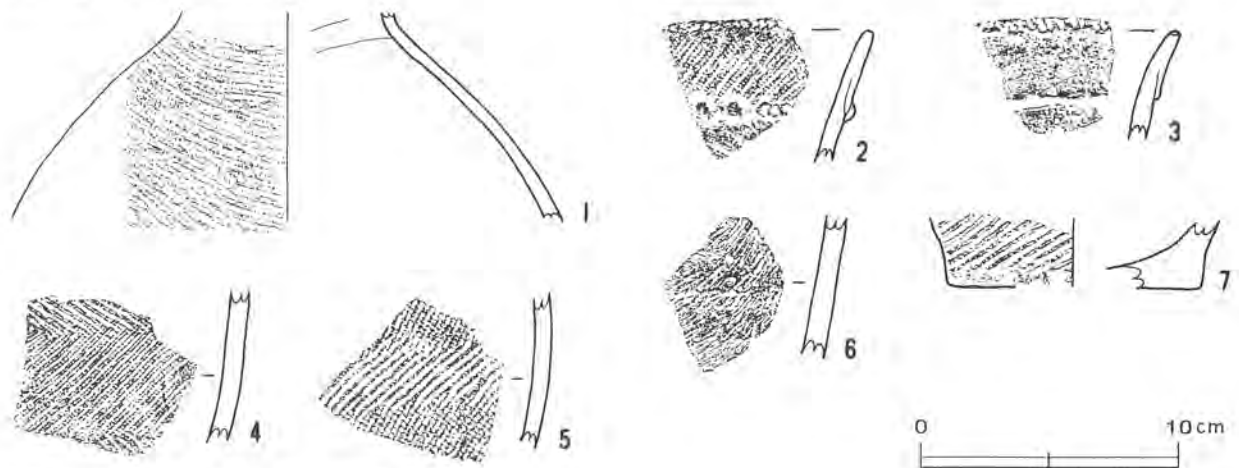
第1層 暗褐色 焼土粒子微量、ローム粒子少量	第4層 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量、炭化粒子微量
第2層 暗褐色 焼土粒子微量、炭化粒子微量、ロームブロック微量	第5層 褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子少量
第3層 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量	(第34図)

である。流れ込みと思われる弥生式土器片が第1・2層から出土している。

遺物 弥生式土器細片が約120点覆土中から出土しているが、土師器の混入は認められない。炉床直上からも弥生式土器壺細片が3点出土している。第35図1の弥生式土器壺胴部上半は炉付近の床面近くから出土している。アプライト礫は1点(小)出土しており、重量は2.7gである。



第34図 第15号住居跡実測図



第35図 第15号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第35図 1	壺 弥生式土器	B (8.4)	胴部上位から頸部下端にかけての破片。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 にぶい黄橙色	P46 5% 床面付近

第35図2～7は、第15号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2・3は複合口縁でいずれも縄文原体による押圧がなされ、2は口唇部と口縁部下端に、3は口唇部に施されている。2の口縁部下端には瘤が貼られている。4～6は縄文施文の胴部片で、4は附加条1種(附加2条)による羽状構成、5は附加条1

種（附加2条）と単節の縄文，6には撚糸文がそれぞれ施されている。7の底部片は，胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

第16号住居跡（第36図）

位置 A地区北部，G8a₀区を中心に確認されている。

重複関係 南東壁中央部と床の一部が第2号土坑に掘り込まれている。

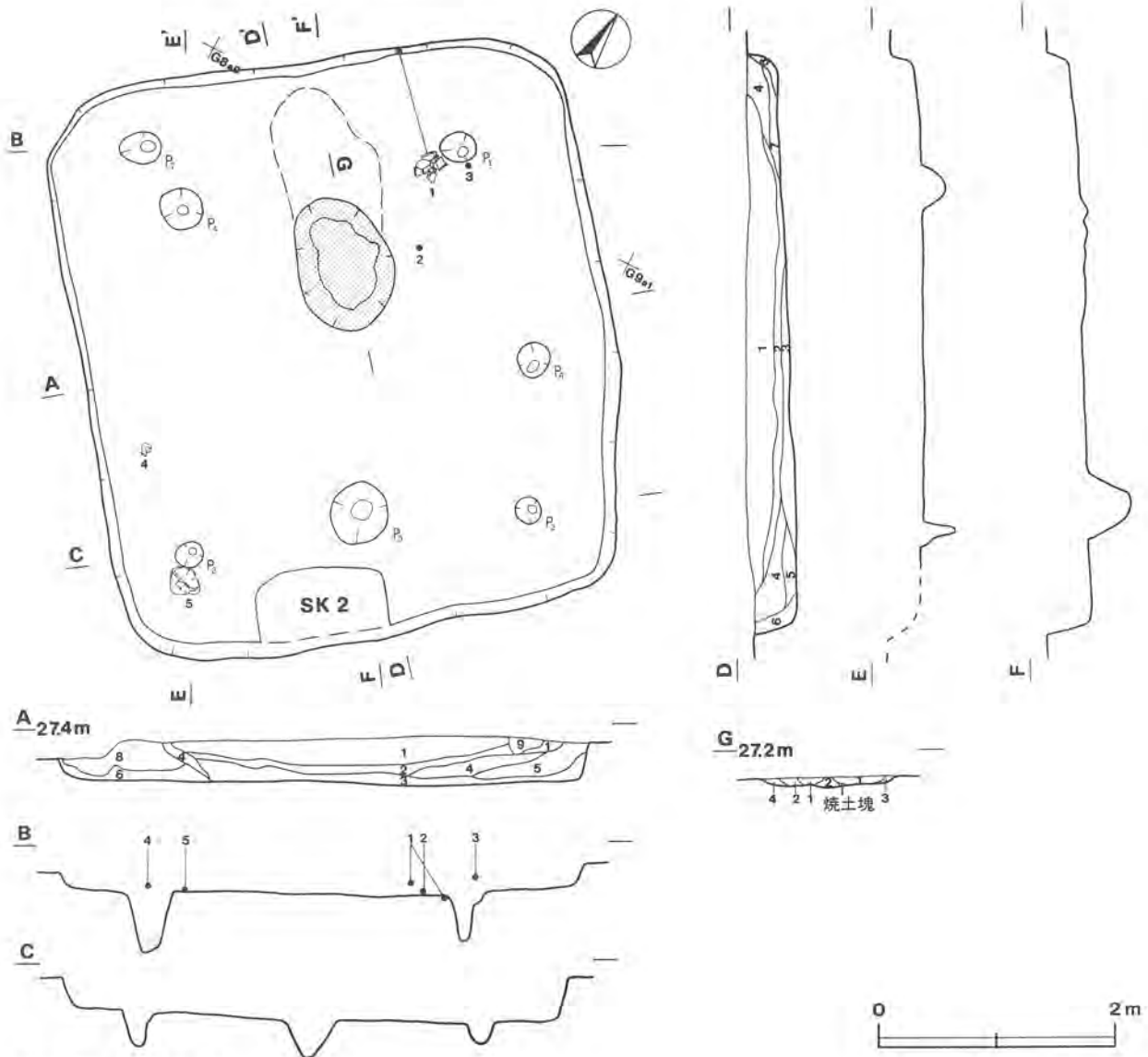
規模と平面形 長軸4.96m，短軸4.53mの隅丸方形である。

主軸方向 N-38°-W。

壁 壁高16~38cmで，外傾して立ち上がる。

床 平坦で，炉周辺はよく踏み固められている。炉の長径方向である北東側床面に，焼土粒子が散乱している。

ピット 7か所。P₁~P₄は，径24~36cmの円形で深さ17~52cmである。P₁~P₄は主柱穴と思われ，結んだ線は方形となる。P₅は，径54cmの円形で，深さ35cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P₆・P₇は，径30~40cmの円形で深さ20~37cmの補助柱穴と思われる。



第36図 第16号住居跡実測図

炉 1か所。中央からやや北西寄りにあり、平面形は長径116cm、短径82cmの楕円形で、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部がよく焼け赤変硬化し、周囲はやや盛り上がるが中央部は窪んでいる。覆土は、第1層が焼土粒子中量の極暗褐色土、第2層は焼土粒子少量、炭化粒子微量の暗褐色土、第3層は焼土・炭化粒子微量の褐色土である（第36図）。

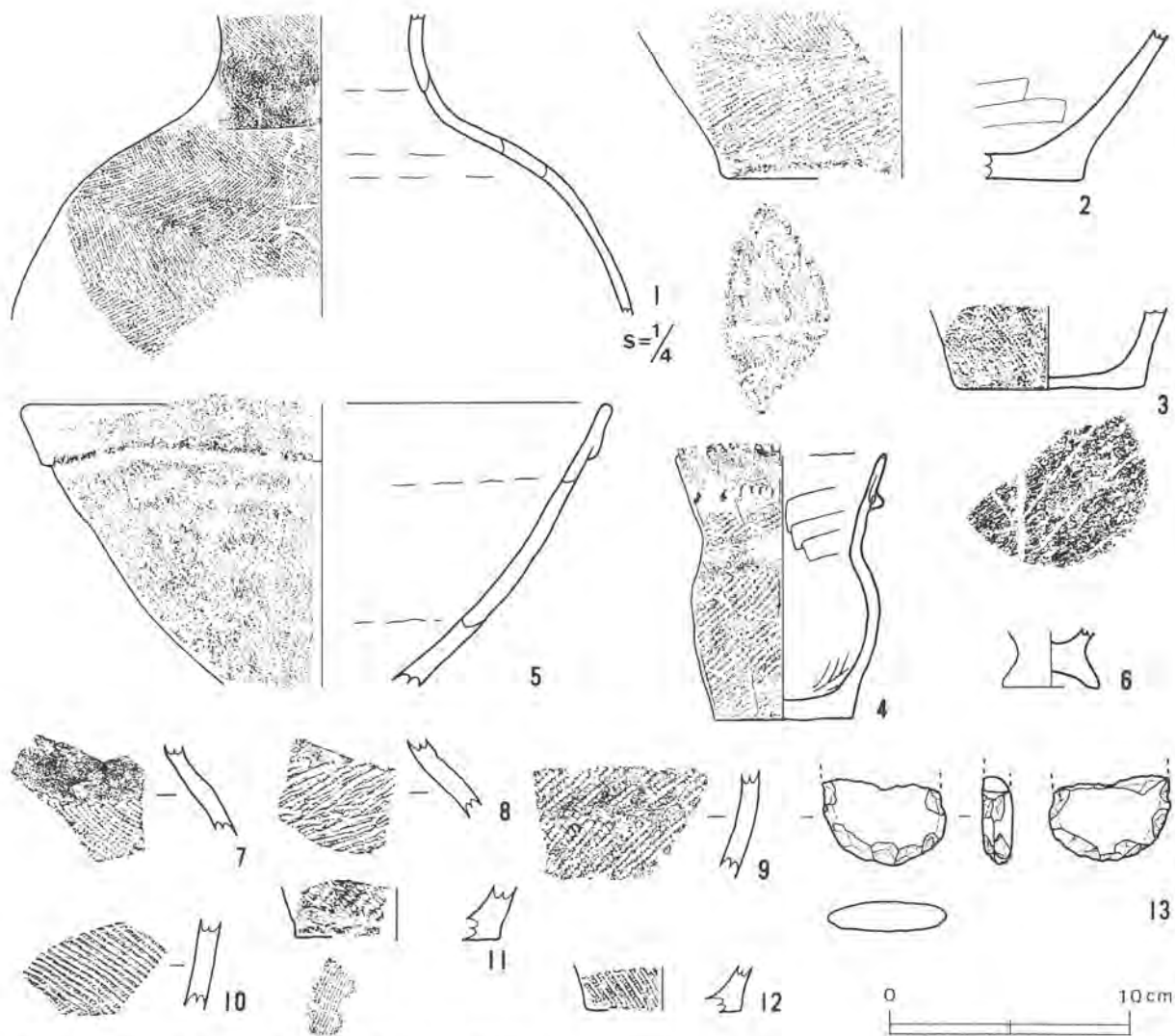
覆土 9層から成る。壁際から床面にかけてはロームブロックを含む褐色土が堆積しているが、北西壁寄りにはさらに焼土ブロック・炭化粒子を含む暗褐色土が薄く堆積している。その層は炉の覆土に続いており、炉の焼土が紛れ込んだものと思われる。中・上層には黒色系の土がレンズ状堆積をしている。

なお、土層は

第1層 黒色 焼土・ローム粒子少量	第6層 褐色 ローム中ブロック少量、ローム粒子多量
第2層 黒褐色 ローム中ブロック少量、ローム粒子中量	第7層 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土小ブロック少量、炭化粒子少量
第3層 明褐色 ローム粒子多量	第8層 褐色 ローム大ブロック少量、焼土・炭化粒子少量
第4層 褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子多量、焼土粒子微量	第9層 黒褐色 ローム・焼土粒子少量
第5層 暗褐色 ローム中ブロック少量、炭化・焼土粒子少量	

(第36図)

である。弥生式土器片が第3層を中心に出土している。



第37図 第16号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物 弥生式土器細片が約240点出土しているが、口縁部・底部片は僅かで殆ど胴部片である。第37図1～4は弥生式土器壺で、1の頸部下位から胴部上半はP₁付近の床面直上から出土している。2の胴部下位から底部は炉付近の床面直上から、3の底部片は北コーナー付近の覆土中層から、4の小形壺は南西壁中央部壁際の覆土下層から横位でそれぞれ出土している。5の浅鉢は南コーナー近くの床面直上から横位の潰れた状態で出土している。浅鉢としたが底部が確認できておらず、隣接遺跡の出土遺物の中にある類例から判断して甑となる可能性もある。6の高坏脚部、13の打製石斧は覆土中から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第37図 1	壺 弥生式土器	B (16.8)	胴部上半から頸部にかけての破片。頸部は外反して立ち上がる。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、胴部は羽状構成をとる。内面には輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 橙色	P47 PL36 20% P ₁ 付近床面直上
2	壺 弥生式土器	B (6.2) C [15.0]	底部から胴部下位にかけての破片。平底で胴部は内彎気味に立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底面に木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい黄橙色	P48 5% 炉付近床面直上
3	壺 弥生式土器	B (3.5) C [7.5]	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 橙色	P49 10% 外面摩滅 内面炭化物付着 北コーナー覆土中層
4	小形壺 弥生式土器	A [8.7] B 11.0 C 5.7	平底で、胴部は内彎して立ち上がり頸部から口縁部は外傾する。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。複合口縁で下端には縄文原体により押圧され、さらに2個1組の瘤が4単位貼られている。内面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 明赤褐色	P51 PL36 85% 覆土下層
5	浅鉢 弥生式土器	A [23.6] B (11.7)	胴部から口縁部にかけての破片。底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが不明瞭である。無文の複合口縁である。内面に輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明赤褐色	P52 PL36 80% 外面摩滅 南コーナー床面直上
6	高坏 弥生式土器	B (2.4) D 3.8 E 1.4	脚部片。脚部は「ハ」の字状に大きく開く。脚部から坏部にかけてわずかに縄文が認めれる。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい黄橙色	P53 15% 覆土中

第37図7～12は、第16号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7・8は頸部から胴部にかけての破片で、頸部を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。9・10は胴部片で、9は附加条1種(附加1条)、10は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。11・12は縄文施文の底部片で、11の底面には布目痕がある。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第37図13	打製石斧	(3.5)	(5.0)	(1.3)	(28.9)	硬砂岩	覆土中	Q16 破片

第17号住居跡(第38図)

位置 A地区北部、F9j₂区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.53m、短軸5.20mの隅丸方形である。

主軸方向 N-57°-W。

壁 壁高14～26cmで、外傾して立ち上がる。

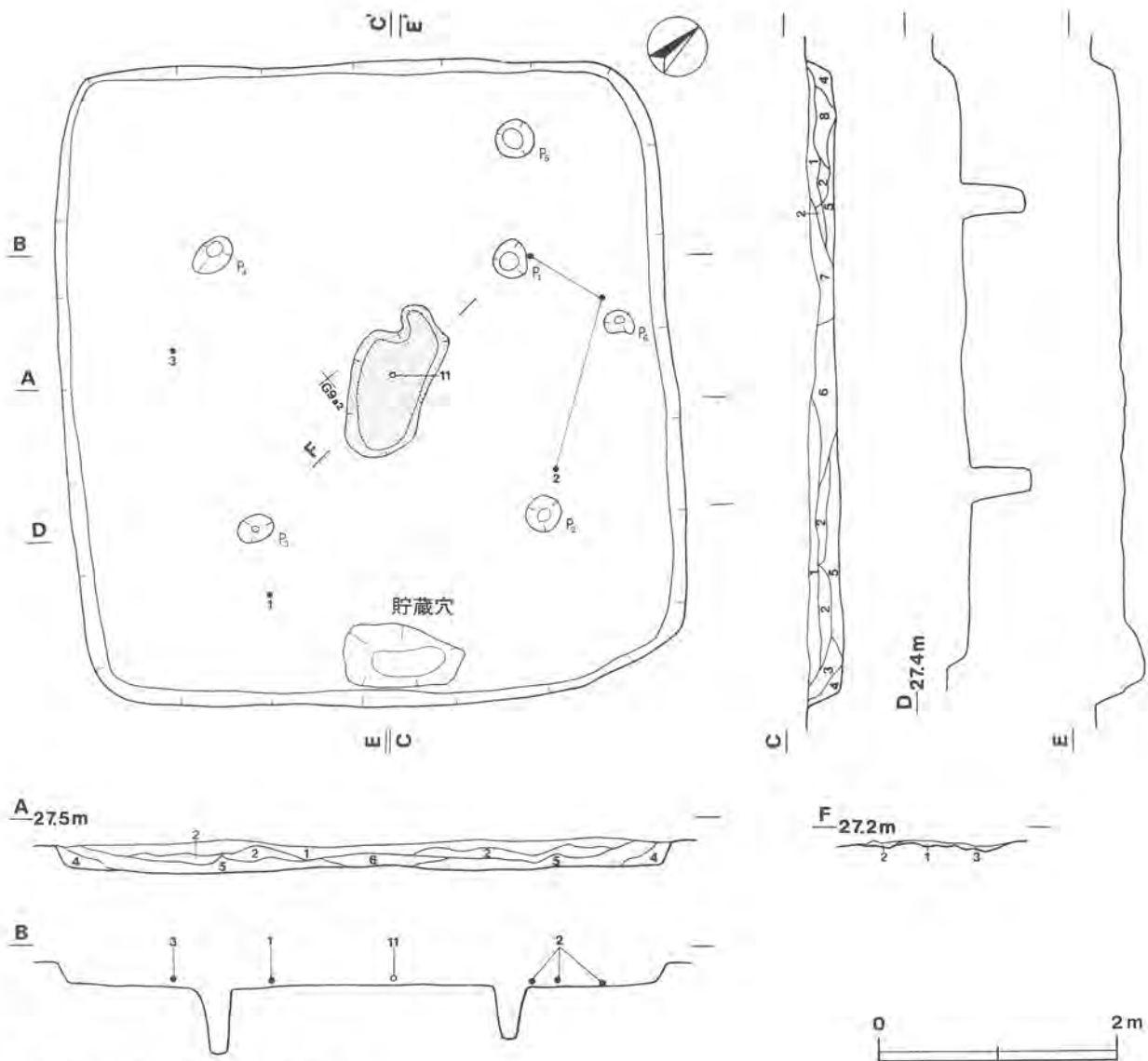
床 全体的に平坦であるが中央部は凹凸があり、踏み固められている。

ピット 6か所。P₁~P₆は、長径30~40cm、短径22~30cmの楕円形で深さ45~58cmである。P₁~P₄は、主柱穴と思われ、結んだ線は方形となる。P₅・P₆は長径26~32cm、短径18~32cmの楕円形で、深さ20~34cmと浅く、補助柱穴と思われる。出入口施設に伴うと思われるピットは確認できなかった。

炉 1か所。中央にあり、平面形は長径136cm、短径66cmの不整楕円形で、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、南東壁側がよく焼け赤変硬化している。覆土は、第1層が焼土粒子多量、焼土小ブロック中量の暗赤褐色土、第2層は焼土粒子中量、焼土小ブロック少量含む黒褐色土、第3層は焼土粒子少量、ローム小ブロック少量の明褐色土である(第38図)。

貯蔵穴 1か所。南東壁中央に付設されており、平面形は長径100cm、短径54cmの不整長方形で床面を18cm掘り込んでいる。底面は皿状で壁は緩やかに傾斜している。

覆土 8層から成る。壁際ににぶい褐色土が堆積し、床面全体をローム大ブロックを含む暗褐色土が覆っている。中層付近からは層があまり広がらず細かく切れるものが多くレンズ状堆積をとらない。各層ともよく締まっておりますり人為堆積と思われる。流れ込みと思われる弥生式土器片が第2層から少量出土している。



第38図 第17号住居跡実測図

なお、土層は

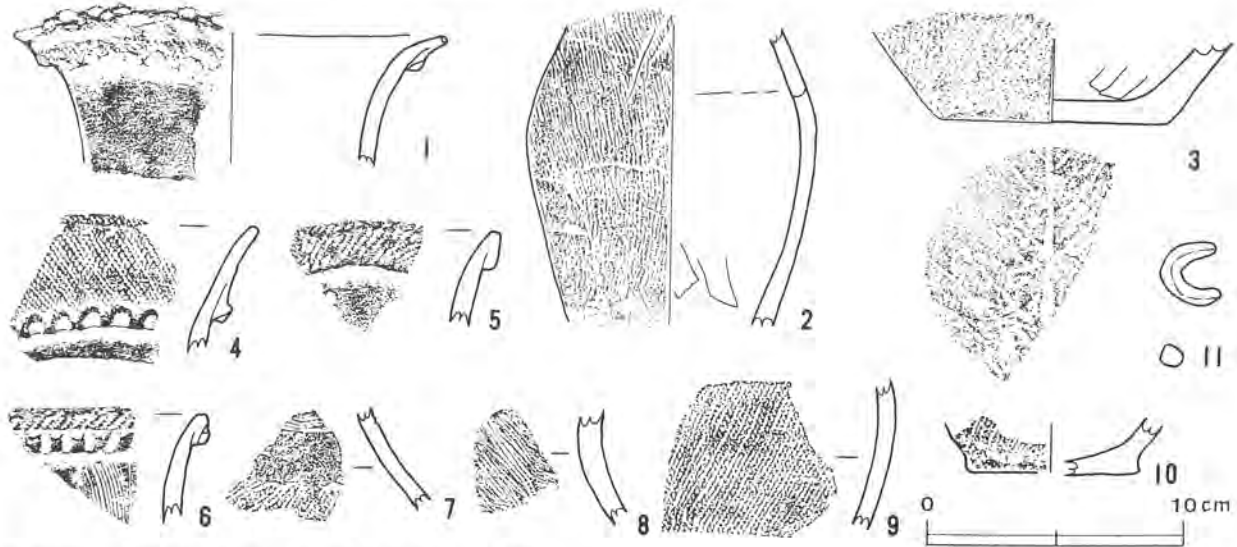
第1層	暗褐色	焼土・炭化粒子微量	第5層	暗褐色	ローム大ブロック少量、炭化粒子微量
第2層	暗褐色	ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量	第6層	暗褐色	ローム・焼土粒子微量
第3層	褐色	ローム・炭化・焼土粒子微量	第7層	黒褐色	ローム中ブロック微量、炭化・焼土粒子少量
第4層	褐色	炭化粒子微量	第8層	暗褐色	ローム小ブロック・炭化粒子微量

(第38図)

である。

遺物 弥生式土器細片が約120点出土しているが他の時期の土器片は確認されていない。遺物は覆土第5層からの出土が比較的多い。第39図1～3は弥生式土器壺で、1の口縁部はP₃付近の覆土下層から、3の底部は南西壁中央部付近の覆土下層からそれぞれ出土している。2の胴部は北東壁際中央部からの破片とP₁・P₂付近のからの破片が接合し、それら破片は覆土第5層中から出土している。11は土製勾玉と思われる、炉の上方覆土下層から出土している。アブライト礫は3点(大2, 小1)出土しており、総重量は280.1gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第39図 第17号住居跡出土遺物実測・拓影図

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第39図 1	広口壺 弥生式土器	A [16.8] B (5.2)	頸部上位から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外反して立ち上がる。頸部は無文帯とし、口縁部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。複合口縁で、上下両端は棒状工具により押圧されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 橙色	P54 PL37 5% 外面炭化物付着 P ₃ 付近覆土下層
2	壺 弥生式土器	B (11.8)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がる。胴部には細目の附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。内面には輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 褐色	P55 PL37 30% 内・外面炭化物付着 覆土第5層
3	壺 弥生式土器	B (3.4) C [8.8]	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい黄橙色	P56 5% 中央部覆土下層

第39図4～10は、第17号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4～6はいずれも口唇部に縄文が施されている複合口縁である。4の口縁には附加条1種(附加1条)の縄文が施され、下端は棒状工具により押圧されている。6は口縁部に隆帯を貼りさらにキザミ目が施され、頸部には9本櫛歯による縦位の櫛描文が施されている。7・8は胴部から頸部にかけての破片で、7には横位の櫛描文が、8には撚糸文がそれぞれ

施され、さらに7の胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施文されている。9の胴部片、10の底部片にはどちらも附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第39図11	土製勾玉	2.6	2.4	0.9	—	3.6	100	覆土下層	DP8

第18号住居跡（第40図）

位置 A地区北部，F9j₄区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.10m，短軸5.40mの隅丸長方形である。 **主軸方向** N-68°-W。

壁 壁高32～58cmで，外傾して立ち上がる。 **床** ほぼ平坦で，炉の周辺がよく踏み固められている。

ピット 7か所。P₁・P₂・P₄は，径40～48cmの円形で，深さ61～63cmである。P₃は，長径66cm，短径38cmの楕円形で深さ58cmで，最深部は南東壁側にある。P₁～P₄は，支柱穴と思われ，結んだ線は方形となる。P₅は，径30cmの円形で深さ14cmの出入口施設に伴うピットと思われるが浅い。P₆・P₇は，長径26～34cm，短径22～26cmの楕円形で，深さ22～73cmの補助柱穴と考えられる。

炉 1か所。P₁とP₄のほぼ中央にあり，平面形は瓢箪形で2つにくびれ，長径132cm，短径（小）52cm・（大）64cmで，括れ部は径22cmとなり床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，両側ともに中央部がよく焼け赤変硬化している。土層からでは，最初から瓢箪形をしていたのか，それとも新旧関係のある2つの炉であったのか判断できないが，括れ部は周囲の路床より約2cm高くなっている。2つになり時期差があるとすると，周囲の住居跡の炉の大きさと比較した場合かなり小形になってしまうためもともと瓢箪形であって，2つに分けて使用していた可能性がある。覆土は，第1層がローム粒子少量，焼土粒子・焼土ブロック少量の黒褐色土，第2層は焼土粒子微量，ロームブロックを少量含む暗褐色土，第3層はローム粒子を多量に含む明褐色土である（第40図）。

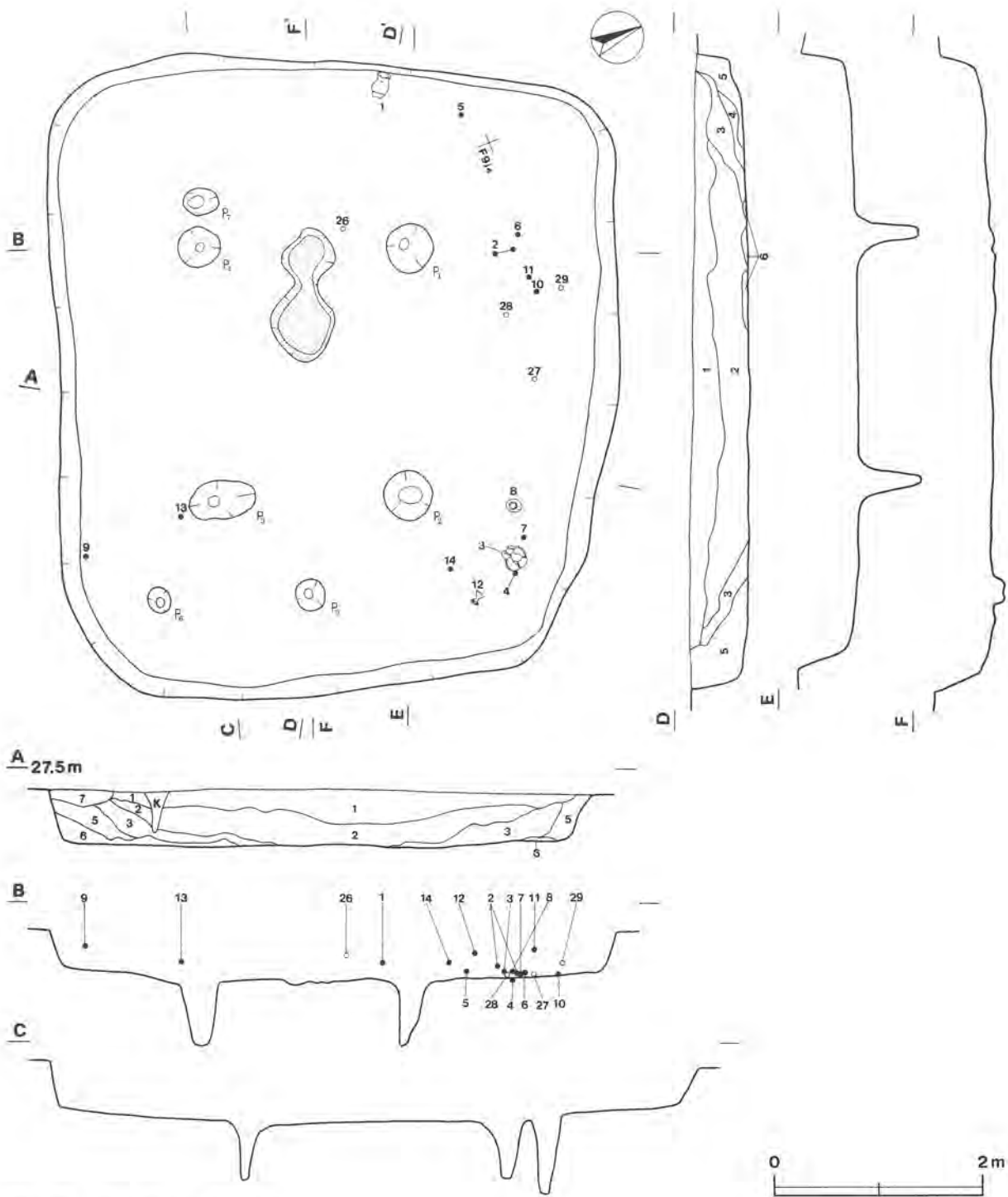
覆土 7層から成る。流れ込んだと思われる褐色土が壁際から床面にかけて堆積し，その上を暗褐色土・黒褐色土が厚く，レンズ状に堆積している。南西壁寄りに木根によるとと思われる攪乱がある。流れ込みと思われる弥生式土器片が第2層から多く出土している。

なお，土層は

第1層	黒褐色	ロームブロック少量，焼土粒子微量	第5層	褐色	ロームブロック少量，焼土粒子微量
第2層	暗褐色	炭化物・焼土粒子微量	第6層	褐色	ロームブロック中量，ローム粒子少量
第3層	褐色	ローム粒子・ロームブロック少量	第7層	黒褐色	ローム粒子少量
第4層	暗褐色	ローム粒子・ロームブロック少量			(第40図)

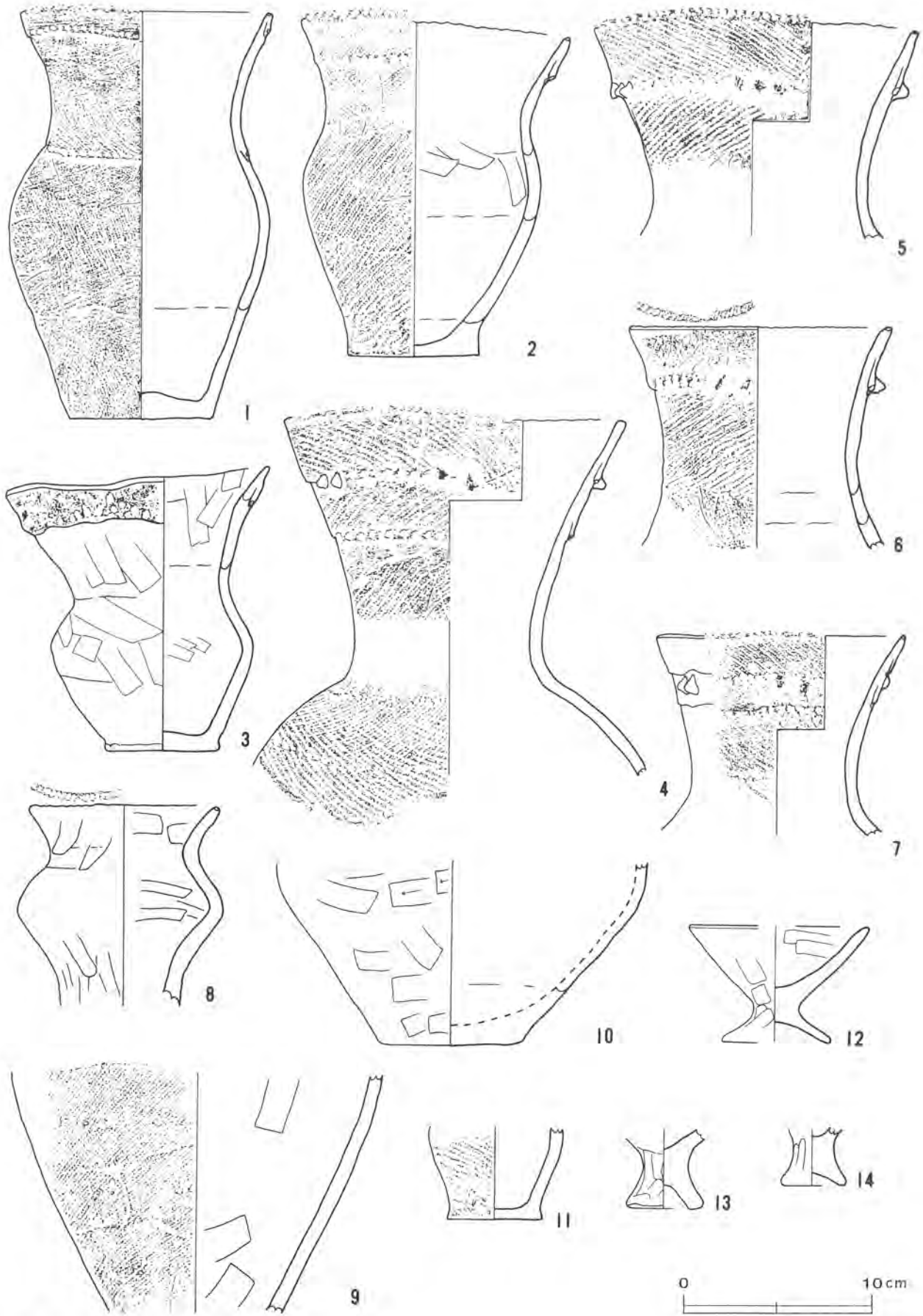
である。

遺物 弥生式土器細片が約650点，土師器細片が13点出土している。弥生式土器細片は覆土第2層から多く出土している。形の分かる遺物や完形に近い土器が，他の住居跡に比べ多く出土しており，しかも床面直上のものが目立つ。第41図1～11は弥生式土器壺で，その内1～8は広口壺である。1は完形の広口壺で北西壁中央部の壁際覆土下層から横位で，6は広口壺の口縁部から頸部で北コーナー付近の床面直上に正位の立った状態で出土しており，おそらく器台として再利用されたものであろう。2は6と同地点で床面近くから押し潰れた状態で出土し，底部は6の上に載り口縁部はそれよりも下がった斜位の状態で出土している。状況から判断して6の上に2が載せられていたのが，何らかの作用により倒れたものと推測される。その東側床面直上から大形の壺胴部片を再利用したと思われる皿状の破片が潰れた状態で出土している。その破片の一つが16である。この出土状況は隣接している西原遺跡の同時期の第21号住居跡の出土状況と大変よくにている。3・4・7・



第40図 第18号住居跡実測図

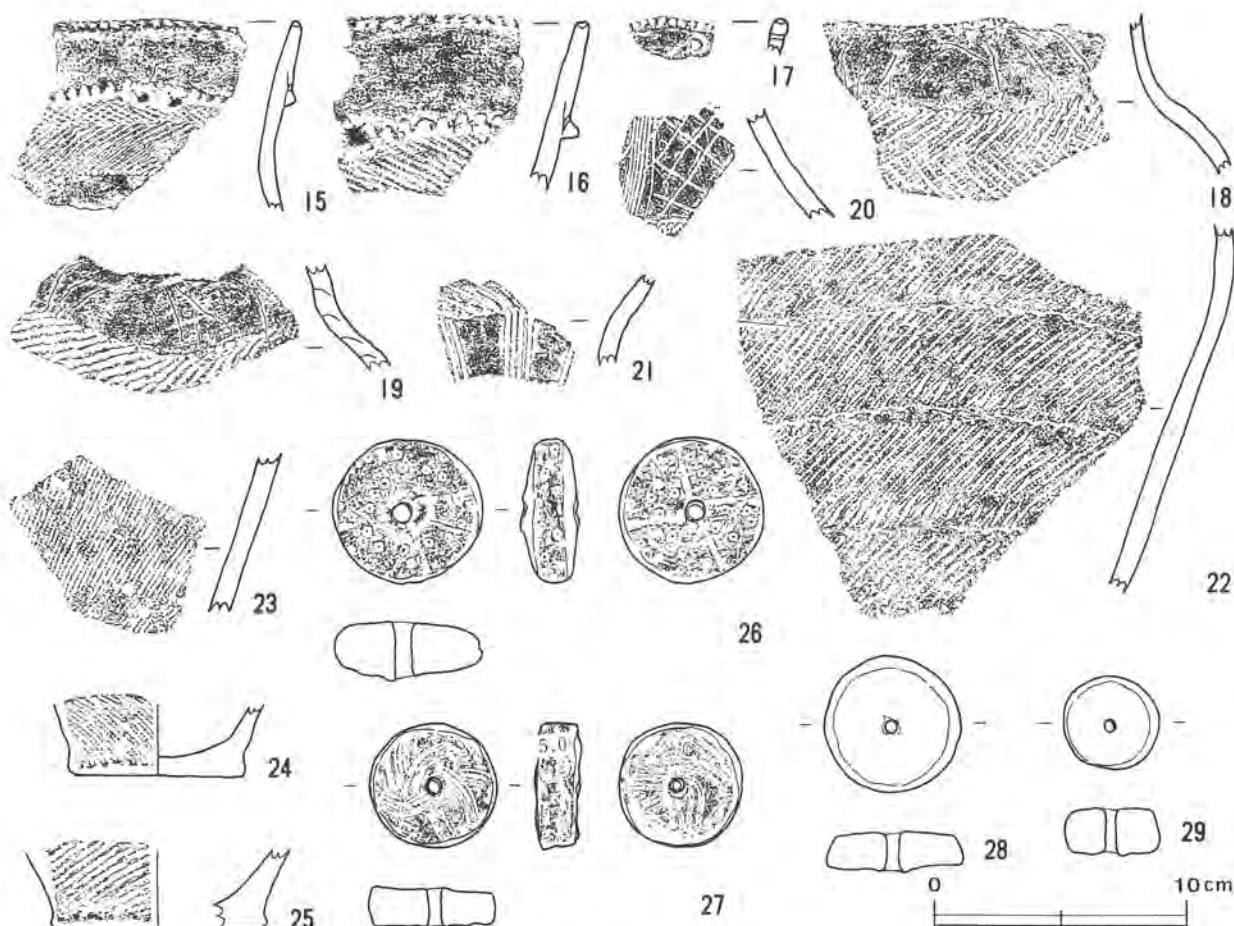
8は広口壺で東コーナー付近の床面直上からまともに出て、4・7・8は逆位でほぼ1列に並んだ状態で出土している。4と7の間には3が横位で出土している。4・7は6と同様に器台として再利用され、状況から判断して3が7に載っていたが、2と同じように何らかの作用で転がり落ちたものと推測される。このように、広口壺の口縁部から頸部にかけてを器台として再利用し、別の壺を載せた状態での出土例が、隣接している原田北遺跡Ⅱの第112号住居跡で確認されている。5は北西壁際の床面直上から逆位で、9は南コーナー付近の覆土中層から破片で、10・11はP₁付近から、10は床面直上から正位で、11は覆土中層からそれぞれ出土している。12～14は弥生式土器高坏で、12・14は東コーナー付近の覆土第3層から、13は南コーナー付近の覆



第41図 第18号住居跡出土遺物実測図(1)

土第3層から出土している。26～29の紡錘車は、26が中央部の覆土中層から、27～29が北東壁寄りからで27は床面近く、28が床面直上、29は覆土中層からそれぞれ出土している。アプライト礫は1点(小)出土しており、重量は4.6gである。

所見 床面直上の遺物はP₁・P₂と北東壁の間からまとめて出土しており、住居跡内空間使用区分がうかがえる。しかし、他の住居跡からは床面直上の出土遺物は大変少ないのに対し、焼失住居跡でもない本跡からなぜ多量に出土しているのか理解しがたい。本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第42図 第18号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第41図 1	広口壺 弥生式土器	A 12.8	平底で、胴部は外傾して立ち上がり、頸部から口縁部は外反する。最大径を胴部上位に持つ。複合口縁で、外面は横位にヘラナデされ、下位は縄文原体により押圧されている。胴部と頸部の境は、縄文原体により押圧されている。胴部から頸部にかけて細目の附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい黄褐色	P57 PL37 100% 二次焼成 内・外面炭化物付着 北西壁際 覆土下層
		B 22.2			
		C 7.5			
2	広口壺 弥生式土器	A 14.1	平底で、胴部は内傾して立ち上がり、頸部から口縁部は外傾する。複合口縁で、口縁部下端と口唇部には縄文原体により押圧されている。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい赤褐色	P58 PL37 80% 二次焼成 内・外面炭化物付着 床面直上
		B 18.3			
		C 7.0			
3	広口壺 弥生式土器	A 13.8	平底で、胴部は外傾して立ち上がり、頸部から口縁部は外反する。複合口縁で、下端には縄文原体による押圧が施されている。外面は粗いヘラケズリ後ナデ、内面はヘラナデされている。最大径を口縁部を持つ。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 明黄褐色	P59 PL37 90% 東コーナー付近 床面直上
		B 15.4			
		C 6.1			

4	広口壺 弥生式土器	A 18.0 B (19.3)	胴部上位から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部はやや外反気味に立ち上がる。2段の複合口縁で、各下端には縄文原体による押圧が施され、上1段目下端には2個1組の瘤が5単位貼られている。頸部下位は無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、胴部と口縁部が羽状構成をとる。口唇部は縄文原体による押圧が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 明黄褐色	P60 PL37 30% 東コーナー付近 床面直上
5	広口壺 弥生式土器	A 17.2 B (13.4)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部はやや外反気味に立ち上がる。複合口縁で附加条1種（附加2条）の縄文が施され羽状構成をとる。下段は縄文原体による押圧を施した後、3個1組の瘤が4単位貼られている。頸部下位は無文帯とし、上半には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。口唇部は縄文原体により押圧されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい褐色	P61 PL37 20% 北西壁際床面直上
6	広口壺 弥生式土器	A 13.8 B (12.0)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部はやや外反気味に立ち上がる。複合口縁で、下段は縄文原体による押圧が施された後、2個1組の瘤が4単位貼られている。頸部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、下位は無文帯となる。口唇部には縄文原体による押圧が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 明黄褐色	P62 PL37 20% 北コーナー付近 床面直上
7	広口壺 弥生式土器	A 13.1 B (10.8)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部はやや外反気味に立ち上がる。2段の複合口縁で、各下端には縄文原体による押圧が施され、2段目上端には2個1組の瘤が5単位貼られている。頸部下位と口縁部2段目は無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。口唇部は縄文原体による押圧が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 橙色	P63 PL37 20% 東コーナー付近 床面直上
8	小形壺 弥生式土器	A 9.9 B (10.8)	底部欠損。胴部は外反して立ち上がり、頸部から口縁部は外反する。口唇部は棒状工具によるキザミ目が施され、それ以外は無文である。内、外面ヘラケズリ後、横位のナデが施されている。	砂粒、石英、長石 普通 にぶい黄褐色	P64 PL37 80% 二次焼成 外面スス付着 床面直上
9	壺 弥生式土器	B (12.8)	胴部片。胴部は内彎し、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。内面は軽くヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 にぶい黄褐色	P65 PL37 10% 外面炭化物付着 覆土中層
10	壺 弥生式土器	B (9.9) C 7.6	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は内彎して立ち上がる。外面は粗くヘラケズリされている。内面に輪積み痕あり。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 にぶい橙色	P66 PL38 15% 二次焼成 外面炭化物付着 P ₁ 付近床面直上
11	小形壺 弥生式土器	B (5.0) C 5.0	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒、石英、長石 普通 にぶい橙色	P67 PL38 10% 覆土中層
12	高坏 弥生式土器	A [9.4] B 6.3 D [5.3] E 1.7	脚部は大きく「ハ」の字状に開き、坏部は内彎して立ち上がる。内、外面ヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 普通 にぶい黄褐色	P68 PL38 70% 内・外面炭化物付着 覆土第3層
13	高坏 弥生式土器	B (4.3) C 4.1 E 3.0	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開き、坏部は外傾して立ち上がる。外面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 普通 にぶい黄褐色	P69 PL38 20% 覆土第3層
14	高坏 弥生式土器	B (3.1) D 3.3 E 2.5	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。外面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい黄褐色	P70 PL38 30% 覆土第3層

第42図15～25は、第18号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。15～17は口縁部片で、いずれも口唇部には縄文原体による押圧が施されている。15・16の口縁部下端は縄文原体による押圧が施され、その後には瘤が貼られている。どちらも頸部上位には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、15は羽状構成をとる。17の口縁部には径2mmの円孔が穿たれている。18～20は頸部から胴部にかけての破片で、いずれも胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。頸部は18・19が無文帯で、20は7本櫛歯による縦区画とヘラ状工具による格子目文が施されている。22・23の胴部片と24・25の底部片には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第42図26	紡錘車	5.7	5.8	2.3	9.0	74.0	100	覆土中層	DP9 PL54
27	紡錘車	5.0	4.9	1.9	6.0	48.0	100	床面付近	DP10 PL54
28	紡錘車	5.4	5.4	1.6	5.0	52.0	100	床面直上	DP11 PL54
29	紡錘車	3.8	3.8	1.9	5.0	31.7	100	覆土中層	DP12 PL54

第19号住居跡（第43図）

位置 A地区北部，F8f₅区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は，壁のほとんどと北東側床面が第1号古墳の周溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.93m，短軸5.11mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-56°-W。

壁 現存部の壁高54～84cmで，外傾して立ち上がる。

床 平坦で，中央部が踏み固められている。

ピット 5か所。P₁～P₄は，径24～36cmの円形で深さ47～58cmの支柱穴である。支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は径28cmの円形で深さ34cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。P₁とP₄の中央にあり西側端部は第1号古墳の周溝に掘り込まれている。平面形は長径[100]cm，短径76cmの楕円形で，床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は全体に赤変硬化している。覆土は，第1層が焼土小ブロック少量，焼土粒子中量，炭化粒子微量の極暗赤褐色土，第2層はローム中ブロック少量，焼土粒子・焼土小ブロック少量含む褐色土，第3層は焼土粒子・焼土小ブロック中量の暗赤褐色土，第4層は焼土粒子少量，焼土小ブロック中量，炭化粒子少量の褐色土である（第43図）。

覆土 7層から成る。東側覆土のみ現存しており，壁際から中央部床面にかけて褐色土が堆積し，中層にはロームブロックや黒色ブロックを含んだ暗褐色土・褐色土が厚く堆積し上層まで達している。下層から中層にかけての各層には焼土粒子が含まれている。

なお，土層は

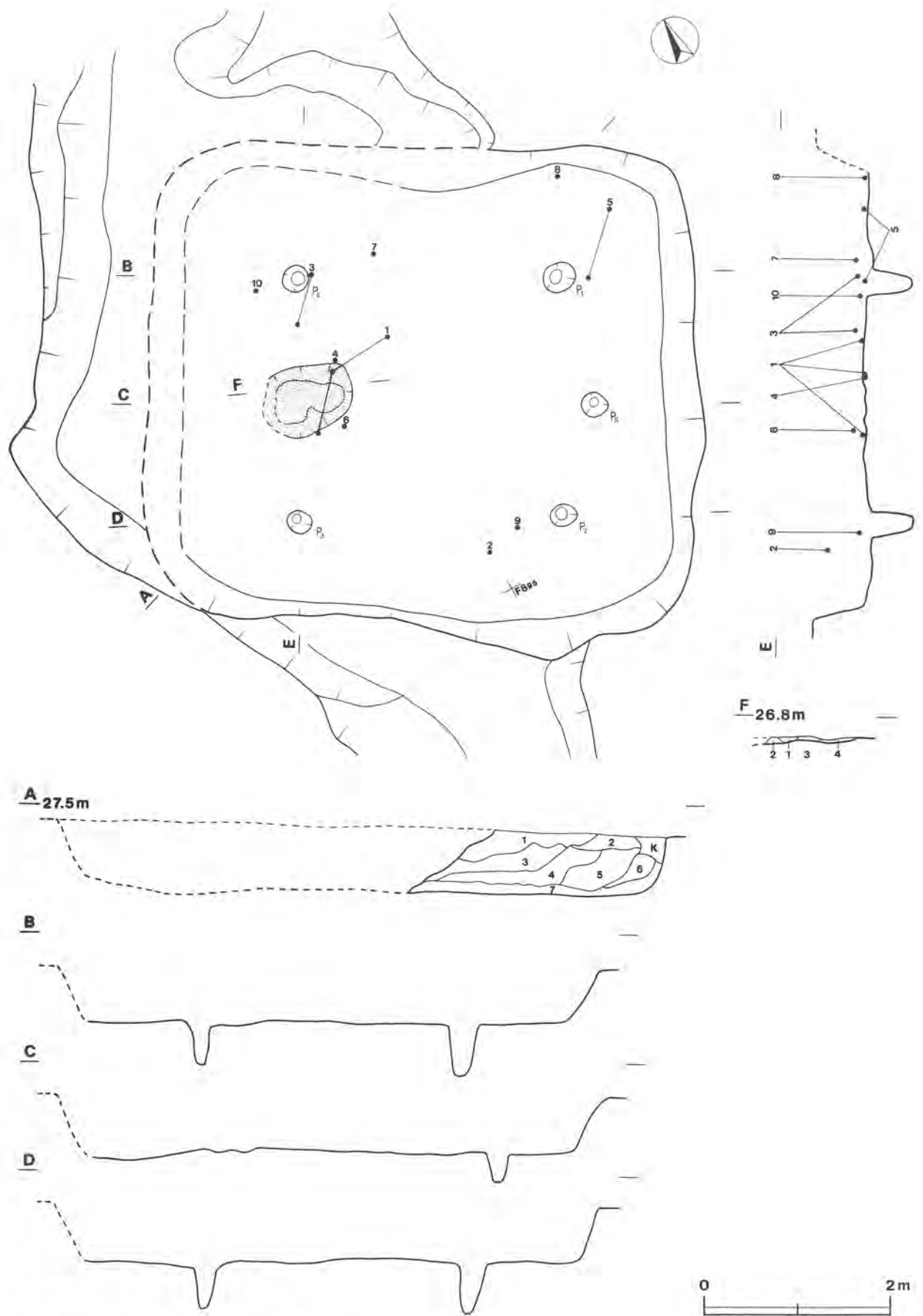
第1層	黒褐色	褐色ブロック多量，ローム粒子微量	第5層	褐色	ロームブロック・ローム粒子中量，黒色ブロック少量
第2層	黒褐色	ロームブロック・ローム粒子少量	第6層	褐色	ロームブロック多量，ローム粒子多量
第3層	暗褐色	褐色ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量	第7層	明褐色	ロームブロック・ローム粒子多量，焼土粒子微量
第4層	褐色	ロームブロック・ローム粒子少量，黒色ブロック微量			(第43図)

である。第7層から弥生式土器片が少量出土している。

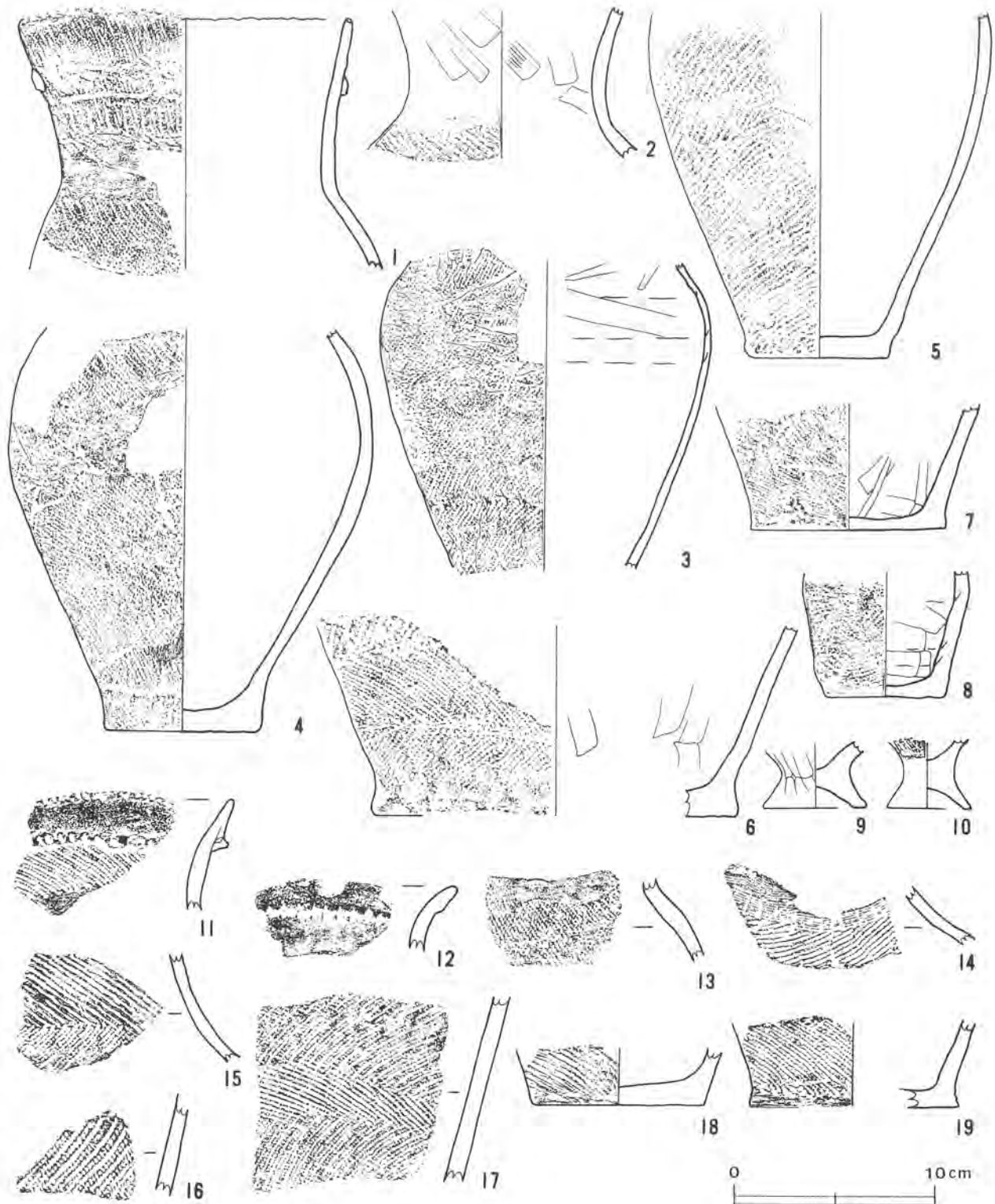
遺物 弥生式土器細片が約90点出土している。第44図1～8は弥生式土器壺で，1は広口壺である。1・4は中央部の床面直上から出土し，1は破片が3か所に散っており住居廃絶直後に投棄された可能性が高い。2の頸部は南コーナー付近の覆土中層から，3の胴部は中央部の覆土下層から破片で，5は東コーナー近くの床面近くから横位でそれぞれ出土している。6・7の底部は中央付近の覆土下層から，8の胴部から底部は北東壁際で東コーナー寄りの床面直上からそれぞれ出土している。9・10は弥生式土器高坏で，9は南コーナー付近の覆土下層，10は中央付近の覆土下層から出土している。アプライト礫は2点（大1，小1）出土しており，総重量は218.3gである。

所見 本跡は，出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第44図11～19は，第19号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。11・12は複合口縁で，11の口縁部下端と口唇部は縄文原体により押圧され，その後に瘤が貼られている。頸部上位には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。12の口縁部下端は棒状工具によりキザミ目が施されている。13～15は頸部から胴部にかけての破片で，いずれも附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。14の頸部には櫛歯状施文具による横走文が2条施されている。16・17の胴部片と18・19の底部片には附加条1種（附加2条）の縄文が施され，184は羽状構成をとる。



第43图 第19号住居跡実測図



第44図 第19号住居跡出土遺物実測・拓影図

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第44図 1	広口壺 弥生式土器	A 16.3 B (12.5)	胴部上位から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部はやや外傾して立ち上がる。頸部下位を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。口縁部には、縄文原体による刺突文が2条周回し、その間に縦長の瘤が等間隔に貼られている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい褐色	P71 PL38 15% 外面炭化物付着 中央部床面直上

2	壺 弥生式土器	B (7.7)	頸部片。頸部は外反して立ち上がる。頸部は無文帯で、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。頸部は内・外面ともヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 普通 橙色	P72 20% 覆土中層
3	壺 弥生式土器	B (15.4)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がる。胴部には、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。内面には横位のナデ、輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 橙色	P73 PL38 30% 二次焼成 外面炭化物付着 中央部覆土下層
4	壺 弥生式土器	B (20.3) C 7.8	底部から胴部にかけての破片。底部は平底で、胴部は外反して立ち上がる。胴部は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 にぶい褐色	P74 PL38 70% 内・外面炭化物付着 中央部床面直上
5	壺 弥生式土器	B (17.4) C 6.8	底部から胴部にかけての破片。底部は平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 普通 橙色	P75 PL38 45% 二次焼成 外面炭化物付着 床面付近
6	壺 弥生式土器	B (9.6) C [18.0]	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。内面は縦方向にヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 橙色	P76 PL38 10% 中央部覆土下層
7	壺 弥生式土器	B (6.4) C 9.6	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。内面は縦方向のヘラナデがある。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 にぶい黄橙色	P77 PL38 5% 中央部覆土下層
8	小形壺 弥生式土器	B (6.4) C 5.9	底部から胴部にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとらない。内面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、 スコリア 普通 にぶい黄橙色	P79 PL38 30% 外面スス付着 床面直上
9	高坏 弥生式土器	B (3.3) D 5.2 E 1.7	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は外反して立ち上がる。外面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石 普通 橙色	P80 PL38 15% 覆土下層
10	高坏 弥生式土器	B (3.5) D 4.2 E 1.8	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は外傾して立ち上がる。坏部は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石 普通 にぶい黄橙色	P81 PL38 30% 覆土下層

第20号住居跡（第45図）

位置 A地区北部，F9h₅区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.46m，短軸4.96mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-27°-W。 **壁** 壁高30～44cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，炉からP₅周辺にかけてがよく踏み固められている。

ピット 8か所。P₁・P₂・P₈は径30～32cmの円形で深さ45～56cmである。P₃～P₇は，長径34～52cm，短径30～46cmの楕円形で，深さ31～54cmである。P₁～P₄は，支柱穴と思われ，結んだ線は方形となる。P₅・P₆は，出入り口施設に伴うピットと思われ，南東壁に対し2ピットが垂直に並んでいる。P₇・P₈は補助柱穴と思われ，P₇はP₃・P₄を結ぶ方向に，P₈はP₁・P₄を結ぶ方向に構築されている。

炉 1か所。中央から北西寄りP₁とP₄の間にあり，平面形は長径112cm，短径78cmの楕円形で，床を10cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は，第1層が焼土ブロック・ローム粒子少量の黒褐色土，第2層はロームブロック・ローム粒子少量の暗褐色土，第3層はロームブロック多量の褐色土である（第45図）。

覆土 8層から成る。壁際から中央部にかけ褐色土が堆積している。中層から上層にかけて黒褐色土が厚めに堆積し，上層中央付近は広く攪乱されている。

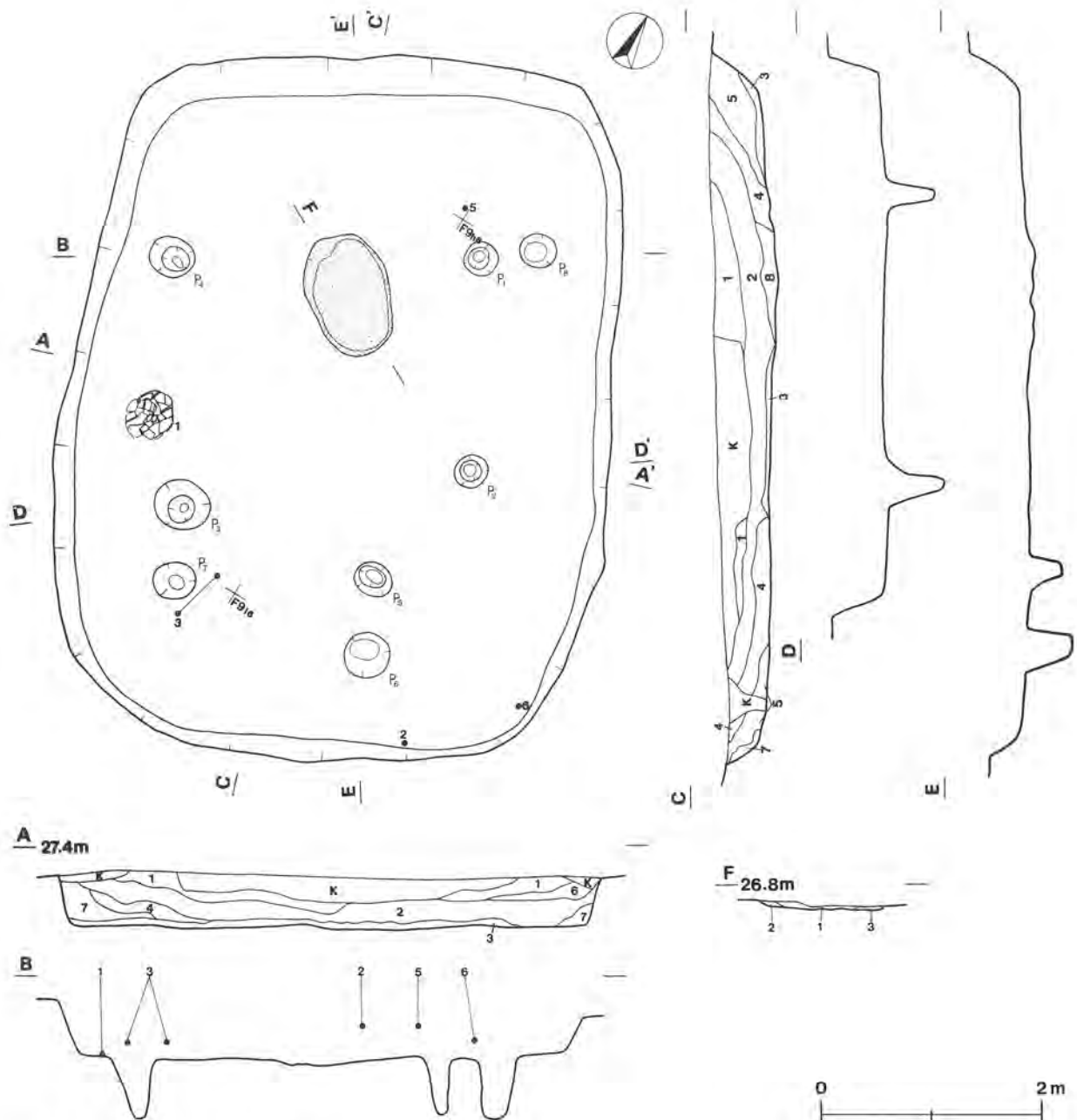
なお，土層は

第1層 黒褐色	ロームブロック・ローム粒子少量	第6層 暗褐色	黒色ブロック・ローム粒子少量
第2層 黒褐色	焼土粒子微量，ローム粒子少量	第7層 にぶい褐色	ロームブロック・ローム粒子やや多量，黒色ブロック少量
第3層 褐色	ロームブロック多量，黒色ブロック中量	第8層 暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子中量，炭化物微量
第4層 褐色	ロームブロック多量，黒色ブロック少量，ローム粒子中量，焼土粒子微量の暗褐色土		(第45図)
第5層 褐色	ロームブロック少量，黒色ブロック少量，ローム粒子中量		

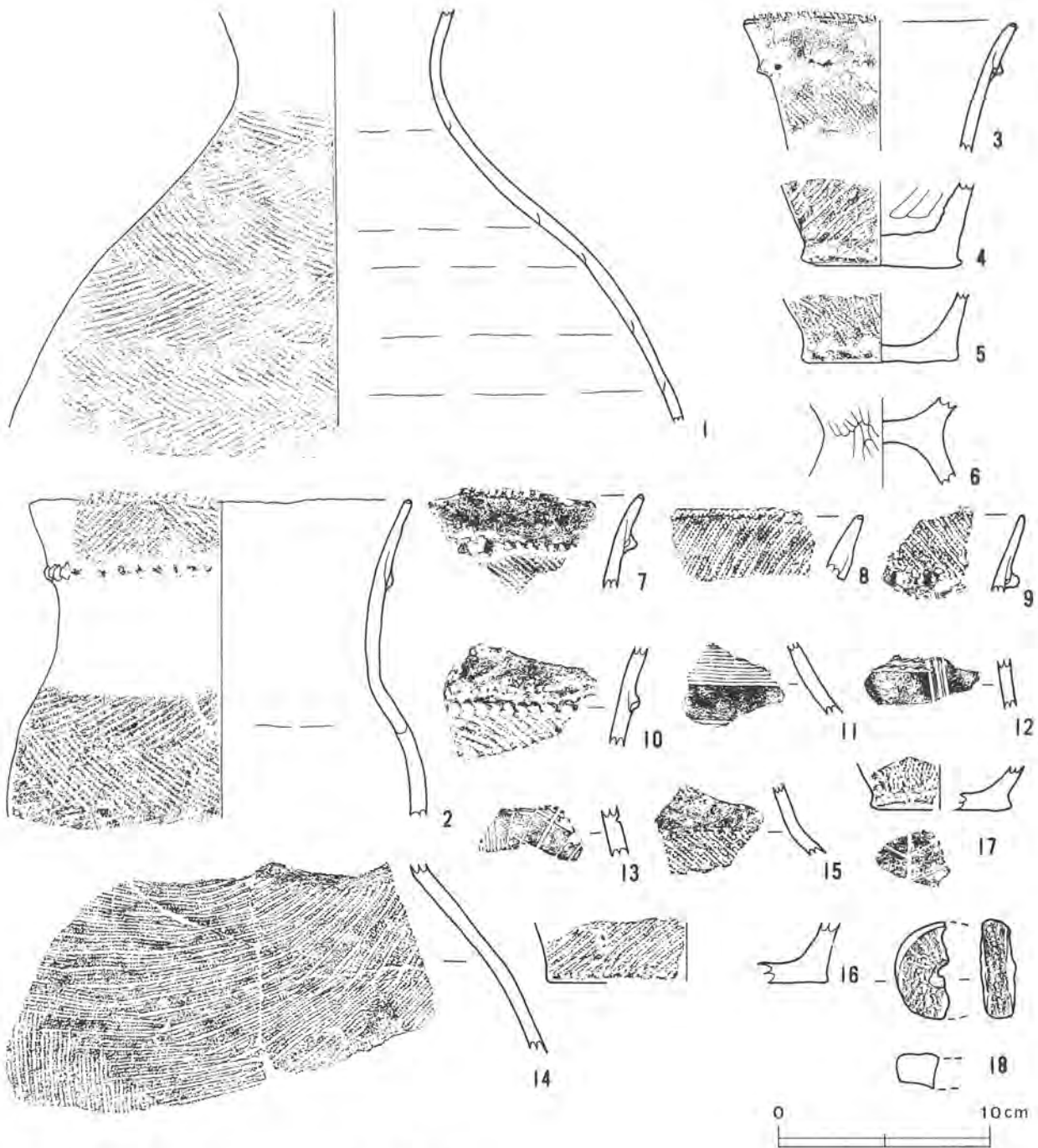
である。流れ込みと思われる弥生式土器片が各層から少量出土している。

遺物 弥生式土器細片が約730点出土しているが、土師器片は出土していない。P₃内の覆土中層に弥生式土器細片が2点混入しており、柱は抜き取られた可能性が考えられる。第46図1～5は弥生式土器壺で、1の頸部から胴部は南西壁際の中央部で床面直上から潰れた状態で出土しており、住居廃絶時は立位でおかれていたと推測され、器台として使われていたと思われる。2の広口壺上半と6の弥生式土器高坏は、東コーナー付近で、2は覆土上層、6は床面直上から出土している。3の口縁部から頸部は南コーナー付近の覆土下層から破片で、4の底部と18の紡錘車は覆土中から、5の底部は北コーナー付近の覆土上層から出土している。アブライト礫は1点（大）出土しており、重量は89.2gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第45図 第20号住居跡実測図



第46図 第20号住居跡出土遺物実測・拓影図

第46図7～17は、第20号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7～10の口縁部片はいずれも複合口縁で、7・9・10の口縁部下端には縄文原体による押圧が施され、さらに7・9には瘤が貼られている。縄文原体は7・8・10は附加条1種（附加2条）で、9は附加条1種（附加1条）である。11～13は頸部片で、11は櫛歯状工具による横走文、12は櫛歯状工具による縦位の櫛描文と横走波状文、13は縦位の櫛描文と格子目文がそれぞれ施されている。16・17は縄文施文の底部片で、17の底面には木葉痕がある。

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・焼成・色調	備 考
第46図 1	壺 弥生式土器	B (26.3)	胴部上半から頸部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部は外反して立ち上がる。胴部には太めの附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。頸部下半は無文帯とし、上半は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい橙色	P82 PL39 40% 床面直上
2	広口壺 弥生式土器	A 15.0 B (14.9)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部から口縁部は外反して立ち上がる。頸部は無文帯とし、胴部には横回転、口縁部には縦回転の附加条1種（附加2条）の縄文が施され、それぞれ羽状構成をとる。口縁部下端には、瘤が53個貼り付けられ周回している。口唇部は、縄文原体による押圧が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい黄褐色	P83 PL39 25% 外面多量の炭化物付着 覆土上層
3	広口壺 弥生式土器	A [12.7] B (6.3)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部はやや外反気味に立ち上がる。頸部下半は無文帯とし、上半には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。口縁部は無文で、下端には縄文原体による押圧が施され、その後2個1組の瘤が数単位貼られている。口唇部には縄文が施されている。	砂粒、雲母、スコリア 普通 にぶい橙色	P84 PL39 5% 二次焼成 内・外面炭化物付着 外面剝離 覆土下層
4	壺 弥生式土器	B (4.0) C 7.5	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。内面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 明黄褐色	P85 PL39 10% 覆土中
5	壺 弥生式土器	B (3.3) C 7.5	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は内彎気味に立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 橙色	P86 PL39 10% 二次焼成 外面スス付着 覆土上層
6	台付甕 弥生式土器	B (4.2) E (2.7)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。外面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 明黄褐色	P87 20% 東コーナー付近床面直上

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現 存 率 (%)	出 土 地 点	備 考
		最 大 長	最 大 幅	最 大 厚					
第46図18	紡 錘 車	(4.7)	(2.5)	(1.7)	-	(19.2)	40	覆 土 中	DP13 破片 PL54

第21号住居跡（第47図）

位置 A地区北部、F9h₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.60m、短軸4.33mの隅丸方形である。

主軸方向 N-80°-W。

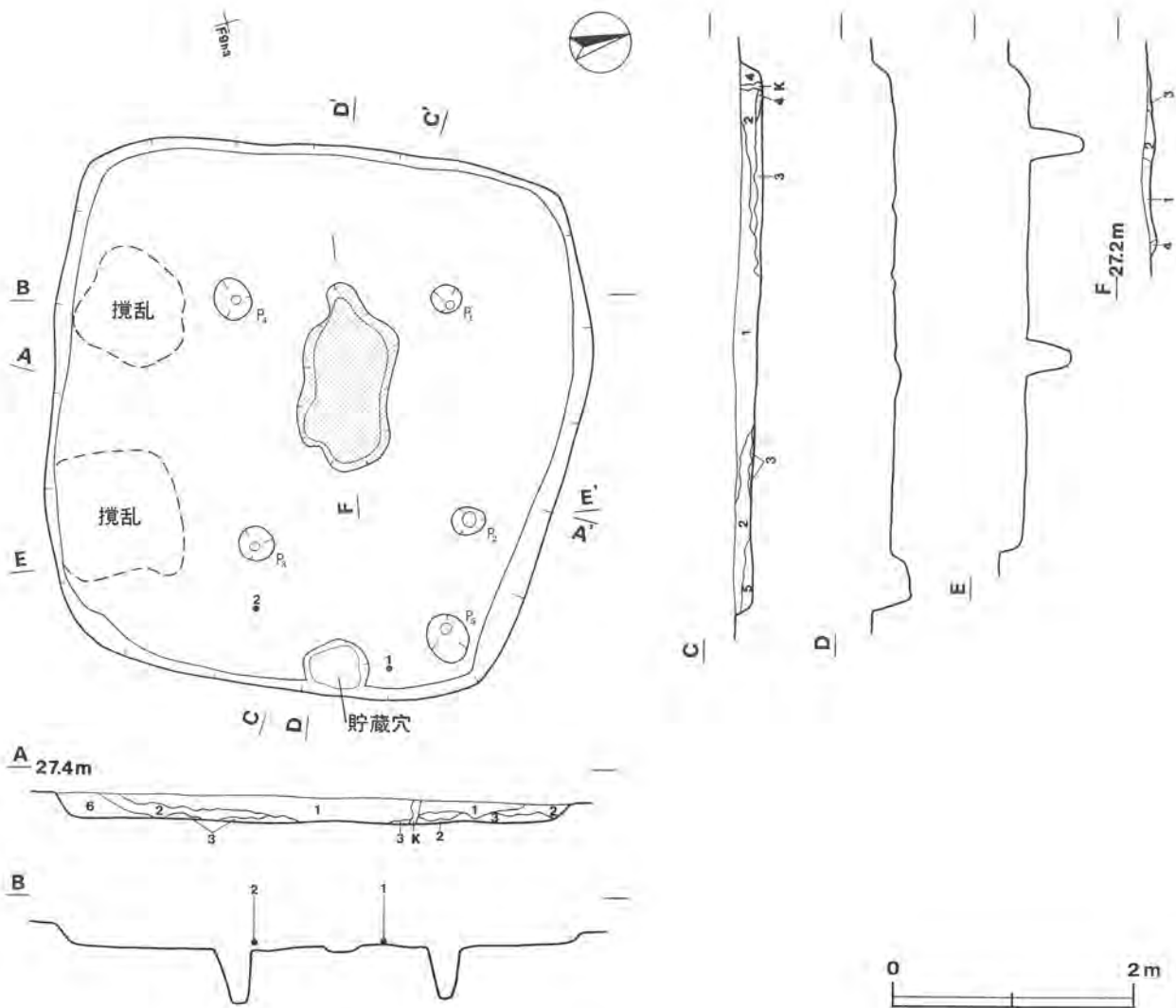
壁 壁高10~20cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦であるが中央から南壁寄りやや低く、傾斜している。炉周辺と北壁寄りがよく踏み固められている。

ピット 5か所。P₁・P₃・P₄は、径24~34cmの円形で深さ38~48cmである。P₂は長径28cm、短径24cmの楕円形で深さ46cmである。P₁~P₄は支柱穴と思われる、結んだ線は方形となる。P₅は、長径44cm、短径34cmの楕円形で、深さ31cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P₅の東壁面は緩やかに傾斜し、北東コーナー部に伸びている。

炉 1か所。中央からやや西寄りにあり、平面形は長径160cm、短径70cmの不整楕円形で、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部から南東寄りがよく焼け赤変硬化してやや盛り上がっているが中央部は窪んでいる。覆土は、第1層が焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化物微量の橙色土、第2層は焼土粒子・ローム粒子少量の黒褐色土、第3層はロームブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量のにぶい褐色土、第4層はローム粒子少量の黒褐色土である（第47図）。

貯蔵穴 1か所。東壁に接して付設されており、平面形は長径54cm、短径36cmの楕円形で深さは17cmである。底面は皿状である。



第47図 第21号住居跡実測図

覆土 6層から成る。壁際から床面にかけてロームブロックを含む褐色土が薄く堆積しているが、中央部は厚くロームブロックを多量に含む褐色土が堆積している。一部に木根によると思われる攪乱が入っている。

なお、土層は

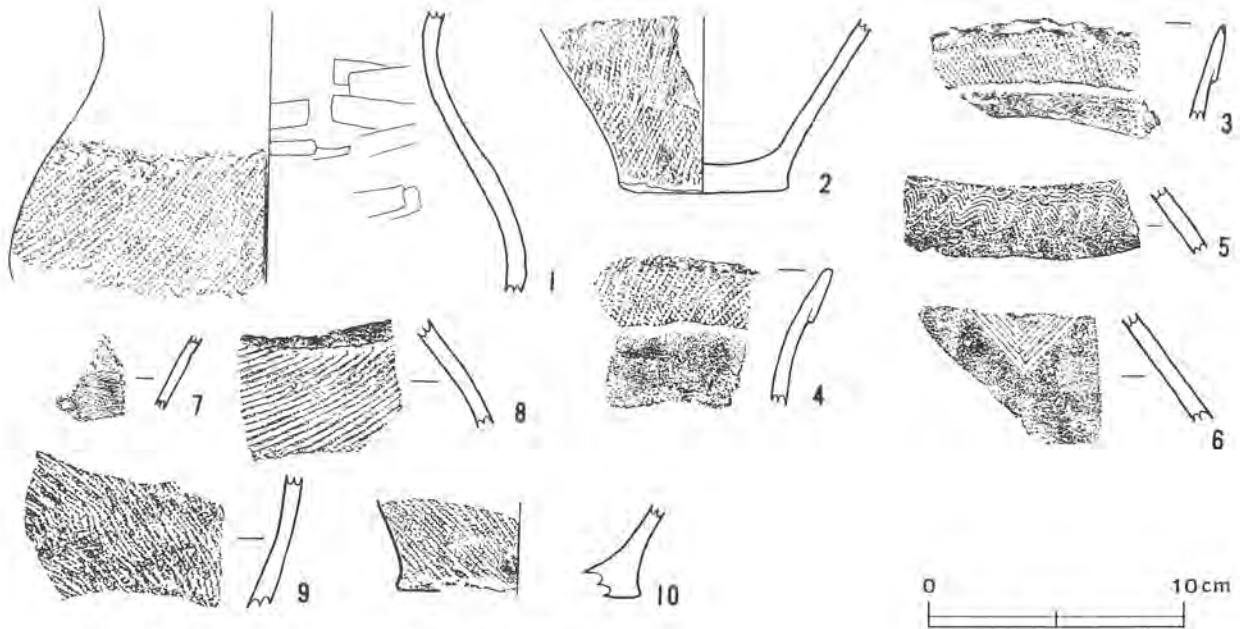
第1層	褐色	ロームブロック・ローム粒子多量, 黒色ブロック少量, 焼土粒子微量	第4層	暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量
第2層	褐色	ロームブロック・ローム粒子多量, 黒色ブロック少量	第5層	褐色	ロームブロック少量, ローム粒子中量
第3層	褐色	ロームブロック多量, 黒色ブロック少量	第6層	褐色	ロームブロック少量, ローム粒子中量

(第47図)

である。弥生式土器片が第1・2層から多く出土している。

遺物 弥生式土器細片が427点出土しているが、土師器片の混入は認められない。第48図1・2は弥生式土器壺で、1の頸部から胴部は北東コーナーの覆土下層から、2の胴部下位から底部はP₅付近の床面直上から正位で出土している。西壁際の床面直上から弥生式土器細片が少量出土しているが実測できない。アプライト礫は12点(大2, 中2, 小8)出土しており、総重量は425.3gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。



第48図 第21号住居跡出土遺物実測・拓影図

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第48図 1	壺 弥生式土器	B (11.5)	胴部上半から頸部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部は外反して立ち上がる。胴部外面は附加条1種(附加2条)の縄文が施され、頸部は無文である。内面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 っぽい褐色	P88 5% 外面炭化物付着 覆土下層
2	壺 弥生式土器	B (6.5) C 6.6	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 っぽい褐色	P89 5% P ₁ 付近床面直上

第48図3～10は、第21号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3・4は縄文施文の複合口縁で、3の口唇部は縄文原体により押圧されている。5・6は頸部片で、5は6本櫛歯による横走波状文、6は同じく6本櫛歯による山形文が施されている。8・9は胴部片、10は底部片でいずれも附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

第22号住居跡(第49図)

位置 A地区北部、F8i₇区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.17m、短軸4.42mの隅丸長方形である。

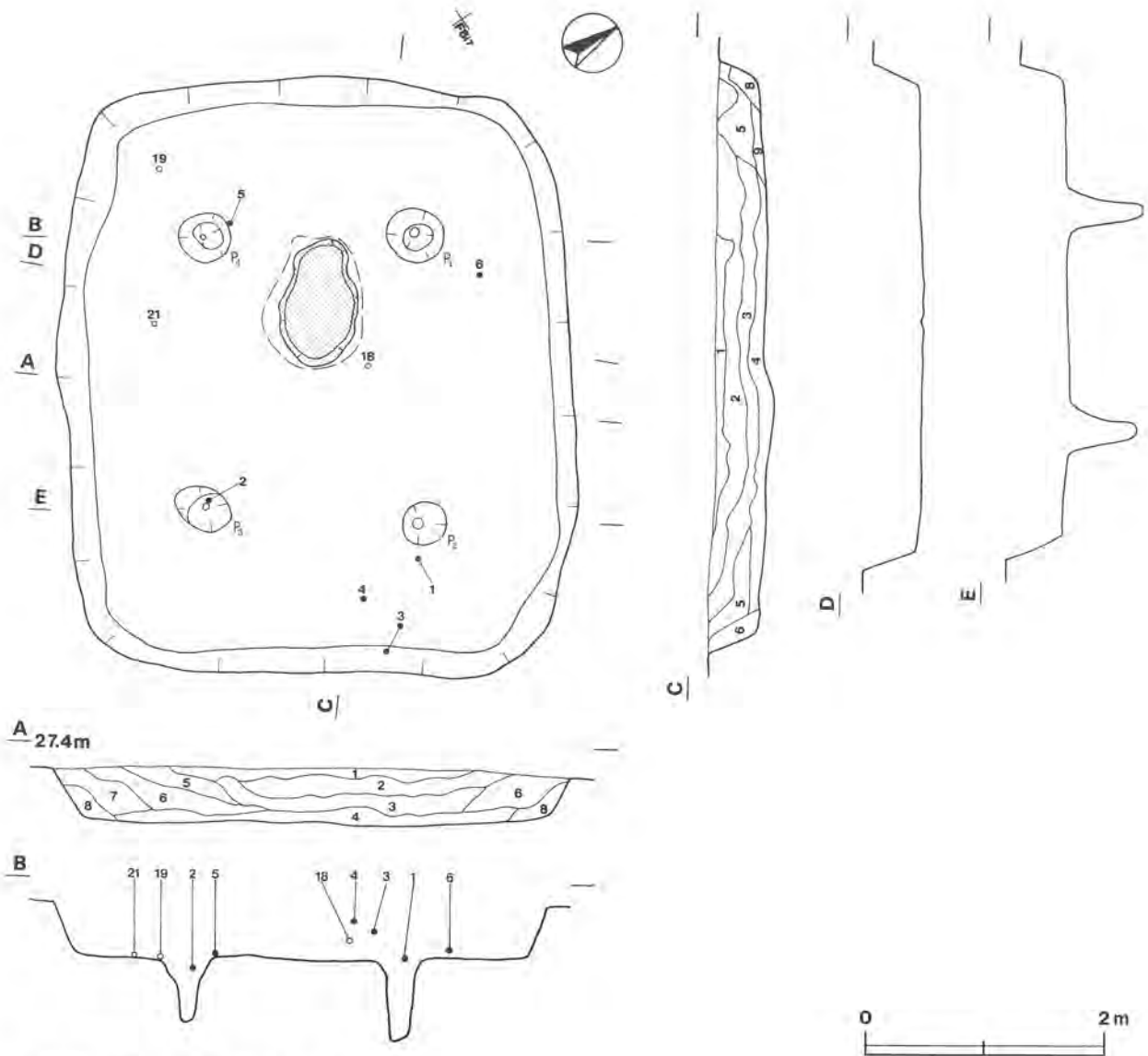
主軸方向 N-62°-W。

壁 壁高42～48cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、中央部は踏み固められている。

ピット 4か所。P₁・P₂・P₃は、径40～48cmの円形で深さ54～70cmである。P₄は長径50cm、短径36cmの楕円形で、深さ60cmである。P₁～P₄は支柱穴と思われ、結んだ線は方形となる。出入口施設に伴うと思われるピットは確認されていない。

炉 1か所。中央からやや北西寄りにあり、平面形は長径112cm、短径68cmの楕円形で、床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央から北西側にかけてがよく焼け赤変硬化している。覆土は焼土粒子、焼土小ブロック



第49図 第22号住居跡実測図

ク、炭化粒子を含む暗褐色土である（第49図）。

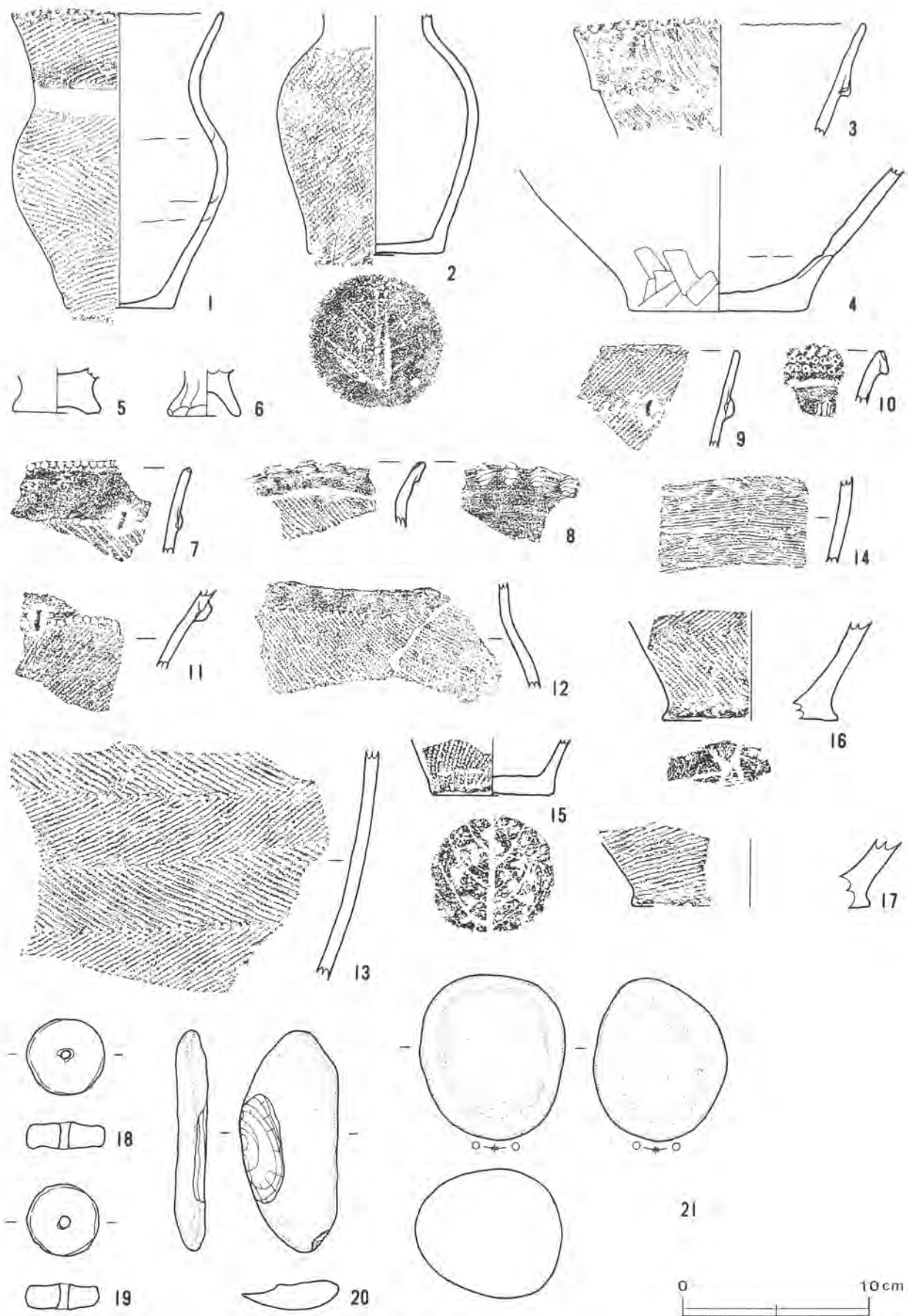
覆土 9層から成る。壁際に褐色土が堆積し、床面全体をロームブロックを含む暗褐色土が覆っている。中層付近からは暗褐色土層が広がりレンズ状堆積となっている。壁際の層は縮まっているが、その他の層はそれほど縮まっていない。流れ込みと思われる弥生式土器片が第3層から出土している。

なお、土層は

第1層	黒褐色	ローム粒子少量	第6層	褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子微量
第2層	暗褐色	ローム粒子少量	第7層	褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子微量
第3層	褐色	ロームブロック・ローム粒子中量	第8層	褐色	ロームブロック多量, ローム粒子少量
第4層	暗褐色	ロームブロック多量, ローム粒子少量	第9層	褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量
第5層	暗褐色	ロームブロック・ローム粒子少量			(第49図)

である。

遺物 弥生式土器細片が343点出土している。第50図1～4は弥生式土器壺片で、1の広口壺はP₂付近の床面近くから横位で、2の頸部から底部はP₃付近の床面直上から横位でそれぞれ出土している。3の口縁部から頸部は南東壁際の覆土第3層から破片で、4の胴部下位から底部は南東壁中央寄りの覆土上層から逆位で出土



0 10 cm

第50图 第22号住居跡出土遺物実測・拓影図

している。5・6は弥生式土器高坏の脚部で、5はP付近の床面直上から、6はP付近の床面近くからそれぞれ出土している。18・19は紡錘車で、18は中央部の覆土中層から、19は西コーナー部の床面直上からそれぞれ出土している。20の穂摘具は覆土中から、21の磨石は南西壁寄り中央部の床面直上から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第50図 1	広口壺 弥生式土器	A 11.3	平底で、胴部は外傾して立ち上がり、頸部から口縁部は外傾する。最大径を胴部上位にもつ。頸部を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。口唇部には縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 明赤褐色	P90 PL39 100% 二次焼成 外面剝離 内・外面炭化物付着 床面付近
		B 16.0			
		C 5.9			
2	壺 弥生式土器	B (13.0)	頸部から口縁部欠損。平底で、胴部はやや外反して立ち上がり、頸部はほぼ垂直である。胴部と頸部の境を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。底面には浅い木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい黄橙色	P91 PL39 80% 内面剝離 P ₃ 付近床面直上
		C 7.4			
3	広口壺 弥生式土器	A [15.2]	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外傾し、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。口縁部下端は、縄文原体による押圧が施され、その後2個1組の瘤が貼られている。口唇部は縄文原体により押圧されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい赤褐色	P92 5% 覆土第3層
		B (6.1)			
4	壺 弥生式土器	B (7.9)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は内彎して立ち上がる。胴部下位はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 橙色	P93 20% 内・外面剝離 覆土上層
		C 9.7			
5	高坏 弥生式土器	B (2.5)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 にぶい黄橙色	P94 10% 外面剝離 P ₄ 付近床面直上
		D 4.7			
		E 1.3			
6	高坏 弥生式土器	D 3.9	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。脚部外面はヘラケズリ後、横位のナデ。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 橙色	P95 5% 床面付近
		E (2.6)			

第50図7～17は、第22号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7～11は口縁部片で、いずれも複合口縁である。7は口縁部下端と口唇部に縄文原体による押圧が施され、さらに瘤が貼られている。8は頸部に細い附加条1種（附加2条）の縄文が施され、口縁部には櫛歯状工具で内面から押圧されている。9は附加条1種（附加2条）の縄文を施した後に、縄文原体により口唇部と口縁部下端に押圧をし、さらに瘤が貼られている。10は口縁部にヘラ状工具によるキザミ目と竹管状工具による刺突文が2条施され、頸部は縦位の櫛描文がわずかに認められる。11は口縁部下端に縄文原体による押圧が施され、さらに瘤が貼られている。12は頸部から胴部にかけての破片で、頸部を無文帯とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。13・14は胴部片、15～17は底部片で、13・15・16は附加条1種（附加2条）、14・17には撚糸文が施されている。15・16の底面には木葉痕がある。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第50図18	紡錘車	4.1	4.2	1.4	5.0	22.6	100	覆土中層	DP14 PL54
19	紡錘車	3.9	3.9	1.3	6.0	29.3	100	床面直上	DP15 PL54

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第50図20	穂摘具	11.8	5.3	1.8	135.4	砂岩	覆土中	Q17 PL62
21	磨石	8.8	7.8	6.9	691.8	砂岩	床面直上	Q18 PL61

第23号住居跡 (第51図)

位置 A地区北部, F8g₇区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.64m, 短軸4.13mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-133°-E。

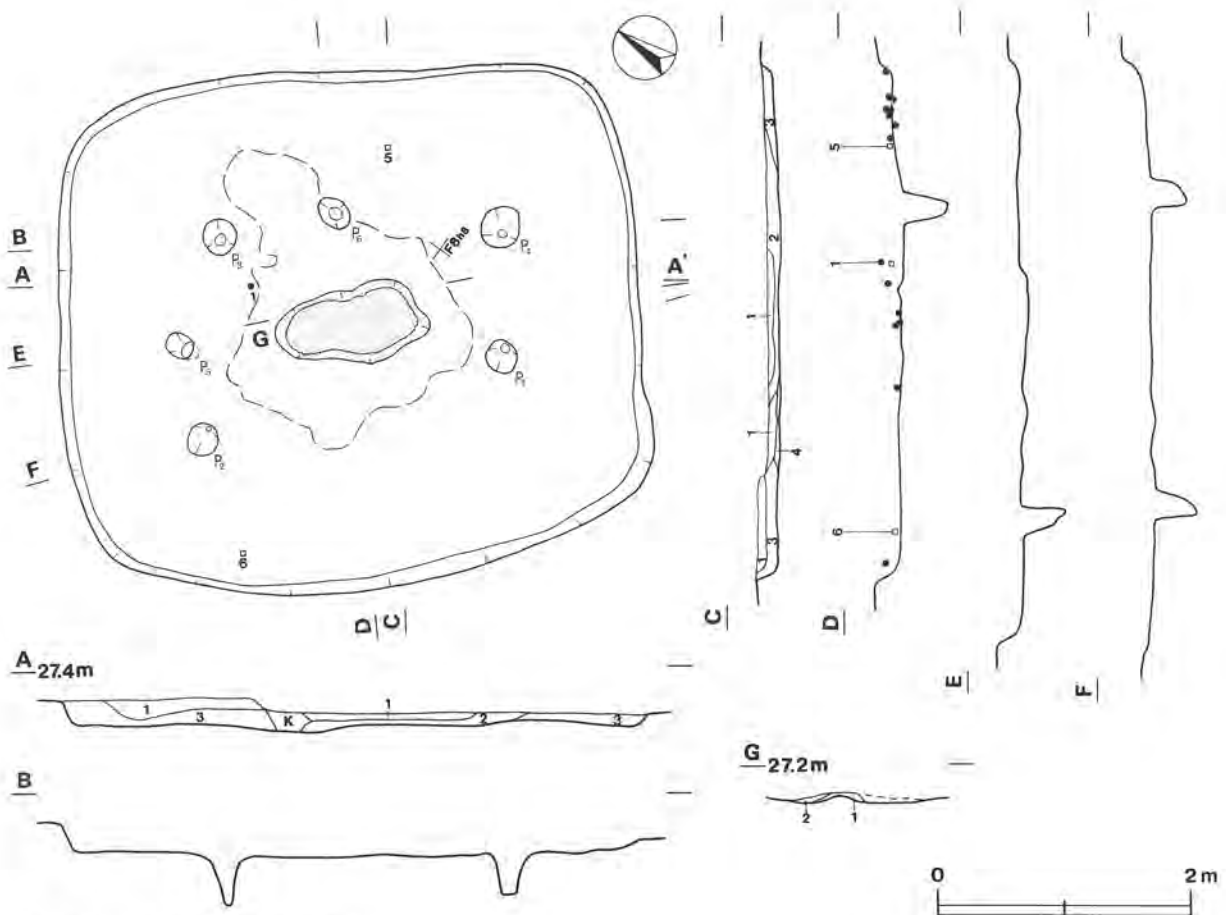
壁 壁高8~22cmで, 外傾して立ち上がる。

床 凹凸があり, 炉の周辺から北西壁寄りにかけてがよく踏み固められている。

ピット 6か所。P₁・P₂・P₃は, 径24~28cmの円形で, 深さ32~40cmである。P₄・P₆は, 長径30~36cm, 短径20~32cmの楕円形で深さ33~38cmである。P₁~P₄は, 支柱穴と思われ, 結んだ線は方形となる。P₆は, 補助柱穴と考えられる。P₅は, 長径22cm, 短径18cmの楕円形で深さ37cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P₅は他の住居跡の出入口施設のピットに比べ位置が反対側になるが, 南側に大きく傾斜して南東壁の上方向に向かうため, 明らかに柱とは別の性格をもつピットと判断した。

炉 1か所。ほぼ中央にあり平面形は, 長径116cm, 短径64cmで, 床を10cm掘り込んだ地床炉である。炉床は, 中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は, 第1層が焼土粒子中量の黒褐色土, 第2層はローム粒子少量含む暗褐色土である (第51図)。

覆土 4層から成る。流れ込みと思われる褐色土が壁際から床面にかけて堆積し, 床面中央部には暗褐色土が堆積している。北西壁寄りに攪乱がある。流れ込みと思われる弥生式土器片が北コーナー付近の第3層から出土している。



第51図 第23号住居跡実測図

なお、土層は

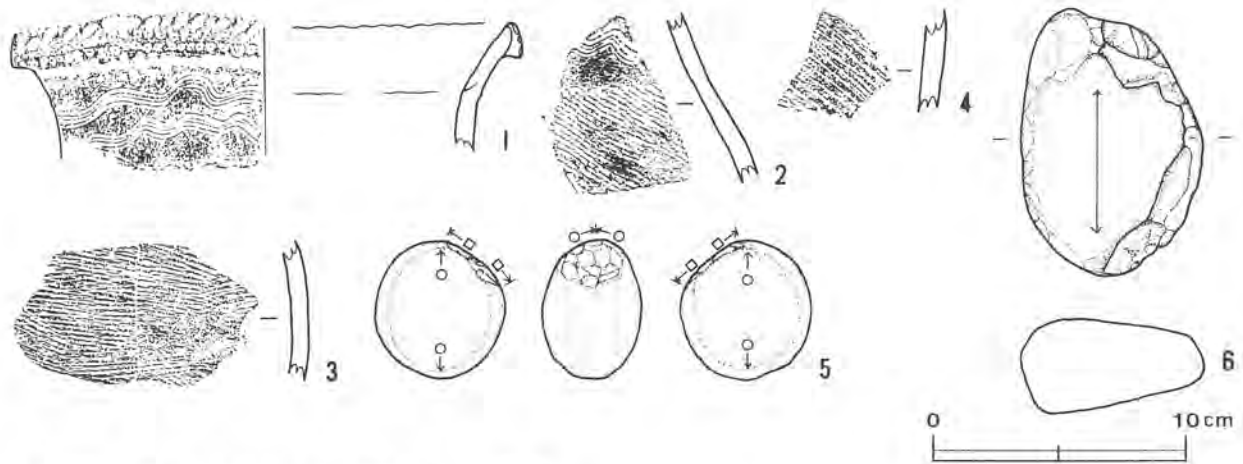
第1層	暗褐色	炭化・焼土粒子少量, 炭化・焼土小ブロック少量	第3層	褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子微量
第2層	暗褐色	ロームブロック少量, 炭化・焼土粒子少量, 炭化・焼土小ブロック少量	第4層	褐色	ローム大ブロック少量, ローム粒子多量

(第51図)

である。

遺物 弥生式土器細片が103点出土している。第52図1は弥生式土器壺の口縁部で、P₃付近の覆土上層から、5の磨石は北東壁寄りの覆土下層から、6の砥石は北西壁寄りの覆土下層から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。



第52図 第23号住居跡出土遺物実測・拓影図

第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第52図 1	広口壺 弥生式土器	A [19.4] B (5.1)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外反する。口縁部は、4本櫛歯による横走波状文が施されている。口唇部には棒状工具によるキザミ目と竹管状工具による2条の刺突文が周回している。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 にぶい黄橙色	P96 PL39 5% 外面スス付着 覆土上層

第52図2～4は、第23号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は頸部から胴部にかけての破片で、頸部には櫛歯状工具による横走波状文、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。3・4は胴部片で、どちらも撚糸文が施されている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第52図5	磨石	5.5	5.1	3.9	139.1	グリーンタフ	覆土下層	Q19 敲石兼用 PL61
6	砥石	(10.7)	(7.3)	(3.8)	(341.2)	砂岩	覆土下層	Q20 破片

第24号住居跡 (第53図)

位置 A地区北部, F8h₃区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は, 西コーナー部が第3号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.00m, 短軸4.79mの隅丸方形である。

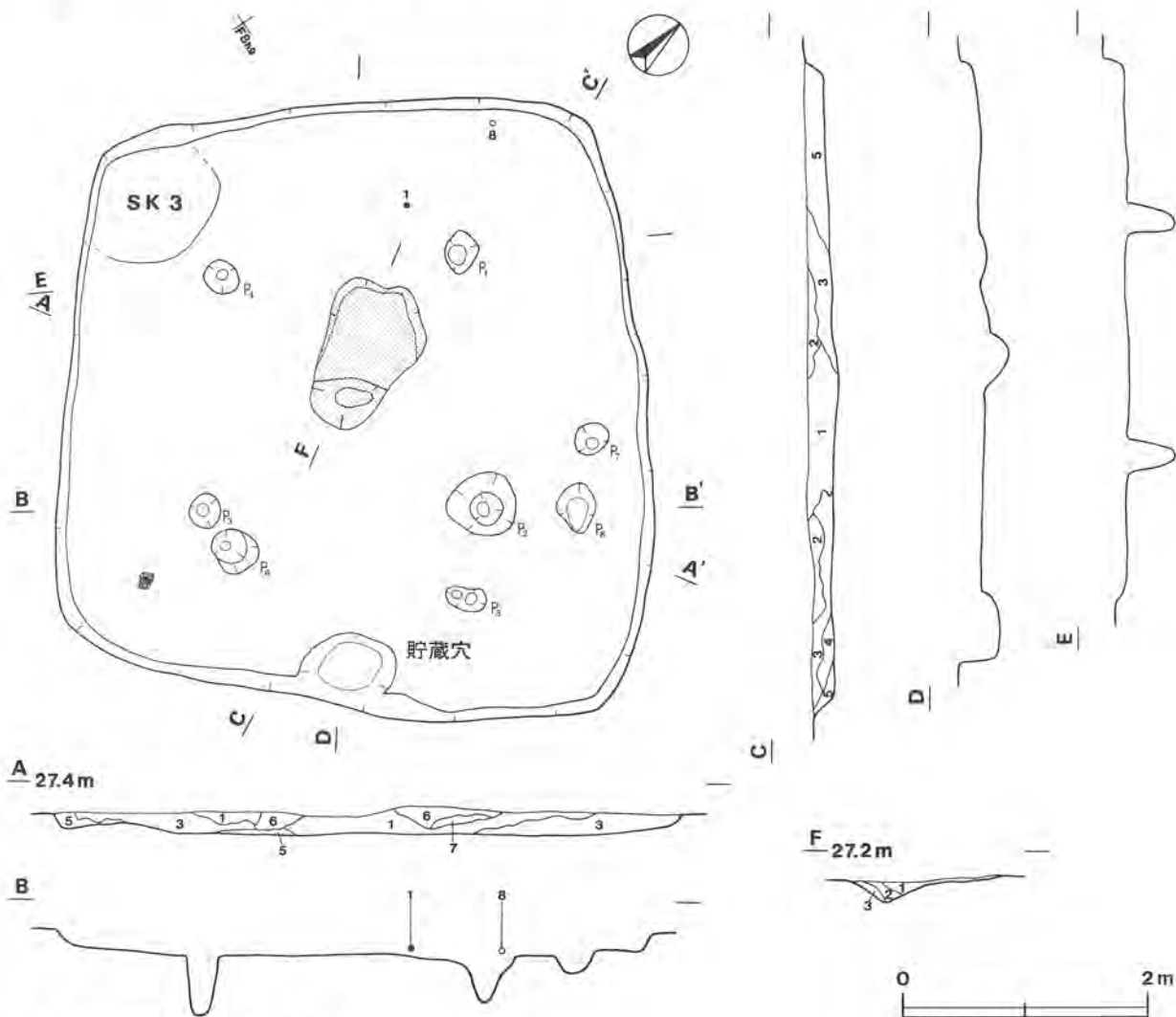
主軸方向 N-53°-W。

壁 壁高8~20cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。

ピット 8か所。P₁~P₃・P₆~P₈は, 長径30~58cm, 短径26~52cmの楕円形で深さ17~53cmである。P₄は径28cmの円形で深さ42cmである。P₁~P₄は支柱穴, P₆~P₈は補助柱穴と思われ, 支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は長径34cm, 短径20cmの楕円形で, 深さ33cmの出入り口施設に伴うピットと考えられる。

炉 1か所。中央から北西寄りにあり, 平面形は長径130cm, 短径86cmの不整楕円形で, 床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は南東部が大きく16cm程の深さまで掘り込まれ, 摺鉢状になっている。炉床は中央部が赤変硬化している。覆土は, 第1層が焼土小ブロック多量, 焼土粒子多量, 炭化粒子少量の暗赤褐色土, 第2層はローム小ブロック少量, 焼土・炭化粒子少量含む黒褐色土, 第3層は焼土・ローム粒子少量, 炭化粒子中量で軟質の暗赤褐色土である (第53図)。



第53図 第24号住居跡実測図

貯蔵穴 1か所。南東壁中央部に付設されており、平面形は長径76cm、短径58cmの隅丸方形で深さ17cmである。底面は皿状で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。南東壁は住居跡の壁から連続して掘り込まれている。

覆土 7層から成る。壁際にはロームブロックを含むにぶい褐色土が堆積し、床面中央は暗褐色土で上層まで1層で成り、レンズ状堆積の形態をとっていない。また、一部によく締まっている層が確認できたことや、下層に巨大なロームブロックがあり、そのようなことから人為堆積と考えられる。

なお、土層は

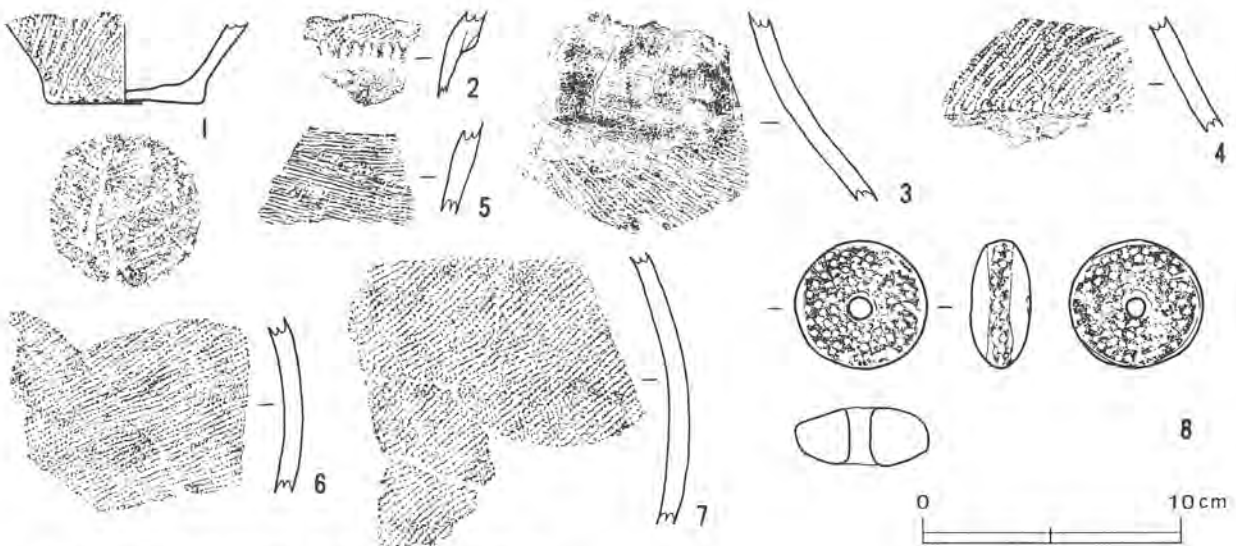
第1層 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土・炭化粒子微量	第5層 鈍い褐色	ローム粒子多量, ロームブロック少量
第2層 褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量	第6層 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量
第3層 褐色	ローム粒子中量, 炭化・焼土粒子微量	第7層 暗褐色	ローム粒子少量
第4層 褐色	ローム粒子少量, 黒色ブロック少量		

(第53図)

である。各層から弥生式土器片が出土している。

遺物 弥生式土器細片が173点、須恵器片が1点出土している。第54図1の弥生式土器壺底部はP₁付近の床面直上から、8の紡錘車は北コーナー近くの床面直上から出土している。アプライト礫は25点(大4, 中4, 小17)出土しており、総重量は732.1gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。



第54図 第24号住居跡出土遺物実測・拓影図

第24号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第54図 1	壺 弥生式土器	B (3.2) C 6.0	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部はやや内彎気味に立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面に木葉痕がある。	砂粒, 石英, 長石, スコリア 普通 にぶい褐色	P ₉₇ PL39 5% 二次焼成 内面炭化物付着 P ₁ 付近床面直上

第54図2～7は、第24号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は縄文施文の複合口縁で、下端には棒状工具によるキザミ目が施されている。3・4は頸部片で、頸部を無文帯とし、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。5～7は縄文施文の胴部片で、縄文原体は5が撚糸、6・7は附加条1種(附加2条)である。

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第54図8	紡錘車	5.2	5.2	2.3	9.0	60.9	100	床面直上	DP16 PL54

第25号住居跡 (第55図)

位置 A地区北部, F9e₂区を中心に確認されている。

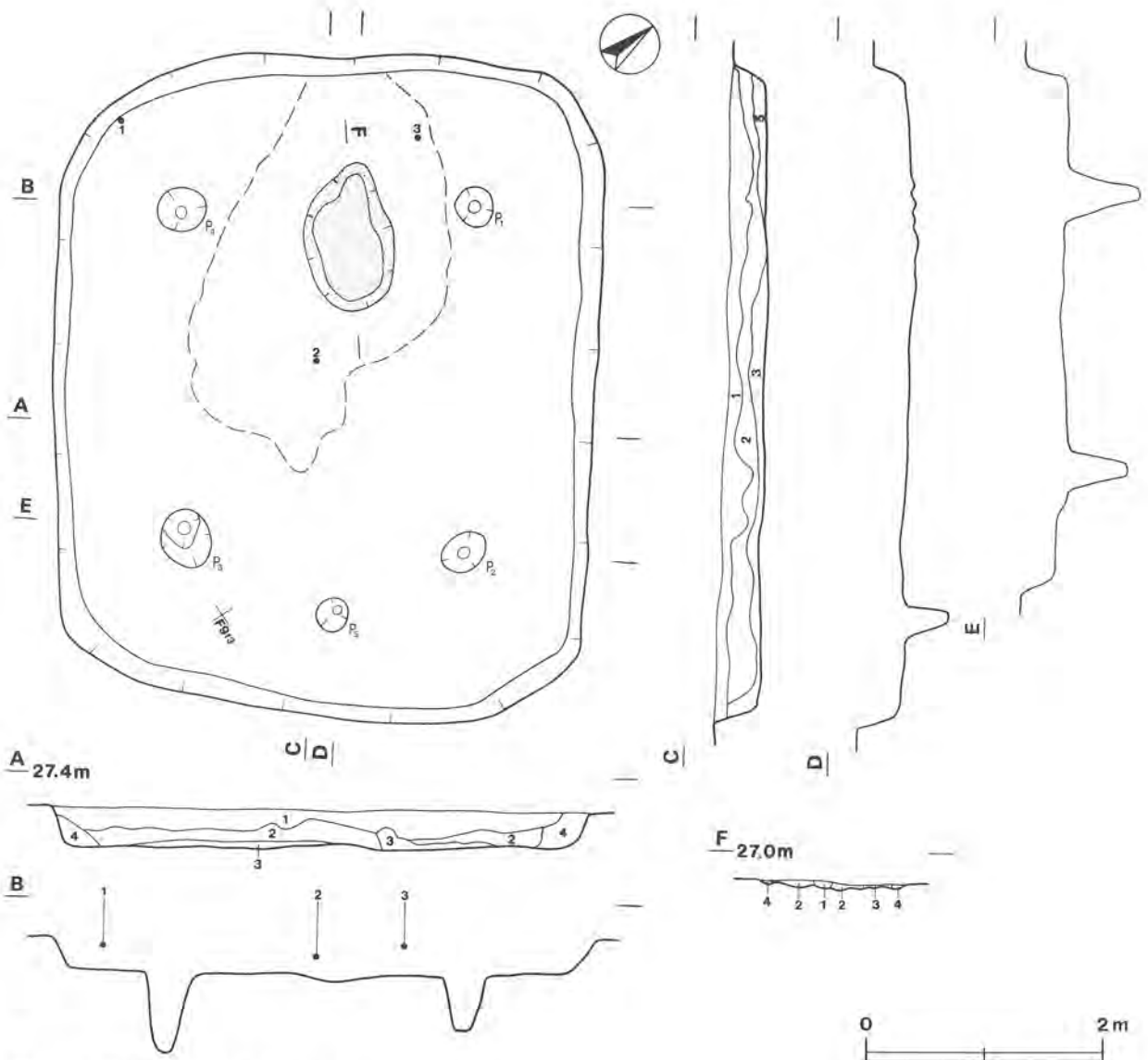
規模と平面形 長軸5.67m, 短軸4.63mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-53°-W。

壁 壁高25~38cmで, 外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 炉からP₃周辺にかけてがよく踏み固められている。

ピット 5か所。P₁~P₄は, 長径36~52cm, 短径32~44cmの楕円形で深さ48~70cmである。P₁~P₄は支柱穴と



第55図 第25号住居跡実測図

思われ、結んだ線は方形となる。P₁は、径30cmの円形で深さ41cmの出入り口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。北西壁寄りでP₁とP₂の中間にあり、平面形は長径128cm、短径76cmの不整楕円形で、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、全体によく焼け赤変硬化している。覆土は、第1層が焼土小ブロック中量、焼土粒子中量、炭化粒子少量のふい赤褐色土、第2層は焼土小ブロック少量、焼土粒子多量、炭化粒子少量の暗赤褐色土、第3層は焼土粒子多量、焼土小ブロック中量のふい赤褐色土、第4層は焼土粒子少量、ローム中ブロック少量の褐色土である（第55図）。

覆土 5層から成る。北西壁際は焼土粒子を含む暗褐色土が薄く堆積し、他の壁際から中央部にかけては褐色土が堆積している。下層から中層にかけて層面が不連続であったり、大きな波状に成っているところがあるなど人為堆積の可能性が考えられる。

なお、土層は

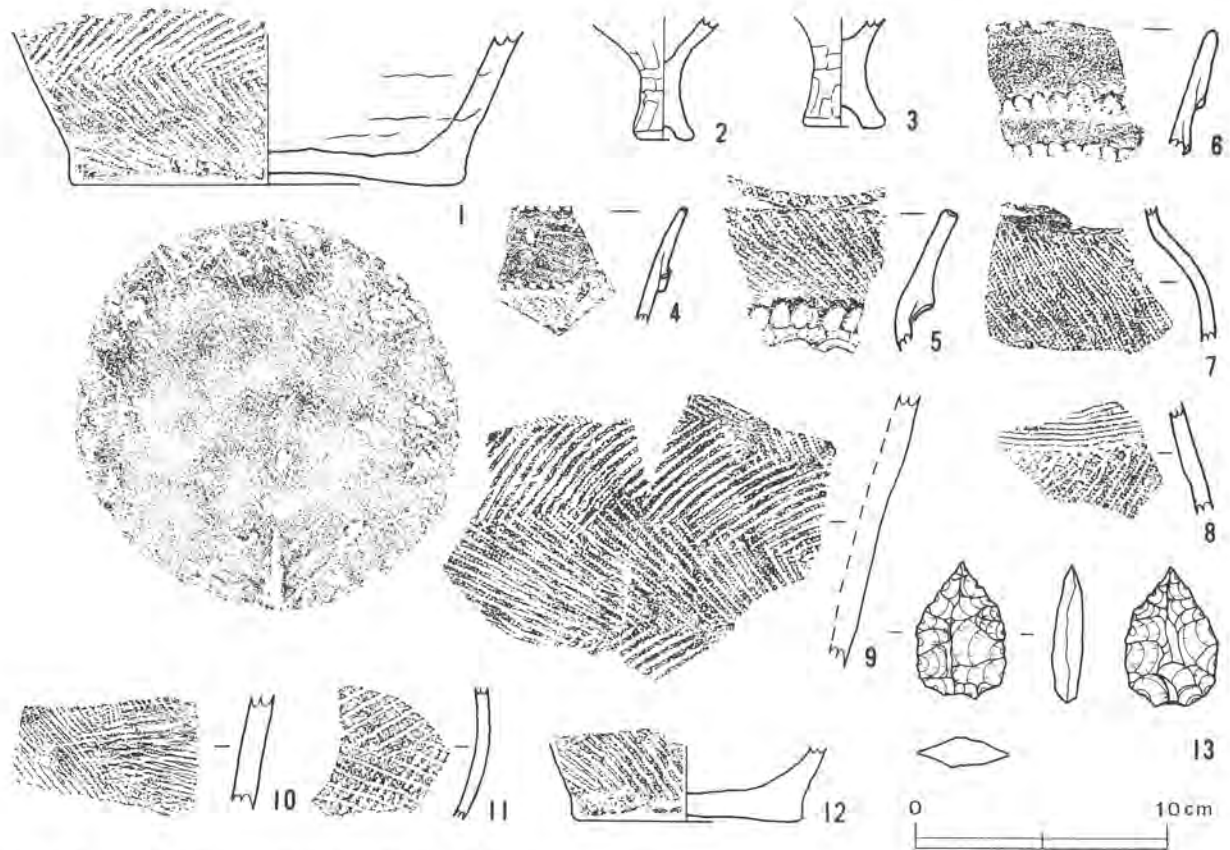
第1層 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
 第2層 褐色 焼土粒子微量、ローム粒子少量
 第3層 褐色 ローム粒子少量

第4層 褐色 ローム中ブロック少量、ローム粒子少量
 第5層 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量、ローム粒子微量
 (第55図)

である。流れ込みと思われる弥生式土器片が中・下層から出土している。

遺物 弥生式土器細片が335点出土している。第56図1は弥生式土器壺の底部で、西コーナーの覆土上層から斜位で、2・3の弥生式土器高坏の脚部は2が中央部の床面近くから、3は北西壁寄りの覆土上層からそれぞれ出土している。13の石鏃は覆土中からである。アプライト礫は1点（中）出土しており、重量は49.8gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第56図 第25号住居跡出土遺物実測・拓影図

第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・焼成・色調	備 考
第56図 1	壺 弥生式土器	B (6.0)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底面には浅く木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 橙色	P98 10% 内面剝離 覆土上層
		C 15.6			
2	高 坏 弥生式土器	B (4.9)	脚部から坏部下位にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は、わずかに内彎して立ち上がる。脚部から坏部の外面は、ヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明黄褐色	P99 PL39 40% 内・外面摩滅 中央部床面付近
		D 2.4			
		E 2.5			
3	高 坏 弥生式土器	B (4.9)	脚部から坏部下位にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部は、外傾して立ち上がる。脚部外面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 明黄褐色	P100 PL39 30% 外面摩滅 覆土上層
		D 2.4			
		E 2.5			

第56図4～12は、第25号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4～6は複合口縁で、4の頸部と5の口縁部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。4の口唇部と口縁部下端には縄文原体による押圧が施され、さらに瘤が貼られている。5と6の口縁部下端は棒状工具により押圧されている。7・8は頸部から胴部にかけての破片で、頸部は7が無文帯、8は櫛歯状工具による横走文で、胴部はどちらも附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。9～11は胴部片で、9は内面の剝離が著しい。縄文原体は9が附加条1種(附加2条)、10は撚糸、11は附加条2種(附加1条)である。12は底部片で胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第56図13	石 鏃	2.8	1.8	0.6	2.8	チャート	覆土中	Q23 PL60

第26号住居跡 (第57図)

位置 A地区北部、F9d₄区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.60m、短軸4.88mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-28°-W。

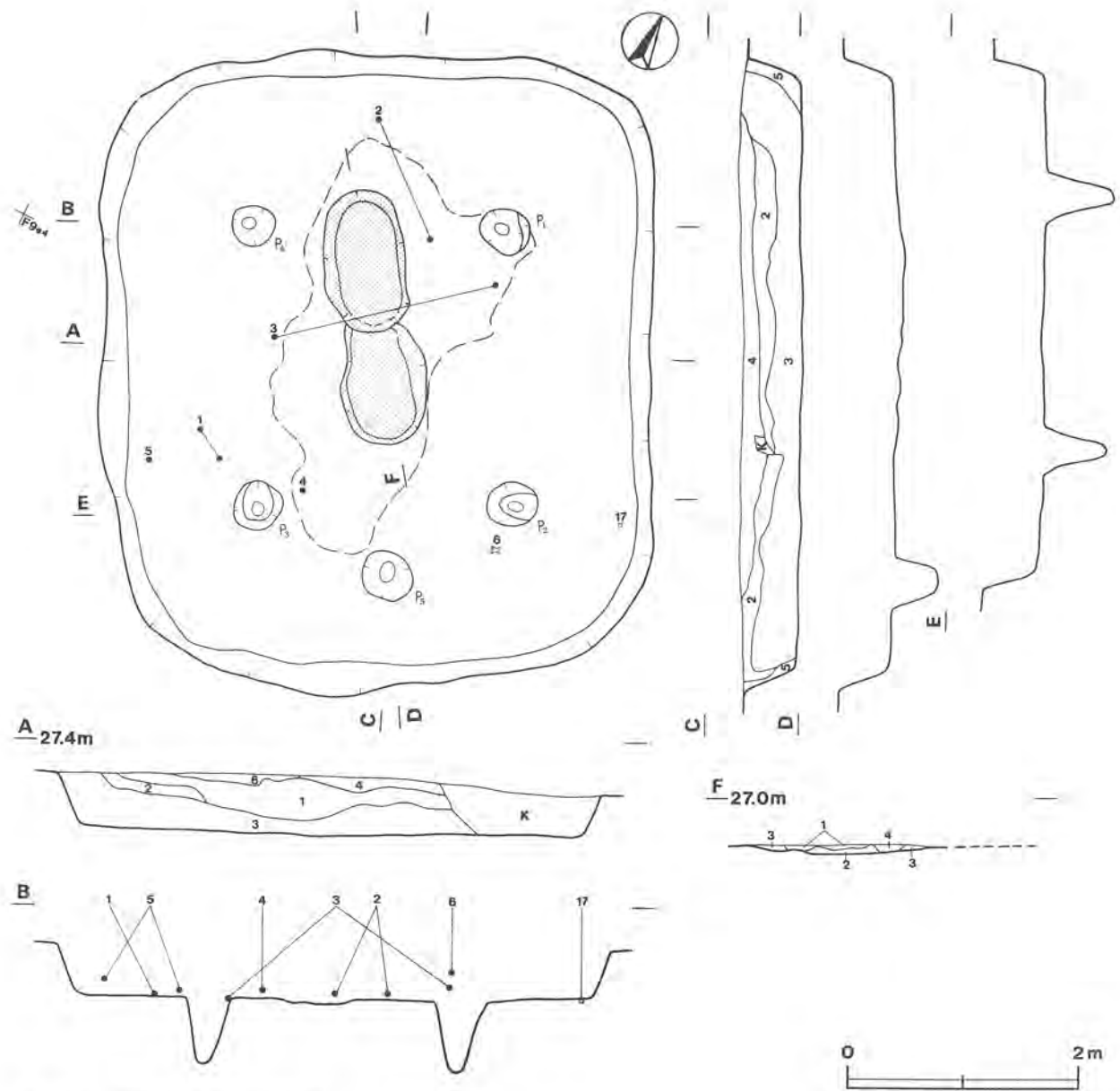
壁 壁高40～46cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、炉周辺がよく踏み固められている。

ピット 5か所。P₁～P₄は、長径34～46cm、短径38～42cmの楕円形で深さ55～64cmである。P₁～P₄は主柱穴と思われる、結んだ線は方形となる。P₅は、径46cmの円形で深さ42cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 2か所。炉₁は中央からやや北西寄りにあり、平面形は長径124cm、短径74cmの楕円形で、床を12cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、全体によく焼け赤変硬化しており、北西側がさらに下がっている。炉₂は、ほぼ中央にあり、平面形は長径[116]cm、短径74cmの不整楕円形で、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、残存状況は悪いが部分的に焼土ブロックが確認でき、全体的に焼け赤変硬化していたものと思われる。2基の炉はわずかに重複しており時期差があると考えられるが、覆土から新旧関係は判断できない。しかし、炉床やプランがしっかりしていること、当遺跡での他の住居跡では時期が新しくなるにつれ炉が中央から壁寄りになる傾向があること等から炉₂よりも炉₁の方が新しいと考えられる。炉₂の覆土は、第1層が焼土粒子中量、ローム粒子中量、焼土ブロック中量の明褐色土、第2層は焼土粒子多量、ローム粒子中量、焼土ブロック中量の明赤褐色土、第3層はローム粒子中量、焼土・炭化粒子少量の褐色土、第4層はローム粒子少量、焼土粒子少量の褐色土である(第57図)。

覆土 6層から成る。壁際から床面にかけて炭化粒子を含む暗褐色土が厚く堆積しているが、壁際の一部には



第57図 第26号住居跡実測図

壁の崩れによると思われるロームブロックを含む褐色土が堆積している。北東壁際に大きく攪乱が入っている。

なお、土層は

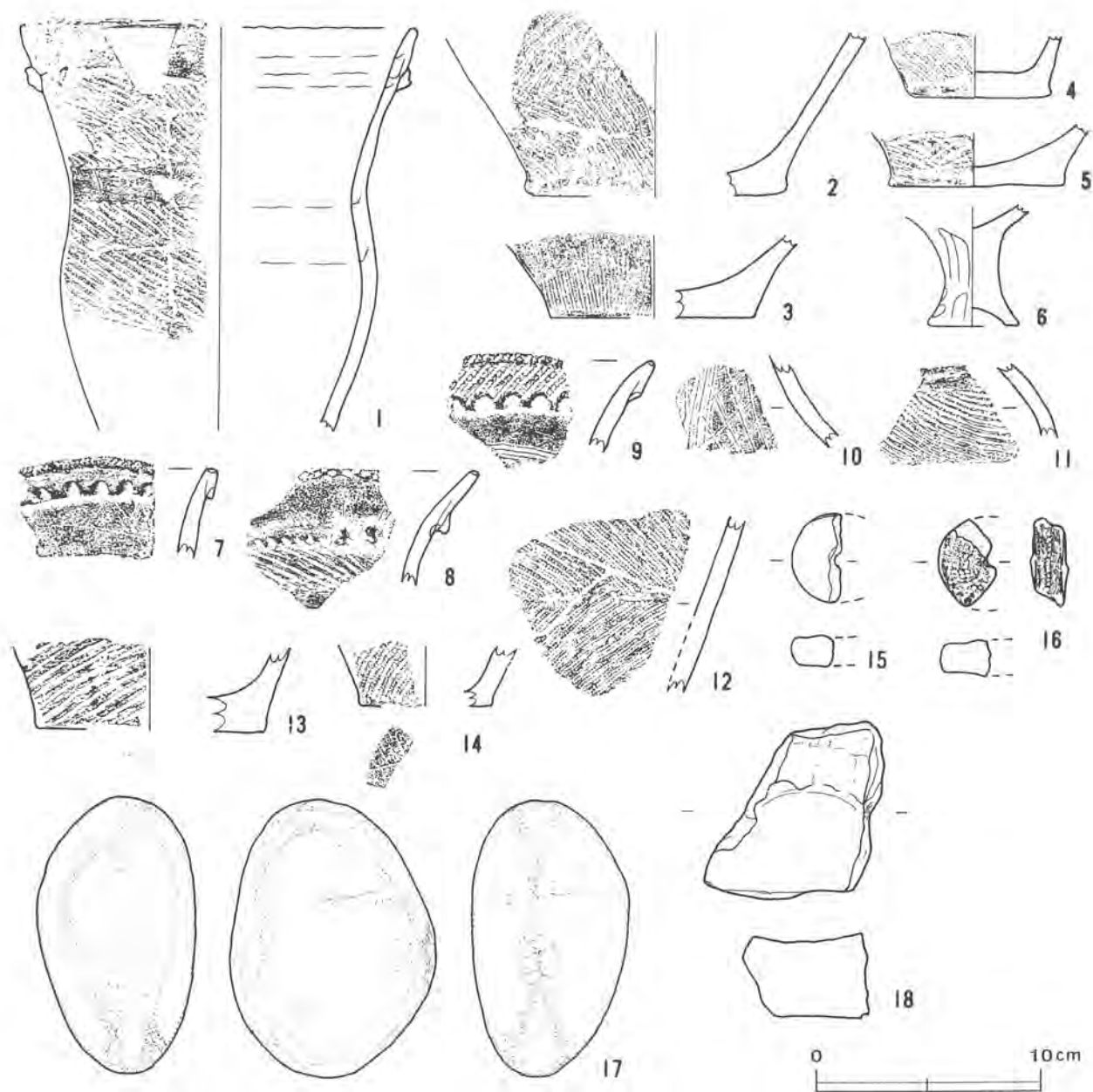
第1層 黒褐色	ローム粒子微量	第4層 黒褐色	ローム粒子微量
第2層 暗褐色	ローム粒子少量	第5層 褐色	ローム大ブロック中量
第3層 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	第6層 褐色	ローム粒子微量 (第57図)

である。流れ込みと思われる弥生式土器片が第3層から出土している。

遺物 覆土中からも多量に弥生式土器細片が出土し、総数832点におよぶ。特に3層上部からが多い。第58図1～5は弥生式土器壺である。1の広口壺は、南西壁寄りの床面直上から破片で出土している。2の胴部下位から底部は、北西壁中央寄りからの破片と炉付近の覆土第3層からの破片とが接合している。3は中央部の覆土第3層中から出土し、2mほど離れた破片2個と接合しており、投棄された可能性が考えられる。4の底部片はP₁付近の覆土第3層から出土している。5の底部は南西壁側の南コーナー寄りの覆土第3層からの2片と接合しており、流れ込みと思われる。6の弥生式土器高坏は、P₂近くの覆土第3層上部から斜位で出土し

ている。15・16の紡錘車はどちらも覆土中から、17の磨石は東コーナー部の床面直上から、18の石皿は覆土中からそれぞれ出土している。アブライト礫は9点（小）出土しており、総重量は39.7gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第58図 第26号住居跡出土遺物実測・拓影図

第58図7～14は、第26号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。7～9は複合口縁部片で、7・9は口唇部に縄文が施され、口縁部下端は棒状工具により押圧されている。8は口唇部と口縁部下端が縄文原体により押圧され、その後瘤が貼られている。10は縦位の櫛描文を施した後、ヘラ状工具により格子目文が施されている。11は頸部から胴部にかけての破片で、頸部を無文とし胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。13・14の底部片は胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施され、14の底面には木葉痕がある。

第26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第58図 1	広口壺 弥生式土器	A [17.8]	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部から口縁部は外傾して立ち上がる。頸部下位と口縁部を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。複合口縁で、下端には等間隔に瘤が貼られている。口唇部には縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい褐色	P102 PL39 20% 南西壁寄りの床面直上
		B (18.5)			
2	壺 弥生式土器	B (7.5)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は内彎気味に立ち上がる。胴部には細目の附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 橙色	P103 PL39 5% 覆土第3層
		C [11.8]			
3	壺 弥生式土器	B (7.5)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部下位外面にハケ目調整が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 浅黄褐色	P104 10% 覆土第3層
		C [11.8]			
4	壺 弥生式土器	B (2.9)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 明黄褐色	P105 5% 内面炭化物付着 覆土第3層
		C 6.4			
5	壺 弥生式土器	B (2.8)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には、附加条1種（附加2条）の縄文が、弧状に施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明黄褐色	P106 5% 内面炭化物付着 覆土第3層
		C 7.9			
6	高環 弥生式土器	B (5.5)	脚部から環部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開き、環部は外傾して立ち上がる。脚部外面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい黄褐色	P107 PL39 30% 覆土第3層
		D 3.8			
		E 3.6			

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第58図15	紡錘車	4.1	(2.3)	1.4	—	(14.6)	50	覆土中	DP17 PL54
16	紡錘車	4.0	(2.5)	1.7	—	(14.9)	40	覆土中	DP18 PL55

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第58図17	磨石	12.7	7.1	8.3	1125.4	砂岩	床面直上	Q24 敲石兼用
18	石皿	(8.1)	(8.2)	(3.8)	(322.4)	花崗岩	覆土中	Q25 破片

第27号住居跡（第59図）

位置 A地区北部、F9c3区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は第28号住居跡の南西壁と床を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸5.14m、短軸4.81mの隅丸方形である。

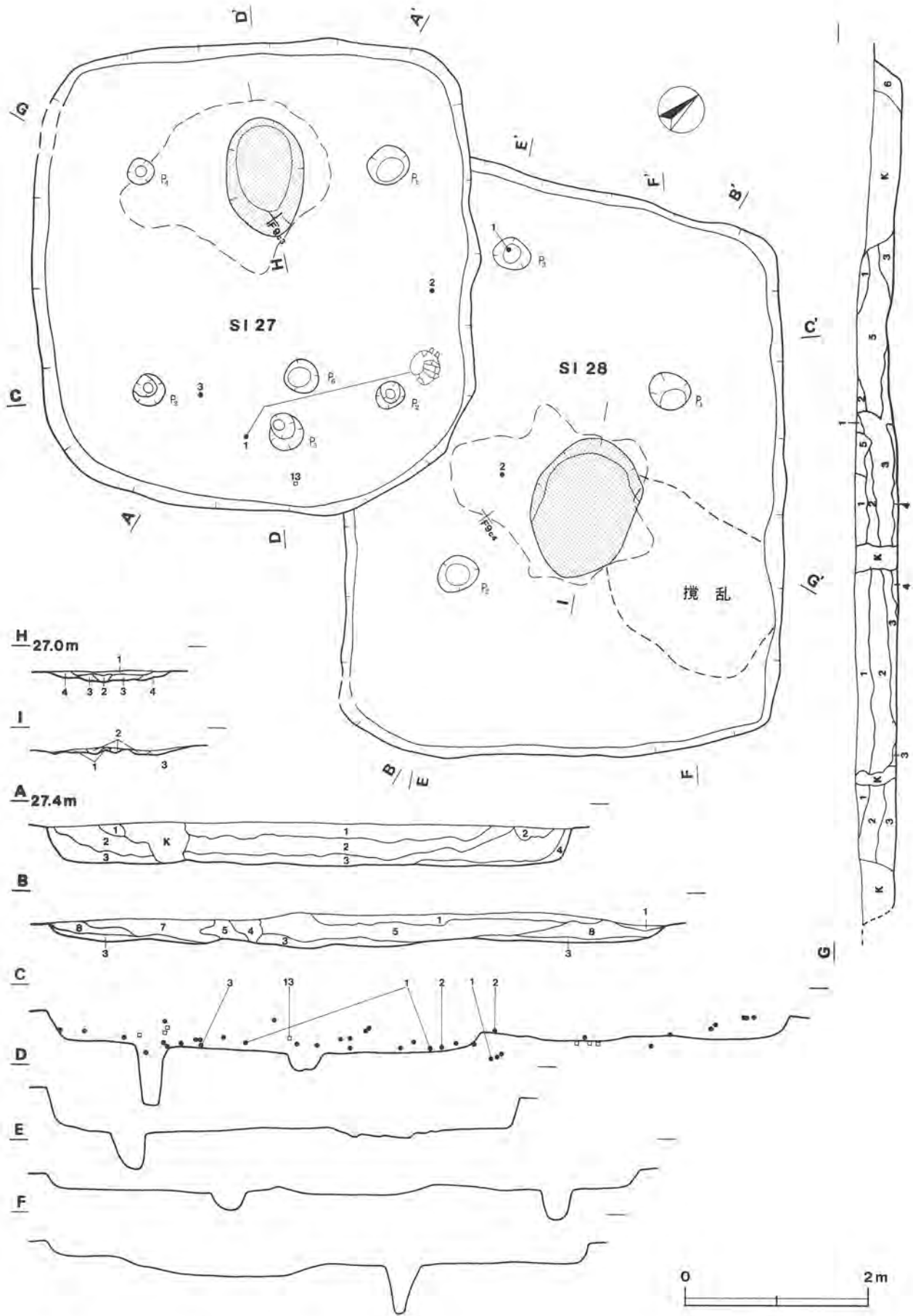
主軸方向 N-53°-W。

壁 壁高34~45cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、中央部は踏み固められている。

ピット 6か所。P₁・P₂・P₃は、長径34~46cm、短径28~40cmの楕円形で深さ65~70cmである。P₄は径28cmの円形で、深さ57cmである。P₁~P₄は、支柱穴と思われ、結んだ線は方形となる。P₅・P₆は出入口施設に伴うピットと思われ、P₅は径36cmの円形で深さ22cm、P₆は長径44cm、短径38cmの楕円形で深さ43cmである。P₆は南東壁側に傾いており、その角度は約69°である。

炉 1か所。P₁とP₄の中間にあり、平面形は長径130cm、短径84cmの楕円形で、床を10cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、全体的によく焼け赤変硬化している。覆土は、第1層が焼土粒子微量の暗褐色、第2層は焼土粒子少量の褐色土、第3層はローム小ブロック少量の暗褐色土、第4層はローム中ブロック中量の鈍い褐色土



第59图 第27·28号住居迹实测图

である (第59図)。

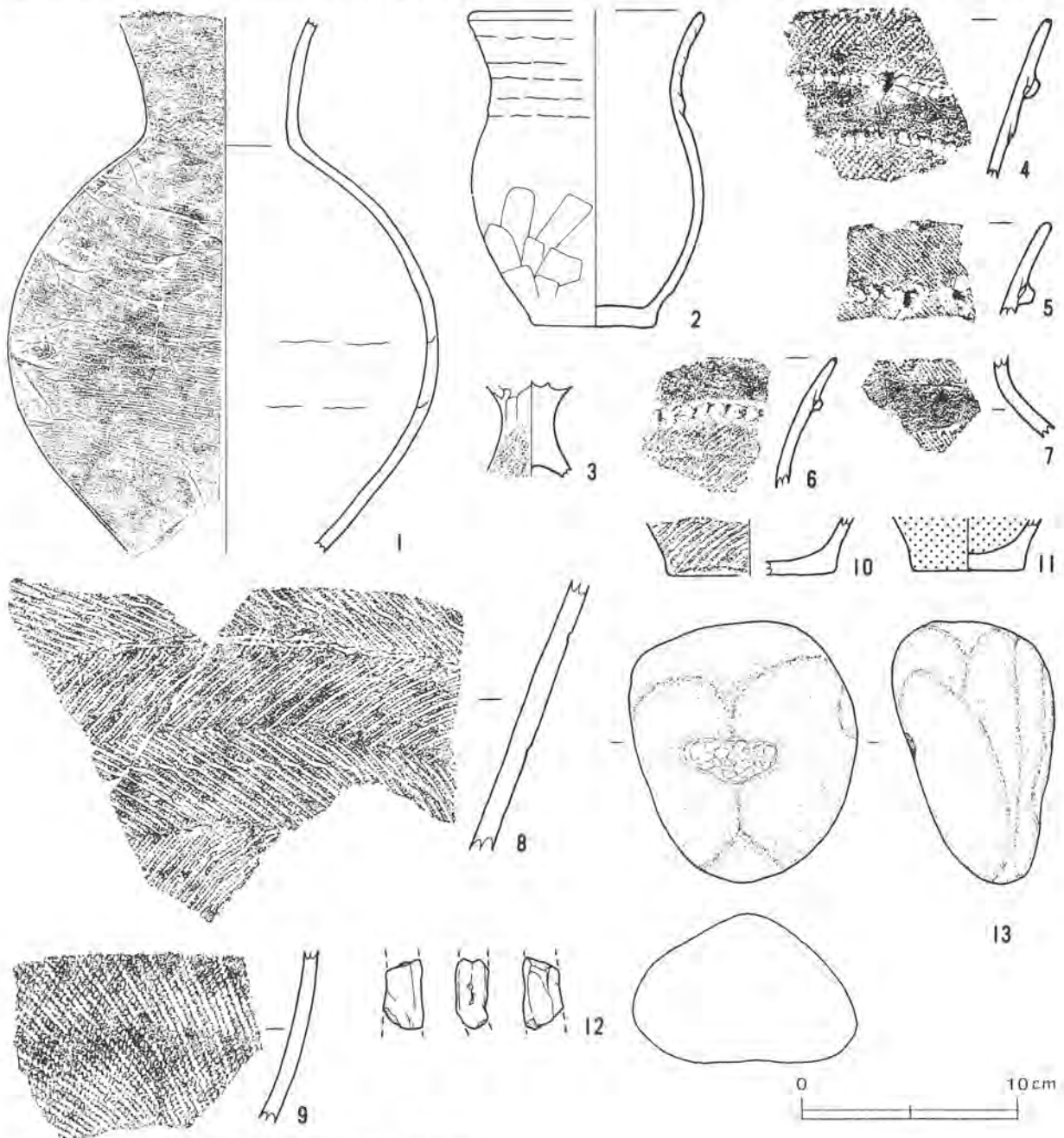
覆土 4層から成る。北東から南東壁際にかけては褐色土が堆積し、薄く床面中央部付近にまで達している。北西から南西壁際は焼土粒子、ロームブロックを含む暗褐色土が堆積し、床面を広く覆っている。中層まで暗褐色土層が広がり、上層は黒褐色土で各層ともレンズ状堆積となっている。木根によると思われる攪乱が数か所見られる。流れ込みと思われる弥生式土器片が第2・3層から出土している。

なお、土層は

第1層	黒褐色	ローム粒子微量	第4層	褐色	ローム粒子中量
第2層	暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量	第5層	黒褐色	ローム粒子微量
第3層	褐色	ロームブロック微量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量			(第59図)

である。

遺物 弥生式土器細片が518点出土し、覆土第2・3層からが多い。第60図1・2は弥生式土器壺で、1は東



第60図 第27号住居跡出土遺物実測・拓影図

コーナー付近の床面直上から一括破片で出土し、それと P₃ 付近の床面近くの破片とが接合している。住居廃絶後間もない時期に、北東壁側から南方向に投棄されたものと考えられる。2 の広口壺は、北東壁の中央部付近床面直上から一括破片で出土している。頸部の外面に明瞭な輪積み痕が有り、意識的に残しているものと思われる。3 の弥生式土器高坏の脚部片は P₃ 付近の床面近くから、13 の凹石は南東壁中央付近の覆土中層から、12 の棒状土製品は覆土中からそれぞれ出土している。アプライト礫は 1 点（小）出土しており、重量は 17.9g である。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第60図 1	壺 弥生式土器	B (33.0)	胴部から頸部にかけての破片。底部欠損。胴部は外彎して立ち上がり球形となり、頸部は外反する。胴部と頸部の境には撚りもどし縄文が施され、それ以外にはハケ目調整されている。頸部内面には横位のナデが施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい橙色	P108 PL40 60% 東コーナー付近 床面直上
2	広口壺 弥生式土器	A [10.4] B 14.6 C 5.9	底部から口縁部にかけての破片。平底で、胴部は内彎して立ち上がり、頸部から口縁部は外反して立ち上がる。胴部外面はヘラケズリ後横位のナデが施されている。頸部から口縁部の外面には意図的に残したと思われる輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明黄褐色	P109 PL40 70% 中央部床面直上
3	高坏 弥生式土器	B (4.5) E 3.4	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。坏部との接合面からの剥離と思われる。脚部には、附加条 1 種（附加 2 条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 にぶい黄褐色	P110 PL40 10% P ₃ 付近床面直上

第60図 4～11 は、第27号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4～6 はいずれも附加条 1 種（附加 2 条）の縄文が施された口縁部片で、5・6 は口縁部下端を縄文原体により押圧し、その後に瘤が貼られている。4 は 2 段の複合口縁で各口縁部下端には縄文原体による押圧を施した後 1 段目には瘤が貼られている。7 の頸部片は頸部下位を無文帯とし、それ以外には附加条 1 種（附加 2 条）の縄文が施されている。8・9 の胴部片と 10 の底部片は、いずれも附加条 1 種（附加 2 条）の縄文が施されている。11 の底部片は内・外面赤彩されている。

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第60図12	棒状土製品	(3.3)	(1.9)	(1.6)	—	(8.1)	—	覆土中	DP19 PL55

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第60図13	凹石	12.1	10.5	7.5	1190.8	砂岩	覆土中層	Q26

第28号住居跡（第59図）

位置 A 地区北部、F9b₄区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の西コーナー部は、第27号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 6.21m、短軸 4.80m の隅丸長方形である。

主軸方向 N-50°-W。

壁 壁高18~26cmで、外傾して立ち上がる。

床 やや凹凸があり、全体的にあまり踏み固められておらず軟らかい。

ピット 3か所。P₁・P₂・P₃は、長径42~52cm、短径36~40cmの楕円形で、深さ22~54cmである。P₁~P₃は、支柱穴と思われる。出入口施設に伴うと思われるピットは確認できていない。P₃は他の住居跡の炉と支柱穴の位置関係から考えて、補助柱穴あるいは出入口施設に伴うピットの可能性がある。

炉 1か所。ほぼ中央にあり平面形は、長径156cm、短径 [112]cmで、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、全体的によく焼け赤変硬化している。北東側の上場は攪乱により大きく破壊されている。覆土は、第1層がローム粒子少量の暗褐色土、第2層は焼土・ローム粒子微量の褐色土、第3層は焼土・ローム粒子微量の灰褐色土である(第59図)。

覆土 8層から成る。褐色土が壁際から広く床面にかけて堆積し、東コーナー付近には大きく攪乱が入っており床面も掘り込まれている。中層には暗褐色土、上層には黒褐色土が厚く堆積している。流れ込みと思われる弥生式土器片が第3・5層から出土している。

なお、土層は

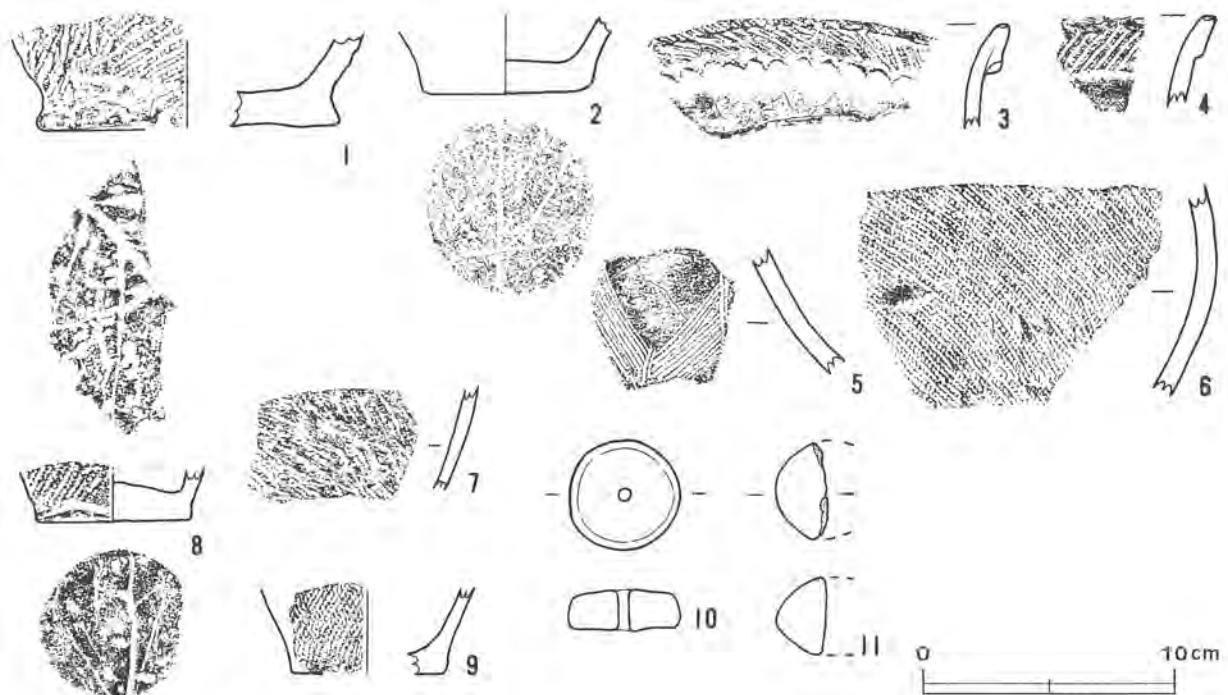
第1層 黒褐色	ローム粒子微量	第5層 暗褐色	ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
第2層 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	第6層 暗褐色	ローム粒子少量
第3層 褐色	ローム粒子少量	第7層 暗褐色	ローム・焼土粒子微量
第4層 黒褐色	ローム粒子微量	第8層 暗褐色	ローム粒子微量

(第59図)

である。

遺物 弥生式土器片が331点出土している。第61図1・2は弥生式土器壺の底部で、1はP₃内壁面に張り付いたような状態で出土し、その他にも別個体の破片が3点あり、柱が抜き取られた後に流れ込んだと思われる。2は中央部床面近くから、10・11の紡錘車は覆土中からそれぞれ出土している。アプライト礫は50点(中3, 小47)出土しており、総重量は449.3である。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。



第61図 第28号住居跡出土遺物実測・拓影図

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・焼成・色調	備 考
第61図 1	壺 弥生式土器	B (3.6) C [12.0]	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は内彎気味に立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 におい黄橙色	P111 5% P ₉ 内覆土中
2	壺 弥生式土器	B (3.0) C 6.8	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には細目の附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが摩滅している。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 におい黄橙色	P112 5% 床面付近

第61図3～9は、第28号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3・4は附加条1種(附加2条)の縄文が施された複合口縁で頸部は無文帯とし、3の口縁部下端は棒状工具により押圧され、4の口唇部は縄文原体による押圧が施されている。5の頸部は櫛歯状工具により山形文が施され、山形文の各折り返し点は平行沈線が施されている。6・7は附加条1種(附加2条)の縄文が施された胴部片である。8・9は縄文施文の底部片で、8の底面には木葉痕がある。

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			孔 径 (mm)	重 量 (g)	現 存 率 (%)	出土地点	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第61図10	紡 錘 車	4.5	4.4	1.7	5.0	39.8	100	覆 土 中	DP20 PL55
11	紡 錘 車	(3.8)	(2.1)	(3.1)	—	(17.0)	40	覆 土 中	DP21 PL55

第29号住居跡 (第62図)

位置 A地区北部、F8d₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.03m、短軸5.16mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-19°-W。

壁 壁高28～34cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、炉とP₉周辺がよく踏み固められている。

ピット 9か所。P₁～P₄・P₇～P₉は、径20～28cmの円形で深さ33～44cmである。P₁～P₄は支柱穴、P₇～P₉は補助支柱穴と思われ、支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅・P₆は長径42～66cm、短径32～40cmの楕円形で深さ21～30cmの出入り口施設に伴うピットと考えられる。

炉 1か所。ほぼ中央にあり、平面形は長径166cm、短径98cmの不定形で、床を12cm掘り込んだ地床炉である。炉床は南東部がよく焼け赤変硬化している。炉床直上からアプライト細礫が3点出土している。北端部はピット状の小さな窪みが有り、覆土や類例からこれは炉に伴うものと判断した。覆土は、第1層は焼土ブロック多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量の暗赤褐色土、第2層は焼土粒子中量、焼土小ブロック中量含む暗赤褐色土、第3層は焼土・ローム粒子中量の褐色土、第4層は焼土粒子・焼土ブロック少量の褐色土である(第62図)。

覆土 5層から成る。壁際にはロームブロックを多量に含む明褐色土が堆積し、中央部には大きく攪乱が入り床面の一部が削り取られているため全体的な層の様相は正確には把握できない。壁際の第3・4層は締まりのある覆土である。

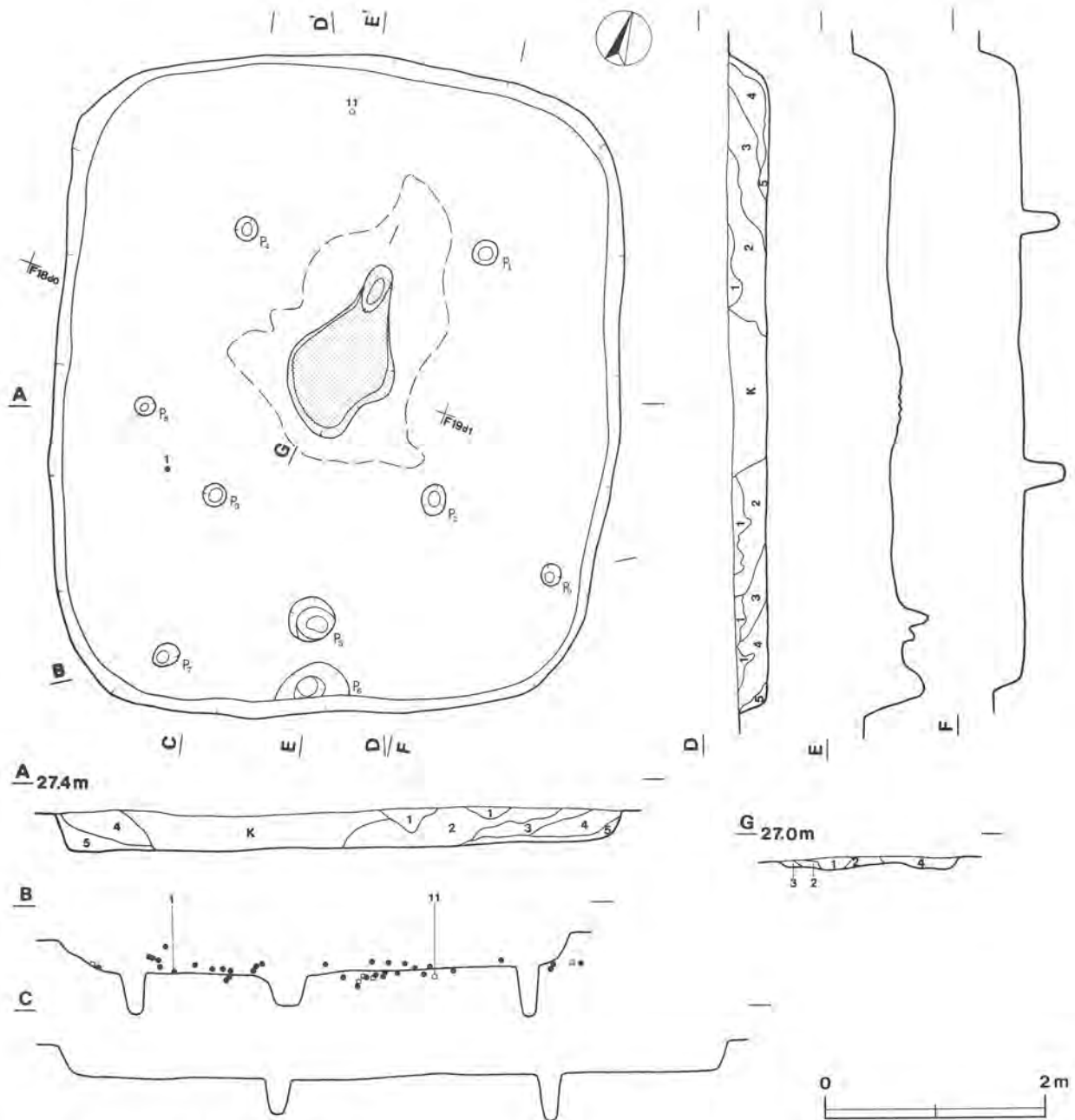
なお、土層は

第1層 暗褐色	ローム粒子少量	第4層 褐色	ローム粒子多量、炭化物微量
第2層 褐色	ローム粒子・ブロック中量、黒色ブロック少量	第5層 明褐色	ロームブロック多量、ローム粒子中量
第3層 褐色	ローム粒子・ブロック多量、焼土粒子微量		(第62図)

である。各層から弥生式土器片が出土している。

遺物 弥生式土器細片が560点、粘土塊が北西コーナー床面直上から1点と南西コーナー床面直上から4点出土している。第63図1は弥生式土器壺の胴部下半から底部でP₁付近の床面近くから、11の紡錘車は北壁際中央の床面直上から出土している。アブライト礫は66点(中2、小64)出土しており、総重量は411.3gである。

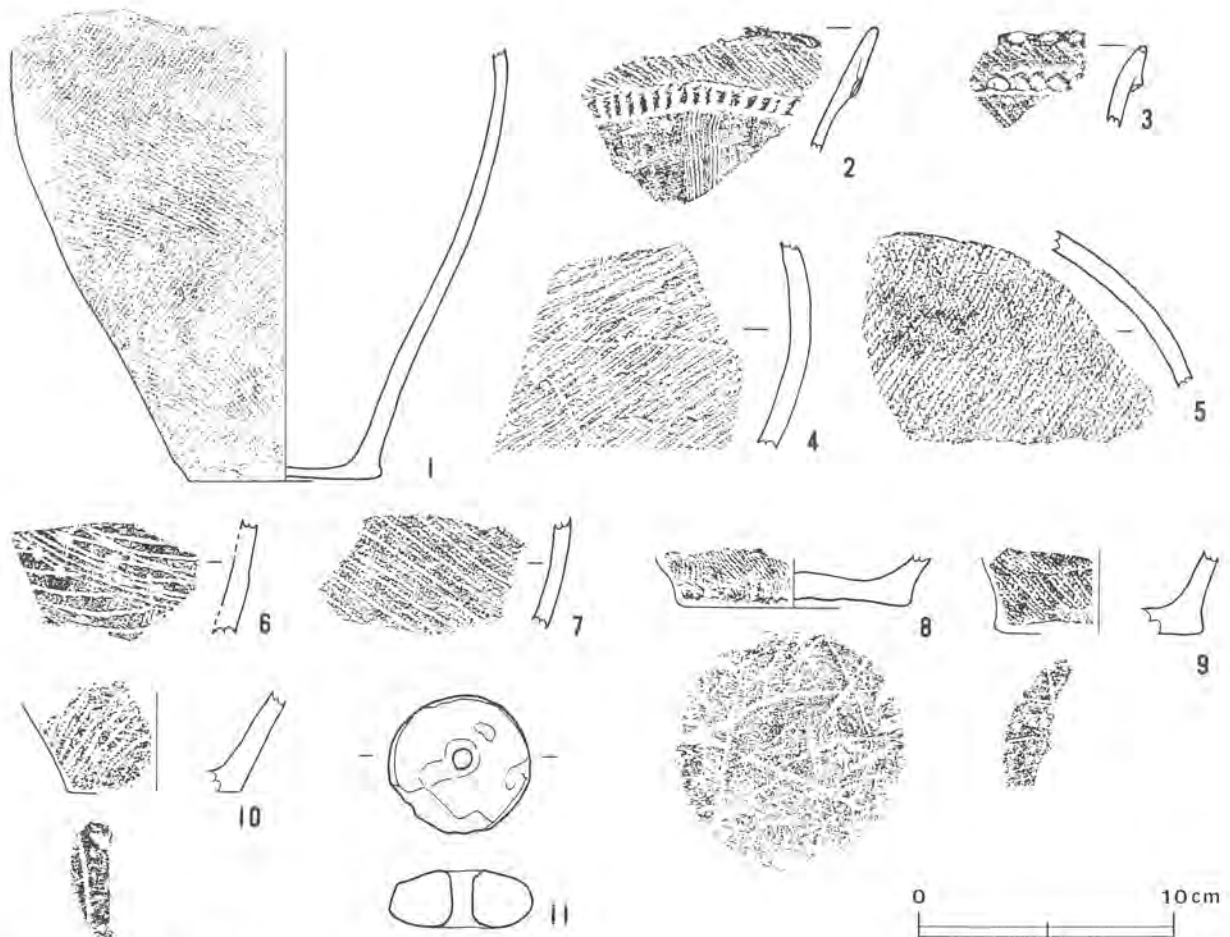
所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。



第62図 第29号住居跡実測図

第29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第63図 1	壺 弥生式土器	B (23.0) C 10.0	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、胴部は外反して立ち上がる。胴部には2種類の附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明褐色	P113 PL40 60% 二次焼成 外面炭化物付着 床面付近



第63図 第29号住居跡出土遺物実測・拓影図

第63図2～10は、第29号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。2・3は複合口縁で附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。2の口縁部下端は隆帯を貼りさらにキザミ目が施され、頸部は縦位の櫛描文が施されている。3は口縁部下端と口唇部に縄文原体による押圧がなされている。4～7は縄文施文の胴部片で、縄文原体は6が撚糸、4・5・7が附加条1種（附加2条）である。8～10は底部片で、胴部には8が撚糸文、9・10には附加条1種（附加2条）の縄文が施されており、いずれも底面には木葉痕がある。

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第63図11	紡錘車	5.5	5.6	2.3	8.0	(69.9)	90	床面直上	DP22 PL55

第30号住居跡（第64図）

位置 A地区北部，F8b区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.29m，短軸4.30mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-17°-W。壁 壁高38～50cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。

ピット 4か所。P₁～P₄は，長径42～62cm，短径36～44cmの楕円形で，深さ44～63cmである。P₁～P₄は，支柱穴と思われ，結んだ線は方形となる。出入り口施設に伴うと思われるピットは確認できなかった。

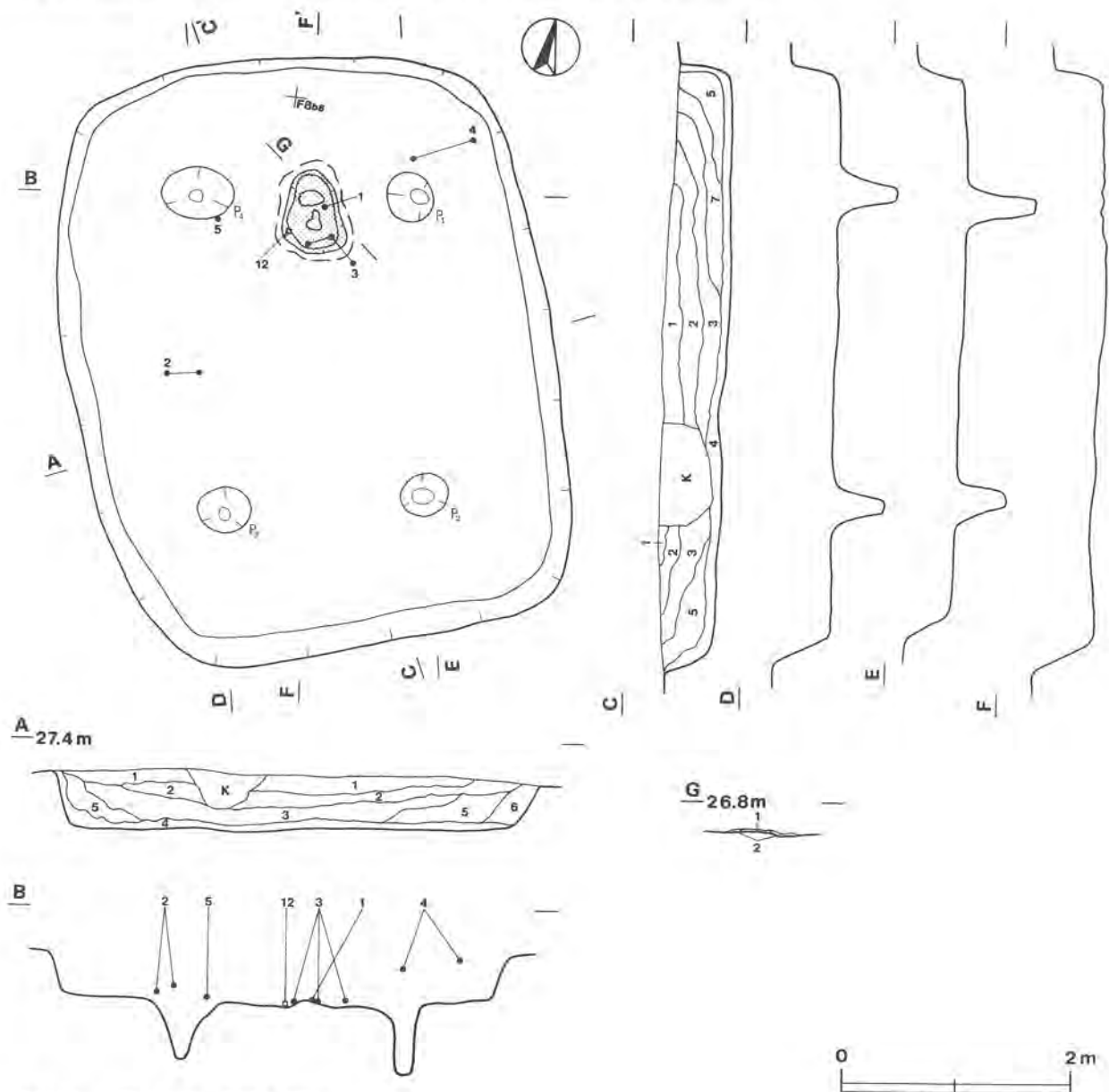
炉 1か所。北壁寄りでP₁とP₄の中間にあり、平面形は長径74cm、短径54cmの不整楕円形で、床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく焼け赤変硬化しており、炉石がやや南寄りに置かれている。覆土は、第1層が焼土小ブロック少量、焼土粒子中量、ローム粒子中量の褐色土、第2層はローム中ブロック中量、焼土粒子少量、ローム粒子中量の褐色土である（第64図）。

覆土 7層から成る。壁際から床面全体にかけて、焼土・炭化粒子を微量に含み締まりのある褐色土が薄く堆積している。中央付近の中層から上層にかけて、攪乱が有るが下層までは達していない。中央部は4層から成るが各層ともレンズ状堆積の様相である。

なお、土層は

第1層	黒褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子微量	第5層	褐色	焼土粒子微量, ローム粒子少量
第2層	暗褐色	焼土粒子微量, ローム粒子中量	第6層	褐色	ローム粒子少量
第3層	暗褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子微量	第7層	暗褐色	ローム粒子少量, 焼土・炭化粒子微量
第4層	褐色	ローム小ブロック少量, 焼土・炭化粒子微量			(第64図)

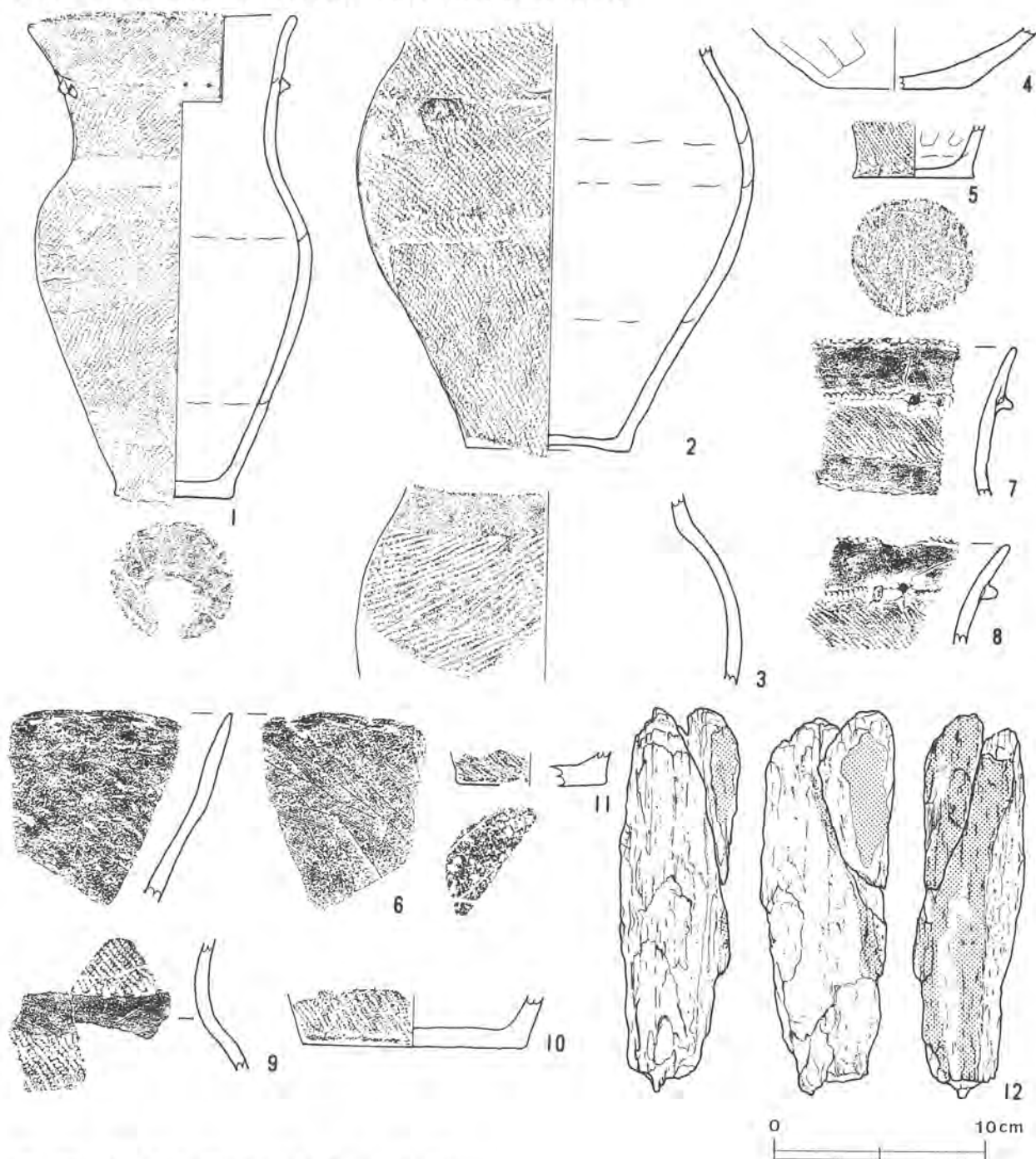
である。流れ込みと思われる弥生式土器片が中・下層から多く出土している。



第64図 第30号住居跡実測図

遺物 弥生式土器細片が271点出土し、床面直上からのものも多い。遺物は中央部から北側に集中しており覆土第4・5層からが多い。第65図1～5は弥生式土器壺で、1の広口壺は炉付近から北コーナーにかけての床面直上から破片で出土しているが、住居廃絶後間もない時期に北東コーナーから南西方向に投棄されたものと考えられ、P₁の底面直上から出土した2個の破片と接合している。したがって、柱は住居廃絶時に抜き取っていると思われる。2の胴部から底部は、西壁中央寄りの床面近くから破片で出土している。3の胴部上位は炉付近の床面直上から破片で、4の底部は北東コーナーの覆土第2層から破片で、5の底部はP₁付近の床面直上からそれぞれ出土している。12は炉石で、董青石ホルンフェルス（筑波石）が使用されている。被熱によりスクリュートーンの部分が赤変している。アプライト礫は2点（大1、小1）出土しており、総重量は188.3gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第65図 第30号住居跡出土遺物実測・拓影図

第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第65図 1	広口壺 弥生式土器	A 16.8	底部から口縁部にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がり頸部から口縁部は外反する。単口縁で、下端は縄文原体により押圧され、さらに2個1組の瘤が5単位貼られている。頸部下位を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。口唇部は縄文原体により押圧されている。最大径を口縁部に持つ。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい橙色	P114 PL40 70% 外面炭化物付着 口縁部上位・胴部 下半摩滅 床面直上
		B 30.7			
		C 7.7			
2	壺 弥生式土器	B (19.4)	底部から胴部にかけての破片。平底で、胴部はやや外反気味に立ち上がる。頸部は無文帯とし、胴部には太目の附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。内面に輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 橙色	P115 PL40 30% 二次焼成 内・外面炭化物付着 床面付近
		C [7.8]			
3	壺 弥生式土器	B (9.0)	胴部上半から頸部下位にかけての破片。胴部は内彎し、頸部は内傾して立ち上がる。頸部は無文帯とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい黄橙色	P116 PL40 20% 外面炭化物付着 炉付近床面直上
4	壺 弥生式土器	A (2.8)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は緩やかに内彎して立ち上がる。胴部外面にはヘラナデが施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明赤褐色	P117 5% 二次焼成 覆土第2層
		B [6.4]			
5	壺 弥生式土器	B (2.5)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。内面はヘラナデされ、また輪積み痕がある。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい黄橙色	P118 5% P ₄ 付近床面直上
		C 5.7			

第65図6～11は、第30号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。6～8は口縁部片で、6の内面はハケ目調整されている。7・8は口唇部と口唇部下端に縄文原体により押圧され、さらに口縁部下端には瘤が貼られている。頸部は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。9は頸部から胴部にかけての破片で、頸部下位を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。10・11は附加条1種（附加2条）の縄文施文の底部片で、11の底面には木葉痕がある。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第65図12	炉石	18.4	5.7	6.3	649.0	重晶石ホルンフェルス	炉床直上	Q27 被熱による赤変

第31号住居跡（第66図）

位置 A地区北端部、F8c区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は第1号古墳の周溝により、北西壁、南東壁の大部分と床面が掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.05m、短軸4.99mの隅丸方形である。

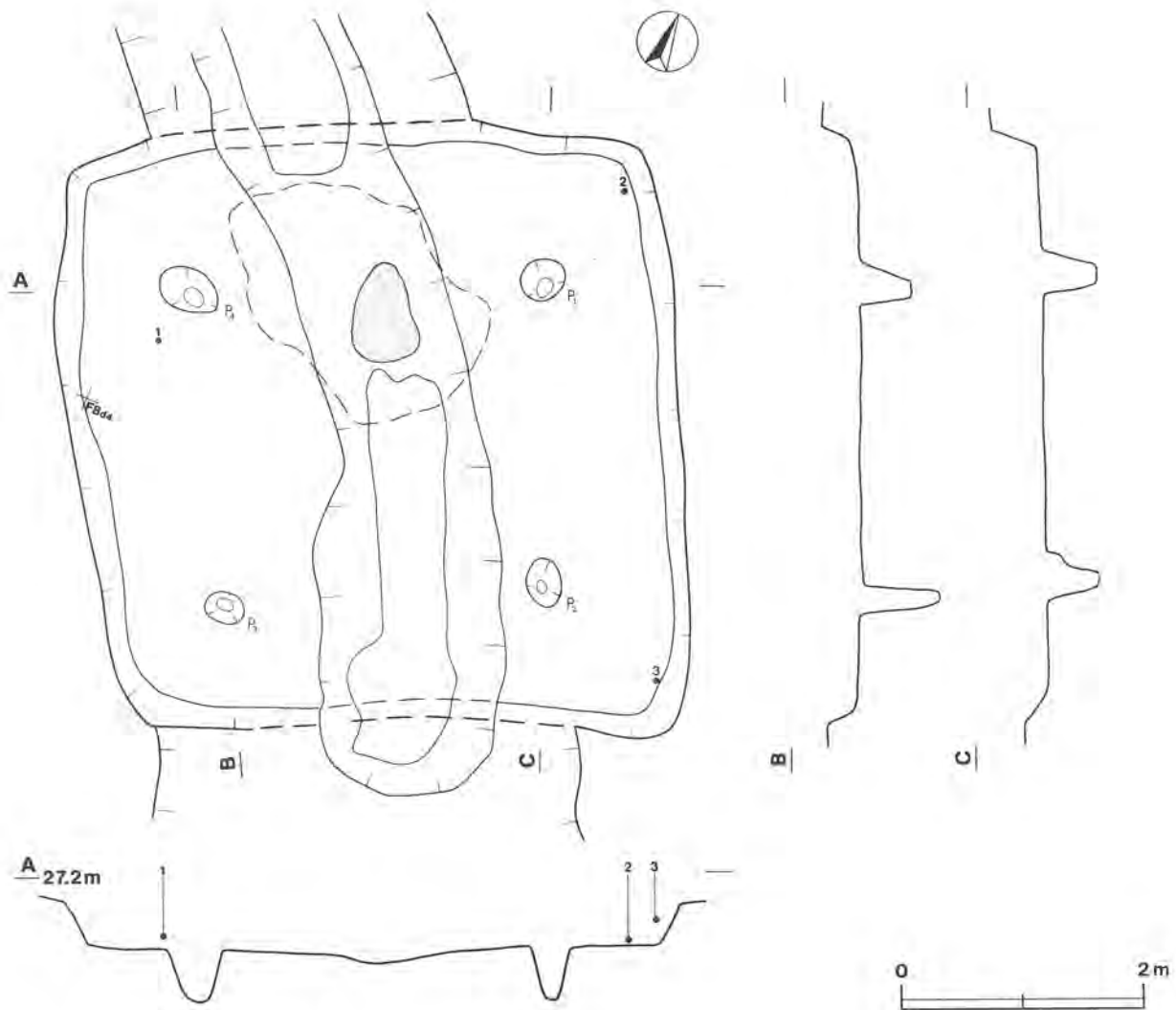
主軸方向 N-38°-W。

壁 壁高34～50cmで、外傾して立ち上がる。北西壁、南東壁の大部分は重複のため現存していない。

床 現存部は平坦であるが、周溝により中央部が20cm前後掘り込まれており、硬化面等の状況は確認できない。

ピット 4か所。P₁～P₄は、長径34～54cm、短径26～36cmの楕円形で深さ44～67cmである。P₁～P₄は支柱穴と思われる、結んだ線は方形となる。出入口施設に伴うと思われるピットがあったと推測されるが、重複により床が掘り込まれているため確認できない。

炉 1か所。中央から北西寄り、P₁とP₄の間に確認されているが周溝に掘り込まれているため炉の覆土と炉床の一部が攪乱されている。そのため全容は把握できないが現存部の平面形は、長径 [82]cm、短径 [56]cmの不定形で、床を14cm掘り込んだ地床炉である。炉の覆土については不明である。

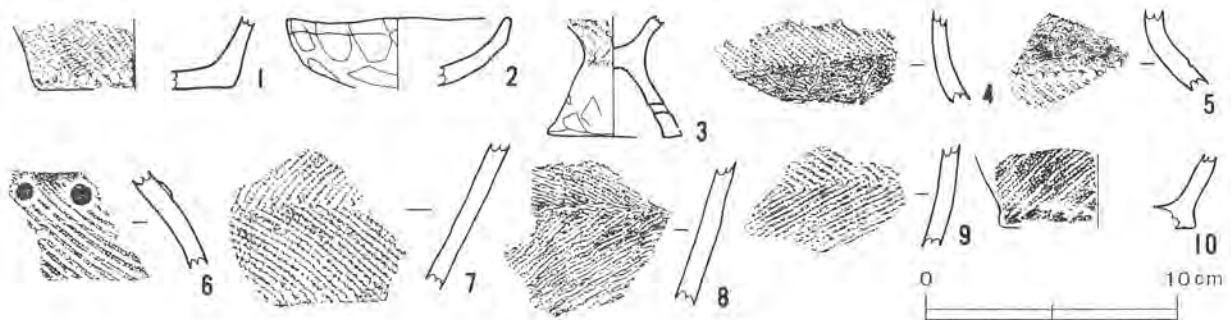


第66図 第31号住居跡実測図

覆土 第1号古墳との重複により攪乱され本跡の土層として捉えることが不可能である。

遺物 弥生式土器細片が190点出土している。他の遺物としては、周溝に切られているため埴輪片が混入している。第67図1～3は弥生式土器で、1の壺底部片はP₁付近の覆土下層から、2の高坏は北コーナーの床面近くから、3の高坏脚部は東コーナーの覆土中層からそれぞれ出土している。アプライト礫は1点（大1）出土しており、重量は97.1gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第67図 第31号住居跡出土遺物実測・拓影図

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第67図 1	壺 弥生式土器	B (2.8) C [7.8]	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 明黄褐色	P119 5% P ₁ 付近覆土下層
2	高 坏 弥生式土器	A 9.0 B (2.8)	坏部片。坏部は内彎して立ち上がる。口縁端部には輪積み痕がある。口縁部外面は指頭圧痕が周回し、下位には縦位の指ナデが施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 浅黄橙色	P120 PL41 30% 床面付近
3	高 坏 弥生式土器	B (4.8) D 5.3 E 3.1	脚部から坏部下位にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開き、坏部は外傾して立ち上がる。坏部下位には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、脚部外面には斜位のヘラナデがある。脚部下位には、円孔(径3mm)が2か所穿たれている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 にぶい黄橙色	P121 30% 東コーナー部覆土 中層

第67図4～10は、第31号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4・5は頸部から胴部にかけての破片で、4の頸部上位と5の頸部下位には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。6～9は胴部片で、6・7・9は附加条1種(附加2条)の縄文が、8には捺糸文がそれぞれ施され、さらに6にはボタン状の瘤が貼られている。10は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている底部片である。

第32号住居跡(第68図)

位置 A地区北端部、F8d₂区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北西壁と床の一部は第1号古墳の周溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 [3.83]m、短軸 [3.21]mの[隅丸長方形]と推測される。

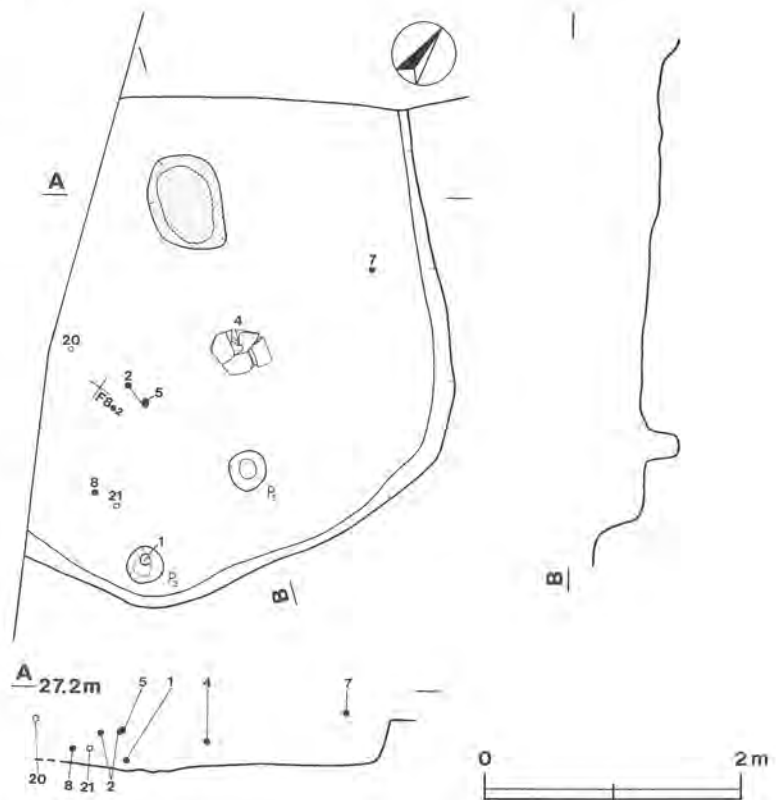
主軸方向 N-51°-W。

壁 壁高10～34cmで、外傾して立ち上がる。

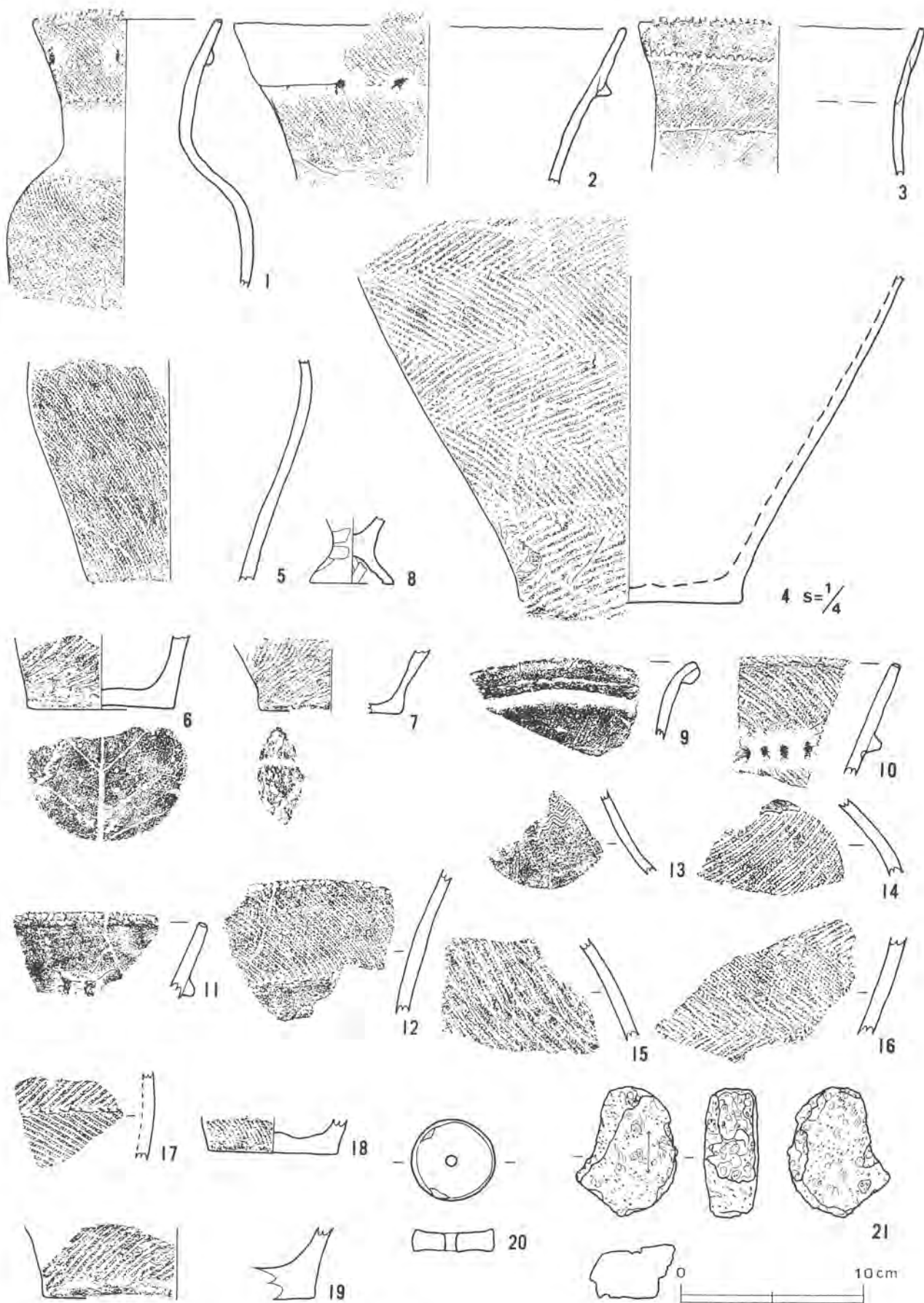
床 平坦で、炉付近から中央部は踏み固められている。

ピット 2か所。P₁・P₂は、径30～32cmの円形で深さ46～57cmである。主柱穴が4本あると思われるが攪乱のため確認できていない。プランとピットの配置から考えるとP₂は主柱穴、P₁は出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。北西寄りにあり、平面形は長径86cm、短径60cmの楕円形で、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、全体的によく焼け赤変硬化している。炉床上には弥生式土器壺の横長胴部片が立てられた状態で出土しており、炉石的な役目を持たされていたものと思われる。覆土の殆どが周溝により掘り込まれ把握できない。



第68図 第32号住居跡実測図



第69图 第32号住居跡出土遺物実測・拓影图

覆土 3層から成る。覆土の大部分が第1号古墳の周溝に掘り込まれているため、全容をつかむことは不可能であるが、壁際から床面上全体にかけて褐色土が堆積し中・下層を形成し、さらに鈍い褐色土が堆積し上層となっている。各層ともロームブロックを少量含んでいる。弥生式土器片が第1・3層から出土しているが、多くは周溝の覆土中からである。

遺物 弥生式土器細片が395点出土しているが、ほとんどが胴部片で、口縁部や底部は微量である。他には陶器片が1点のみである。第69図1～7は弥生式土器壺で、1の胴部上半から口縁部は広口壺でP₂近くの床面直上から正位で、2の広口壺は口縁部から頸部にかけての破片で5の胴部片と一緒に中央部の覆土下層から、3の口縁部から頸部は覆土中から、4の胴部から底部は覆土中層から押し潰れた状態の破片でそれぞれ出土している。6の底部片は覆土中から、7の底部片は北東壁寄りの覆土上層から、8の高坏脚部はP₂付近の床面直上からそれぞれ出土している。20の紡錘車は覆土上層から、21の砥石は床面直上から出土している。アブライト礫は1点(中)出土しており、重量は37.1gである。

所見 炉床上に土器片がおかれていた例は、隣接している原田北遺跡IIの第118号住居跡にあり大変よくにている。本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第32号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第69図 1	広口壺 弥生式土器	A 10.2	底部から胴部下半欠損。胴部は内彎し、頸部から口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。最大径を胴部上位に持つ。頸部を無文帯とし、それ以外には単節縄文が施されている。口縁部にはさらに、刺突文が2条周回し、その中間には瘤が当間隔に7個貼られている。口唇部には縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 橙色	P122 PL40 50% 内面剝離 P ₂ 付近床面直上
		B (14.5)			
2	広口壺 弥生式土器	A [21.0]	頸部から口縁部にかけての破片。口縁部はやや外反して立ち上がる。頸部下半を無文帯とし、頸部上半から口縁部にかけては附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。複合口縁で下端には当間隔に瘤が貼られ、口唇部には縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 橙色	P123 5% 覆土下層
		B (8.6)			
3	広口壺 弥生式土器	A [15.4]	頸部から口縁部にかけての破片。口縁部はやや外反して立ち上がる。頸部下半を無文帯とし、頸部上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。複合口縁で下端には刺突文が施され、口唇部は縄文原体により押圧されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい黄橙色	P124 5% 覆土中
		B (8.0)			
4	壺 弥生式土器	B (24.0)	底部から胴部にかけての破片。平底で、胴部は内彎気味に立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され羽状構成をとる。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 橙色	P125 PL41 30% 内面剝離 覆土中
		C 16.1			
5	壺 弥生式土器	B (12.0)	胴部片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 灰褐色	P126 PL41 10% 内・外面炭化物付着 中央部覆土下層
6	壺 弥生式土器	B (4.0)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面に木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 橙色	P127 PL41 5% 二次焼成 外面炭化物付着 覆土中
		C 8.0			
7	壺 弥生式土器	B (3.5)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には単節縄文が施され、底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明赤褐色	P128 PL41 5% 底面スス付着 覆土上層
		C [8.0]			
8	高坏 弥生式土器	B (3.7)	脚部から坏部下位にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開き、坏部は外傾して立ち上がる。脚部は内外面ともヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 橙色	P129 20% P ₂ 付近床面直上
		D 4.6			
		E 2.0			

第69図9～19は、第32号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。9～11は口縁部片で、10・11には瘤が貼られている。10には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、11の口唇部には縄文原体による押圧が施されている。12・13は頸部片で、13には櫛歯状工具による横走波状文が施されている。14～17の胴部片はいずれも附加条1種(附加2条)の縄文が施され、16・17は羽状構成をとっている。18・19は底部片である。

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第69図20	紡錘車	4.2	4.5	1.3	6.0	29.2	100	覆土上層	DP23 PL55

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第69図21	砥石	(7.1)	(5.6)	(3.0)	(29.3)	流紋岩	床面直上	Q28 破片 PL63

第33号住居跡 (第70図)

位置 A地区北端部, F8a₃区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南コーナー部は, 第1号古墳の周溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.96m, 短軸5.74mの隅丸方形である。

主軸方向 N-27°-W。

壁 壁高20~30cmで, 外傾して立ち上がる。北西壁の大部分は調査エリア外である。

床 ほぼ平坦で, 中央部とP₅の周辺が踏み固められている。

ピット 5か所。P₁・P₃・P₄は, 長径40~46cm, 短径24~34cmの楕円形で, 深さ70~77cmである。P₂は, 径32cmの円形で深さ47cmである。P₁~P₄は, 支柱穴と思われ, 結んだ線は方形となる。P₅は, 長径52cm, 短径48cmの楕円形で深さ48cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P₅は深さ21cmの所で段をもち, さらに傾斜角53°で斜めに掘られており斜長は76cmとなる。傾斜方向は南東壁中央付近である。

炉 1か所。中央から北西寄りP₁とP₄の中間付近にあり, 平面形は長径180cm, 短径90cmで, 床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は, 全体的によく焼け赤変硬化している。覆土は, 第1層が焼土粒子・焼土ブロック, 炭化粒子微量の極暗赤褐色土, 第2層は焼土粒子少量, 炭化粒子微量の褐色土, 第3層はロームブロック少量, 炭化粒子微量の褐色土, 第4層はローム粒子多量, ロームブロック中量の明褐色土である (第70図)。

覆土 6層から成る。ローム大ブロックを多量に含む明褐色土が壁際から床面にかけて堆積している。下層から上層まで褐色土が厚く堆積し, 特に南東側の覆土はレンズ状堆積をとらず, ブロック状である。流れ込みと思われる弥生式土器片が下層から出土している。

なお, 土層は

第1層 暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック多量, ローム大ブロック中量, 炭化粒子少量	第5層 褐色	ローム粒子中量, ローム大ブロック多量, 炭化粒子少量
第2層 褐色	ローム小ブロック多量, 炭化粒子少量	第6層 明褐色	ローム粒子多量, ローム大ブロック多量, 炭化粒子微量
第3層 褐色	ローム小ブロック多量, 炭化粒子少量		
第4層 褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子少量		

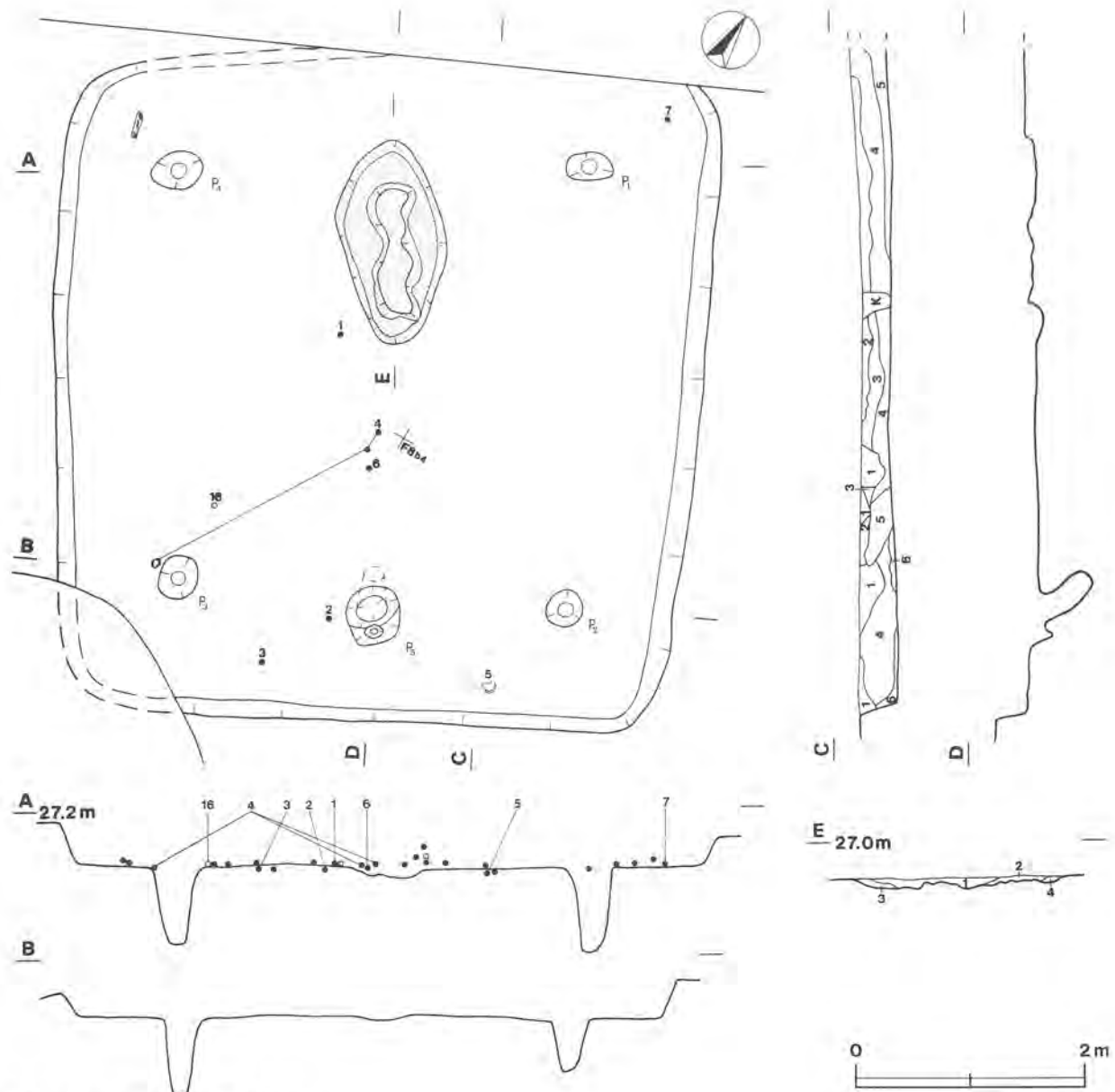
(第70図)

である。

遺物 弥生式土器細片が約100点と比較的少量である。西コーナー部から長さ40cm程の炭化材が出土しているが, 床面に焼けているところがなく, 炭化材が確認されていないこと, 遺物が少ないことや炭化材が床から離れていることなどから考えると, ある程度土が堆積してから炭化した廃材を投棄したものと思われる。

第71図1~6は弥生式土器壺で, 1の広口壺口縁部は炉付近の床面近くから, 2・3の胴部下位から底部はP₅付近の床面近くからそれぞれ出土している。4の底部は炉付近とP₃付近の床面直上から出土した破片と接合している。5の底部は南東壁際の床面直上から, 6の底部は中央部の床面直上から, それぞれ出土している。

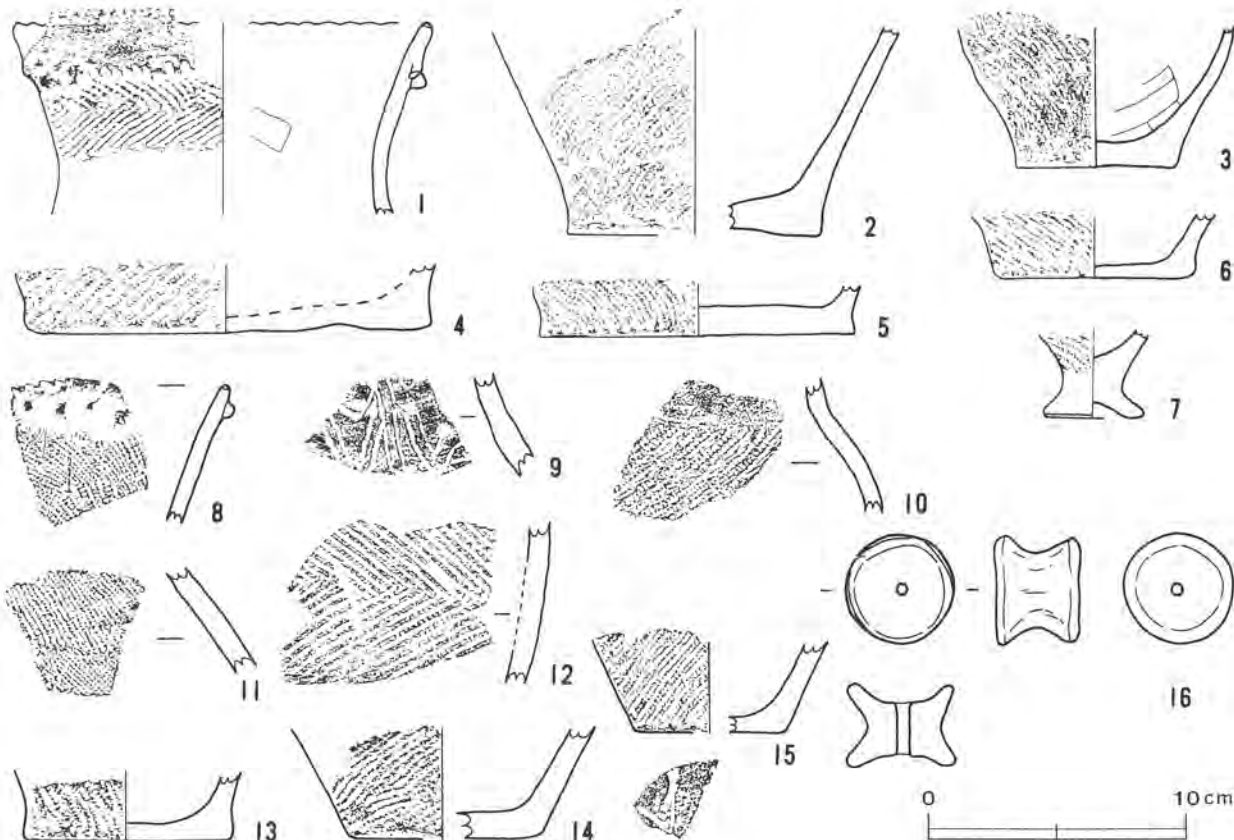
7の高坏の脚部は北コーナーの覆土下層から, 16の紡錘車はP₃近くの床面直上から出土している。



第70図 第33号住居跡実測図

所見 P₅は、壁との接点を推測すると床面からおよそ120cm上となり、現地表面から50～60cm高く土が盛られていたものと思われる。本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第71図8～15は、第33号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。8は口縁部片で、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、口縁部上位には瘤が貼られている。9は頸部片で、縦位の平行沈線施文後に、同一施文具により大振りの横走波状文が施されている。10～12は附加条1種(附加2条)の縄文が施された胴部片である。13～15は縄文施文の底部片で、15の底面には木葉痕がある。



第71図 第33号住居跡出土遺物実測・拓影図

第33号住居跡出土遺物観察表

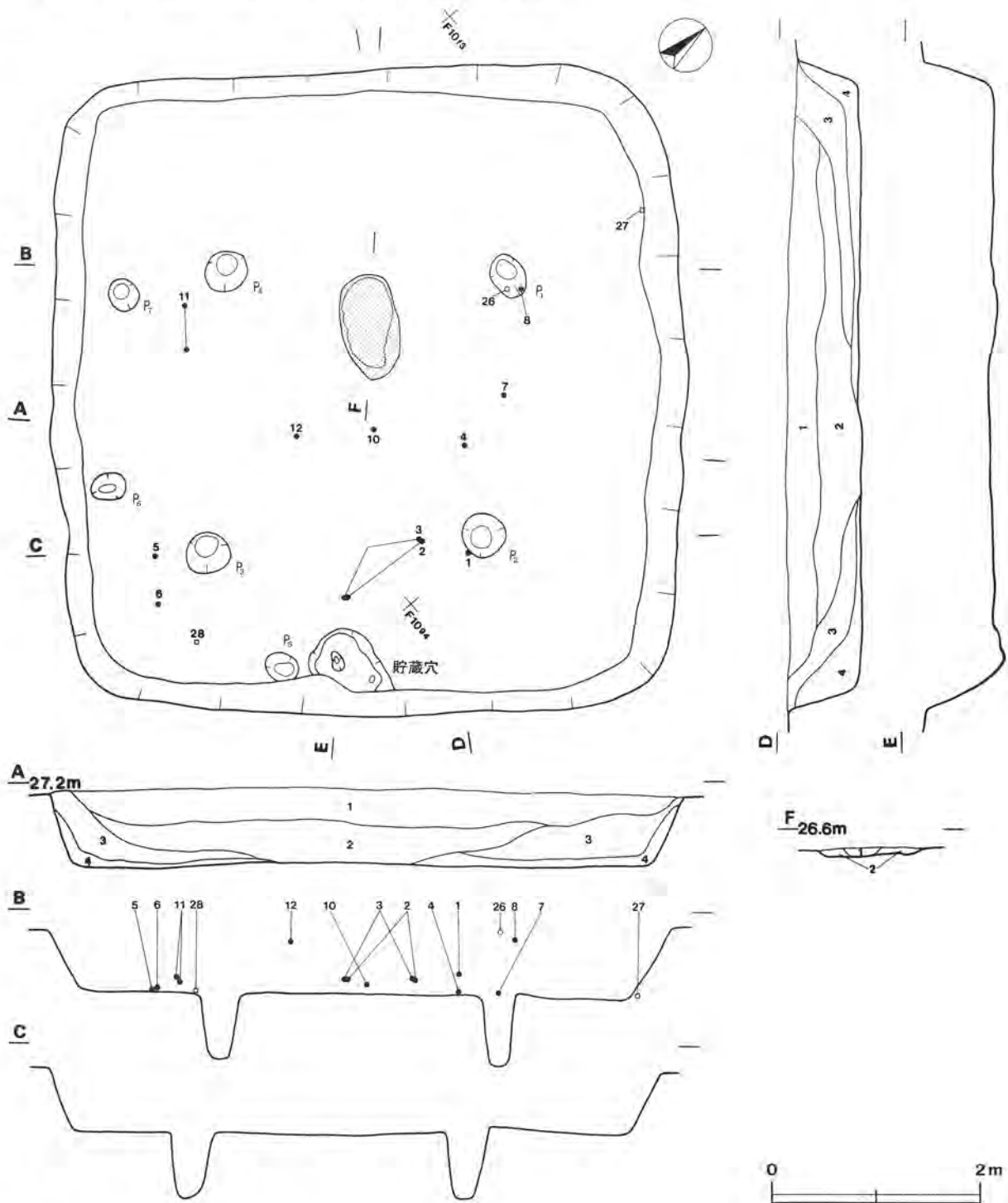
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第71図 1	広口壺 弥生式土器	A [17.4]	頸部上位から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外傾して立ち上がる。頸部下半は無文帯で、上半には附加条1種(附加2条)の縄文が施され羽状構成をとる。口縁部下端には縄文原体による押圧が施され、さらに2個I組の瘤が貼られている。口唇部は縄文原体により押圧されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 にぶい黄橙色	P130 5% 外面炭化物付着 炉周辺床面付近
		B (7.6)			
2	壺 弥生式土器	B (8.3)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面に木葉痕があるが周縁部のみで、内側はヘラケズリされ消えている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 橙色	P131 PL41 10% 二次焼成 P。周辺床面付近
		C [10.0]			
3	壺 弥生式土器	B (5.5)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、内面はヘラナデされている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 橙色	P132 PL41 10% 二次焼成 外面スス付着 P。周辺床面付近
		C 6.2			
4	壺 弥生式土器	B (2.7)	底部片。平底で胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 にぶい黄橙色	P133 5% 二次焼成 内面剝離 床面直上
		C 15.8			
5	壺 弥生式土器	B (2.0)	底部片。平底で胴部には単節縄文が施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 橙色	P134 5% 床面直上
		C 12.3			
6	壺 弥生式土器	B (2.5)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 橙色	P135 5% 内面炭化物付着 床面直上
		C 8.0			
7	高坏 弥生式土器	B (3.5)	脚部から坏部下位にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開き、坏部は外傾して立ち上がる。坏部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒, 石英, 長石, スコリア 普通 橙色	P136 PL41 10% 覆土下層
		D 3.9			
		E 1.5			

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第71図16	紡錘車	4.4	4.3	3.3	5.0	51.0	100	床面直上	DP24 PL55

第34号住居跡 (第72図)

位置 B地区北西端部, F10f₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.24m, 短軸6.04mの隅丸方形である。



第72図 第34号住居跡実測図

主軸方向 N-44°-W。

壁 壁高60～70cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央部からP₅周辺がよく踏み固められている。

ピット 7か所。P₁・P₄～P₆は、長径32～44cm、短径26～38cmの楕円形で深さ30～66cmである。P₂・P₃・P₇は、径30～42cmの円形で深さ33～66cmである。P₁～P₄は支柱穴、P₆～P₇は補助柱穴と思われ、支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は出入り口施設に伴うピットと考えられる。

炉 1か所。中央からやや北寄りにあり、平面形は長径102cm、短径66cmの楕円形で、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は全体によく焼け赤変硬化している。覆土は、第1層が焼土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量の暗褐色土、第2層は焼土粒子・焼土ブロック少量の暗褐色土である(第72図)。

貯蔵穴 1か所。南東壁中央部に有り、平面形は長径80cm、短径62cmの楕円形で深さ29cmである。底面は皿状である。

覆土 4層から成る。壁際から床面にかけて流れ込むように褐色土が堆積し、床面中央部には焼土粒子を含む暗褐色土が厚く堆積し中層を構成している。第2・3層から流れ込みと思われる弥生式土器片が多く出土している。

なお、土層は

第1層 黒褐色 ローム粒子少量

第2層 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

第3層 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

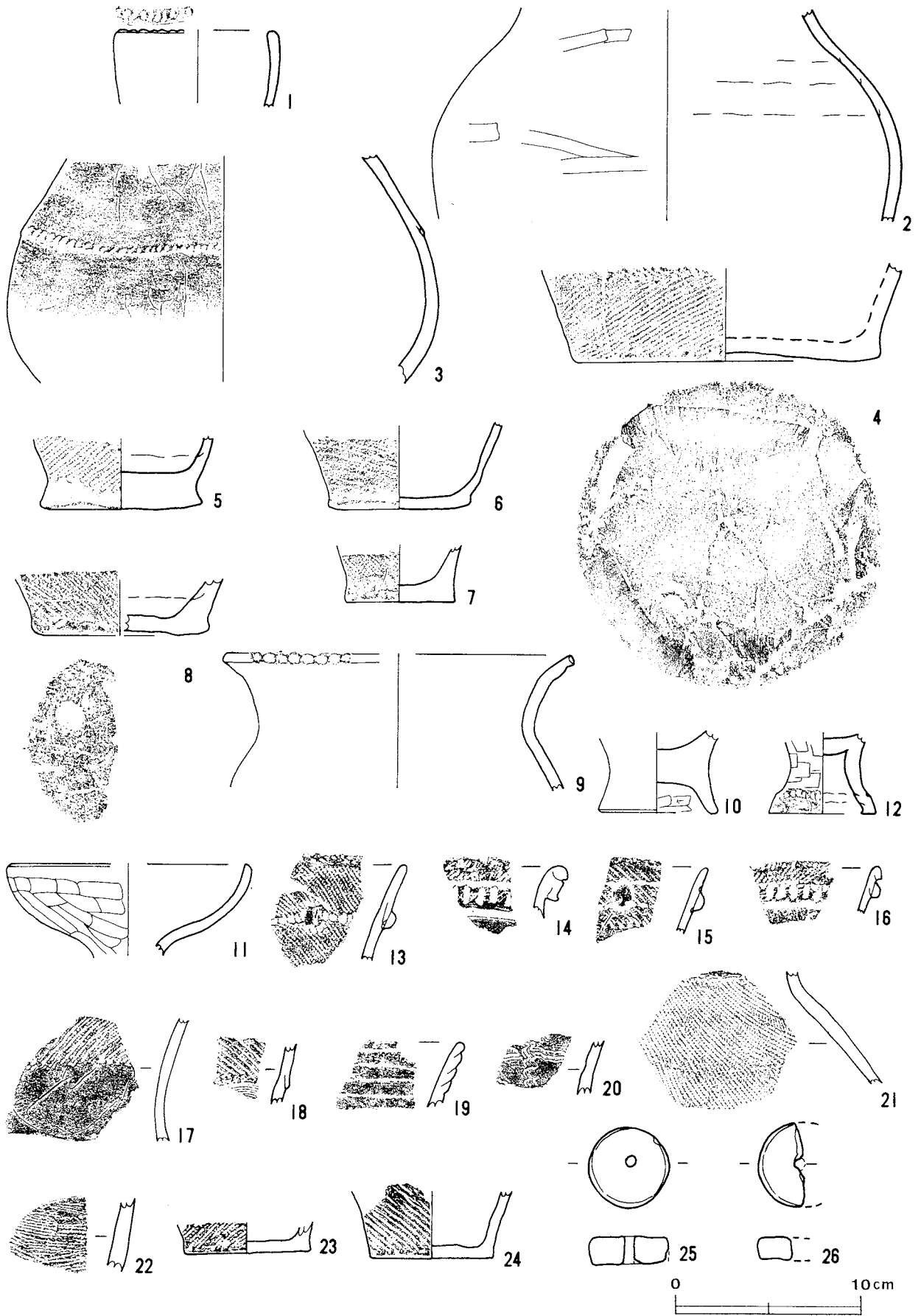
第4層 褐色 ローム粒子多量、炭化物微量

(第72図)

である。

遺物 弥生式土器細片が145点出土しており、中央部からのものが多い。第73図1～8は弥生式土器壺、9は弥生式土器甕で、1はP₂付近の覆土第3層から、2・3の胴部はP₂からP₅の間の覆土第3層から、9の口縁部から頸部は覆土中からそれぞれ出土している。3の胴部は最大径が下位にあり胴部に縄文がなく刺突文が横位に1列施されており、外来系の土器であろう。4の内面の剝離した底部は炉近くの覆土第2層から、5・6の底部は南コーナーの床面近くで覆土第4層から、7・8の底部は炉の北東側で7は床面近くから、8は覆土第1層からそれぞれ出土している。10の弥生式土器台付甕の脚部は中央部の覆土第2層から、11の高坏の坏部は南西壁中央部寄りの覆土第3層から、12の脚部は中央付近の覆土第1層からそれぞれ出土している。25・26の紡錘車は25が覆土中、26が覆土第2層からそれぞれ出土している。27・28の敲石は27が北コーナーの床面直上から、28は南コーナーの覆土第4層からそれぞれ出土している。

所見 床面積が37.7m²あり当遺跡内で最も大きく、集落内で中心的な位置にあったと推測される。本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第73图 第34号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)

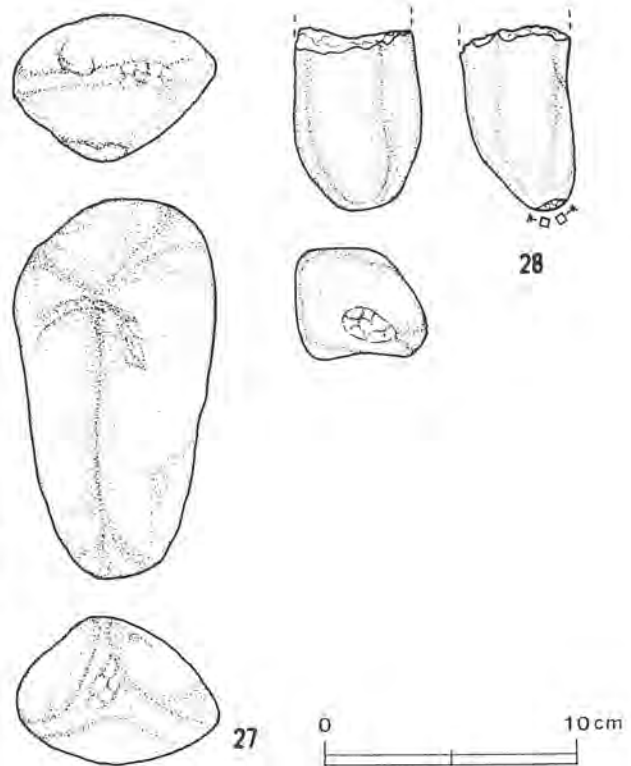
第34号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第73図 1	壺 弥生式土器	A [8.5]	口縁部片。口縁部は、やや内彎気味に立ち上がる。口縁部は無文で、口唇部はキザミ目が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 橙色	P138 10% 外面摩滅 覆土第3層
		B (4.3)			
2	壺 弥生式土器	B (11.5)	胴部上半から頸部下半にかけての破片。胴部は内彎し、頸部は外反して立ち上がる。胴部、頸部ともに無文で、内面には輪積み痕がある。外面には横位のヘラナデがされている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 におい黄橙色	P139 10% 外面炭化物付着 覆土第3層
3	壺 弥生式土器	B (12.2)	胴部片。胴部は下位が強く内彎し、上半は緩やかに内傾する。胴部上半に段をもち、そこには棒状工具による刺突文が周回している。内面は斜位にヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 におい褐色	P140 PL41 10% 外面炭化物付着 覆土第3層
4	壺 弥生式土器	B (5.1)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。底面には薄く木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 橙色	P141 10% 内面剝離 覆土第2層
		C 16.5			
5	壺 弥生式土器	B (3.8)	底部から胴部下位にかけての破片。底部は平底で張り出し、胴部はやや内彎気味に立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。内面には輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 におい黄橙色	P142 5% 覆土第4層
		C 8.8			
6	壺 弥生式土器	B (4.6)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が浅く施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 橙色	P143 PL41 5% 二次焼成 外面炭化物付着 覆土第4層
		C 7.7			
7	小形壺 弥生式土器	B (3.0)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部の1部分には、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 におい黄橙色	P144 PL41 10% 床面付近
		C 5.8			
8	壺 弥生式土器	B (3.0)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 におい褐色	P145 5% 二次焼成 内面炭化物付着 覆土第1層
		C [9.4]			
9	甕 弥生式土器	A [18.4]	頸部から口縁部にかけての破片。口縁部は頸部から外反して立ち上がる。口唇部は棒状工具により押圧されている。	砂粒、石英、長石 普通 におい黄橙色	P137 PL41 5% 覆土中
		B (7.3)			
10	台付甕 弥生式土器	B (4.4)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。脚部内面はヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 黄橙色	P146 5% 覆土第2層
		C 6.4			
11	高坏 弥生式土器	A [12.7]	坏部片。坏部は内彎して立ち上がる。坏部下外面は縦位、上半外面は横位のヘラナデがされている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 におい橙色	P148 PL41 30% 覆土第3層
		B (5.0)			
12	高坏 弥生式土器	D 5.7	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開き、下位に段をもつ。脚部下位は棒状工具による刺突文が周回している。外面は横位のヘラナデ、内面には横位のナデがある。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 におい橙色	P149 PL41 30% 覆土第1層
		E (4.3)			

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第73図25	紡錘車	(4.4)	(4.4)	(1.7)	6.0	(35.2)	80	覆土中	DP25 PL55
26	紡錘車	(4.7)	(2.5)	(1.3)	—	(17.2)	40	覆土第2層	DP26 PL55

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第74図27	敲石	15.1	7.9	5.9	819.1	グリーンタフ	床面直上	Q29 PL62
28	敲石	7.3	5.1	4.5	231.0	礫岩	覆土第4層	Q30 破片

第73図13~24は、第34号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。13~19は口縁部片で、14・16の口縁部下端には隆帯をはり棒状工具によりキザミ目を施している。13・18は附加条1種（附加2条）の縄文が施され、口縁部下端には縄文原体による押圧をし、さらに13には瘤が貼られている。18の頸部には横位の櫛描文が施されている。15は棒状工具による2条の刺突文の間に瘤が貼られている。19は外面に意図的に輪積み痕が残されている。20の頸部片は、櫛歯状工具による縦位の波状文と横走文が施されている。21・22は縄文施文の胴部片で、縄文原体は21が単節、22は燃糸である。23・24は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている底部片である。



第74図 第34号住居跡出土遺物実測図(2)

第35号住居跡（第75図）

位置 B地区北西端部，F10e₄区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.50m，短軸5.21mの長方形である。

主軸方向 N-25°-W。

壁 壁高10~28cmで，外傾して立ち上がる。

床 平坦で，全体的に軟らかい。

ピット 確認されていない。

炉 1か所。北西壁寄りにあり，平面形は長径76cm，短径58cmの楕円形で，床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は，第1層が焼土小ブロック微量，焼土粒子少量，ローム粒子少量の褐色土，第2層は焼土粒子微量，ローム粒子多量の褐色土である（第75図）。

覆土 4層から成る。大部分の壁際から床面全体にかけては褐色土が堆積しているが，北コーナー部付近は暗褐色土である。中央付近は，黒・暗褐色土がレンズ状堆積をしている。

なお，土層は

第1層 暗褐色 ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
 第2層 黒褐色 ローム粒子少量
 第3層 褐色 ローム粒子多量

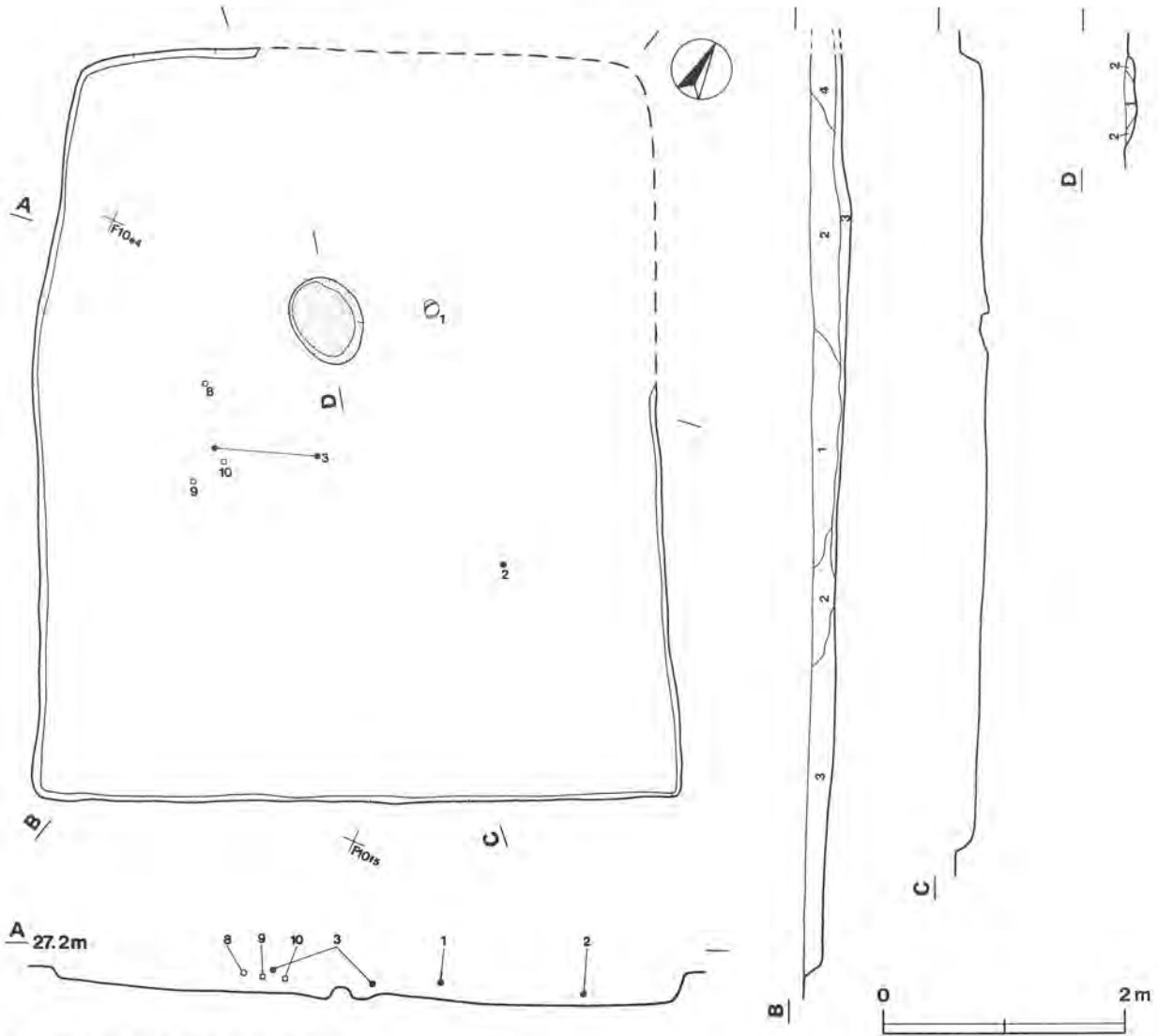
第4層 暗褐色 ローム粒子中量

(第75図)

である。流れ込みと思われる弥生式土器片が第1・2層から多く出土している。

遺物 弥生式土器細片が84点出土している。第76図1~3は弥生式土器壺で，1の口縁部から胴部下位は炉近くの覆土下層から正位で，2の口縁部から頸部は東コーナー寄りの床面直上から破片で，3の胴部は南西壁中央付近の覆土中層から破片でそれぞれ出土している。9の凹石と10の磨石，8の紡錘車は，いずれも南西壁中央部付近の覆土中層から出土している。

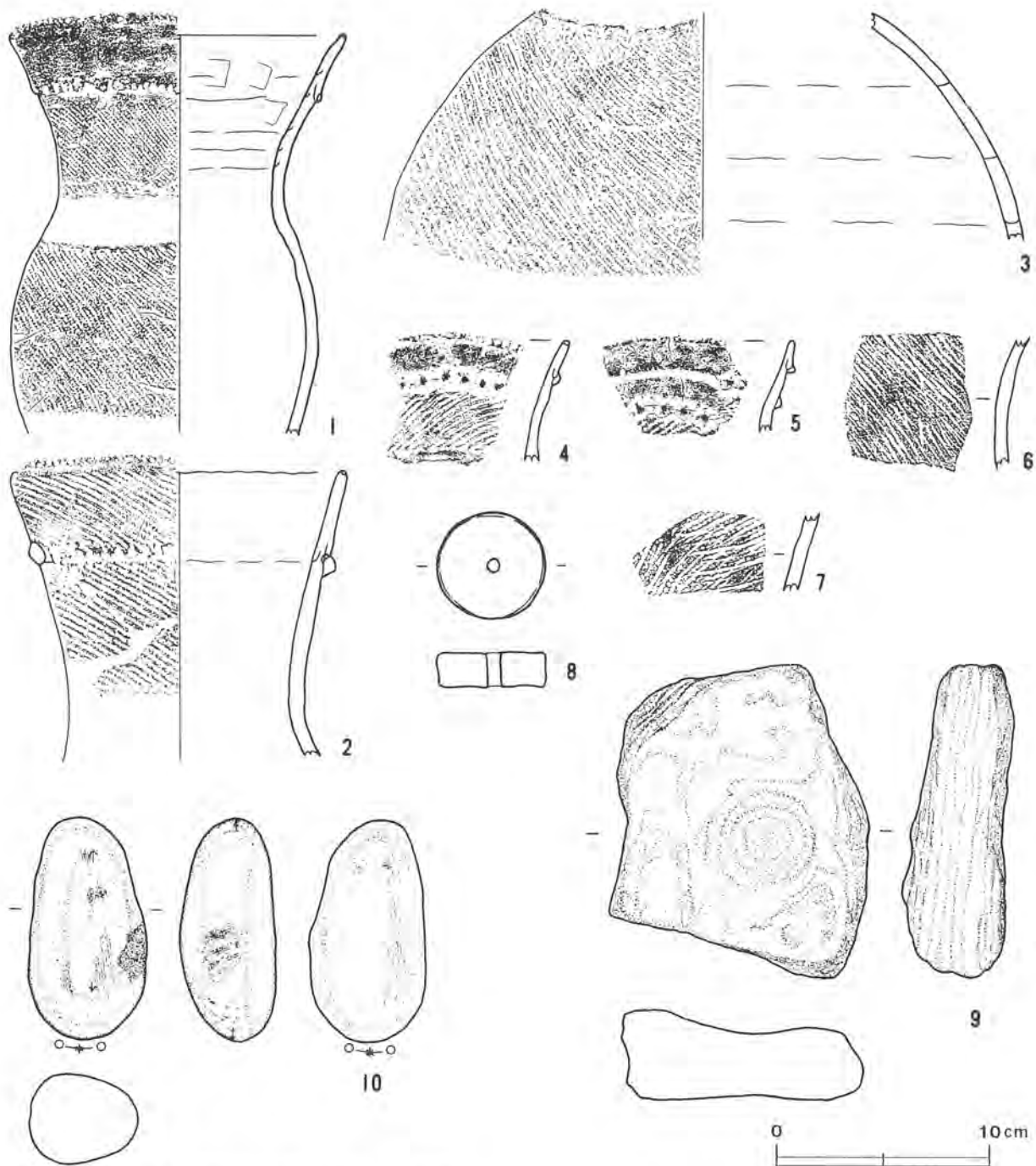
所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第75図 第35号住居跡実測図

第35号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第76図 1	広口壺 弥生式土器	A 15.8 B (18.9)	胴部下半欠損。胴部は内彎し、頸部から口縁部は外傾して立ち上がる。胴部と頸部上半には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。複合口縁で下端には棒状工具による刺突文が周回し、さらに3個1組の瘤が4単位貼られている。口唇部には縄文が施されている。口縁部内面はヘラナデされている。内面に輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい黄橙色	P150 PL42 60% 外面炭化物附着 覆土下層
2	広口壺 弥生式土器	A 15.5 B (13.4)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外傾して立ち上がる。頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。複合口縁で下端には縄文原体による押圧が施され、さらに瘤が6か所に貼られている。口唇部には縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 橙色	P151 PL42 25% 東コーナー寄り 床面直上
3	壺 弥生式土器	B (10.6)	胴部上半の破片。胴部上半は球形状に内彎する。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。内面に輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明黄褐色	P152 PL42 10% 覆土中



第76図 第35号住居跡出土遺物実測・拓影図

第76図4～7は、第35号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4・5は頸部に附加条1種（附加2条）の縄文が施された複合口縁で、5は2段構成である。どちらも口縁部下端には瘤が貼られ、4の口唇部は縄文原体により押圧されている。6は頸部片、7は胴部片でどちらも附加条1種（附加2条）の縄文が施され、2重に交錯している部分がある。

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第76図8	紡錘車	5.1	5.2	1.6	6.0	59.2	100	覆土中層	DP27 PL55

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第76図9	凹石	14.8	12.2	5.2	1218.0	董青石ホルンフェルス	覆土中層	Q31 破片
10	磨石	10.5	5.5	4.6	347.4	安山岩	覆土中層	Q32 PL61

第36号住居跡 (第77図)

位置 B地区北西端部, F10e区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.25m, 短軸3.24mの隅丸方形である。

主軸方向 N-10°-E。

壁 壁高28~40cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 中央部が硬化している。

ピット 確認されていない。

炉 確認されていない。

覆土 4層から成る。壁際から床面にかけてロームブロックを含む明褐色土が堆積している。下層から上層まで褐色系の土で不明瞭な覆土であるが, 各層に炭化粒子が含まれている。

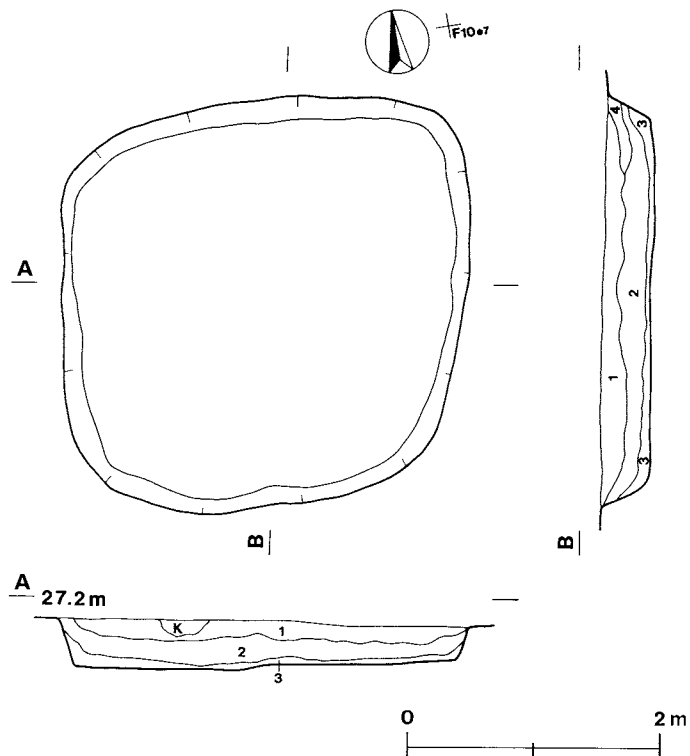
なお, 土層は

- 第1層 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック微量, 炭化粒子微量
- 第2層 明褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子微量
- 第3層 明褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 第4層 明褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子微量, 炭化粒子微量 (第77図)

である。

遺物 覆土から弥生式土器細片が2点, 縄文式土器細片1点が出土しているのみである。

所見 住居跡として扱ったが, 炉が確認されていないことやプランの形態等から小竪穴遺構の可能性が考えられる。本跡は, 弥生時代後期の時期と思われる。



第77図 第36号住居跡実測図

第37号住居跡 (第78図)

位置 B地区北西端部, F10d区を中心に確認されている。北コーナー部は調査エリア外である。

規模と平面形 長軸3.05m, 短軸2.81mの隅丸方形である。

主軸方向 N-53°-W。

壁 壁高14~20cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 全体的にあまり踏み固められていない。

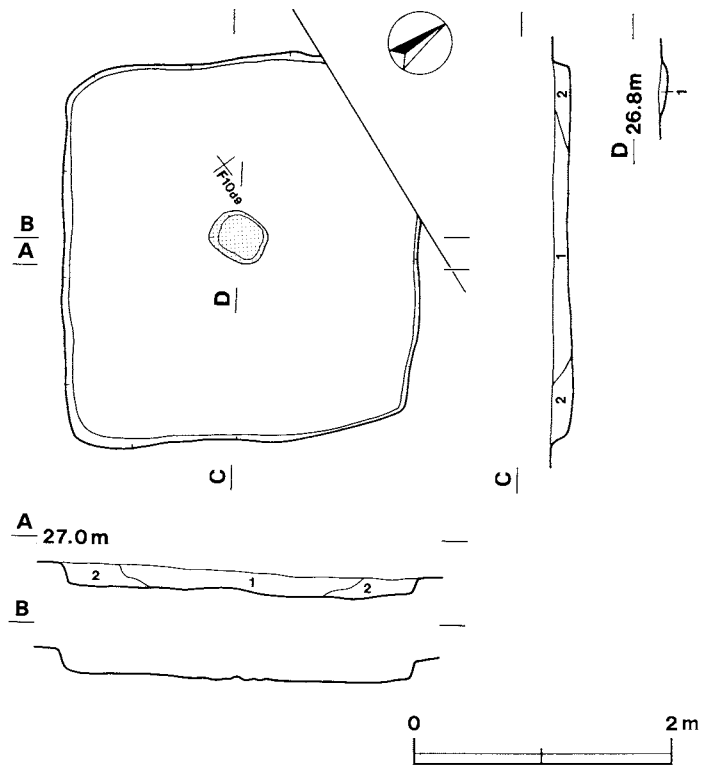
ピット 確認されていない。

炉 1か所。中央にあり, 平面形は長径44cm, 短径36cmのやや楕円形で, 床を4cm掘り込んだ地床炉である。

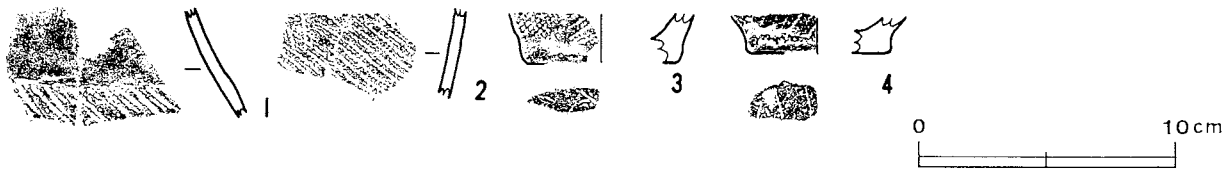
炉床は、北東寄りに多く焼土ブロックが残存しているが、全体的にそれほど焼けておらず使用頻度は多くないと思われる。覆土は焼土粒子少量、焼土小ブロック少量の暗褐色土である。

覆土 2層から成る。壁際は第2層でローム粒子中量、焼土粒子極少量の暗褐色土、床面中央部付近は第1層でローム粒子少量、ロームブロック極少量、焼土粒子極少量の暗褐色土である。

遺物 覆土下層から弥生式土器細片が21点出土し、全て胴部片である。実測可能なものは出土していない。
所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。



第78図 第37号住居跡実測図



第79図 第37号住居跡出土遺物拓影図

第79図1～4は、第37号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1の頸部から胴部にかけての破片と2の胴部片はどちらも附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。3・4は底部片で、どちらも胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、底面には木葉痕がある。

第38号住居跡（第80図）

位置 B地区北西端部，F10f₉区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の中央部を，第94号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸2.65m，短軸2.55mの隅丸方形である。

主軸方向 N-67°-W。

壁 壁高36～40cmで，外傾して立ち上がる。

床 現存部は平坦で，中央部は重複による攪乱のため硬化面等の確認はできない。

ピット 確認されていない。

炉 確認されていない。

覆土 3層から成る。覆土の大部分が第94号土坑に掘り込まれ，詳しい堆積状況は捕らえられない。

残存部は各層とも褐色土でレンズ状堆積の様相を示している。

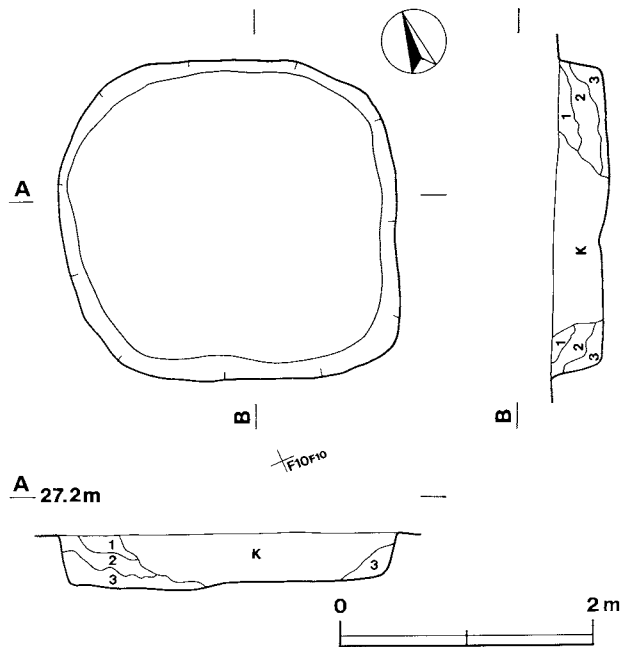
なお、土層は

- 第1層 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子少量
- 第2層 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック少量, 炭化粒子少量
- 第3層 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量 (第80図)

である。

遺物 覆土から弥生式土器片が5点のみ出土し、いずれも胴部片である。石器・土製品の出土はない。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期の時期と思われる。



第80図 第38号住居跡実測図

第40号住居跡 (第81図)

位置 B地区南部, H10g₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.94m, 短軸4.42mの隅丸方形である。

主軸方向 N-54°-W。

壁 壁高18~24cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、全体的に硬いが特に中央部からP₅周辺がよく踏み固められている。

ピット 5か所。P₁~P₄は、径34~42cmの円形で深さ48~70cmである。P₁~P₄は支柱穴と思われ、支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は長径42cm, 短径28cmの楕円形で深さ33cmの出入口施設に伴うピットと考えられる。

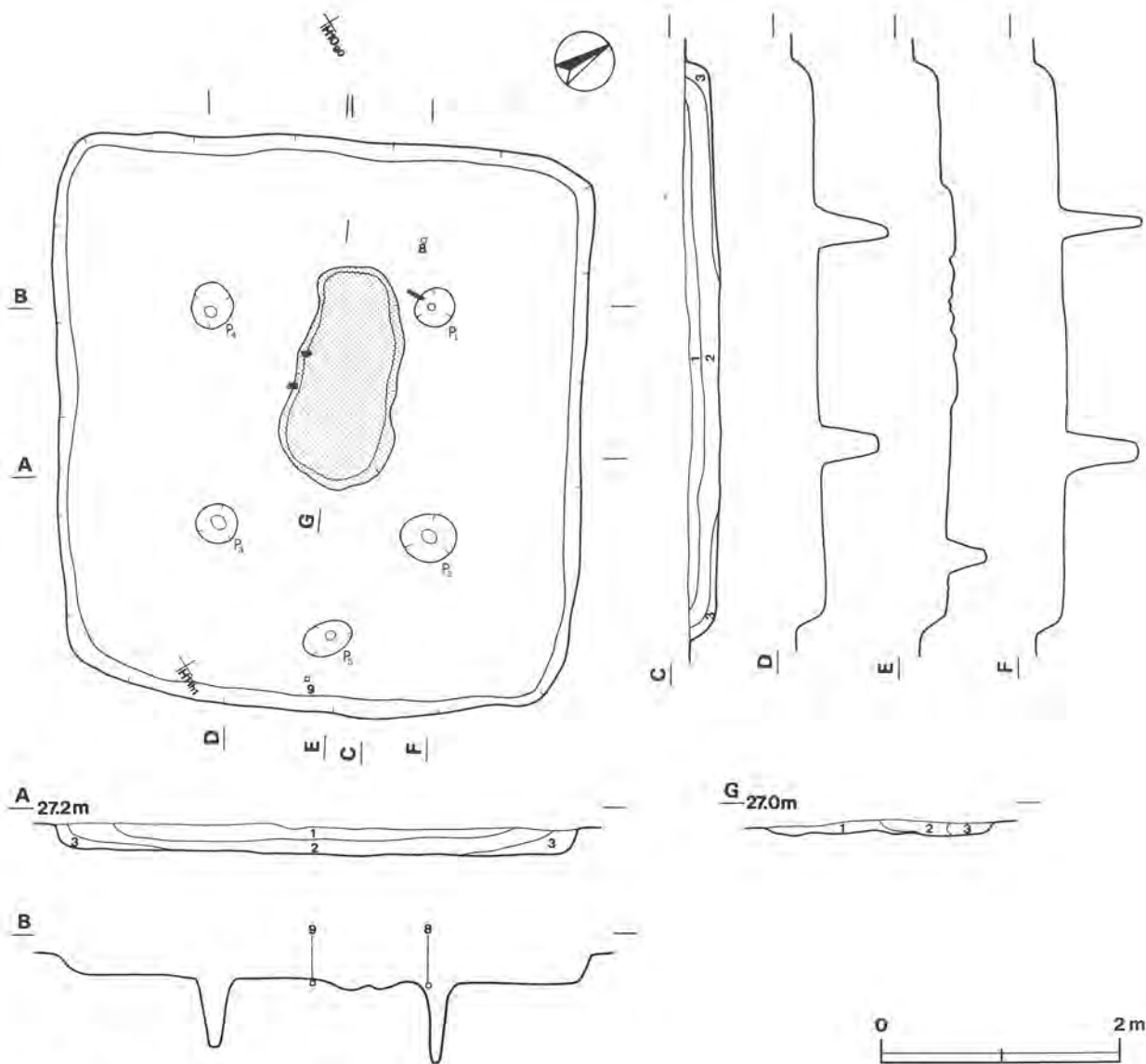
炉 1か所。中央部からP₁とP₄の中間にかけて構築されており、平面形は長径192cm, 短径100cmの長楕円形で、床を12cm掘り込んだ地床炉である。炉床は全体によく焼け赤変硬化し、特に焼土ブロックは南東側によく残っている。本跡の大きさに比べ炉がかなり大きい。土層では南東側にローム土、北西側に暗褐色土が堆積していることから判断して造り替えをしているものと思われる。中央部に構築されていた炉にロームを張り、P₁とP₄の中間まで端部を拡張する要領で2段階に構築している可能性が高い。覆土は、第1層がローム粒子ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック少量, 焼土粒子中量の褐色土、第2層はローム・焼土粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化物少量含む暗褐色土、第3層はローム大ブロック多量, 炭化粒子少量, 焼土粒子少量の暗褐色土である (第81図)。

覆土 3層から成る。壁際から床面にかけて流れ込むように褐色土が薄く堆積し、中央部には焼土粒子を含む暗褐色土が厚く堆積し中層を構成し、各層ともレンズ状堆積をしている。各層から少量ではあるが流れ込みと思われる弥生式土器片が出土している。

なお、土層は

- 第1層 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量
- 第2層 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土ブロック微量, 炭化・焼土粒子極少量
- 第3層 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量, 炭化物少量 (第81図)

である。

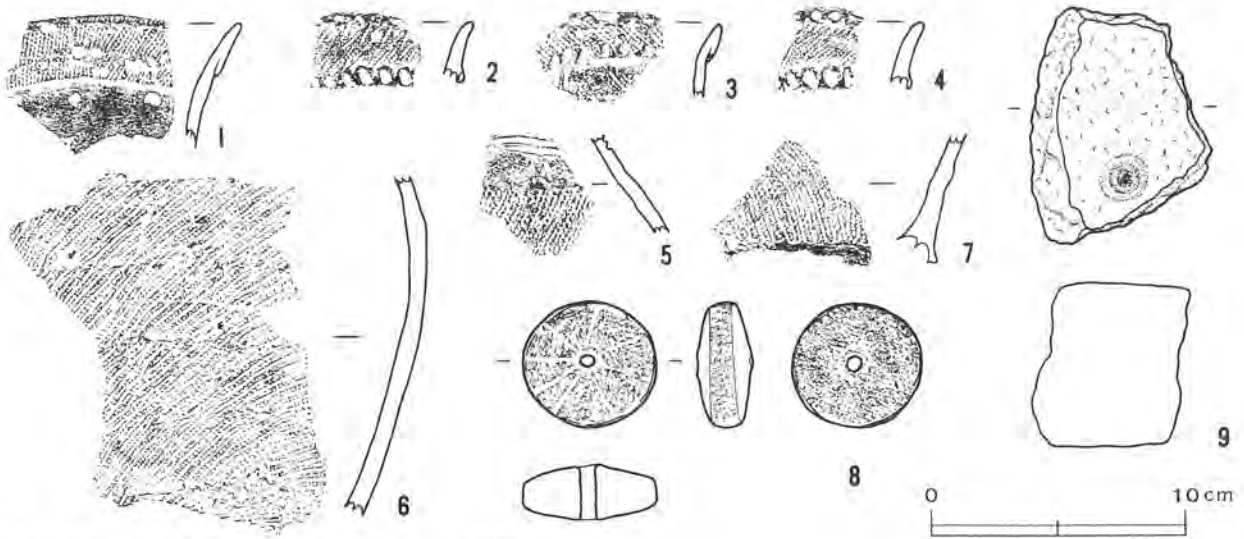


第81図 第40号住居跡実測図

遺物 弥生式土器細片が73点，礫が4点出土している。実測可能な土器片は出土していない。中央部に炭化材が数箇所散在した状態で確認されている。第82図8の紡錘車はP₁の北西側で炭化材の上部で覆土下層から，9の石皿はP₅と南東壁の間の床面直上から出土している。アプライト礫は16点（小）出土しており，総重量は87.9gである。

所見 床面は焼けていないが，炭化材が床面直上から出土しており，焼失住居跡の可能性が考えられる。しかし，ある程度の形のある土器片は出土しておらず住居廃絶後間もない時期に焼けたものと思われる。本跡は，出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。

第82図1～7は，第40号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1～4は複合口縁部片で，いずれも口縁部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され，2～4の口縁部下端は縄文原体により押圧されている。3の頸部には縦位と斜位の櫛描文がわずかに認められる。5は頸部から胴部にかけての破片で，頸部は櫛齒状工具による横走文，胴部には単節縄文が施されている。6の胴部片と7の底部片は，どちらも附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。



第82図 第40号住居跡出土遺物実測・拓影図

第40号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第82図8	紡錘車	5.0	5.2	2.2	6.0	(57.1)	95	覆土下層	DP28 PL55

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第82図9	石皿	(9.4)	(7.0)	(6.6)	(644.0)	花崗岩	床面直上	Q33 凹石兼用 破片

第41号住居跡 (第83図)

位置 B地区西部, G10c区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.20m, 短軸4.12mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-51°-W。

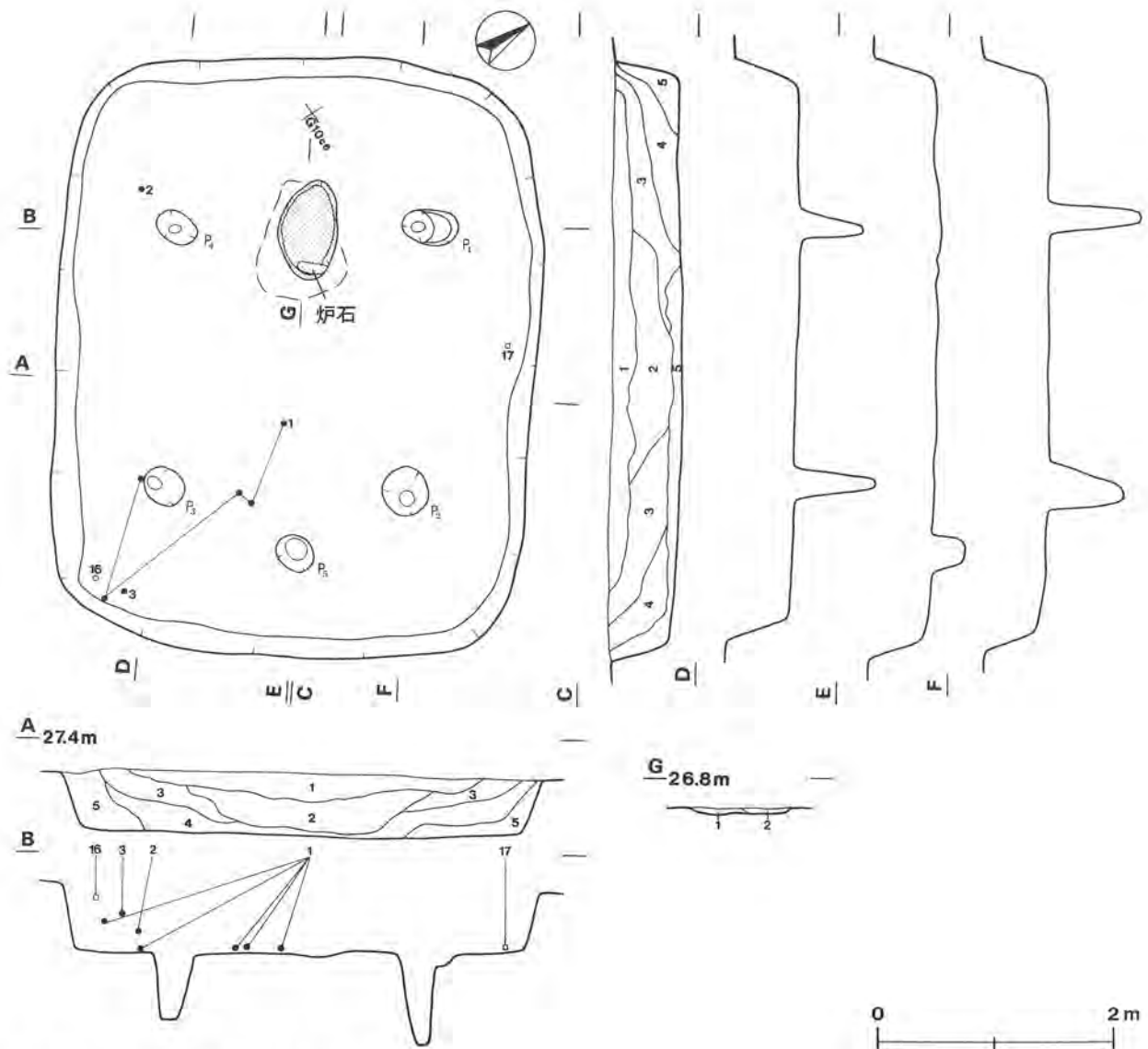
壁 壁高45~56cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 中央部が踏み固められてやや硬い。

ピット 5か所。P₁・P₃・P₄は, 長径36~48cm, 短径24~30cmの楕円形で深さ56~79cmである。P₂は, 径40cmの円形で深さ64cmである。P₁~P₄は支柱穴と思われ, 結んだ線は方形となる。P₅は, 長径34cm, 短径30cmの楕円形で深さ28cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。中央から北西寄りでP₁とP₄の間にあり, 平面形は長径88cm, 短径52cmの楕円形で深さ6cmの地床炉である。炉床は中央部が熱を受け赤変硬化している。南東寄りの炉床上に棒状の董青石ホルンフェルス(筑波石)を横置き状態で出土しており, 炉石として使われていたものと思われる。炉石はかなり熱による変成を受けているため大変もろく, コテで触れるだけでも崩れてしまうほどなため遺物として取り上げることを断念した。覆土は, 第1層がロームブロック少量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量の暗褐色土, 第2層は炭化・焼土粒子中量, ローム小ブロック少量の極暗褐色土である。

覆土 5層から成る。壁際から床面にかけてロームブロックを含む流れ込みの褐色土が厚く堆積して下層を形成している。中層は焼土・炭化粒子を含む暗褐色土が, 上層は黒褐色土が堆積している。



第83図 第41号住居跡実測図

なお、土層は

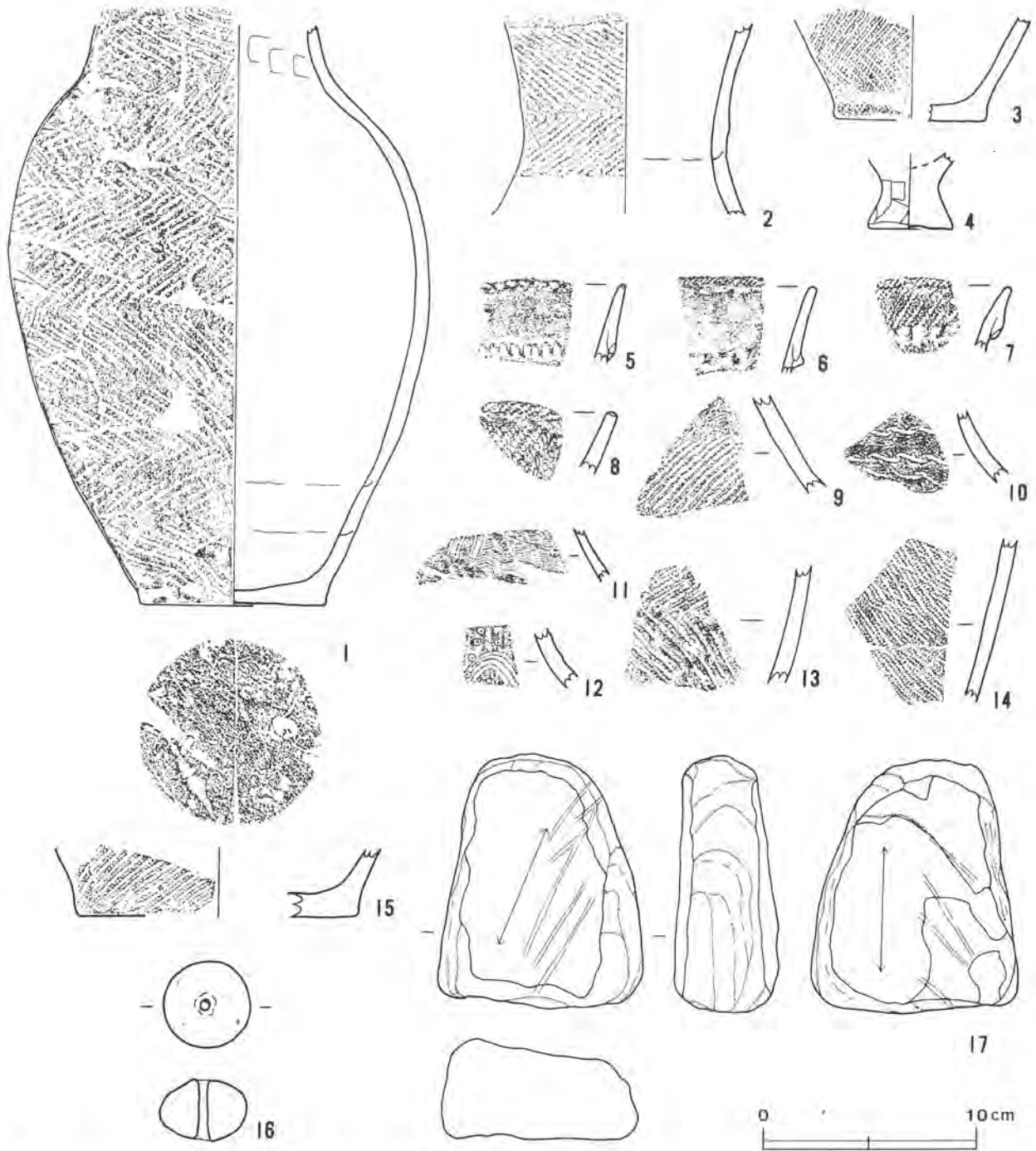
第1層 黒褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	第4層 褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 焼土粒子微量
第2層 暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化物微量	第5層 褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 焼土粒子微量
第3層 暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量, 焼土粒子少量		

(第83図)

である。流れ込みと思われる弥生式土器片が第4・5層から出土している。

遺物 弥生式土器細片が126点出土し、中央から南コーナー付近にかけての覆土第4・5層からが多い。第84図1の弥生式土器壺の頸部から底部は南コーナーから中央にかけての破片が接合しており、覆土第5層に沿う様に出土している。住居廃絶後さほど経たないうちに、南コーナー側から投棄されたものと思われる。2の壺頸部はP₁付近の覆土第4層から横位で、3の胴部下位から底部にかけては南コーナー際の覆土第5層からそれぞれ出土しており、流れ込みと思われる。4の高環の脚部は覆土中から、16の紡錘車は南コーナーの覆土第5層上部からそれぞれ出土している。17の砥石は北東壁中央付近の床面直上から出土している。アブライト礫は8点(小)出土しており、総重量は57.2gである。

所見 炭化材がわずかに炉近くの覆土第4層から出土しているが、床面の状態や炭化材の量などから判断して、この炭化材は流れ込み等による住居廃絶後の混入と思われる。本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第84図 第41号住居跡出土遺物実測・拓影図

第84図5～15は、第41号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5～8は口縁部片で、5～7は複合口縁、8は単口縁である。5・7の口縁部下端は縄文原体により押圧され、6には瘤が貼られている。口唇部には、5が縄文原体による押圧、6～8は縄文が施されている。口縁部の縄文原体は7が附加条1種（附加2条）、8が単節である。9～12は頸部片で、10は絡条体圧痕文、11は櫛齒状工具により縦区画充填波状文

が施されている。12は竹管状工具による刺突文と4本櫛歯による横走波状文が施されている。13・14は附加条1種（附加2条）の縄文が施された胴部片で、13は羽状構成をとる。15は附加条1種（附加2条）の縄文施文の底部片である。

第41号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第84図 1	壺 弥生式土器	B (27.6) C 8.8	頸部上半から口縁部欠損。平底で、胴部は外傾して立ち上がり、頸部は外反気味に立ち上がる。頸部下位を無文帯とし、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。頸部内面はヘラナデ、底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 橙色	P153 PL42 70% 内・外面炭化物付着 覆土第5層
2	壺 弥生式土器	B (9.2)	頸部片。頸部は外反する。頸部下位を無文帯とし、ほかは附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。内面には輪積み痕とわずかにヘラナデの痕跡が見受けられる。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 にぶい橙色	P154 PL42 20% 覆土第4層
3	壺 弥生式土器	B (5.0) C [7.0]	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 橙色	P155 PL42 5% 二次焼成 内面炭化物付着 覆土第5層
4	高 坏 弥生式土器	B (3.7) D 4.0 E 2.0	脚部片。脚部外形は「ハ」の字状に開くが、中実脚である。脚部外面はヘラケズリ後、横位のナデが施されている。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 にぶい黄橙色	P156 5% 覆土中

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第84図16	紡錘車	4.2	4.1	3.0	5.0	47.5	100	覆土第5層	DP29 PL55

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第84図17	砥石	(9.7)	(5.0)	(12.2)	(846.0)	黒青石ホルンフェルス	床面直上	Q34 一部欠損 PL63

第42号住居跡（第85図）

位置 B地区西部，G10e₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.07m，短軸3.73mの隅丸方形である。

主軸方向 [N-59°-W]。

壁 壁高14～30cmで、外傾して立ち上がる。

床 ローム大ブロックが多量で、小規模な凹凸はあるが全体的に平坦で、炉付近から中央部は踏み固められている。

ピット 確認されていない。

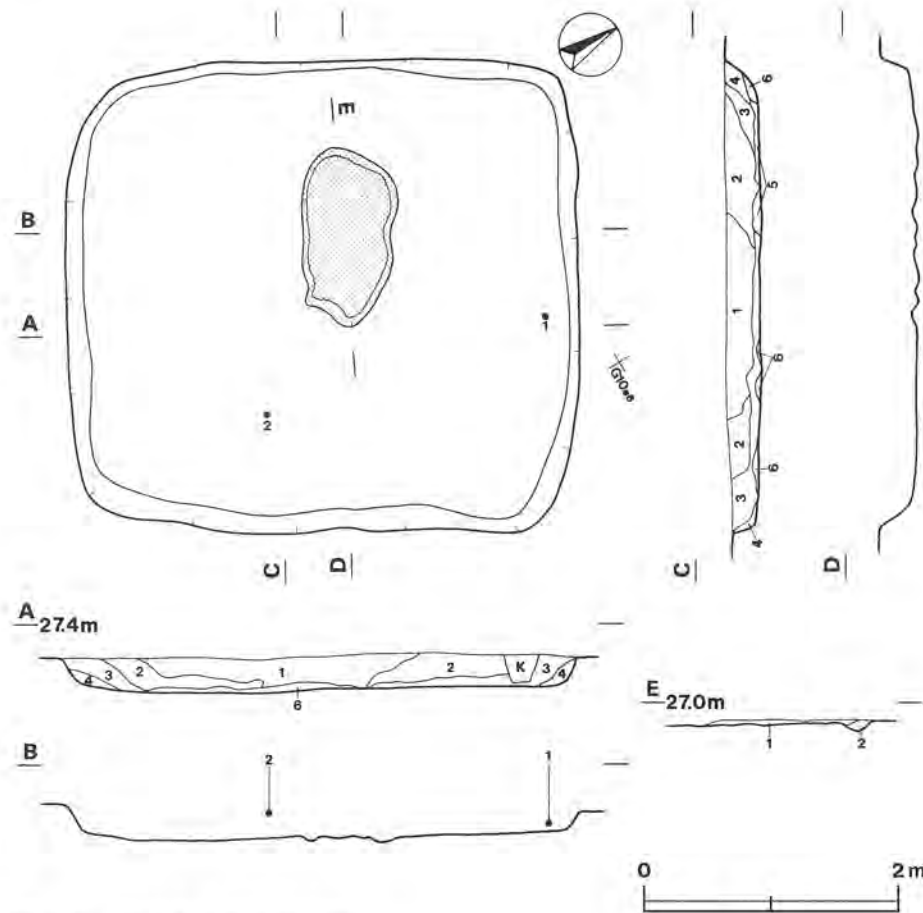
炉 1か所。中央から北西寄りにあり、平面形は長径142cm，短径78cmの不整楕円形で、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、全体的によく焼け赤変硬化している。覆土は、第1層が焼土粒子・焼土小ブロック多量の褐色土，第2層はローム粒子多量の明褐色土である。

覆土 6層から成る。壁際には褐色土が堆積し、床面上はロームブロックを多く含む褐色土が薄く中央部付近にまで達している。壁寄りには更に暗褐色土が堆積し、中央部までは黒褐色土が厚く堆積している。木根によると思われる攪乱が北東壁近くに見られる。流れ込みと思われる弥生式土器片が第1・2層から出土している。

なお、土層は

- | | | | | | |
|-----|-----|------------------------------|-----|-----|---------------------|
| 第1層 | 黒褐色 | ローム・炭化・焼土粒子少量 | 第4層 | 褐色 | ローム粒子多量，炭化粒子微量 |
| 第2層 | 暗褐色 | ローム粒子少量，ローム小ブロック少量，炭化・焼土粒子微量 | 第5層 | 明褐色 | ローム粒子多量，炭化粒子微量 |
| 第3層 | 暗褐色 | ローム粒子少量，炭化・焼土粒子微量 | 第6層 | 明褐色 | ロームブロック中量，炭化・焼土粒子微量 |
- (第85図)

である。



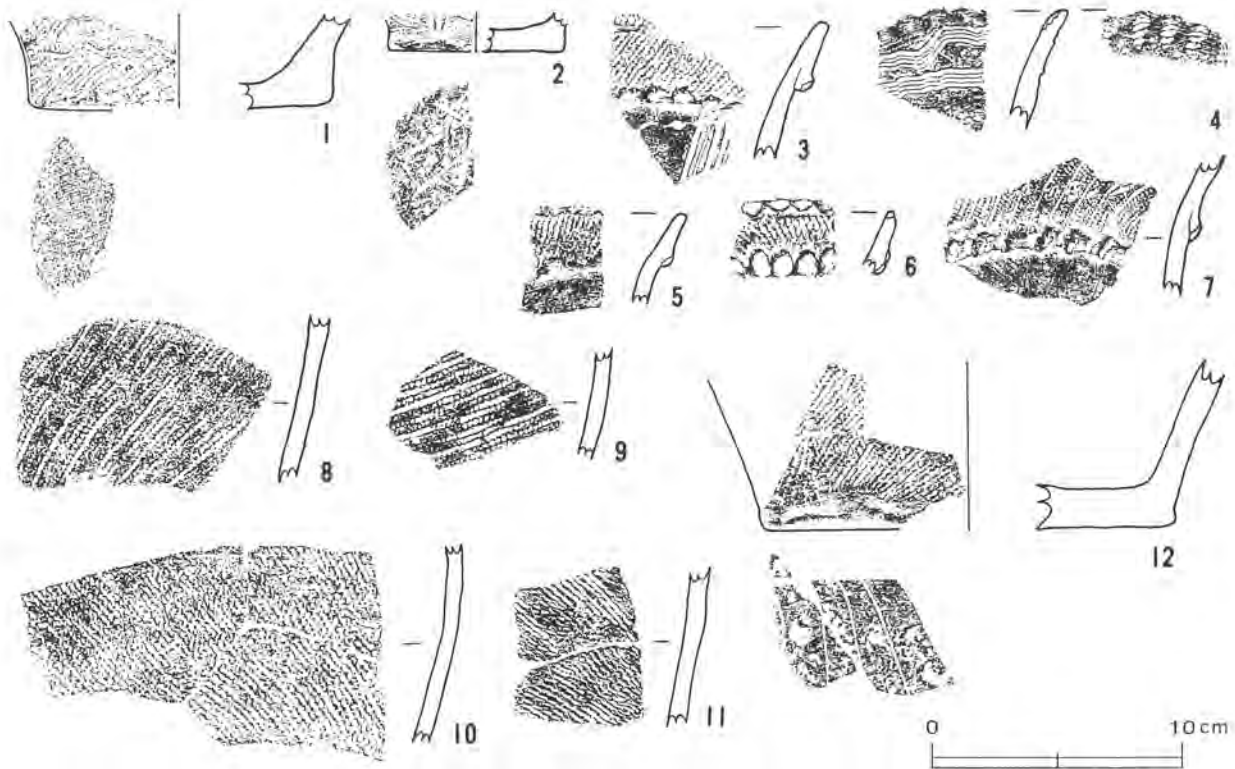
第85図 第42号住居跡実測図

遺物 弥生式土器細片が158点出土している。ある程度の形のある土器片はなく、実測のできたのは底部の2点のみである。床面直上からの出土遺物が少なく、ほとんどが覆土第3層堆積後の流れ込みと思われる。第86図1の弥生式土器壺の底部は北東壁中央寄りの覆土第3層から、2の底部は南東壁寄りの覆土第2層からそれぞれ出土している。アブライト礫は18点(中1, 小17)出土しており、総重量は174.7gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。

第42号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第86図 1	壺 弥生式土器	B (3.7) C [12.0]	底部から胴部下位にかけての破片。底部は平底で、胴部は外反して立ち上がる。胴部は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には、布目痕がある。	砂粒，石英，長石， 雲母，スコリア 普通 におい赤褐色	P157 5% 覆土第3層
2	壺 弥生式土器	B (1.5) C [7.0]	底部片。平底で、胴部には櫛歯状工具による沈線がわずかに見られるが、工具の歯数や文様の形態は不明である。底面には木葉痕がある。	砂粒，石英，長石， 雲母，スコリア 普通 におい橙色	P158 5% 覆土第2層



第86図 第42号住居跡出土遺物実測・拓影図

第86図3～12は、第42号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3～12は口縁部片で、3～7は縄文施文の複合口縁である。いずれも口縁部下端は棒状工具により押圧されている。7の縄文原体は附加条1種（附加1条）である。4は外面に4本櫛歯による粗雑な横走波状文が2段、内面には櫛歯状工具によると思われる押圧が施されている。3の頸部には縦位の櫛描文が施されている。8～11は縄文施文の胴部片で、縄文原体は9・10が附加条1種（附加2条）、8が附加条1種（附加1条）、11が撚糸である。12は縄文施文の底部片で、底面には木葉痕がある。

第43号住居跡（第87図）

位置 B地区西部、G10e₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.80m、短軸4.33mの隅丸長方形である。

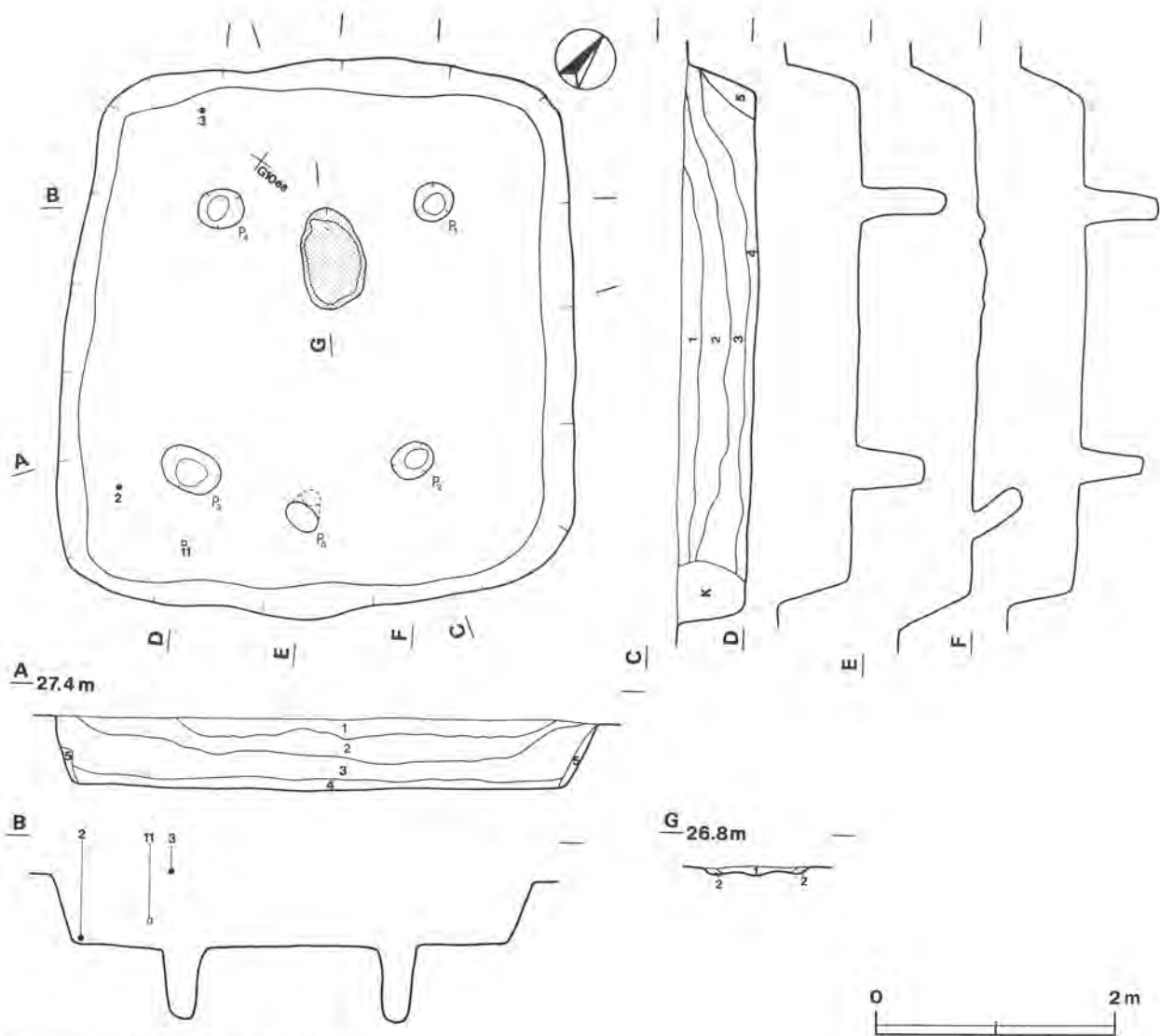
主軸方向 N-31°-W。

壁 壁高52～60cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央部とP₃の周辺が踏み固められている。

ピット 5か所。P₂・P₃は、長径36～52cm、短径28～36cmの楕円形で、深さ56～61cmである。P₁・P₄は、径32～38cmの円形で深さ66～69cmである。P₁～P₄は、支柱穴と思われ、結んだ線は方形となる。P₅は、長径30cm、短径18cmの楕円形で深さ40cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P₅は、傾斜角約53.5°で斜めに掘られており斜長は54cmとなる。傾斜方向は南東壁の南コーナー寄りで、ほぼ真南方向になる。

炉 1か所。中央からやや北西寄りで端部はP₁とP₄の中間付近にあり、平面形は長径86cm、短径52cmで、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、全体的によく焼け赤変硬化している。覆土は、第1層が焼土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子少量の黒褐色土、第2層はローム粒子多量の褐色土である（第87図）。



第87図 第43号住居跡実測図

覆土 5層から成る。壁際には僅かに褐色土が堆積し、床面全体は焼土粒子を微量含む暗褐色土が薄く広がっている。中層には暗褐色土が厚く堆積し、レンズ状堆積となっている。流れ込みと思われる弥生式土器片が第2・3層から出土している。

なお、土層は

第1層 黒褐色 ローム粒子少量

第2層 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子少量

第3層 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子少量

第4層 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

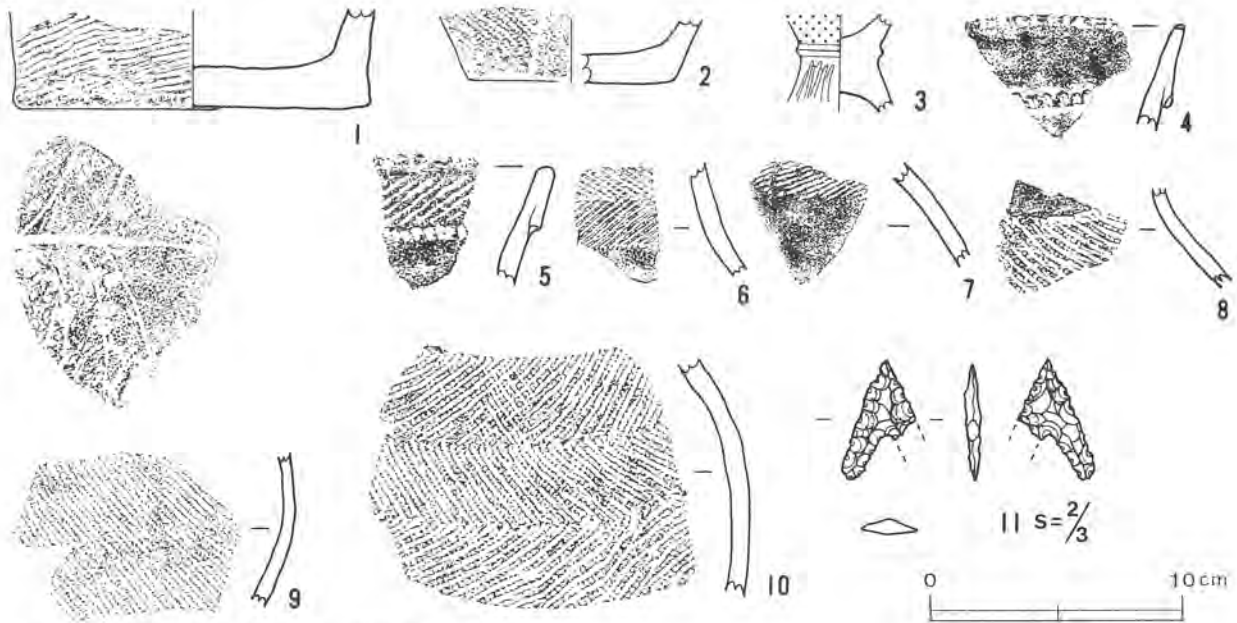
第5層 褐色 ローム粒子多量

(第87図)

である。

遺物 弥生式土器細片213点出土しているがほとんどが胴部片で、わずかに底部片があるが口縁部片は見られない。床面直上からの出土遺物がなく、覆土第3層以上から出土しているため覆土第4層堆積後の流れ込みによる混入と思われる。第88図1の弥生式土器壺の底部は覆土中から、2の底部は南コーナーの覆土第3層から出土している。3の土師器高坏脚部は西コーナー近くの覆土第2層からで、内外面赤彩され外面には靱圧痕が認められる。11の石鏃は南コーナー付近の覆土第3層から出土し、流れ込みと思われる。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第88図 第43号住居跡出土遺物実測・拓影図

第43号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第88図 1	壺 弥生式土器	B (3.9) C 14.0	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。底面に木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 明黄褐色	P159 5% 覆土中
2	壺 弥生式土器	B (2.5) C [8.2]	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 浅黄橙色	P160 5% 外面摩滅 内面炭化物付着 覆土第3層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
3	高坏 弥生式土器	B (3.9) E (2.1)	脚部は「ハ」の字状に開き、坏部は外傾して立ち上がる。括れ部には断面形三角の隆帯が貼られている。	脚部外面は縦位のヘラ磨き、内面ナデ。外面は赤彩されている。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 赤褐色	P161 10% PL42 板痕有り 覆土第2層

第88図4～10は、第43号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4・5は複合口縁部片で、4の口縁部下端と口唇部は縄文原体により押圧され、5の口縁部下端は棒状工具による刺突文が施されている。6は附加条1種（附加2条）の縄文施文の頸部片で、羽状構成をとっている。7～10は縄文施文の胴部片で、8～10の縄文原体は附加条1種（附加2条）である。10は羽状構成をとる。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第88図11	石鏃	2.4	1.5	0.3	0.6	チャート	覆土第3層 Q35 PL60	

第44号住居跡 (第89図)

位置 B地区中央部, G11a₃区を中心に確認されている。

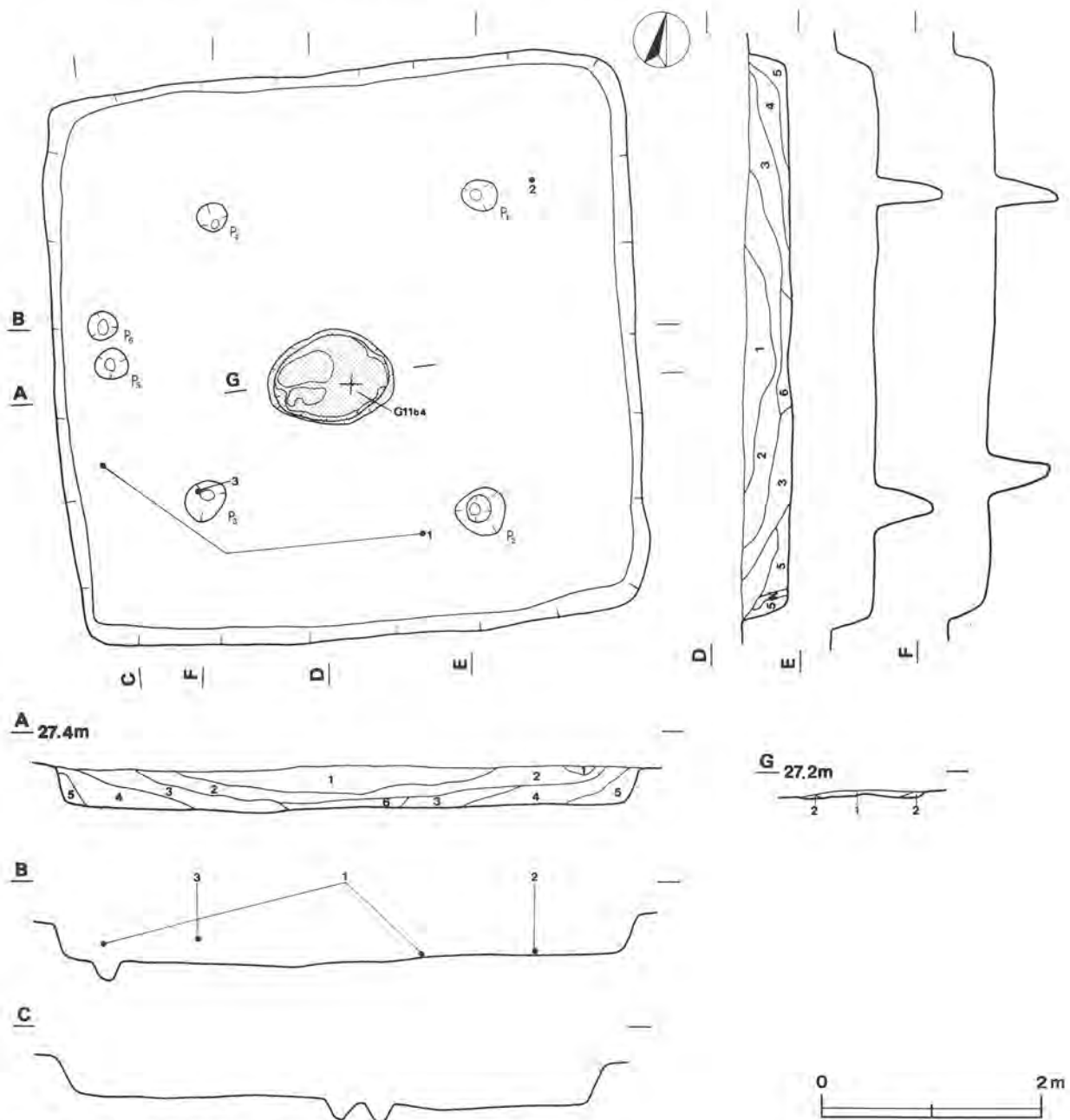
規模と平面形 長軸5.28m, 短軸5.20m の方形である。

主軸方向 N-81°-E。

壁 壁高34~40cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で全体的に硬く, 特に中央部から P₅周辺がよく踏み固められている。

ピット 6か所。P₁・P₂・P₄は, 長径34~44cm, 短径28~42cmの楕円形で深さ56~64cmである。P₃は, 径26cmの円形で深さ60cmである。P₁~P₄は支柱穴と思われ, 支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅・P₆は, 径28~30cmの円形で, 深さ18~20cmの出入り口施設に伴うピットと考えられる。P₅とP₆に時間差が有るかどうかは確認できなかったが, 規模と配置から考えて同時に存在していた可能性が高い。



第89図 第44号住居跡実測図

炉 1か所。ほぼ中央にあり、平面形は長径114cm、短径88cmの楕円形で、床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は全体によく焼け、特に西側がよく赤変硬化している。炉床上からアブライト礫が出土している。覆土は、第1層が焼土ブロック・焼土粒子少量の暗褐色土、第2層は焼土粒子微量含む褐色土である(第89図)。

覆土 6層から成る。壁際から床面にかけて流れ込むように鈍い褐色土が堆積し、床面中央部は焼土・炭化粒子を含む暗褐色土である。各層ともレンズ状堆積となっている。第2・3層から流れ込みと思われる弥生式土器片が多く出土している。

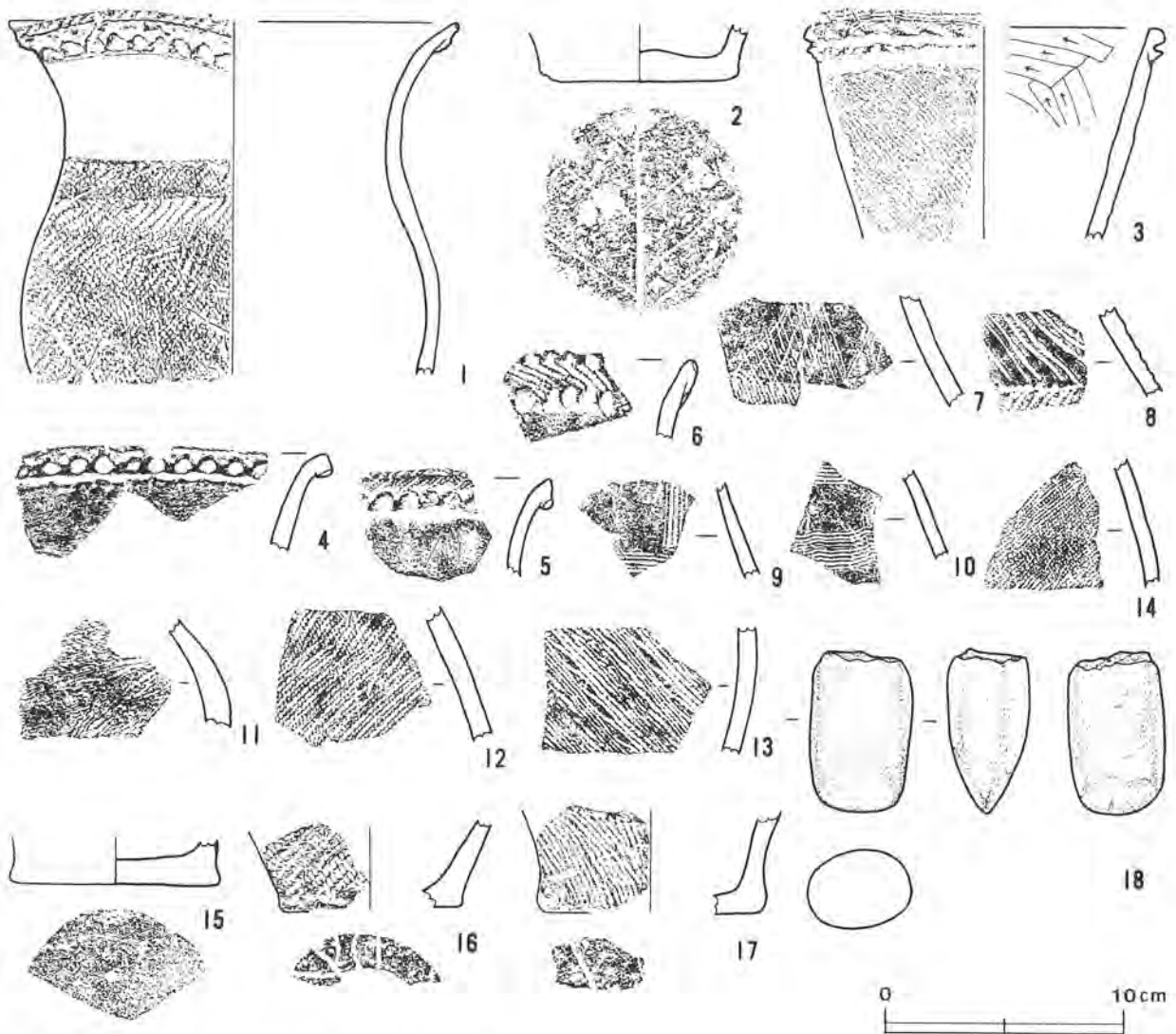
なお、土層は

第1層 黒褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、焼土・炭化粒子微量	第4層 褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、焼土・炭化粒子微量
第2層 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、焼土・炭化粒子微量	第5層 鈍い褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
第3層 褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子少量	第6層 暗褐色	ローム粒子少量、焼土・炭化粒子少量

(第89図)

である。

遺物 弥生式土器細片が343点出土している。第90図1・2は弥生式土器壺、3は鉢である。1の口縁部から胴部はP₂近くの西壁際覆土第5層からの破片とP₁付近の床面近くからの破片が接合している。3は鉢と思われる小破片でP₂付近の覆土第2層から、2の壺底部は北東コーナー付近の床面近くから出土している。18の



第90図 第44号住居跡出土遺物実測・拓影図

磨製石斧は覆土中からである。アプライト礫は10点（大2，中1，小7）出土しており，総重量は235.9gで床面直上からのものもある。

所見 本跡は，出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。

第44号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第90図 1	広口壺 弥生式土器	A [18.6]	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し，頸部から口縁部は外反して立ち上がる。胴部から頸部下半は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。頸部上半を無文帯とし，口縁部下端は棒状工具により押圧されている。口唇部には縄文が施されている。	砂粒，石英，長石，雲母，スコリア 普通 にぶい黄橙色	P162 PL42 20% 内・外面炭化物付着 覆土第5層
		B (14.8)			
2	壺 弥生式土器	B (2.4)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で，胴部は外傾して立ち上がる。胴部下位外面はヘラケズリ後，横位にヘラナデされている。底面に木葉痕がある。	砂粒，石英，長石，雲母 普通 にぶい黄橙色	P164 5% 床面付近
		C 8.3			
3	鉢 弥生式土器	A [15.0]	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部から口縁部は，外傾している。胴部には絡条体による無節の縄文が施されている。口縁部は複合口縁で，隆帯を貼り2段とし，下端には棒状工具によりキザミ目が，上端には棒状工具による押圧がそれぞれ施され，段間は細い棒状工具による深目の沈線で区画している。口唇部には，櫛描文が施されている。口縁部内面はヘラナデされている。	砂粒，石英，長石，雲母，スコリア 普通 にぶい黄橙色	P163 5% 覆土第2層
		B (8.9)			

第90図4～17は，第44号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4・5は口縁部片で，それぞれ口縁部下端には4が縄文原体による押圧，5・6には棒状工具による押圧が施されている。7～10は頸部片で，7はヘラ状工具による山形文が施され，さらに充填格子目文が，8は斜位の平行沈線が，9は5本櫛歯による縦位と横位の櫛描文が，10は10本櫛歯による横位の櫛描文がそれぞれ施されている。11～14は縄文施文の胴部片で，縄文原体は11・13が撚糸，12・14は附加条1種（附加2条）である。15～17は底部片で，胴部には16が単節縄文，17には撚糸文が施され，底面には15が布目痕，16・17には木葉痕がある。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第90図18	磨製石斧	(6.7)	(4.3)	(3.4)	(151.9)	グリーンタフ	覆土中	Q36 半欠 PL61

第45号住居跡（第91図）

位置 B地区中央部，G11c₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.53m，短軸5.18mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-25°-W。壁 壁高48～63cmで，外傾して立ち上がる。

床 平坦で，全体的に踏み固められ特に中央部が硬い。

ピット 5か所。P₁～P₄は，長径42～50cm，短径32～44cmの楕円形で深さ62～75cmである。P₁～P₄は支柱穴と思われる，支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は，長径56cm，短径52cmの楕円形で，深さ48cmの出入り口施設に伴うピットと考えられる。P₅の南東壁は南東方向に傾斜しており，その角度は61.5°である。

炉 1か所。北西壁寄りで端部はP₁とP₄の間に位置し，平面形は長径150cm，短径70cmの不整楕円形で，床を10cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は一層で，焼土ブロック少量，焼土粒子少量，ローム粒子中量の褐色土である（第91図）。

覆土 5層から成る。壁際から床面全体にかけて褐色土が薄く堆積し，中・下層は暗褐色土，黒褐色土で各層ともレンズ状である。南コーナー付近には，木根によると思われる攪乱が数箇所ある。

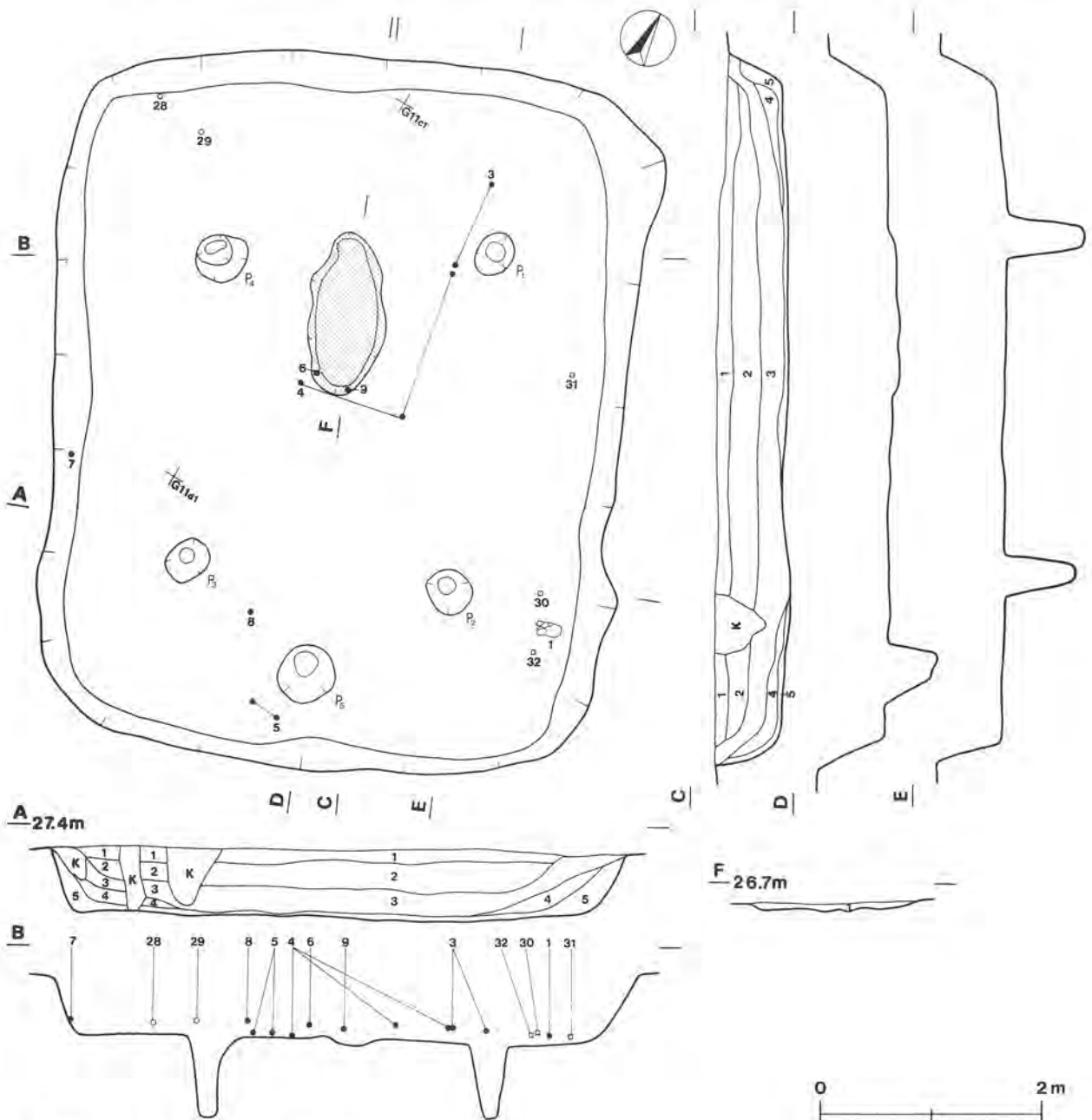
なお、土層は

第1層	黒褐色	ローム粒子少量	第4層	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
第2層	暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量	第5層	褐色	ローム粒子多量
第3層	暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 焼土・炭化粒子微量			

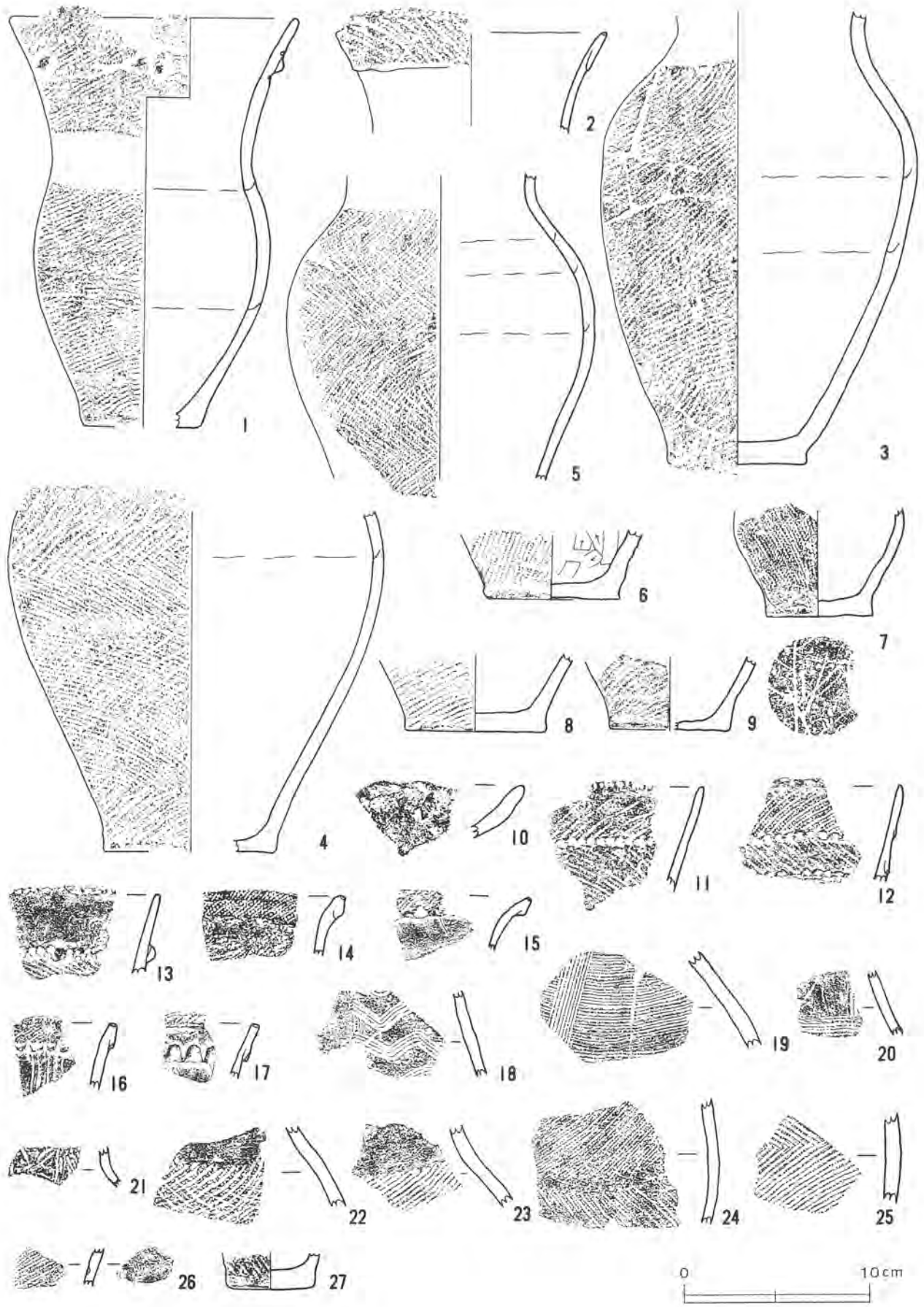
(第91図)

である。流れ込みと思われる弥生式土器片が第3・4・5層から多く出土している。

遺物 弥生式土器細片が約1020点と多量に出土している。しかし、床面直上から出土している遺物はわずかでほとんどが流れ込みや投棄による混入と思われる小破片である。第92図1～9は弥生式土器壺である。1の底部と口縁部が一部欠損している広口壺は東コーナー寄りの壁際床面直上から、口縁部を中央部方向にした横位の状態でも出土している。その両脇からは30の磨石と32の敲石が同一レベルで出土している。これら3点は出土状態から判断して、その場に放置されたものと思われる。3は頸部から口縁部を欠損しているが広口壺と思わ



第91図 第45号住居跡実測図



第92图 第45号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)

れ、覆土第5層が形成された後に投棄されたもので破片の広がりから判断して北コーナー側から投げ込まれたと考えられる。2の口縁部片は覆土中から、4の胴部下半は破片で出土しており炉付近の覆土第3層中からである。5の頸部から胴部はP₃付近の覆土第3層中から破片で出土しており、第5層形成後間もない時期に投棄されたと考えられる。6～9の底部片はいずれも覆土第3層中からで6・9は炉付近、7は南西壁際、8はP₃付近からそれぞれ出土している。31の磨石は北東壁寄りの床面直上から、28・29の紡錘車はどちらも西コーナー付近の覆土第4層からである。アブライト礫は1点(大)出土しており、重量は267.0gである。

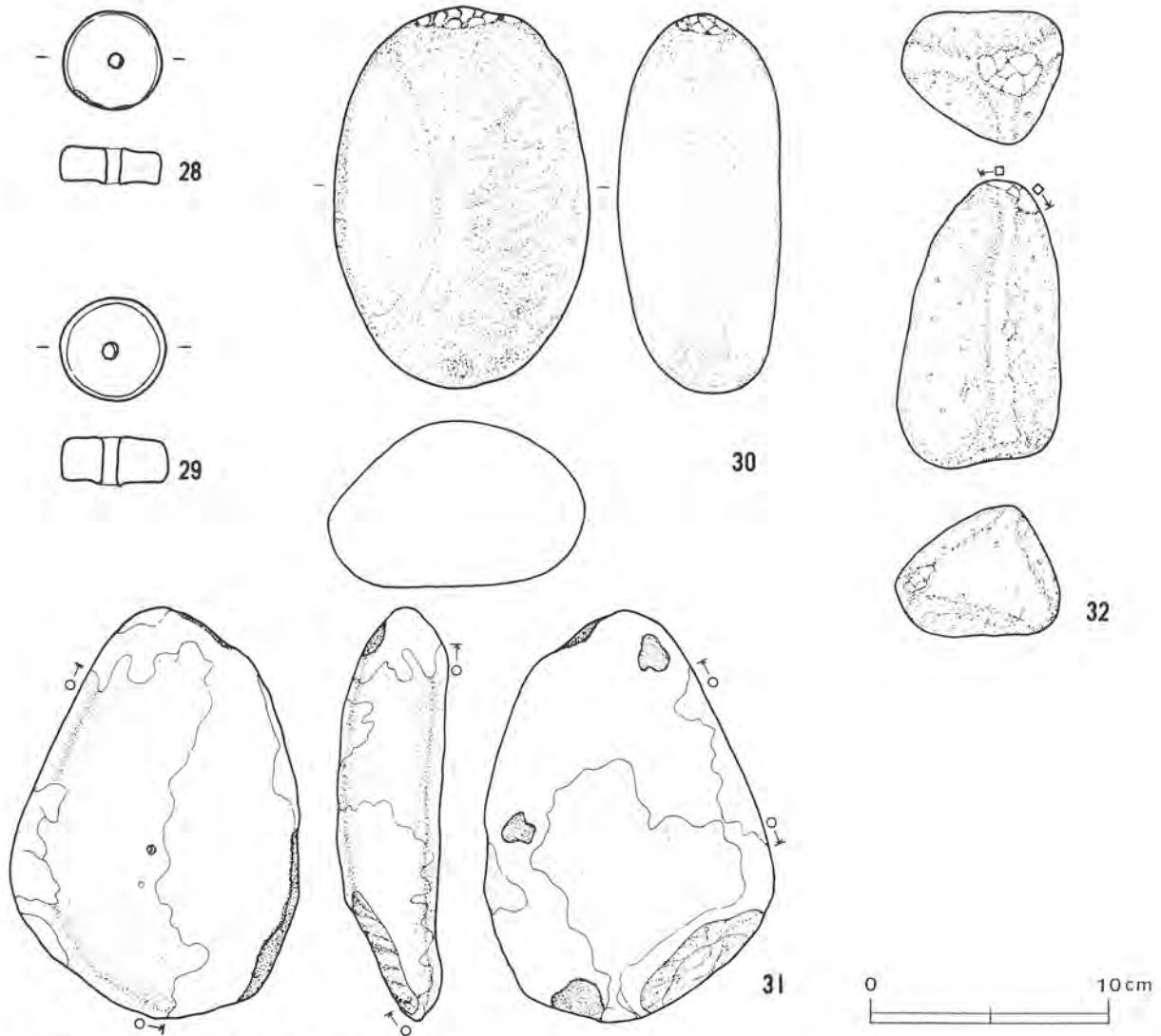
所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第45号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第92図 1	広口壺 弥生式土器	A [15.6]	底部から口縁部にかけての破片。平底で、胴部は内湾気味に立ち上がり、頸部から口縁部は外反する。頸部下半は無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが、羽状構成をとらない。口縁部には棒状工具による刺突文が2条周回し、その刺突文間に瘤が8か所貼られている。内面は横位にナデられている。底部は径3cmの孔が穿たれている。最大径を口縁部にもつ。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 浅黄色	P165 PL43 90% 外面著しい摩滅 外面炭化物付着 壁際床面直上
		B 22.3			
		C [6.6]			
2	広口壺 弥生式土器	A [14.6]	頸部上半から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外反する。複合口縁で附加条1種(附加2条)の縄文が施され、頸部は無文帯とする。口唇部には縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 灰褐色	P167 PL43 5% 内・外面炭化物付着 覆土中
		B (5.5)			
3	壺 弥生式土器	B (24.5)	底部から頸部にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がり、頸部は外反する。頸部は無文で、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。頸部は横位のヘラナデあり。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい黄橙色	P166 PL43 80% 二次焼成 外面炭化物付着 覆土第5層
		C 7.6			
4	壺 弥生式土器	B (18.6)	底部から胴部にかけての破片。平底で、胴部はやや外反気味に立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。胴部内面には輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明黄褐色	P168 PL43 30% 二次焼成 内・外面炭化物付着 覆土第3層
		C [9.2]			
5	壺 弥生式土器	B (16.5)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内湾し、頸部は外反して立ち上がる。頸部は無文で、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい黄橙色	P169 PL43 10% 覆土第3層
		C 7.1			
6	壺 弥生式土器	B (3.8)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい黄橙色	P171 PL43 5% 覆土第3層
		C 7.1			
7	小形壺 弥生式土器	B (5.8)	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。胴部下位外面にヘラナデ、胴部内面には横位のナデがある。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい黄橙色	P172 PL43 15% 外面炭化物付着 覆土第3層
		C 5.6			
8	壺 弥生式土器	B (4.3)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明褐色	P173 PL43 5% 二次焼成 内面炭化物付着 覆土第3層
		C 7.6			
9	壺 弥生式土器	B (4.0)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明褐色	P174 5% 覆土第3層
		C [6.6]			

第92図10～27は、第45号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。10は高坏の口縁部片と思われる。11～17は口縁部片で、11～13の口縁部下端と11・13の口唇部には縄文原体による押圧が施されている。11・12の口縁部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、刺突文を交点とする羽状構成をとっている。16の口縁部には附加条1種(附加2条)の縄文が、下端には棒状工具によるキザミ目と刺突文が施され、頸部には5本櫛歯による縦位の櫛描文が施されている。17は口縁部下端を棒状工具により押圧し、頸部はわずかであるが縦区画状に施された縄文が認められる。18～21は頸部片で、18は縦位の櫛描文と4本櫛歯による山形文が、20に

は縦位と横位の櫛描文が施されている。19は横位の櫛描文を施した後に、8本櫛歯による縦位の櫛描文を施している。21はヘラ状工具による縦位・斜位の沈線が施されている。22・24・25は胴部片でどちらも附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとっている。26の胴部片は内面に靱痕がある。27は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている底部片である。



第93図 第45号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第93図28	紡錘車	4.2	4.2	1.6	7.0	32.7	100	覆土第4層	DP30 PL55
29	紡錘車	4.4	4.4	2.1	7.0	47.8	100	覆土第4層	DP31 PL55

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第93図30	磨石	15.9	10.9	6.8	1628.2	砂岩	床面直上	Q37 敲石兼用
31	磨石	17.2	12.0	4.6	1140.1	砂岩	床面直上	Q38 石鎌の可能性有り
32	敲石	12.1	6.8	5.6	562.6	凝灰岩	床面直上	Q39 全面被熱 PL62

第46号住居跡 (第94図)

位置 B地区西部, G10h7区を中心に確認されている。

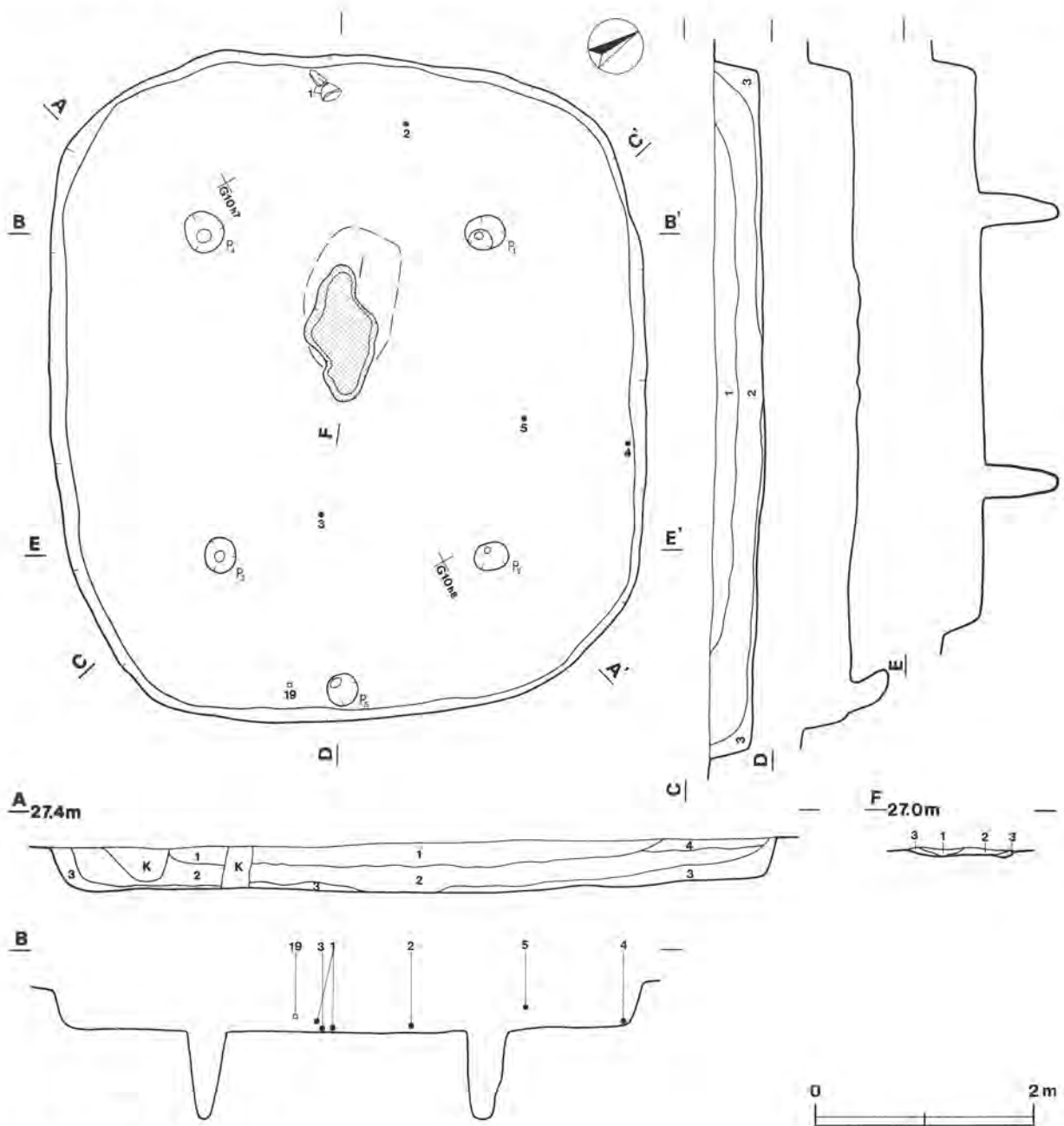
規模と平面形 長軸6.12m, 短軸5.45mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-58°-W。 壁 壁高34~40cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 中央部からP₅周辺がよく踏み固められ硬い。

ピット 5か所。P₁・P₂は, 長径34~36cm, 短径24~32cmの楕円形で深さ73~83cmである。P₃・P₄は, 径32~40cmの円形で深さ68~80cmである。P₁~P₄は支柱穴と思われ, 結んだ線は方形となる。P₅は, 径28cmの円形で深さ33cmである。P₅は出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。中央からやや北西寄りにあり, 平面形は長径126cm, 短径70cmの不定形で, 床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は, 第1層が焼土粒子少量, 焼土ブロック微



第94図 第46号住居跡実測図

量の暗褐色土、第2層は焼土粒子中量、炭化粒子少量、焼土ブロック少量の暗褐色土、第3層はローム粒子多量、焼土粒子微量の褐色土である（第94図）。

覆土 4層から成る。壁際から床面中央にかけてローム中ブロックを含む褐色土が堆積している。その上には、暗褐色土が厚く堆積し、上層は黒褐色土である。

なお、土層は

第1層 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 第3層 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック少量
 第2層 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、焼土粒子微量 第4層 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
 (第94図)

である。流れ込みと思われる弥生式土器片が第2層から出土している。

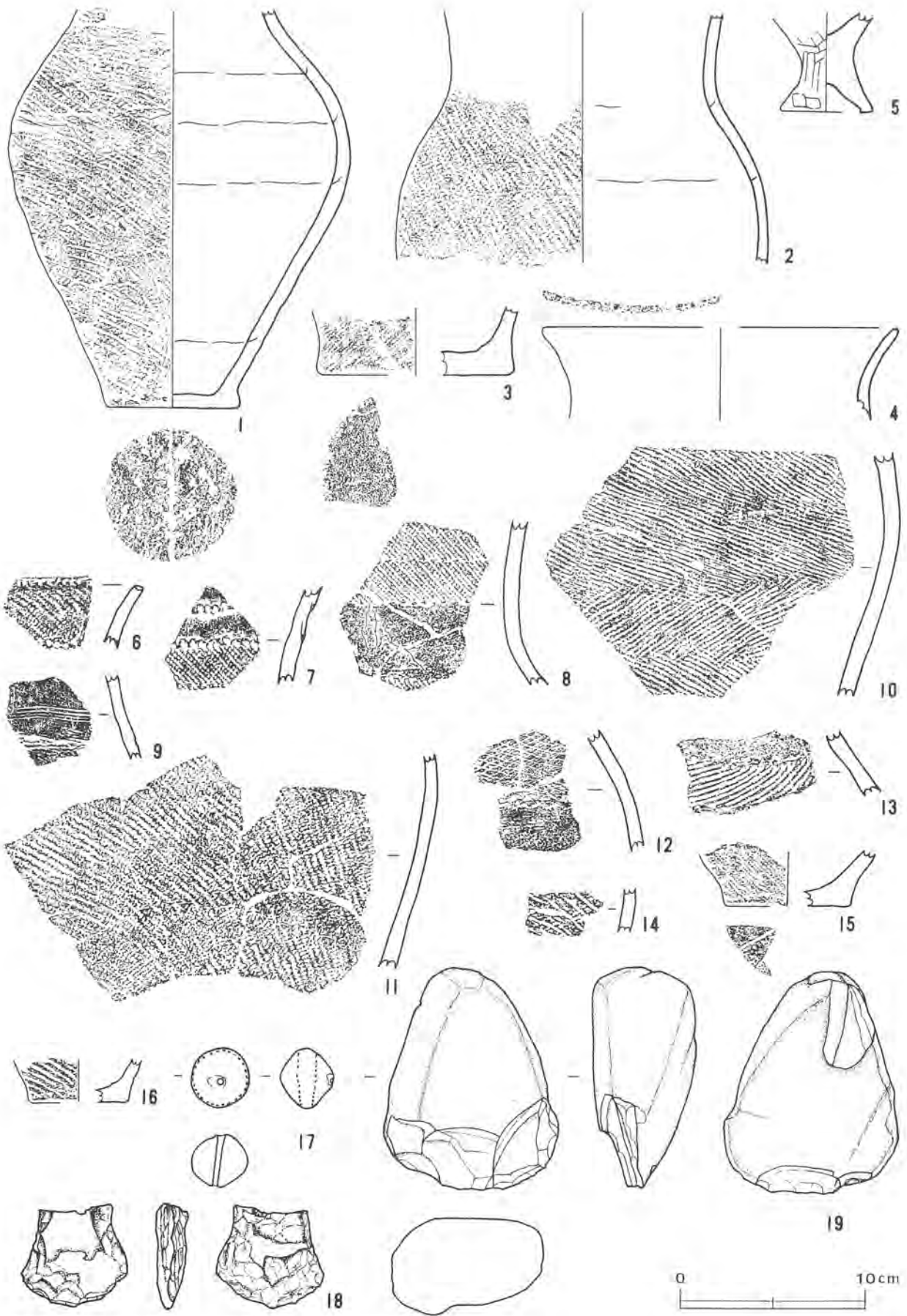
遺物 弥生式土器細片が275点出土しているが、口縁部・底部片が極端に少ない。また、床面直上からの遺物は1点のみである。第95図1の弥生式土器壺は口縁部から頸部を欠損しているが、広口と思われる。北西壁際中央部で、覆土第3層中から胴部中位の輪積みで2分割になった状態で出土しており、住居廃絶後間もない時期に投棄されたものであろう。2の頸部から胴部は北西壁際覆土第3層から破片で、3の底部は炉の南東部床面直上から出土している。4の甕口縁部は北東壁際の床面近くから破片で、5の高坏脚部は北東壁寄りの覆土第2層からである。19の打製石斧片はP₅近くの覆土第2層から、17と18は覆土中からそれぞれ出土している。アプライト礫は13点（中1、小12）出土しており、総重量は149.9gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第46号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第95図 1	壺 弥生式土器	B (21.5) C 7.2	頸部から口縁部欠損。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。胴部外面に靱痕がある。底面には摩滅により明確ではないが、木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 にぶい黄褐色	P175 PL44 PL53 71% 二次焼成 胴部内・外面剝離 覆土第3層
2	壺 弥生式土器	B (13.5)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部はやや外反して立ち上がる。胴部には太目の附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。頸部は無文である。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 にぶい褐色	P177 PL44 5% 外面炭化物付着 覆土第3層
3	壺 弥生式土器	B (3.7) C [10.6]	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加1条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 橙色	P178 PL44 5% 炉周辺床面直上
4	甕 弥生式土器	A [19.2] B (5.0)	口縁部片。口縁部は外反する。口縁部は無文で、口唇部には棒状工具により押圧されている。口縁部内面には横位のナデあり。	砂粒、石英、長石、 雲母 普通 灰黄褐色	P176 5% 内・外面炭化物付着 床面付近
5	高坏 弥生式土器	B (5.3) D 5.0 E 3.0	脚部から坏部にかけての破片。脚部は「ハ」の字状に開き、坏部は外傾して立ち上がる。脚部から坏部にかけての外面は縦位のヘラナデがある。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 明赤褐色	P179 PL44 30% 覆土第2層

第95図6～16は、第46号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。6・7は口縁部片で、6の口縁部には附加条1種（附加1条）の縄文が施され、口縁部下端と口唇部は縄文原体により押圧されている。7は2段の複合口縁で、下端は縄文原体により押圧され、頸部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。8・9は頸部片で、8は頸部下半を無文帯とし、それ以外には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。9は4本籥歯による横走文の後に縦位の籥描文が施され、胴部には捺糸文が施されている。10～14は胴部片で、10・11・13は附加条1種（附加2条）の縄文が、14には附加条2種（附加1条）の縄文が、12にはヘラ状工具による格子目文がそれぞれ施されている。15・16は底部片で、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施され、15の底面には木葉痕がある。

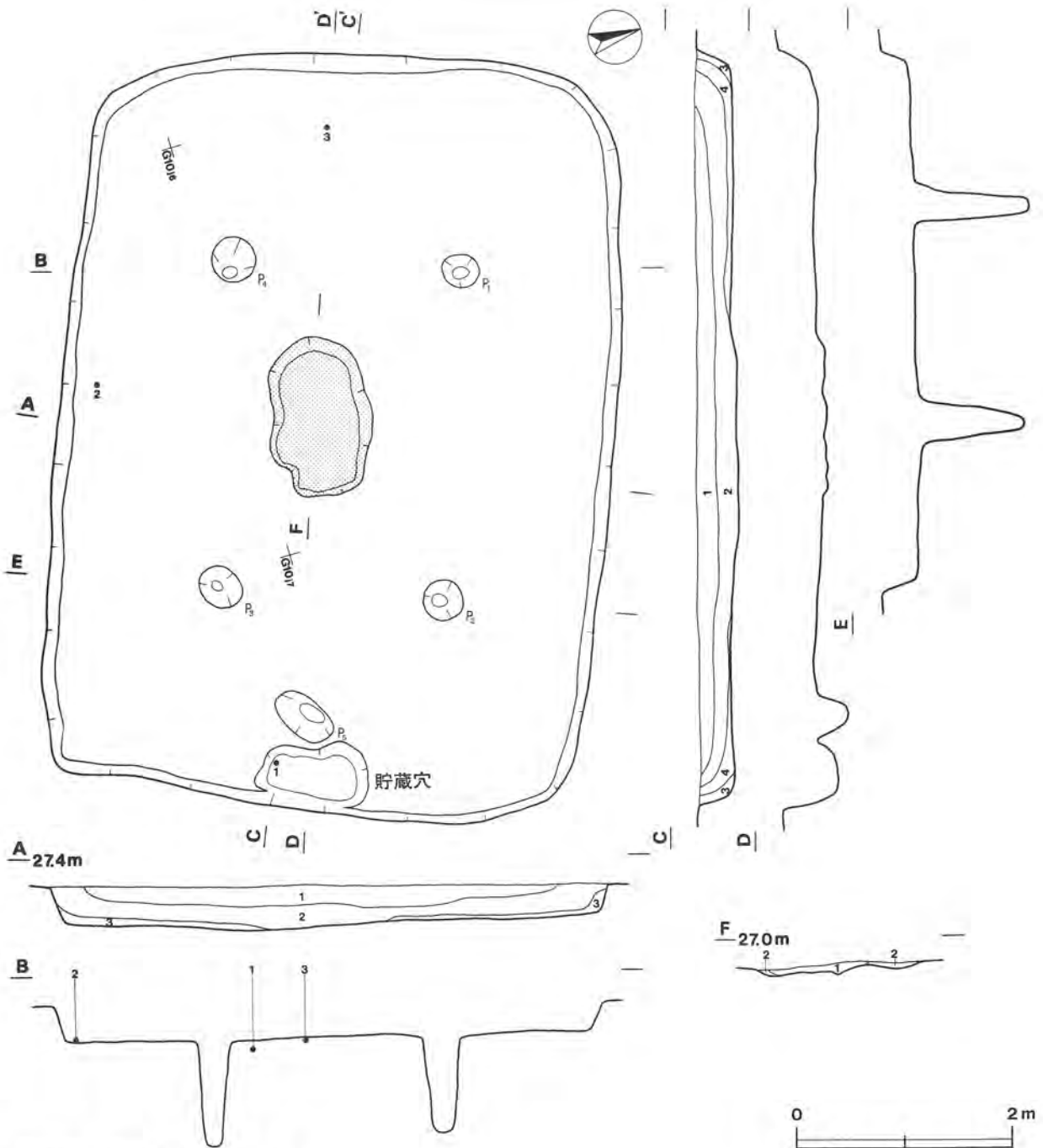


第95图 第46号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第95図17	紡錘車	3.2	3.1	2.8	4.0	22.9	100	覆土中	DP32 PL55

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第95図18	打製石斧	5.6	5.2	1.7	58.9	凝灰岩	覆土中	Q40 半欠 PL61
19	打製石斧	12.0	9.4	5.5	677.4	硬砂岩	覆土第2層	Q41

第47号住居跡 (第96図)



第96図 第47号住居跡実測図

位置 B地区西部, G10i₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸7.17m, 短軸5.20mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-70°-W。

壁 壁高28~34cmで, 外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 炉とP₅周辺はよく踏み固められ硬い。

ピット 5か所。P₁~P₄は, 径30~42cmの円形で深さ92~108cmである。P₁~P₄は主柱穴で結んだ線は方形となる。P₅は, 長径60cm, 短径34cmの楕円形で深さ31cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P₅の南東側は緩やかに傾斜している。

炉 1か所。中央にありやや南西壁寄りである。平面形は長径150cm, 短径92cmの楕円形で, 床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は, 南東側がよく焼け赤変硬化しているが北西側は殆ど焼けていない。炉床直上からアプライトの細礫片が2点出土している。覆土は第1層は焼土粒子中量, 焼土ブロック少量, ローム小ブロック少量の暗褐色土, 第2層はロームブロック少量, 焼土粒子微量の褐色土である。

貯蔵穴 1か所。南東壁に接して付設され, 平面形は長形106cm, 短径54cmの不整楕円形で深さ14cmである。底面は皿状である。

覆土 4層から成る。壁際から床面にかけて褐色土が薄く堆積し, 床面中央部は焼土ブロックを含む暗褐色土が厚く堆積している。各層ともレンズ状堆積となっている。流れ込みと思われる弥生式土器片が第2・3層から出土しているが量は少ない。

なお, 土層は

第1層 暗褐色	ローム粒子少量, ロームブロック少量, 焼土粒子微量	第3層 褐色	ローム粒子多量
第2層 暗褐色	ローム粒子少量, ロームブロック微量, 焼土粒子少量, 焼土小ブロック微量	第4層 暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量

(第96図)

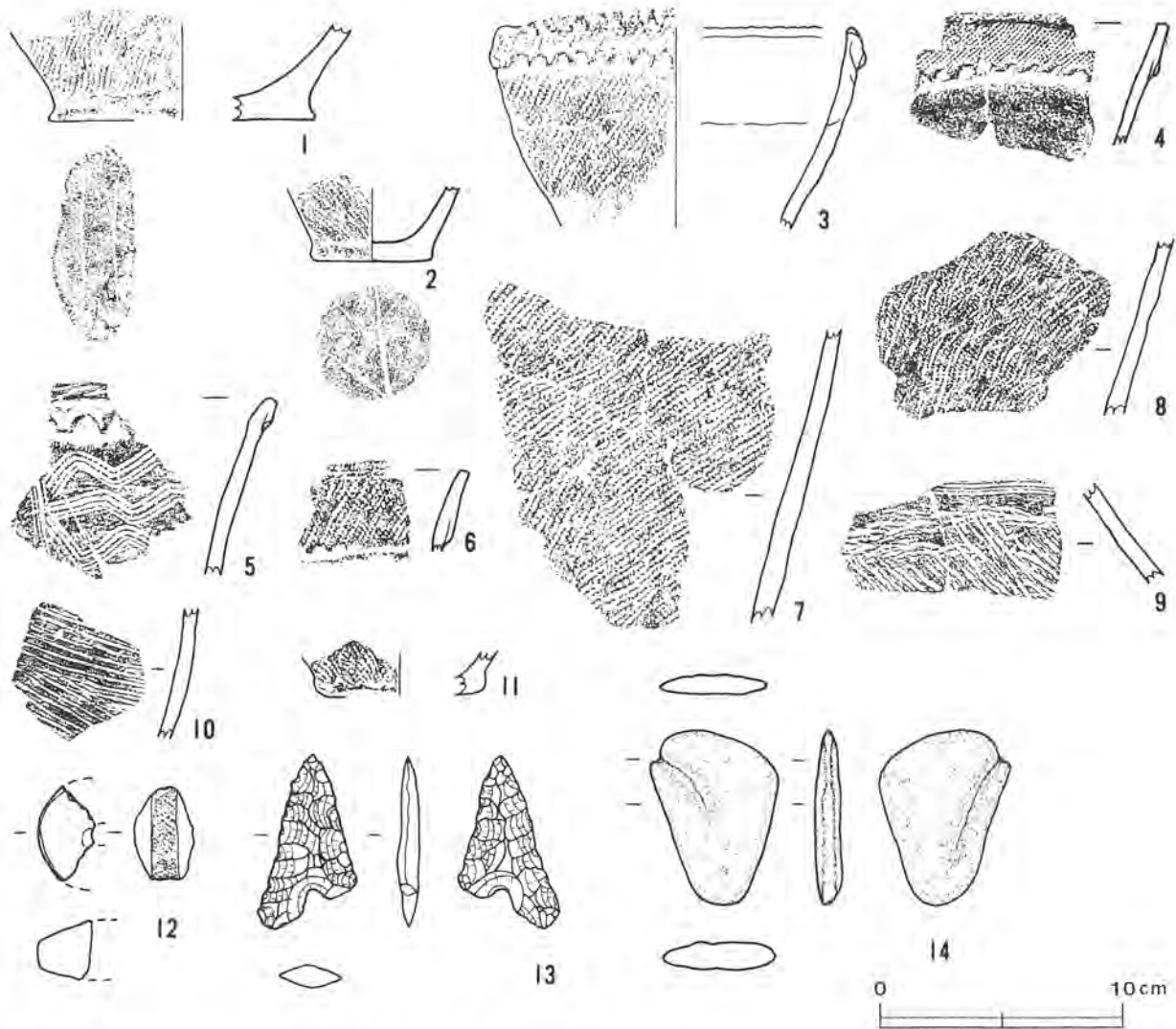
である。

遺物 弥生式土器細片が328点出土しているがほとんど接合できるものがない。第97図1・2は弥生式土器壺の底部で, 1が南東壁際, 2が南西壁際からでどちらも床面近くから出土している。3の鉢は北西壁際の床面直上から, 12の紡錘車, 13の石鏃, 14の不明石器はいずれも覆土中からである。東コーナー部の床面直上から20cm四方の砂質性の粘土塊が確認されている。アプライト礫は21点(中3, 小18)出土しており, 総重量は196.2gである。

所見 本跡は, 出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。

第47号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第97図 1	壺 弥生式土器	B (4.0)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で, 胴部はやや内彎気味に立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 明黄褐色	P181 PL44 5% 床面付近
		C [11.0]			
2	小形壺 弥生式土器	B (3.1)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で, 胴部はやや外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 におい黄褐色	P182 PL44 10% 外面炭化物付着 床面付近
		C 5.1			
3	鉢 弥生式土器	A [7.5]	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎する。胴部から口縁部にかけて附加条1種(附加1条)の縄文が施されている。複合口縁で, 下端には棒状工具により押圧され, 口唇部は縄文原体により押圧されている。口縁部内面は横方向にナデられている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 橙色	P180 PL44 10% 北西壁際床面直上
		B (8.3)			



第97図 第47号住居跡出土遺物実測・拓影図

第97図4～11は、第47号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4～6は口縁部片で、4の口縁部には附加条1種（附加1条）の縄文が施され、下端は棒状工具によるキザミ目がある。6は口縁部下端が棒状工具により押圧され、口縁部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。5は口唇部に捺糸文が施され、口縁部下端は棒状工具により押圧されている。頸部は櫛描文により縦区画され、4本櫛歯による横走波状文が施されている。7～10は胴部片で、7・8は附加条1種（附加2条）の縄文が、9・10は絡条体による捺糸文が施されている。11は単節縄文施文の底部片である。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第97図12	紡錘車	(3.9)	(2.3)	(2.4)	—	16.8	30	覆土中	DP33 PL56

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第97図13	石鏃	3.6	2.1	0.5	2.4	頁岩	覆土中	Q44 PL60
14	不明石器	7.2	5.4	1.2	51.7	重質石はルンフェルス	覆土中	Q43 穂摘具の可能性有り PL62

第48号住居跡 (第98図)

位置 B地区中央部, G11i₂区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南西・北西壁が, 第1号溝により掘り込まれているが床面までは達していない。

規模と平面形 長軸5.05m, 短軸4.57mの隅丸長方形である。

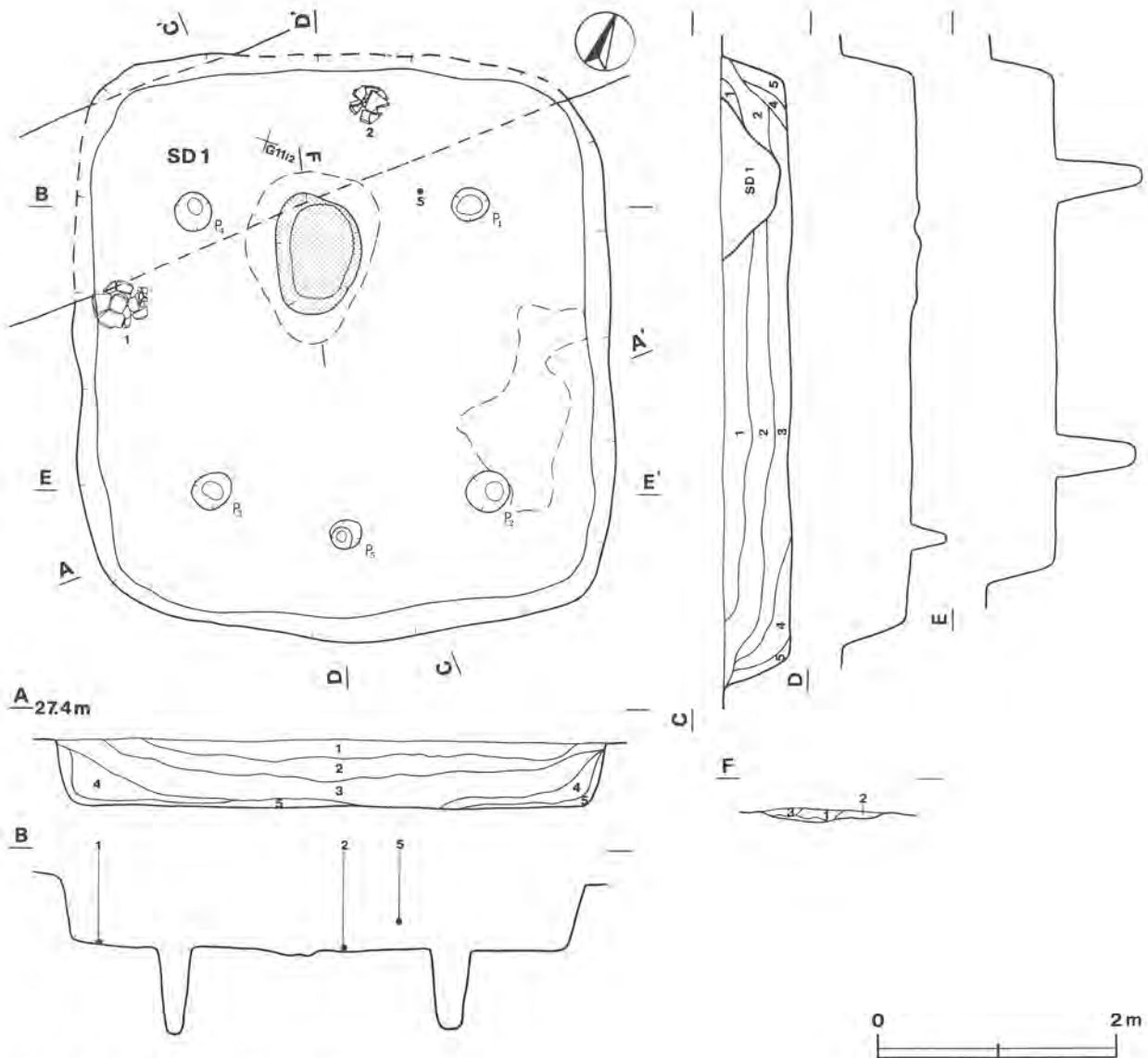
主軸方向 N-23°-W。

壁 壁高52~60cmで, 外傾して立ち上がる。北西壁の大部分は調査エリア外である。

床 平坦で, 中央部とP₅の周辺が踏み固められている。

ピット 5か所。P₁~P₄は, 径28~36cmの円形で, 深さ67~77cmである。P₁~P₄は, 支柱穴と思われ, 結んだ線は方形となる。P₅は, 径28cmの円形で深さ30cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。中央から北西寄りでP₁とP₄の間に端部があり, 平面形は長径102cm, 短径72cmで, 床を8cm掘り込んだ地床炉である。炉床は, 全体的によく焼け赤変硬化している。覆土は, 第1層が焼土・炭化粒子少量, ローム中ブロック少量含む褐色土, 第2層は焼土・炭化粒子少量の褐色土, 第3層はローム・炭化・焼土粒子少量の暗褐色土である (第98図)。



第98図 第48号住居跡実測図

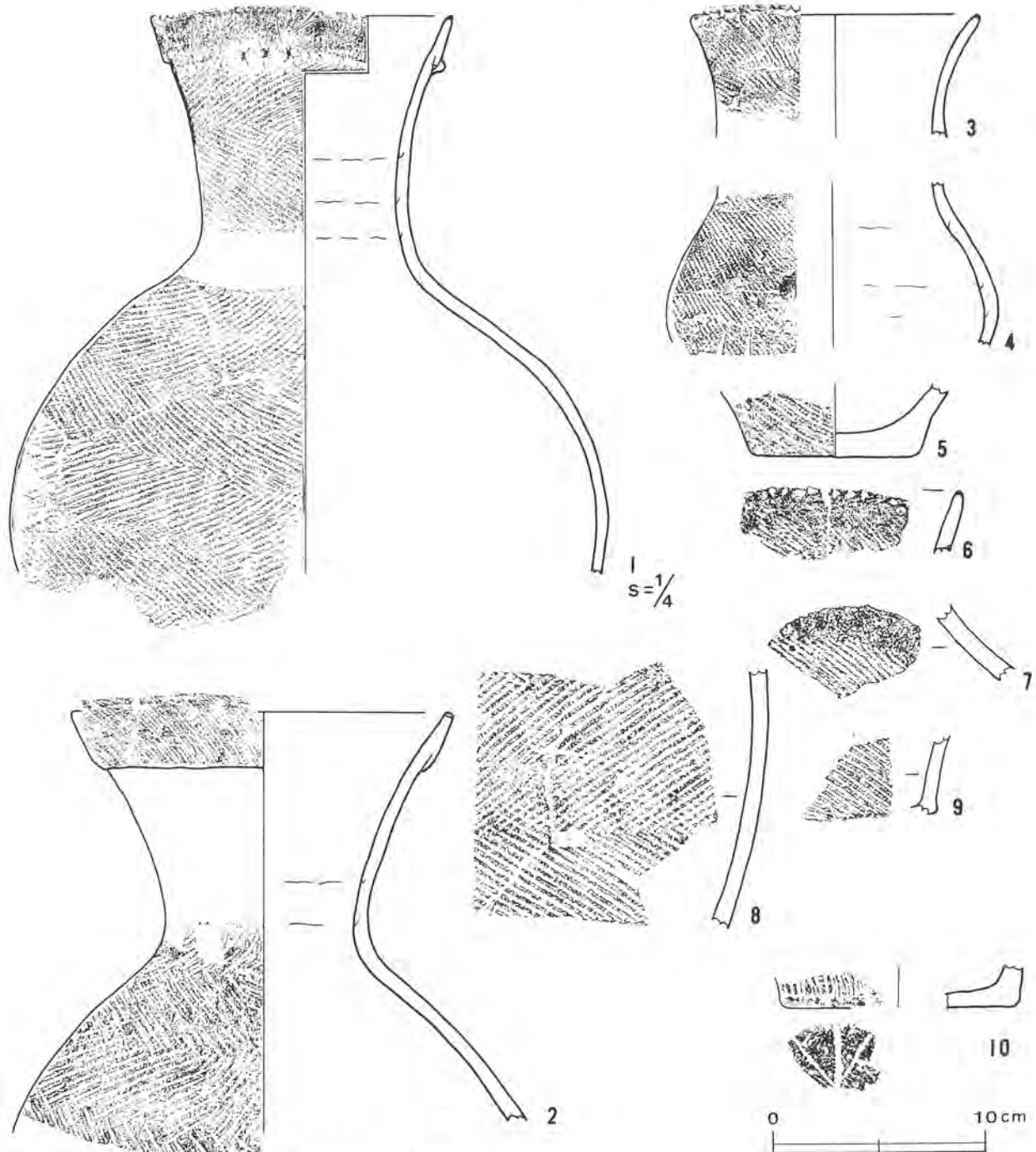
覆土 5層から成る。北コーナー付近は第1号溝に掘り込まれているが、床面までは達しておらず、その周囲には影響なく残存状況は良い。ロームブロックを含む褐色土が壁際にあり、下層から上層まで暗褐色土がレンズ状堆積となっている。流れ込みと思われる弥生式土器片が第3層から少量出土している。

なお、土層は

第1層 黒褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、焼土粒子微量	第3層 暗褐色	ローム粒子中量、ロームブロック微量、焼土粒子微量、焼土ブロック微量
第2層 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、焼土粒子微量	第4層 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、焼土ブロック微量、炭化粒子微量
		第5層 褐色	ローム粒子多量、ロームブロック微量

(第98図)

である。



第99図 第48号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物 弥生式土器細片が144点出土している。第99図1～5は弥生式土器壺である。1と2の口縁部から胴部は、どちらも壁際の床面直上に、1は正位、2は横位の押し潰れた状態で出土しているが、2は住居廃絶時は正位で置かれていたものと思われる。壺の破損後、器台として再利用していたものと推測される。5の底部はP₁付近の覆土第2層から、3・4は同一個体と思われる口縁部から胴部上半にかけてで覆土中から破片でそれぞれ出土している。アプライト礫は1点(小)出土しており、重量は20.2gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第48号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第99図 1	広口壺 弥生式土器	A 18.9 B (35.1)	底部から口縁部にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がり頸部から口縁部はやや外反する。複合口縁で、下端には縄文原体により押圧され、さらに3個1組の瘤が5単位貼られている。頸部下位を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。口唇部は縄文原体により押圧されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい橙色	P183 PL44 40% 床面直上
2	広口壺 弥生式土器	A 18.0 B (19.3)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、頸部から口縁部は外反気味に立ち上がる。頸部を無文帯とし、胴部と口縁部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、胴部では羽状構成をとる。複合口縁で、口唇部にも縄文が施されている。胴部内面は横位のナデ。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明黄褐色	P184 PL44 40% 床面直上
3	広口壺 弥生式土器	A 13.6 B (5.8)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外反して立ち上がる。頸部から口縁部にかけて附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。口唇部は棒状工具によりキザミ目が施されている。	砂粒、スコリア 普通 にぶい褐色	P185A 5% 内・外面炭化物付着 覆土中
4	広口壺 弥生式土器	B (7.8)	胴部上半の破片。胴部は内彎し、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。内面には輪積み痕がある。第99図3の壺と同一個体と思われる。	砂粒、スコリア 普通 にぶい褐色	P185B 20% 二次焼成 内・外面炭化物付着 覆土中
5	壺 弥生式土器	B (3.4) C 8.4	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい黄褐色	P187 5% 外面摩滅 覆土第2層

第99図6～10は、第48号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。6は口縁部片で、口縁部には附加条1種(附加2条)の縄文が、口縁部下端には竹管状工具による刺突文が、口唇部には縄文原体による押圧が施されている。また口縁部上端は横位にナゲられている。7は頸部から胴部にかけての破片で、8は胴部片である。どちらも附加条1種(附加2条)の縄文が施され、8は羽状構成をとっている。9・10は底部片で、9は附加条1種(附加2条)の縄文が、10が絡糸体による撚糸文が施されている。10の底面には木葉痕がある。

第49号住居跡(第100図)

位置 B地区南部、H11e区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.00m、短軸4.68mの隅丸方形である。

主軸方向 N-68°-W。 **壁** 壁高12～20cmで、外傾して立ち上がる。

床 凹凸があり、全体的によく踏み固められており特に中央部からP₅周辺が硬い。

ピット 9か所。P₁～P₄・P₆は、径20～42cmの円形で深さ25～39cmである。P₅・P₇～P₉は、長径34～60cm、短径24～38cmの楕円形で、深さ13～46cmである。P₁～P₄は主柱穴、P₆・P₉は補助柱穴と思われ、主柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は出入り口施設に伴うピットと考えられ、P₇・P₈は性格不明である。

炉 1か所。中央からやや北西寄りにあり、平面形は長径112cm、短径76cmの楕円形で、床を6cm掘り込んだ

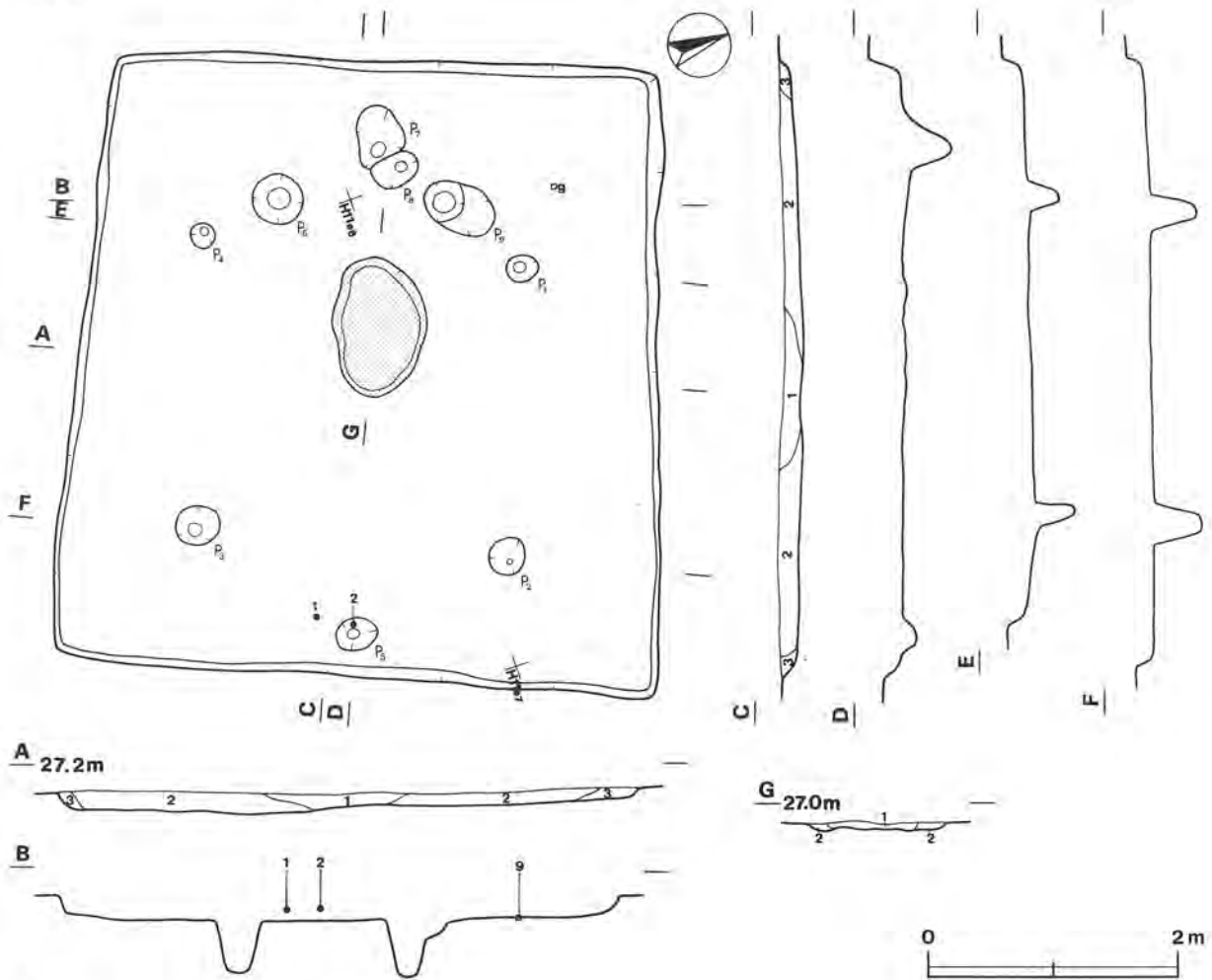
地床炉である。炉床は中央部がやや赤変硬化しているが全体的にはあまり焼けていない。覆土は、第1層が焼土ブロック少量、焼土粒子中量、ロームブロック少量の暗褐色土、第2層は焼土粒子微量含む褐色土である(第100図)。覆土中からアプライトの細礫が出土している。

覆土 3層から成る。壁際に褐色土が堆積し、床面の大部分にはロームブロックを含む暗褐色土が厚目に堆積している。中央部には焼土粒子を含む暗褐色土が厚く堆積し中層を構成している。第1・2層から流れ込みと思われる弥生式土器片が多く出土している。

なお、土層は

第1層 暗褐色	ローム・焼土粒子少量, ローム小ブロック少量	第3層 褐色	ローム粒子多量	(第100図)
第2層 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子微量, ローム小ブロック微量			

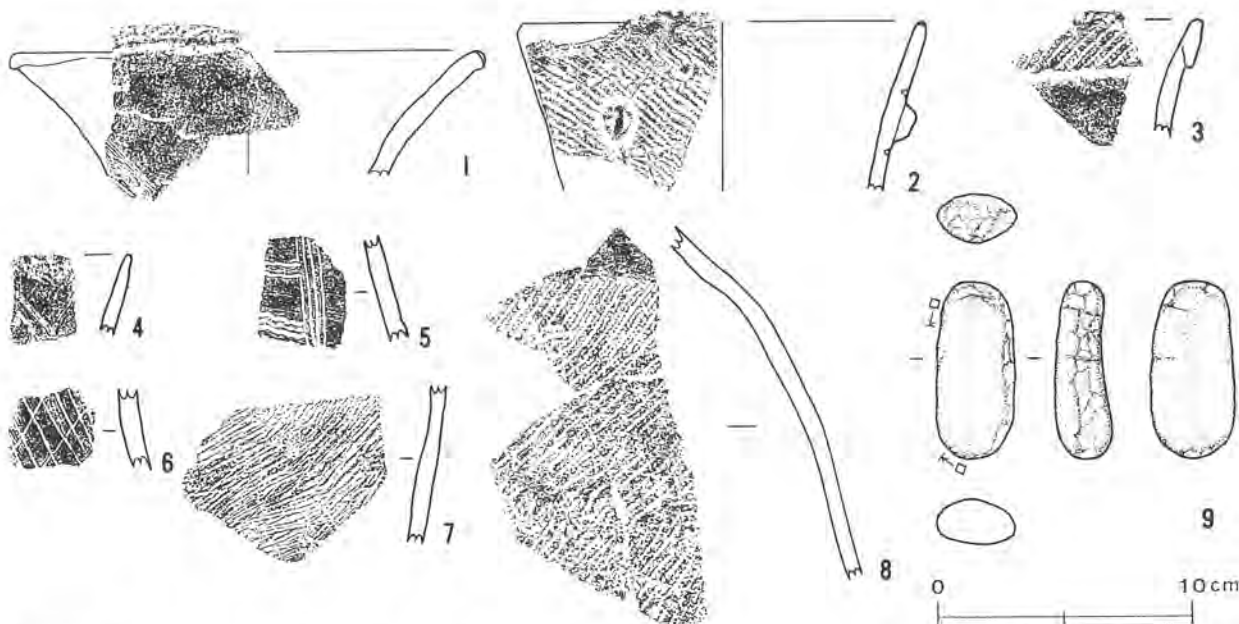
である。



第100図 第49号住居跡実測図

遺物 弥生式土器細片が85点出土しているが、覆土が浅いためか全体量としては少ない。しかし、床面直上から出土している破片の割合は多い。第101図1・2の弥生式土器壺口縁部片はどちらもP₇付近の覆土第2層から破片で出土している。9の敲石は北コーナー付近の床面直上から出土している。アプライト礫が、炉と北西壁寄りであるP₇・P₈周辺の床面直上から多量に出土している。アプライト礫は147点(中4, 小143)出土しており、総重量は949.2gで他の住居跡に比べ異常に多い。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第101図 第49号住居跡出土遺物実測・拓影図

第49号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第101図 1	広口壺 弥生式土器	A [18.6] B (5.0)	口縁部片。口縁部は外反して緩やかに傾斜する。口縁部下位には絡条体による燃糸文が施されている。口唇部には棒状工具により、キザミ目が施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 にぶい黄褐色	P188 5% 内・外面炭化物付着 覆土第2層
2	広口壺 弥生式土器	A [16.0] B (6.8)	口縁部片。口縁部は外傾する。口縁部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され, その後棒状工具による刺突文を2条周回させている。さらに, 刺突文間には瘤が貼られている。内面は横位にナデられている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 にぶい黄褐色	P189 PL44 5% 覆土第2層

第101図3～8は, 第49号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3・4は口縁部片で, 3は附加条1種(附加2条)の縄文が施され, 4にはへら状工具による山形文が施されている。5・6は頸部片で, 5には4本櫛歯による縦区画の後3本櫛歯による横走波状文が, 6にはへら状工具による格子目文がそれぞれ施されている。7・8は胴部片で, 8には附加条1種(附加2条)の縄文が, 7には燃糸文が施されている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第101図9	敲石	7.1	3.2	1.8	70.2	硬砂岩	床面直上	Q45

第50号住居跡(第102図)

位置 B地区中央部, G11c区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.58m, 短軸5.15mの隅丸方形である。

主軸方向 N-80°-W。

壁 壁高16~26cmで, 外傾して立ち上がる。

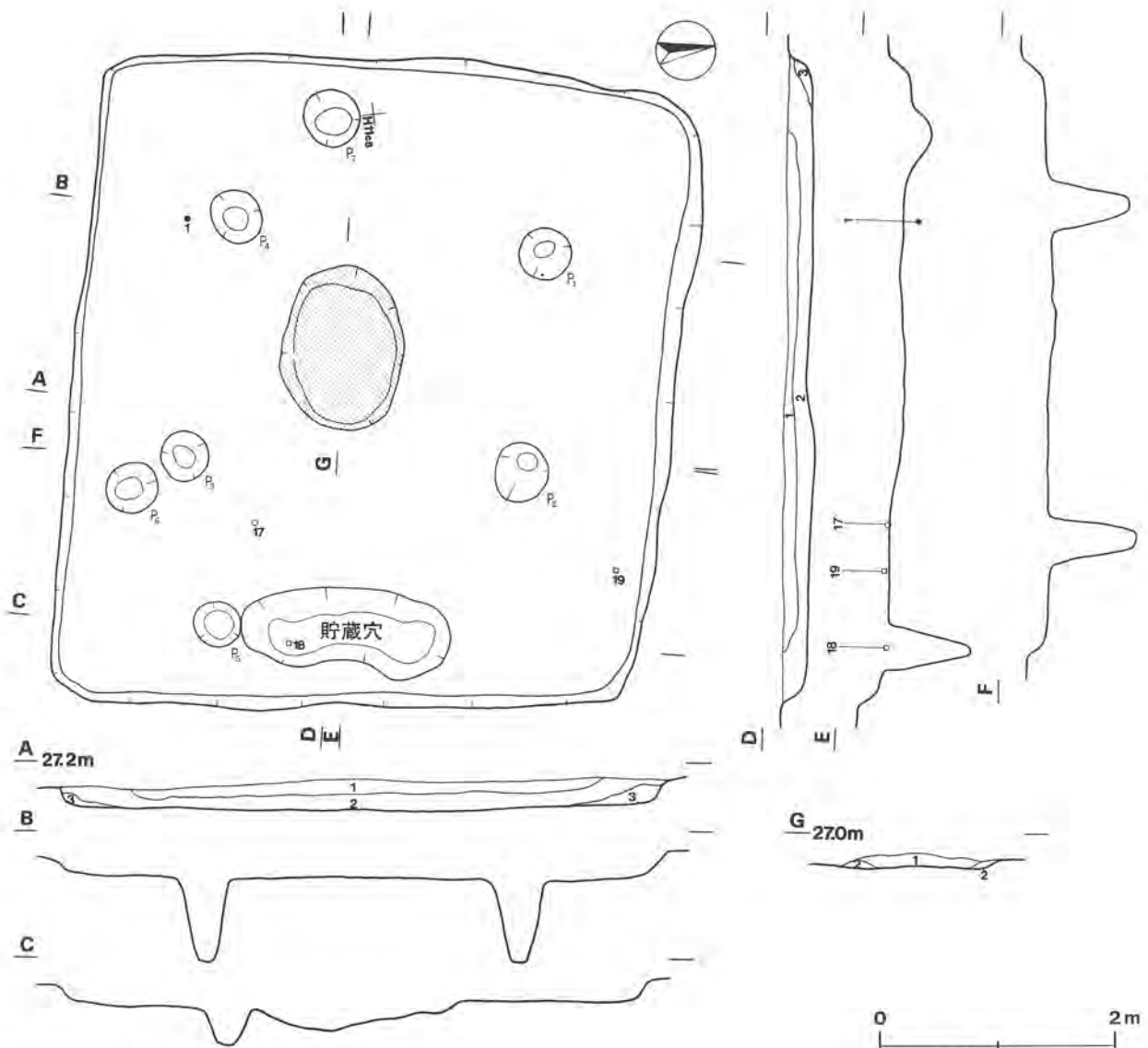
床 平坦で, 炉とP₅周辺がよく踏み固められて硬い。

ピット 7か所。P₁~P₄・P₆・P₇は、径42~50cmの円形で深さ50~76cmである。P₅は、径38cmの円形で深さ36cmである。P₁~P₄は支柱穴、P₆・P₇は補助柱穴と思われ、支柱穴を結んだ線は方形となる。各支柱穴は深さが70cmを越えており当遺跡においてはかなり深く、補助柱穴でも74cmを越えているものがある。P₅は出入口施設に伴うピットと考えられる。

炉 1か所。中央部でやや西壁寄りにあり、平面形は長径142cm、短径104cmの楕円形で、床を10cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、中央部がよく焼け赤変硬化している。炉床直上にアプライトの細礫が数点出土している。覆土は、第1層は焼土小ブロック少量、焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子・炭化物少量の暗褐色土、第2層は焼土粒子微量、ローム粒子中量、ローム小ブロック少量の褐色土である（第102図）。

貯蔵穴 1か所。東壁近くでP₅の並びに付設されているが、当遺跡の他の住居跡と違い壁に接していない。平面形は、長径178cm、短径62cmの長楕円形で、深さ23cmである。底面は摺鉢状で、壁は緩斜である。

覆土 3層から成る。覆土は大変浅く殆どは暗褐色土であるが、壁際には褐色土が堆積している。各層とも緩やかなレンズ状堆積をしている。



第102図 第50号住居跡実測図

なお、土層は

第1層 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

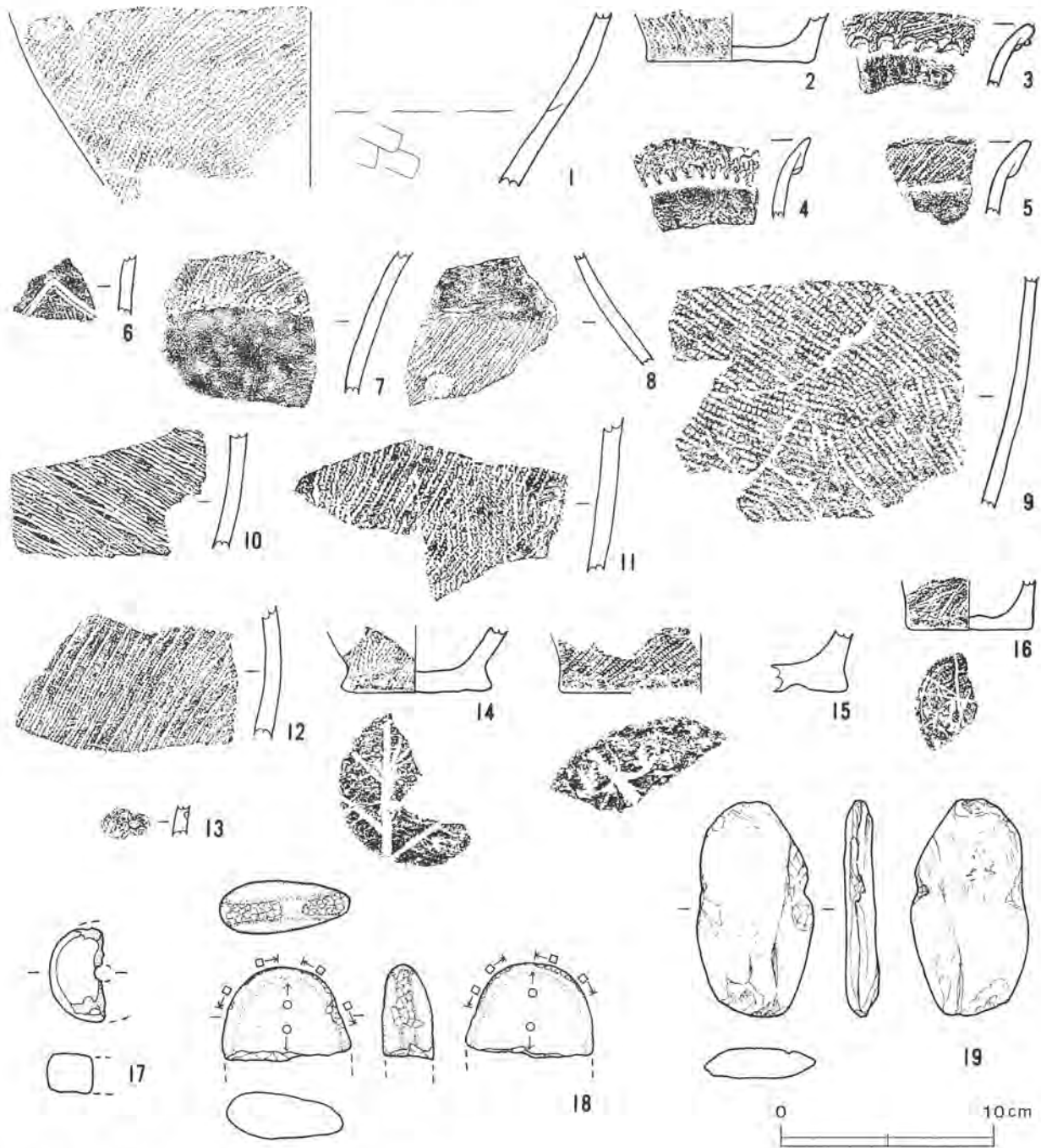
第3層 褐色 ローム粒子多量

第2層 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、焼土粒子少量

(第102図)

である。流れ込みと思われる弥生式土器片が第1・2層から多く出土している。

遺物 弥生式土器細片が475点と多量出土しているが細かいため接合できたものはわずかである。炉床上から炭化材、弥生式土器細片、アブライト礫細片が少量ではあるが出土している。第103図1の弥生式土器壺胴部はP₁の覆土中から小破片で、2の底部は覆土中から出土している。17の紡錘車はP₁近くの床面直上から、18の磨石片は貯蔵穴際の床面直上から出土している。19の穂摘具は2つの破片が接合しており、1点は東コーナー



第103図 第50号住居跡出土遺物実測・拓影図

近くの床面近くから、もう1点はP₅の覆土上で床面と同一レベルで出土している。したがって、柱が抜き取られピットが埋まるころ、つまり覆土第2層形成初期に破損後投棄されたものと考えられる。アブライト礫は57点（大1，中3，小53）出土しており、総重量は523.3gで床面直上からのものも多い。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。

第50号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第103図 1	壺 弥生式土器	B (8.2)	胴部下位の破片で外傾する。胴部には、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。内面は横位にヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい黄橙色	P190 PL44 10% 二次焼成 覆土中
2	壺 弥生式土器	B (2.3) C 8.0	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 褐色	P191 PL44 5% 二次焼成 覆土中

第103図3～16は、第50号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。3～5は複合口縁で、いずれも附加条1種（附加2条）の縄文が施され、口縁部下端には3が棒状工具によるキザミ目、4には縄文原体による押圧が施されている。6は頸部片、7は口縁部下半から頸部にかけての破片、8は頸部から胴部にかけての破片である。6は平行沈線による山形文で、沈線直下には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。9～13は縄文施文の胴部片で、縄文原体は9・11は附加条1種（附加2条）、10は撚糸、12は附加条1種（附加1条）である。13は摩滅により縄文原体は不明であるが、外面に靱痕が認められる。14～16は底部片で、底面にはいずれも木葉痕がある。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第103図17	紡錘車	(4.4)	(2.7)	1.8	—	(26.0)	45	床面直上	DP34 PL56

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第103図18	磨石	(4.4)	(6.0)	(2.4)	(81.8)	砂岩	床面直上	Q46 半欠
19	穂摘具	10.0	5.5	1.5	110.0	粘板岩	床面付近	Q47 PL62

第53号住居跡（第104図）

位置 B地区中央部、F11j₀区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北西コーナー付近は床面も含めて第1号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.60m、短軸3.48mの隅丸方形である。

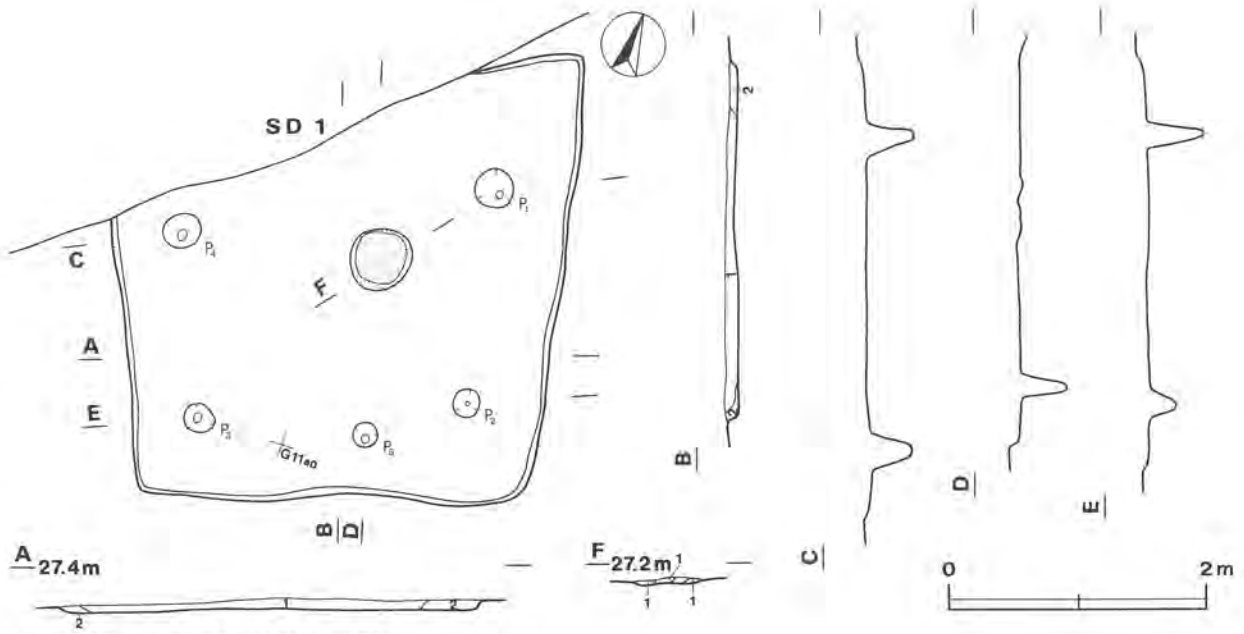
主軸方向 N-9°-W。

壁 壁高2～6cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、床面はあまり踏み固められておらず全体的に軟らかい。

ピット 5か所。P₁～P₄は、径22～30cmの円形で深さ32～45cmである。P₁～P₄は支柱穴と思われ、結んだ線は方形となる。P₅は、径20cmの円形で深さ36cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。中央からやや東寄りにあり、平面形は径48cmの円形で、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床



第104図 第53号住居跡実測図

は、全体的によく焼け赤変硬化している。覆土はローム粒子中量，焼土粒子少量の暗褐色土である(第104図)。覆土 2層から成る。覆土は壁が浅いため殆どが現存していないが，壁際は褐色土が堆積し，床面の殆どには暗褐色土が堆積している。

なお，土層は

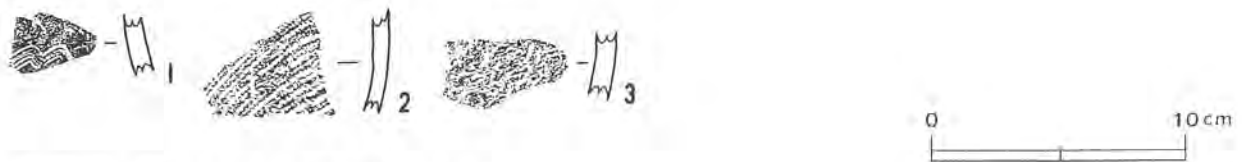
- 第1層 暗褐色 ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化物少量
- 第2層 褐色 ローム粒子多量

(第104図)

である。流れ込みと思われる弥生式土器片が第1層から僅かに出土している。

遺物 弥生式土器細片が22点出土しているが実測可能なものが残念ながらないので，拓本で紹介する。床面直上から弥生式土器細片を7点確認しているが，覆土が大変浅く流れ込みや投棄による混入の可能性も否定できない。

所見 本跡は，出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。



第105図 第53号住居跡出土遺物拓影図

第105図1～3は，第53号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は頸部片で，5本櫛歯による横走波状文が施されている。2・3は胴部片で，2は附加条1種(附加2条)の縄文が施されているが，3は摩滅により縄文原体は不明である。

第54号住居跡（第106図）

位置 B地区東部，G12f7区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.55m，短軸4.00mの隅丸長方形である。

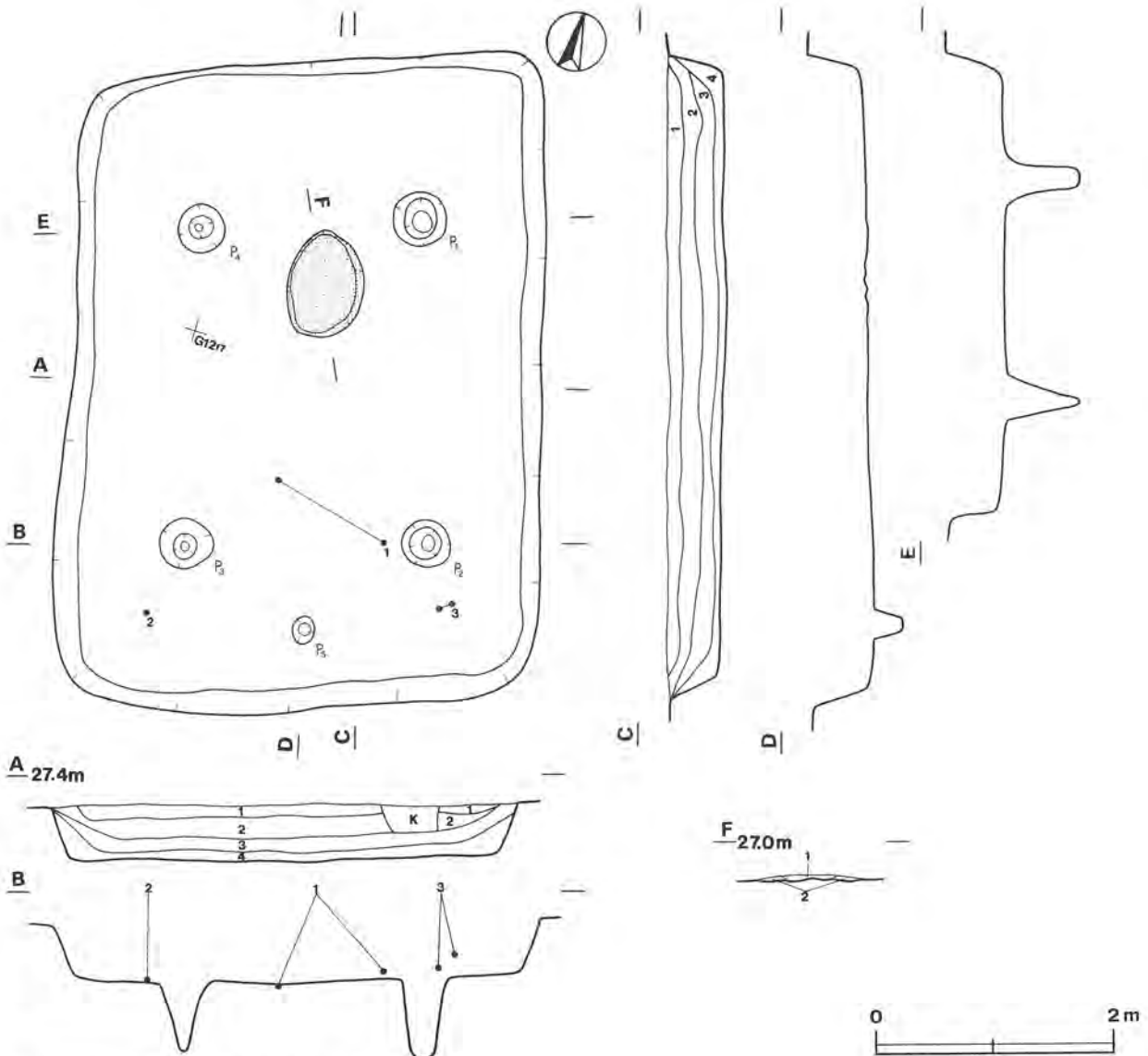
主軸方向 N-19°-W。

壁 壁高44~48cmで，外傾して立ち上がる。

床 平坦で，全体に踏み固められていて硬い。炉周辺からP₃付近にかけて，炭化粒子が散在していた。

ピット 5か所。P₁~P₄は，径40~46cmの円形で深さ60~67cmである。P₁~P₄は支柱穴と思われ，結んだ線は方形となる。P₅は，径22cmの円形で深さ26cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。中央から北西寄りにあり，平面形は長径90cm，短径66cmの楕円形で，床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は，中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は第1層が焼土粒子少量，焼土ブロック少量，炭化粒子中量，灰中量の暗赤褐色土，第2層はロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子・灰少量の暗赤褐色土である（第106図）。



第106図 第54号住居跡実測図

覆土 4層から成る。壁際から床面全面にかけてローム小ブロックを含む褐色土が堆積し下層を形成している。中層は暗褐色土が、上層は黒褐色土が厚く堆積し、各層ともレンズ状となっている。北東壁付近に攪乱が見られる。流れ込みと思われる弥生式土器片が第2・3層から少量出土している。

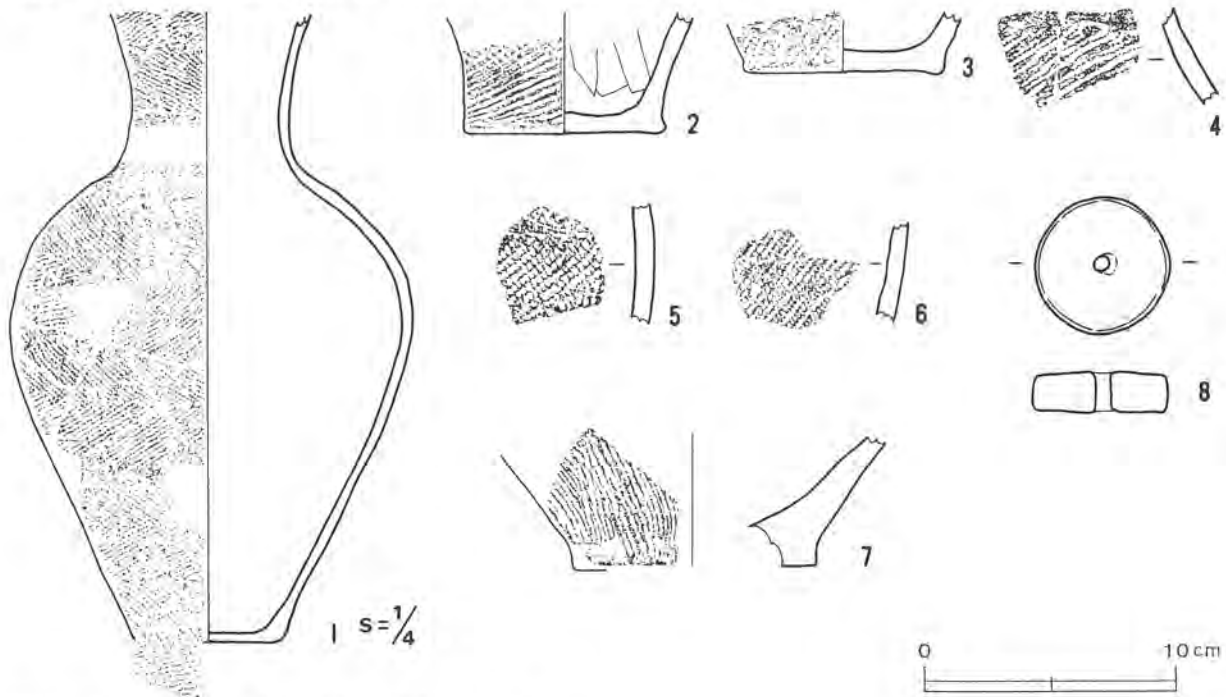
なお、土層は

第1層	黒褐色	ローム粒子少量	第4層	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子少量
第2層	黒褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量			
第3層	暗褐色	ロームブロック中量、ローム粒子中量、炭化粒子少量			(第106図)

である。

遺物 弥生式土器細片が63点出土している。住居跡中央部から南東壁側に偏っており、位置や覆土から判断して住居廃絶後の投棄や流れ込みと思われる。第107図1は弥生式土器壺で口縁部は欠損しており、住居跡中央付近の2地点からの破片が接合している。この破片は床面近くである覆土第4層中にあり、その広がり等から考えると投棄されたものであろう。2の壺の胴部下位から底部は、南コーナーの床面直上から、3の底部は東コーナーの覆土第3層からの破片の接合、8の紡錘車は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第107図 第54号住居跡出土遺物実測・拓影図

第54号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第107図 1	壺 弥生式土器	B (33.3) C 8.0	底部から頸部にかけての破片。平底で、胴部はやや外反気味に立ち上がり、頸部はほぼ直立する。頸部下位を無文帯とし、それ以外には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 におい黄橙色	P192 PL45 80% 二次焼成 外面スス付着 覆土第4層
2	壺 弥生式土器	B (4.8) C 8.0	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部はやや外反気味に立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。胴部内面には縦位にヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 橙色	P193 PL45 10% 二次焼成 外面炭化物付着 床面直上
3	壺 弥生式土器	B (2.4) C 7.9	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 橙色	P194 5% 内面炭化物付着 覆土第3層

第107図4～7は、第54号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。4は頸部下半で、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。5・6は胴部片で、5は単節縄文、6は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。7は底部片で、絡条体による擦糸文がある。

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第107図8	紡錘車	5.5	5.4	1.7	7.0	58.2	100	覆土中	DP35 PL56

第55号住居跡 (第108図)

位置 B地区東部, G12b₆区を中心に確認されている。

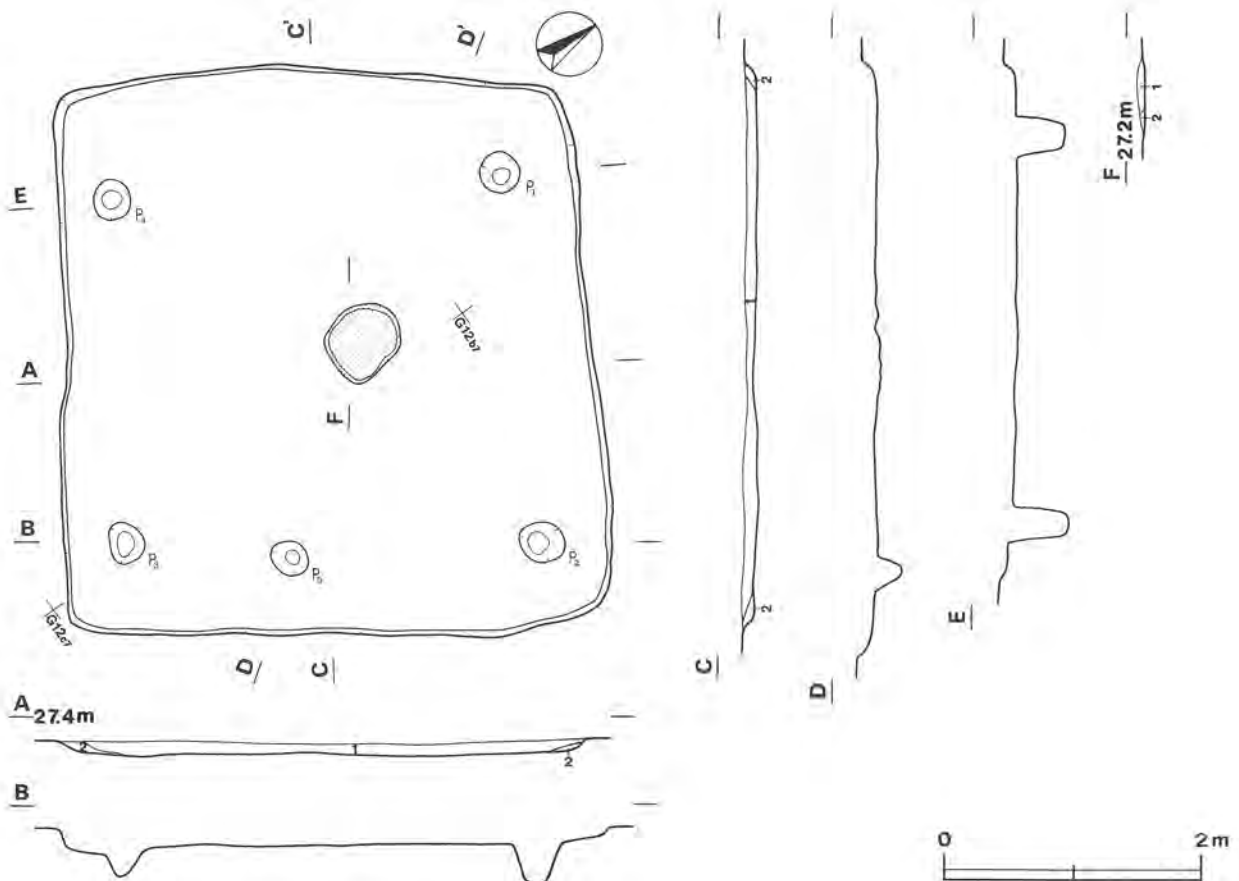
規模と平面形 長軸4.50m, 短軸4.15mの隅丸方形である。

主軸方向 N-51°-W。

壁 壁高4～20cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、炉周辺とP₅の北東壁付近が踏み固められ硬い。炭化粒子が中央部に散在しており、特に炉の周辺に多い。

ピット 5か所。P₁・P₄は、径32～34cmの円形で深さ39～45cmである。P₁・P₄は長径34～38cm, 短径28～30cmの楕円形で深さ25～33cmである。P₁～P₄は支柱穴と思われる、結んだ線は方形となる。P₅は、径26cmの円形で深さ19cmの出入口施設に伴うピットと思われる。



第108図 第55号住居跡実測図

炉 1か所。中央からやや北東寄りにあり、平面形は長径62cm、短径54cmで、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、全体的に焼け特に中央部は赤変硬化している。覆土は、第1層が焼土粒子少量、ローム粒子中量の暗褐色土、第2層は炭化粒子少量、ロームブロック少量、ローム粒子多量の褐色土である（第108図）。

覆土 2層から成る。掘り込みが浅いため土層としては2層のみ確認できた。ローム小ブロックを微量に含む褐色土が壁際に僅かに堆積している。床面上は炭化粒子・焼土粒子を含む暗褐色土で、この層が覆土の大部分を占めている。流れ込みと思われる弥生式土器片が第1層から少量出土している。

なお、土層は

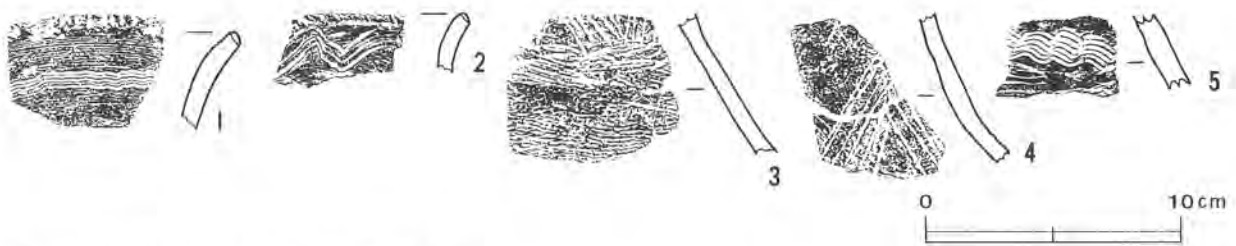
第1層 暗褐色 ローム粒子中量、黒褐色土少量、炭化粒子微量、焼土粒子少量
 第2層 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量

(第108図)

である。

遺物 弥生式土器細片が195点出土しているが、ほとんどが壁際から流れ込みと思われる。口縁部片が極端に少ない。アプライト礫は1点（小）出土しており、重量は5.4gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。



第109図 第55号住居跡出土遺物拓影図

第109図1～5は、第55号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、1は横位のナデの後、5本櫛歯による小振りの横走波状文が施され、口唇部にはキザミ目がある。2は3本櫛歯の大振りの横走波状文が施されている。3・4は頸部片で、同一個体と思われる。ヘラ状工具による5～6条の山形文を施し、頸部下位には燃糸文がある。5の頸部片は7本櫛歯による横走波状文が施されている。

第56号住居跡（第110図）

位置 B地区北東部、F12e₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.27m、短軸3.20mの隅丸方形である。

主軸方向 N-74°-W。 壁 壁高4～8cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、炉周辺とP₅の北東壁付近が踏み固められ硬い。炭化粒子がP₁とP₂間、P₃とP₄間、南東壁際に散在している。

ピット 5か所。P₁・P₂・P₃は、径20～24cmの円形で深さ32～34cmである。P₄は長径24cm、短径20cmの楕円形で、深さ36cmである。P₁～P₄は、支柱穴と思われ、結んだ線は方形となる。P₅は、長径70cm、短径30cmの長楕円形で深さ30cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P₅は深さ24cmの所で浅い段をもち、上方はスロープ状の緩やかな傾斜で南東壁に対し垂直方向に延びている。段は約50°の傾斜角で斜めに掘られている。

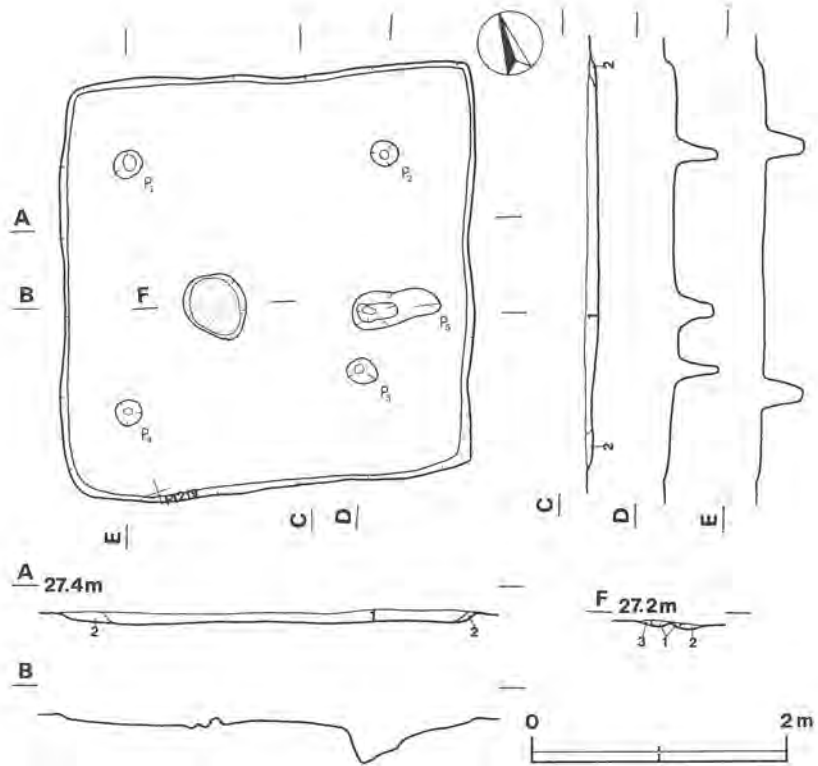
炉 1か所。中央からやや西寄りにあり、平面形は長径56cm、短径46cmで、床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、全体的によく焼け赤変硬化している。覆土は、第1層が焼土粒子少量、ローム粒子中量含む暗褐色土、

第2層は焼土粒子中量の暗赤褐色土、第3層はローム粒子多量の褐色土である（第110図）。

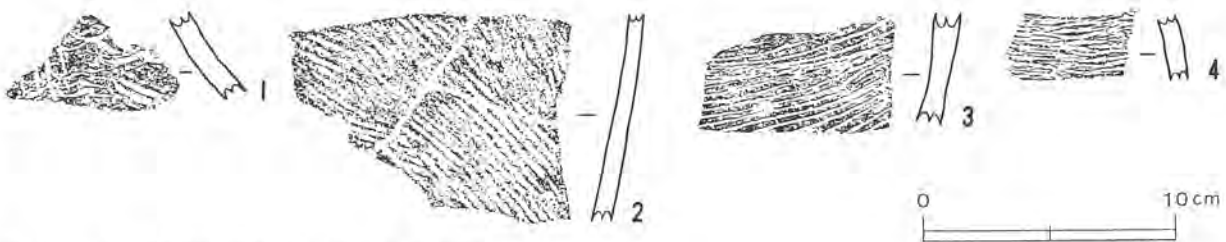
覆土 2層から成る。掘り込みが浅いため土層として捕らえることができたのは2層のみである。ローム粒子多量の褐色土が壁際に堆積し、床面上は暗褐色土である。なお土層は、第1層がローム粒子少量の暗褐色土、第2層はローム粒子多量の褐色土である（第110図）。

遺物 弥生式土器細片が41点出土し、全て覆土中からで住居廃絶後の混入と思われる。破片は細かく実測できるものは出土していない。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。



第110図 第56号住居跡実測図



第111図 第56号住居跡出土遺物拓影図

第111図1～4は、第56号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は頸部片で、縦位の櫛描文と3本櫛歯による粗雑な横走波状文が施されている。2～4は胴部片で、縄文原体は2が附加条1種（附加2条）、3・4は撚糸である。

第57号住居跡（第112図）

位置 B地区北東部、G12b₉区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の中央部を南北に第1号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.25m、短軸5.15mの隅丸方形である。

主軸方向 N-56°-W。

壁 壁高20～30cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、炉周辺は踏み固められ硬い。

ピット 7か所。P₁～P₄・P₆・P₇は、径22～28cmの円形で深さ38～74cmである。P₁～P₄は主柱穴、P₆・P₇は補

助柱穴と思われる、支柱穴を結んだ線は方形となる。P₅は、長径44cm、短径38cmの楕円形で深さ25cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。中央から北西寄りにあり、平面形は長径110cm、短径72cmの楕円形で、床を4cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、全体的に焼け赤変硬化している。

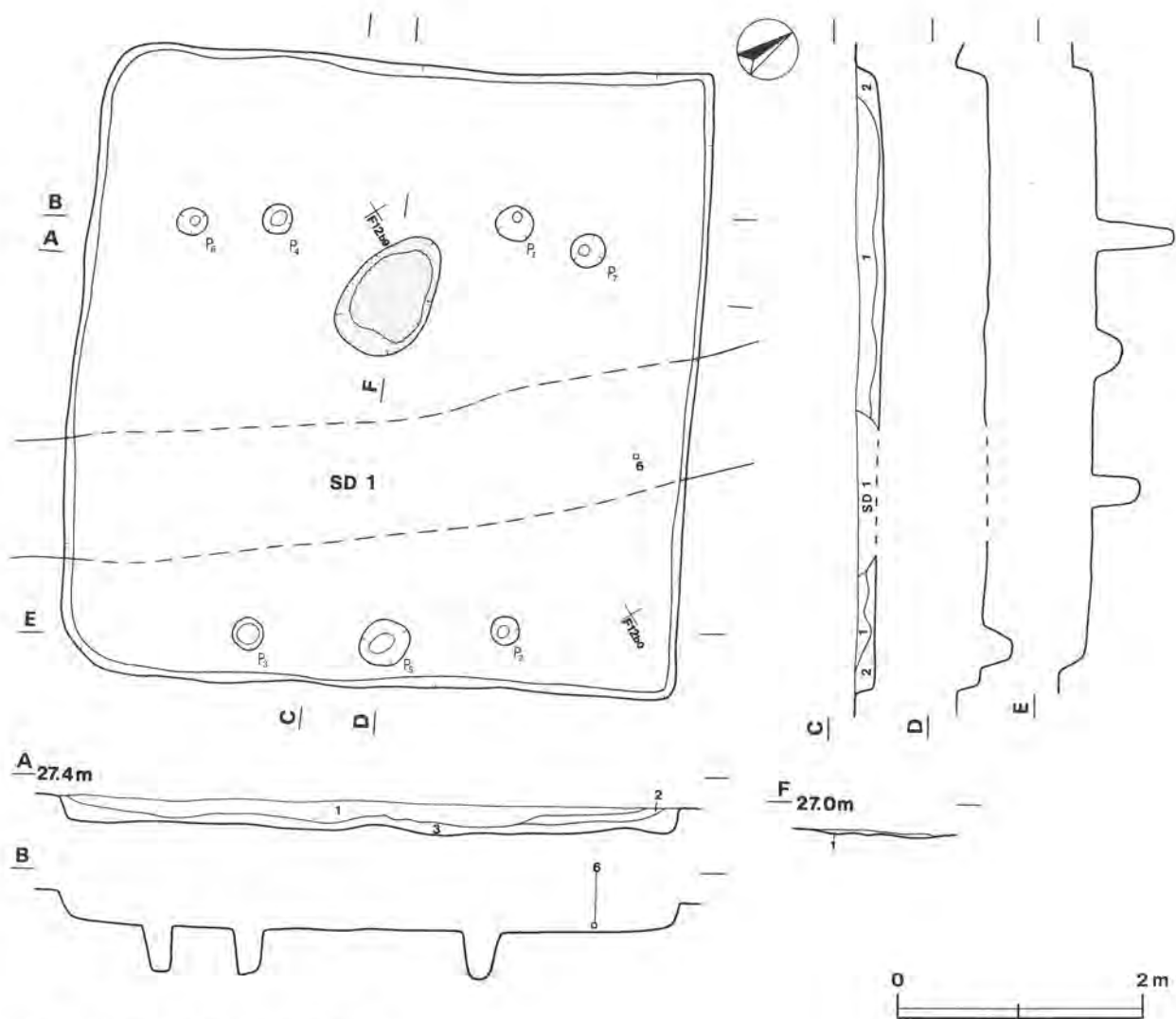
覆土 3層から成る。南東壁寄りには第1号溝の覆土がある。壁際から床面全面にかけてロームブロックを含む褐色土が堆積している。更にその上には焼土粒子、ロームブロックを含む暗褐色土が堆積している。流れ込みと思われる弥生式土器片が第1層から少量出土している。

なお、土層は

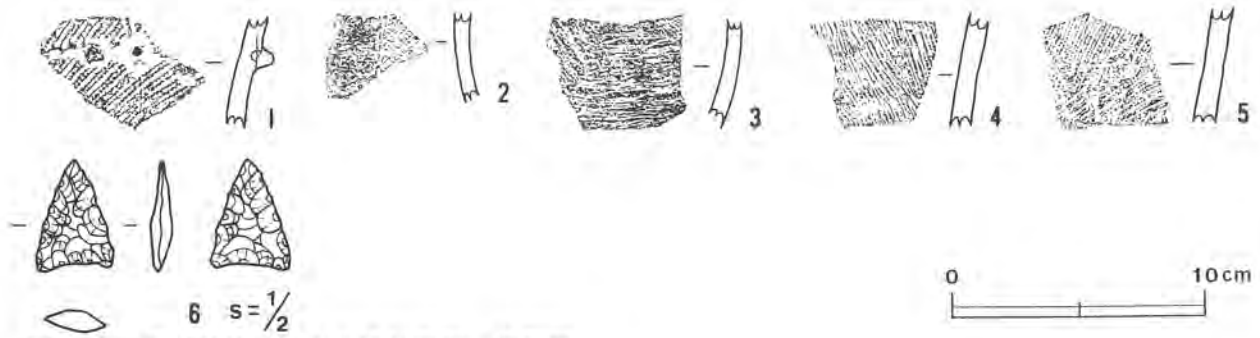
- 第1層 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、焼土・炭化粒子少量
 - 第2層 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
 - 第3層 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、焼土・炭化粒子少量
- (第112図)

である。

遺物 弥生式土器細片が170点出土しているが、実測できるものはない。第113図6の石鏃はチャート製で北東壁中央付近の覆土中層から出土しているが、第1号溝と重複部分に当たるため、溝の覆土中の混入遺物である。アプライト礫は10点(中1, 小9)出土しており、総重量は129.3gである。



第112図 第57号住居跡実測図



第113図 第57号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。

第113図1～5は、第57号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は附加条1種（附加2条）の縄文が施された複合口縁部片で、口縁部下端は縄文原体により押圧され、その後瘤が貼られている。2は頸部片で、ヘラ状工具により縦区画をし、格子目文を充填している。3～5は胴部片で、3・4は撚糸文、5は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

第57号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第113図6	石 鏃	2.2	1.6	0.4	1.2	チャート	覆土中層	Q48 PL60

第58号住居跡 (第114図)

位置 B地区北東部、F12b₃区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は第5号溝により、壁、床の一部を南北に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.95m、短軸4.03mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-57°-W。

壁 壁高44～50cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、現存している中央部とP₅周辺が踏み固められている。

ピット 5か所。P₁～P₄は、径40～52cmの円形で深さ79～90cmである。P₁～P₄は、支柱穴と思われ、結んだ線は方形となる。P₅は、長径50cm、短径46cmの楕円形で深さ65cmの出入口施設に伴うピットと思われる。P₅は傾斜角73°で斜めに掘られており斜長は74cmで、傾斜方向は南東壁中央付近である。

炉 1か所。中央から北西寄りP₁とP₅の間付近にあり、平面形は長径80cm、短径62cmで、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は、全体的によく焼け赤変硬化している。覆土は、第1層が焼土粒子中量、焼土ブロック少量、ローム小ブロック微量の暗褐色土、第2層は焼土粒子少量、ローム粒子多量の褐色土である（第114図）。

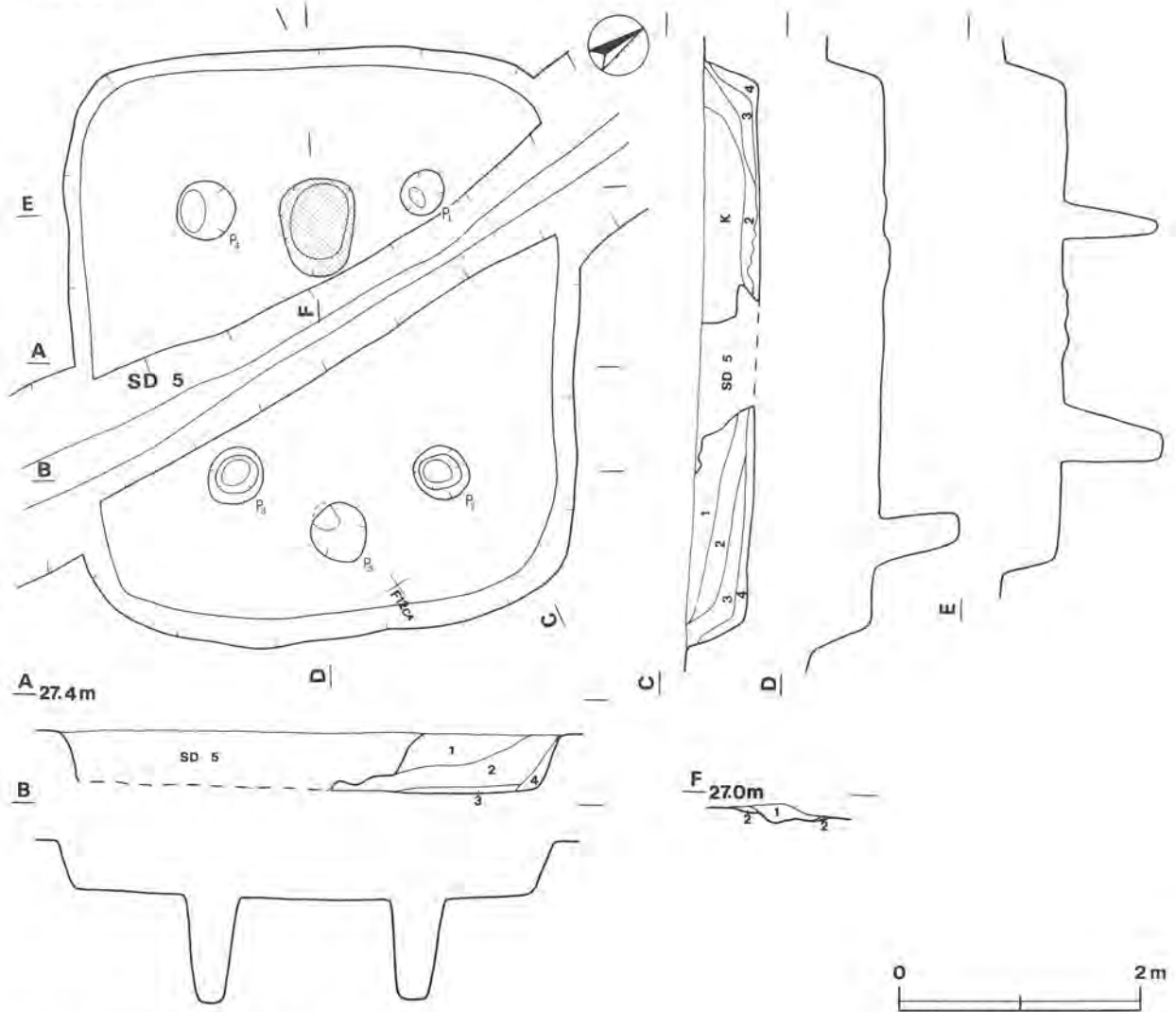
覆土 4層から成る。覆土の大部分が第5号溝と攪乱に該当しているため詳細な土層の把握は不可能である。東コーナー側から流れ込んだと考えられる褐色土が壁際から床面にかけて堆積している。更にその上にはローム小ブロックを含む暗褐色土が3層にわたり堆積し、レンズ状となっている。流れ込みと思われる弥生式土器片が少量、上層から出土している。

なお、土層は

第1層 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子少量
 第2層 暗褐色 ローム粒子少量
 第3層 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量

第4層 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量
 (第114図)

である。



第114図 第58号住居跡実測図

遺物 弥生式土器細片が78点出土しているが、覆土の大部分は第5号溝のもので、遺物のほとんどがそこから出土している。床面直上からの土器片は確認されていない。第115図4の鉄率は、攪乱土層中から出土しており、住居跡に伴うものではないと思われる。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期後半の時期と思われる。



第115図 第58号住居跡出土遺物実測・拓影図

第115図1～3は、第58号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は口縁部片で、外面は横位のナデで、口唇部は縄文原体により押圧されている。2は附加条1種（附加2条）の縄文施文の胴部片である。3は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている底部片である。

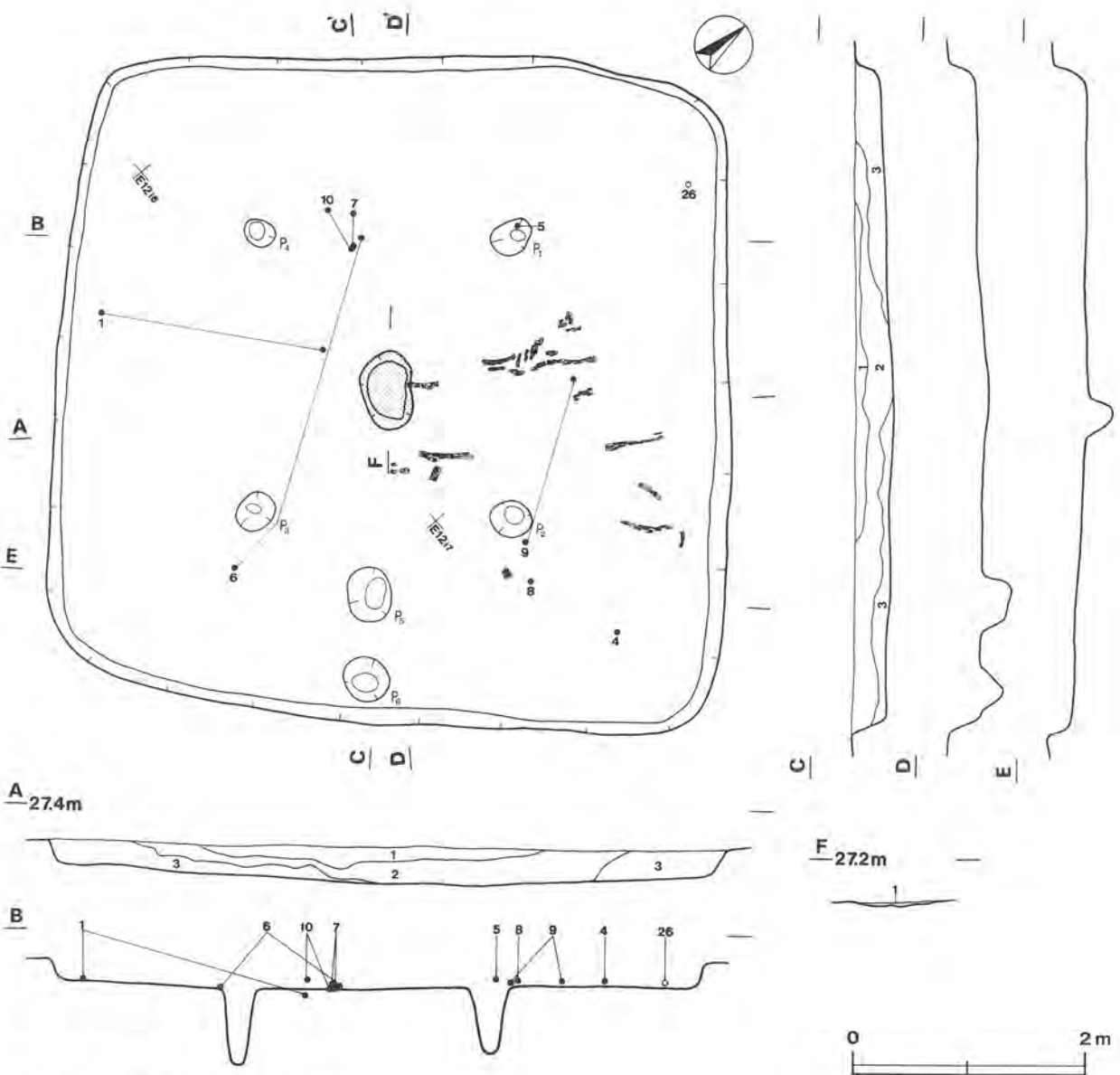
第58号住居跡出土鉄製品一覧表

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第115図4	鉄 滓	(4.1)	(4.4)	(2.2)	(64.3)	覆土中	M1

第59号住居跡（第116図）

位置 B地区北東端部，E12h₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.90m，短軸5.89mの隅丸方形である。



第116図 第59号住居跡実測図

主軸方向 N-47°-W。 **壁** 壁高22~30cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央部からP₅周辺がよく踏み固められている。

ピット 6か所。P₁~P₄は、長径28~38cm、短径24~32cmの楕円形で深さ57~67cmである。P₅は長径46cm、短径38cmの楕円形で深さ27cmであり、P₆は径42cmの円形で深さ22cmである。P₁~P₄は支柱穴でそれぞれ結んだ線は方形となる。P₅・P₆は南東壁に対し垂直関係を成すように配列されており、2か所1組で構成されていた出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。中央にあり、平面形は長径68cm、短径46cmの不整楕円形で、床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は全体によく焼け赤変硬化している。覆土は、1層で焼土粒子多量、炭化粒子少量、ローム粒子中量の暗褐色土である(第116図)。

覆土 3層から成る。壁際から床面にかけて流れ込むようにロームブロックを含む褐色土が堆積し、床面中央部を除く床面を覆っている。床面中央部には焼土粒子を含む暗褐色土が厚く堆積している。下層から流れ込みと思われる弥生式土器片が多く出土している。

なお、土層は

第1層 黒褐色 ローム粒子微量、焼土粒子微量

第2層 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子中量、炭化物少量

第3層 褐色 ローム粒子多量、ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子少量

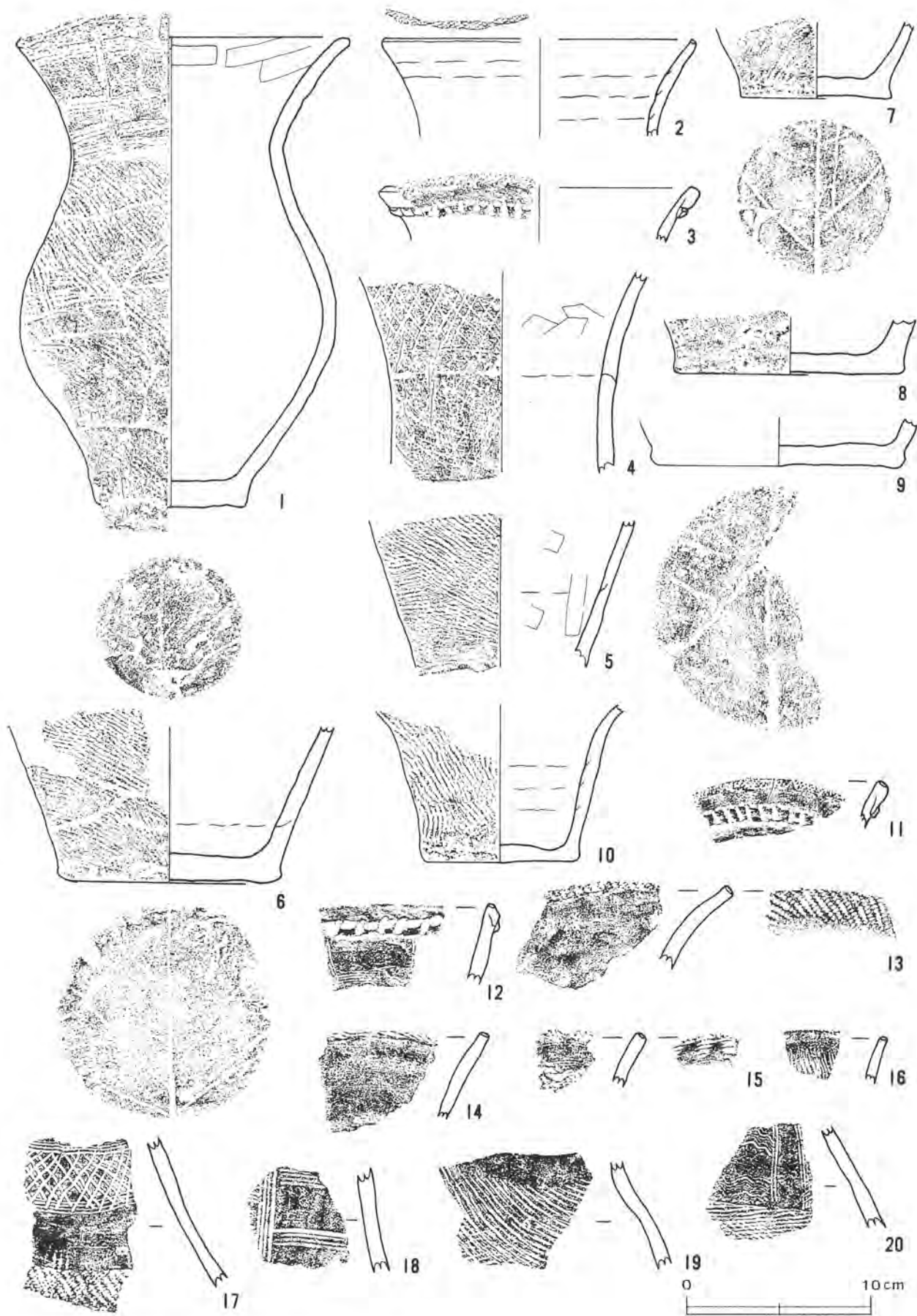
(第116図)

である。

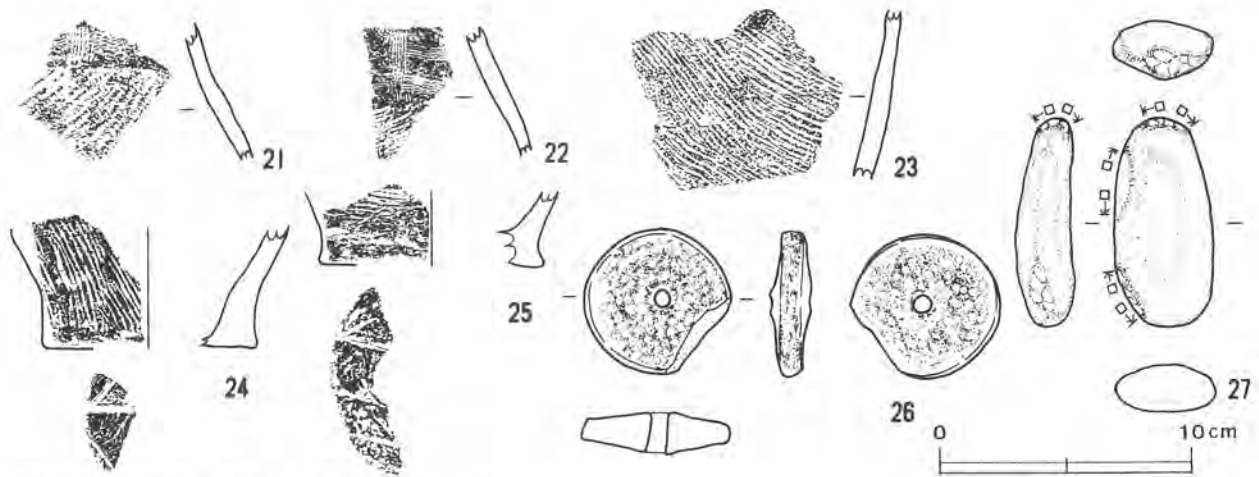
遺物 弥生式土器細片が約800点ほど出土しており、当遺跡の住居跡中ではかなり多い。また、中央部から北東壁付近にかけて炭化材が出土しており、その方向は住居跡中央に向かっているところから判断して屋根の構築材である垂木であったと思われる。出土遺物の全体量に対し、床面直上からの出土は2点のみである。第117図1~8は弥生式土器壺である。1はほぼ完形の広口壺で、南西壁中央付近の床面直上からの破片と中央部の破片、床面近くの覆土中の破片が接合している。破片の一部が床面直上から出土しているが、破片の広がりから考えると住居廃絶後間もない時期に投棄されたものであろう。4の頸部片は東コーナーの覆土第3層から、5の胴部下位はP₁付近の覆土第2層から出土している。6の底部は覆土第3層中からで、P₃とP₄近くからの破片が接合しており、底面に木葉痕が有る。10の鉢と7の胴部下位から底部は炉付近の床面近くから破片で、8・9の底部は北東壁寄りの覆土第2層からそれぞれ出土している。2・3の口縁部片、27の敲石は覆土中から、26の紡錘車は北コーナーの覆土第3層中からそれぞれ出土している。アプライト礫は13点(大2, 中3, 小8)出土しており、総重量は499.7gである。

所見 床面直上からの形のわかる遺物がほとんど無いことから判断して、住居廃絶後に焼失したものと思われる。本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。

第117・118図11~25は、第59号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。11~16は口縁部片で、11・12は口縁部下端に隆帯を貼り、棒状工具によるキザミ目を施している。12の頸部には縦位と横位の櫛描文がある。13・14は縄文施文の口唇部で、縄文原体は14は燃糸、13は単節で内面にも施されている。15は内面に絡条体の燃糸が押圧されている。16は細目の附加条1種(附加2条)の縄文が施され、外面は赤彩されている。17・18は頸部片で、17は4本櫛歯の横走文で区画後、棒状工具により格子目を施している。縄文原体は単節である。18は4本櫛歯により縦区画をした後、区画間に横走文を施している。19~22は頸部から胴部にかけての破片で、20は3本櫛歯によりスリット手法の縦区画をし、5本櫛歯による横走波状文を充填している。21・22は櫛歯状施文具による縦区画後、横走波状文を施している。縄文原体は、19は附加条1種(附加2条)、20は



第117图 第59号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)



第118図 第59号住居跡実測・拓影図(2)

撚糸の絡条体, 21は単節, 22は附加条1種(附加1条)である。23は胴部片で絡条体による撚糸文が施されている。24・25は撚糸文施文の底部片で, どちらも底面には木葉痕がある。

第59号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考	
第117図 1	広口壺 弥生式土器	A 18.2	底部から口縁部にかけての破片。平底で, 胴部はやや外反気味に立ち上がり, 頸部から口縁部は外反する。最大径を口縁部を持つ。胴部と頸部を4本楕圓による横走文で区画した後, 頸部から口縁部にかけて同様の施文具で縦区画をし, さらに小振りの横走波状文が3段施されている。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。口唇部は縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 にぶい黄褐色	P195 PL45 80% 内・外面炭化物付着 胴部下半摩滅 南西壁付近床面直上	
		B 25.3				
		C 8.4				
	2	広口壺 弥生式土器	A [17.0]	口縁部片。口縁部は外反する。口唇部には縄文が施されているが口縁部は無文である。口縁部内・外面に輪積み痕がある。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 にぶい黄褐色	P196 5% 内面炭化物付着 覆土中
			B (5.3)			
	3	広口壺 弥生式土器	A [17.4]	口縁部片。口縁部はやや外反する。複合口縁で, 下端には隆帯が貼られ, 棒状工具によりキザミ目が施されている。口唇部には縄文が施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 にぶい黄褐色	P197 5% 覆土中
			B (3.0)			
	4	壺 弥生式土器	B (10.9)	頸部片。頸部はやや外反する。頸部下半は横区画され, 格子目文が施されている。頸部上半は格子目文を擦り消して無文帯としている。頸部内面はヘラナデされている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 褐色	P198 PL45 5% 覆土第3層
	5	壺 弥生式土器	B (8.0)	胴部下位片。胴部下半は外傾する。胴部には絡条体による無節の縄文が施されている。内面はヘラナデされている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 にぶい赤褐色	P199 PL45 5% 二次焼成 外面炭化物付着 覆土第2層
	6	壺 弥生式土器	B (8.6)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で, 胴部は外傾して立ち上がる。胴部には, 絡条体による無節の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 明黄褐色	P200 10% 覆土第3層
C 12.1						
7	壺 弥生式土器	B (4.1)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で, 胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 浅黄褐色	P202 PL45 10% 内面炭化物付着 炉周辺床面付近	
		C 8.2				
8	壺 弥生式土器	B (3.0)	底部片。平底で, 胴部は外傾して立ち上がる。胴部には, 絡条体による無節の縄文が施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 浅黄褐色	P203 5% 覆土第2層	
		C 12.5				
9	壺 弥生式土器	B (2.7)	底部片。平底で, 胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 浅黄褐色	P204 5% 内面炭化物付着 外面摩滅 覆土第2層	
		C 13.8				
10	鉢 弥生式土器	B (8.6)	底部から口縁部にかけての破片。平底で, 胴部は外傾して立ち上がり口縁部は外反する。胴部には, 絡条体による無節の縄文が施されている。口縁部内面にも縄文が施されているところが, わずかに確認できる。胴部内面に輪積み痕がある。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 にぶい黄褐色	P201 PL45 60% 炉周辺床面付近	
		C 8.6				

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第118図26	紡錘車	(5.8)	(5.9)	(2.1)	8.0	38.9	80	覆土第3層	DP36 PL56

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第118図27	敲石	8.4	4.1	2.3	98.9	硬砂岩	覆土中	Q49

第60号住居跡 (第119図)

位置 B地区北東端部, E12d₈区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.55m, 短軸4.04mの隅丸長方形である。

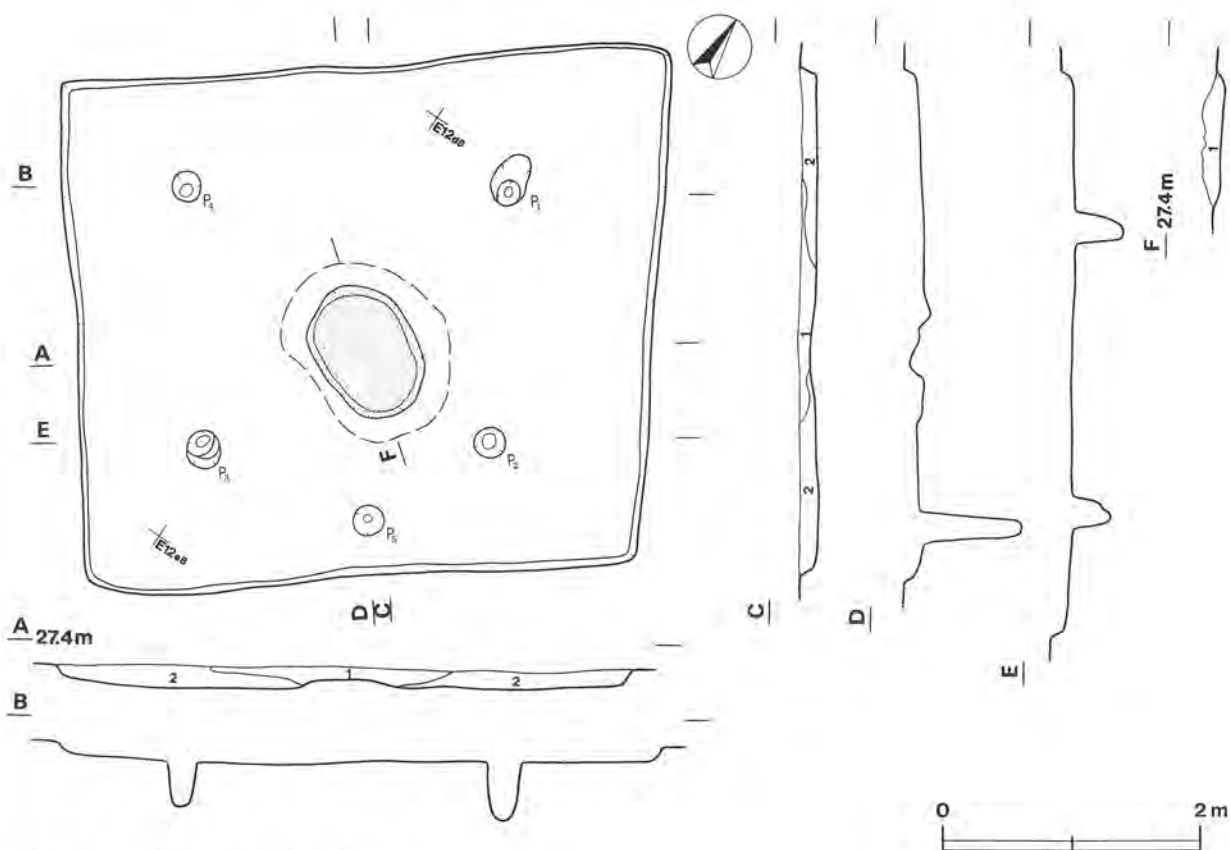
主軸方向 N-37°-W。

壁 壁高10~14cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 全体的に軟らかい。

ピット 5か所。P₁は, 長径42cm, 短径28cmの楕円形で深さ46cmである。P₂~P₄は径24~30cmの円形で深さ28~38cmである。P₁~P₄は支柱穴でそれぞれ結んだ線は方形となる。P₅は, 径24cmの円形で深さ79cmで出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 1か所。中央からやや南東壁寄りにあり, 平面形は長径110cm, 短径78cmの楕円形で, 床を6cm掘り込んだ地床炉である。炉床は, 中央部がよく焼け赤変硬化している。覆土は, 1層で焼土ブロック少量, 焼土粒子少量, ローム粒子多量, 炭化粒子微量の褐色土である (第119図)。



第119図 第60号住居跡実測図

覆土 2層から成る。掘り込みが浅いため、覆土は僅かしか残存しておらず、全体的な様相は把握不可能である。壁際から床面の大部分にかけては褐色土が厚く堆積しているが、中央部は暗褐色土である。

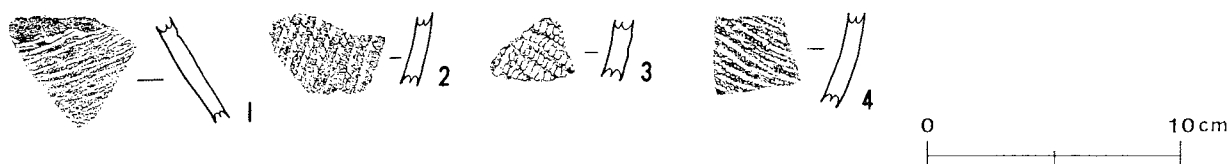
なお、土層は

第1層 暗褐色 ローム粒子少量，焼土小ブロック少量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
第2層 黒褐色 ローム粒子中量，黒色土少量，焼土粒子微量 (第119図)

である。流れ込みと思われる弥生式土器片が下層からわずかに出土している。

遺物 弥生式土器細片が87点出土しているが、全て覆土中から流れ込み等の混入によるものと思われ、口縁部片や底部片は確認されていない。アプライト礫は3点(小)出土しており、総重量は7.0gである。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期前半の時期と思われる。



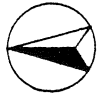
第120図 第60号住居跡出土遺物拓影図

第120図1～4は、第60号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は頸部から胴部にかけての破片で、頸部を無文帯とし、胴部には撚糸文が施されている。2～4は胴部片で、縄文原体は2が太めで粗い絡条体による撚糸、4は附加条1種(附加2条)である。

表2 原出口遺跡住居跡一覽表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設				炉	覆土	出土遺物	備考
							主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口				
1	I11g ₁	N-35°-W	隅丸方形	5.02 × 4.72	50~60	平坦	4	1	4	／	1	自然	弥生式土器, 土師器	弥生
2	I11c ₁	N-65°-W	隅丸方形	4.43 × 4.40	27~38	平坦	4	1	5	1	1	自然	弥生式土器, 砥石	弥生
3	H11j ₁	N-38°-W	隅丸方形	4.60 × 4.33	23~34	平坦	3	／	3	／	1	人為	弥生式土器	弥生
4	H10j ₅	／	隅丸長方形	5.40 × [4.73]	18~36	平坦	／	／	／	／	／	—	弥生式土器, アブライト礫	弥生第4~6号坑周溝と重複
5	H10b ₅	N-54°-E	隅丸方形	5.40 × 4.98	30~40	平坦	4	／	5	1	1	—	弥生式土器, 紡錘車, 敲石, アブライト礫	弥生第1~3号溝と重複
6	G10j ₃	N-80°-W	隅丸長方形	5.68 × 4.53	20~25	平坦	4	／	5	1	1	自然	弥生式土器, 砥石	弥生
7	G9j ₇	N-56°-W	隅丸長方形	7.0 × 6.05	50~70	平坦	4	／	5	1	1	自然	弥生式土器, 土師器, 紡錘車, 敲石, アブライト礫	弥生
8	H9b ₆	N-59°-W	隅丸長方形	6.33 × 4.80	27~42	平坦	4	1	5	1	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, アブライト礫	弥生
9	H9a ₄	N-37°-W	隅丸方形	4.35 × 4.17	33~44	平坦	4	／	6	／	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, アブライト礫	弥生
10	G9i ₃	N-28°-W	隅丸長方形	5.0 × (3.38)	50~68	平坦	4	／	5	1	1	自然	弥生式土器, 土師器	弥生一部エリア外
11	G10e ₄	N-45°-W	隅丸方形	4.37 × 4.32	38~60	平坦	4	／	6	2	1	自然	弥生式土器, アブライト礫	弥生
12	G10f ₅	N-38°-W	隅丸長方形	7.60 × 6.0	40~54	平坦	4	／	8	3	1	人為	弥生式土器, アブライト礫	弥生
13	G9d ₆	N-31°-E	隅丸長方形	5.0 × 4.45	10~32	平坦	4	／	4	／	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, 磨製石斧, 敲石, アブライト礫	弥生
14	G10d ₃	N-27°-W	隅丸長方形	6.35 × 5.67	24~38	平坦	4	／	5	1	1	人為	弥生式土器, 紡錘車, 磨石, 凹石, 敲石, アブライト礫	弥生
15	G8d ₆	N-52°-W	隅丸長方形	4.10 × 3.35	46~55	平坦	4	／	5	1	1	自然	弥生式土器, アブライト礫	弥生
16	G8a ₀	N-38°-W	隅丸方形	4.96 × 4.53	16~38	平坦	4	／	7	1	1	自然	弥生式土器, 打製石斧	弥生第2号土坑と重複
17	F9j ₂	N-57°-W	隅丸方形	5.53 × 5.20	14~26	平坦	4	1	6	／	1	人為	弥生式土器, アブライト礫	弥生
18	F9j ₄	N-68°-W	隅丸長方形	6.10 × 5.40	32~58	平坦	4	／	7	1	1	自然	弥生式土器, 土師器, 紡錘車, アブライト礫	弥生
19	F8f ₅	N-56°-W	隅丸方形	5.93 × 5.11	54~84	平坦	4	／	5	1	1	自然	弥生式土器, アブライト礫	弥生第1号古墳と重複
20	F9h ₅	N-27°-E	隅丸長方形	6.46 × 4.96	30~44	平坦	4	／	8	2	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, アブライト礫	弥生
21	F9h ₃	N-80°-W	隅丸方形	4.60 × 4.33	10~20	平坦	4	1	5	1	1	自然	弥生式土器, アブライト礫	弥生
22	F8i ₇	N-62°-W	隅丸長方形	5.17 × 4.42	42~48	平坦	4	／	4	／	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, 穂筒具, 磨石	弥生
23	F8g ₇	N-33°-E	隅丸長方形	4.64 × 4.13	8~22	凹凸	4	／	6	1	1	自然	弥生式土器, 磨石, 砥石	弥生
24	F8h ₉	N-53°-W	隅丸方形	5.0 × 4.79	8~20	平坦	4	1	8	1	1	人為	弥生式土器, 須恵器, 紡錘車, アブライト礫	弥生第3号土坑と重複
25	F9e ₂	N-53°-W	隅丸長方形	5.67 × 4.63	25~38	平坦	4	／	5	1	1	人為	弥生式土器, 石鏃, アブライト礫	弥生
26	F9d ₄	N-28°-W	隅丸長方形	5.60 × 4.88	40~46	平坦	4	／	5	1	2	自然	弥生式土器, 紡錘車, 磨石, アブライト礫	弥生
27	F9c ₃	N-53°-W	隅丸方形	5.14 × 4.81	34~45	平坦	4	／	6	2	1	自然	弥生式土器, 土製品, 凹石, アブライト礫	弥生第28号住居跡と重複
28	F9b ₄	N-50°-W	隅丸長方形	6.21 × 4.80	18~26	凹凸	3	／	3	／	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, アブライト礫	弥生第27号住居跡と重複
29	F8d ₆	N-19°-W	隅丸長方形	6.03 × 5.16	28~34	平坦	4	／	9	2	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, アブライト礫	弥生
30	F8b ₈	N-17°-W	隅丸長方形	5.29 × 4.30	38~50	平坦	4	／	4	／	1	自然	弥生式土器, 炉石, アブライト礫	弥生
31	F8c ₄	N-38°-W	隅丸方形	5.05 × 4.99	34~50	平坦	4	／	4	／	1	—	弥生式土器, アブライト礫	弥生第1号古墳と重複
32	F8d ₂	N-51°-W	[隅丸長方形]	[3.83] × [3.21]	10~34	平坦	1	／	2	1	1	—	弥生式土器, 紡錘車, 砥石, アブライト礫	弥生第1号古墳と重複
33	F8a ₃	N-27°-W	隅丸方形	5.96 × 5.74	20~30	平坦	4	／	5	1	1	自然	弥生式土器, 紡錘車	弥生第1号古墳と重複
34	F10f ₃	N-44°-W	隅丸方形	6.24 × 6.04	60~70	平坦	4	／	8	1	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, 敲石	弥生
35	F10e ₄	N-25°-W	長方形	6.50 × 5.21	10~28	平坦	／	／	／	／	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, 磨石, 凹石	弥生
36	F10e ₈	N-10°-E	隅丸方形	3.25 × 3.24	28~40	平坦	／	／	／	／	／	自然	弥生式土器, 縄文式土器	弥生
37	F10d ₉	N-53°-W	隅丸方形	3.05 × 2.81	14~20	平坦	／	／	／	／	1	自然	弥生式土器	弥生
38	F10f ₉	N-67°-W	隅丸方形	2.65 × 2.55	36~40	平坦	／	／	／	／	／	自然	弥生式土器	弥生第94号土坑と重複
40	H10g ₀	N-54°-W	隅丸方形	4.94 × 4.42	18~24	平坦	4	／	5	1	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, 石皿, アブライト礫, 炭化	弥生
41	G10c ₆	N-51°-W	隅丸長方形	5.20 × 4.12	45~56	平坦	4	／	5	1	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, 砥石, アブライト礫	弥生
42	G10e ₅	N-59°-W	隅丸方形	4.07 × 3.73	14~30	平坦	／	／	／	／	1	自然	弥生式土器, アブライト礫	弥生
43	G10e ₃	N-31°-W	隅丸長方形	4.80 × 4.33	52~60	平坦	4	／	5	1	1	自然	弥生式土器, 土師器, 石鏃	弥生
44	G11a ₃	N-81°-E	方形	5.28 × 5.20	34~40	平坦	4	／	6	2	1	自然	弥生式土器, 磨製石斧, アブライト礫	弥生
45	G11c ₁	N-25°-W	隅丸長方形	6.53 × 5.18	48~63	平坦	4	／	5	1	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, 磨石, 敲石, アブライト礫	弥生
46	G10h ₇	N-58°-W	隅丸長方形	6.12 × 5.45	34~40	平坦	4	／	5	1	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, 打製石斧, アブライト礫	弥生

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設				炉	覆土	出土遺物	備考
							支柱穴	貯蔵穴	ピット	入口				
47	G10i ₆	N-70°-W	隅丸長方形	7.17 × 5.20	28~34	平坦	4	1	5	1	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, 石鏃	弥生
48	G11i ₂	N-23°-W	隅丸長方形	5.05 × 4.57	52~60	平坦	4	/	5	1	1	自然	弥生式土器, 須恵器, アプライト礫	弥生第1号溝と重複
49	H11e ₆	N-68°-W	方形	5.0 × 4.68	12~20	凹凸	4	/	9	1	1	自然	弥生式土器, 敲石, アプライト礫	弥生
50	G11c ₈	N-80°-W	隅丸方形	5.58 × 5.15	16~26	平坦	4	1	7	1	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, 穂織具, 磨石, アプライト礫	弥生
53	F11j ₀	N-9°-W	隅丸方形	3.60 × 3.48	2~6	平坦	4	/	5	1	1	自然	弥生式土器, 須恵器	弥生第1号溝と重複
54	G12f ₇	N-19°-W	隅丸長方形	5.55 × 4.0	44~48	平坦	4	/	5	1	1	自然	弥生式土器, 紡錘車	弥生
55	G12b ₀	N-51°-W	隅丸方形	4.50 × 4.15	4~20	平坦	4	/	5	1	1	自然	弥生式土器, アプライト礫	弥生
56	F12e ₉	N-74°-W	隅丸方形	3.27 × 3.20	4~8	平坦	4	/	5	1	1	自然	弥生式土器	弥生
57	F12b ₉	N-56°-E	隅丸方形	5.25 × 5.15	20~30	平坦	4	/	7	1	1	自然	弥生式土器, 石鏃, アプライト礫	弥生第1号溝と重複
58	F12b ₃	N-57°-W	隅丸長方形	4.95 × 4.03	44~50	平坦	4	/	5	1	1	自然	弥生式土器	弥生第5号溝と重複
59	E12h ₆	N-47°-W	隅丸方形	5.90 × 5.89	22~30	平坦	4	/	6	2	1	自然	弥生式土器, 紡錘車, 敲石, アプライト礫	弥生
60	E12d ₈	N-37°-W	長方形	4.55 × 4.04	10~14	平坦	4	/	5	1	1	自然	弥生式土器, アプライト礫	弥生



第121图 原出口遺跡住居配置図

2 土器棺墓

当遺跡からは3基（第2～4号土器棺墓）確認されている。第2号土器棺墓は第35号住居跡の東側（F10e₃区）に隣接しており、埋葬状態が浅く耕作土中であるため現存状況が大変悪く、円形状に弥生式土器壺の破片は確認できたが、遺構としての詳しい資料は得られなかったため遺物のみ紹介する。いずれも土器棺内から骨片は確認されていない。試掘の時点で確認面から破片で出土した土器の中に接合の結果、土器棺墓のものである可能性が考えられるものもあるが、遺構としては確認できていないためその遺物は遺構外出土遺物（第158図）で紹介することにした。以下、第3・4号土器棺墓の形態や特徴等について記載する。

第3号土器棺墓（第122図）

位置 B地区中央部，G11h₃区を中心に確認されている。

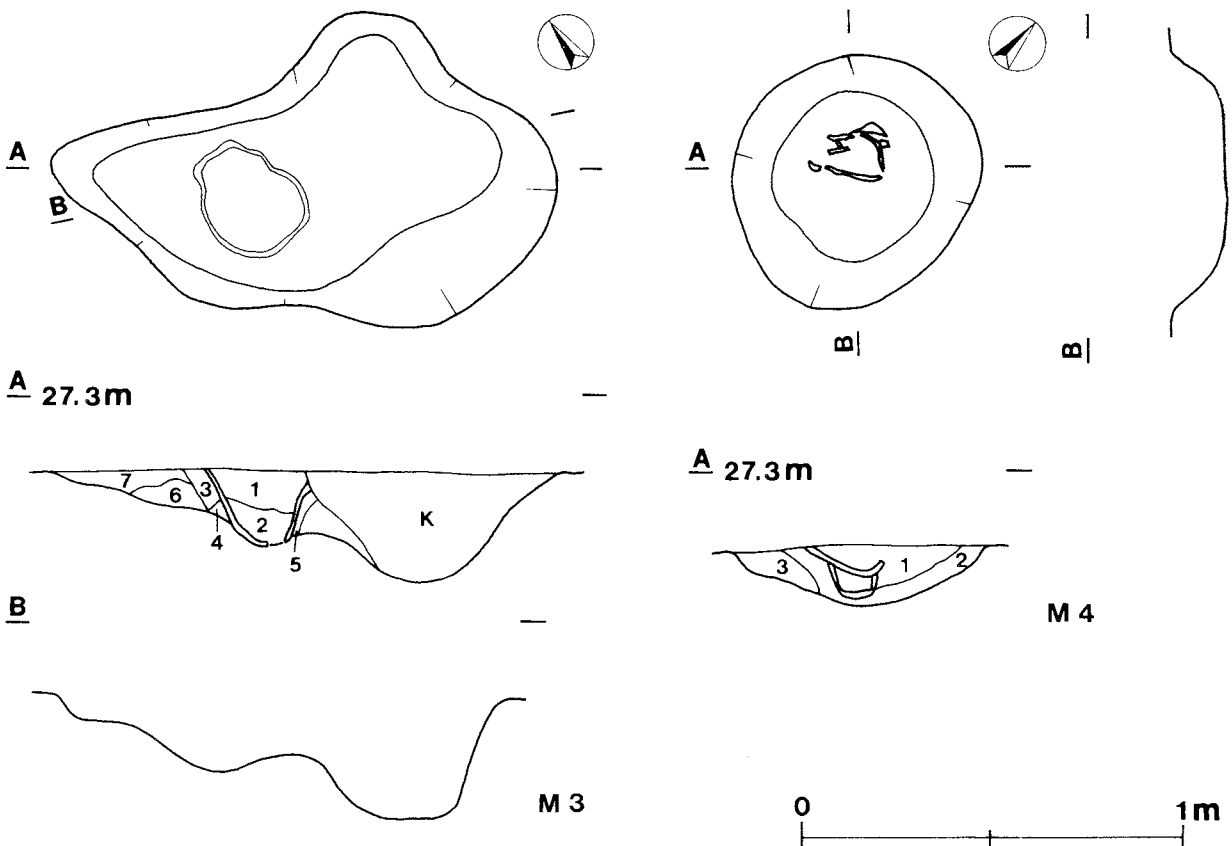
規模と形状 木根の抜き取り等によると思われる攪乱があり，東側半分は確認されていない。長径（80）cm，短径34cmの不整楕円形である。

長径方向 N-49°-W。

壁 壁高は20cmで中段までは外傾して立ち上がり，その後は緩やかに傾斜している。

底面 皿状で，中央部はやや窪んでいる。

覆土 7層から成る。締まりのある褐色土が土器の外側に堆積し，内側の中・上層には暗褐色土が，下層には褐色土が堆積している。なお，土層は第1層がローム粒子少量の暗褐色土，第2～4層はローム粒子多量の褐色土，第5～7層はローム粒子中量の褐色土である。



第122図 第3・4号土器棺墓実測図

遺物 墓壇のほぼ中央から、第124図1の弥生式土器壺の下半部がつぶれた状態で出土している。骨片は確認されていない。

所見 本跡は、弥生時代後期の遺構と考えられる。

第4号土器棺墓 (第122図)

位置 A地区西端部，F8b₉区を中心に確認されている。

規模と形状 長径66cm，短径60cmのほぼ円形である。

長径方向 N-28°-W。

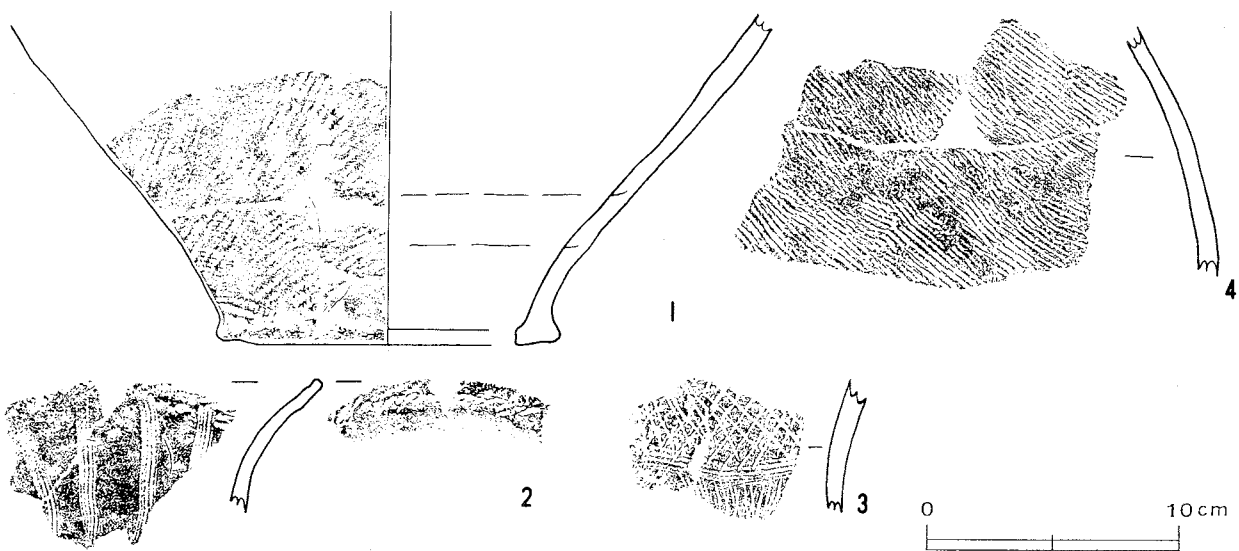
壁 壁高は12cmで緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 締まりのある褐色土が堆積している。第1層はローム粒子微量の褐色土，第2層はローム粒子少量の褐色土，第3層がローム粒子微量の褐色土である。

遺物 中央からやや北西寄りに、第125図1の弥生式土器壺の頸部から胴部が逆位のつぶれた状態で出土している。壺の中や周囲から骨片は確認されていない。

所見 本跡は、遺物の形態から弥生時代後期の遺構と思われる。

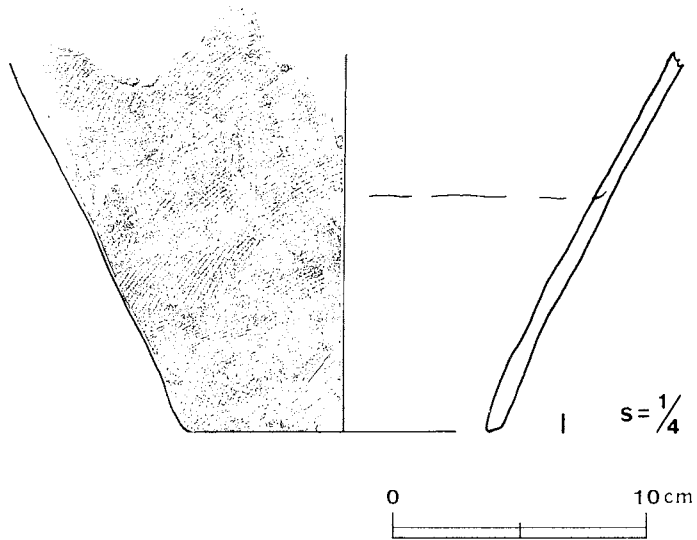


第123図 第2号土器棺墓出土遺物実測・拓影図

第2号土器棺墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第123図 1	壺 弥生式土器	B (13.3) C 13.4	底部から胴部下位にかけての破片。平底で，胴部はやや外反して立ち上がる。胴部には粗い単節縄文が施されている。底部は焼成後に穿孔(径10cm)されている。内面には輪積み痕がある。	砂粒，石英，長石，雲母，スコリア 普通 にぶい黄橙色	P276 PL45 20% 外面摩滅

第123図2～4は、第2号土器棺墓から出土した弥生式土器片の拓影図である。2は口縁部片で、外面は5本櫛歯による縦線文，内面には単節縄文が施されている。3は頸部片で、5本櫛歯の横線文で2段に区画し，上半にはヘラ状工具による格子目文，下半には絡条体による燃糸文が施されている。4は胴部片で、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。



第124図 第3号土器棺墓出土遺物実測図



第125図 第4号土器棺墓出土遺物実測図

第3号土器棺墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第124図 1	広口壺 弥生式土器	B (20.2) C 16.4	胴部下位の破片。胴部は外傾して立ち上がる。底部は焼成後に完全に除去されている。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 におい黄橙色	P277 PL45 40% 外面摩滅

第4号土器棺墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第125図 1	壺 弥生式土器	B (15.0)	胴部上位から頸部にかけての破片。胴部は内傾し、頸部は外反して立ち上がる。胴部と頸部の境には6本櫛歯による波状文が2段施されている。さらに頸部と胴部には同様の施文具により縦区画され、頸部では8条、胴部では不明な部分があるが推定で8条施されている。	砂粒, 石英, 長石, スコリア 普通 におい赤褐色	P266 25%

3 方形周溝墓

当遺跡から8基の方形周溝墓が確認されており、いずれもA地区南端部に位置している。8基ともほぼ同一方向に構築され、北から約30°西の方角になり、筑波山頂方向から10°北にずれている。外形の一边は8～15mで、周溝を含めた面積は平均で135.7m²となり最小73.8m²、最大216m²である。最大面積を持つ第4号方形周溝墓は、中心に配置され他の5基はその両側（北西側に4基と南東側に3基）に構築されているのが特徴の一つである。しかも北西側は73.8～111.4m²と小形であるのに対し、南東側は148.7～201.6m²と大形である。この配置の仕方には何か特別な意味があると思われるが、考察する手掛かりがなく、今後の類例を待ち更に検討する必要がある。5基は周溝の1～2辺を接しているが、8基ともに大変隣接し整然と配置されている。主体部と思われる部分はいずれからも確認できなかった。

第1号方形周溝墓（第131図）

本跡は、A地区南端部、I10i₉区を中心に確認されている。北西方向に第2号方形周溝墓が隣接し、本跡と周溝がわずかに重複しており、新旧関係は土層から本跡の方が新しいと考えられる。

規模は南北方向外径12.6m、内径8.3m、東西方向外径11.8m、内径7.15mである。平面形はわずかに縦長の隅丸長方形となり、特に東コーナーは整った弧状を残している。南北方位はN-26°-Wと西側に傾いている。溝は周回しているが幅は一定しておらず、上幅は南コーナー付近が最も広く2.8m、北コーナー部付近が最も狭く1.7mである。下幅は一定しておらず0.3～1.1mと開きが大きく、コーナー付近が狭い。深さは65～98cmで西側の南北辺が最も深く、底面はほぼ平坦である。方台部側と外周部側の壁の立ち上がり方に差が認められず、緩やかに傾斜して立ち上がっている。

周溝内の覆土は7～9層で、いずれも最下層はロームの中・大ブロックを含む褐色系の土が堆積しており、これは壁面の崩れによるロームブロックと思われる。しかし、南側の東西辺に当たる溝内では下層に褐色土が少なく暗・黒褐色土が堆積している。各層中にローム小ブロックが混入しており、また中層に褐色土層が包含されていることから、人為堆積の可能性が考えられるが、方台部の褐色土が流れ込んだ可能性がありどちらとも判断できない。

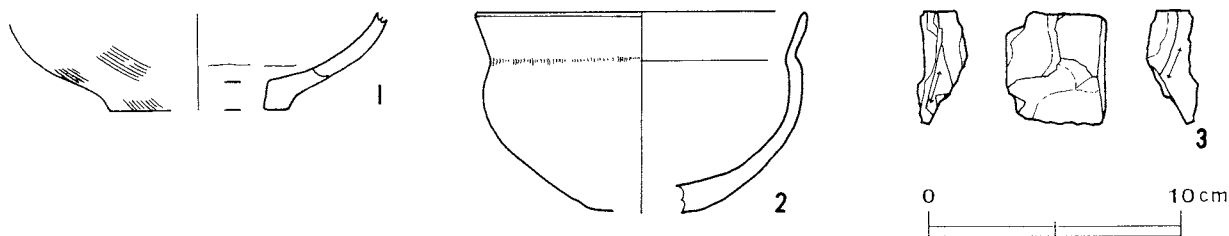
なお、土層は

SPG'		第6層 暗褐色	ローム粒子中量, 黒色ブロック少量
第1層 黒褐色	ローム粒子中量, 黒色ブロック少量	第7層 褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 黒色ブロック少量
第2層 暗褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 黒色ブロック少量	第8層 褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 黒色ブロック中量
第3層 褐色	ローム粒子多量, 黒色ブロック少量	第9層 明褐色	ローム粒子多量, ロームブロック多量, 黒色ブロック少量
第4層 褐色	ローム粒子多量, 黒色ブロック微量		
第5層 褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量		
SPJ'		第4層 灰褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック多量
第1層 極暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック多量, 焼土粒子少量, 炭化粒子少量	第5層 暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子少量
第2層 極暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子少量	第6層 黒褐色	ローム粒子少量, ローム大ブロック少量, 炭化粒子少量
第3層 褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック多量	第7層 褐色	ローム粒子中量
SPI'		第5層 暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック多量, 炭化粒子少量
第1層 黒色	ローム粒子微量, ローム小ブロック少量, 焼土・炭化粒子少量	第6層 暗褐色	ローム粒子少量, ローム中ブロック中量
第2層 黒褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子少量	第7層 褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック多量
第3層 暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック多量, 炭化粒子少量	第8層 褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量
第4層 黒褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック多量	第9層 鈍い褐色	ローム粒子多量, ローム小・中ブロック少量

(第131図)

である。

遺物は周溝の覆土中から弥生式土器片・土師器片が少量出土している。第126図2の土師器鉢は東側南北辺のほぼ中央付近の覆土中層から正位の潰れた状態で出土している。底部が穿孔されていたかどうかは定かでない。1の壺底部片は覆土中からで、焼成前にヘラ状工具で穿孔されている。3の砥石は、覆土中から出土している。本跡は古墳時代前期最終末と思われる。



第126図 第1号方形周溝墓出土遺物実測図

第1号方形周溝墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第126図 1	壺 土師器	B (3.9)	底部から体部下位にかけての破片。底部は、焼成前に穿孔(径5.2cm)されている。	体部外面ハケ目調整。底部穿孔はヘラ切り(左回り)。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 にぶい橙色	P209 5% 周溝覆土中
		C [7.0]				
2	鉢 土師器	A 13.1	底部から口縁部にかけての破片。平底で、体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横位のナデ。頸部に弱いハケ目調整。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 橙色	P208 70% PL46 周溝覆土中
		B 7.9				
		C [4.3]				

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第126図3	砥石	(4.5)	(4.1)	(2.0)	(25.1)	凝灰岩	覆土中	Q50 破片

第2号方形周溝墓 (第131図)

本跡は、A地区南端部、I10f₇区を中心に確認されている。北東方向に第3号方形周溝墓が隣接し、本跡の周溝と一辺が平行に重複しているが、新旧関係は周溝の覆土の堆積状況からでは明確な判断はできない。しかし、覆土上層の堆積状況から判断して、本跡の周溝の覆土が中層まで形成された段階で、第3号方形周溝墓が構築されたと考えられる。規模は南北方向が外径13.7m、内径9.5m、東西方向が外径(13.2)m、内径7.9mである。平面形はわずかに縦長の隅丸長方形で、各コーナーとも整った弧状を残している。南北方向はN-27°-Wと西側に傾いている。溝は周回しており上幅1.8~3.2m、下幅0.4~0.7mで、上幅は北コーナー部付近が最も狭い。南側周溝が狭いのは攪乱のため上場を掘り下げたためである。深さは55~68cmで、底面は皿状である。方台部側と外周部側の壁の立ち上がり方に差が認められず、外傾して立ち上がっている。南側周溝部のほぼ中央付近の底面が、ブリッジ状にやや高まっている。ブリッジとして構築されていたものか、周溝を掘る段階で残ってしまった高まりなのか判断は困難であるが、一辺のほぼ中央に位置していることからブリッジの機能をはたすものとして、構築されていた可能性が高いと思われる。

周溝内の覆土は6~7層で、いずれも中・下層にはロームの中・大ブロックを含む褐色系の土が堆積しており、これは壁面の崩れによるロームブロックと思われ、西側周溝には外周部側に多量の褐色土が堆積している。しかし、北側周溝では褐色土が厚く方台部側から流れ込んだような状態で堆積している。各層中にローム小ブロックが混入しており、方台部や周溝壁面の褐色土が崩れて流れ込んだものと考えられ、各層ともレンズ状堆

積となっている。

なお、土層は

SPA'

- 第1層 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 第2層 暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 黒色ブロック少量, 焼土粒子微量
- 第3層 暗褐色 ローム粒子少量, 黒色ブロック少量
- 第4層 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量, 黒色ブロック少量

- 第5層 明褐色 ローム粒子多量, 黒色ブロック少量
- 第6層 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量, 黒色ブロック少量
- 第7層 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量, 黒色ブロック少量

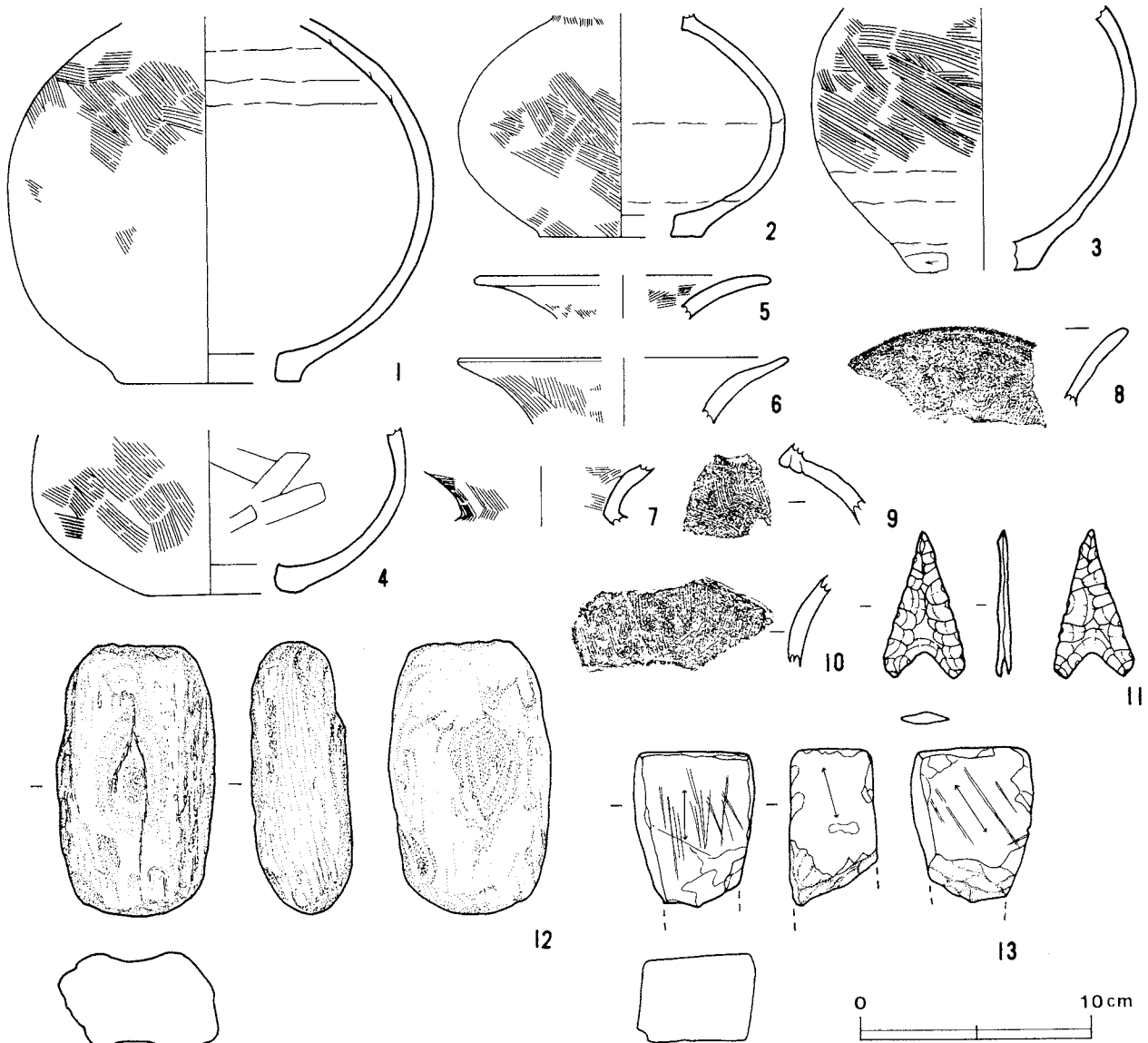
SPB'

- 第1層 黒褐色 ローム粒子少量, ロームブロック少量
- 第2層 暗褐色 ローム粒子少量, 黒色ブロック少量
- 第3層 暗褐色 ローム粒子少量, ロームブロック微量, 黒色ブロック微量

- 第4層 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック中量
- 第5層 暗褐色 ローム粒子少量, ロームブロック少量
- 第6層 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 黒色ブロック少量 (第131図)

である。

遺物は周溝の覆土中から弥生式土器片10点, 土師器片86点が出土している。第127図1~7の土師器壺は、いずれも周溝の覆土中からで外面にはハケ目調整が施され、1・2・4には底部が焼成前に穿孔されている。1・2・5は西側南北辺のほぼ中央付近の覆土上層からで、1・2は正位の潰れた状態でそれぞれ出土している



第127図 第2号方形周溝墓出土遺物実測・拓影図

る。3は南コーナーの覆土中層から出土し、南側東西辺の覆土中層からの破片が接合している。6の口縁部と7の頸部は覆土中から出土している。12の凹石と13の砥石は、覆土中から出土している。本跡は古墳時代前期最終末と思われる。

第2号方形周溝墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第127図 1	壺 土師器	B (15.9) C 8.0	底部から体部にかけての破片。底部は焼成前に穿孔(径5.5cm)されている。体部は内彎して立ち上がる。	体部上半外面は、斜方向にハケ目調整。穿孔はヘラにより、左右半回転ずつ切られている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい褐色	P210 70% PL46 周溝覆土上層
2	壺 土師器	B (9.8) C 7.0	底部から体部にかけての破片。底部は焼成前に穿孔(径4.5cm)されている。体部は偏平な球状である。	体部外面ハケ目調整。体部内面に輪積み痕有り。穿孔はヘラ切り。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい褐色	P211 70% PL46 周溝覆土上層
3	壺 土師器	B (11.7) C [5.2]	底部から体部にかけての破片。突出した平底で無穿孔。体部は球状である。	体部外面はハケ目調整されている。体部下位外面には輪積み痕が有る。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 浅黄橙色	P212 70% PL46 周溝覆土中
4	壺 土師器	B (7.1) C [6.9]	底部から体部にかけての破片。底部は焼成前に穿孔(径4.8cm)されている。体部は偏平な球状である。	体部外面はハケ目調整、内面ヘラナデ。体部外面赤彩。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい橙色	P213 PL46 15% 周溝覆土中
5	壺 土師器	A [13.0] B (1.9)	口縁部片。口縁部は外反して大きく開く。	口縁部内・外面ハケ目調整。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい褐色	P214 5% 周溝覆土上層
6	壺 土師器	A [14.2] B (3.0)	口縁部片。口縁部は外反して大きく開く。	口縁部内・外面ハケ目調整。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい橙色	P215 5% 周溝覆土中
7	壺 土師器	B (2.6)	頸部片。頸部から口縁部は外反して立ち上がる。	頸部内・外面ハケ目調整。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい褐色	P216 5% 周溝覆土中

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第127図12	凹石	11.9	7.0	4.5	538.5	砂岩	周溝覆土中	Q51
13	砥石	6.7	5.3	3.8	204.3	凝灰岩	周溝覆土中	Q52 炭化物付着 PL63

第3号方形周溝墓(第131図)

本跡は、A地区南端部、I10e₀区を中心に確認されている。南西方向に第2号方形周溝墓が隣接し、本跡の周溝と一辺が重複している。規模は南北方向が外径16.5m、内径10.1m、東西方向が外径13.7m、内径8.9mである。平面形は縦長の隅丸長方形で、東コーナー部が最も大きな弧状を描きやや突出している。南北方向はN-27°-Wと西側に傾いている。溝は周回しているが一定しておらず、上幅1.4~2.7mで北コーナーから東コーナーにかけてが広く、南コーナー付近が最も狭い。下幅も不均一で0.35~1.5mと変化し上幅とは逆に北コーナーから南コーナーにかけてが狭く、南コーナーから西コーナーにかけてが広い。周溝の深さは85~99cmで東側が深く、底面は皿状である。東側周溝は、中央部付近の底面にやや低い長方形のおちこみが溝に沿ってあるのが認められる。南コーナー部の周溝はやや浅くなっており、ブリッジ状の高まりのように感じられるが、現存状況が悪く明確な形がつかめず、遺構に伴うものか、壁の崩れによるものか判断が困難である。方台部側と外周部側の壁の立ち上がり方に目だつた違いはなく、どちらも同じように緩斜して立ち上がっている。

周溝内の覆土は5~7層で、いずれも各層にロームの小・大ブロックが含まれており、壁面の崩れか方台部からの流れ込みによるロームブロックと思われる、南側の周溝部には外周部側に多量の褐色土が堆積している。

北側の周溝部ではさらに褐色土が厚く堆積している。東側の周溝部では暗褐色土が堆積し下層を形成した後に両側から褐色土が堆積している。これは方台部や周溝壁面の褐色土が崩れて流れ込んだものと考えられ、各層ともレンズ状堆積となっている。

なお、土層は

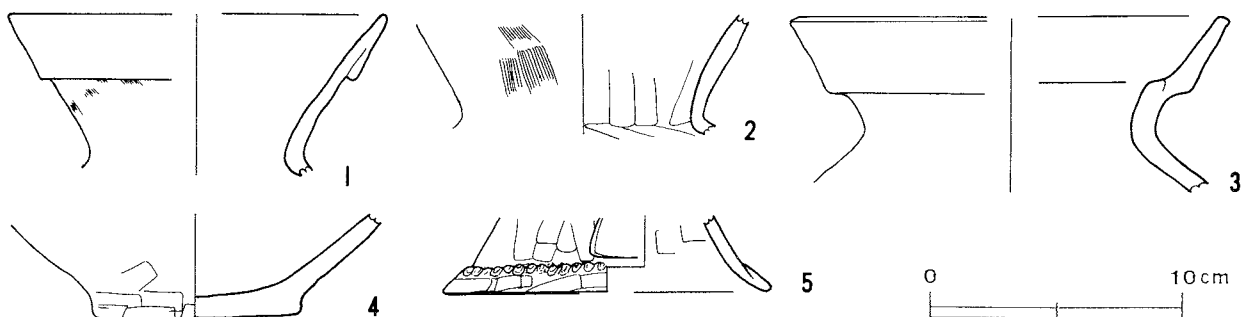
SPE'

第1層 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
 第2層 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
 第3層 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量
 第4層 褐色 ローム粒子多量、ローム小・大ブロック中量
 第5層 褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック多量

(第131図)

である。

遺物は周溝の覆土中から弥生式土器片10点、土師器片約150点が出土しているが接合できるものがなく、器形のつかめるものが少ない。第128図1～4の土師器壺の破片は、いずれも周溝の覆土中からで外面にはハケ目調整がわずかに確認できる。5の装飾器台は覆土中からの破片で、脚部片としたが器受部の可能性もある。本跡は古墳時代前期最終末と思われる。



第128図 第3号方形周溝墓出土遺物実測図

第3号方形周溝墓出土遺物観察表

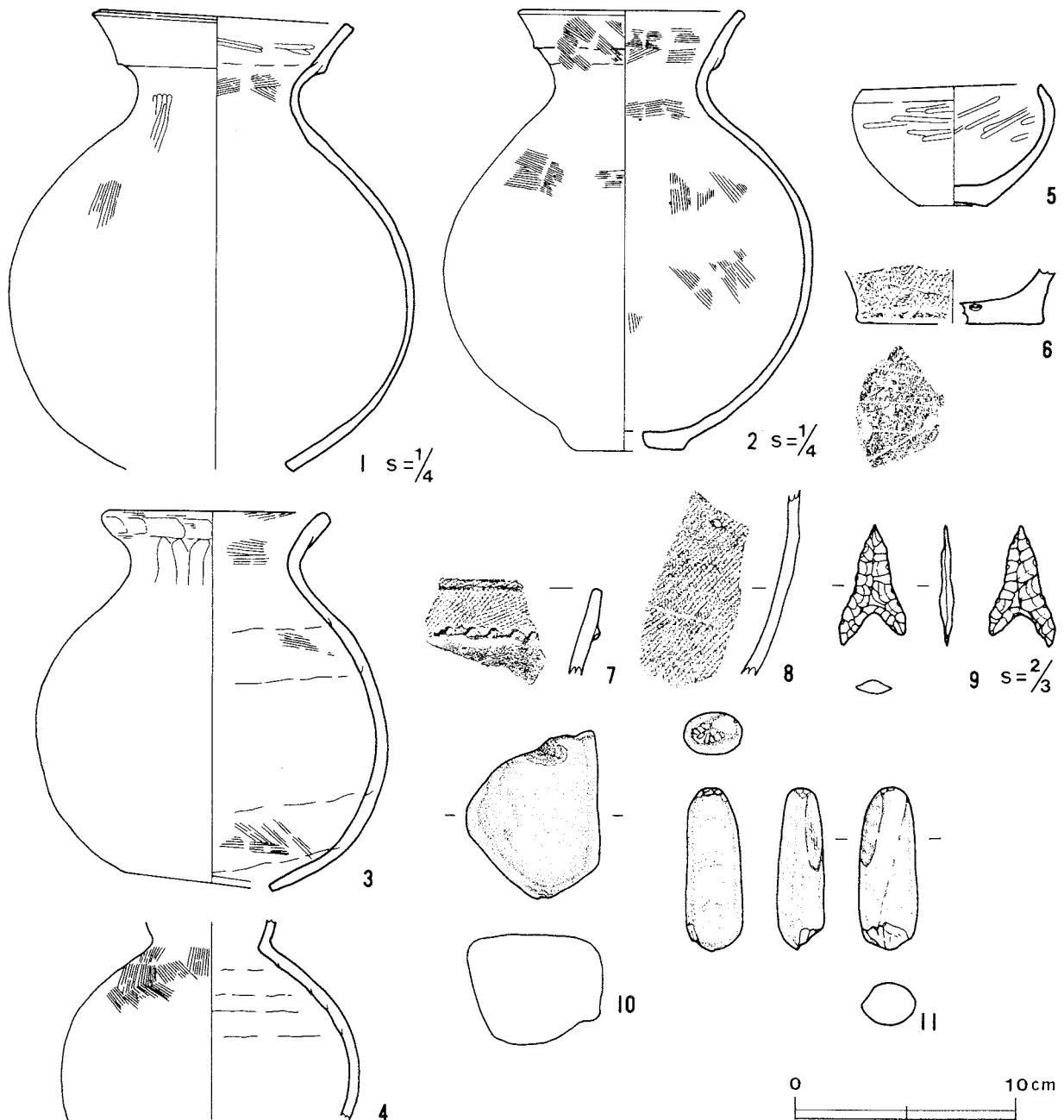
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第128図 1	壺 土師器	A [14.8] B (6.4)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は、外傾して立ち上がる。複合口縁。	頸部から口縁部下位にかけての外面に、わずかにハケ目調整が認められる。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 におい褐色	P217 5% 外面摩滅 周溝覆土中
2	壺 土師器	B (4.7)	頸部片。頸部は、やや外反気味に立ち上がる。	頸部外面ハケ目調整。頸部内面はヘラナデ。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明黄褐色	P218 5% 内・外面剥離 周溝覆土中
3	壺 土師器	A [17.2] B (6.9)	頸部から口縁部にかけての破片。複合口縁で外傾して立ち上がる。口縁部内面に靱痕状の窪みがあるが不明。	頸部から口縁部にかけての内・外面は横位にナデられている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 におい褐色	P219 5% 周溝覆土中
4	壺 土師器	B (4.1) C 8.1	底部から体部下位にかけての破片。平底で、体部は内彎して立ち上がる。P219と同一のものと考えられる。	体部外面は横位のヘラナデ。体部内面は横位のナデ。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明褐色	P220 5% 二次焼成外面炭化物付着 周溝覆土中
5	装飾器台 土師器	D [13.0] E (3.1)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に大きく開く。裾部は折り返され棒状工具により刺突されている。脚部下位に透かしがあるが形状は不明。	脚部外面縦位のヘラナデ、内面横位のヘラナデ。裾部外面横位のヘラナデ。透かしはヘラ切り。	砂粒、スコリア 普通 におい黄橙色	P223 5% PL47 周溝覆土中

第4号方形周溝墓 (第131図)

本跡は、A地区南部、I10b₇区を中心に確認されている。方形周溝墓を北西側に4基、南東側に3基を配する対称の中心に位置し、他の方形周溝墓とは規模や配置に明らかな違いがある。規模は8基中最大で、南北方向が外径14.5m、内径9.3m、東西方向が外径15.2m、内径10.1mである。平面形はわずかに東西方向に長

い隅丸長方形であるが、東側の周溝は西側のものよりやや短くなっている。各コーナーとも整った弧状を残しており、弧の形態も統一がとれている。南北方位はN-29°-Wと西側に傾いている。溝は周回しており上幅1.8~2.6m、下幅0.5~1.5mで、上幅は比較的均一に造られている。周溝の深さは64~86cmで、北側と東側の周溝がやや深い。底面は平坦で丁寧に造られている。北側と東側の周溝底面に浅い窪みがあるが、遺構に伴うものかは判断できない。しかし、北側では辺中央部に2か所、東側では2つのものが重複していると考えればやはり辺中央部に2か所あり、計画性が感じられる。西コーナーの周溝はやや掘り込みが浅く、底面が少し高くなっているが、これがブリッジであったかどうかは判断できない。方台部側と外周部側の壁の立ち上がり方は同一形態で、外傾して立ち上がっている。

周溝内の覆土は5~8層で、いずれも中・下層にはロームブロックを含む褐色系の土が厚く堆積している。これは壁面や方台部の崩れによるロームブロックと思われ、西側~南側~東側の周溝には方台部側に多量の褐



第129図 第4号方形周溝墓出土遺物実測・拓影図

色土が堆積していることから、比較的早く方台部が崩れ始め、南側方面に多く流れ込んだものと推測される。北側の周溝では褐色土が薄く暗褐色土が厚い。各層ともレンズ状堆積となっている。

なお、土層は

SPS

第1層 黒褐色 ローム粒子少量
 第2層 暗褐色 ローム粒子中量
 第3層 暗褐色 ローム粒子少量, ロームブロック少量
 第4層 暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック中量

第5層 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック少量
 第6層 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック少量, 黒色ブロック少量
 第7層 褐色 ローム粒子少量, ロームブロック中量, 黒色ブロック少量
 第8層 明褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量, 黒色ブロック少量

SPX

第1層 暗褐色 ローム粒子少量
 第2層 暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
 第3層 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量, 黒色ブロック少量

第4層 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量, 黒色ブロック少量
 第5層 明褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量

SPU

第1層 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子少量
 第2層 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック多量, 焼土粒子少量
 第3層 黒褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック少量, 焼土粒子微量
 第4層 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子微量

第5層 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量
 第6層 褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量, 炭化粒子微量
 第7層 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量 (第131図)

である。

遺物は周溝の覆土中から弥生式土器片約300点、土師器片約190点が出土している。覆土中から焼成後底部穿孔された土師器壺が出土しており、供献された土器と思われる。第129図1～4の土師器壺は、いずれも周溝の覆土中層から出土し、外面にはハケ目調整がわずかであるが確認できる。1～3には底部がいずれも焼成後に穿孔されている。1・4は南コーナー付近の覆土中層から横位で、3は東コーナー付近の覆土中層から完形の横位で、2は北コーナーの覆土中層から横位の押し潰れた状態でそれぞれ出土している。いずれも、出土レベルや出土状態がほぼ同一であることから近い時期に転落したものと推測され、さらにいずれもコーナー付近から出土していることに注目したい。5の塊は東コーナーの覆土下層から斜位の完形で出土している。9の石鏃、10の凹石、11の敲石は周溝の覆土中からである。本跡は古墳時代前期最終末と思われる。

第4号方形周溝墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第129図 1	壺 土師器	A 16.0	体部は球形状で頸部から口縁部は外傾して立ち上がる。底部は焼成後穿孔(径8.6cm)。複合口縁。	体部内面へラナデ、外面へラ磨き。頸部内面ハケ目調整。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 橙色	P224 90% PL47 周溝覆土中層
		B 28.3				
2	壺 土師器	A 13.5	底部は突出し、体部は内彎して、頸部から口縁部は外傾してそれぞれ立ち上がる。底部は焼成後穿孔(径2.2cm)。複合口縁。	体部内・外面ハケ目調整。口縁部外面ハケ目調整、内面横位のへラナデ。	砂粒、石英、長石 普通 にぶい赤褐色	P225 90% PL47 周溝覆土中層
		B 26.8				
		C 7.4				
3	壺 土師器	A 10.5	底部欠損。体部は球形で頸部から口縁部は外傾して立ち上がる。複合口縁。	体部外面縦位のへラ磨き、内面へラナデ。口縁部外面ハケ目調整、内面へラ磨き。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 橙色	P226 90% PL47 周溝覆土中層
		B 11.7				
		C 6.9				
4	壺 土師器	B (9.1)	体部上半から頸部にかけての破片。体部は球形で頸部は外傾して立ち上がる。	体部外面ハケ目調整。体部内面には輪積み痕有り。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 橙色	P227 20% 周溝覆土中層
5	塊 土師器	A 8.3	平底で、体部は内彎して立ち上がる。最大径を上位にもつ。口縁部は内傾する。	体部内・外面ともへラ磨き。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい黄褐色	P229 80% PL47 周溝覆土下層
		B 5.6				
		C 3.1				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第129図 6	壺 弥生式土器	B (2.5)	底部片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。底部断面中に靱痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 橙色	P232 PL52 5% 胴部外面 炭化物付着 周溝覆土中
		C [8.1]			

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第129図9	石 鏃	2.8	1.5	0.4	0.7	チャート	覆土中	Q53 断欠 PL60
10	凹石	7.8	6.1	5.3	278.6	砂岩	覆土中	Q54 被熱による赤変
11	敲石	7.4	2.8	2.2	56.1	砂岩	覆土中	Q55

第129図7・8は、第4号方形周溝墓から出土した弥生式土器片の拓影図である。7は口縁部片で口縁部から口唇部にかけて附加条1種（附加2条）の縄文が施され、口縁部下端は縄文原体で押圧されている。8は附加条1種（附加2条）の縄文が施された胴部片で、靱痕がある。

第5号方形周溝墓（第131図）

本跡は、A地区南部、H10j₃区を中心に確認されている。北西方向に第7号方形周溝墓、北東方向に第6号方形周溝墓が隣接している。周溝の東コーナー部は第4号住居跡を掘り込んでいる。規模は南北方向が外径9.7m、内径6.4m、東西方向が外径8.5m、内径5.1mで、小形の方形周溝墓が4基ある内の一つで中でも最も小形である。平面形はわずかに南北方向に長いが隅丸方形で、北側の周溝は対する南側の周溝に平行な状態になっていない。各コーナーとも整った弧状を残しており、弧の形態も統一がとれてはいるが、北コーナーがやや鋭角である。南北方向はN-27°-Wと西側に傾いている。溝は周回しており上幅1.0~1.6m、下幅0.4~0.9mで均一でなく、南側が狭い。周溝の深さは28~40cmと比較的浅く、西側の周溝がやや深い。底面は平坦で丁寧に造られている。南コーナー付近の周溝底面に長楕円形状の浅い窪みがあるが、遺構に伴うものかは判断できない。しかし、窪みの長軸方向が周溝の方向とほぼ同じであり、周溝内に意識的に掘り込んでいる可能性は否定できない。方台部側と外周部側の壁の立ち上がり方にわずかであるが違いが見られ、どちらも外傾して立ち上がっているが、方台部側は傾斜が緩やかである。

周溝内の覆土は7・8層で、いずれも中・下層にはロームブロックを含む褐色土が厚く堆積している。これは壁面や方台部の崩れによるロームブロックと思われ、西側の周溝には方台部側に褐色土が厚く堆積していることから、方台部が崩れ落ちたものと推測される。褐色土堆積後の暗・黒褐色土はレンズ状堆積をなしており、この時期には壁や方台部の崩れはほぼ収まりゆっくと埋もれたものと考えられる。北側の周溝では褐色土が薄く、この堆積状況は第4号方形周溝墓のそれとよく似ている。

なお、土層は

SPJ

第1層 暗褐色	ローム粒子少量, ロームブロック少量, 焼土粒子微量	第5層 褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量
第2層 黒褐色	ローム粒子少量, ローム中ブロック少量	第6層 褐色	ローム粒子多量, ローム中ブロック少量
第3層 褐色	ローム粒子多量, ローム大ブロック少量	第7層 褐色	ローム粒子多量, ロームブロック少量, 炭化粒子微量
第4層 明褐色	ローム粒子多量, ロームブロック少量	第8層 暗褐色	ローム粒子中量, ローム中ブロック中量

SPL

第1層 黒褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック多量, 焼土粒子微量	第4層 暗褐色	ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, 炭化粒子少量
第2層 暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子少量	第5層 褐色	ローム粒子多量, ロームブロック少量
第3層 暗褐色	ローム粒子少量, ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量	第6層 褐色	ローム粒子多量, ローム中ブロック少量, 炭化粒子微量
		第7層 褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量

(第131図)

である。

遺物は周溝の覆土中から弥生式土器片・土師器片が微量出土しているが小破片で形の分かるものがない。本跡は古墳時代前期最終末と思われる。

第6号方形周溝墓 (第131図)

本跡は、A地区南部、H10i₆区を中心に確認されている。北側周溝は第8号方形周溝墓の南側周溝と重複しており、さらに西コーナーは第4号住居跡を掘り込んでいる。本跡と第8号方形周溝墓との新旧関係は周溝の重複部土層からでは判断し難く、時間的な差があまりなく覆土下層形成途中で掘り込んでいると思われる。第8号方形周溝墓の南側周溝の覆土最下層中にあるローム大ブロックの入り方と位置から判断し、本跡の方がやや新しい可能性が大きいと考えられる。規模は8基中では小形に部類し、南北方向が外径(10.5)m、内径7.2m、東西方向が外径11.4m、内径7.4mである。平面形はわずかに東西方向に長い隅丸方形である。南コーナーを除く各コーナーは整った弧状を残しており、弧の形態も統一がとれている。南北方向はN-28°-Wと西側に傾いている。溝は周回し各辺とも中央部付近がやや狭く、上幅1.4~2.5m、下幅0.4~1mで西側周溝が広く、東側周溝が狭い。周溝の深さは48~60cmで、西側の周溝がやや深い。底面は平坦かやや皿状で丁寧に掘られている。南コーナー部の底面がやや高くなっているがブリッジ状の形態になっておらず、単に掘り込みが浅かった為によるのか判断が困難である。方台部側と外周部側の壁の立ち上がり方は同一形態で、外傾して立ち上がっている。

周溝内の覆土は7層で、いずれにもロームブロックを含んでいる。北側周溝には褐色系の土が厚く堆積しており、方台部側に多く堆積していることから、方台部の崩れによる流れ込みと思われる。北側の周溝では褐色土が薄く暗褐色土が厚い。

なお、土層は

SPQ

第1層	暗褐色	ローム粒子中量,ローム小ブロック中量,炭化粒子微量	第4層	暗褐色	ローム粒子少量,焼土粒子微量
第2層	暗褐色	ローム粒子中量,ローム小ブロック少量,ローム中ブロック少量	第5層	褐色	ローム粒子中量,ローム大ブロック少量,炭化粒子微量
第3層	暗褐色	ローム粒子中量,ローム小ブロック少量,焼土粒子微量	第6層	褐色	ローム粒子多量,ローム大ブロック少量,炭化粒子微量
			第7層	明褐色	ローム粒子多量

SPO

第1層	暗褐色	ローム粒子少量,ローム小ブロック多量,炭化粒子少量	第4層	褐色	ローム粒子多量,ロームブロック少量,炭化粒子微量
第2層	褐色	ローム粒子中量,ロームブロック中量,炭化粒子少量	第5層	褐色	ローム粒子中量,ロームブロック中量,炭化粒子微量
第3層	褐色	ローム粒子中量,ローム小ブロック少量,炭化粒子微量	第6層	明褐色	ローム粒子多量,ローム中ブロック少量
			第7層	褐色	ローム粒子多量,ローム大ブロック少量

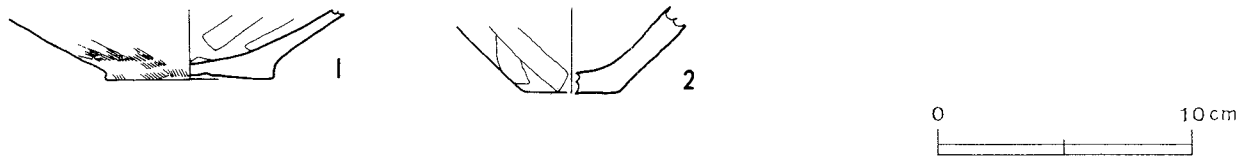
(第131図)

である。

遺物は周溝の覆土中から弥生式土器片、土師器片が少量出土している。いずれも小破片で形の分かるものは出土していない。本跡は古墳時代前期最終末と思われる。

第7号方形周溝墓 (第131図)

本跡は、A地区南部、H10h₂区を中心に確認されている。東側に第8号方形周溝墓が平行に並びその周溝と、本跡の東側周溝とが上層で重複している。周溝の土層から判断して本跡は、第8号方形周溝墓より古いと思われる。また、北側周溝部は第1号溝に掘り込まれている。規模は南北方向が外径9.8m、内径(6.2)m、東西方向が外径(17.3)m、内径6.3mで、平面形はわずかに南北方向に長い隅丸方形である。南・東コーナーとも整った弧状を残しており形態も同一であるがそれ以外のコーナーは重複により攪乱され正確な形は捕らえられない。南北方向はN-28°-Wと西側に傾いている。溝は周回しており上幅0.9~1.6m、下幅0.2~0.9mで一定しておらず南側周溝が狭い。周溝の深さは40~62cmで、西側の周溝がやや深く断面形は逆台形である。底面は西側周溝が平坦で丁寧に造られ、他は皿状である。東コーナーの周溝底面は一段高くブリッジ状になっている。東側の周溝底面に窪みがあるが、遺構に伴うものかは判断できない。方台部側と外周部側の壁の立ち上がり方は同一形態で、外傾して立ち上がっているが西側周溝以外はやや崩れている。



第130図 第7号方形周溝墓出土遺物実測図

周溝内の覆土は6・7層で、いずれも中・下層にはロームブロックを含む褐色土が厚く堆積している。方台部の崩れによると思われる褐色土が西・南側の周溝には方台部側に多く堆積している。各層ともレンズ状堆積となっている。

なお、土層は

SPC

第1層	暗褐色	ローム粒子中量	第4層	褐色	ローム粒子中量
第2層	灰褐色	ローム粒子中量	第5層	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック微量
第3層	褐色	ローム粒子少量	第6層	暗褐色	ローム粒子微量

SPB

第1層	暗褐色	ローム粒子少量, ロームブロック少量	第5層	明褐色	ローム粒子多量, ロームブロック多量, 黒色ブロック少量
第2層	暗褐色	ローム粒子少量	第6層	褐色	ローム粒子少量, ロームブロック多量, 黒色ブロック少量
第3層	褐色	ローム粒子少量, ロームブロック少量			
第4層	褐色	ローム粒子少量, 黒色粒子少量			

SPE

第1層	暗褐色	ローム粒子少量, ロームブロック少量	第5層	褐色	ローム粒子中量, ロームブロック中量
第2層	褐色	ローム粒子中量, ロームブロック少量	第6層	褐色	ローム粒子多量, ロームブロック多量
第3層	褐色	ローム粒子少量, ロームブロック中量	第7層	明褐色	ローム粒子多量, ロームブロック多量
第4層	褐色	ローム粒子多量, ロームブロック多量, 黒色ブロック少量			

(第131図)

である。

遺物は周溝の覆土中から流れ込みと思われる弥生式土器片, 土師器片が少量出土している。第130図1・2の土師器壺の底部片は覆土上層から出土しており, 1は外面にハケ目調整が施されている。

本跡は古墳時代前期最終末と思われる。

第7号方形周溝墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第130図 1	壺 土師器	B (2.7)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で, 胴部は緩やかに外傾して立ち上がる。	胴部は外面ハケ目調整, 内面ヘラナデ。	砂粒, 石英, 長石, 雲母 普通 橙色	P236 5% 周溝覆土上層
		C 6.4				
2	壺 土師器	B (3.4)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で, 胴部は外傾して立ち上がる。	胴部は内・外面ヘラナデ。	砂粒, スコリア 普通 にぶい橙色	P237 5% 周溝覆土上層
		C 3.6				

第8号方形周溝墓 (第131図)

本跡は, A地区南部, H10g₄区を中心に確認されている。当遺跡の方形周溝墓群中で北端部に位置し, 南東側に第6号方形周溝墓, 南西側に第7号方形周溝墓がありいずれとも本跡の周溝が重複している。前述したように, 本跡は第7号方形周溝墓より新しく, 第6号方形周溝墓よりやや古いと思われる。規模は小形で, 南北方向が外径(8.5)m, 内径5.6m, 東西方向が外径(9.4)m, 内径6.3mとなり, 平面形は隅丸方形である。西側から南側周溝にかけての外周側壁は重複により現存していない。内周は向かい合った2辺が互いに整然とした平行関係をなしており他の方形周溝墓より丁寧な造りである。南北方向はN-28°-Wと西側に傾いている。溝は周回しており上幅(1.6~1.7)m, 下幅(0.4~0.8)mで, 上幅はかなり均一に造られている。周溝の深さ

は26～50cmで、北側が深く東側は極端に浅い。底面は皿状で、東側周溝中央部の底面は1段高くなっておりブリッジ状である。壁は外周・内周側ともに緩やかに外傾して立ち上がる。

周溝内の覆土は5層で、いずれもロームブロックを含む褐色系の土が堆積している。ロームブロックの量は他の方形周溝墓の状況に比べ少なく、また褐色土の堆積量も少ない。褐色土は北側周溝では底面上には堆積しておらず、東側周溝では底面上に薄く堆積するのみで、暗褐色土の堆積が多い。これは壁面や方台部の崩れがかなり緩やかに進行したことによるものと思われる。

なお、土層は

SPI

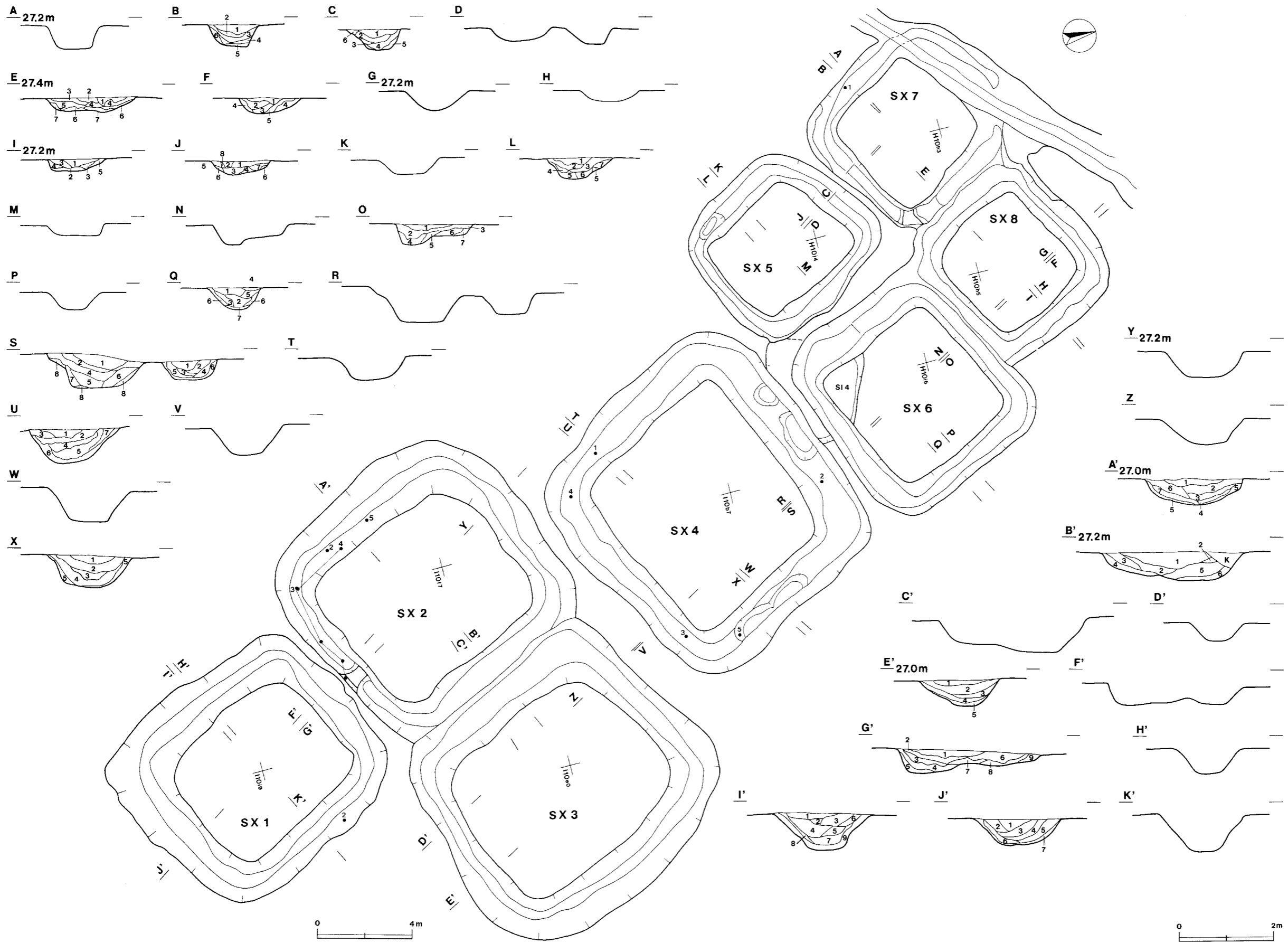
第1層	暗褐色	ローム粒子中量, ロームブロック少量, 炭化粒子微量	第4層	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
第2層	褐色	ローム粒子多量, ロームブロック少量, 炭化粒子微量	第5層	暗褐色	ローム粒子中量, ローム大ブロック少量, 炭化粒子微量
第3層	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック中量			

SPF

第1層	暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子少量	第4層	褐色	ローム粒子多量, ローム大ブロック少量, 炭化粒子微量
第2層	暗褐色	ローム粒子中量, ロームブロック中量	第5層	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
第3層	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量			(第131図)

である。

遺物は周溝の覆土中から弥生式土器片, 土師器片がわずかに出土しているだけで形のわかるものはない。時期を決定できるような遺物は出土していないが, 他の方形周溝墓との関連から古墳時代前期最終末と思われる。



第131图 第1~8号方形周沟墓实测图

4 古 墳

当遺跡のA地区西端部から前方後円墳1基を確認している。遺跡周辺には数か所の古墳群が存在しているが、前方後円墳を含むのは、北西方向に隣接している愛宕山古墳群と1km程東に位置する西田古墳群の2か所である。愛宕山古墳群は、2基の前方後円墳（愛宕山古墳、愛宕山1号墳）と約20基ほどの円墳から形成されている。その2基の前方後円墳からは円筒埴輪や人物埴輪の破片が表採され、さらに愛宕山古墳では箱式石棺が発見されている。本墳は、愛宕山1号墳から150mと大変近い位置にあり、愛宕山古墳群の中に含まれると考えられる。また、本墳からも円筒埴輪が出土しており時期的にも大変近いと思われる。

現況は山林であったが既に墳丘は削平されその形態を留めておらず、さらに主軸を境として南西側半分は道路下となっているため、全容を把握することは不可能であり、不明な点が多い。

以下、形態の特徴や主な遺物について記載する。

第1号古墳（第132図）

本墳は、A地区西端部のF8b₂～F8g₄区を南北、F8b₁～F8g₅区を東西とする範囲内に確認されているもので、愛宕山古墳群中の1基と考えられる。現況は山林であるが、墳丘は既に残存しておらずそれ以前に耕作等により削平されているため表土除去後に確認された遺構で、南西側半分はエリア外となっている。本墳の周溝は第19・31・32号住居跡を掘り込んでいる。

規模は墳長19.1m、確認面上で後円径13.6m、前方長5.6m、前方幅 [4.35]m、くびれ幅 [3.6]mの前方後円墳であるが、前方部が小さく「帆立て貝形」に近い形態である。確認面での周溝を含めた総長は22.95mとなり、方位はN-152°-Eと南々東向きに構築されている。

周溝は確認面上幅1.9～2.9mでくびれ部付近が最も広く前方部付近が狭いが、くびれ部には第19号住居跡が重複しておりやや広めになってしまった可能性がある。下幅は0.4～1.25mで後円部北側が最も狭くくびれ部が広い。深さは24～84cmで後円部北側が深く、前方部は浅い。底面は皿状で壁は緩やかに傾斜して立ち上がるが外側に比べ内側の壁はかなり緩やかである。

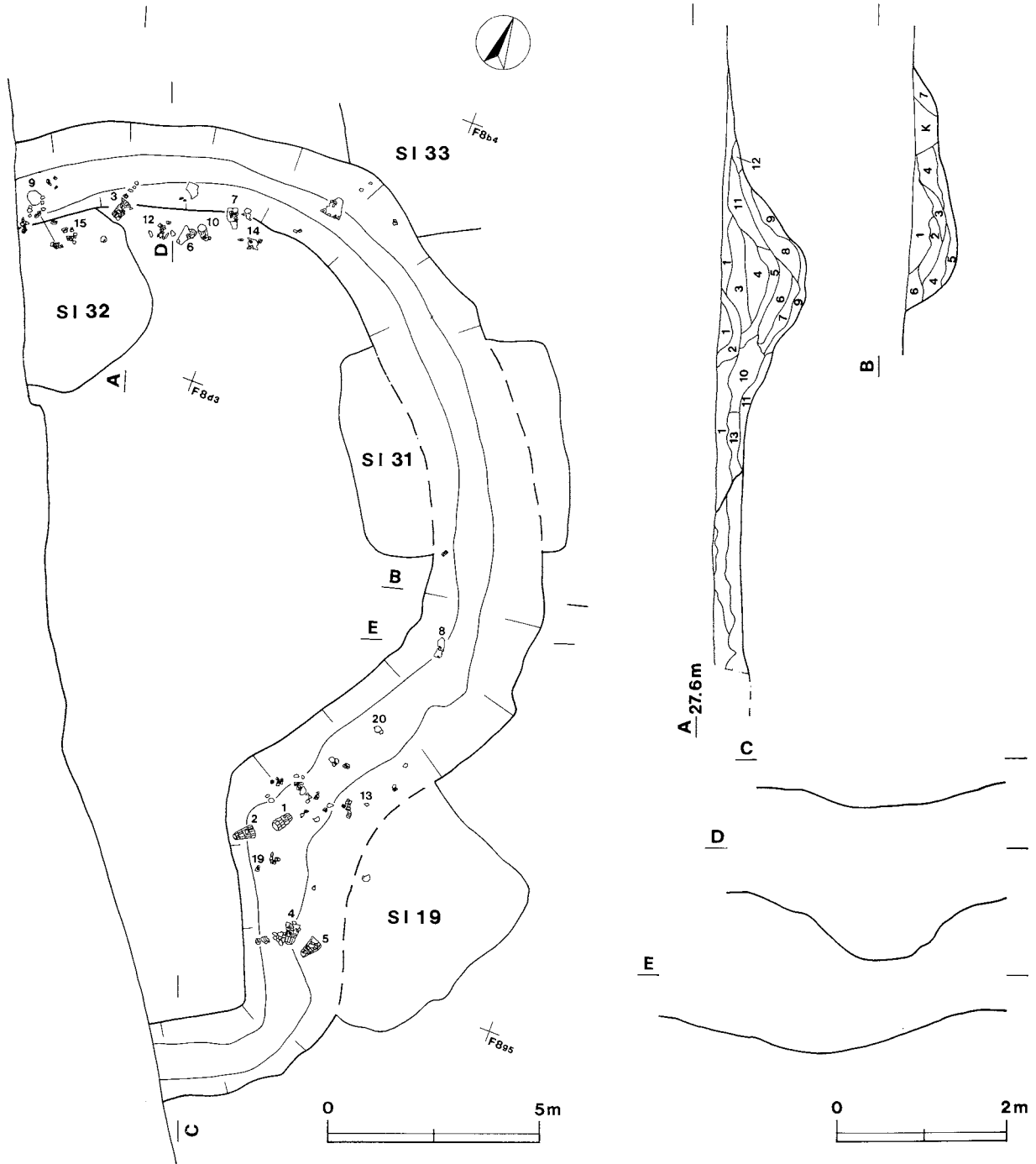
埋葬主体部や埋葬施設と思われる所は確認面でのレベルでは捉えられず、それよりも高い位置に付設されていたと考えられるが、墳丘は残存しておらず不明である。

周溝内の覆土は7～13層で、いずれも中・下層はロームの小～大ブロックを含む褐色土がレンズ状に堆積し特に後円部側の周溝では厚く、これは墳丘や壁面の崩れによるロームブロックと思われる比較的早く後円部が崩れ始めたと推測される。中から上層にかけては暗褐色・黒褐色が中心となりレンズ状堆積となっており、後円部北側周溝では土層中に赤錆様の粒子が混入しているのが確認できた。

なお、土層は

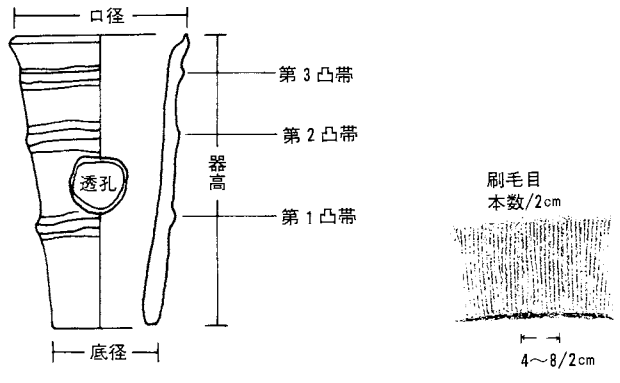
SPA			第5層	暗褐色	ローム粒子中量,ローム中ブロック多量,炭化粒子少量
第1層	黒褐色	ローム粒子少量,ロームブロック少量,炭化粒子少量,酸化鉄粒子中量	第6層	褐色	ローム粒子多量,ローム中ブロック多量
第2層	灰褐色	ローム粒子少量,ローム小ブロック少量,炭化粒子少量,酸化鉄粒子少量	第7層	褐色	ローム粒子多量,ローム中ブロック多量,炭化粒子多量
第3層	黒褐色	ローム粒子少量,ロームブロック中量,炭化粒子少量,焼土粒子微量,酸化鉄粒子微量	第8層	明褐色	ローム粒子多量,ローム中ブロック多量
第4層	黒褐色	ローム粒子少量,ロームブロック中量,炭化粒子少量,酸化鉄粒子微量	第9層	明褐色	ローム粒子多量,ローム大ブロック中量
			第10層	黒褐色	ローム粒子少量,ロームブロック少量,炭化粒子少量
			第11層	褐色	ローム粒子多量,ロームブロック中量
			第12層	褐色	ローム粒子少量,焼土粒子少量
			第13層	褐色	ローム粒子中量,ローム中ブロック少量,酸化鉄粒子少量
SPB			第5層	褐色	ローム粒子多量,ローム大ブロック中量,焼土粒子微量
第1層	黒褐色	ローム粒子少量,ロームブロック少量,焼土粒子微量	第6層	暗褐色	ローム粒子少量,ローム小ブロック少量,焼土・炭化粒子微量
第2層	暗褐色	ロームブロック中量,焼土粒子少量	第7層	褐色	ローム粒子中量,ローム中ブロック中量,炭化粒子微量
第3層	暗褐色	ローム粒子少量,ローム小ブロック少量,焼土粒子少量			
第4層	黒褐色	ローム粒子少量,ローム中ブロック少量,焼土粒子微量			

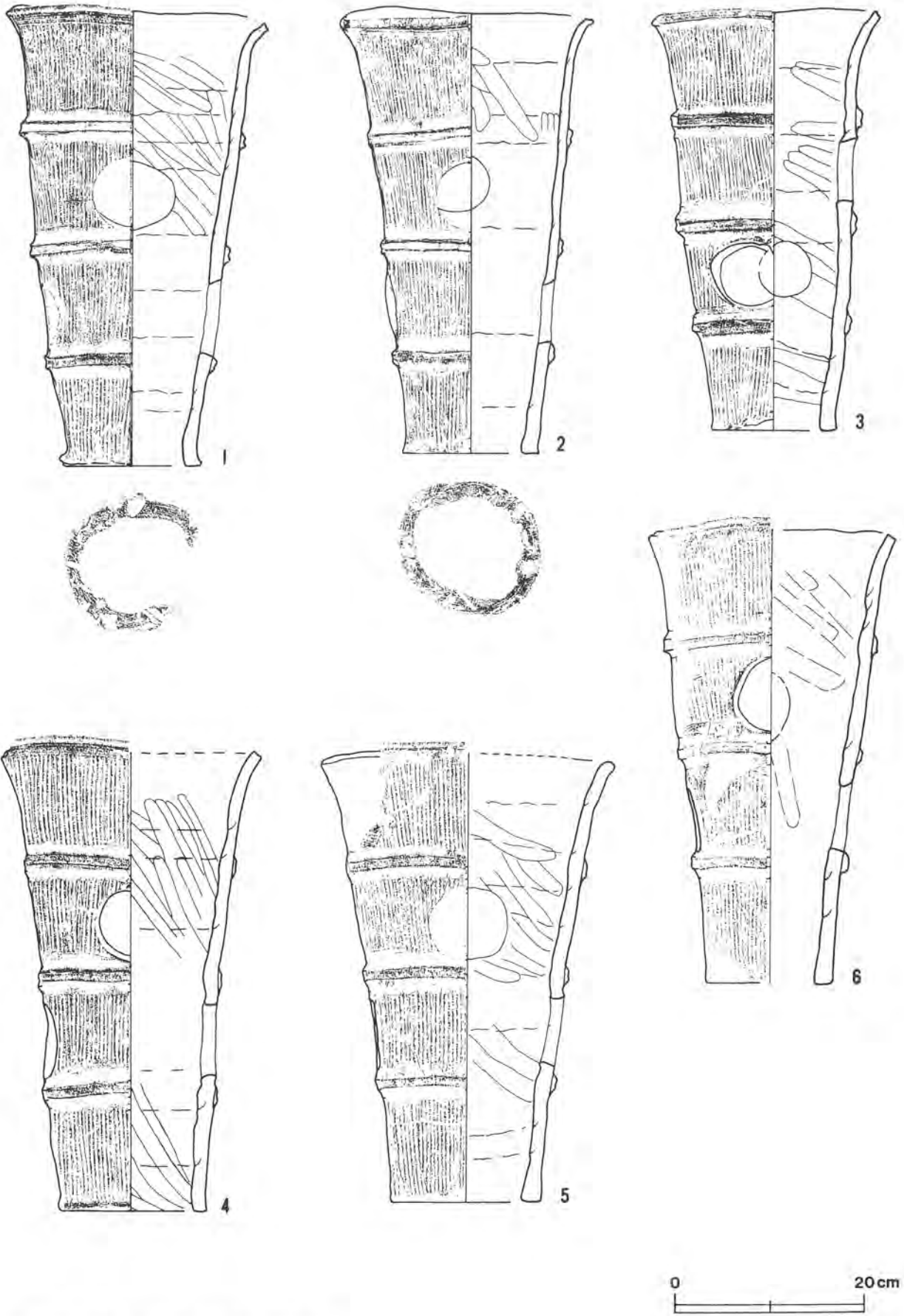
(第132図)



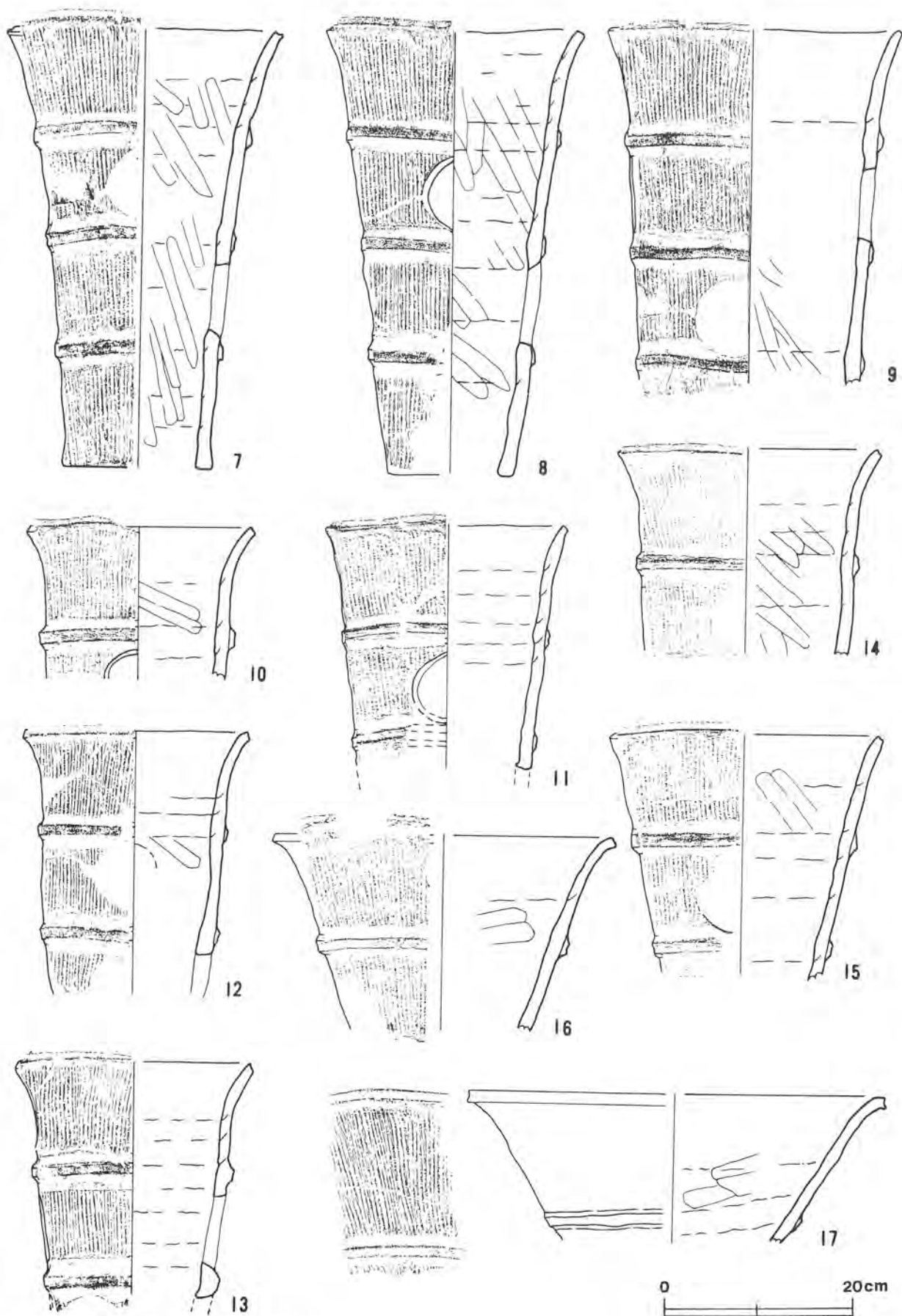
第132図 第1号古墳実測図

遺物は周溝の覆土中からで、混入した弥生式土器片・土師器片が少量と埴輪片が多量出土している。埴輪片は殆どが円筒・朝顔形埴輪の破片で、わずかであるが形象埴輪の一部と考えられるものも出土している。埴輪片は細かいものが覆土下層から上、まとまった形の分かるものは中層から上に多く見られる。埴輪片はくびれ部と北側周溝付近に多いが、後円部東側付近は極端に出土量が減

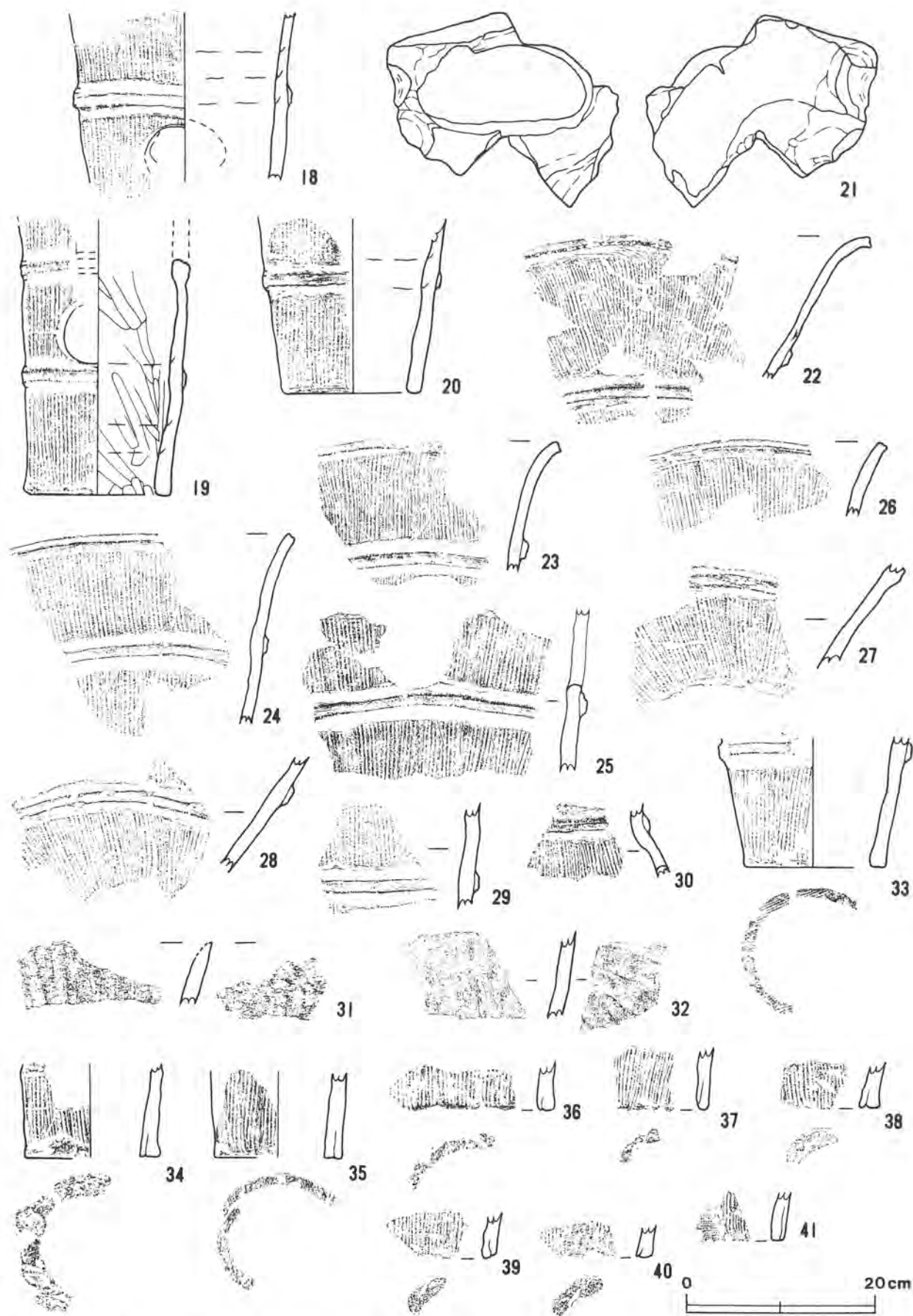




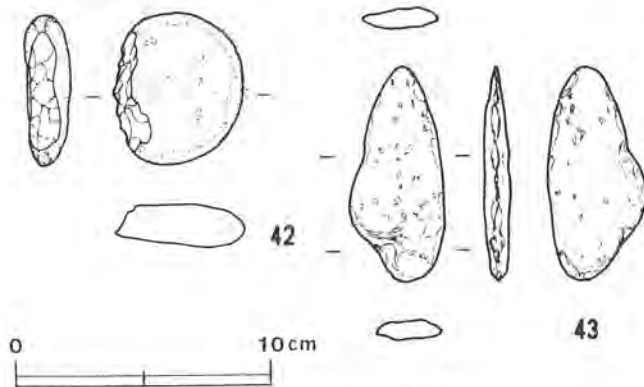
第133図 第1号古墳出土遺物実測図(1)



第134图 第1号古墳出土遺物実測図(2)



第135图 第1号古墳出土遺物実測図(3)



第136図 第1号古墳出土遺物実測図(4)

る。第133図1・2は全く破損していない円筒埴輪で、くびれ部の覆土上層の暗褐色土中から横位でお互いが向き合うような状態で出土している。3は後円部北側周溝の覆土上層から押し潰れたような破片で、4・5は前方部の東側周溝覆土上層から周溝に沿う様に2個体が並び、土圧で潰れた状態ではあるがほぼ水平で出土している。6は後円部北側周溝の覆土上層から、内側周溝壁寄りに押し潰れた状態で出土している。埴輪片の総重量は約295kgで、2個の完形品の円筒埴輪の平均値

から個数を推定すると約50個分の円筒埴輪に相当する。

本墳は遺物等から判断し、6世期中頃の時期に構築されたと思われる。

第1号古墳出土遺物観察表

図版番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	ハケ目 /2cm	成形と調整	胎土・焼成・色調	備考
第133図 1	49.8	27.4	14.3	上部	5~8	タテハケ。口縁部外面弱いナデ。口唇部ナデ。内面輪積み痕明瞭。内面斜位の指ナデ。基底部は「の」字状接合。 突帯 断面形はM字状。突帯上は強いナデ、下は粗雑なナデ。タテハケ後に貼り付け。透孔 第2・3段に各2孔あり。各段ごとの孔結線は直交しない。左右半回転ずつ2分割穿孔。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 にぶい橙色	DP37 100% PL48
				下部				
2	48.1	27.2	14.6	上部	6~8	タテハケ。口縁部内・外面ナデ。口唇部ナデ。内面輪積み痕明瞭。内面斜位の指ナデ。基底部は「の」字状接合。 突帯 断面形はM字状。突帯上は強いナデ、下は粗雑なナデ。タテハケ後に貼り付け。透孔 第2・3段に各2孔あり。各段ごとの孔結線は直交。左右半回転ずつ2分割穿孔。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 明黄褐色	DP38 100% PL48
				下部				
3	45.5	23.2	13.3	上部	5~6	タテハケ。口縁部外面弱いナデ。口唇部ナデ。内面輪積み痕あり。内面斜位の指ナデ。基底部は「の」字状接合。 突帯 断面形はM字状。突帯上・下は強いナデ。タテハケ後に貼り付け。透孔 第2・3段に各2孔あり。各段ごとの孔結線は直交。上下半回転ずつ2分割穿孔。孔裏側未処理。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 橙色	DP39 95% PL48
				下部				
4	49.5	[26.6]	15.5	上部	4~5	タテハケ。口縁部内・外面、口唇部ともにナデ。内面輪積み痕あり。内面斜位の指ナデ。基底部は破損のため不明。 突帯 断面形はM字。突帯上・下は強いナデ。タテハケ後に貼り付け。透孔 第2・3段に各2孔あり。各段ごとの孔結線は直交しない。上下半回転ずつ2分割穿孔。孔裏側ナデ。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 にぶい橙色	DP40 80% PL48
				下部				
5	47.3	[30.2]	[15.4]	上部	5~6	タテハケ。口縁部内・外面、口唇部ともにナデ。内面輪積み痕あり。内面斜位の指ナデ。基底部は「の」字状接合。 突帯 断面形は台形。突帯上・下はナデ。タテハケ後に貼り付け。透孔 第2・3段に各2孔あり。各段ごとの孔結線は直交。左右半回転ずつ2分割穿孔。穿孔後内面指ナデ。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 明赤色	DP41 50% PL48
				下部				
6	49.2	24.8	[13.4]	上部	4~5	タテハケ。口縁部外面弱いナデ。口唇部ナデ。内面上部輪積み痕明瞭。内面斜位の指ナデ。基底部の接合は不明。 突帯 断面形は台形。タテハケ後貼り付け。突帯上・下強いナデ。透孔 第2・3段に各2孔ずつあり。各段ごとの孔結線は直交。左右半回転ずつ2分割穿孔。孔裏側指ナデ処理。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 にぶい橙色	DP42 50% PL48
				下部				
第134図 7	(47.4)	[28.2]	[16.0]	上部	5~6	タテハケ。口縁部外面弱いナデ。口唇部ナデ。内面上部輪積み痕明瞭。内面斜位の指ナデ。基底部の接合は不明。 突帯 断面形は台形。タテハケ後貼り付け。突帯上・下強いナデ。透孔 第2段2孔、3段(1)孔でほぼ円形。3分割穿孔。孔裏側指ナデ処理。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 明黄褐色	DP43 30% PL48
				下部				
8	48.5	26.2	13.4	上部	4~5	タテハケ。口縁部外面、口唇部ナデ。口縁部内面左回りのナデ。内面輪積み痕明瞭。内面中~下部斜位の指ナデ。 突帯 断面形は第1が「M」字状、第2・3が台形。タテハケ後貼り付け。突帯上ナデ良好。透孔 第2段(1)孔、3段(1)孔。左右2分割穿孔。孔裏側弱い指ナデ処理。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 橙色	DP44 30%
				下部				

図版番号	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (cm)	ハケ目 /2cm	成 形 と 調 整	胎土・焼成・色調	備 考
9	(38.6)	[30.7]	—	上部 1.2 下部 1.5	4~5	タテハケ。口縁部外面、口唇部ナデ。内面輪積み痕明瞭。内面斜位の指ナデ。内面剝離。 突帯 断面形は台形。タテハケ後貼り付け。突帯上・下ナデ良好。 透孔 第2段(1)孔, 3段(1)孔。上下2分割穿孔。孔裏側指ナデ処理。	砂粒, 石英, 長石, スコリア 普通 明褐色	DP45 20%
10	(16.6)	23.5	—	上部 1.1 下部 1.4	5~6	第3~4段にかけての破片。タテハケ。口縁部内・外面, 口唇部ナデ。内面輪積み痕明瞭。内面斜位の指ナデ。 突帯 断面形は台形。タテハケ後貼り付け。 透孔 第3段(2)孔。欠損のため形状不明。孔裏側未処理。	砂粒, 石英, 長石, スコリア 普通 にぶい橙色	DP46 40%
11	(26.7)	[24.6]	—	上部 1.2 下部 1.3	4~5	第2~4段にかけての破片。タテハケ。口縁部内外面と口唇部にナデ。内面輪積み痕あり。内面斜位の指ナデ。 突帯 断面形は「M」字状。タテハケ後貼り付け。突帯上・下ナデ良好。 透孔 第3段に2孔。欠損のため形状不明。孔裏側ナデ処理。	砂粒, 石英, 長石, スコリア 普通 橙色	DP47 20%
12	(29.0)	23.4	—	上部 1.2 下部 1.5	6~7	第2~4段にかけての破片。タテハケ。口縁部外面は弱いナデ, 内面と口唇部ナデ。内面輪積み痕あり。内面斜位の指ナデ。 突帯 断面形は台形。タテハケ後貼り付け。突帯上・下ナデ良好。 透孔 第2段(1)孔, 第3段2孔。左右2分割穿孔と, 多分割(3~4回)穿孔あり。	砂粒, 石英, 長石 普通 にぶい黄褐色	DP48 35%
13	(25.2)	[25.0]	—	上部 1.3 下部 2.0	4~5	第2~4段にかけての破片。タテハケ。口縁部内外面ナデ。内面輪積み痕あり。内面斜位の指ナデ。 突帯 断面形は台形。タテハケ後貼り付け。突帯上・下強いナデ。 透孔 第2段(1)孔, 第3段2孔。孔裏側未処理。	砂粒, 石英, 長石 普通 にぶい橙色	DP49 20%
14	(22.5)	[27.0]	—	上部 1.2 下部 1.4	5~6	第3~4段にかけての破片。タテハケ。口縁部外面・口唇部ナデ。内面輪積み痕あり。内面斜位の指ナデ。 突帯 断面形は台形。タテハケ後貼り付け。突帯上・下ナデ。 透孔 第3段(1)孔。孔裏側未処理。	砂粒, 石英, 長石, スコリア 普通 にぶい橙色	DP50 20%
15	(26.8)	[27.9]	—	上部 1.2 下部 1.3	4~5	第2~4段にかけての破片。タテハケ。口縁部内外面, 口唇部ナデ。内面輪積み痕あり。内面斜位の指ナデ。 突帯 断面形は台形。タテハケ後貼り付け。突帯上・下強いナデ。 透孔 第3段(1)孔。孔裏側未処理。	砂粒, 石英, 長石 普通 明黄褐色	DP51 20%
16	(21.3)	[36.0]	—	上部 1.2 下部 1.5	5~6	朝顔形。花状部片。タテハケ。口縁部内外面と口唇部ナデ。内面輪積み痕なし。内面斜位の指ナデ。 突帯 断面形は「M」字状。突帯の1部にハケ目あり。突帯下はナデ後ハケ。突帯上はハケ後ナデ。	砂粒, 石英, 長石, スコリア 普通 にぶい橙色	DP52 20%
17	(15.0)	[44.3]	—	上部 1.2 下部 1.1	5~7	朝顔形。花状部片。タテハケ。口縁部内外面と口唇部ナデ。内面輪積み痕あり。内面斜位の指ナデ。 突帯 断面形は台形。突帯の1部にハケ目あり。突帯上・下のナデ粗雑。	砂粒, 石英, 長石, スコリア 普通 橙色	DP53 20%
第135図 18	(18.3)	—	—	上部 1.2 下部 1.0	5~6	第3~4段にかけての破片。タテハケ。内面輪積み痕あり。内面斜位の指ナデ。 突帯 断面形は台形。タテハケ後貼り付け。突帯上・下ナデ。 透孔 第3段に2孔。左右に2分割穿孔。孔裏側未処理。	砂粒, 石英, 長石 普通 明赤褐色	DP54 20%
19	(25.2)	—	14.8	上部 1.6 下部 1.7	4~5	第1~3段にかけての破片。タテハケ。内面輪積み痕あり。内面斜位の指ナデ。 突帯 断面形は台形。タテハケ後貼り付け。突帯上・下ナデ。 透孔 第2段に(1)孔, 第3段に(1)孔で破損。孔裏側ナデ。	砂粒, 石英, 長石 普通 にぶい黄褐色	DP55 30%
20	(19.0)	—	15.0	上部 1.3 下部 1.7	5~6	第1~2段にかけての破片。タテハケ。内面輪積み痕あり。内面斜位の指ナデ。基底部分は「の」字状接合。 突帯 断面形は台形。タテハケ後貼り付け。突帯上・下ナデ良好。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 橙色	DP56 20%

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第136図42	磔 器	6.0	5.2	1.8	78.8	花 崗 岩	覆 土 中	Q78 PL62
43	穂 摘 具	8.5	3.8	1.0	33.6	葦青石ホルソフエルス	覆 土 中	Q79 PL62

5 土 坑

当遺跡からは、99基の土坑が確認されている。それぞれの土坑からの遺物が少なく時期や性格について不明なものが多い。形状に特徴のある18基の土坑について個々に解説を加え、その他については一覧表に記載した。

第8号土坑 (第137図)

位置 A地区北端部, F9c₃区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北東コーナー付近は第7号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長径3.21m, 短径1.65mの長楕円形で、深さは75cmである。

長径方向 N-25°-E。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 皿状で軟らかい。

覆土 6層から成る。土層セクションが中央部にかからず、西端部になってしまったため全体像を把握することは困難である。最上層を除く各土層中にロームブロックが混入しており、これは急傾斜の壁面が風化により崩れたためか、埋め戻しによるものか判断は難しいが、覆土第3層の暗褐色土が内包されていることから、第6層の自然堆積の後に人為堆積があったと思われる。

なお、土層は

第1層	暗褐色	ローム粒子中量, 黒色ブロック少量	第4層	暗褐色	ロームブロック中量, ローム粒子少量
第2層	褐色	ロームブロック・ローム粒子中量, 暗褐色ブロック少量	第5層	褐色	ロームブロック少量, ローム粒子多量
第3層	暗褐色	ロームブロック・ローム粒子少量	第6層	褐色	ローム粒子多量, ロームブロック中量, 暗褐色ブロック少量

(第137図)

である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、形態から陥し穴と思われる。

第13号土坑 (第137図)

位置 A地区中央部, G9c₇区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径3.83m, 短径1.75mの不整長楕円形で、深さは62cmである。

長径方向 N-29°-W。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 皿状で軟らかい。

覆土 5層から成る。下層である覆土第4・5層中にローム小ブロックが混入しており、これは急傾斜の壁面が風化により崩れたためと思われる、褐色土が大半を占めていることから比較的短期間に埋もれたと思われる。

自然堆積と思われる、また各層とも締まりがある。

なお、土層は

第1層	暗褐色	ローム粒子微量	第4層	にぶい褐色	ローム小ブロック少量
第2層	褐色	ローム粒子微量	第5層	褐色	ローム小ブロック少量
第3層	褐色	ローム粒子微量			

(第137図)

である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、形態から陥し穴と思われる。

第15号土坑 (第137図)

位置 A地区中央部, F9c₈区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径2.87m, 短径1.45mの不整長楕円形で, 深さは78cmである。

長径方向 N-38°-W。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 皿状で軟らかい。

覆土 6層から成る。上層を除く各土層中にローム小ブロックが混入しており, これは急傾斜の壁面が風化により崩れたためと思われる。覆土1・4・6層には締まりがある。レンズ状をなし自然堆積であろう。

なお, 土層は

第1層 褐色 ローム粒子少量
第2層 褐色 ローム粒子中量
第3層 暗褐色 ローム小ブロック微量

第4層 鈍い褐色 ローム小ブロック中量
第5層 褐色 ローム粒子中量
第6層 褐色 ローム小ブロック少量

(第137図)

である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は, 形態から陥し穴と思われる。

第18号土坑 (第137図)

位置 A地区中央部, H9e₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径2.90m, 短径1.65mの長楕円形で, 深さは52cmである。

長径方向 N-77°-W。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 皿状で軟らかい。

覆土 6層から成る。最下層中にはロームブロックが少量ではあるが混入しており, これは急傾斜の壁面が風化により崩れたものであろう。覆土の大部分は暗褐色土で締まりが認められる。

なお, 土層は

第1層 黒褐色 ローム粒子少量
第2層 暗褐色 ローム粒子少量
第3層 暗褐色 ローム粒子微量

第4層 暗褐色 ローム粒子少量
第5層 褐色 ローム小ブロック少量
第6層 褐色 ローム粒子微量

(第137図)

である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期や性格は不明であるが, 形態から墓壇の可能性がある。

第19号土坑 (第137図)

位置 A地区中央部, H10b₆区を中心に確認されている。

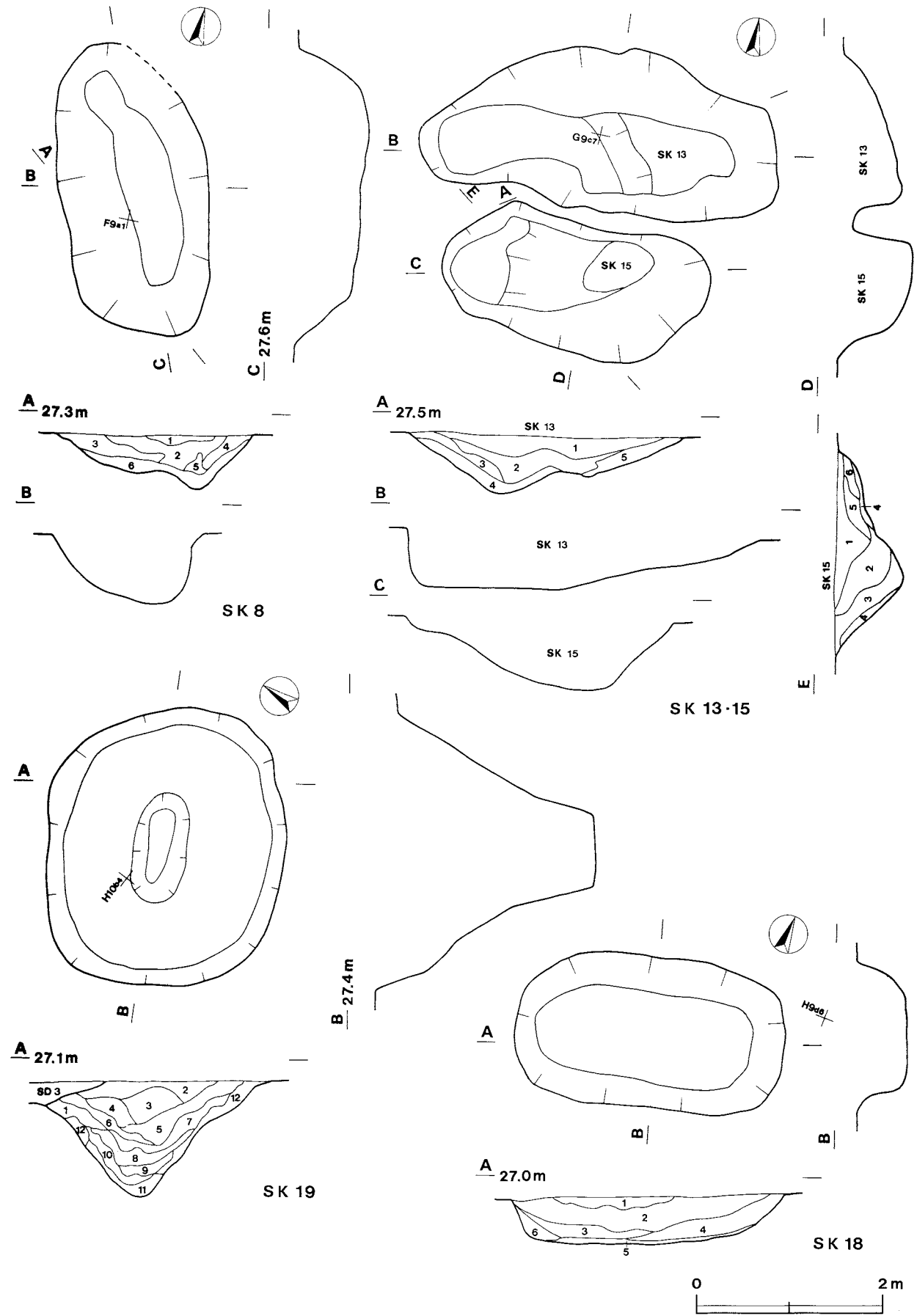
重複関係 本跡の北西壁は第3号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長径3.05m, 短径2.53mの楕円形で, 深さは224cmである。

長径方向 N-32°-W。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦で軟らかい。



第137图 第8・13・15・18・19号土坑实测图

覆土 12層から成る。土層セクションは最下層まで実測できなかった。各土層中にロームブロックが混入し、また覆土第1～9層までは締まっており、埋め戻しによる人為堆積と考えられる。

なお、土層は

第1層	黒褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子少量
第2層	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 焼土粒子微量, 炭化粒子少量
第3層	極暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子少量
第4層	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック多量, 炭化粒子微量
第5層	黒褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量, 炭化粒子微量
第6層	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子微量
第7層	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック少量, 炭化粒子微量
第8層	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック多量, ローム中ブロック中量
第9層	褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量
第10層	明褐色	ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, 炭化粒子微量
第11層	明褐色	ローム粒子多量, ローム大ブロック中量
第12層	褐色	ローム粒子多量, ローム大ブロック中量

(第137図)

である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の出土遺物がなく時期は不明であるが、形態から井戸と思われる。

第27号土坑 (第138図)

位置 A地区中央部, G9g₆区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径2.10m, 短径1.35mの楕円形で、深さは22cmである。

長径方向 N-16°-E。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 皿状で軟らかい。

覆土 6層から成る。ほぼ中央部に焼土塊があり、その上端部は確認面まで達している。覆土第1・2層中には焼土粒子が少量ではあるが混入しており、これ以下の層中からは認められない。覆土の大部分は褐色土で第3層を除く各層は締まりが認められる。

なお、土層は

第1層	褐色	焼土粒子少量	第4層	褐色	ローム粒子微量
第2層	褐色	焼土粒子微量	第5層	褐色	ローム小ブロック少量
第3層	褐色	ローム粒子少量	第6層	灰褐色	焼土小ブロック少量

(第138図)

である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の出土遺物がなく時期は不明であるが、ファイヤーピットの可能性があると思われる。

第28号土坑 (第138図)

位置 B地区西端部, G9a₉区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径3.00m, 短径1.35mの不定形で、深さは103cmである。

長径方向 N-65°-W。

壁面 外傾して立ち上がり、途中でわずかに段を2か所もつ。

底面 皿状で軟らかい。

覆土 8層から成る。中・下層は褐色土でロームブロックが混入しており、これは急傾斜の壁面が風化により崩れたためと思われ、壁側から流れ込むように堆積している。レンズ状堆積をなしており自然堆積であろう。

なお、土層は

第1層	黒褐色	ローム粒子少量	第5層	褐色	ローム粒子多量, ローム中ブロック少量
第2層	暗褐色	ローム粒子少量	第6層	褐色	ローム粒子多量, ローム中ブロック微量
第3層	暗褐色	ローム粒子中量	第7層	褐色	ローム粒子多量,
第4層	褐色	ローム粒子中量	第8層	褐色	ローム粒子多量, 黒色土ブロック微量

(第138図)

である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期は不明であるが、形態から陥し穴と思われる。

第45号土坑 (第138図)

位置 B地区中央部, F11j₇区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径4.60m, 短径1.20mの長楕円形で、深さは90cmである。

長径方向 N-35°-E。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 皿状で軟らかい。

覆土 5層から成る。壁際は褐色土で、中・上層にはロームブロックが混入している暗褐色土が厚く堆積している。ロームブロックは急傾斜の壁面が風化により崩れたため混入したと思われる。レンズ状堆積をなしており自然堆積と思われる。

なお、土層は

第1層	暗褐色	ローム粒子少量, ローム中ブロック微量, 黒色土ブロック少量	第3層	褐色	ローム粒子多量
第2層	暗褐色	ローム粒子少量, ローム大ブロック微量, 炭化物少量	第4層	褐色	ローム粒子中量, ローム中ブロック微量
			第5層	褐色	ローム粒子多量

(第138図)

である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期は不明であるが、形態から陥し穴と思われる。

第47号土坑 (第138図)

位置 B地区中央部, G11c₇区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径2.45m, 短径1.17mの長楕円形で、深さは72cmである。

長径方向 N-21°-W。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 凸凹で軟らかい。

覆土 5層から成る。壁際は褐色土で、中・上層には暗褐色土が堆積している。ロームブロックは含まれていない。レンズ状堆積をなしており自然堆積と思われる。

なお、土層は

第1層	暗褐色	ローム粒子少量	第4層	褐色	ローム粒子少量
第2層	暗褐色	ローム粒子少量	第5層	褐色	ローム粒子多量
第3層	暗褐色	ローム粒子中量			

(第138図)

である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期は不明であるが、形態から陥し穴と思われる。

第50号土坑 (第138図)

位置 B地区北部, F12g₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径1.88m, 短径0.71mの長楕円形で, 深さ40cmである。

長径方向 N-40°-E。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 凸凹で軟らかい。

覆土 4層から成る。下層は褐色土で, 中層には暗褐色土が堆積している。各層ともロームブロックと炭化粒子を含んでいる。レンズ状堆積をなしており自然堆積と思われる。

なお, 土層は

第1層	黒褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 炭化粒子少量	第3層	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量
第2層	暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子少量	第4層	褐色	ローム粒子少量, ロームブロック少量

(第138図)

である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期は不明であるが, 形態から陥し穴と思われる。

第57号土坑 (第139図)

位置 B地区東部, H12a₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径2.75m, 短径0.61mの不整長楕円形で, 深さ184cmである。

長径方向 N-39°-W。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦で軟らかい。

覆土 8層から成る。中・下層は褐色土で, 中層はロームブロックを含んでいる。流れ込んだようなレンズ状堆積をなしており自然堆積と思われる。

なお, 土層は

第1層	暗褐色	ローム粒子少量	第5層	暗褐色	ローム粒子中量, ロームブロック少量
第2層	暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック少量	第6層	褐色	ローム粒子中量, ロームブロック少量
第3層	暗褐色	ローム粒子少量, ロームブロック少量	第7層	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
第4層	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量	第8層	褐色	ローム粒子多量

(第139図)

である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期は不明であるが, 形態から陥し穴と思われる。

第64号土坑 (第138図)

位置 B地区南部, H12h₂区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径2.14m, 短径1.10mの長楕円形で, 深さ85cmである。

長径方向 N-67°-W。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦で軟らかい。

覆土 5層から成る。中・下層は褐色土で、上層には黒褐色土が堆積している。中～上層はロームブロックと炭化粒子を含んでいる。レンズ状堆積をなしており自然堆積であろう。

なお、土層は

第1層	黒褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック中量，炭化粒子多量，焼土粒子微量	第3層	褐色	ローム粒子中量，ロームブロック少量，炭化粒子微量，焼土粒子微量
第2層	黒褐色	ローム粒子少量，ローム小・中ブロック少量，炭化粒子少量	第4層	明褐色	ローム粒子多量，ロームブロック微量，炭化粒子微量
			第5層	明褐色	ローム粒子多量，ロームブロック微量

(第138図)

である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期は不明であるが、形態から陥し穴と思われる。

第69号土坑 (第139図)

位置 B地区東部，H12b₁区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径2.17m，短径0.90mの長楕円形で、深さ175cmである。

長径方向 N-8°-W。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦で軟らかい。

覆土 6層から成る。下層は褐色土で、中・上層は黒褐色土が堆積している。中～上層はロームブロックを含んでいる。各層とも粘性・縮まりともにある。レンズ状堆積をなしており自然堆積と思われる。

なお、土層は

第1層	暗褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック少量	第4層	暗褐色	ローム粒子少量，ロームブロック中量
第2層	暗褐色	ローム粒子少量，ロームブロック少量	第5層	褐色	ローム粒子少量，ロームブロック少量
第3層	暗褐色	ローム粒子少量，ロームブロック少量	第6層	褐色	ローム粒子多量

(第139図)

である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期は不明であるが、形態から陥し穴と思われる。

第70号土坑 (第138図)

位置 B地区北部，G12e₂区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は第3・5号溝を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径3.53m，短径0.65mの長方形で、深さ68cmである。

長径方向 N-17°-E。

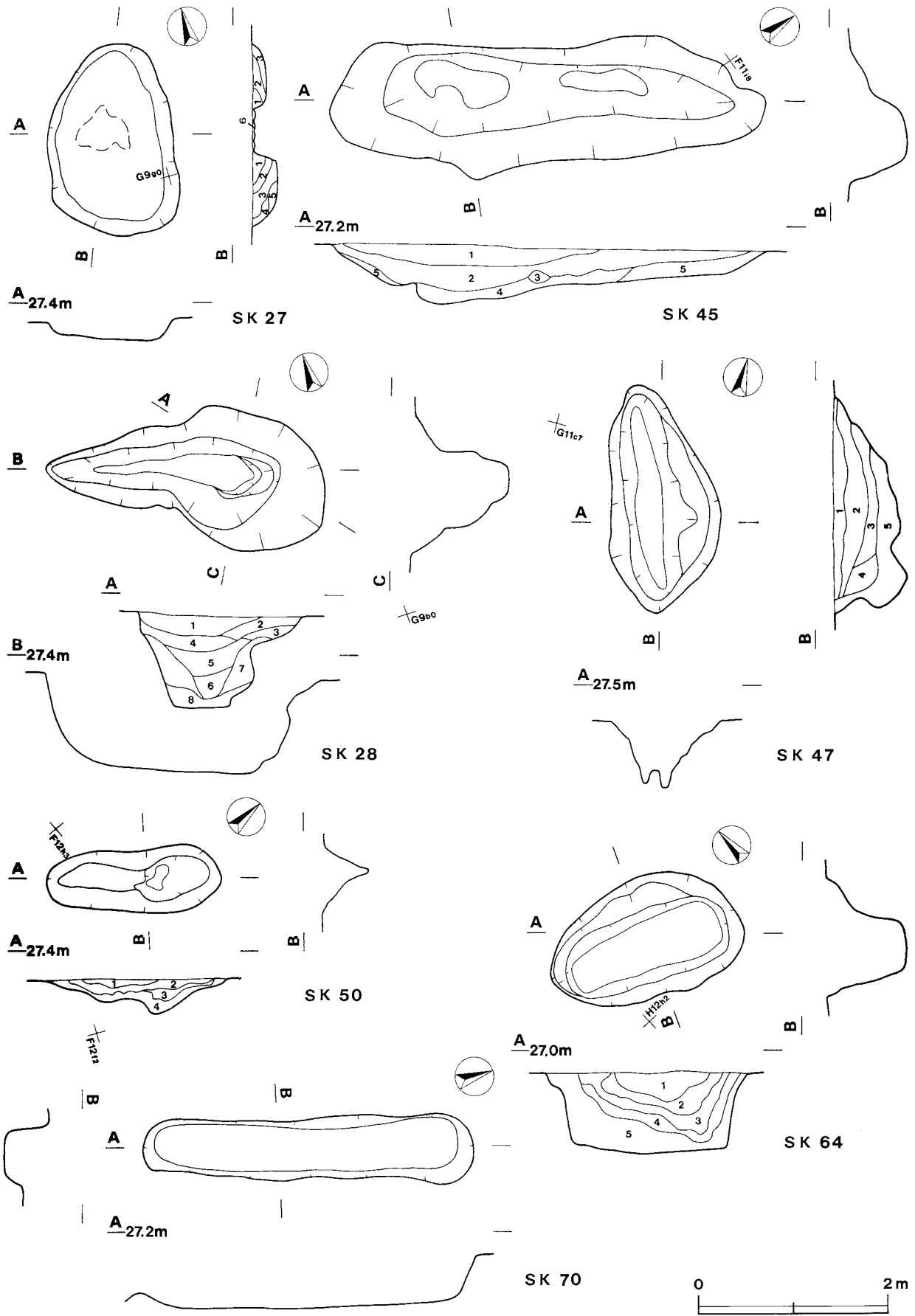
壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦で軟らかい。

覆土 1層である。褐色土中にローム小・中ブロック多量に含み、縮まりは弱い。人為堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期・性格は不明である。



第138图 第27·28·45·47·50·64·70号土坑实测图

第88号土坑 (第139図)

位置 B地区北部, F12e₄区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北東壁が第8号溝を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径(1.90)m, 短径1.15mの隅丸長方形で, 深さ26cmである。

長径方向 N-87°-W。

壁面 緩斜して立ち上がる。

底面 皿状で軟らかい。

覆土 3層から成る。各層ともローム小ブロックを含み, 粘性・締まりともにある。

なお, 土層は

第1層	暗褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 炭化粒子微量	第3層	明褐色	ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, ローム中 ブロック微量
第2層	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量			

(第139図)

である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期・性格は不明であるが, 形態から墓壇と思われる。

第92号土坑 (第139図)

位置 B地区北部, E12c₂区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径1.24m, 短径(0.92)mの隅丸長方形で, 深さ30cmである。

長径方向 N-4°-W。

壁面 緩斜して立ち上がる。

底面 平坦で軟らかい。

覆土 3層から成る。各層とも炭化物を含み, 締まりが弱い。

なお, 土層は

第1層	暗褐色	ローム粒子少量, 炭化物少量	第3層	暗褐色	ローム粒子中量, 炭化物少量, 焼土ブロック・粒子 少量
第2層	黒褐色	ローム粒子少量, 炭化物微量			

(第139図)

である。

遺物 出土していない。

所見 本跡の時期・性格は不明であるが, 形態から墓壇と思われる。

第99号土坑 (第139図)

位置 B地区北部, H12a₃区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の上部は第72号土坑により掘り込まれている。

規模と平面形 長径2.60m, 短径0.29mの溝状で, 深さ94cmである。

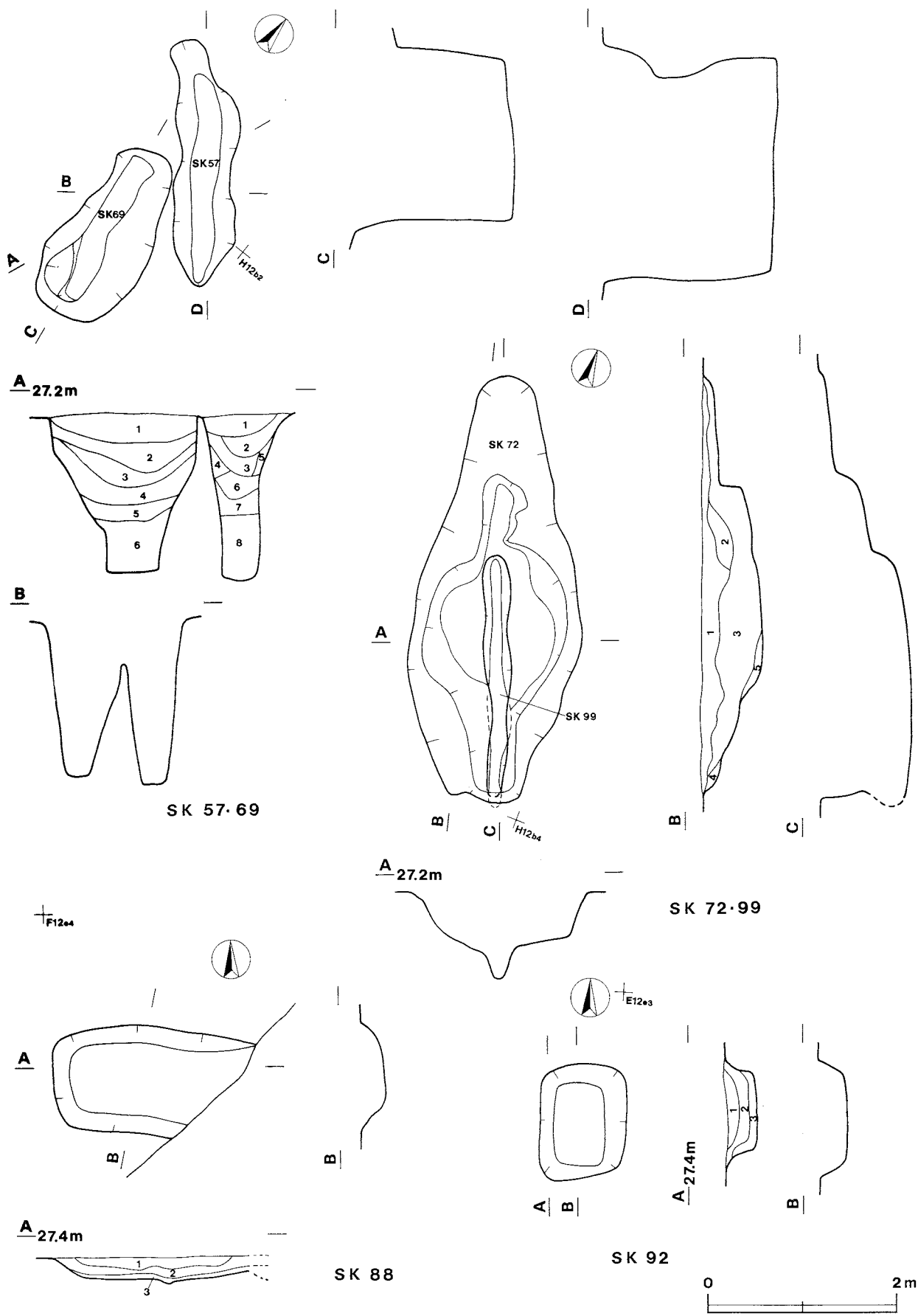
長径方向 N-21°-W。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦で軟らかい。

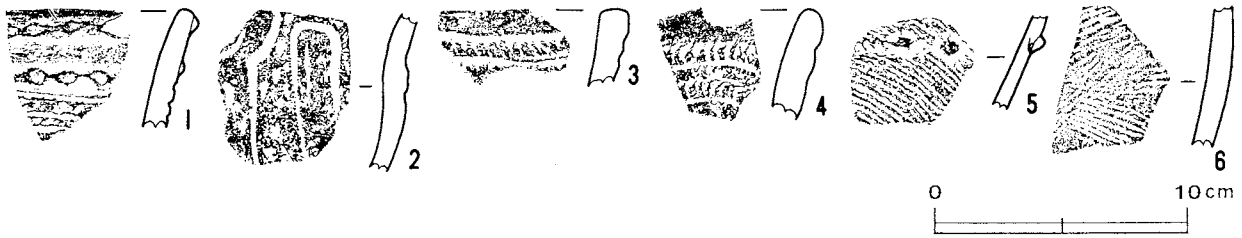
覆土 重複による攪乱のため確認不可能。

遺物 出土していない。



第139图 第57·69·72·88·92·99号土坑实测图

所見 本跡の時期は不明であるが、形態から陥し穴と考えられる。



第140図 第9・10・28・71号土坑出土遺物拓影図

第140図1～6は、第9・10・28・71号土坑から出土した縄文式・弥生式土器片の拓影図である。1～4は縄文式土器、5・6は弥生式土器である。2は称名寺式、1・3・4は浮島式と思われる。5の口縁部片は附加条1種（附加2条）の縄文が施され、下端は縄文原体により押圧され、さらに瘤が貼られている。6は胴部片で附加条1種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとる。

表3 原出口遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	G8e ₁	N-45°-E	円形	1.37 × 1.27	26	外傾	平坦	自然	焼土塊	
2	G8b ₀	N-83°-W	楕円形	2.70 × 1.64	70	外傾	皿状	自然		
3	F8h ₉	N-70°-W	楕円形	1.38 × 1.20	62	外傾	皿状	自然	弥生式土器片	
4	F9h ₂	N-18°-W	楕円形	1.47 × 1.02	18	緩斜	凹凸	自然		
6	F8b ₀	N-38°-E	不整円形	2.03 × 1.82	58	緩斜	皿状	自然	弥生式土器片、アブライト礫	
7	F9c ₂	N-33°-E	不整楕円形	1.65 × 1.56	50	外傾	凹凸	自然		
8	F9c ₁	N-25°-E	長楕円形	3.21 × 1.65	75	外傾	皿状	人為		陥し穴
9	F9d ₂	N-58°-E	不整楕円形	1.90 × 0.86	32	緩斜	凹凸	自然	弥生式土器片	
10	F9f ₃	N-10°-W	楕円形	1.81 × 1.25	15	外傾	平坦	自然	弥生式土器片、アブライト礫	
11	G9a ₄	N-87°-W	楕円形	2.20 × 1.32	22	外傾	皿状	自然		
12	G8b ₁	N-55°-W	楕円形	8.50 × 15.50	25	緩斜	皿状	自然		
13	G9c ₇	N-29°-W	不整長楕円形	3.83 × 1.75	62	外傾	皿状	自然	弥生式土器片、土師器片	陥し穴
14	G9g ₃	N-23°-W	不整楕円形	2.00 × 1.28	30	緩斜	凹凸	自然		
15	G9c ₃	N-31°-W	不整長楕円形	2.87 × 1.45	78	外傾	皿状	自然	弥生式土器片	陥し穴
16	H9b ₃	N-32°-W	楕円形	2.60 × 1.52	20	緩斜	皿状	自然		
17	H9c ₃	N-35°-W	楕円形	2.34 × 1.55	20	外傾	皿状	自然	弥生式土器片	
18	H9e ₃	N-77°-W	長楕円形	2.90 × 1.65	52	外傾	皿状	自然	弥生式土器片	
19	H10b ₆	N-32°-W	楕円形	3.05 × 2.53	224	外傾	平坦	人為		井戸
20	H10c ₂	N-35°-W	不整円形	2.08 × 1.93	50	外傾	凹凸	自然		
21	H10g ₃	N-30°-W	不整円形	1.75 × 1.47	28	緩斜	凹凸	自然		
22	H9c ₃	N-19°-E	不整形	3.13 × 1.70	64	緩斜	凹凸	自然		
23	H10a ₃	N-37°-E	不整楕円形	3.00 × 1.92	90	外傾	凹凸	自然	弥生式土器片	
24	H10a ₃	N-45°-W	不整円形	2.40 × 2.05	32	緩斜	皿状	自然	弥生式土器片	
25	H10a ₃	N-36°-E	不整形	1.43 × 1.07	40	緩斜	凹凸	自然	弥生式土器片、土師器片	
27	G9g ₀	N-16°-E	楕円形	2.10 × 1.35	22	外傾	皿状	自然		ファイヤーピットか
28	G9a ₃	N-65°-W	不定形	3.00 × 1.35	103	外傾	皿状	自然	縄文式土器片、弥生式土器片	陥し穴
29	F9i ₀	N-57°-W	楕円形	2.68 × 1.95	40	緩斜	凹凸	自然		

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
30	F10i ₂	N-19°-W	円 形	2.40 × 2.15	23	緩斜	凹凸	自然	弥生式土器片	
31	F10i ₄	N-60°-W	長 楕 円 形	3.25 × 2.00	17	緩斜	凹凸	自然		
32	F10h ₅	N-76°-W	楕 円 形	2.30 × 1.47	16	緩斜	凹凸	自然		
33	F10h ₅	N-58°-W	不整楕円形	1.60 × 1.30	14	緩斜	凹凸	自然		
34	F10g ₅	N-60°-E	円 形	1.36 × 1.15	25	緩斜	凹凸	自然		
35	F10g ₇	N-90°-W	楕 円 形	2.15 × 1.46	26	緩斜	平坦	自然		
36	F11h ₁	N-90°-W	楕 円 形	2.36 × 1.55	46	緩斜	凹凸	自然		第37号土坑と重複
37	F11h ₁	N-85°-E	楕 円 形	2.83 × 1.75	65	垂直	凹凸	自然		第36号土坑と重複
38	F11h ₁	N-26°-E	楕 円 形	2.07 × 1.50	32	緩斜	凹凸	自然		
39	G10a ₀	N-58°-W	楕 円 形	2.43 × 1.90	50	緩斜	凹凸	自然		
40	G10a ₅	N-27°-E	長 楕 円 形	3.25 × 2.05	48	緩斜	凹凸	自然		
41	F10j ₈	N-42°-E	不整楕円形	2.52 × 1.36	41	外傾	凹凸	自然		
42	F10j ₆	N-10°-W	楕 円 形	2.00 × 1.50	26	緩斜	凹凸	自然		
43	G10c ₂	N-59°-W	楕 円 形	2.60 × 1.80	30	緩斜	凹凸	自然		
44	F10j ₉	N-25°-E	円 形	1.22 × 1.15	98	緩斜	凹凸	自然		
45	F11j ₇	N-35°-E	長 楕 円 形	4.60 × 1.20	90	外傾	皿状	自然		陥し穴か
46	G11d ₆	N-37°-E	楕 円 形	1.40 × 0.90	22	緩斜	凹凸	自然		
47	G11c ₇	N-21°-W	長 楕 円 形	2.45 × 1.17	72	垂直	凹凸	自然		陥し穴
48	G11b ₈	N-34°-E	楕 円 形	1.60 × 1.30	16	緩斜	凹凸	自然		
49	F11j ₀	N-48°-W	不整楕円形	1.26 × 0.82	72	垂直	凹凸	自然		
50	F12g ₃	N-40°-E	長 楕 円 形	1.88 × 0.71	40	外傾	凹凸	人為		陥し穴
51	H11e ₁	N-19°-E	楕 円 形	1.93 × 1.60	26	緩斜	平坦	自然		
52	H11d ₂	N-27°-E	不 整 形	3.41 × 1.64	77	緩斜	凹凸	自然		
53	I11a ₄	N-53°-W	不 整 形	2.36 × 1.27	79	垂直	凹凸	自然		
54	I11b ₅	N-32°-E	不 整 円 形	1.15 × 1.10	28	緩斜	凹凸	自然		
55	I11c ₅	N-63°-W	楕 円 形	2.13 × 1.37	48	緩斜	凹凸	自然		
56	I11g ₆	N-83°-W	不整楕円形	3.92 × 2.18	82	緩斜	平坦	自然		
57	H12a ₁	N-39°-W	不整長楕円形	2.75 × 0.61	184	垂直	平坦	自然		
58	H11j ₇	N-40°-W	不整楕円形	2.73 × 1.35	49	緩斜	凹凸	自然		
59	H11i ₇	N-14°-E	不整楕円形	1.49 × 1.25	19	緩斜	平坦	自然		
60	H11j ₉	N-15°-E	楕 円 形	1.72 × 1.18	36	緩斜	凹凸	自然		
61	I11a ₀	N-29°-E	不整楕円形	3.20 × 1.90	89	緩斜	凹凸	自然		
62	H12j ₁	N-15°-E	不整楕円形	3.60 × 1.75	27	緩斜	凹凸	自然		
63	H11a ₀	N-43°-W	楕 円 形	1.60 × 1.00	14	緩斜	凹凸	自然		
64	H12h ₂	N-67°-W	長 楕 円 形	2.14 × 1.10	85	垂直	平坦	自然		陥し穴
65	H12h ₂	N-44°-W	楕 円 形	1.82 × 1.38	28	緩斜	平坦	人為		
66	G11j ₉	N-05°-E	不 整 形	3.42 × 2.57	84	外傾	凹凸	人為		
67	G11j ₉	N-22°-W	不整楕円形	2.70 × 1.72	64	外傾	凹凸	人為		
68	H12j ₀	N-18°-W	不整楕円形	2.00 × 1.10	34	緩斜	凹凸	自然		
69	H12b ₁	N-08°-W	長 楕 円 形	2.17 × 0.90	175	垂直	平坦	自然		陥し穴
70	G12e ₂	N-17°-E	長 方 形	3.53 × 0.65	68	垂直	平坦	人為		第3・5溝と重複
71	H12e ₃	N-61°-E	不整楕円形	2.65 × 1.50	92	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片, 弥生式土器片	
72	H12a ₃	N-18°-W	不整長楕円形	4.58 × 1.80	50	外傾	凹凸	自然		陥し穴 第99号土坑と重複
73	G12h ₃	N-31°-W	楕 円 形	2.21 × 1.28	60	外傾	凹凸	自然		
74	F12j ₈	N-83°-E	楕 円 形	2.11 × 1.45	19	緩斜	凹凸	自然		
75	G12a ₈	N-79°-E	楕 円 形	2.94 × 1.70	16	緩斜	凹凸	自然		

土坑 番号	位 置	長径方向 (長軸方向)	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
76	F12i ₆	N-71°-E	長楕円形	3.11 × 1.40	22	緩斜	皿状	自然		
77	F12h ₇	N-01°-E	楕円形	2.80 × 2.29	30	緩斜	凹凸	自然		
78	F12h ₆	N-34°-W	楕円形	3.47 × 2.40	26	緩斜	凹凸	自然		
79	F12h ₄	N-42°-E	楕円形	3.00 × 2.56	102	外傾	凹凸	自然		
80	F12i ₄	N-68°-E	楕円形	2.78 × 2.48	20	外傾	凹凸	自然		
81	F12j ₂	N-36°-E	楕円形	1.89 × 1.54	20	緩斜	凹凸	自然		
82	F12e ₇	N-08°-W	楕円形	2.73 × 1.49	20	緩斜	凹凸	自然		
83	F12d ₈	N-47°-W	不整楕円形	2.28 × 1.98	20	緩斜	凹凸	自然		
84	F12d ₈	N-43°-W	不整楕円形	2.40 × 1.55	36	緩斜	凹凸	自然		
85	F12c ₉	N-13°-E	不整楕円形	4.38 × 2.91	26	外傾	凹凸	自然		
86	F12e ₀	N-72°-W	不整楕円形	3.39 × 2.18	26	緩斜	凹凸	自然		
87	F12e ₅	N-90°-W	不整楕円形	2.72 × 1.51	60	外傾	凹凸	自然		
88	F12e ₄	N-87°-W	隅丸長方形	(1.90) × 1.15	26	緩斜	皿状	人為		墓墳 第8号溝と重複
89	F12a ₅	N-29°-W	楕円形	3.64 × 2.89	18	緩斜	凹凸	自然		
90	E12e ₀	N-41°-E	不整楕円形	1.97 × 1.67	24	垂直	凹凸	自然		
91	E13c ₁	N-67°-E	不整楕円形	1.84 × 1.07	22	外傾	平坦	自然		
92	E12e ₂	N-04°-W	隅丸長方形	1.24 × (0.92)	30	緩斜	平坦	人為		墓墳 西側半分エリア外
93	G10b ₂	N-26°-W	楕円形	1.61 × 1.48	32	緩斜	凹凸	自然	弥生式土器片	
94	F10f ₃	N-70°-W	隅丸長方形	2.65 × 2.55	42	緩斜	凹凸	自然		第38号住居跡と重複
95	H12f ₄	N-74°-E	楕円形	2.48 × 1.25	46	外傾	皿状	自然		
96	F12j ₇	N-00°	長楕円形	2.36 × 1.25	19	緩斜	凹凸	自然		
97	G11f ₆	N-59°-W	楕円形	2.20 × 1.75	20	緩斜	凹凸	自然		
98	G11g ₆	N-39°-W	楕円形	2.14 × 1.55	30	緩斜	凹凸	自然		
99	H12a ₃	N-21°-W	長楕円形	2.60 × 0.29	94	垂直	平坦	自然		陥し穴 第72号土坑と重複
100	I11f ₅	N-00°	不整円形	3.87 × 3.53	20	外傾	凹凸	自然		

6 溝

当遺跡からは8条の溝が確認されている。A地区で確認された4条の溝はいずれもB地区に達しており、各溝とも60m以上ある。100mを越える溝は3条(第1・3・5号溝)あり、更に第1・8号溝は隣接している西原遺跡にまで延び、全長300mを越えるものもある。時期決定の好資料に恵まれず、構築時期や性格については不明な点が多いが、溝の形状や覆土から判断して比較的新しい溝が多いと思われる。

以下、確認された溝の特徴や主な遺物について記載する。

第1号溝(第147図)

位置 H9j₈区～E13a₂区にかけて確認されている。南西側はエリア外へ延び、北側はさらに西原遺跡に続いている。

重複関係 本跡は第7号方形周溝墓、第5・48・57号住居跡を掘り込み、第5・6・7号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長さ220mで、上幅1.2～1.8m、下幅0.3m～0.7m、深さ34～72cmである。断面形は深いところでは逆台形状で、浅いところでは皿状である。本跡はさらに北方向に延びて西原遺跡の第2号溝となり、総延長は306mとなる。

方向 H9j₈区から北東(N-47°-E)へ直線的に延び、F12b₉区から北方向へ曲がる。第2・3・8号溝と平行関係を保ちながら延びている。

覆土 3～4層である。壁際と床面付近は褐色土が薄く堆積し、中・上層には暗褐色土が厚めに堆積している。各層とも締まりがあり、レンズ状堆積となっている。

遺物 縄文式土器片、弥生式土器片、土師器片、須恵器片、埴輪片が多量に出土しているが、覆土中・上層からの出土で流れ込みと思われる。埴輪片は第1号古墳のものが混入している。第141図1・2は弥生式土器壺片で、3～6は土師器甕片、7は須恵器壺片、8は須恵器坏片、17は敲石でいずれも覆土中からである。

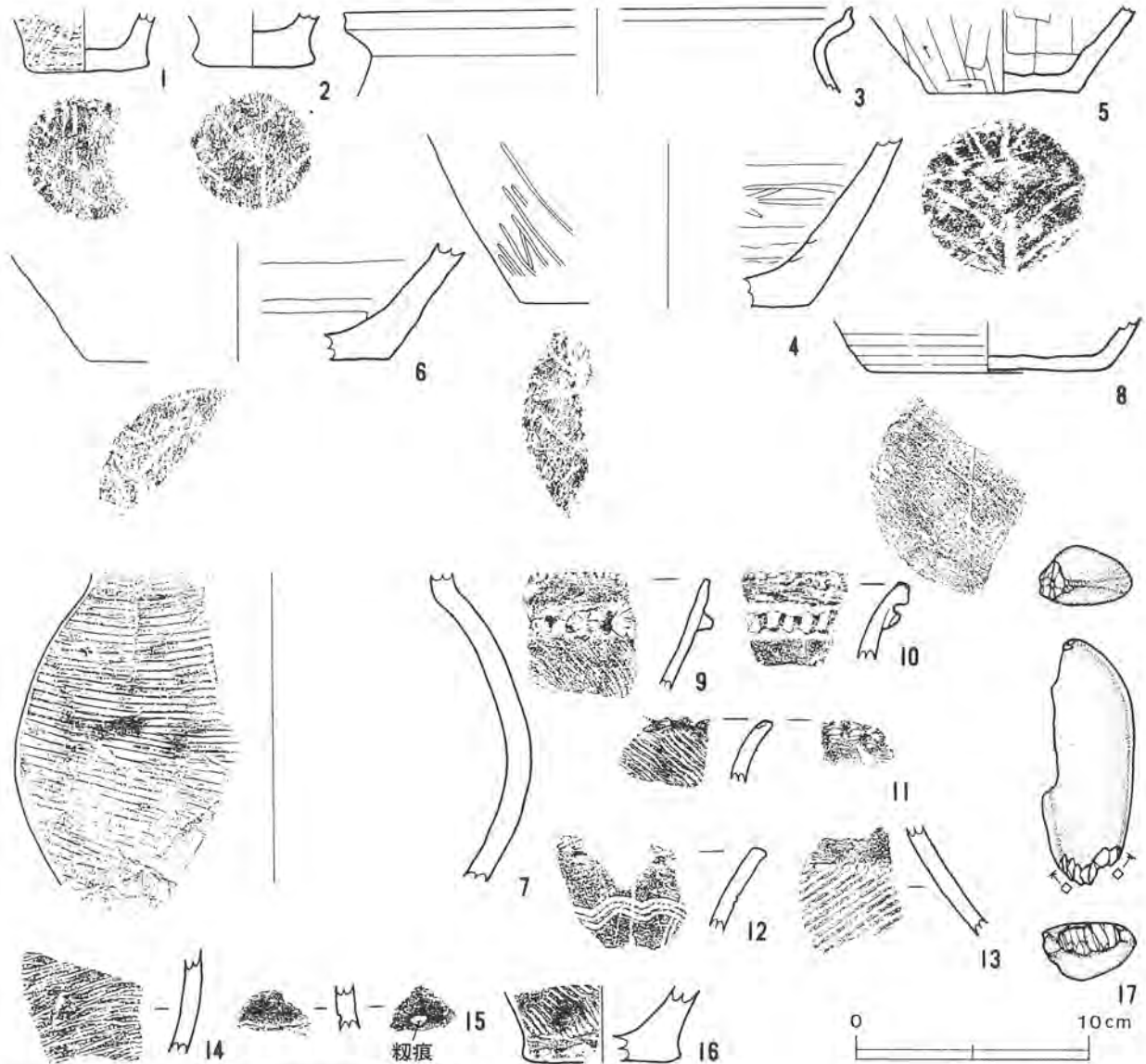
所見 本跡は遺構に伴う遺物がなく、時期・性格等は不明であるが他の遺構の重複関係から古墳時代中期以降の時期と思われる。第2・3・8号溝と同一の性格を持たせていたと考えられる。

第1号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第141図 1	壺 弥生式土器	B (2.5)	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面にわずかに木葉痕が認められる。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 におい橙色	P239 5% 覆土中
		C 5.3			
2	壺 弥生式土器	B (2.3)	底部から胴部下位にかけての破片。平底でやや張り出し、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 明黄褐色	P240 5% 覆土中
		C 5.2			

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第141図 3	甕 土師器	A [21.8]	口縁部片。口縁部は頸部から強く外反し・口唇部は上方につまみ上げられている。	口縁部は内・外面横位のナデ。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 におい橙色	P242 5% 外面スス付着 覆土中
		B (3.7)				
4	甕 土師器	B (7.3)	底部から体部下位にかけての破片。平底で、体部は外傾して立ち上がる。	体部は外面が縦位のヘラナデ、内面は横位のヘラナデ。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 におい橙色	P241 10% 覆土中
		C [12.2]				
5	甕 土師器	B (3.7)	底部から体部下位にかけての破片。平底で、体部は外傾して立ち上がる。	体部は内・外面とも縦位のヘラナデ。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 におい橙色	P243 10% 覆土中
		C 6.4				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
6	甕土師器	B (5.0) C [12.8]	底部から体部下位にかけての破片。平底で、体部は外傾して立ち上がる。	体部は外面が縦位のヘラナデ、内面は横位のヘラナデ。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 におい橙色	P244 10% 外面スス付着 覆土中
7	壺須恵器	B (13.4)	体部片。体部は球形状である。	体部外面は平行叩き目痕、内面は当て具痕有り。	砂粒、スコリア 普通 灰色	P245 5% 覆土中
8	坏須恵器	B (2.3) C 10.2	底部から体部下位にかけての破片。平底で、体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底面はヘラ切りされ、ヘラ記号が施されている。	砂粒、石英、長石 普通 灰色	P246 10% 覆土中



第141図 第1号溝出土遺物実測・拓影図

第141図9～16は、第1号溝から出土した弥生式土器片の拓影図である。9～12は口縁部片である。9は口縁部下端に瘤が貼られ、口唇部には縄文原体による押圧が施されている。10は口縁部下端に隆帯を貼り、棒状工具によるキザミ目を施している。11は胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施され、口縁部内面は縄文原体により押圧されている。12は3本櫛歯による横走波状文と、その下端には縦位の櫛描文が施されている。13は頸部から胴部にかけての破片で、頸部は無文帯とし胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。14は胴部片で、附加条1種（附加1条）の縄文が施されている。15は頸部片で、内面には靱痕がある。16は底部片で、胴部に附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第141図17	敲石	10.6	4.0	2.5	139.8	粘板岩	覆土中	Q56

第2号溝 (第147図)

位置 H9j₈区～F5g₄区にかけて確認されている。南西方向はエリア外に延びている。

重複関係 本跡は、第5号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長さ約89.5mで、上幅80～110cm、下幅36～71cm、深さ14～25cmである。断面形は皿状である。北東端部が止まっているが、深さが徐々に浅くなってきていることから判断して、さらに北東方向に延びていたのが耕作土中のため削平されてしまった可能性がある。

方向 H9j₈区から北東 (N-47°-E) へ直線的に延び、第1・3号溝と並列している。

覆土 2～4層である。底面側は褐色土が厚く堆積し、上層には暗褐色土が堆積している。

遺物 覆土中層から混入と思われる縄文式土器片、弥生式土器片、埴輪片が少量出土している。

所見 本跡は、古墳時代中期以降の溝と考えられるが、遺構に伴う遺物がなく時期・性格等は不明な点が多い。第1・3号溝と並列して掘られており、対をなすものか造り替えと思われる。

第3号溝 (第147図)

位置 H9i₇区～F5d₄区にかけて確認されている。南西方向はエリア外に延び、北東端部は北西方向のエリア外に延びる。

重複関係 本跡は、第5・53号住居跡、第19号土坑を掘り込み、第70号土坑、第7号溝に掘り込まれている。また土層から判断して H9i₇区～F12g₂区間は第8号溝が掘り込み、本跡の覆土内に包含されていると考えられる。

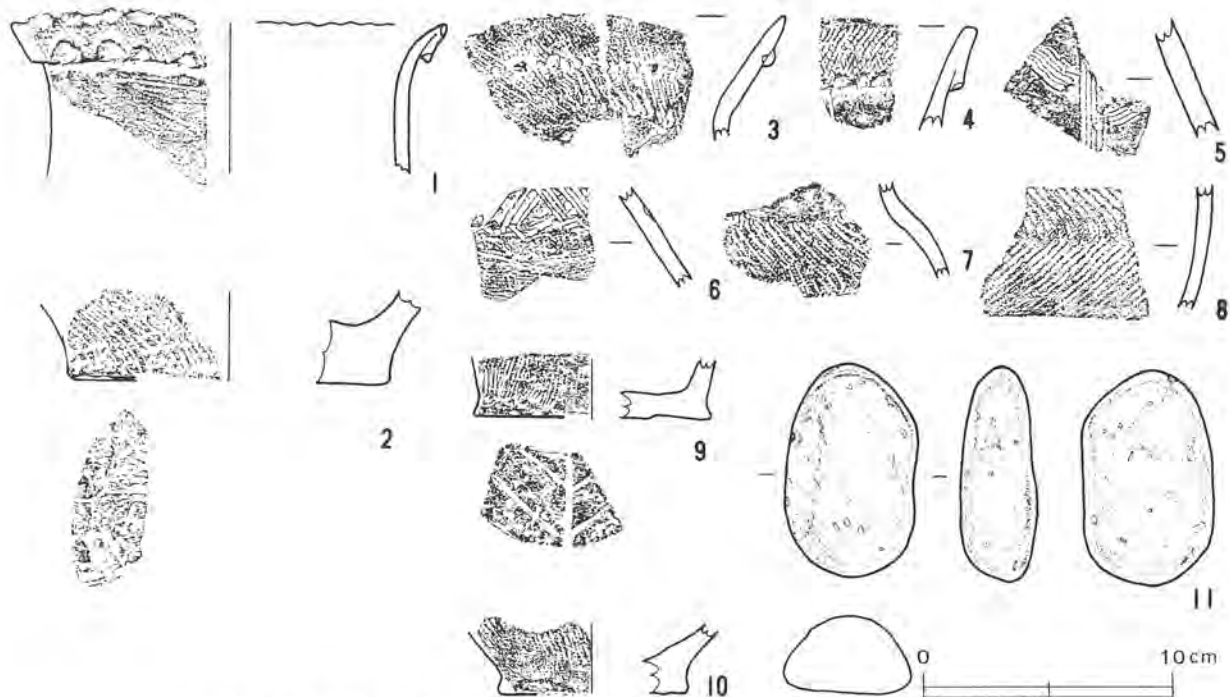
規模と形状 長さ約171mで、上幅2.2～3.2m、下幅20～50cm、深さ62～98cmで、南側壁面に狭い平坦部が2段あり、それぞれの壁は外傾して立ち上がる。最深部底面は平坦で軟らかく、断面形は逆台形状である。

方向 H9i₇区から北東 (N-47°-E) へ直線的に延び、第1・2号溝と並列し、F12g₂区から北西方向となる。

覆土 9～14層である。底面付近には褐色土が堆積している。ロームブロックを含む土層が多く、人為堆積の可能性も考えられるが、レンズ状堆積を成している。場所によって土層セクションから2～3条の溝の重複が窺える。

遺物 覆土中層から、流れ込みと思われる縄文式土器片、弥生式土器片、土師器片、陶器片が出土している。第142図1は弥生式土器壺の口縁部、2は壺底部、11は磨石で、いずれも覆土中からである。

所見 本跡は、2～3条の溝の重複があると考えられ、その内の1条は第8号溝の覆土と推測される。南側壁面の段は複数の溝が時期と位置をずらして構築されたことにより削られたためと思われる。第1・2号溝と並列しており、対をなすものと考えられるので、時期も第5号溝と同じ古墳時代中期以降と考えられるが、遺構に伴う遺物がなく時期・性格等は不明である。



第142図 第3号溝出土遺物実測・拓影図

第3号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第142図 1	広口壺 弥生式土器	A [17.3]	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部にかけて外反する。複合口縁で、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、下端と口唇部には棒状工具により押圧されている。頸部外面には、横位のヘラナデが施されている。	砂粒、石英、長石、雲母 普通 にぶい黄褐色	P248 5% 外面スス付着 覆土中
		B (6.0)			
2	壺 弥生式土器	B (3.7)	底部片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には絡条体による捺糸文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 にぶい黄褐色	P250 5% 覆土中
		C [12.8]			

第142図3～10は、第3号溝から出土した弥生式土器片の拓影図である。3・4は口縁部片である。3は口縁部下端と口唇部には縄文原体による押圧、胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。4は複合口縁で、口縁部と口唇部には附加条1種(附加条1)の縄文が施され、口縁部下端は棒状工具による押圧が施されている。頸部にはわずかに縦位の櫛描文が認められる。5は頸部片で、4本櫛歯の縦線文と6本櫛歯の斜位の櫛描文があり、わずかに赤彩が認められる。6・7は頸部から胴部にかけての破片である。6は頸部にヘラ状工具による山形文、胴部には絡条体による捺糸文が施されている。7と8の胴部片には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。9・10は底部片で捺糸文が施され、9の底面には木葉痕がある。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第142図11	磨石	8.6	5.3	3.2	193.5	グリーンタフ	覆土中	Q57 PL61

第4号溝(第147図)

位置 西端部、G9g₁区～F9d₁区にかけて確認されている。端は両側ともエリア外に延びている。

規模と形状 長さ約80mで、上幅3.2～4.4m、下幅1.1～1.7m、深さ1.04～1.3mである。断面形は逆台形状

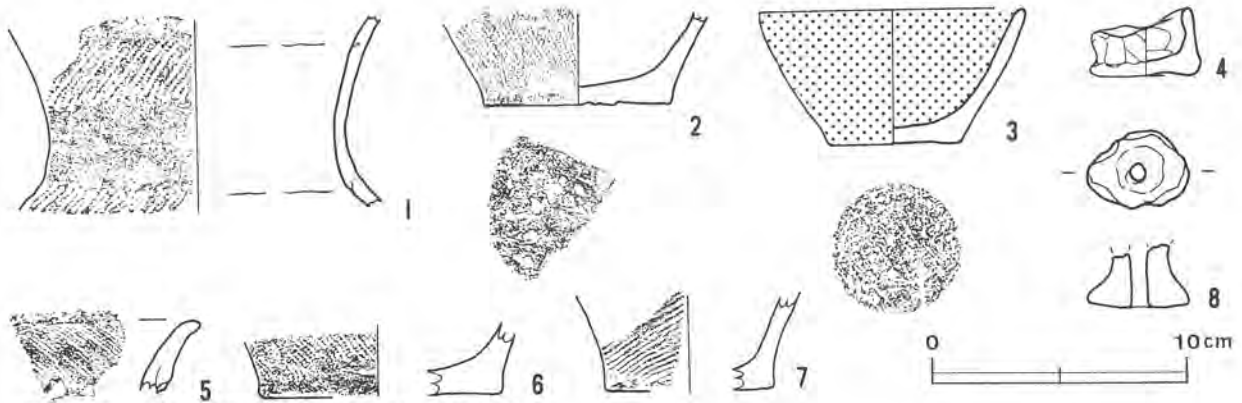
である。底面は軟らかい。

方向 G9g₁区から北東(N-35°-E)へ直線的に延びている。

覆土 壁面から底面にかけては褐色土で、中・上層には暗褐色土が厚く堆積し、各土層中にはロームブロックが混入している。場所によっては覆土第2・4層が大変硬化している。覆土東壁側の土層には、別の溝が重複していたと考えられる本跡とは独立したレンズ状堆積が確認できた。

遺物 混入と思われる弥生式土器片、須恵器片、埴輪片が約500点ほど出土している。第143図1・2は弥生式土器壺、4は手捏土器でいずれも覆土中から出土している。3は土師器小形鉢で内・外面赤彩されており、覆土中層で壁近くから破片で出土している。8の紡錘車は覆土下層から出土している。

所見 土層中の硬化面は、道として使用されていた2時期があったと推測されるが、本来の性格は不明である。なお、もう1つの独立した溝が覆土中に構築されていたと考えられるが、その覆土上層にも硬化面が1層確認されている。本跡の時期・性格等は不明である。



第143図 第4号溝出土遺物実測・拓影図

第4号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第143図 1	壺 弥生式土器	B (7.7)	頸部片。頸部は外反する。頸部下半を無文帯とし、それ以外は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。内面には輪積み痕がある。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 黄橙色	P254 5% 二次焼成 覆土中
		C 7.4	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には杵状の窪みがあるが、杵痕とは断定できない。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 橙色	P255 5% 二次焼成 内・外面炭化物付着 覆土中

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第143図 3	小形鉢 土師器	A 10.5	底部から体部にかけての破片。	体部内、外面は横位のナデが施されている。体部は内、外面ともに赤彩されている。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 明赤褐色	P260 50% 覆土中層
		B 5.3	平底で、体部はやや内彎気味に立ち上がる。			
		C 5.3				
4	手捏土器	A 3.7	底部から体部にかけての破片。	体部外面は縦位の指ナデ、内面は横位の指ナデが施されている。	砂粒、石英、長石、 雲母、スコリア 普通 橙色	P261 70% 覆土中
		B 2.7	平底で、体部はほぼ直立して立ち上がる。			
		C 4.2				

第143図5～7は、第4号溝から出土した弥生式土器片の拓影図である。5は口縁部片で、附加条1種(附加1条)の縄文が施され、下端は棒状工具により押圧されている。6・7は底部片で、どちらも附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値 (cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第143図8	紡錘車	(3.1)	(4.0)	(2.5)	8.0	(21.5)	30	覆土下層	DP57 PL56

第5号溝 (第147図)

位置 H11b₃区～E12d₃区にかけて確認されている。北側はエリア外へ延びている。

重複関係 本跡は第1・3号溝, 第70号土坑, 第58号住居跡を掘り込んでいる。

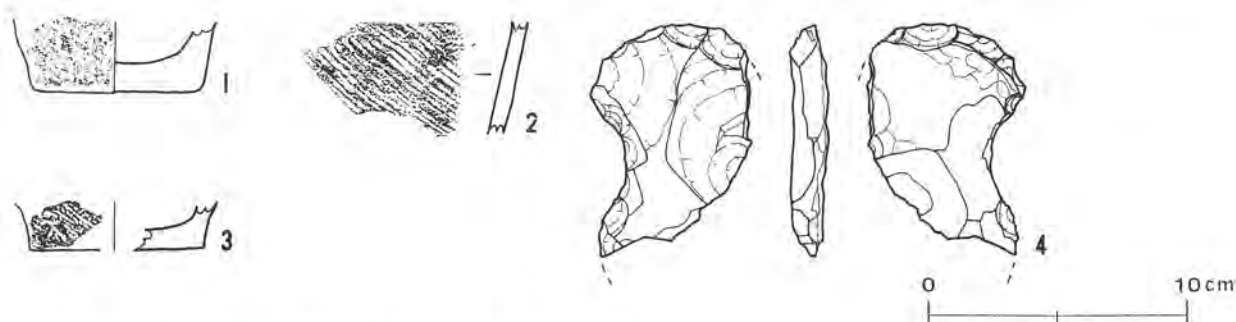
規模と形状 長さ123mで, 上幅0.8～1.7m, 下幅0.2m～0.4m, 深さ84～116cmである。断面形は「U」字状である。一度に底まで掘り下げたのではなく, 2段階に分けて掘り下げているため場所によっては壁面に段ができています。また, 一方向から続けて掘って行ったのではなく, ずれている場所があることから, 少なくとも3か所以上の地点から掘り込んで行き, 一つにつないだものと思われる。

方向 H11b₃区から北東 (N-25°-E) へ直線的に延び, F12d₃区で北方向となる。

覆土 床面付近は褐色土で, 中・上層には暗・黒褐色土が厚く堆積している。各層中にはロームブロックが混入している。

遺物 覆土中から弥生式土器片, 土師器片, 陶器片が少量出土している。第144図1は弥生式土器壺の底部, 4の打製石斧は覆土中から出土している。

所見 本跡は, 覆土中から鉄筋入りのコンクリートブロックや針金等が出土しており, 現代の溝と思われる。



第144図 第5号溝出土遺物実測・拓影図

第5号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第144図 1	壺 弥生式土器	B (2.9) C 6.5	底部から胴部下位にかけての破片。平底で, 胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種 (附加2条) の縄文が施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 明黄褐色	P262 5% 二次焼成 覆土中

第144図2・3は, 第5号溝から出土した土器片の拓影図である。2は須恵器片である。3は弥生式土器の底部片で, 附加条1種 (附加2条) の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第144図4	打製石斧	9.2	6.3	1.5	85.9	凝灰岩	覆土中	Q58 断欠 PL61

第6号溝 (第147図)

位置 F12f₃区～F13h₃区にかけて確認されている。東側はエリア外に延びている。

重複関係 本跡は、第1号溝を掘り込んでいる。

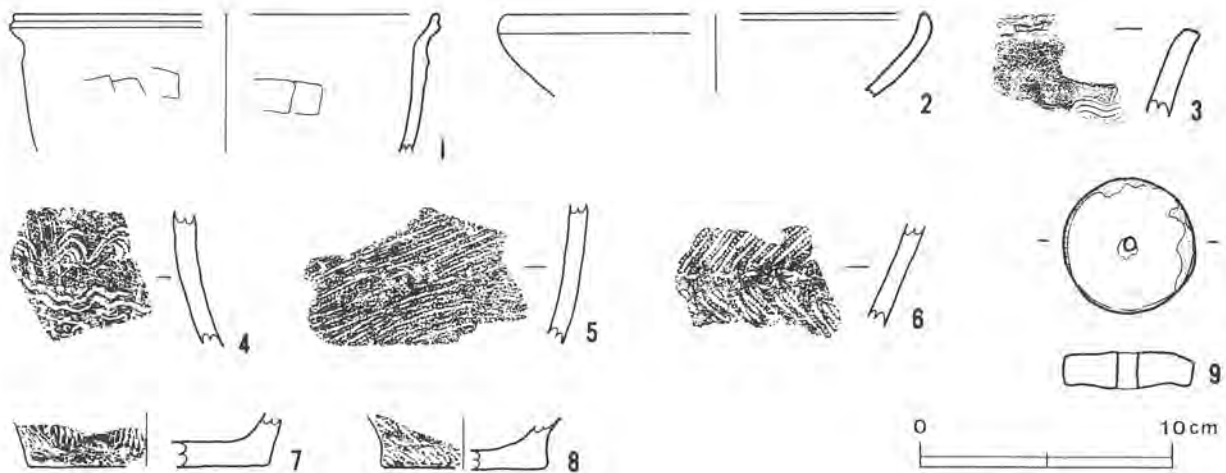
規模と形状 長さ約77mで、上幅3.6～4.8m、下幅1.0～1.4m、深さ82～92cmである。断面形は逆台形状である。

方向 F12f₃区から東(N-95°-E)へ直線的に延びている。

覆土 3・4層から成る。壁から底面には褐色土が、中・上層には暗褐色土が厚く堆積している。各層中にはロームブロックが混入しており、壁の崩れによるものと思われる。レンズ状堆積となっている。

遺物 覆土中層から混入と思われる弥生式土器片、土師器片が出土している。第145図1の土師器甕、2の坏、9の紡錘車は覆土中から出土している。

所見 本跡の遺構に伴う遺物がなく、時期・性格等は不明である。



第145図 第6号溝出土遺物実測・拓影図

第6号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第145図 1	土師器 甕	A [16.6]	体部から口縁部にかけての破片。体部は、内彎する。口縁部は外反し、口唇部はつまみ上げられている。	体部は内・外面とも、横位のナデが施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 明赤褐色	P263 5% 二次焼成 内面炭化物付着 覆土中
		B (5.6)				
2	土師器 坏	A [16.6]	体部はやや内彎し、さらに口縁部は内彎気味に立ち上がる。	体部は内・外面とも、横位のナデが施されている。	砂粒、スコリア 普通 にぶい黄褐色	P265 10% 覆土中
		B (3.1)				

第145図3～8は、第6号溝から出土した弥生式土器片の拓影図である。3は口縁部片で、口唇部には撚糸文、下端には櫛歯状工具による横走波状文が施されている。4は頸部片で、櫛歯状工具による横走波状が施されている。5・6は胴部片で、附加条1種(附加2条)の縄文が施され、6は羽状構成をとる。7・8は底部片で、7には撚糸文、8には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第145図9	紡錘車	5.4	5.2	1.5	8.0	47.2	100	覆土下層	DP59 PL56

第7号溝 (第147図)

位置 E13a₂区～E12c₇区にかけて確認されている。両端部はエリア外に延び、東側は西原遺跡の第3号溝となる。

重複関係 本跡は、第1・8号溝を掘り込んでいる。

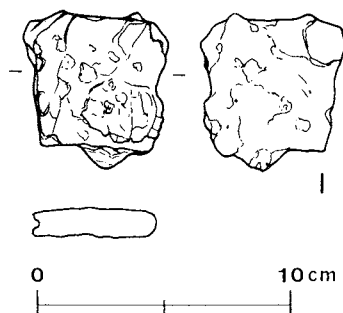
規模と形状 長さ約25mで、上幅(60～100)cm、下幅(20～90)cm、深さ40～52cmである。断面形は「U」字状と思われる。底面は皿状で軟らかい。

方向 E13a₂区から西南西(N-120°-W)へほぼ直線的に延びている。

覆土 底面付近には暗褐色土が、中層には褐色土が堆積しロームブロックを含んでいる。

遺物 覆土中から、流れ込みと思われる弥生式土器片、土師器片が少量出土している。

所見 本跡は、西原遺跡の第3号溝と同一と考えられる。覆土中に顆粒状に変化した方形の土層が4か所確認できたが、覆土の殆どが道路下に位置しているため、わずな幅での調査となり詳しい状況は把握できないが墓墳となる可能性は十分に考えられる。遺構に伴う遺物がなく時期・性格等は不明である。



第146図 第7号溝出土遺物実測図

第7号溝出土鉄製品一覧表

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第146図1	不明鉄製品	(6.3)	(5.8)	(1.3)	(97.7)	覆土中	M4

第8号溝 (第147図)

位置 F12f₃区～E13a₁区にかけて確認されている。北側はエリア外に延び、西原遺跡に達している。

重複関係 本跡は、第7号溝に掘り込まれている。南西側は第3号溝と重複し、その土層から判断して覆土内に包含されていると考えられるが、実態は明確にはとらえられなかったため重複部分については、本跡に含めないことにした。

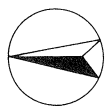
規模と形状 長さ約86mで、上幅0.9～1.5m、下幅30～66cm、深さ32～36cmである。断面形は逆台形状で、底面は軟らかい。

方向 F12f₃区から北東(N-48°-E)へ直線的に延び、F12a₈区から北方向となる。第1号溝と並列している。

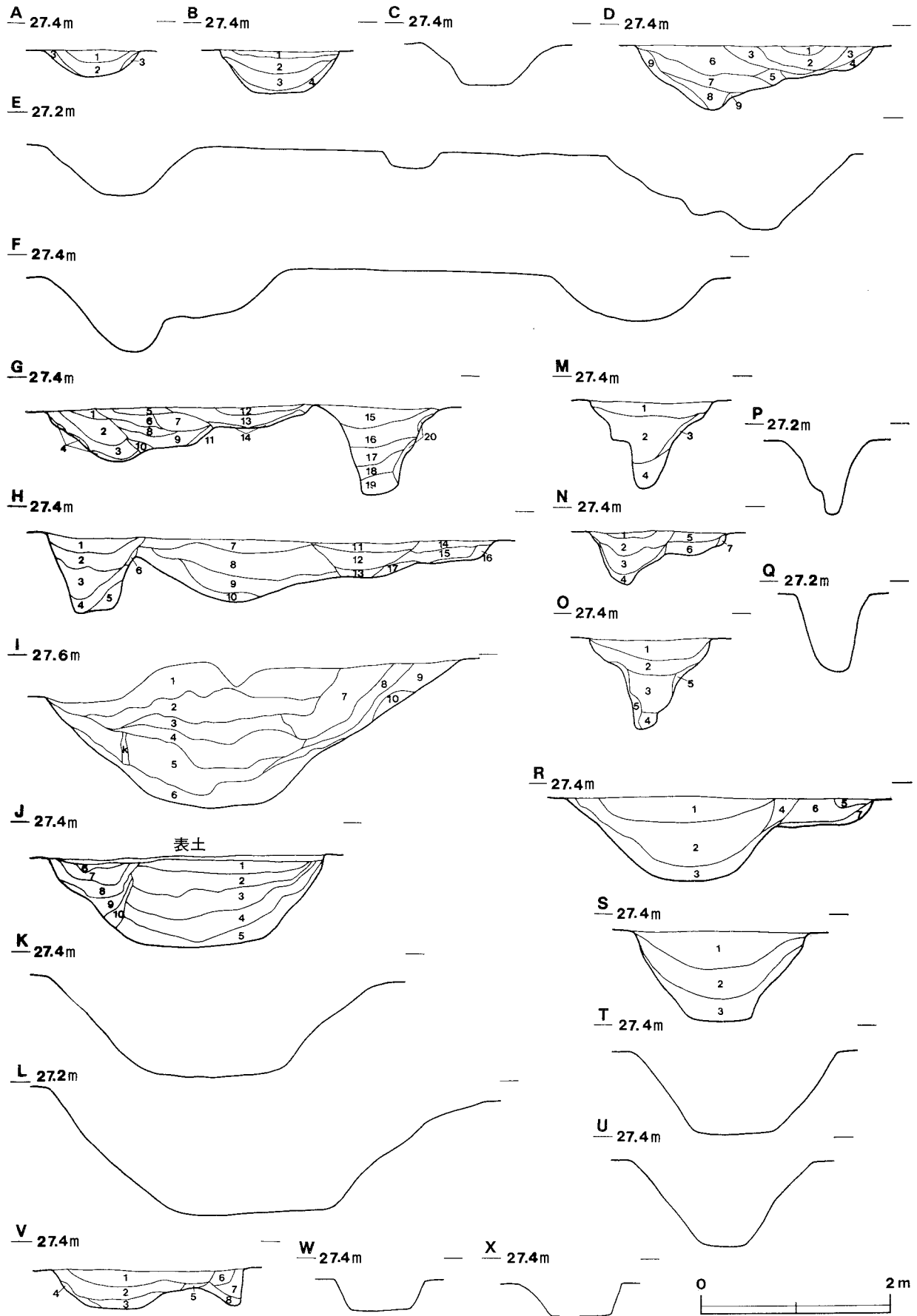
覆土 底面付近には褐色土が、中・上層には暗褐色土が堆積している。各層中にはロームブロックが混入している。

遺物 覆土中から混入した弥生式土器片、土師器片が出土している。

所見 本跡は、第1・2・3号溝と並列して掘られており対をなすものと考えられるので、同じ古墳時代中期以降と考えられる。詳しい時期・性格等については不明である。



第147图 第1~8号溝渠测图



第148図 溝土層・エレベーション実測図

第1号溝

SPA	1	暗褐色	ローム粒子少量
	2	暗褐色	ローム粒子中量
	3	褐色	ローム粒子多量

SPB	1	暗褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物極少量
	2	黒褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック・焼土粒子極少量
	3	暗褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック少量 ロームブロック・炭化物極少量
	4	褐色	ローム粒子中量	ロームブロック極少量

第3号溝

SPD	1	黒褐色	ローム粒子少量	6	黒褐色	ローム粒子少量	ロームブロック少量
	2	暗褐色	ローム粒子少量	7	褐色	ローム粒子中量	ロームブロック少量
	3	暗褐色	ローム粒子少量	8	黒褐色	ローム粒子少量	
	4	褐色	ローム粒子多量	9	褐色	ローム粒子多量	
	5	暗褐色	ローム粒子少量				

第3・5号溝

SPG	1	褐色	ローム粒子少量	ロームブロック・黒色ブロック極少量	11	褐色	ローム粒子多量	
	2	褐色	ローム粒子多量	ローム中ブロック中量	12	暗褐色	ローム粒子少量	焼土粒子極少量
	3	黒褐色	ローム粒子中量	ローム小ブロック極少量	13	暗褐色	ローム粒子少量	ロームブロック極少量
	4	褐色	ローム粒子多量	ローム中ブロック極少量	14	褐色	ローム粒子多量	
	5	暗褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック極少量	15	黒褐色	ローム粒子中量	ロームブロック極少量 黒色土ブロック少量
	6	暗褐色	ローム粒子少量	ローム中ブロック極少量	16	暗褐色	ローム粒子少量	ロームブロック少量 炭化粒子微量
	7	暗褐色	ローム粒子少量	ロームブロック・黒色土ブロック極少量	17	褐色	ローム粒子中量	ローム中ブロック少量
	8	暗褐色	ローム粒子少量	ローム中ブロック少量	18	暗褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック少量
	9	暗褐色	ローム粒子少量	ローム中ブロック少量	19	黒褐色	ローム粒子少量	
	10	暗褐色	ローム粒子少量		20	褐色	ローム粒子多量	

* 15~20は第5号溝の土層

第3・5・8号溝

SPH	1	褐色	ローム粒子中量	ロームブロック少量	9	褐色	ローム粒子中量	ロームブロック少量
	2	黒褐色	ローム粒子少量	ロームブロック少量	10	暗褐色	ローム粒子少量	ローム大ブロック少量
	3	暗褐色	ローム粒子中量	ロームブロック少量	11	黒褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック少量
	4	暗褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック少量	12	暗褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック少量
	5	暗褐色	ローム粒子少量		13	暗褐色	ローム粒子少量	ローム中ブロック極少量
	6	暗褐色	ローム粒子少量		14	黒褐色	ローム粒子少量	ローム中ブロック極少量
	7	暗褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック少量	15	褐色	ローム粒子中量	ローム小ブロック少量
	8	黒褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック極少量	16	褐色	ローム粒子多量	ローム大ブロック極少量
					17	褐色	ローム粒子多量	

* 11~13は第8号溝の土層

第4号溝

SPI	1	褐色	ローム粒子中量	ロームブロック少量	焼土・炭化粒子微量	5	極暗褐色	ローム粒子少量	ロームブロック中量	炭化・焼土粒子少量	
	2	褐色	ローム粒子中量	ロームブロック中量	少量粒子少量	6	褐色	ローム粒子多量	ロームブロック多量	焼土粒子少量	
	3	暗褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック少量	炭化・焼土粒子少量	7	褐色	ローム粒子中量	ローム小ブロック多量	焼土粒子少量	
	4	暗褐色	ローム粒子中量	ローム小ブロック中量	ローム中ブロック多量	炭化・焼土粒子少量	8	極暗褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック少量	焼土粒子少量
						9	褐色	ローム粒子中量	ローム小ブロック少量	焼土粒子少量	
						10	褐色	ローム粒子多量			

(第148図)

SPJ	1	黒褐色	ローム粒子少量	ロームブロック少量	7	暗褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック少量	黒色土ブロック少量
	2	暗褐色	ローム粒子少量	ロームブロック少量	8	暗褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック少量	黒色土ブロック中量
	3	暗褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック少量	9	暗褐色	ローム大ブロック多量		
	4	暗褐色	ローム粒子少量	ロームブロック極少量	10	暗褐色	ローム粒子少量	ロームブロック少量	
	5	褐色	ローム粒子多量	ローム大ブロック極少量					
	6	黒褐色	ローム粒子少量	ローム大ブロック極少量					

第5号溝

SPM	1	暗褐色	ローム粒子少量	ロームブロック少量	炭化・焼土粒子微量	3	暗褐色	ローム粒子中量	ロームブロック少量	
	2	暗褐色	ローム粒子少量	ロームブロック中量	炭化・焼土粒子少量	4	褐色	ローム粒子少量	ロームブロック中量	
SPN	1	暗褐色	ローム粒子少量			5	黒褐色	ローム粒子少量		
	2	暗褐色	ローム粒子少量	ロームブロック極少量	炭化粒子微量	6	暗褐色	ローム粒子中量	ローム小ブロック極少量	
	3	暗褐色	ローム粒子中量	ロームブロック少量		7	褐色	ローム粒子多量		
	4	褐色	ローム粒子多量	ローム中ブロック極少量						
	* 5～7の土層は第1号溝									

SPO	1	暗褐色	ローム粒子中量	ロームブロック少量	黒色土ブロック極少量	4	暗褐色	ローム粒子少量	
	2	暗褐色	ローム粒子少量	ロームブロック少量		5	褐色	ローム粒子多量	ローム小ブロック少量
	3	暗褐色	ローム粒子中量	ロームブロック少量					

第6号溝

SPR	1	暗褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック少量		5	黒褐色	ローム粒子少量		
	2	暗褐色	ローム粒子中量	ロームブロック少量		6	暗褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック極少量	
	3	褐色	ローム粒子多量	ロームブロック少量		7	褐色	ローム粒子多量	ローム中ブロック極少量	
	4	暗褐色	ローム粒子少量							
	* 5～7の土層は第1号溝									

SPS	1	暗褐色	ローム粒子中量	ロームブロック少量	焼土粒子極少量	3	褐色	ローム粒子多量	ロームブロック少量	焼土粒子極少量
	2	暗褐色	ローム粒子中量	ローム小ブロック少量	焼土ブロック少量					

第1・7号溝

SPV	1	暗褐色	ローム粒子少量			5	褐色	ローム粒子多量		
	2	黒褐色	ローム粒子少量	ローム小ブロック極少量		6	暗褐色	ローム粒子極少量		
	3	暗褐色	ローム粒子少量			7	褐色	ローム粒子少量		
	4	褐色	ローム粒子多量	ローム大ブロック少量		8	暗褐色	ローム粒子少量		
	* 6～8は第1号溝									

(第148図)

7 遺構外出土遺物

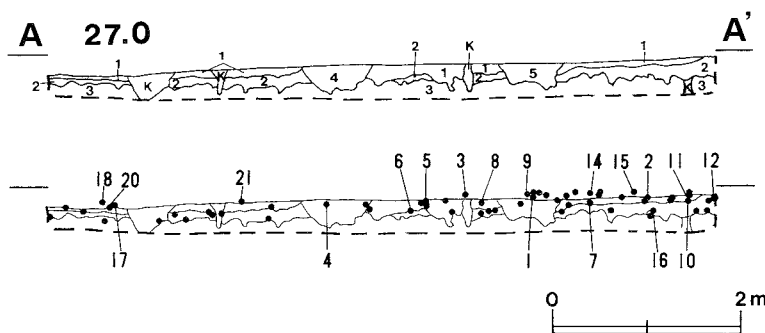
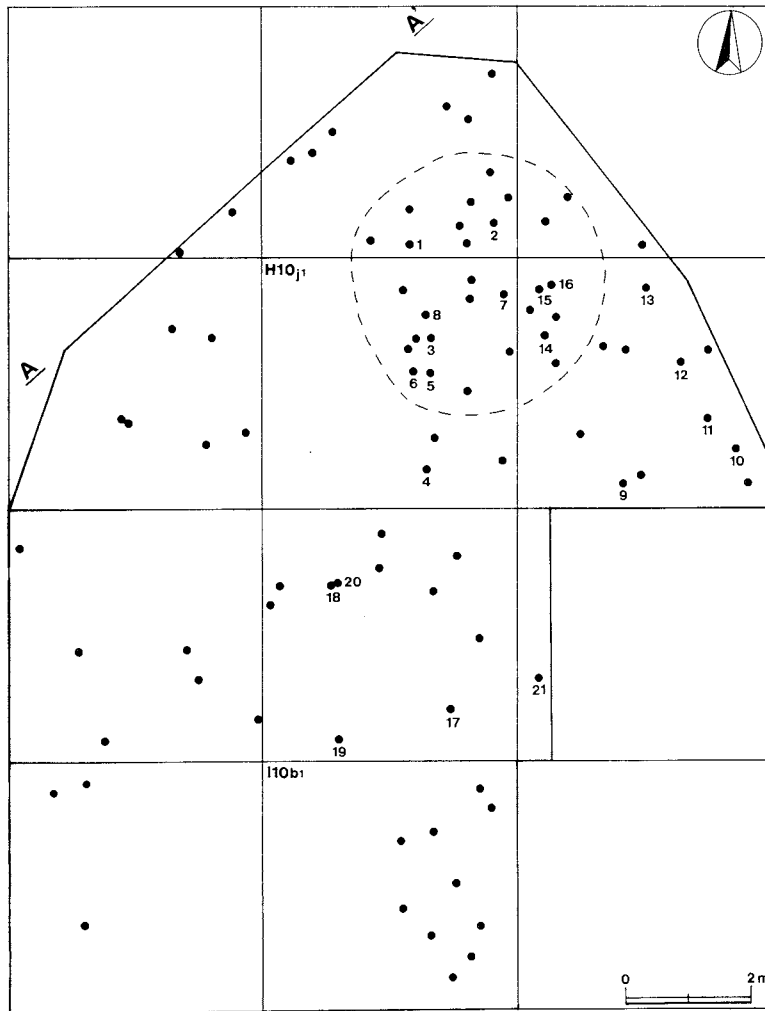
当調査区からは、遺構に伴わない旧石器時代・縄文時代・弥生時代の土器片や土製品、石製品等が出土している。ここでは、これらの出土遺物のうち特徴的なものについて取り上げて記載する。

(1) 旧石器時代の遺物

当遺跡における旧石器時代の調査を行った区域は、A地区の南寄りに位置し、ほぼ確認面付近から出土しており、標高は約27mである。旧石器時代の存在については、他時期の遺構調査の過程で旧石器時代に属すると思われる剥片等が多数出土していたことから予測されていた。そこで、特に分布密度の濃い地点を中心に精査したところ、

ほぼ確認面付近であるソフトローム上層や漸移層から多数の剥片を中心とする遺物を確認することができた。しかし、残念ながら出土地点が浅く時期を明確にするために必要な層序関係の資料を得ることができなかった。また、耕作や表土除去作業時等に遺物が移動していることも考えられるが、参考のため出土地点の平面図も載せることにした。また、他時期の遺構調査時に覆土中から出土したものや表採の石器もここで紹介する。平成6年に報告された当遺跡の北隣に位置している「西原遺跡」においても旧石器時代のものと思われる遺物が出土しており、石材構成や石器の形態などがとてもよく似ており、同一時期のものと考えられる。

旧石器時代のものと思われる石器は総数112点で、器種別ではポイント3点（未完成）・ナイフ型石器1点・コア4点と大変少なく、ほとんどが剥片で全体の95%を占めている。石材は、主に頁岩、メノウ、黒曜石、チャート、安山岩等が使用されている。なかでも安山岩が圧倒的に多く、全体の65%に当たる72点も出土している。



第149図 旧石器時代調査エリア内遺物出土地点図

○ 旧石器時代の調査エリア内出土遺物

調査エリアはA地区のH10j₁区を中心に東西12m、南北16mの範囲で行った。いずれの石器も遺構確認面近くであるソフトローム上層または漸移層から出土したもので比較的浅い。したがって、基本層序の十分な検討に耐えるだけの資料を得ることは不可能であった。出土した石器は剥片40点、ポイント2点、コア2点の計44点である。平面分布については第149図で示したとおりであり、石器が集中している地点は、点線で範囲を示した。石器集中地点の範囲は、直径約4mで石材や出土レベルがほぼ同じである。石材は、安山岩39点、頁岩5点である。

第151図19・第152図20は、I10a₁区から出土したポイントの未完製品で、石材は安山岩である。19はまだ片側に自然面が一部残るが、両面とも左右からの粗い剥離調整が加えられている。最大厚、最大幅ともに中央部よりやや下位に持つ。20の素材は縦長剥片と思われ、片側の中央部付近に剥離面が認められる。両側とも左右から細かな剥離調整が加えられており、最大厚、最大幅ともに中央部に持つ。縦方向の中央部には稜が認められる。側縁部中央は大きく剥離しており、これが未完製のまま放棄された理由と思われる。16・21はコアで、どちらも安山岩である。16は、横長の剥片を取り出したものと思われる。21は縦長の礫を長軸方向から剥離させて大きさを調整し、最初の打点とは反対側に打面調整を施している。小形の縦長剥片を取り出したものと思われるもので、打点はすべて同じ側にあり少なくとも5点は剥離させている。

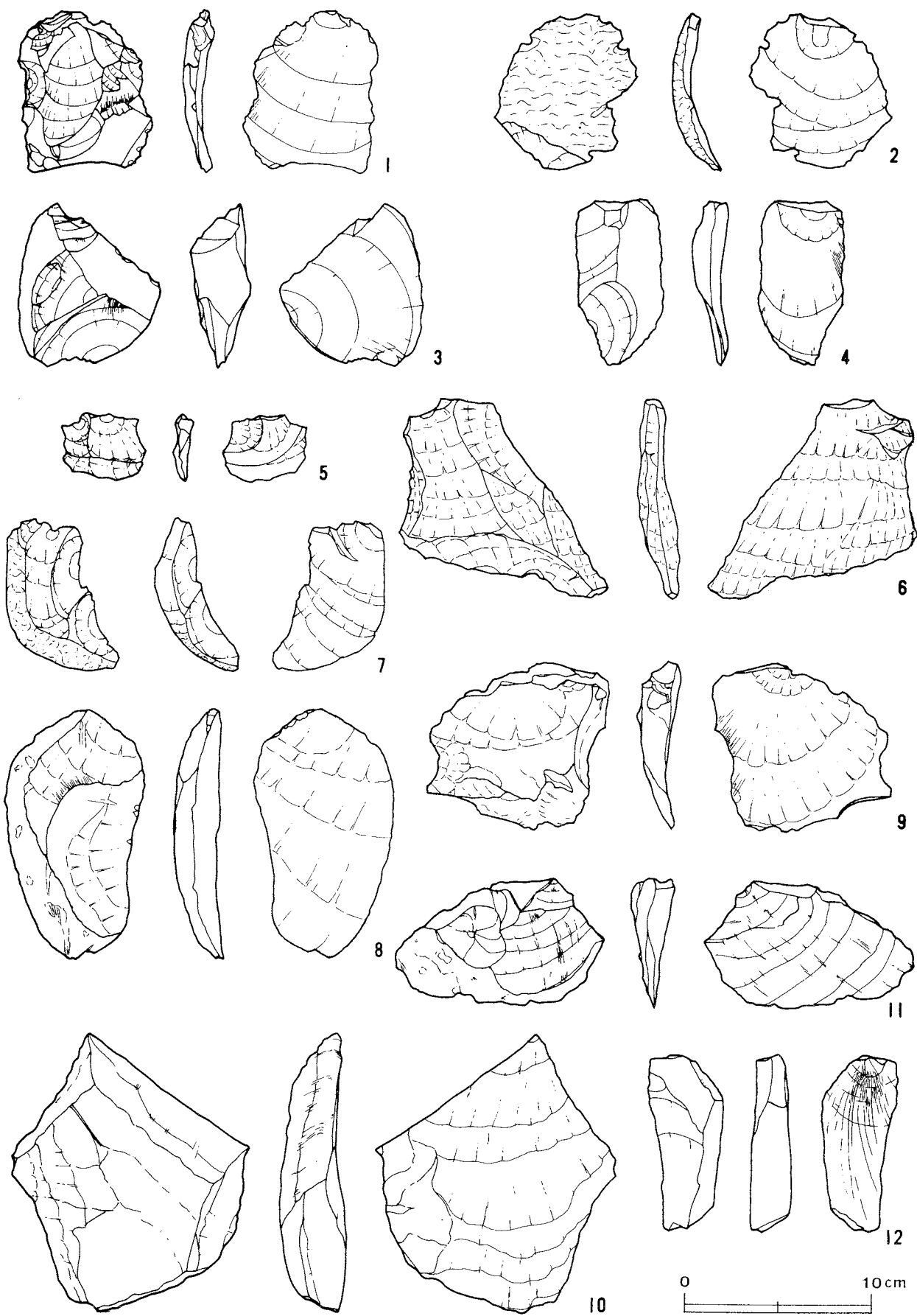
土層解説

第1層 鈍い褐色	ローム粒子多量、暗褐色ブロック少量	第3層 明褐色	ローム粒子多量 (ソフトローム)
第2層 明褐色	ローム粒子多量、ロームブロック少量、暗褐色ブロック少量	第4層 褐色	ローム粒子多量、暗褐色粒子少量
		第5層 褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物微量

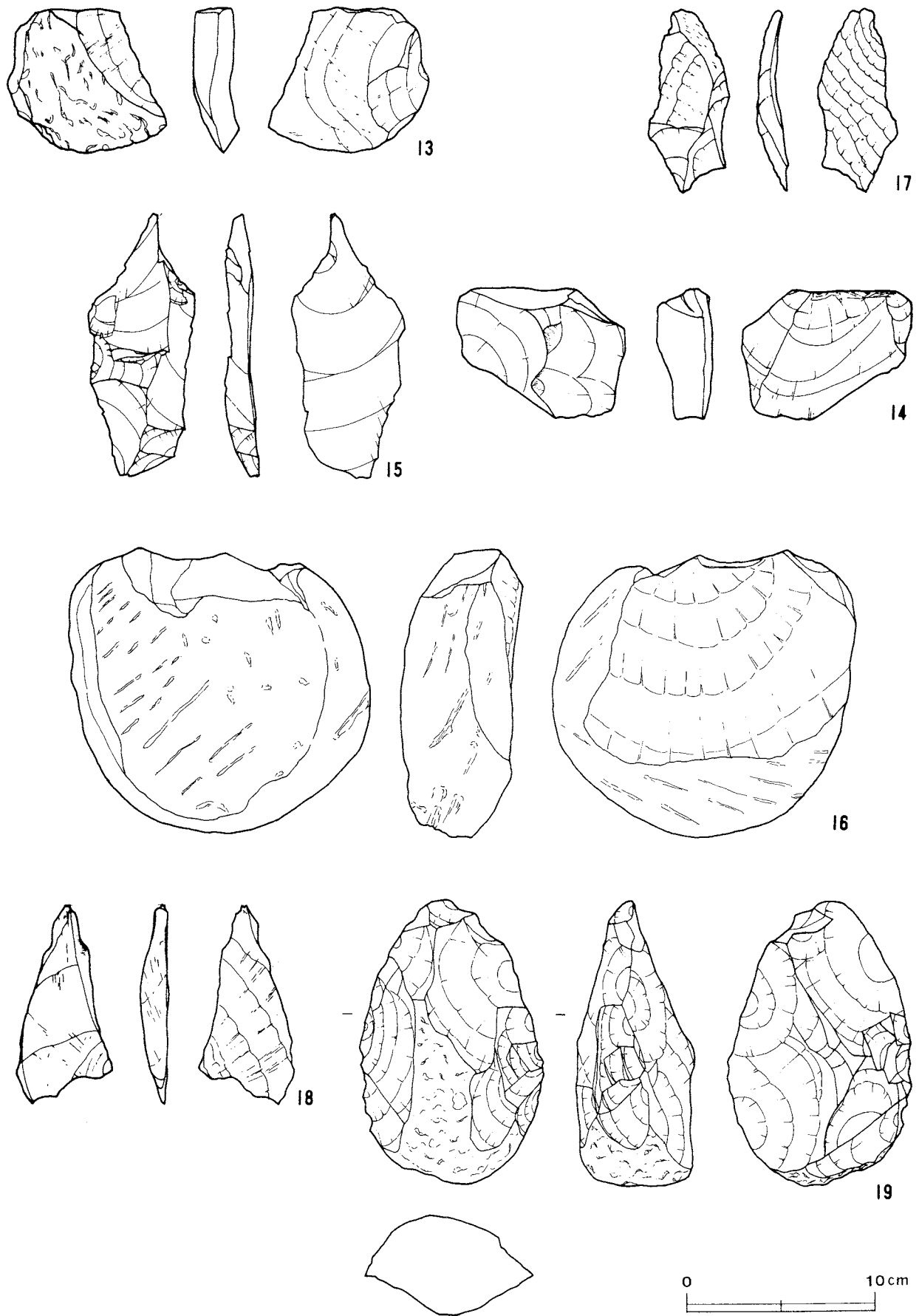
(第149図)

○ 旧石器時代の調査エリア外出土遺物

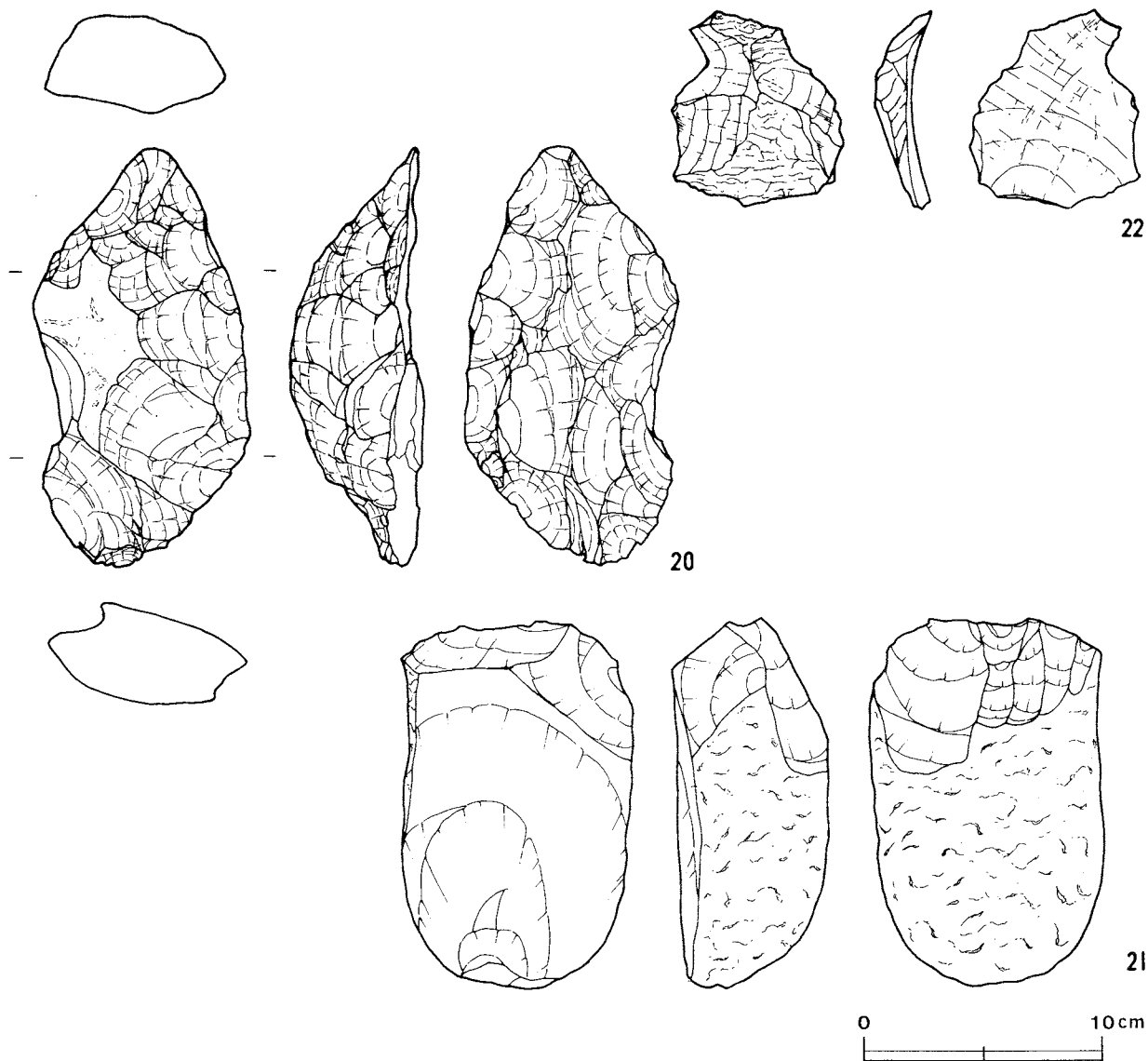
当遺跡における他時期の遺構調査の段階や遺構確認時に、旧石器時代に属すると思われる剥片や石器等が出土している。石材は安山岩が多く31点、頁岩14点、メノウ17点、チャート4点が主なものである。総数72点が出土しているが、器種別では剥片がほとんどで68点、ポイント1点、ナイフ形石器1点、コア2点である。第154図37のコアは打面の剥離調整が施され、幅の狭い面を利用して小形の縦長剥片を取り出している。石材はメノウである。53のブレードコアは細かな打面調整が施され、全側面を利用して大形の縦長剥片を取り出している。剥離痕の認められるものの中で最大の剥片は、長さ11.5cm、幅5.8cmで、縦長剥片は少なくとも11点はあると考えられる。60のポイントは素材は縦長剥片と思われる。側縁には微細な剥離調整が施され、中央の稜は片面のみ認められる。おそらく未完製品であろう。63のナイフ形石器は、石材がチャートである。右側縁全面に急角度の刃潰し剥離が認められ、素材は縦長の剥片である。最大幅を中央にもち、刃部は左側縁上部と考えられる。



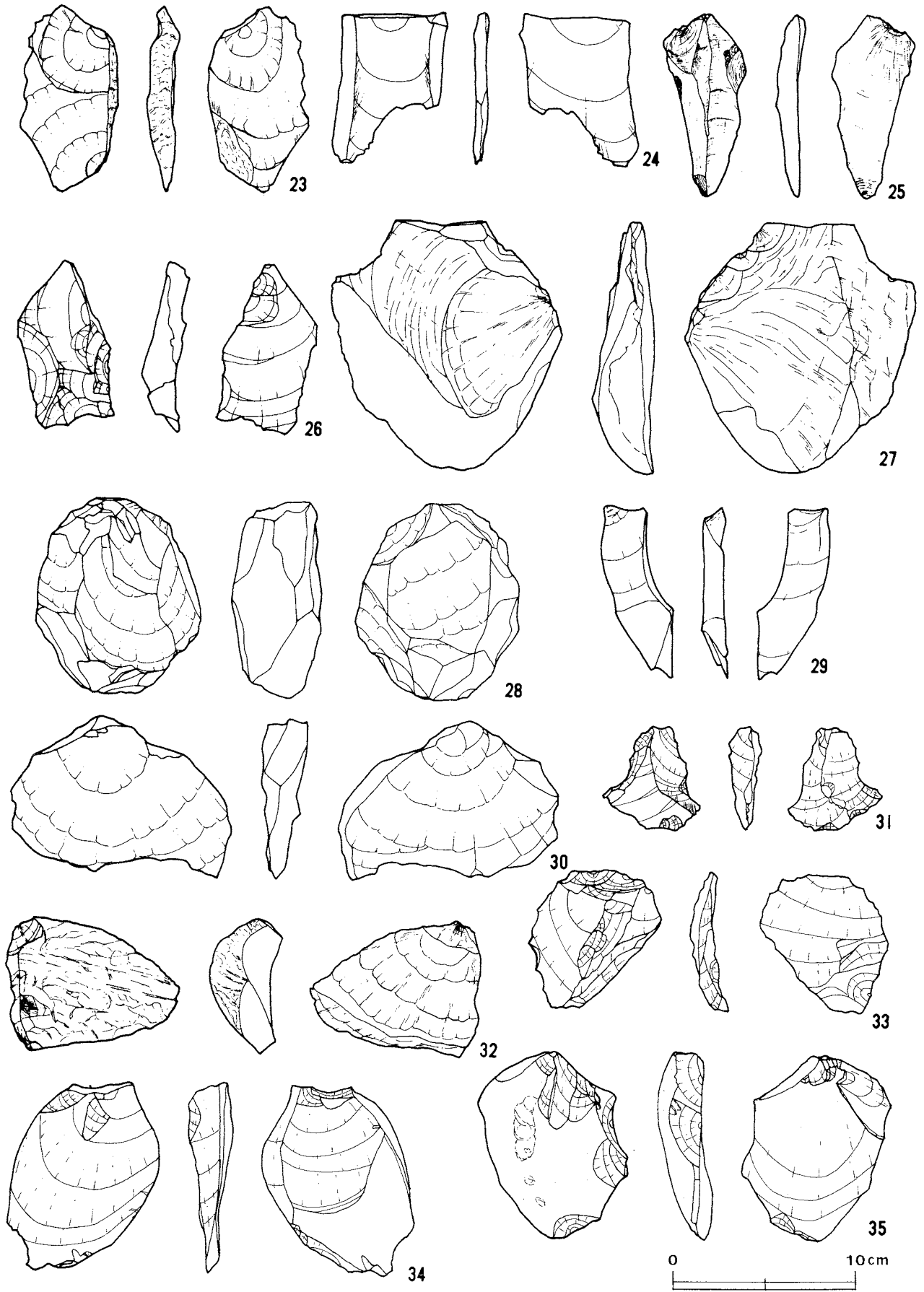
第150図 旧石器時代調査エリア内出土遺物実測図(1)



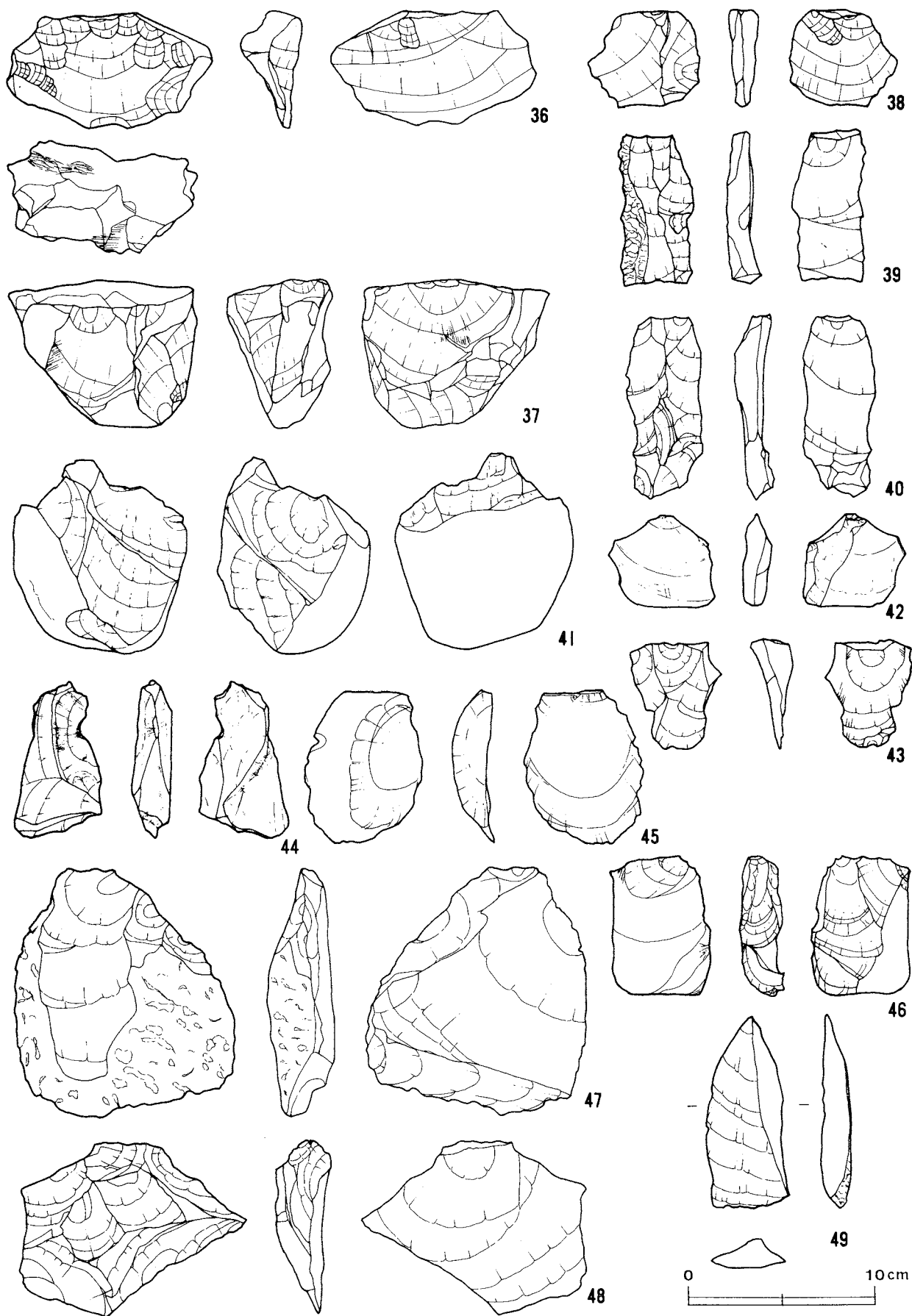
第151図 旧石器時代調査エリア内出土遺物実測図(2)



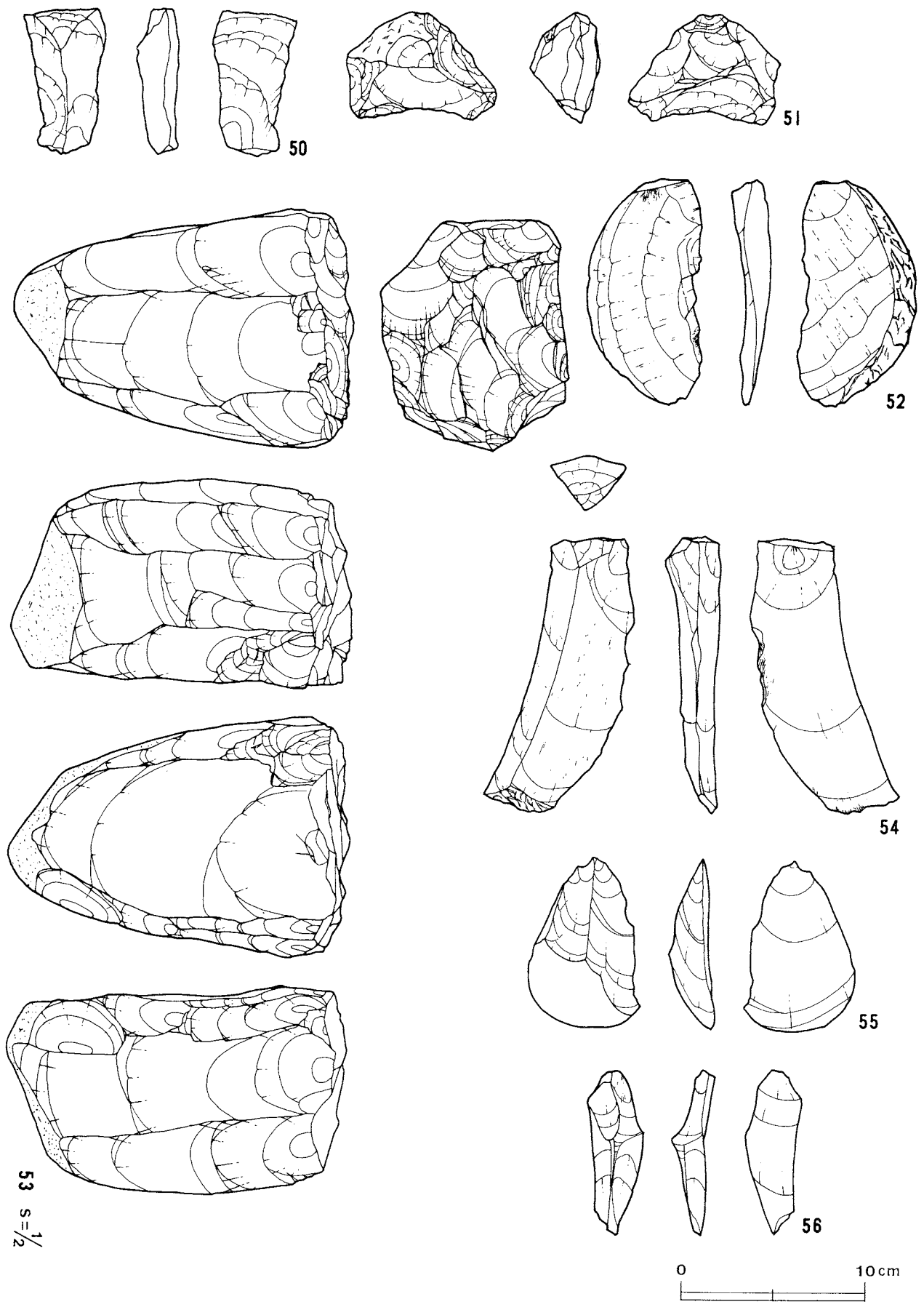
第152図 旧石器時代調査エリア内出土遺物実測図(3)



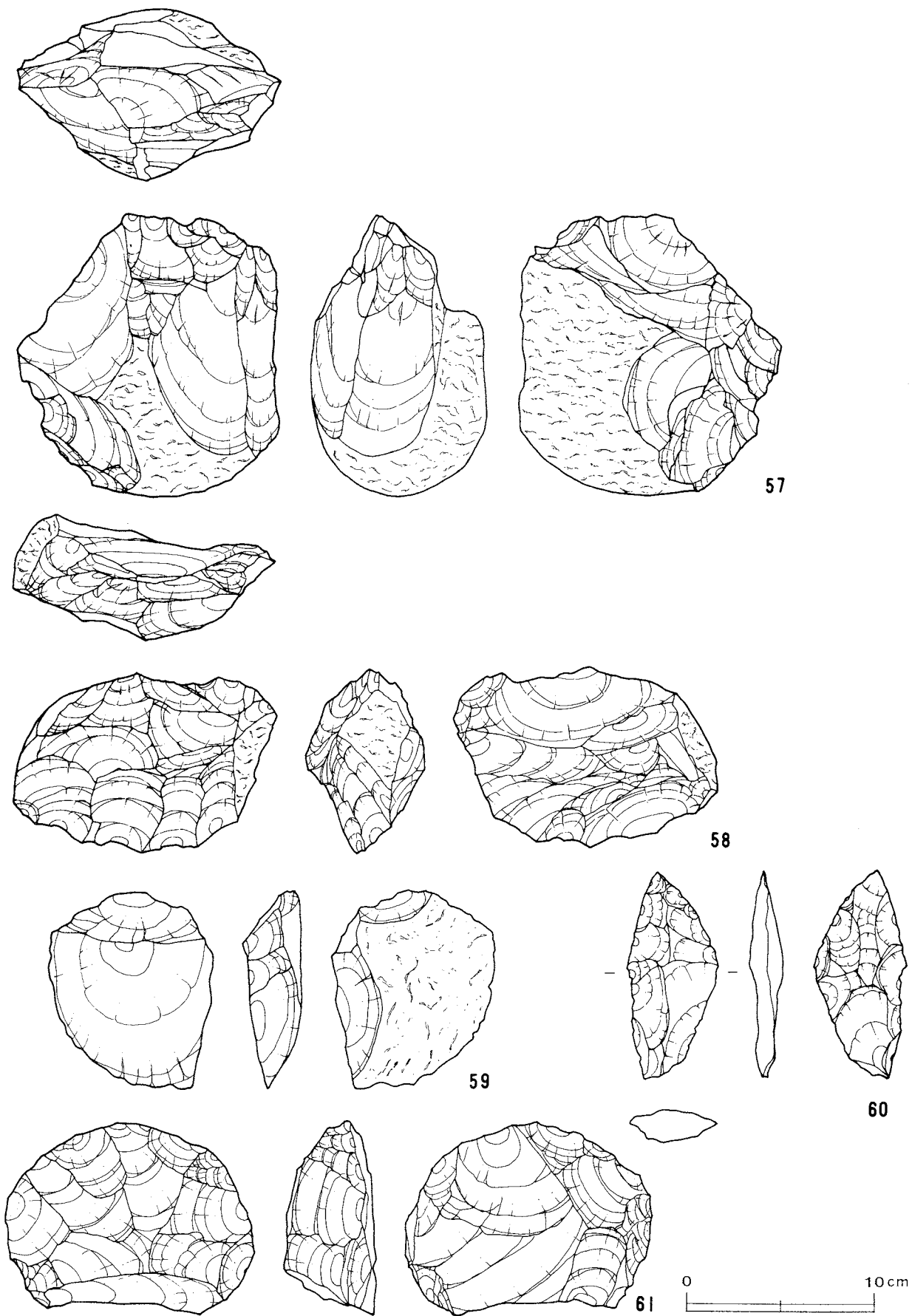
第153図 旧石器時代調査エリア外出土遺物実測図(1)



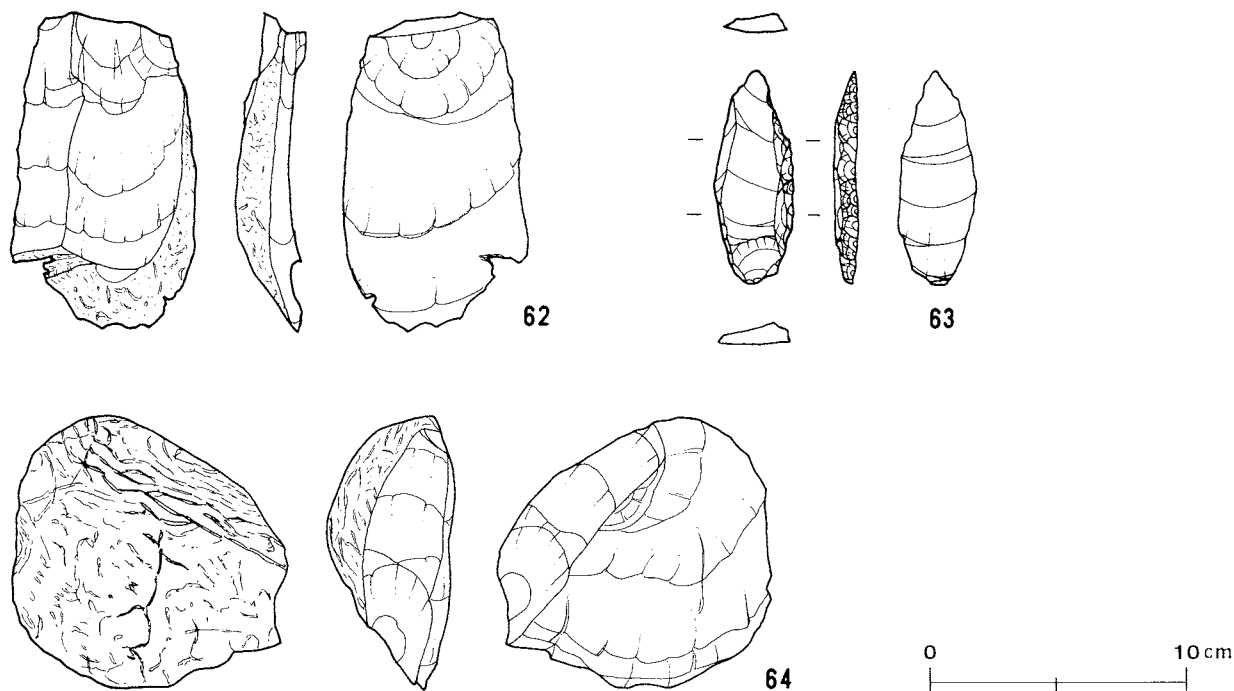
第154図 旧石器時代調査エリア外出土遺物実測図(2)



第155図 旧石器時代調査エリア外出土遺物実測図(3)



第156図 旧石器時代調査エリア外出土遺物実測図(4)



第157図 旧石器時代調査エリア外出土遺物実測図(5)

旧石器時代調査エリア内出土石器観察表

番号	図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
1	◎	剥片	2.4	1.6	0.4	1.5	安山岩	H10i ₁	Q105
2	第150図1	剥片	4.4	3.6	0.8	7.8	頁岩	H10i ₁	Q110
3	◎	剥片	3.4	3.0	0.5	5.0	安山岩	H10i ₁	Q111
4	2	剥片	4.2	3.8	1.1	8.6	安山岩	H10i ₁	Q123 PL59
5	◎	剥片	2.3	2.2	0.4	2.1	安山岩	H10i ₂	Q116
6	◎	剥片	2.8	0.9	0.6	2.8	頁岩	H10i ₂	Q127 PL59
7	3	剥片	4.4	3.8	1.6	15.5	頁岩	H10j ₁	Q88
8	4	剥片	4.4	2.4	1.0	6.4	安山岩	H10j ₁	Q90
9	5	剥片	1.8	2.2	0.5	1.7	安山岩	H10j ₁	Q91
10	6	剥片	5.4	5.5	1.2	17.1	安山岩	H10j ₁	Q93
11	◎	剥片	3.0	2.1	1.2	8.5	安山岩	H10j ₁	Q104
12	◎	剥片	3.2	3.1	0.4	3.9	安山岩	H10j ₁	Q106
13	7	剥片	4.0	3.1	2.3	11.8	安山岩	H10j ₁	Q122
14	8	剥片	6.7	3.8	1.3	25.9	安山岩	H10j ₁	Q124 PL59
15	◎	剥片	3.1	2.0	0.6	4.0	安山岩	H10j ₁	Q126 PL59
16	9	剥片	4.5	4.9	1.2	16.9	安山岩	H10j ₂	Q107
17	◎	剥片	3.3	2.0	0.8	4.4	安山岩	H10j ₂	Q112
18	10	剥片	7.4	6.4	2.0	68.5	安山岩	H10j ₂	Q113
19	11	剥片	4.5	5.5	1.2	12.6	安山岩	H10j ₂	Q114
20	12	剥片	4.7	2.1	1.1	8.0	安山岩	H10j ₂	Q115
21	第151図13	剥片	3.9	4.3	1.2	18.8	安山岩	H10j ₂	Q117
22	◎	剥片	2.7	0.8	0.5	2.0	安山岩	H10j ₂	Q118
23	14	剥片	3.5	4.5	1.5	15.8	頁岩	H10j ₂	Q119

番号	図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
24	◎	剥片	3.5	2.3	0.5	4.2	安山岩	H10j ₂	Q120
25	15	剥片	7.1	2.9	0.9	11.3	頁岩	H10j ₂	Q121
26	16	石核	7.7	8.0	3.3	263.6	安山岩	H10j ₂	Q125 PL57
27	◎	剥片	2.6	2.0	0.5	2.9	安山岩	I9a _o	Q95
28	◎	剥片	2.9	2.1	0.8	2.9	安山岩	I9a _o	Q96
29	◎	剥片	2.2	1.2	0.4	0.9	安山岩	I9a _o	Q97
30	◎	剥片	2.7	0.8	0.5	2.8	安山岩	I9a _o	Q195 PL56
31	17	剥片	5.0	2.2	0.9	4.4	安山岩	I10a ₁	Q89
32	18	剥片	5.3	2.5	0.8	7.8	安山岩	I10a ₁	Q98
33	◎	剥片	2.1	1.2	0.4	1.0	安山岩	I10a ₁	Q99
34	◎	剥片	2.2	1.1	0.3	0.7	安山岩	I10a ₁	Q100
35	◎	剥片	2.7	1.7	0.7	3.1	安山岩	I10a ₁	Q101
36	19	ポイント	7.7	3.1	4.9	120.1	安山岩	I10a ₁	Q194 未製品 PL56
37	第152図20	ポイント	9.0	4.6	3.0	101.8	安山岩	I10a ₁	Q202 未製品 PL57
38	21	石核	7.8	4.9	3.3	187.8	安山岩	I10a ₂	Q193 PL57
39	◎	剥片	1.8	1.6	0.4	1.1	安山岩	I10b ₁	Q108
40	◎	剥片	2.0	1.4	0.5	0.9	安山岩	I10b ₁	Q109
41	◎	剥片	2.7	2.3	0.2	1.6	安山岩	I10b ₁	Q204 PL58
42	◎	剥片	1.5	1.3	0.3	0.6	安山岩	I9	Q94
43	◎	剥片	1.9	0.8	0.3	0.3	安山岩	I9	Q102
44	22	剥片	4.2	3.6	1.2	9.9	安山岩	I9	Q103

旧石器時代調査エリア外出土石器観察表

番号	図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
1	第153図23	剥片	5.1	2.7	0.9	9.2	安山岩	SI-7	Q128 PL59
2	26	剥片	4.7	2.7	1.3	8.8	メノウ	SI-10	Q129 PL59
3	24	剥片	4.2	3.2	0.3	3.3	頁岩	SI-15	Q130 PL59
4	25	剥片	5.0	2.2	0.8	4.0	黒曜石	SI-30	Q131 PL59
5	27	剥片	6.9	6.4	1.7	67.0	安山岩	SI-56	Q132 PL59
6	◎	剥片	3.3	2.2	0.4	3.1	安山岩	SI-60	Q133 PL59
7	28	剥片	5.4	4.5	2.5	69.0	安山岩	SD-3	Q134 PL59
8	30	剥片	6.0	4.2	1.0	26.8	安山岩	SD-3	Q135 PL59
9	◎	剥片	4.7	2.3	1.0	7.9	安山岩	SD-3	Q136 PL59
10	32	剥片	3.7	4.8	2.0	31.4	安山岩	SD-3	Q137 PL59
11	29	剥片	4.7	2.1	0.7	3.8	頁岩	SD-4	Q138 PL60
12	34	剥片	5.5	4.1	1.2	17.6	頁岩	SX-1	Q139 PL59
13	◎	剥片	2.9	1.7	0.9	3.4	頁岩	SX-1	Q140 PL60
14	31	剥片	2.9	2.6	0.9	3.6	黒曜石	SX-1	Q141 PL59
15	35	剥片	5.1	4.1	1.5	28.1	頁岩	SX-1	Q142 PL59
16	33	剥片	3.8	3.5	1.1	8.8	メノウ	SX-1	Q143 PL60
17	◎	剥片	2.0	1.6	0.4	1.2	頁岩	SX-2	Q144
18	◎	剥片	3.5	3.0	0.8	7.9	メノウ	SX-2	Q145 PL60
19	◎	剥片	2.6	2.5	0.5	3.6	メノウ	SX-2	Q146 PL60
20	◎	剥片	1.6	1.5	0.2	0.8	メノウ	SX-2	Q147
21	◎	剥片	1.3	1.2	0.3	0.5	メノウ	SX-2	Q148

番号	図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考	
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)				
22	第154図36	剥片	3.2	5.6	1.6	13.8	メノウ	SX-2	Q149	PL60
23	37	石核	4.0	5.1	3.0	52.5	メノウ	SX-2	Q150	PL60
24	◎	剥片	3.0	1.7	0.7	2.6	安山岩	SX-2	Q151	
25	38	剥片	2.6	3.0	0.8	4.7	メノウ	SX-2	Q152	PL60
26	39	剥片	4.1	2.0	0.9	5.7	メノウ	SX-2	Q153	PL60
27	◎	剥片	2.2	2.0	0.2	1.2	メノウ	SX-2	Q154	PL60
28	40	剥片	5.0	1.9	1.0	6.2	メノウ	SX-2	Q155	PL60
29	◎	剥片	3.0	1.8	0.9	4.1	メノウ	SX-2	Q156	PL60
30	43	剥片	2.9	2.4	1.1	3.4	メノウ	SX-2	Q157	PL60
31	◎	剥片	3.5	0.9	0.4	1.7	凝灰岩	SX-3	Q158	PL60
32	41	剥片	5.3	4.7	4.1	83.3	安山岩	SX-3	Q159	PL57
33	42	剥片	2.5	2.8	0.8	3.1	頁岩	SX-4	Q160	PL59
34	44	剥片	4.2	2.4	1.1	8.5	メノウ	SX-4	Q161	PL60
35	45	剥片	4.1	3.2	1.2	9.9	頁岩	SX-7	Q162	PL59
36	◎	剥片	3.6	2.6	0.6	5.0	チャート	SK-100	Q163	PL59
37	◎	剥片	2.8	0.9	0.5	2.0	頁岩	SK-100	Q164	PL59
38	46	剥片	3.8	2.6	1.2	9.2	頁岩	SK-100	Q165	PL59
39	◎	剥片	3.5	2.7	0.8	9.9	粘板岩	7グリッド	Q166	PL59
40	◎	剥片	2.0	0.9	0.4	1.7	安山岩	13グリッド	Q167	PL59
41	49	剥片	5.2	2.2	0.8	8.6	安山岩	13グリッド	Q168	PL58
42	47	剥片	6.7	5.9	1.8	73.5	安山岩	27グリッド	Q169	PL58
43	48	剥片	4.7	6.1	1.5	27.8	安山岩	27グリッド	Q170	PL58
44	第155図50	剥片	4.0	2.3	1.2	7.9	安山岩	27グリッド	Q171	PL58
45	◎	剥片	3.1	2.1	0.6	3.0	メノウ	34グリッド	Q173	PL60
46	51	剥片	2.9	1.8	4.1	19.2	安山岩	45グリッド	Q174	PL58
47	52	剥片	6.1	3.1	1.1	16.7	安山岩	表採	Q175	PL58
48	53	ブレードコア	12.2	8.8	7.6	1097.4	頁岩	表採	Q176	PL57
49	◎	剥片	2.2	2.3	0.8	3.3	黒曜石	表採	Q177	PL58
50	◎	剥片	5.7	4.4	1.2	42.7	安山岩	表採	Q178	PL58
51	54	剥片	8.0	4.1	1.5	25.0	安山岩	表採	Q179	PL58
52	◎	剥片	3.6	2.3	1.0	11.3	安山岩	表採	Q180	PL58
53	◎	剥片	2.2	1.7	0.5	1.9	チャート	表採	Q181	PL58
54	◎	剥片	2.7	1.6	0.3	1.8	頁岩	表採	Q182	PL60
55	◎	剥片	2.3	1.3	0.5	1.9	メノウ	表採	Q183	PL60
56	◎	剥片	2.3	2.1	0.7	4.3	頁岩	表採	Q184	PL58
57	◎	剥片	2.1	0.9	0.5	1.2	頁岩	表採	Q185	PL58
58	55	剥片	4.7	3.0	1.3	12.1	チャート	表採	Q186	PL58
59	56	剥片	4.5	1.6	1.1	3.0	頁岩	表採	Q187	PL58
60	60	ポイント	5.5	2.4	0.9	9.0	安山岩	27グリッド	Q188	PL58
61	第156図57	剥片	7.6	7.0	4.7	249.8	安山岩	表採	Q189	PL57
62	58	剥片	5.0	7.0	3.2	97.9	安山岩	表採	Q190	PL58
63	61	剥片	5.2	6.6	2.4	82.1	安山岩	表採	Q191	PL58
64	59	剥片	5.3	4.4	1.6	36.2	安山岩	表採	Q192	
65	第157図62	剥片	6.4	3.7	1.4	27.5	安山岩	表採	Q196	PL56
66	64	剥片	5.3	5.4	2.6	72.1	安山岩	表採	Q197	PL56
67	◎	剥片	5.7	4.1	1.4	31.4	安山岩	表採	Q198	PL56
68	◎	剥片	7.3	3.5	1.0	26.7	安山岩	表採	Q199	PL58

番号	図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考	
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)				
69	◎	剝片	4.7	2.0	0.6	6.4	安山岩	表採	Q200	PL58
70	63	ナイフ	4.3	1.5	0.5	3.1	チャート	表採	Q201	PL58
71	◎	剝片	5.9	3.7	0.9	22.9	安山岩	表採	Q203	PL58
72	◎	剝片	3.6	1.9	0.7	4.0	安山岩	表採	Q205	PL58

◎は実測図無し

(2) 縄文式土器

出土した土器は、縄文時代早期から後期にかけてのものである。縄文式土器を時期や特徴から第1群～第4群に分類し記述する (第159図)

第1群 早期の土器

13は尖底土器の尖底部片で、短沈線が施されており田戸下層式と思われる。

第2群 前期の土器群 (浮島式)

第1類 14は口縁部片で、口縁直下を平行沈線で文様を施し、文様間に刺突を加えている。15・16の口縁部片は沈線間に「ハ」の字状のキザミを充填している。17の口縁部片と18・19の胴部片は串状工具により斜位の沈線が施されている。20は平行沈線、21は地文が撚糸でさらに斜位の沈線が施されている。22は地文が撚糸で、結節沈線文により菱形状の文様を構成している。浮島I式と考えられる。

第2類 23は爪形文、24は波状貝殻文、25は平行沈線文がそれぞれ施され、24・25の口縁部にはキザミ目がある。26・27の口縁部はやや斜めのキザミ目が入られ、胴部は複列の有節沈線文が施されている。

第3類 28・29は口縁部片、30・31は胴部片で、いずれも三角刺突文が施されている。32は貝殻の腹縁による抉り状の凹凸文がある。33は半截竹管による爪形文が施されている。

第3群 中期の土器群

第1類 35・35は複合口縁で、結節された縄文が施されている。下小野式と考えられる。

第2類 36は口縁部片で断面三角形の隆帯で楕円形状に区画し、角押文が施されている。阿玉台Ib式と考えられる。

第3類 37は口縁部片で下端を沈線で区画し、地文は単節LRが施されている。38は胴部片で2条の沈線を垂下させ地文は単節RLで、沈線間を磨り消している。加曾利EⅢ式と考えられる。

第4群 後期の土器群

第1類 39は烈点文が施され、地文は無節縄文である。称名寺式と考えられる。

第2類 40は算盤玉状の鉢形土器の口縁部片で、単節縄文を地文とし横位の平行沈線が加えられ、その間を磨り消している。41は口縁部片で、単節RLを地文とし口縁部下端に3条の沈線が施され、内面には浅い沈線がめぐらされている。加曾利B式と考えられる。

第3類 42・43は口縁部片で単節縄文を地文とし条線文が加えられ、口縁部下端には押圧が施された隆起帯がめぐらされている。加曾利B式の粗製土器と考えられる。

(3) 弥生式土器

出土した土器は弥生時代後期の土器片である。弥生式土器を特徴から第1～6群に分類し記載する。

第1群 複合口縁の土器 (第160図)

44・45は口唇部が縄文原体により押圧され、さらに45の口縁部下端には縄文原体による刺突文が施されている。46の口唇部は縄文原体による押圧が施され口縁部下端には瘤が貼られている。47・48は口縁部下端に縄文原体により押圧され、さらに47の口縁部には附加条1種(附加2条)の縄文が、48には竹管状工具による刺突文がそれぞれ施されている。

第2群 櫛描文が施されている土器 (第160図)

49は口縁部片で、口縁部下端は棒状工具により押圧され頸部は櫛状施文具により縦線文が施されている。50は頸部片で、櫛歯状工具により縦線文が施されているが歯数は不明である。51は頸部から胴部にかけての破片で、5本櫛歯による横走波状文が施されている。

第3群 格子目文の施されている土器 (第160図)

52は頸部片でヘラ状工具により山形文が施され、格子目が充填されている。

第4群 頸部下半を無文帯とする土器 (第160図)

53の頸部上半は附加条1種(附加2条)の縄文が施され羽状構成をとっている。54・55は頸部から胴部にかけての破片で、胴部には54が附加条1種(附加2条)の縄文、55は附加条1種(附加1条)の縄文がそれぞれ施されている。

第5群 縄文の施されている土器 (第160図)

56は口縁部片、57は頸部片、58～61は胴部片で61・56は内面にその他は外面に靱痕がある。縄文原体はいずれも附加条1種(附加2条)である。62は附加条1種(附加2条)の縄文が施され、頸部との境いにボタン状の瘤が貼られている。63は単節、64～66は附加条1種(附加2条)の縄文がそれぞれ施されている。

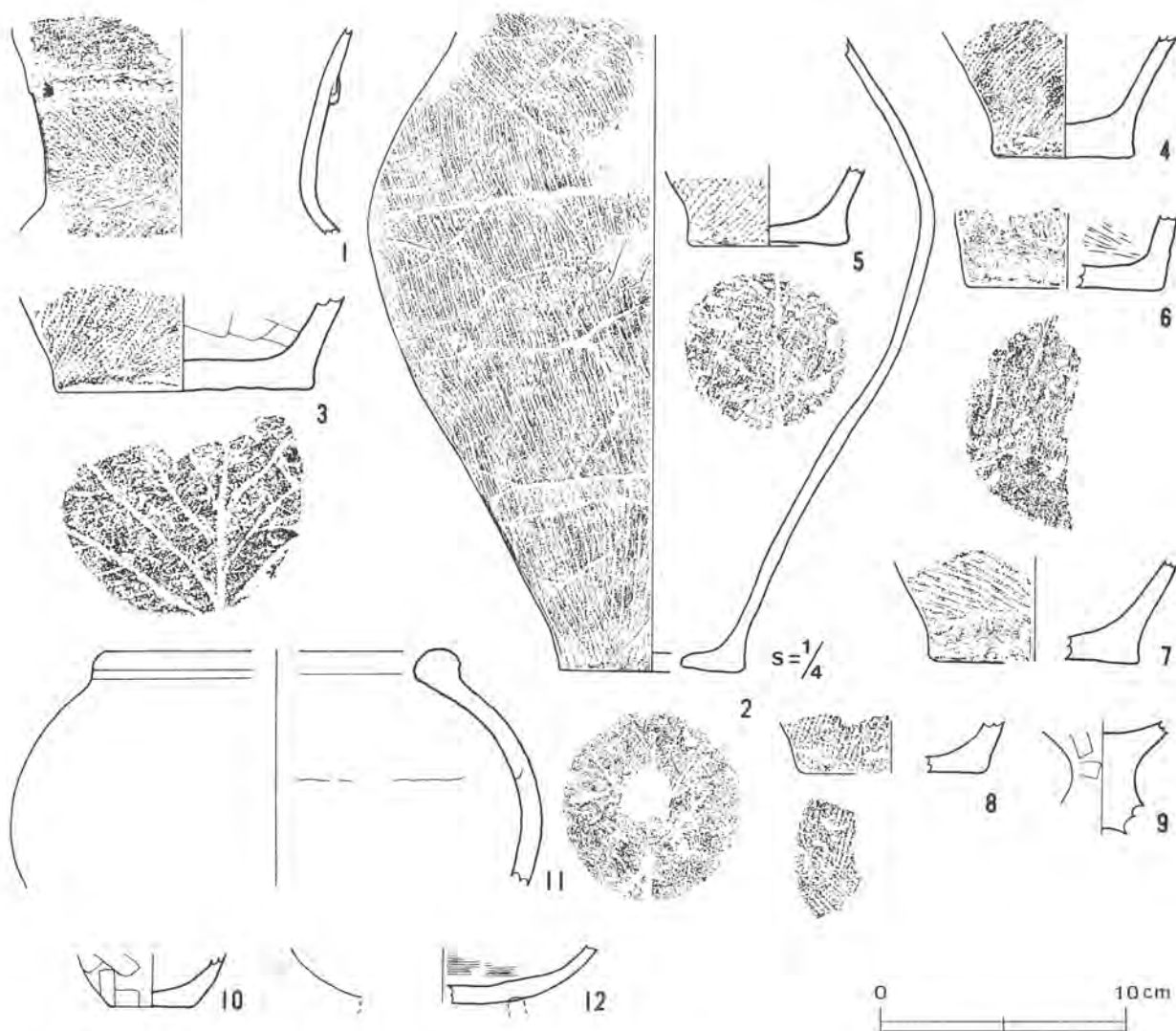
第6群 底部片 (第160図)

いずれも胴部には縄文が施され、縄文原体は67～70が附加条1種(附加2条)、71は単節、72は附加条2種(附加1条)である。67・69・71の底面には木葉痕がある。

遺構外出土遺物観察表

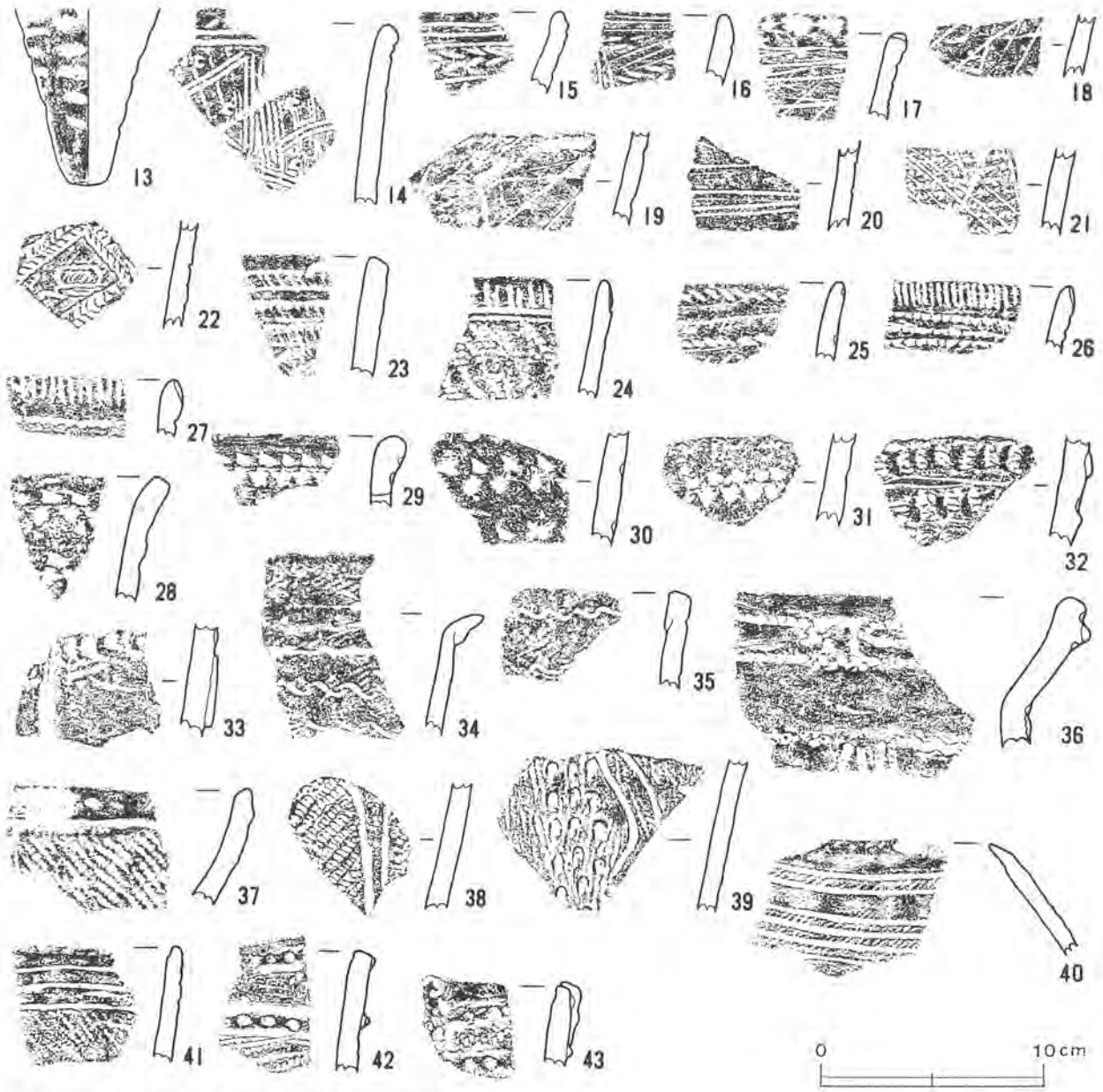
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第158図 1	広口壺 弥生式土器	B (8.7)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部はやや外反気味に立ち上がる。複合口縁で下端は棒状工具により押圧され、さらに瘤がはられている。頸部は、下端を無文帯とし、外には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。頸部内面は横位にナデられている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 にぶい黄橙色	P278 5% 表採
2	壺 弥生式土器	B (35.3) C 10.4	底部から胴部にかけての破片。底部は平底で、胴部はやや外反気味に立ち上がる。胴部最大径を上位にもつ。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底部には焼成後に穿孔(径3.2cm)されている。土器棺墓の遺物の可能性が考えられる。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 にぶい橙色	P267 PL49 60% SK-64付近
3	壺 弥生式土器	B (4.0) C 10.4	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。胴部内面は横位のヘラナデが施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 明赤褐色	P268 PL47 5% グリッド
4	壺 弥生式土器	B (5.2) C 5.8	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 橙色	P269 PL47 10% 表採
5	壺 弥生式土器	B (3.4) C 6.7	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には木葉痕がある。	砂粒, 石英, 長石, 雲母, スコリア 普通 にぶい褐色	P270 5% 二次焼成 表採

第158図 6	壺 弥生式土器	B (3.1) C [8.4]	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部はやや外傾して立ち上がる。胴部には絡糸体による撚糸文が施されている。胴部内面は斜位にヘラナデされている。底面には靨痕がある。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 ぶい褐色	P271 二次焼成 内・外面炭化物 付着 表採	5%
7	壺 弥生式土器	B (4.4) C [8.6]	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部はやや内彎して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 ぶい黄橙色	P279 表採	5%
8	壺 弥生式土器	B (2.2) C [7.8]	底部から胴部下位にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。底面には網代痕がある。	砂粒、石英、長石、スコリア 普通 明赤褐色	P234 表採	5%
9	高 弥生式土器	B (4.7) E (3.2)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開き、坏部は内彎して立ち上がる。外面は縦位・横位にヘラナデされている。	砂粒、石英、長石、雲母、スコリア 普通 ぶい橙色	P272 外面摩滅 表採	15%

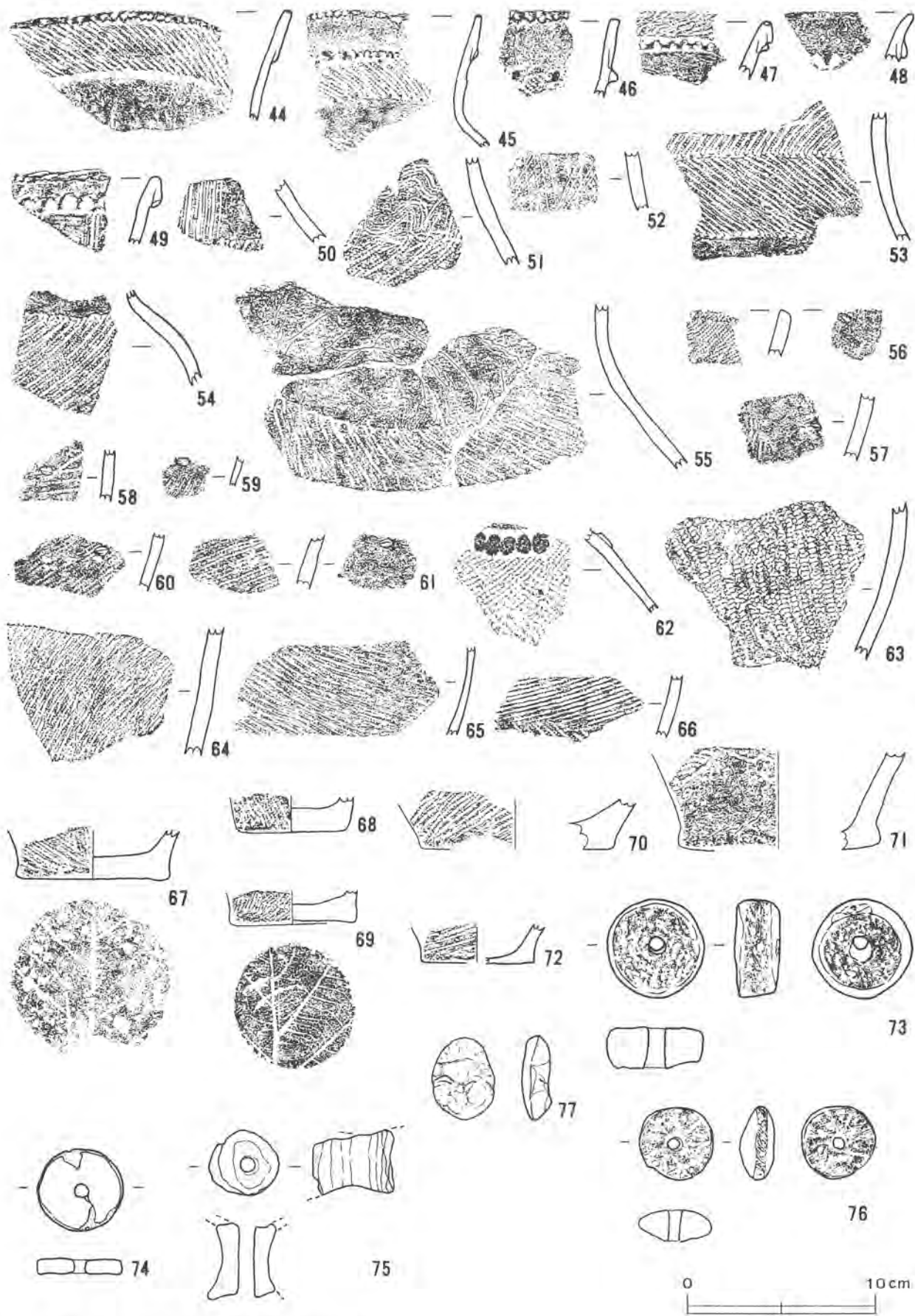


第158図 遺構外出土遺物実測図(1)

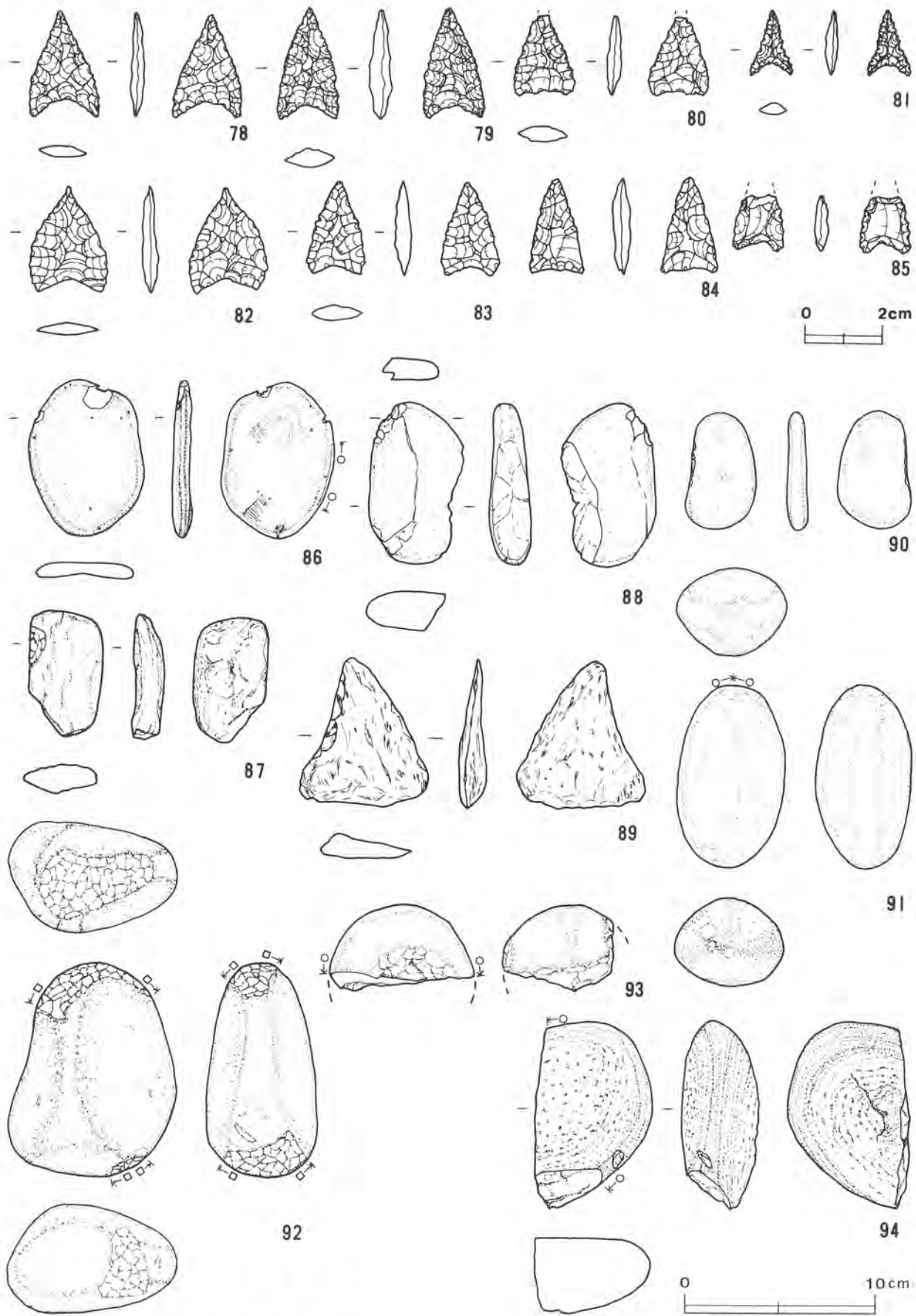
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第158図 10	小形壺 土器	B (2.2) C 3.5	底部から体部下位にかけての破片。平底で、体部は内彎して立ち上がる。	底部、体部とも外面ヘラナデ。	砂粒、スコリア 普通 ぶい黄橙色	P273 10% 内面剝離 表採
11	壺 瓦質土器	A [14.0] B (10.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は球形である。	口縁部下位外面は横ナデ。体部内面は横ナデ。	砂粒、スコリア 普通 褐色	P274 5% 外面スス付着 表採
12	高台付 土器	B (2.2)	体部片。平底で、体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラナデ、内面はヘラミガキ。体部内面は、黒色処理されている。	砂粒、雲母、スコリア 普通 ぶい橙色	P280 10% 表採



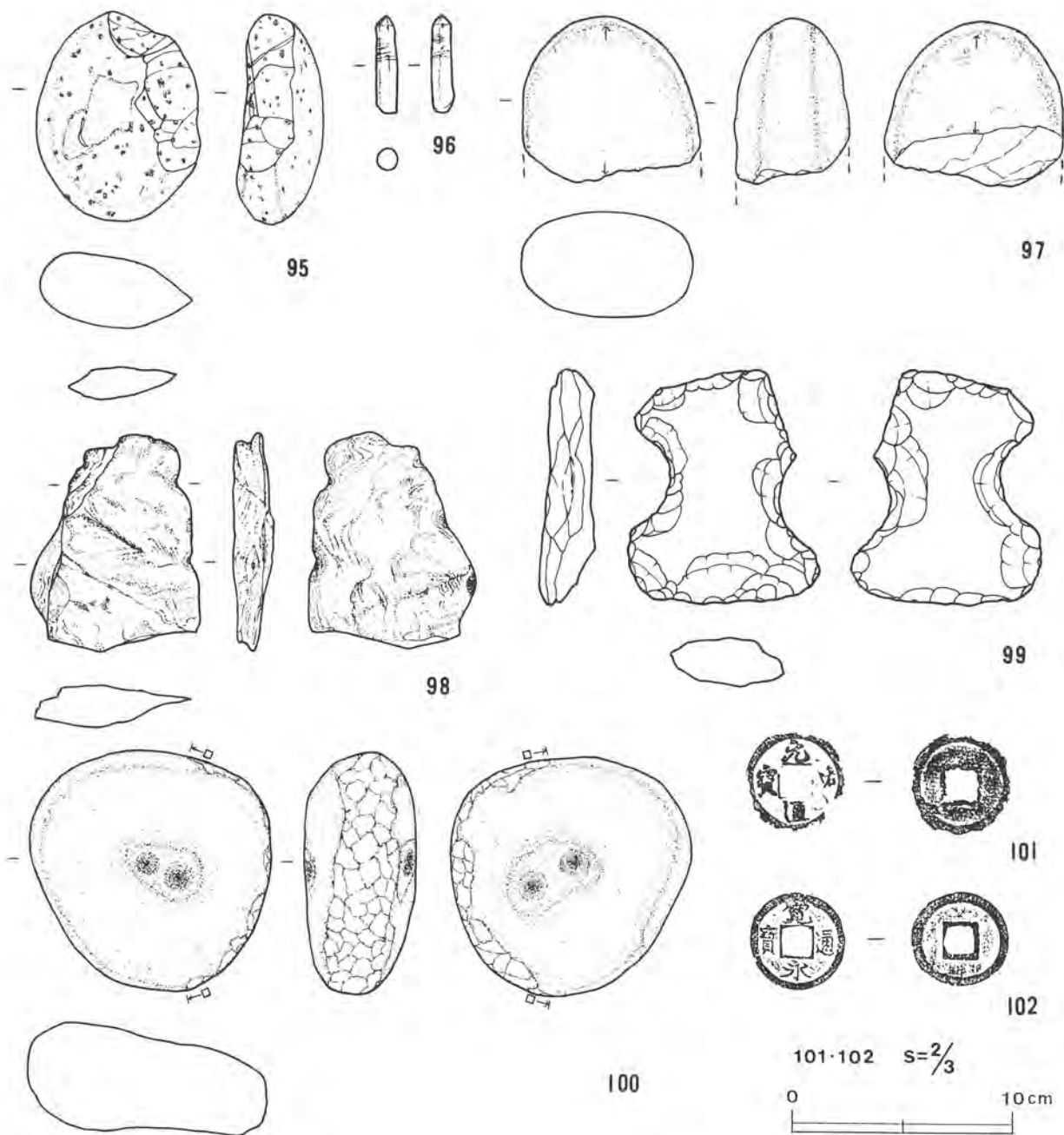
第159図 遺構外出土遺物実測・拓影図(2)



第160図 遺構外出土遺物実測・拓影図(3)



第161図 遺構外出土遺物実測図(4)



第162図 遺構外出土遺物実測図(5)

図版番号	器種	計測値(cm)			孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第160図73	紡錘車	5.2	5.2	2.3	9.0	70.9	100	グリッド	DP60 PL56
74	紡錘車	4.6	4.4	0.9	8.0	(21.2)	90	グリッド	DP61 PL56
75	紡錘車	(3.6)	(3.7)	(4.1)	8.0	(37.8)	70	グリッド	DP62 PL56
76	紡錘車	3.9	3.9	1.7	8.0	25.4	100	表探	DP64 PL56
77	土面子	2.3	1.7	0.8	-	2.1	100	グリッド	DP63

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第161図78	石 鏃	2.8	1.9	0.4	0.6	チャート	表 採	Q62
79	石 鏃	3.1	1.6	0.6	1.1	黒曜石	表 採	Q74 PL60
80	石 鏃	2.1	1.7	0.4	0.7	チャート	表 採	Q75 PL60
81	石 鏃	1.8	1.2	0.3	0.4	チャート	表 採	Q76 PL60
82	石 鏃	2.9	2.1	0.4	1.4	チャート	表 採	Q73 PL60
83	石 鏃	2.5	1.6	0.5	1.2	チャート	表 採	Q77 PL60
84	石 鏃	2.6	1.4	0.5	1.2	黒曜石	H9j。	Q92 PL60
85	石 鏃	1.5	1.3	0.4	0.8	チャート	27グリッド	Q172 破片
86	不明石器	8.5	6.1	1.0	65.6	安山岩	表 採	Q63 穂摘具の可能性有り PL62
87	穂摘具	6.8	3.9	1.7	53.5	董青石ホルンフェルス	57グリッド	Q64 PL62
88	敲石	8.8	5.1	2.3	110.6	砂岩	82グリッド	Q65 穂摘具の可能性有り
89	穂摘具	7.9	6.9	1.4	60.1	董青石ホルンフェルス	104グリッド	Q66
90	穂摘具	6.3	3.8	1.2	33.7	砂岩	表 採	Q80 PL62
91	磨石	9.9	5.3	4.8	351.3	安山岩	25グリッド	Q67 PL61
92	敲石	11.5	8.9	6.0	770.3	砂岩	94グリッド	Q70
93	磨石	(4.6)	(7.7)	(5.9)	(247.7)	硬砂岩	13グリッド	Q69 破片
94	磨石	(10.1)	(6.3)	(4.1)	(350.3)	董青石ホルンフェルス	34グリッド	Q68 半欠
95	礫器	9.6	7.6	4.1	345.4	グリーンタフ	118グリッド	Q71
96	不明石器	2.2	0.5	0.5	0.4	チャート	表 採	Q72 石錐の可能性有り
97	磨石	7.6	8.2	5.3	400.3	硬砂岩	表 採	Q85 半欠 PL61
98	不明石器	10.0	7.7	2.0	139.5	董青石ホルンフェルス	表 採	Q81 穂摘具の可能性有り
99	打製石斧	10.7	8.7	2.6	224.7	グリーンタフ	表 採	Q86 一部欠損 PL61
100	凹石	11.0	11.0	5.1	224.7	グリーンタフ	表 採	Q87 敲石兼用

遺構外出土古銭一覧表

図版番号	鑄名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	出土地点	備考
第161図101	元祐通寶	1086	北宋	表 採	M3
102	寛永通寶	1708	日本	表 採	M5

第4節 ま と め

当遺跡が所在する原田遺跡群は、平成2年から4年にかけての3年間にわたり調査しており、既に原田北・原田西・西原遺跡の成果は「原田北Ⅰ・原田西遺跡」、「原田北Ⅱ・西原遺跡」として報告されている。その報告書の中で、当遺跡に隣接している西原遺跡の弥生時代後期の時期区分をⅠ～Ⅴ期として集落について記述している。今回の調査報告においても同様にその時期区分を用い、弥生時代後期の住居跡57軒の時期別住居跡配置図を作成した。それをもとに、住居跡形態と集落について気づいた点を簡潔に記しまとめとする。

1 住居跡形態と集落について

時期区分は以下のように設定した。今回の調査区で確認された竪穴住居跡は57軒であるが、削平や重複等により時期を判断する良好な資料の得られなかった第36・38号住居跡は除外した。

原出口Ⅰ期	後期初頭（餓鬼塚式期）	第55・56・59・60号住居跡（4軒）
原出口Ⅱ期	後期前葉（志筑Ⅰ式期）	第4・5・6・13・14・23・44号住居跡（7軒）
原出口Ⅲ期	後期中葉（志筑Ⅱ式期）	第8・17・21・24・28・29・37・40・42・47・49・50・53号住居跡（13軒）
原出口Ⅳ期	後期後葉（長岡式期）	第12・15・16・35・43・46・48・54・57号住居跡（9軒）
原出口Ⅴ期	後期末葉（上稲吉式期）	第1～3・7・9～11・18～20・22・25～27・30～34・41・45・58号住居跡（22軒）

○原出口Ⅰ期

調査区内では当該期の軒数が最も少なく、4軒が確認されているだけである。いずれも調査区の北東部に位置しており、西原遺跡の近くである。西原遺跡では当該期の住居跡が3軒確認されている。平面形は、ほぼ正方形が2軒（第55・59号住居跡）、主軸方向が短辺となる長方形が2軒（第56・60号住居跡）である。炉の位置は第56号住居跡がやや西寄りであるが、その他は住居跡のほぼ中央部に位置し、主柱穴は壁寄りのものが多く、この時期の住居跡形態の特徴としてあげられる。

住居跡の床面積は10～20㎡が3軒、30～40㎡が1軒で、平均床面積は20.6㎡となる。第59号住居跡は34.8㎡と最も大きく、第55・56・59・60号住居跡をグループとする「世帯共同体」の中心的役割を果たしていたものと思われる。

○原出口Ⅱ期

この時期の住居跡は7軒で、調査区の中央部から西側にかけて分布している。平面形は隅丸方形3軒（第5・13・14号住居跡）、隅丸長方形2軒（第6・23号住居跡）、ほぼ方形1軒（第44号住居跡）で、第4号住居跡は重複により不明である。当該期では前期と同様に方形の形態が基本となっている。主柱穴は前期の住居跡と比較して、より中央に寄ってくる傾向があり、特に第13・23号住居跡に顕著にみられる。主柱穴を結んだ線は、方形2軒、長方形4軒となり、住居跡の平面形は方形が基本であるが、主柱穴の配置は長方形をとるように変化していく段階と思われる。炉の位置は、住居跡の中央にあるものが5軒、主軸線上の壁寄りにあるものが1軒である。しかし、主柱穴と炉の配置はいずれも同じで、主柱穴を結んでできる四辺形のほぼ中央に位置している。おそらく、Ⅰ期と同様に暖と明かりをとることに重きを置いた配置と考えられ、また炉を囲んでの交流・接待の場でもあったと推測される。

住居跡の床面積は10～20㎡が1軒、21～30㎡が4軒、31㎡以上が2軒で、平均床面積は26.9㎡となる。それらの住居跡には2つのグループがあったものと推測される。第4・5・6号住居跡のグループと第13・14・23

のグループであるが、第4・5号住居跡は方形周溝墓と溝に攪乱され正確な規模と形態が把握できない。後者のグループにおいては、第14号住居跡が床面積36.0㎡と群を抜いている。第14号住居跡は第13・14・23号住居跡をグループとする「世帯共同体」の中心的役割を果たしていたものと思われる。

○原出口Ⅲ期

この時期の住居跡は13軒で前期のほぼ倍の軒数に当たり、調査区の北東部を除く全域に広がっている。平面形は、方形が4軒（第37・49・50・53号住居跡）、隅丸方形が6軒（第17・21・24・28・40・42号住居跡）、隅丸長方形が3軒（第8・29・47号住居跡）で、依然として方形が基本形態ではあるが隅丸が全体の7割となる。この時期における住居跡形態の大きな変化として、貯蔵穴と考えられるピットの出現があげられる。貯蔵穴は第8・17・21・24・47・50号住居跡にみられ、平面形は円形や不整隅丸長方形で規模もさまざまである。無秩序であるかにみられるが、いずれも出入口付近、特に出入口施設に伴うと思われるピットの近くに多い。また、壁に接して構築されているものが5軒あり住居内の空間を有効に活用している。第47号住居跡では出入口施設に伴うと思われるピットと壁の間に設けられており工夫の跡がみられる。炉の位置は、住居跡の中央にあるものが5軒、主軸線上で出入口と反対壁寄りのものが8軒である。前期の炉の位置に比べ明らかに中央よりも北壁寄りが多くなっており、炉が北側に構築されるようになる移行段階の時期にあたるものである。住居内空間を有効に活用するための変化と考えられる。

住居跡の床面積は10～20㎡が4軒、21～30㎡が7軒、31㎡以上が2軒で、平均床面積は24.0㎡となる。配置から見て、第40・49・50号住居跡の3軒をグループとするもの、第8・42・47号住居跡の3軒をグループとするもの、第17・21・24・28・29号住居跡の5軒をグループとするものの3グループが存在していたと推測される。それぞれのグループは、規模から判断して第29・47・50号住居跡を中心とし、3～5軒で構成された「世帯共同体」が成立していたと思われる。これら3グループがまとまった機能的な配置になっていることから、「世帯共同体」間同士での協調作業が行われていたのではないかとと思われる。

○原出口Ⅳ期

この時期の住居跡は9軒で、当該期の前後の時期に比べ減少しているが、これは集落の中心が他地区に移行したためと思われる。分布範囲は調査エリアの北側半分に位置しており、中でも中央から西側により集中している。平面形は、方形が1軒（第57号住居跡）、長方形が1軒（第35号住居跡）、隅丸長方形が7軒（第12・15・16・43・46・48・54号住居跡）となり、明らかに前期までの方形から長方形基本への移行段階として捉えることができる。支柱穴の配置は方形が第48号住居跡のみで、他は長方形となっており、このことについても長方形化が生じている。炉の位置は、主軸線上の北寄りでは2箇所の北側支柱穴間線に接する付近にある。第35号住居跡は支柱穴が未確認なため炉との位置関係は不明であるが、他の住居跡においては、明らかに出入り口から遠ざかり、北側に寄る炉の構築方法が確立した段階と言える。これは、食生活や生活習慣の変化によるものなのかは定かでないが、住居跡内空間利用の意識と炉の機能や目的に大きな変革が生じた結果と思われる。Ⅲ期で見られた貯蔵穴はこの時期では確認されていない。

住居跡の床面積は10～20㎡が2軒、21～30㎡が4軒、31㎡以上が3軒で、平均床面積は26.9㎡となる。当調査エリア内で最大規模である第12号住居跡が当該期にあり、床面積は45.6㎡に及ぶ。少なくとも第12・15・16号住居跡と、第43・46・48号住居跡をグループとする2つの「世帯共同体」が存在していたものと思われる。おそらく、第12・46号住居跡がその中心的役割を担っていたのであろう。

○原出口Ⅴ期

この時期の住居跡は22軒で、1軒を除き調査エリアの西側半分に集中している。当時期の住居跡が全体の約

4割を占めており全盛期であったと思われる。さらに、隣接している原田北遺跡にも当該期の住居跡が存在しており、集落の中心は当エリアよりも西寄りに存在していたと考えられる。平面形は隅丸方形6軒(第1・2・9・11・31・34号住居跡)、隅丸長方形14軒(第7・10・18・19・20・22・25・26・27・30・33・41・45・58号住居跡)、不明2軒(第3・32号住居跡)である。隅丸長方形が6割強を占めているが、Ⅳ期では見られなかった隅丸方形が再び出現しているのが特徴である。また、Ⅲ期で出現しⅣ期では消滅してしまった貯蔵穴が再度第1・2・34号住居跡で見られるようになった。この3軒はいずれも隅丸方形の住居跡であり、住居跡形態と貯蔵穴の再出現とは深い係わりがあるものと推測される。貯蔵穴の位置は3軒とも同様に、出入口施設側の壁中央付近に接して構築されている。形態は第1号住居跡が円形、第2号住居跡が隅丸長方形、第34号住居跡が不定形と様々である。炉の位置は北寄り、北側支柱穴の中間に位置するものが16軒、北側寄りであるが北側支柱穴間線に接するものが5軒である。残る1軒(第32号住居跡)は第1号古墳と重複し、さらに西側がエリア外であるため支柱穴と炉の位置関係が不明である。第26号住居跡には2基の炉が確認されているが、同時に存在していたのではなく住居跡の中央にあったものが北側へ作り替えられたものと考えられる。また第18号住居跡の炉は瓢箪形で括れをもっており、最初からこの形態であったのではなく北側へ拡張したことによるものと思われる。炉の北側への移動はⅢ期に見られるようになり、さらにⅣ期では北側支柱穴間線に接する位置に変わり、当期では北側支柱穴間内へと変化していくことがわかり、このことは原田北・西原遺跡の報告内容とも一致する。この変化の要因が住居跡内空間利用に対しての意識変革によるものか、炉の使用目的の変化(食生活の変化も含めて)によるものなのかは今後の検討課題である。

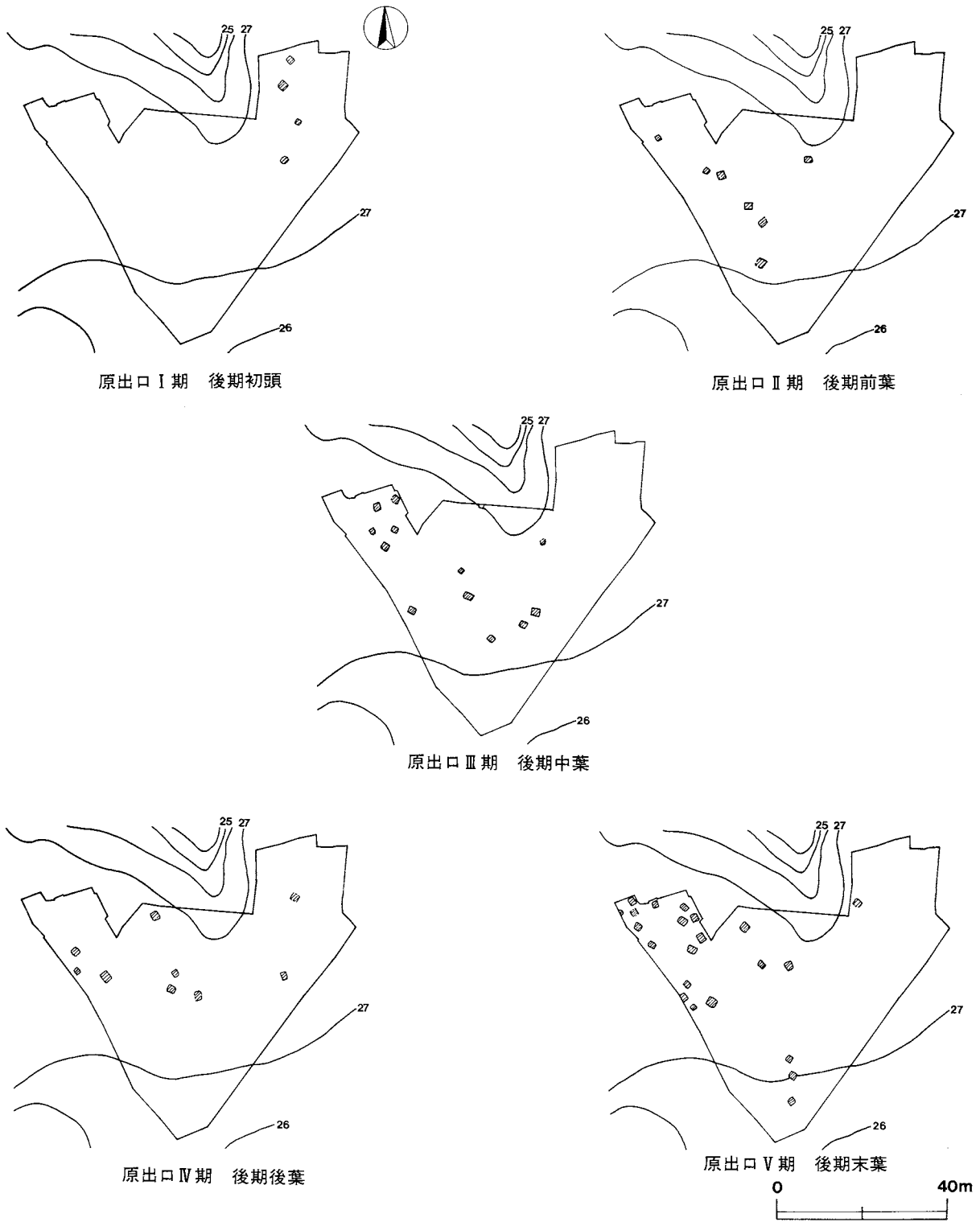
住居跡の床面積は、10～20㎡が7軒、21～30㎡が8軒、31㎡以上が7軒で、平均床面積は25.9㎡である。配置からみて、5グループが存在していたと思われる。第1・2・3号住居跡の3軒をグループとするもの、第7・9・10・11号住居跡の4軒をグループとするもの、第18・20・25・26・27号住居跡の5軒をグループとするもの、第19・22・30・31・32・33号住居跡の6軒をグループとするもの、第34・41・45号住居跡の3軒をグループとするもので、それぞれが「世帯共同体」として機能していたものと思われる。各グループの中でも第1・7・20・19・34号住居跡は規模が大きく、特に第7号住居跡は床面積が42.4㎡もあり、それぞれが「世帯共同体」の中心的役割を果たしていたと考えられ、各「世帯共同体」がⅢ期と同様に比較的近い位置にあることから判断して、「世帯共同体」間同士での協調作業が行われていたのではないだろうか。

参考文献

- (1) 大洗町教育委員会 『茨城県大洗町長峰遺跡』 1973年 12月
- (2) 井上義安 『髭釜鹿島線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査概報』 1980年 3月
- (3) 都出比呂志 『日本農耕社会の成立過程』 1989年 2月
- (4) 茨城県教育財団 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19 長峰遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第58集 1990年 3月
- (5) 茨城県教育財団 「一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 二の宮貝塚・大日山古墳群・思川遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第65集 1991年 3月
- (6) 茨城県教育財団 「土浦工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 原田北遺跡Ⅰ・原田西遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第80集 1993年 3月
- (7) 茨城県教育財団 「土浦工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 原田北遺跡Ⅱ・西原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第85集 1994年 3月

(8) 勝田市史編纂委員会 『勝田市史別編Ⅲ 東中根遺跡』 1982年 3月

(9) 海老沢稔 「弥生時代後期の住居形態について ——霞ヶ浦周辺地域を中心として——」 『婆良岐考古』
第15号 婆良岐考古同人会 1993年 6月



第163図 時期別遺構配置図

写真図版

原出口遺跡



第1号古墳出土遺物



原出口遺跡 A 地区全景



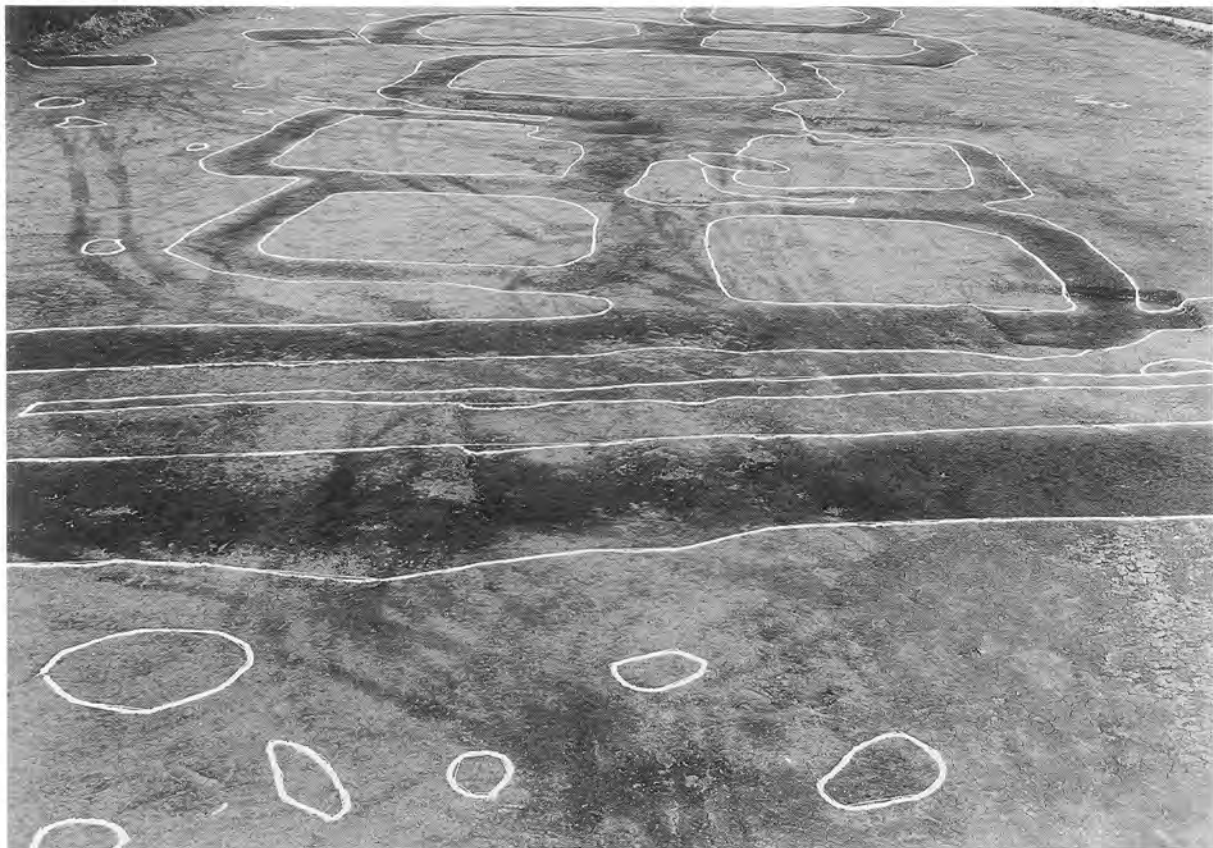
原出口遺跡確認状況



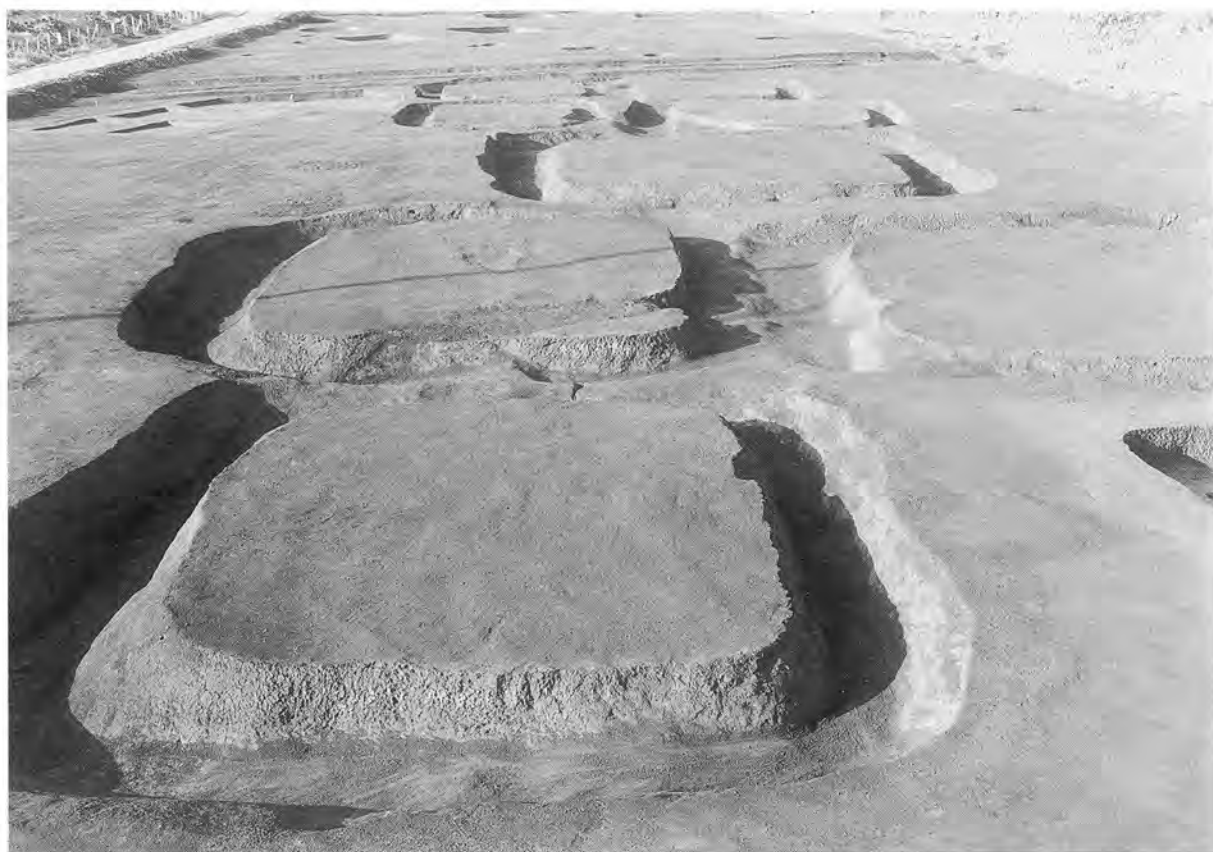
原出口遺跡A地区全景



原出口遺跡B地区全景



原出口遺跡遺構確認状況



第1～8号方形周溝墓



第5～8号方形周溝墓



第7・8号方形周溝墓



第1号方形周溝墓



第2・3号方形周溝墓



第4号方形周溝墓遺物出土狀況

PL 6

原出口遺跡



第1号古墳



第1号古墳遺物出土状況



第1号古墳



第1号古墳遺物出土状況



第1号古墳・第19号住居跡遺物出土状況



第1号古墳遺物出土状況



第 3 号溝



第 4 号溝



第1～3号溝



溝交差部



第6号溝交差部



第1・7・8号溝



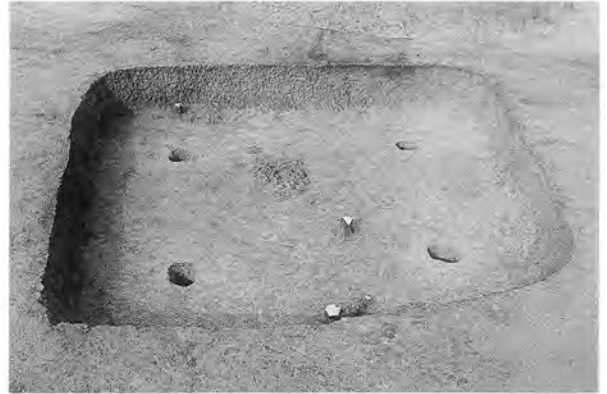
原出口遺跡A地区全景



原出口遺跡B地区全景



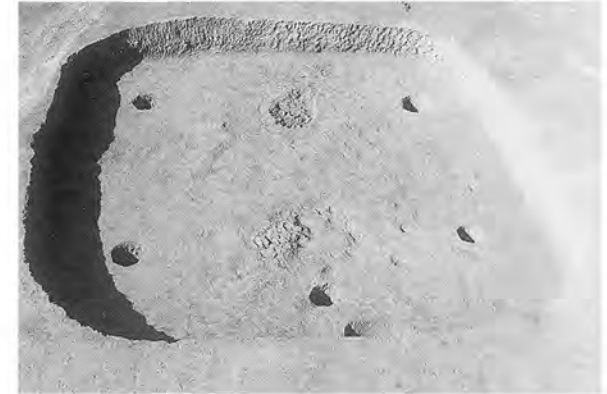
第1号住居跡



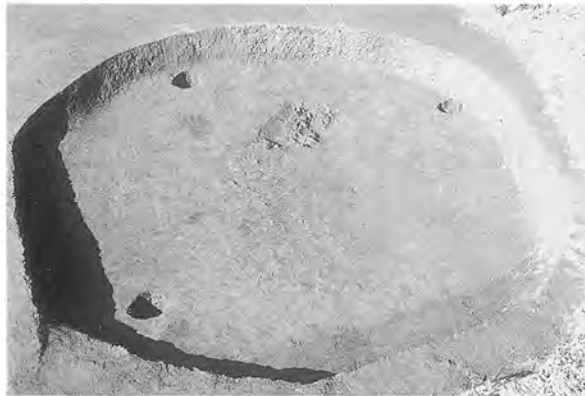
第1号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡遺物出土状況



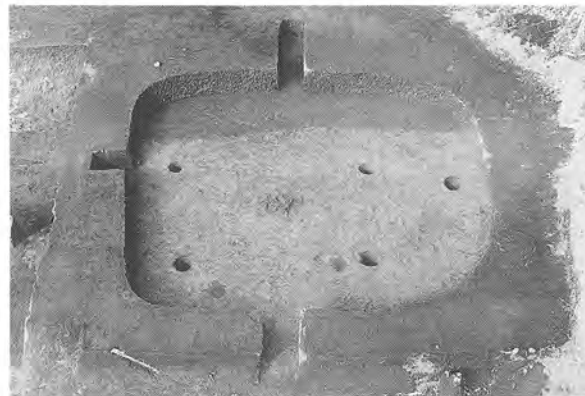
第2号住居跡



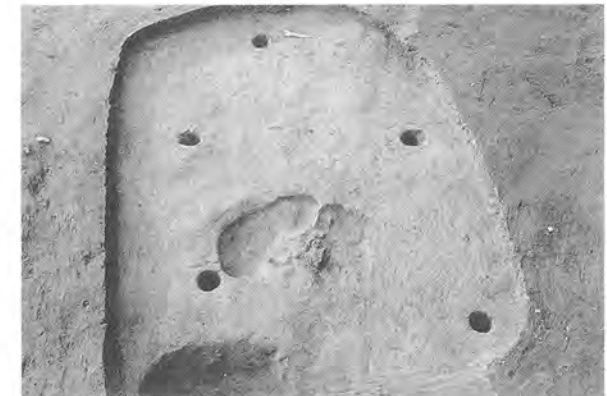
第3号住居跡



第5号住居跡遺物出土状況



第5号住居跡



第6号住居跡



第 3 号住居跡遺物出土状況(1)



第 3 号住居跡遺物出土状況(2)



第7号住居跡



第7号住居跡遺物出土状況



第8号住居跡遺物出土状況



第8号住居跡



第9号住居跡遺物出土状況(1)



第9号住居跡遺物出土状況(2)



第9号住居跡遺物出土状況(3)



第9号住居跡



第10号住居跡遺物出土状況



第11号住居跡遺物出土状況



第11号住居跡



第12号住居跡遺物出土状況



第12号住居跡遺物出土状況



第12号住居跡



第13号住居跡



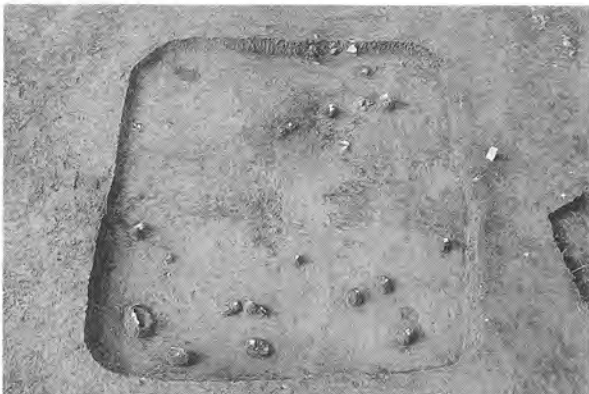
第14号住居跡遺物出土状況



第14号住居跡



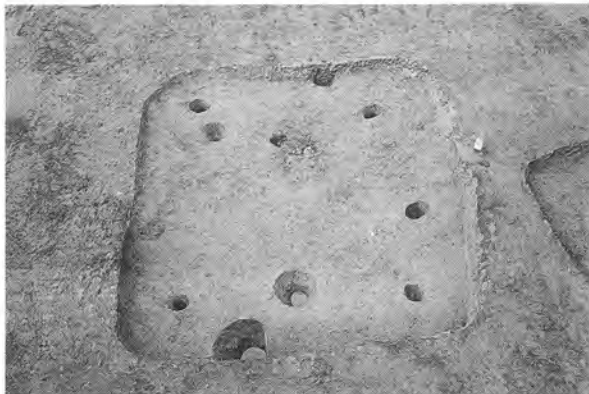
第15号住居跡



第16号住居跡遺物出土状況(1)



第16号住居跡遺物出土状況(2)



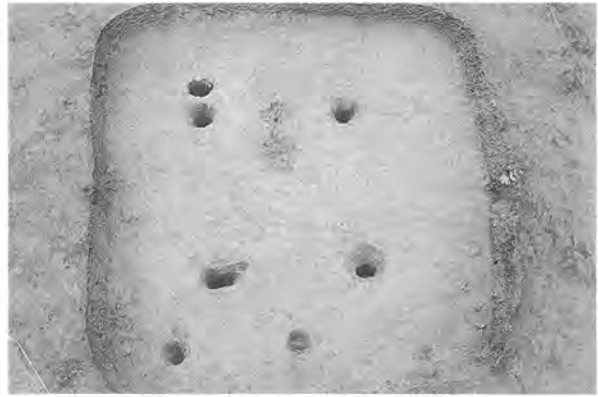
第16号住居跡



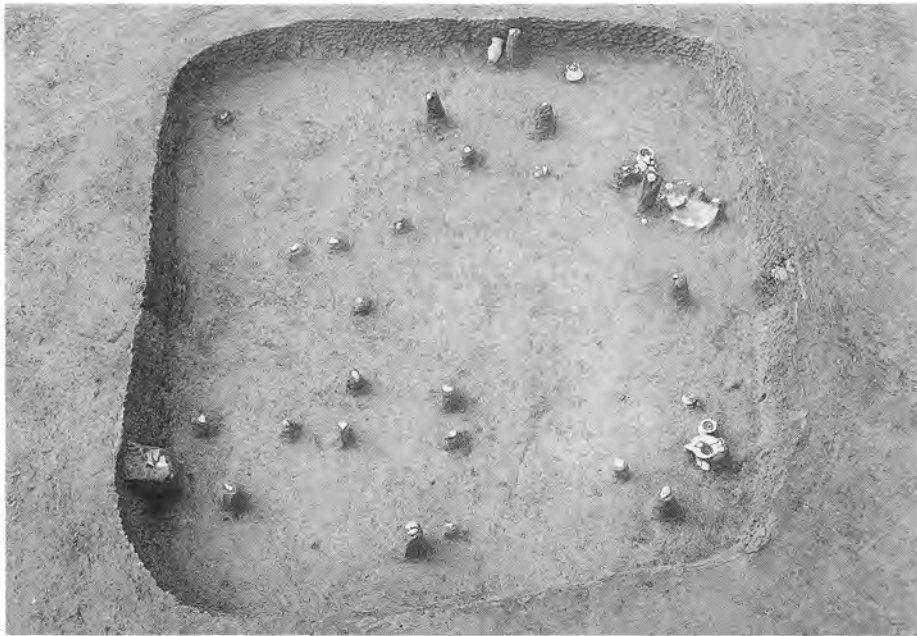
第17号住居跡(1)



第17号住居跡(2)



第18号住居跡



第18号住居跡遺物出土状況(1)



第18号住居跡遺物出土状況(2)



第18号住居跡遺物出土状況(3)



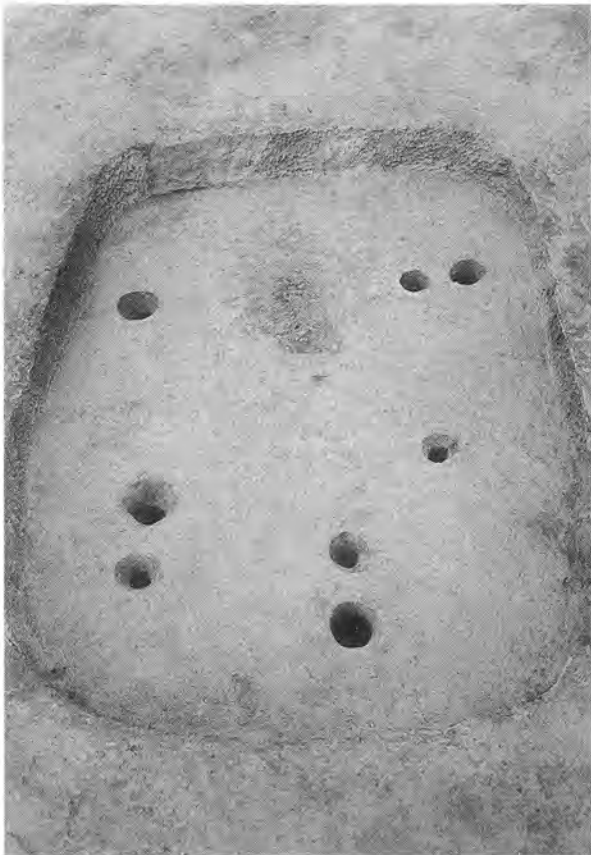
第18号住居跡遺物出土状況(4)



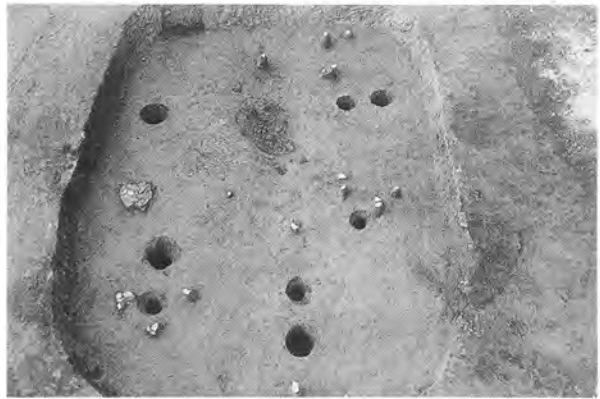
第18号住居跡遺物出土状況(5)



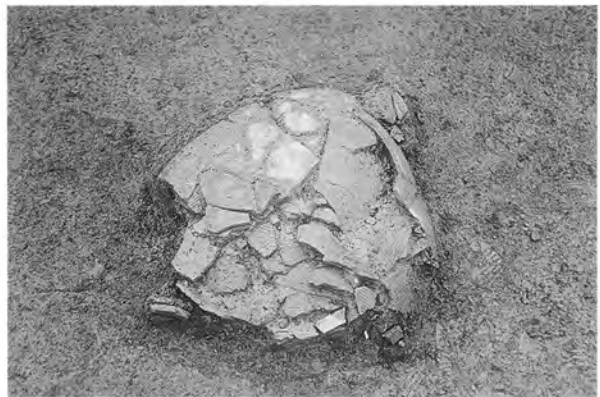
第18号住居跡遺物出土状況(6)



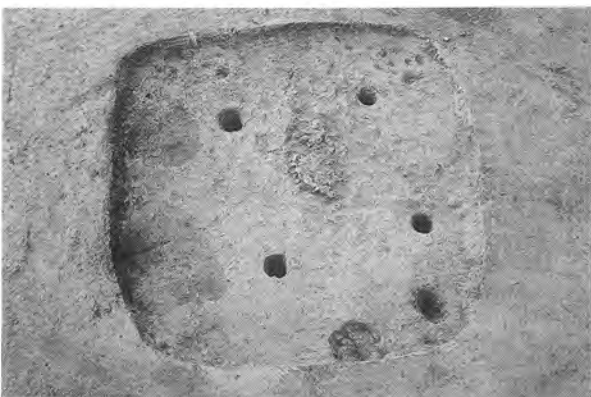
第20号住居跡



第20号住居跡遺物出土状況(1)



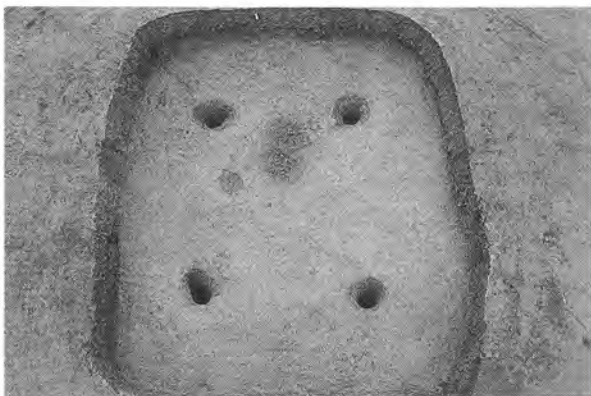
第20号住居跡遺物出土状況(2)



第21号住居跡



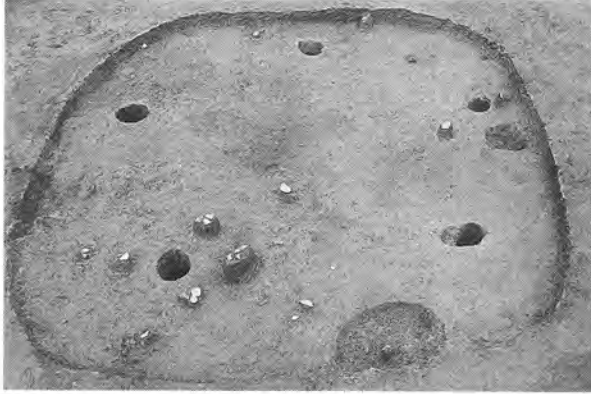
第22号住居跡遺物出土状況



第22号住居跡



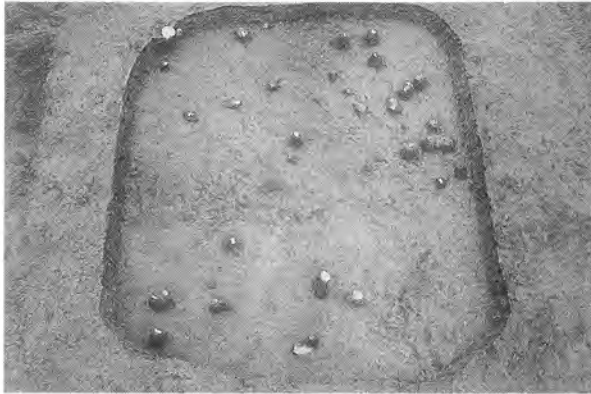
第23号住居跡



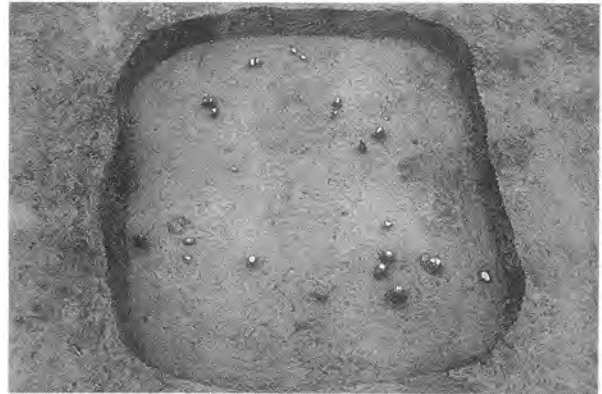
第24号住居跡遺物出土状況



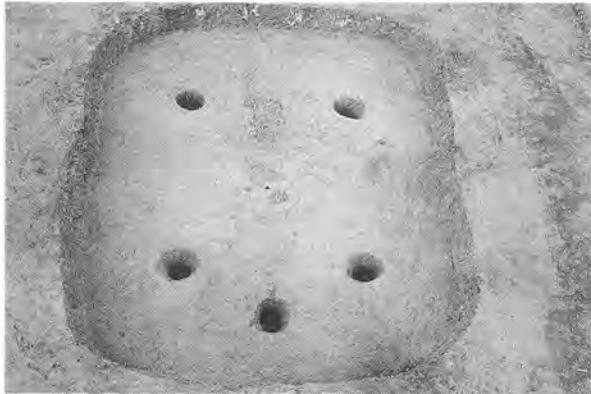
第24号住居跡



第25号住居跡遺物出土状況



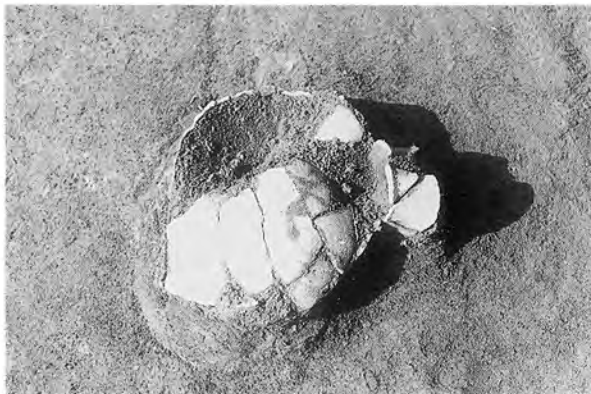
第26号住居跡遺物出土状況



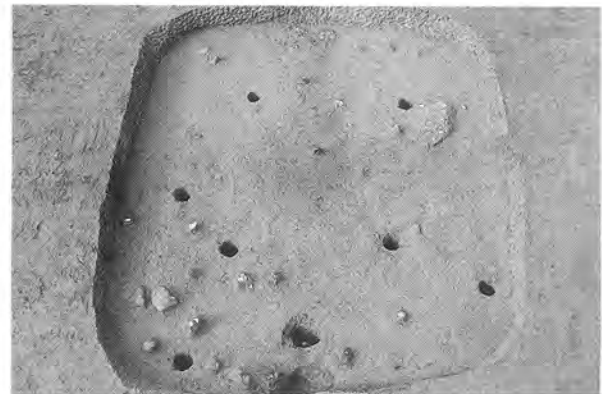
第26号住居跡



第27号住居跡遺物出土状況(1)



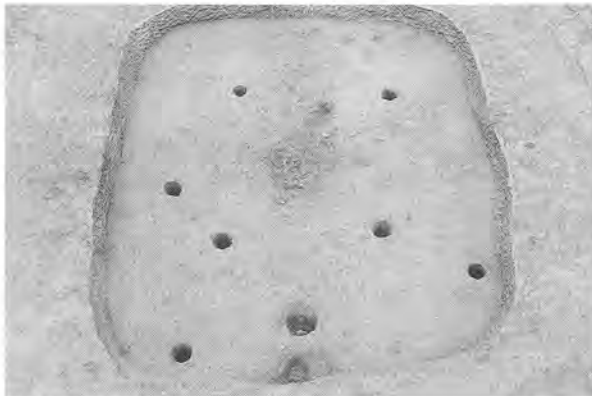
第27号住居跡遺物出土状況(2)



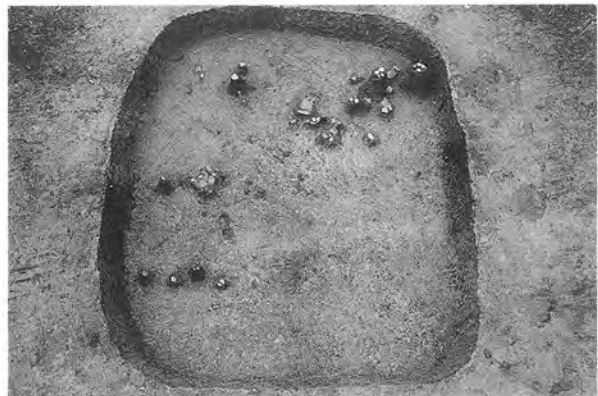
第29号住居跡遺物出土状況



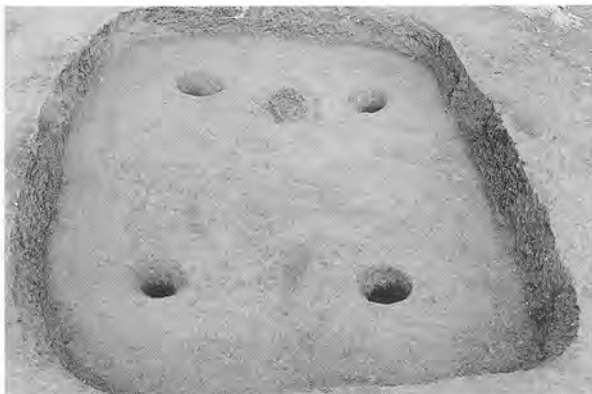
第27・28号住居跡



第29号住居跡



第30号住居跡遺物出土状況



第30号住居跡



第31号住居跡



第34号住居跡遺物出土状況(1)



第34号住居跡遺物出土状況(2)



第34号住居跡



第35号住居跡遺物出土状況(1)



第35号住居跡遺物出土状況(2)



第35号住居跡遺物出土状況(3)



第35号住居跡



第36号住居跡



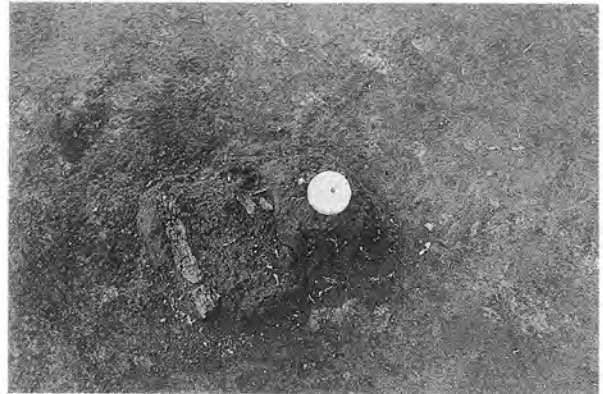
第37号住居跡



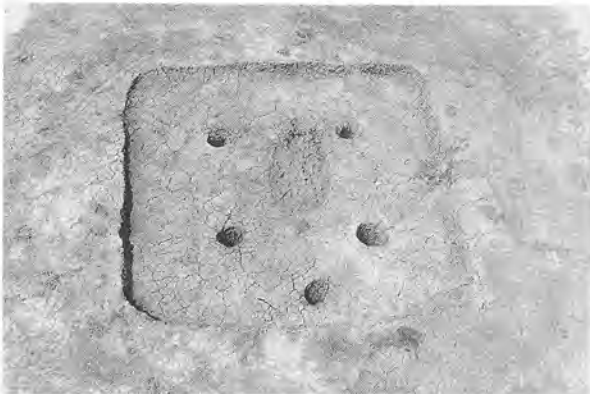
第38号住居跡



第40号住居跡遺物出土状況(1)



第40号遺物出土状況(2)



第40号住居跡



第40号住居跡炉



第41号住居跡遺物出土状況(1)



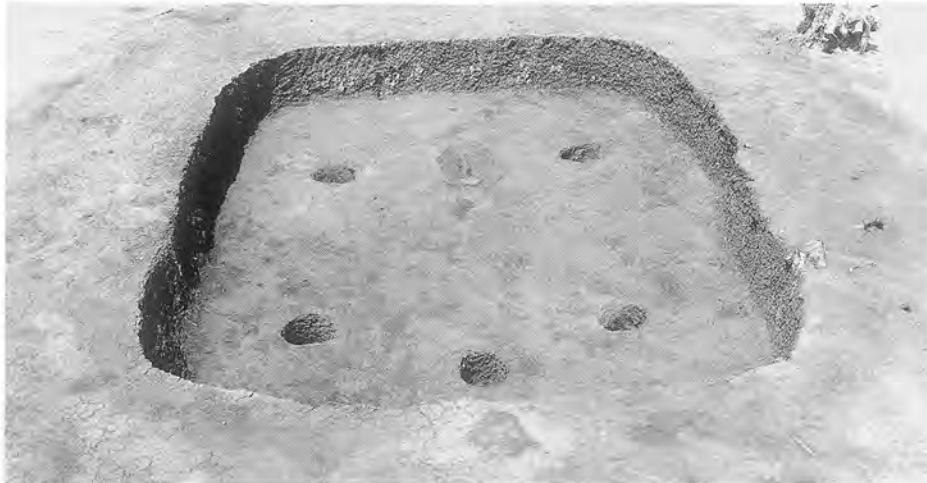
第41号住居跡遺物出土状況(2)



第41号住居跡遺物出土状況(3)



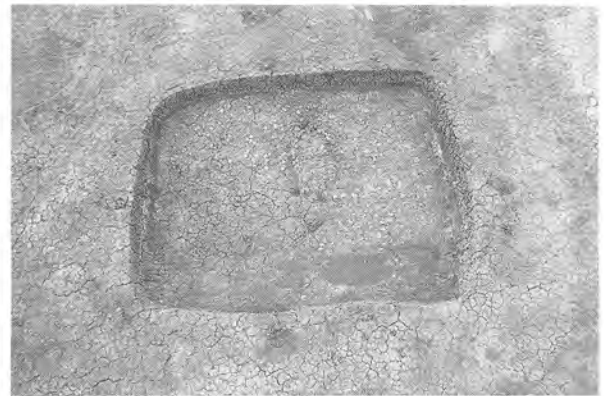
第41号住居跡炉



第41号住居跡



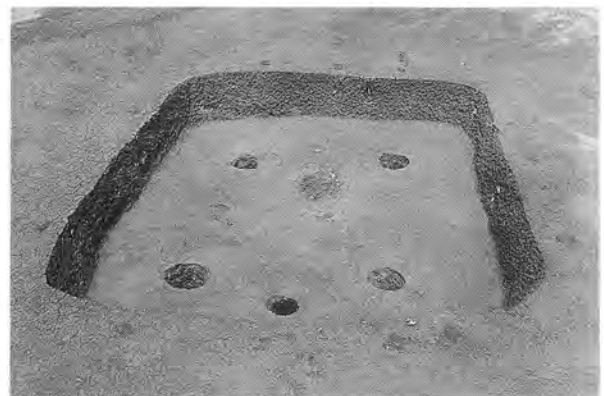
第42号住居跡遺物出土状況



第42号住居跡



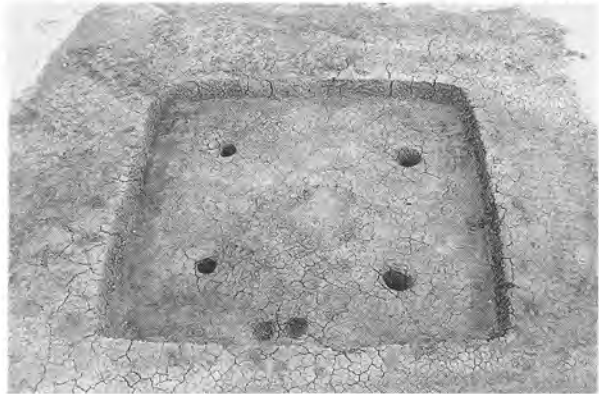
第43号住居跡遺物出土状況



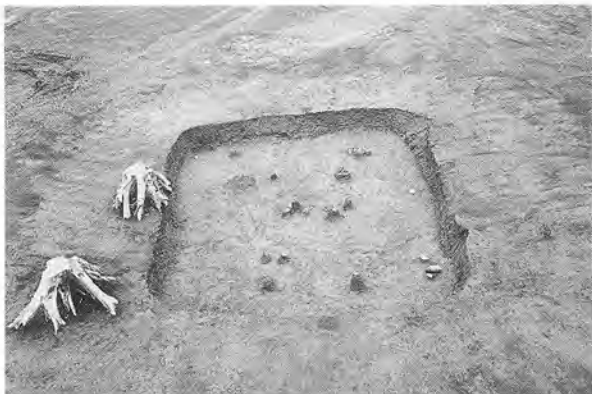
第43号住居跡



第44号住居跡遺物出土状況



第44号住居跡



第45号住居跡遺物出土状況(1)



第45号住居跡遺物出土状況(2)



第45号住居跡



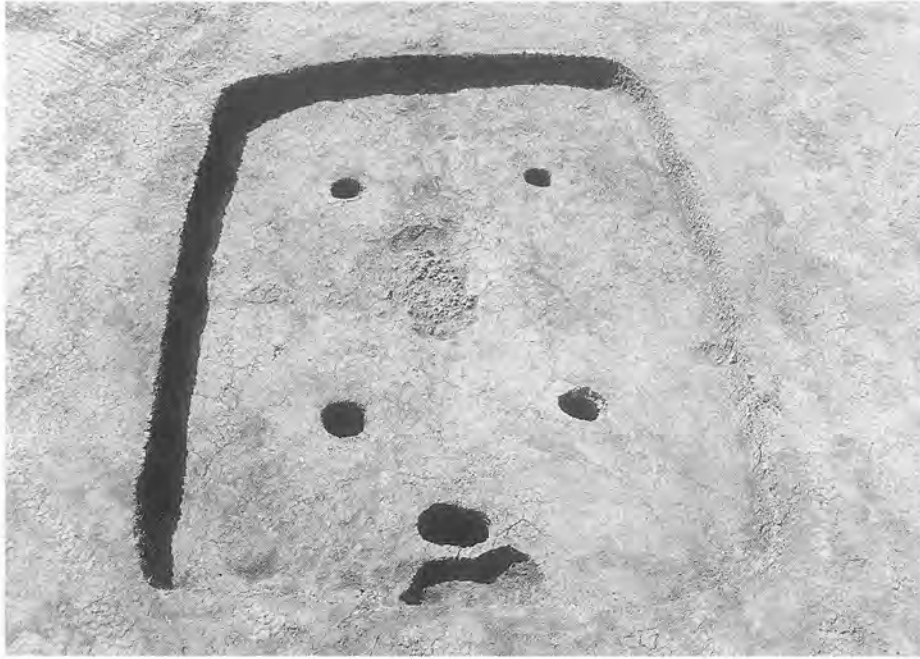
第46号住居跡遺物出土状況(1)



第46号住居跡遺物出土状況(2)



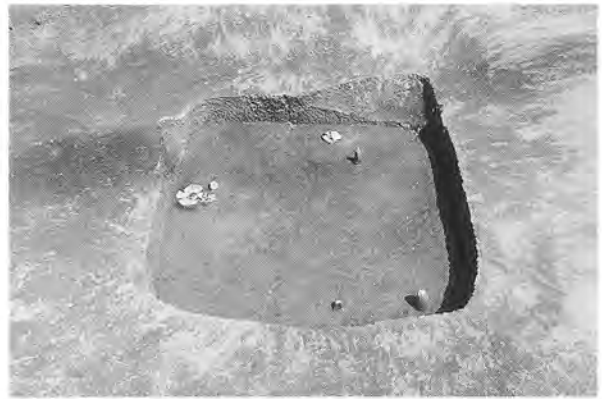
第46号住居跡



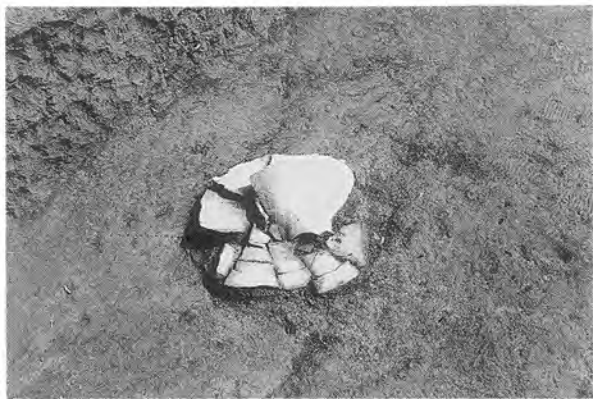
第47号住所跡



第48号住居跡遺物出土状況(1)



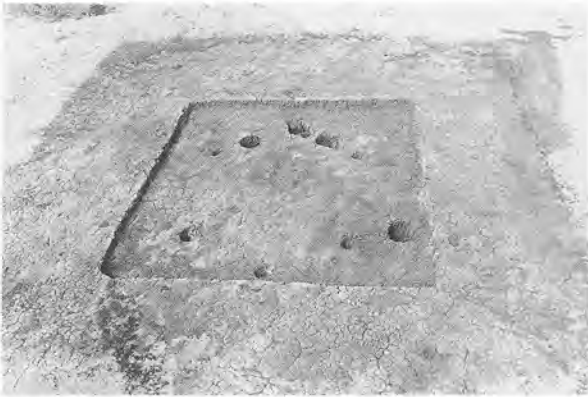
第48号住居跡遺物出土状況(2)



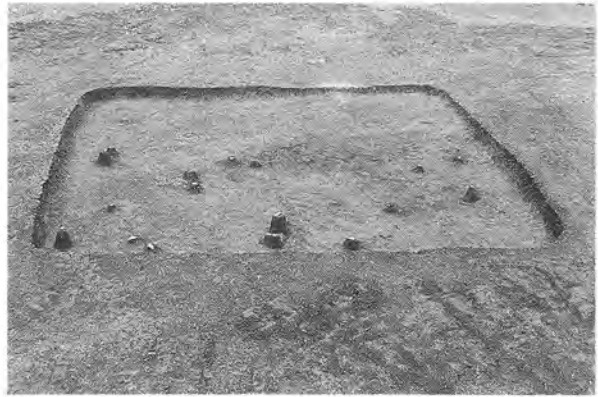
第48号住居跡遺物出土状況(3)



第48号住居跡



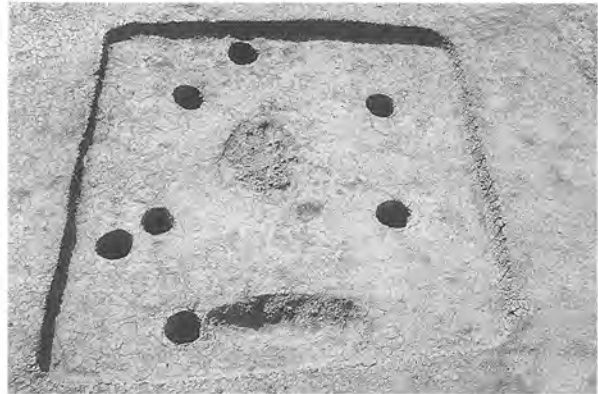
第49号住居跡



第50号住居跡遺物出土状況(1)



第50号住居跡遺物出土状況(2)



第50号住居跡



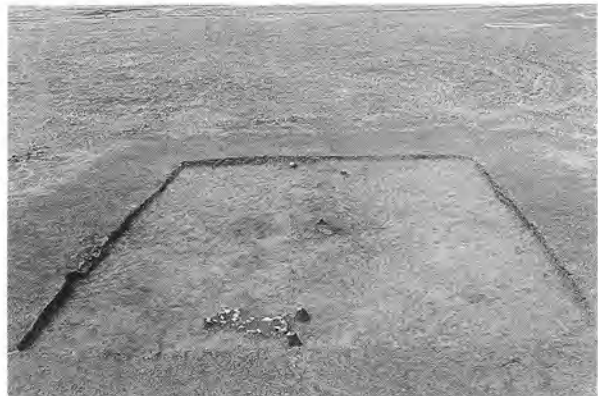
第53号住居跡



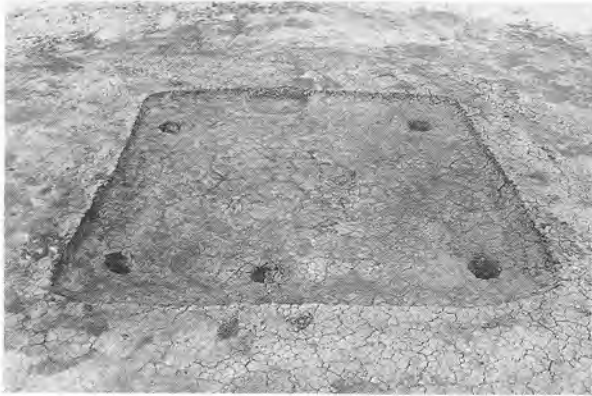
第54号住居跡遺物出土状況(1)



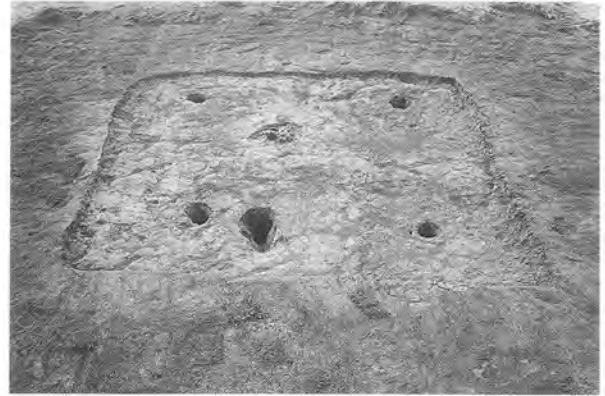
第54号住居跡遺物出土状況(2)



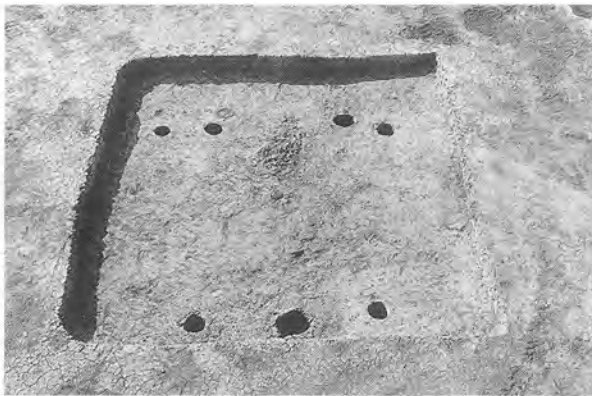
第55号住居跡遺物出土状況



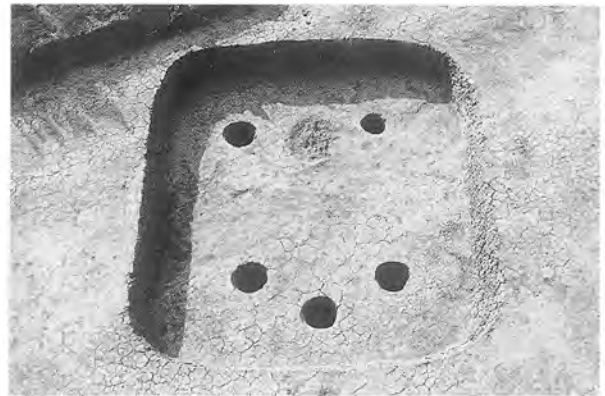
第55号住居跡



第56号住居跡



第57号住居跡



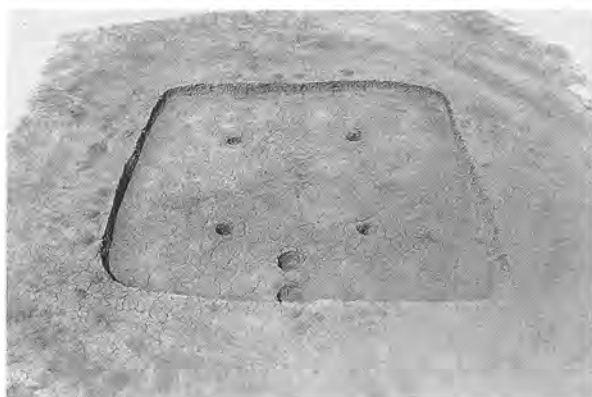
第58号住居跡



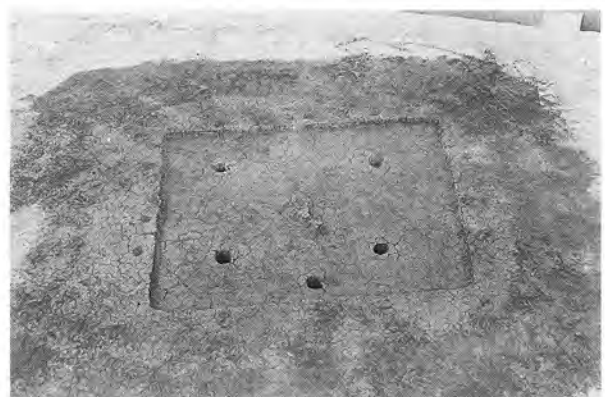
第59号住居跡遺物出土状況(1)



第59号住居跡遺物出土状況(2)



第59号住居跡



第60号住居跡



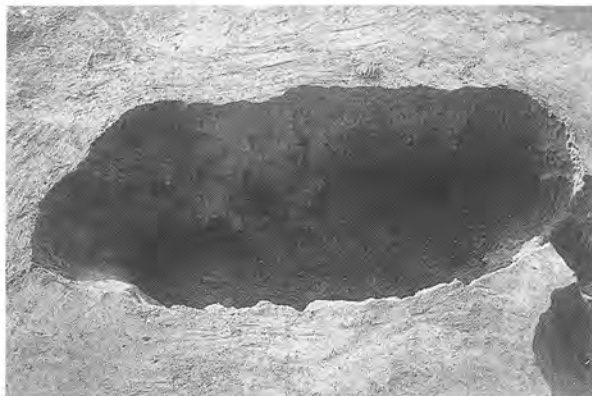
第 3 号土器棺墓



第 4 号土器棺墓



第 1 号土坑



第 8 号土坑



第18号土坑



第19号土坑



第28号土坑



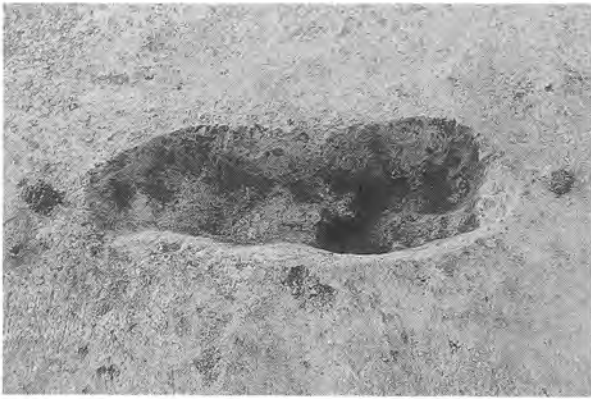
第38号土坑



第45号土坑



第47号土坑



第50号土坑



第53号土坑



第57号土坑



第64号土坑



第69号土坑



第72号土坑



第82号土坑



第87号土坑



第88号土坑



第92号土坑



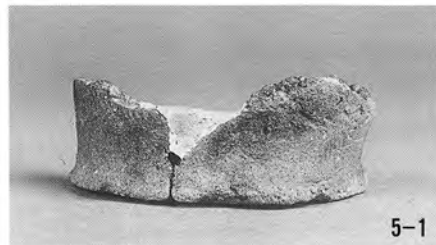
第94号土坑



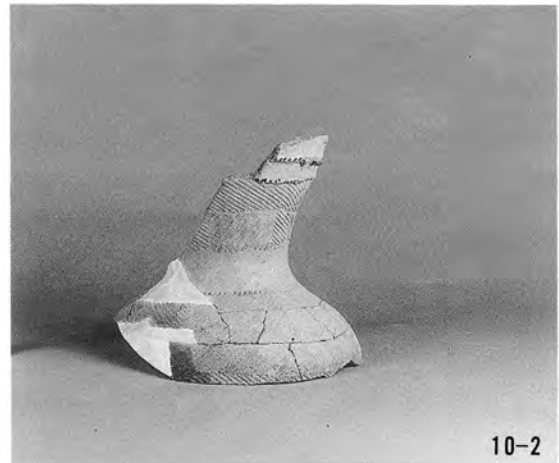
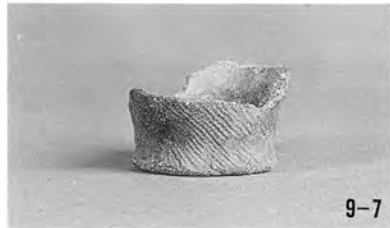
第99号土坑

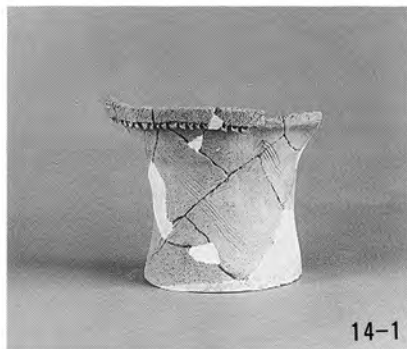
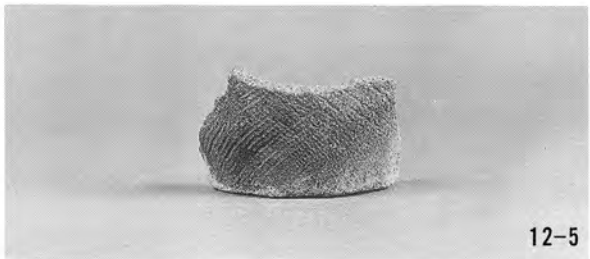


第2号土器棺墓

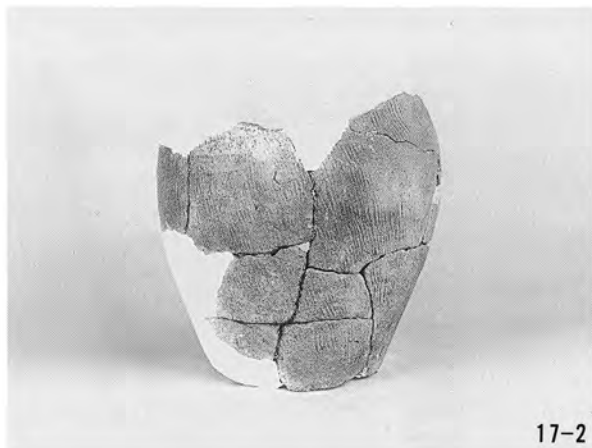


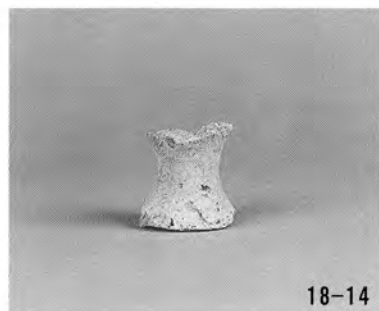
第1・3・4・5・6・7号住居跡出土遺物



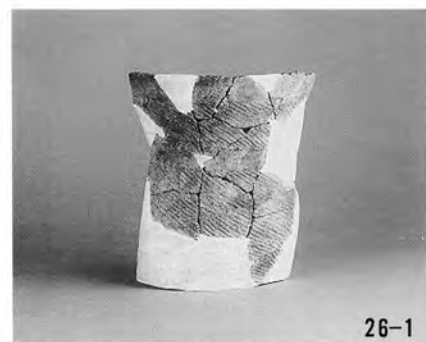
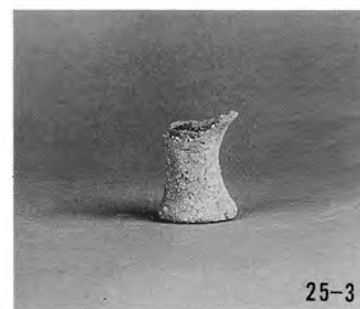


第12・14・16号住居跡出土遺物





第18・19号住居跡出土遺物



第20・22・23・24・25・26号住居跡出土遺物



27-1



27-2



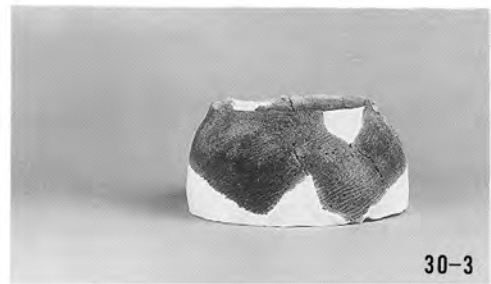
27-3



29-1



30-2



30-3



30-1



32-1



31-2



32-5



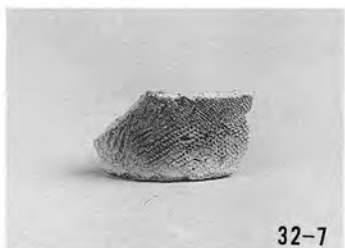
32-6



32-4



33-2



32-7



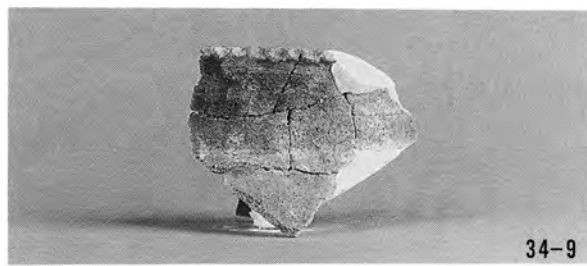
33-3



33-7



34-3



34-9



34-6



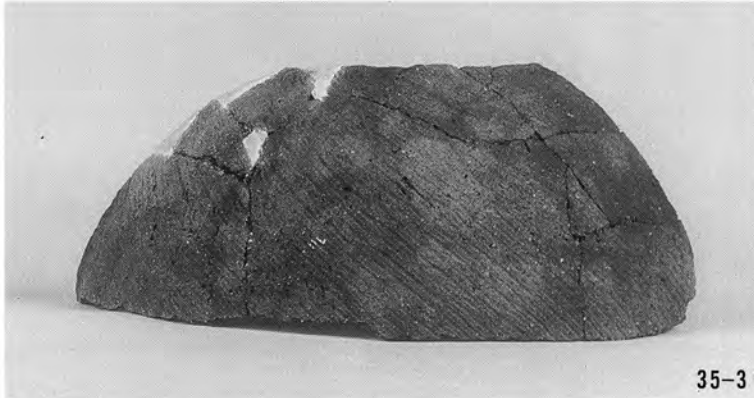
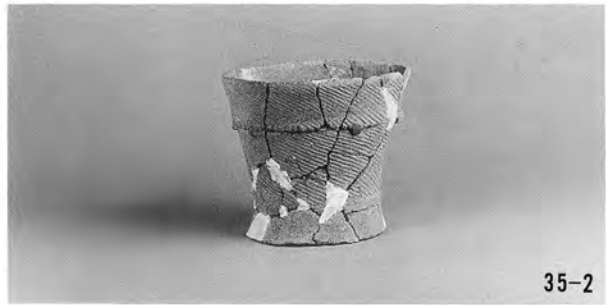
34-11



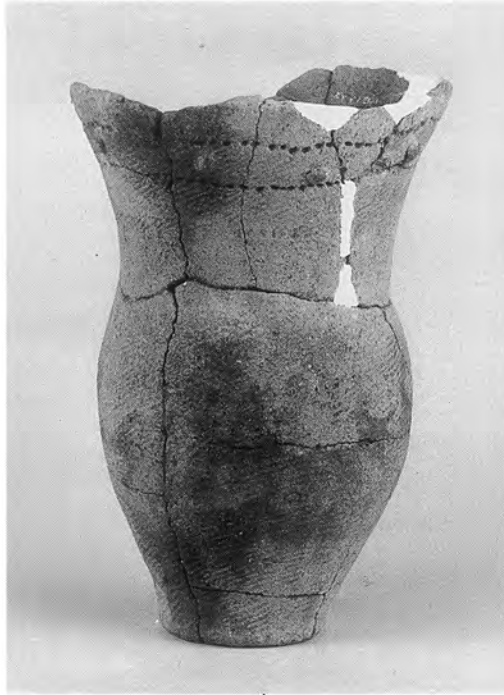
34-7



34-12



第35・41・43・44号住居跡出土遺物



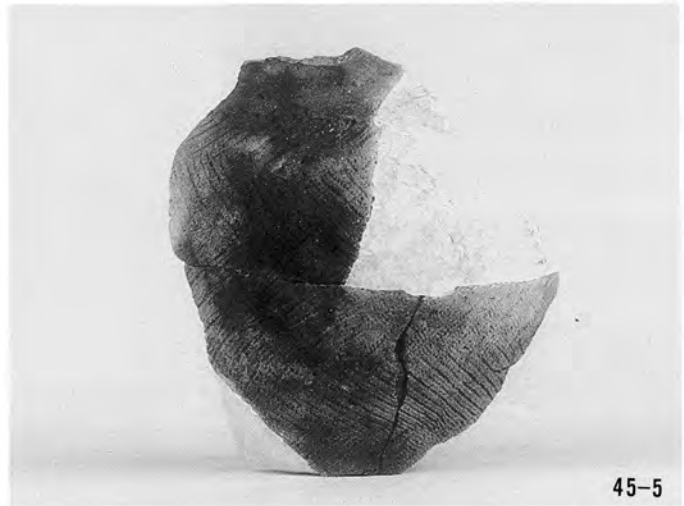
45-2



45-3



45-1



45-5



45-4



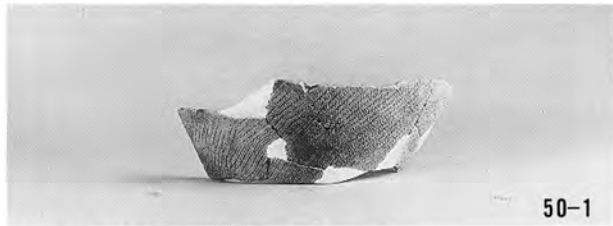
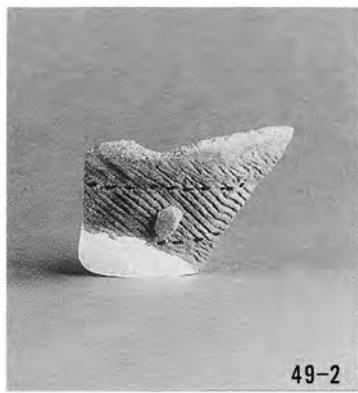
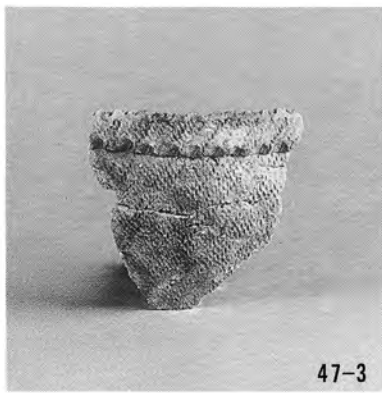
45-7



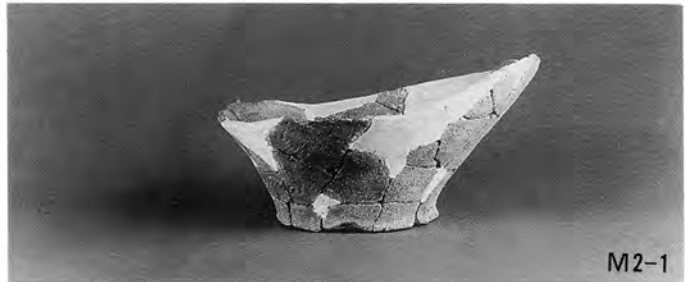
45-6



45-8



第46・47・48・49・50号住居跡出土遺物



第54・59号住居跡・第2・3号土器棺墓出土遺物



1-2



2-2



2-1

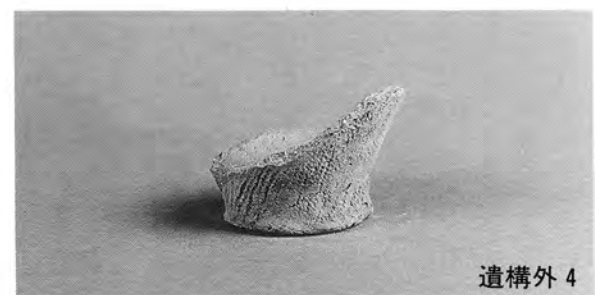
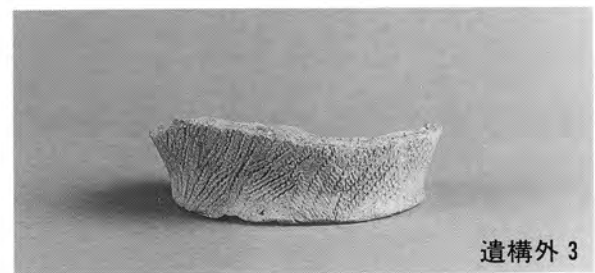
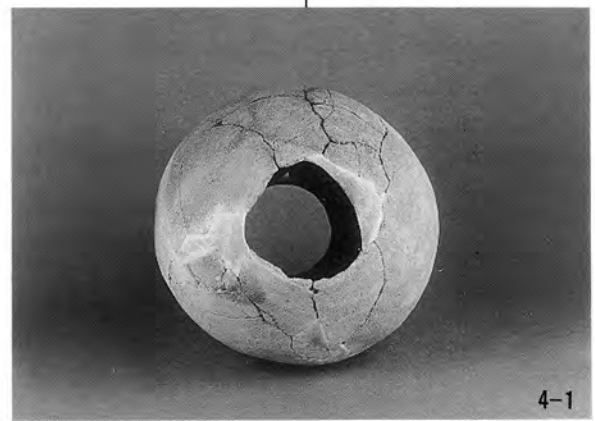
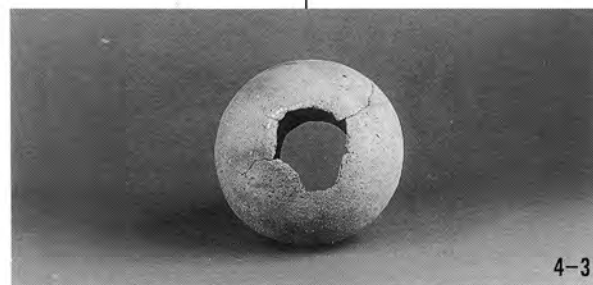
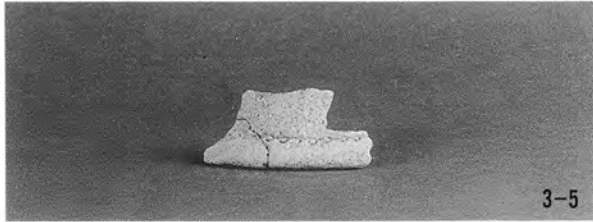


2-3



2-4

第1・2号方形周溝墓出土遺物



第3・4号方形周溝墓・遺構外出土遺物



1



2



3



4



5



6



7

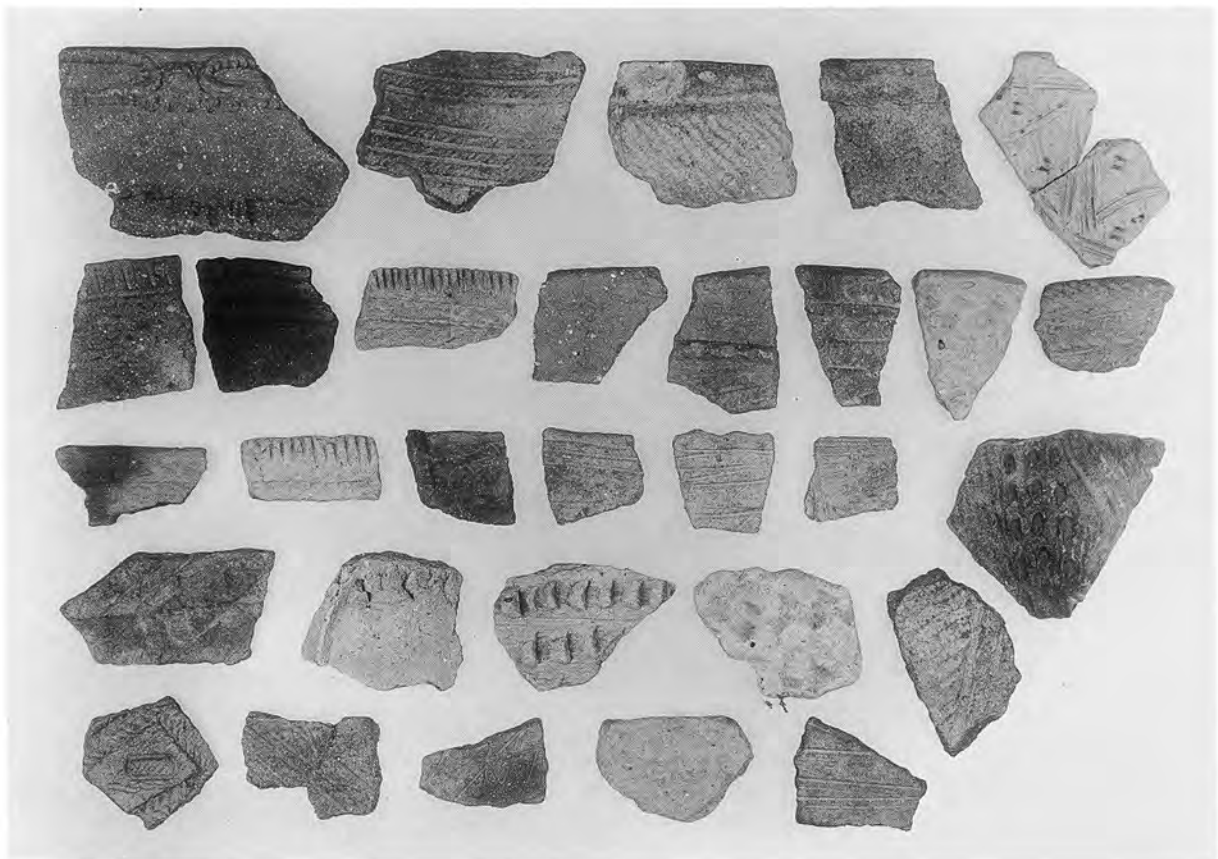


21

第1号古墳出土遺物



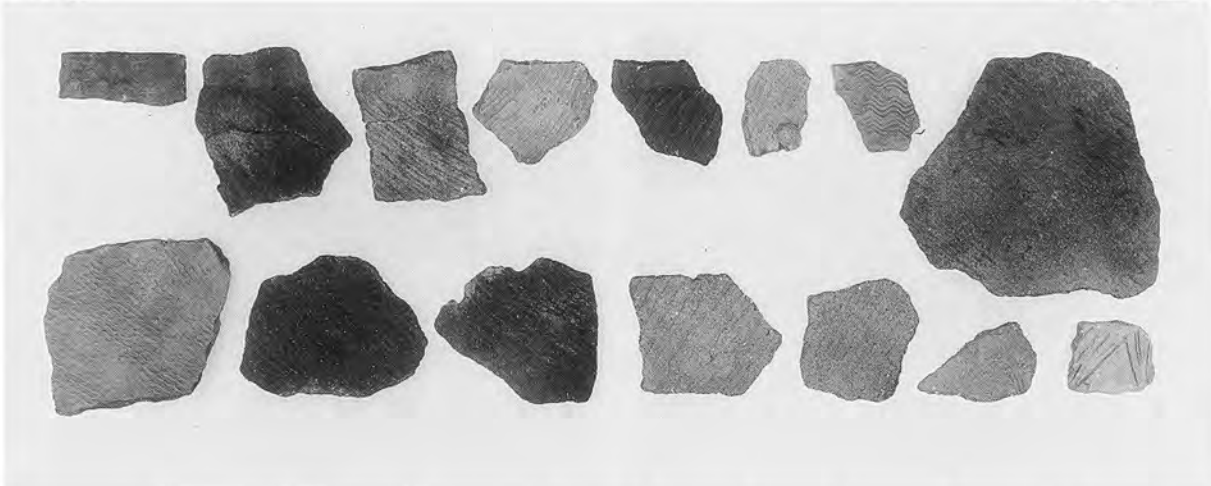
2



36	40	37	34	14			
24	41	26	35	42	23	28	25
29	26	43	15	17	16	39	
19	33	32	30	38			
22	21	18	31	20			



13



SI-5	2	7	8	9	10	3	4	11
	12	13	14	15	16	5	6	



SI-7	7	8	9	10	12	17
	13	14	18	15	16	11

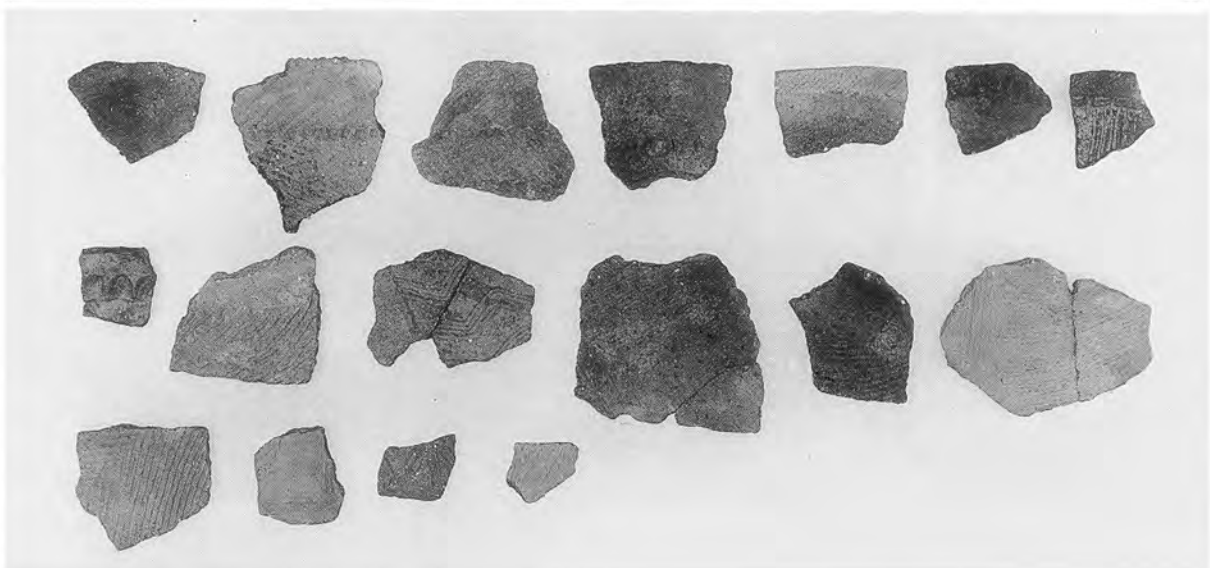


SI-22	13	7	8	12	
		9	10	11	14

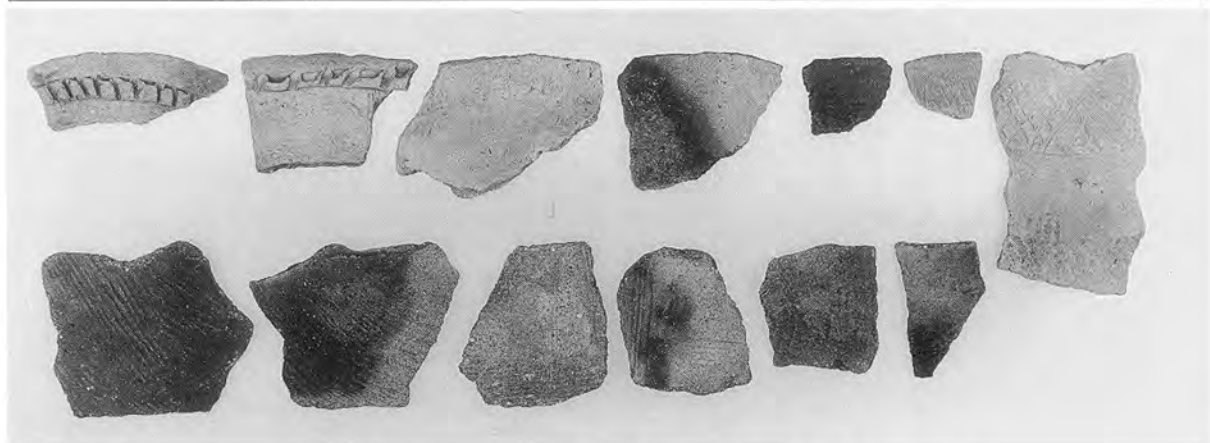
第5・7・22号住居跡出土土器片



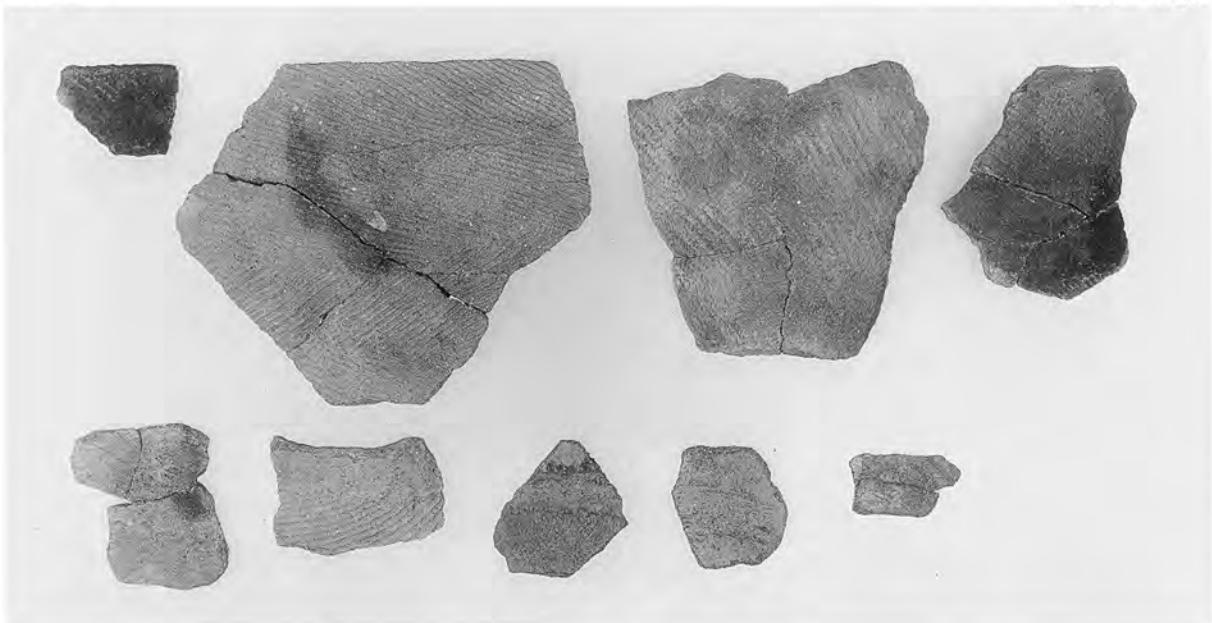
SI-44	4	5	6	7	11		
	12	13	14	8	9	10	



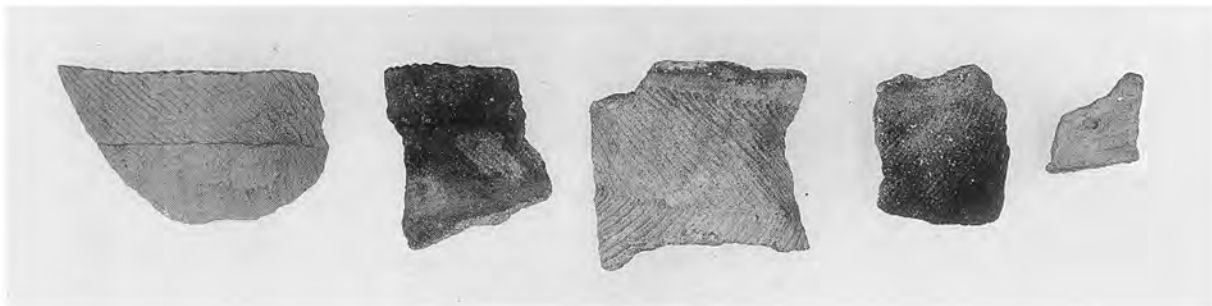
SI-45	10	11	12	13	14	15	16
	17	22	18	24	23	19	
	25	20	21	26			



SI-59	11	12	13	14	15	16	17
	23	19	20	18	21	22	



SI-46	6	10	11	8	
	12	13	7	9	14



遺構外	44	45	53	54	58
-----	----	----	----	----	----

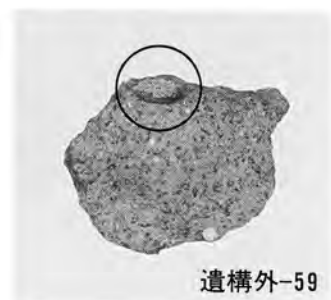
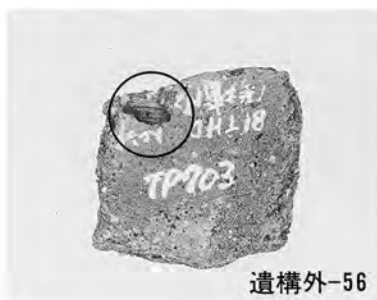
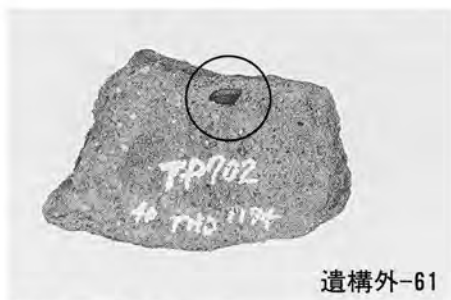
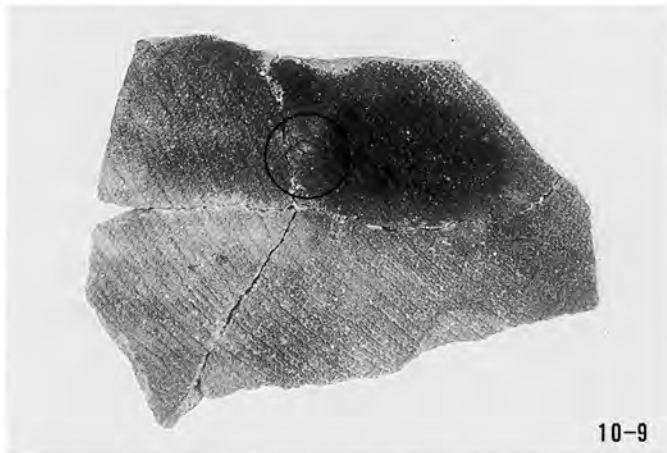


SX4-6

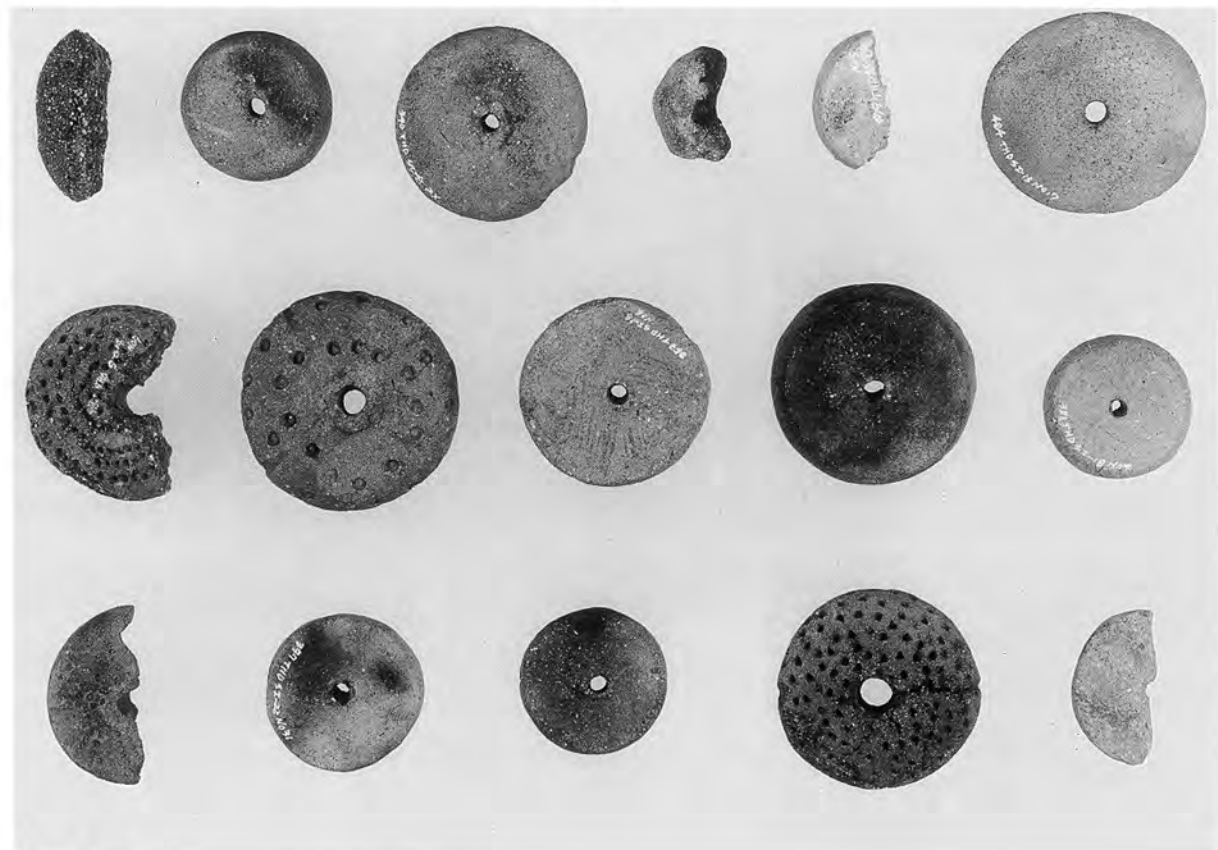
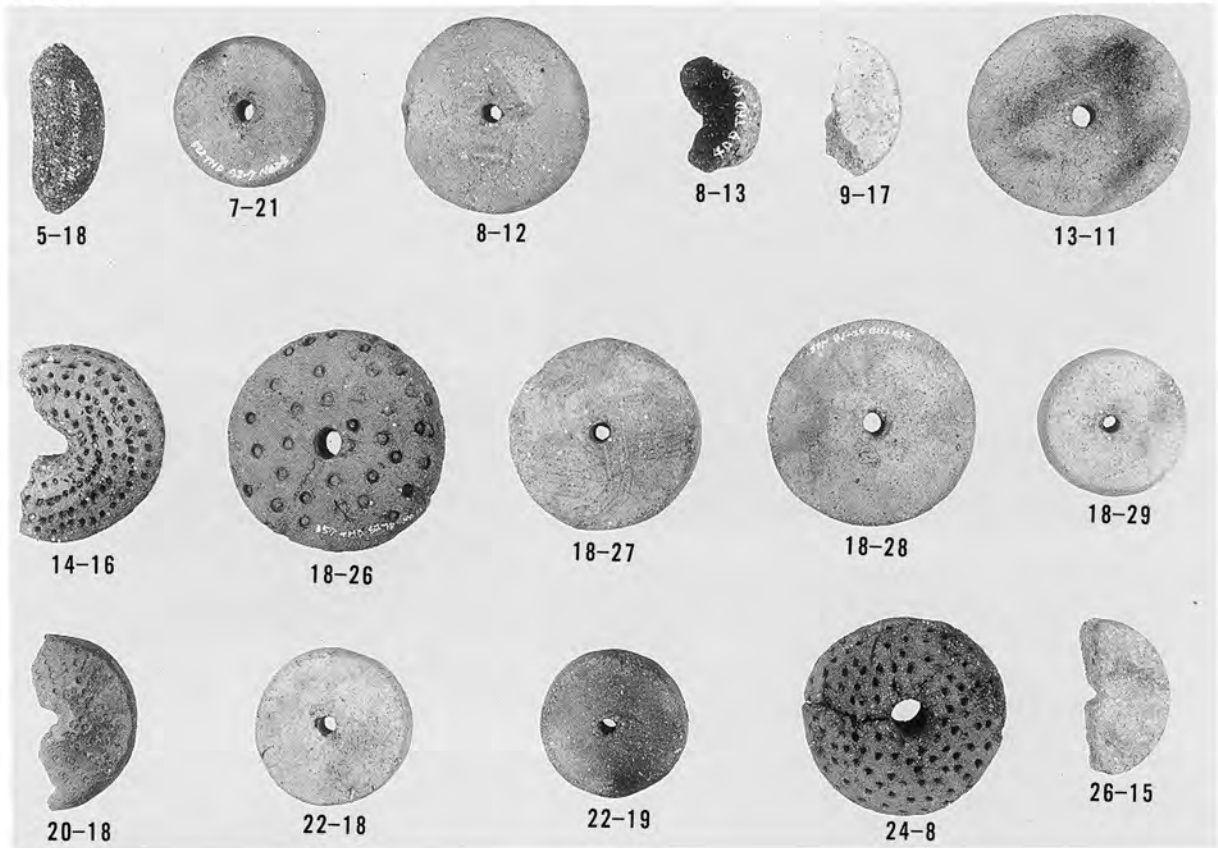


SD4-2

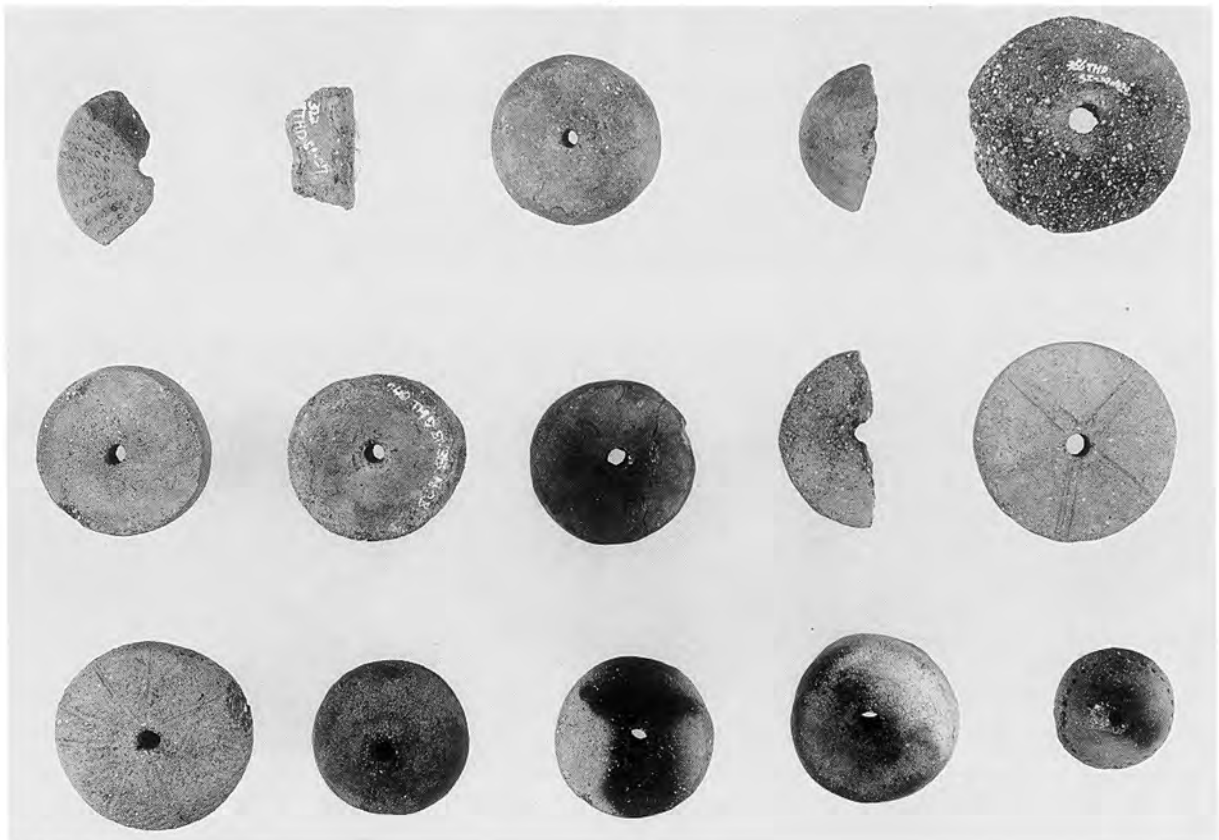
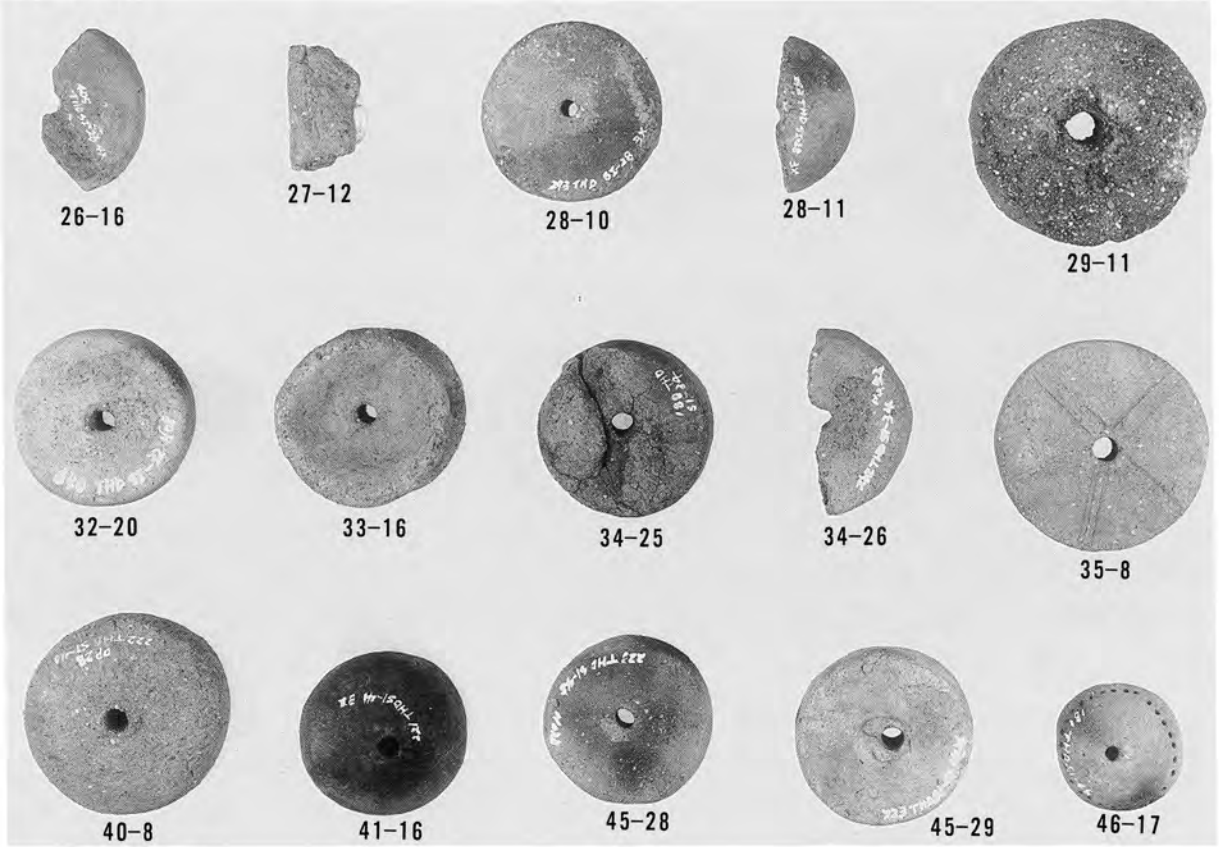
第46号住居跡・遺構外出土土器片，粃压痕土器片(1)



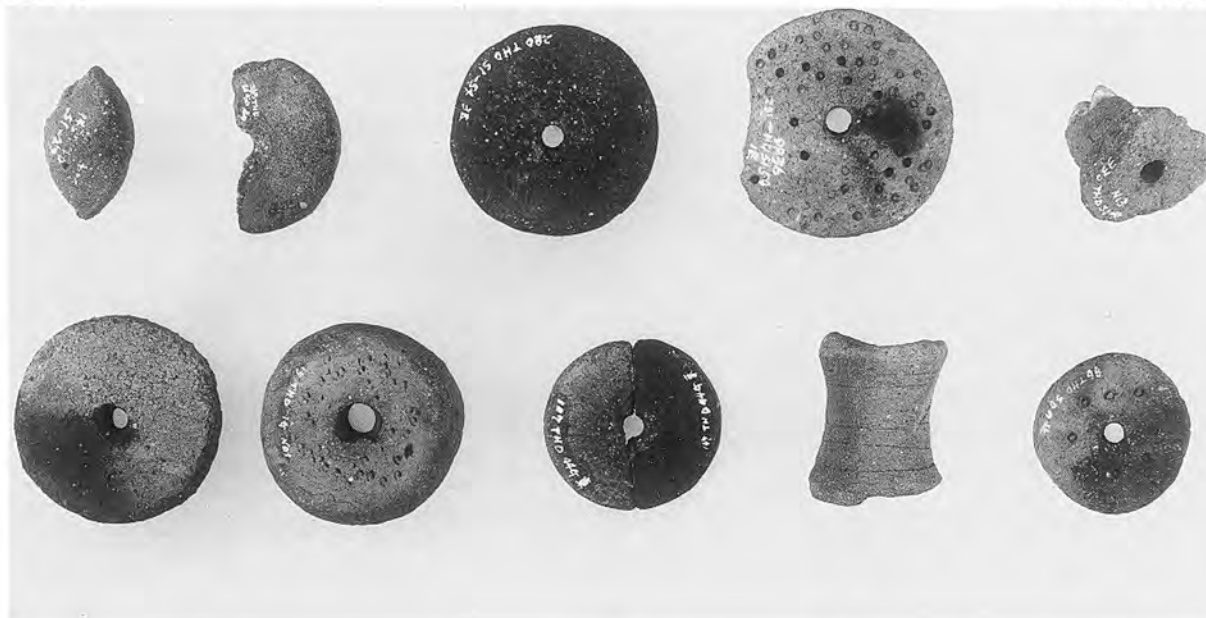
靱庄痕土器片(2)



出土土製品(1)



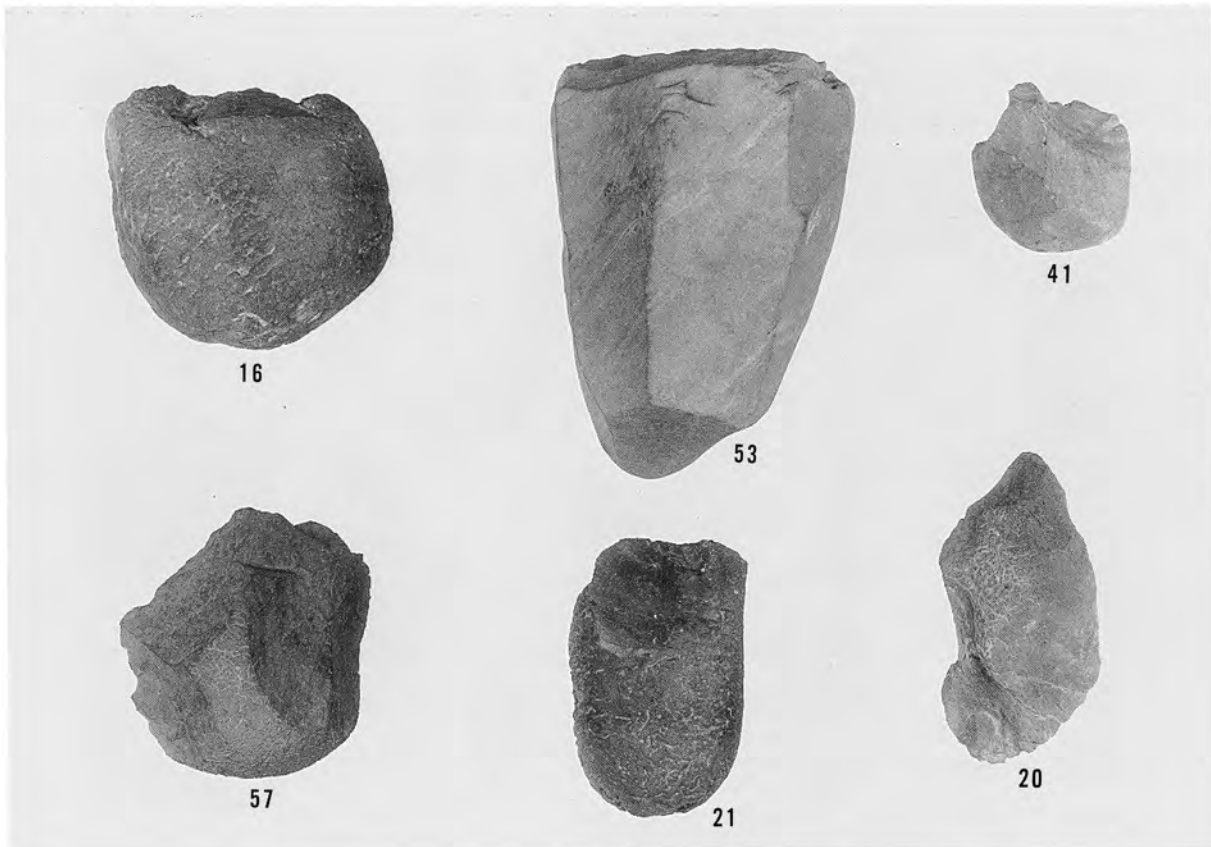
出土土製品(2)



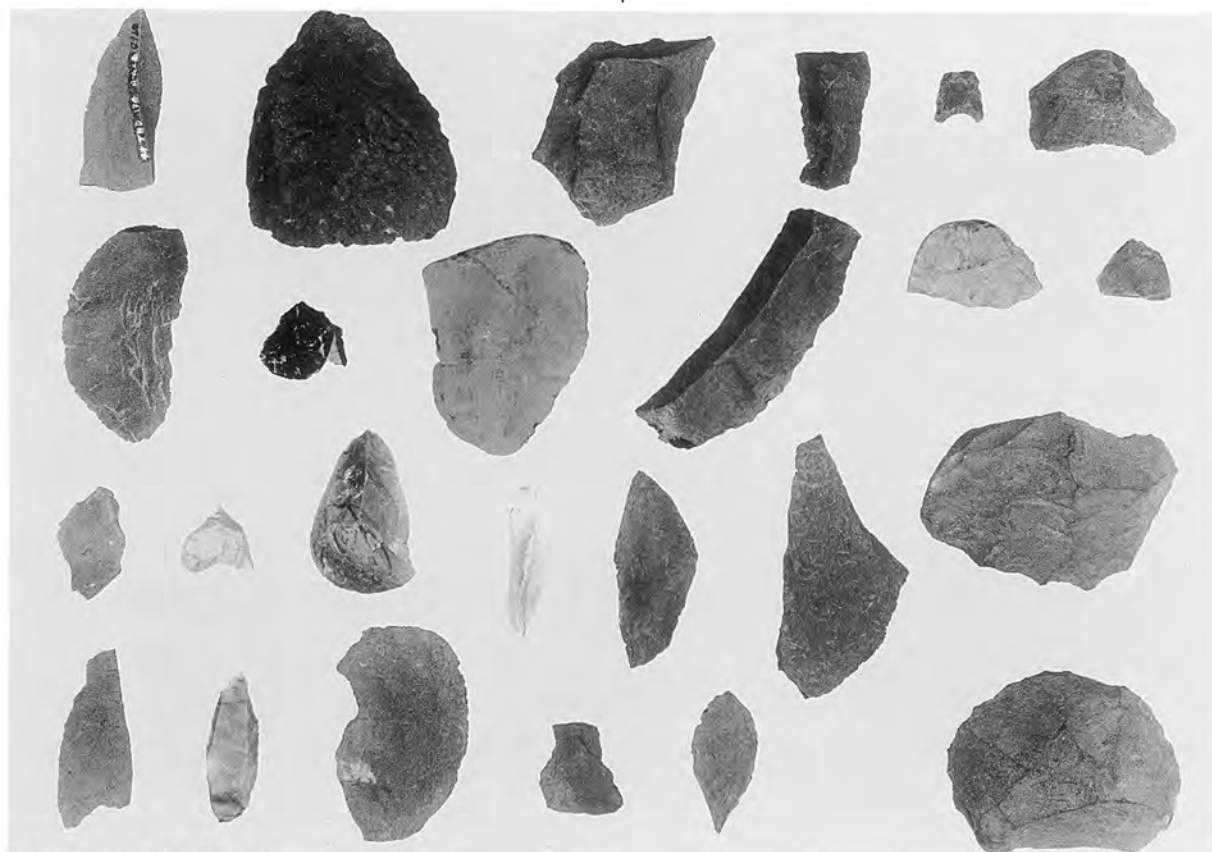
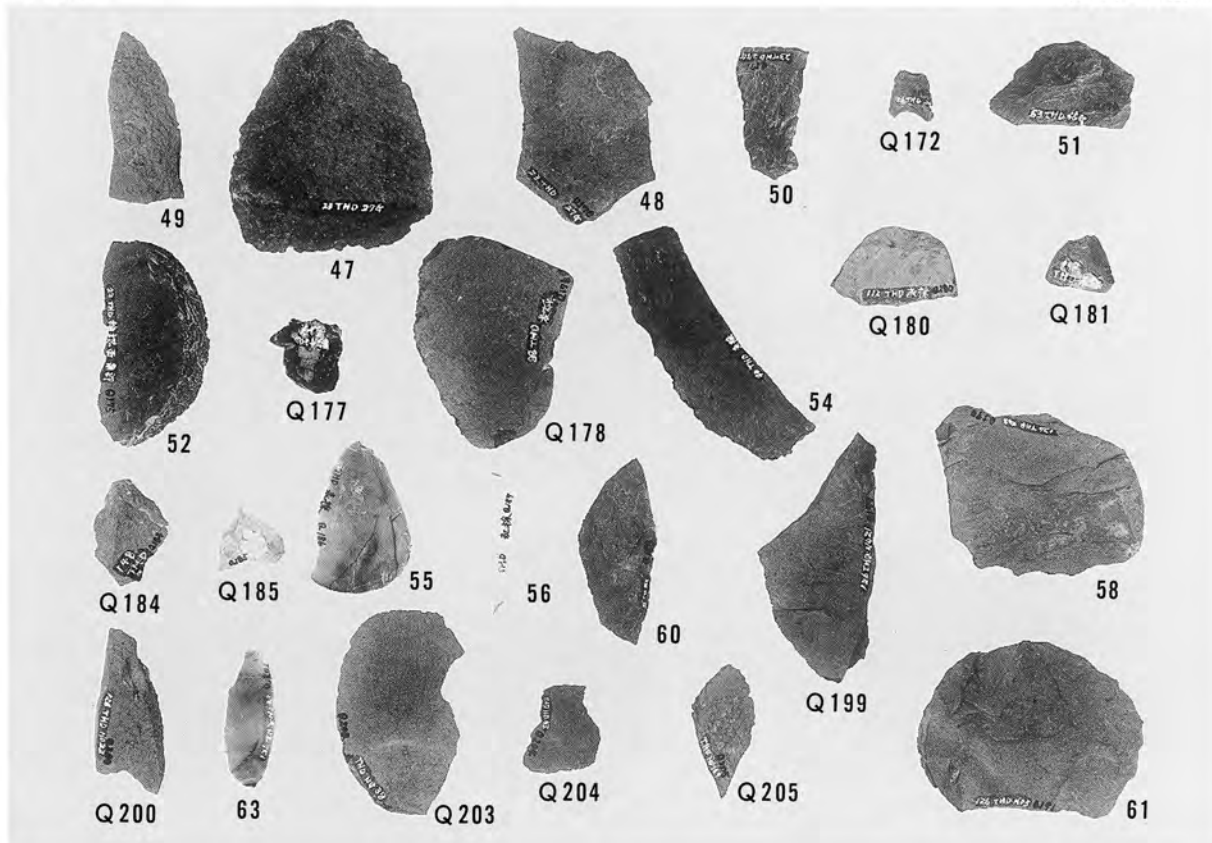
47-12	50-17	54-8	59-26	SD 4-8
SD 6-9	遺構外-73	遺構外-74	遺構外-75	遺構外-76



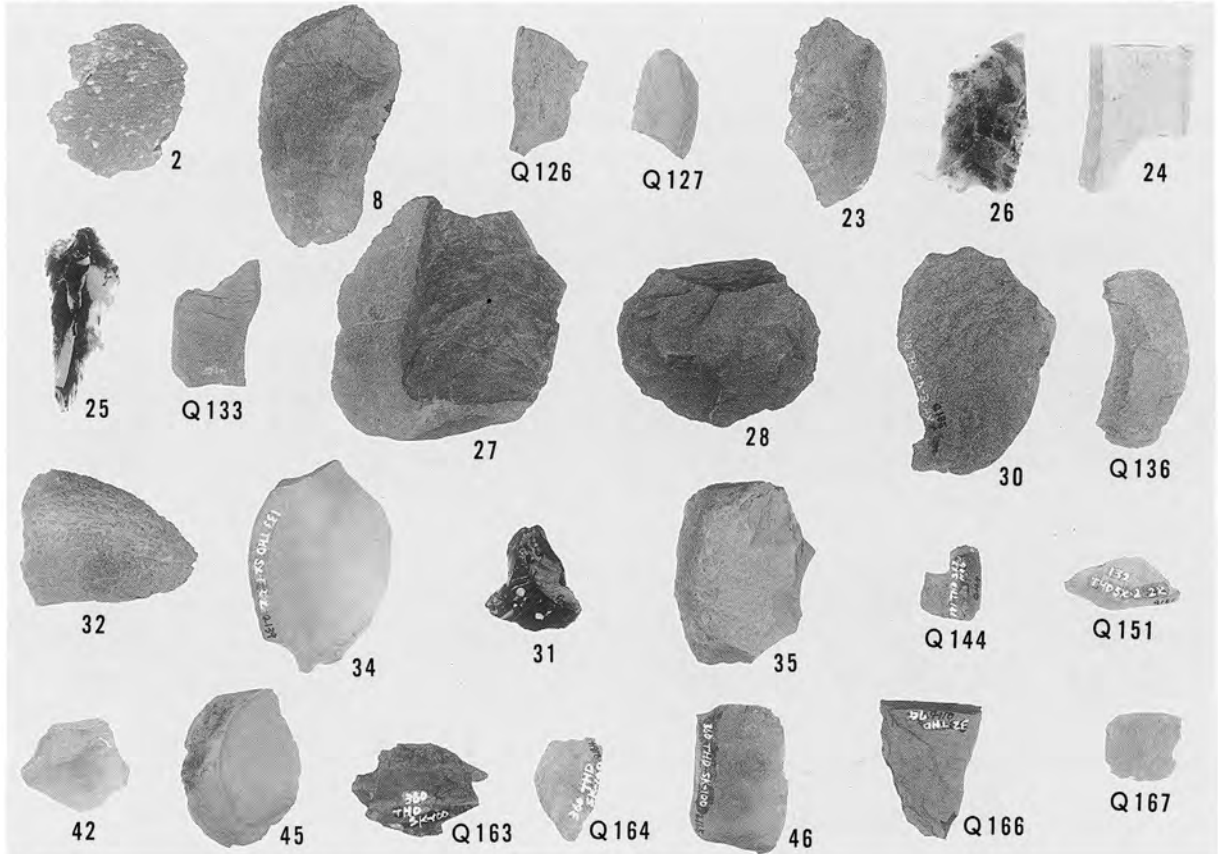
59	19	Q 195	62	64	Q 198
----	----	-------	----	----	-------



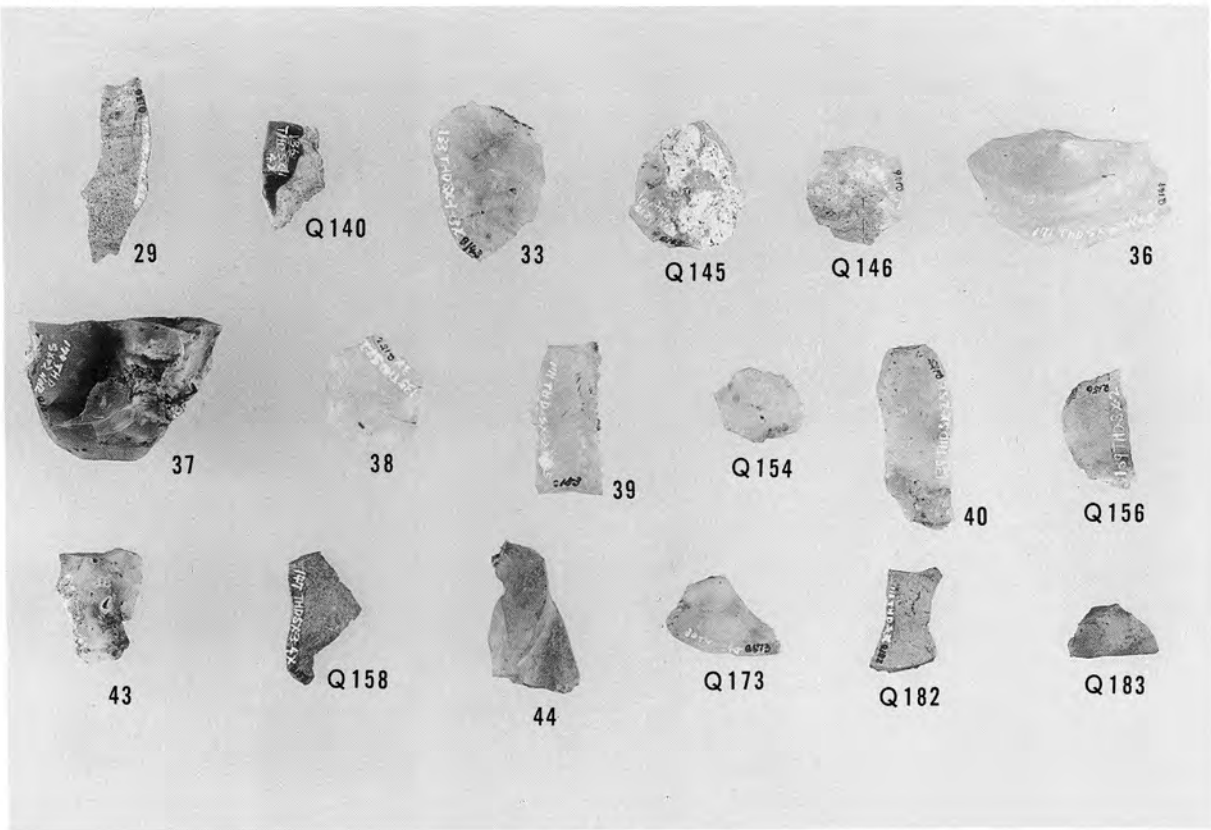
旧石器時代出土遺物(2)



旧石器時代出土遺物(3)



旧石器時代出土遺物(4)



7-22	25-13	43-11	47-13
57-6	SX-4	遺構外-83	遺構外-82
遺構外-79	遺構外-80	遺構外-81	遺構外-84

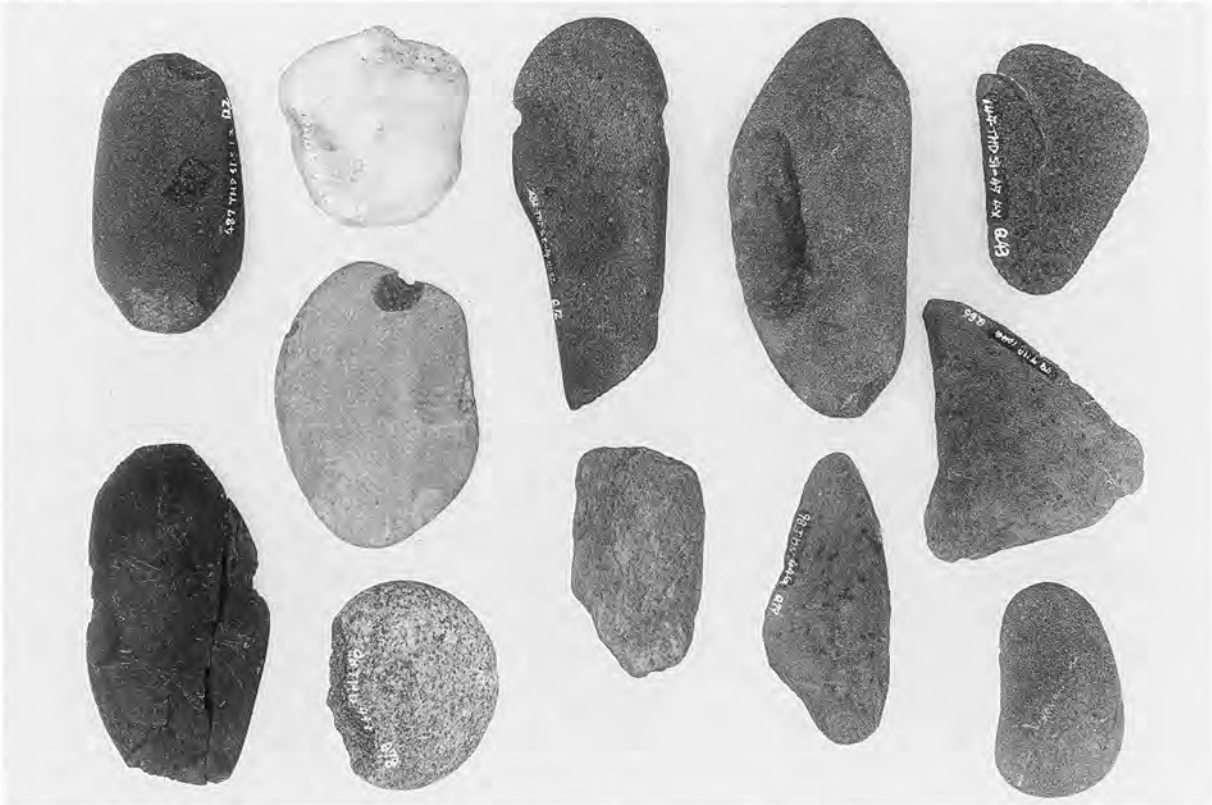
旧石器時代出土遺物(5)・出土石器(1)



7-24	23-5	SD 3-11	35-10
22-21	遺構外-91	遺構外-97	



46-18	SD 5-4	遺構外-99
13-12	44-18	



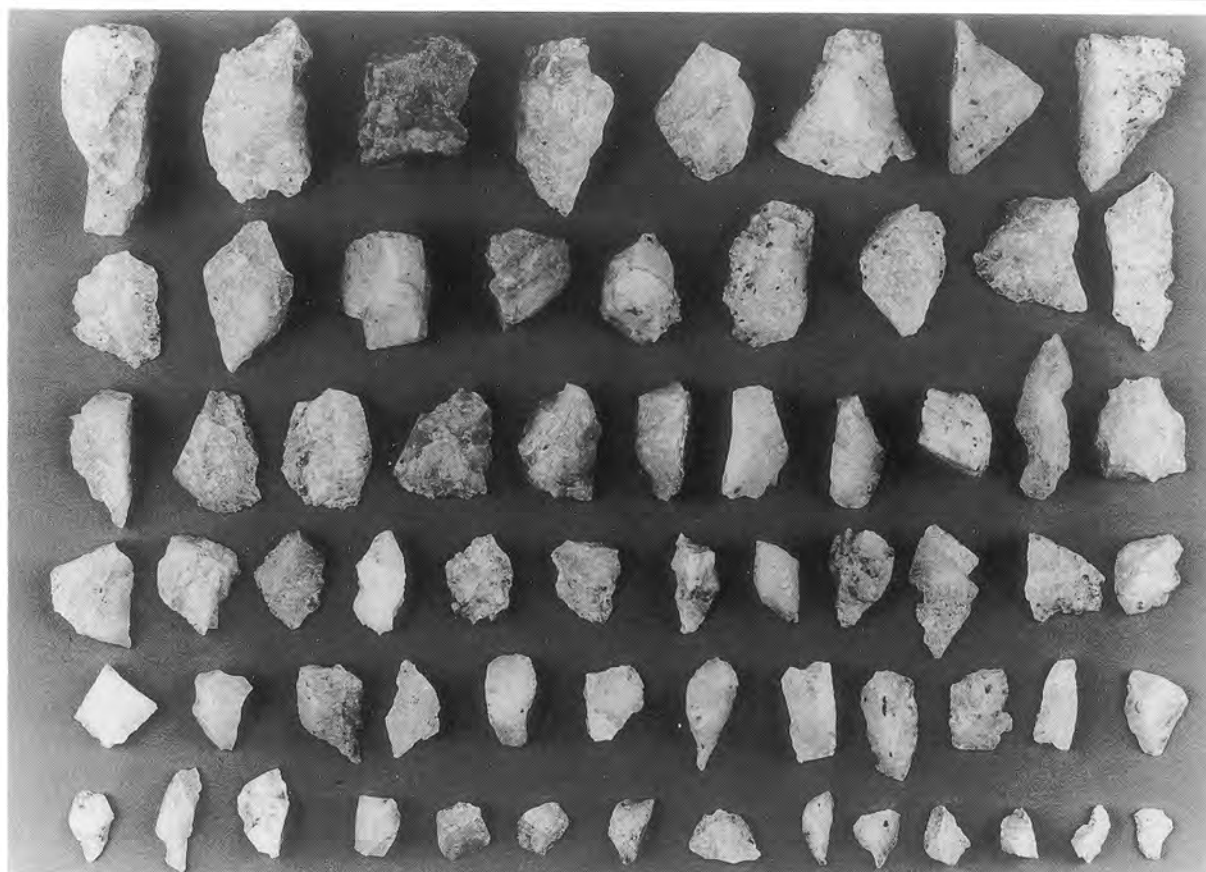
5-19	6-15	14-17	22-20	47-14
	遺構外-86			遺構外-89
50-19	TM 1-42	遺構外-87	TM 1-43	遺構外-90



7-23	34-27	45-32
------	-------	-------



2-7	6-16	32-21	41-17
SX 2-13			



出土石器(4)・出土アプライト礫

茨城県教育財団文化財調査報告第94集

土浦北工業団地造成地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

原出口遺跡

平成7年3月25日印刷

平成7年3月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

水戸市見和1丁目356番2号

TEL 0292-25-6587

印刷 有限会社 川田プリント

水戸市上水戸4丁目6番53号

TEL 0292-53-5551(代)

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第94集

原出口遺跡



原田遺跡群構配置図

40m

